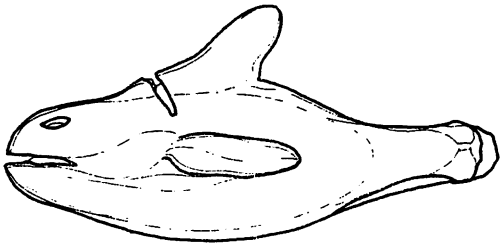
北埋調報　46

函館市
桔梗２遺跡

—一般国道５号函館新道道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—



昭和62年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

函館市
桔梗２遺跡

——一般国道５号函館新道道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和62年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

動物形土製品

E－8区ほか遺物出土状況（南から）

E－8区ほか出土土器

ＫＨ-19　覆土遺物出土状況（南東から）

ＫＨ-19　覆土出土土器

旧石器調査状況（北から）

旧石器接合資料

例　　言

1　この報告書は，一般国道５号函館新道道路改良工事に伴って，昭和62年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した桔梗２遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。

2　本書の作成は，調査部調査第１課で行ったが，編集は佐川俊一，石川朗，長沼孝が担当した。各章の執筆は以下のとおり分担し，それぞれ章または節の末尾に文責を記した。
Ⅰ長沼孝，佐川俊一，石川朗，Ⅱ花岡正光，石川朗，Ⅲ佐川俊一，前田正憲，石川朗，Ⅴ長沼孝，佐川俊一，石川朗

3　第Ⅳ章の分析，同定の結果については次の方がたに執筆を依頼した。
Ⅳ－１山田治（京都産業大学），Ⅳ－３三野紀雄（北海道開拓記念館）
なお，Ⅳ－２は花岡正光が分析，執筆した。

4　現地の写真撮影は，調査員で分担したが，遺物撮影は伊野正之が行った。また土器の展開写真は小川忠博氏に依頼した。

5　遺構図は，調査員が作成したものを石川が整理し，篠崎淑子がトレースした。

6　遺物の実測・トレースは佐川，石川，舟口直子，大場奈緒美，新庄素子，久末真紀子，三崎かおる，河口ひとみが行った。

7　石器石材の肉眼的鑑定は，花岡正光がおもに行った。

8　遺構などの表記は以下の記号を用いた。
KH：住居跡　KP：土壙（フラスコ状ピット，円形・楕円形ピット，Ｔピット）
KF：焼土　KSb：石器ブロック（Ｋは桔梗２遺跡の意味で，石川１遺跡と区別する目的で付した）

9　遺構，遺物の図は，基本的に以下の縮尺に統一してあるが，分布図，出土状況図などは任意の縮尺である。
住居跡，土壙，焼土：1/40，一部については1/20，1/60，旧石器分布図など：1/80
土器実測図：1/4　土器拓影・礫石器：1/3　剥片石器・土製品・石製品：1/2　銭貨：1/1

10　遺構図中の方位は平面直角座標の北，レベルは標高（単位ｍ）を示す。

11　遺物分布図では以下の記号を使用した。
縄文時代住居跡　覆土出土　○：土器　△：剥片石器　□：剥片　▽：礫石器
◇：礫　☆：土・石製品
床面出土　●：土器　▲：剥片石器　■：剥片　▼：礫石器
◆：礫　★：土・石製品
旧石器分布図，接合図　○：ナイフ様石器　□：ナイフ様剥片　△：石核
◆：彫器　▼：石刃　●：剥片

12　旧石器について剥離順番を示した場合，矢印（→）は加撃の方向を，三角マーク（▶）はバルブの位置を示している。ただし，バルブがない場合は──▷──▶，▷のように白ぬきの三角マークで示した。

13　遺構の規模を記載している場合は，以下の内容である。

確認面での長軸長×短軸長／床（底）面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深（単位 m）

14　土層の説明は，土壌の混入量を大きく四段階に分け，「多量」「を含む」「少量」「微量」の四種類の表現にした。従って，「を含む」の場合は基調となる土壌と同程度の量の混入を意味する。

15　岩石名は以下の略号で表現した。

Aga-Sh.：めのう質頁岩　And.：安山岩　Bl-Mud.：黒色泥岩　Che.：チャート
Diab.：輝緑岩　Diat.：珪藻岩　Gr-Mud.：緑色泥岩　Mud.：泥岩
Obs.：黒曜石　Qua.：珪岩　Sa.：砂岩　Sch.：片岩　Ser.：蛇紋岩　Sh.：頁岩

16　調査にあたっては下記の機関および人びとの指導ならびに協力を得た（順不同，敬称略）

文化庁，国立歴史民俗博物館，奈良国立文化財研究所，太地町立くじらの博物館，大和市教育委員会，相武考古学研究所，北海道教育委員会，北海道開拓記念館，函館市教育委員会，市立函館博物館，七飯町教育委員会　株式会社工藤組，株式会社加藤組

河原純之，岡村道雄，春成秀爾，西本豊弘，設楽博己，大塚和義，佐原真，松沢亜生，宮本長二郎，松井章，大貫静夫，吉崎昌一，林謙作，横山英介，仲谷一宏，大島直行，木村英明，鶴丸俊明，加藤晋平，山田昌弘，金子浩昌，小林達雄，谷口康浩，織笠明，渡辺誠，小島俊彰，松藤和人，水野正好，稲田孝司，鈴木忠司，中田節子，粕谷俊雄，雑賀毅，本間元樹，相田薫，滝沢亮，小池聡，安孫子昭二，舘野孝，宮崎博，新井真博，小島正裕，橋口美子，小川忠博，富樫泰時，大野憲司，三宅徹也，野村崇，平川善祥，三野紀雄，山田悟郎，出利葉浩二，千代肇，長谷部一弘，柴田幸生，田原良信，鈴木正語，石本省三，小笠原忠久，落合治彦，高橋豊彦，久保泰，松崎水穂，斉藤邦典，藤島一巳，藤田登，三浦孝一，柴田信一，寺崎康史，上野秀一，羽賀憲二，高橋正勝，大野亨，杉浦重信，佐藤訓敏，北沢実，松下亘，萩中美枝，吉田彰，川井藤五郎

目　　次

口絵１～４（カラー）
例　　言
目次・挿図目次・表目次・図版目次
Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1　調査要項 …… 1
　2　調査体制 …… 1
　3　調査の経緯 …… 1
　4　調査概要 …… 2
　　(1)　発掘区の設定 …… 2
　　(2)　調査方法 …… 2
　　(3)　土壌サンプルとフローテーション，水洗処理 …… 3
　　(4)　整理の方法 …… 3
　　(5)　遺構・遺物の分類 …… 4
　　(6)　遺跡の概要 …… 5
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 11
　1　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 11
　2　遺跡周辺の地形・地質の概要 …… 14
　3　基本層序 …… 16
Ⅲ　遺構と遺物 …… 19
　1　第Ⅰ～Ⅲ層の遺構と遺物 …… 19
　　(1)　住居跡 …… 19
　　(2)　フラスコ状ピット …… 97
　　(3)　円形・楕円形ピット …… 109
　　(4)　Ｔピット …… 121
　　(5)　焼土 …… 141
　　(6)　包含層の遺物 …… 141
　　1）遺物集中区 …… 141
　　2）土器 …… 149
　　3）石器 …… 162
　　4）土製品，石製品など …… 172
　　5）金属製品 …… 173
　2　第Ⅳ層の遺構と遺物 …… 176
　　(1)　石器ブロックと石器 …… 176
Ⅳ　各種分析，同定 …… 195
　1　液体シンチレーション炭素年代測定結果（山田　治） …… 195
　2　桔梗２遺跡の火山灰について …… 196
　3　函館市桔梗２遺跡より得た炭化木片について（三野紀雄） …… 202

Ⅴ　まとめ …… 207
1　縄文時代・続縄文時代の遺構と土器の分布について …… 207
2　炭化材を伴う住居跡について …… 210
3　動物形土製品について …… 219
4　旧石器について …… 226
図版1～70（モノクロ）

挿図目次

図Ⅰ－1　発掘区設定図 …… 2
図Ⅰ－2　遺跡現況図 …… 2
図Ⅰ－3　Ⅱ層上面の地形（上）と遺構分布図（下）　7
図Ⅰ－4　発掘区別遺物出土点数 …… 9
図Ⅱ－1　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 12
図Ⅱ－2　遺跡の範図および周辺の地形 …… 13
図Ⅱ－3　遺跡周辺の地質図 …… 15
図Ⅱ－4　土層断面図 …… 17
図Ⅲ－1　住居跡分布図 …… 19
図Ⅲ－2　住居跡(1)・ＫＨ－１，－１　遺物…… 21
図Ⅲ－3　住居跡(2)・ＫＨ－２，－２遺物…… 23
図Ⅲ－4　住居跡(3)・ＫＨ－３ …… 24
図Ⅲ－5　住居跡(4)・ＫＨ－３ …… 25
図Ⅲ－6　住居跡(5)・ＫＨ－３遺物 …… 27
図Ⅲ－7　住居跡(6)・ＫＨ－３遺物 …… 28
図Ⅲ－8　住居跡(7)・ＫＨ－４，－４遺物…… 29
図Ⅲ－9　住居跡(8)・ＫＨ－５ …… 31
図Ⅲ－10　住居跡(9)・ＫＨ－５ …… 32
図Ⅲ－11　住居跡(10)・ＫＨ－５遺物 …… 33
図Ⅲ－12　住居跡(11)・ＫＨ－６，－６遺物…… 34
図Ⅲ－13　住居跡(12)・ＫＨ－７，－７遺物…… 36
図Ⅲ－14　住居跡(13)・ＫＨ－７遺物 …… 37
図Ⅲ－15　住居跡(14)・ＫＨ－８ …… 38
図Ⅲ－16　住居跡(15)・ＫＨ－８ …… 39
図Ⅲ－17　住居跡(16)・ＫＨ－８遺物 …… 40
図Ⅲ－18　住居跡(17)・ＫＨ－９ …… 41
図Ⅲ－19　住居跡(18)・ＫＨ－10 …… 42
図Ⅲ－20　住居跡(19)・ＫＨ－10 …… 43
図Ⅲ－21　住居跡(20)・ＫＨ－10遺物 …… 44
図Ⅲ－22　住居跡(21)・ＫＨ－11 …… 45
図Ⅲ－23　住居跡(22)・ＫＨ－11 …… 46
図Ⅲ－24　住居跡(23)・ＫＨ－11遺物 …… 47
図Ⅲ－25　住居跡(24)・ＫＨ－12 …… 49
図Ⅲ－26　住居跡(25)・ＫＨ－12遺物 …… 50
図Ⅲ－27　住居跡(26)・ＫＨ－12遺物 …… 51
図Ⅲ－28　住居跡(27)・ＫＨ－13 …… 54
図Ⅲ－29　住居跡(28)・ＫＨ－13遺物 …… 55
図Ⅲ－30　住居跡(29)・ＫＨ－14 …… 56
図Ⅲ－31　住居跡(30)・ＫＨ－14 …… 57
図Ⅲ－32　住居跡(31)・ＫＨ－14 …… 58
図Ⅲ－33　住居跡(32)・ＫＨ－14遺物 …… 60
図Ⅲ－34　住居跡(33)・ＫＨ－14遺物 …… 61
図Ⅲ－35　住居跡(34)・ＫＨ－14遺物 …… 62
図Ⅲ－36　住居跡(35)・ＫＨ－14遺物 …… 63
図Ⅲ－37　住居跡(36)・ＫＨ－14遺物 …… 64
図Ⅲ－38　住居跡(37)・ＫＨ－14遺物 …… 65
図Ⅲ－39　住居跡(38)・ＫＨ－15，－15遺物…… 67
図Ⅲ－40　住居跡(39)・ＫＨ－16 …… 68
図Ⅲ－41　住居跡(40)・ＫＨ－16 …… 69
図Ⅲ－42　住居跡(41)・ＫＨ－16 …… 70
図Ⅲ－43　住居跡(42)・ＫＨ－16遺物 …… 72
図Ⅲ－44　住居跡(43)・ＫＨ－16遺物 …… 73
図Ⅲ－45　住居跡(44)・ＫＨ－16遺物 …… 74
図Ⅲ－46　住居跡(45)・ＫＨ－16遺物 …… 75
図Ⅲ－47　住居跡(46)・ＫＨ－16遺物 …… 76
図Ⅲ－48　住居跡(47)・ＫＨ－16遺物 …… 77
図Ⅲ－49　住居跡(48)・ＫＨ－17 …… 79
図Ⅲ－50　住居跡(49)・ＫＨ－17，－17遺物…… 80
図Ⅲ－51　住居跡(50)・ＫＨ－18 …… 82
図Ⅲ－52　住居跡(51)・ＫＨ－18 …… 83
図Ⅲ－53　住居跡(52)・ＫＨ－18遺物 …… 84
図Ⅲ－54　住居跡(53)・ＫＨ－19 …… 86
図Ⅲ－55　住居跡(54)・ＫＨ－19 …… 87
図Ⅲ－56　住居跡(55)・ＫＨ－19 …… 88
図Ⅲ－57　住居跡(56)・ＫＨ－19遺物 …… 89
図Ⅲ－58　住居跡(57)・ＫＨ－19遺物 …… 90
図Ⅲ－59　住居跡(58)・ＫＨ－19遺物 …… 91
図Ⅲ－60　住居跡(59)・ＫＨ－19遺物 …… 92
図Ⅲ－61　住居跡(60)・ＫＨ－19遺物 …… 93
図Ⅲ－62　住居跡(61)・ＫＨ－19遺物 …… 94
図Ⅲ－63　住居跡(62)・ＫＨ－19遺物 …… 95
図Ⅲ－64　フラスコ状ピット分布図 …… 98
図Ⅲ－65　フラスコ状ピット(1)・ＫＰ－63 …… 100
図Ⅲ－66　フラスコ状ピット(2)・ＫＰ－66，－69 …… 101
図Ⅲ－67　フラスコ状ピット(3)・ＫＰ－70，－71 …… 102
図Ⅲ－68　フラスコ状ピット(4)・ＫＰ－73，－75 …… 103
図Ⅲ－69　フラスコ状ピット(5)・ＫＰ－86，－89 …… 104
図Ⅲ－70　フラスコ状ピット(6)・ＫＰ－91 …… 105
図Ⅲ－71　フラスコ状ピット遺物(1) …… 106
図Ⅲ－72　フラスコ状ピット遺物(2) …… 107
図Ⅲ－73　フラスコ状ピット遺物(3) …… 108
図Ⅲ－74　円形・楕円形ピット分布図 …… 109
図Ⅲ－75　円形・楕円形ピット(1)・ＫＰ－４，５，11，12‥ 110
図Ⅲ－76　円形・楕円形ピット(2)・ＫＰ－13，14，15，16，17 …… 111
図Ⅲ－77　円形・楕円形ピット(3)・ＫＰ－18，19，20，21‥ 112
図Ⅲ－78　円形・楕円形ピット(4)・ＫＰ－29，30，33，34，35 …… 113
図Ⅲ－79　円形・楕円形ピット(5)・ＫＰ－37，40，41，42　114
図Ⅲ－80　円形・楕円形ピット(6)・ＫＰ－44，45，49，55　115
図Ⅲ－81　円形・楕円形ピット(7)・ＫＰ－57，58，60，61　116
図Ⅲ－82　円形・楕円形ピット(8)・ＫＰ－62，64，67，80　117

図Ⅲ－83　円形・楕円形ピット(9)・ＫＰ－84，90，92 …… 118
図Ⅲ－84　円形・楕円形ピット(10)・ＫＰ－82 …… 119
図Ⅲ－85　円形・楕円形ピット遺物 …… 120
図Ⅲ－86　Ｔピット分布図 …… 121
図Ⅲ－87　Ｔピット(1)・ＫＰ－１，２，３ …… 123
図Ⅲ－88　Ｔピット(2)・ＫＰ－６，７，８ …… 124
図Ⅲ－89　Ｔピット(3)・ＫＰ－９，10，22 …… 125
図Ⅲ－90　Ｔピット(4)・ＫＰ－23，24，25 …… 126
図Ⅲ－91　Ｔピット(5)・ＫＰ－26，27，28 …… 127
図Ⅲ－92　Ｔピット(6)・ＫＰ－31，32，36 …… 128
図Ⅲ－93　Ｔピット(7)・ＫＰ－38，39，43 …… 129
図Ⅲ－94　Ｔピット(8)・ＫＰ－46，47，48 …… 130
図Ⅲ－95　Ｔピット(9)・ＫＰ－50，51，52 …… 131
図Ⅲ－96　Ｔピット(10)・ＫＰ－53，54，56 …… 132
図Ⅲ－97　Ｔピット(11)・ＫＰ－59，65，68 …… 133
図Ⅲ－98　Ｔピット(12)・ＫＰ－72，74，76 …… 134
図Ⅲ－99　Ｔピット(13)・ＫＰ－77，78，79 …… 135
図Ⅲ－100　Ｔピット(14)・ＫＰ－81，83，85 …… 136
図Ⅲ－101　Ｔピット(15)・ＫＰ－87，88，93 …… 137
図Ⅲ－102　Ｔピット遺物(1) …… 138
図Ⅲ－103　Ｔピット遺物(2) …… 139
図Ⅲ－104　Ｔピット遺物(3) …… 140
図Ⅲ－105　焼土分布図，ＫＦ－１，２ …… 140
図Ⅲ－106　遺物集中区，遺物分布図 …… 143
図Ⅲ－107　遺物集中区，遺物(1) …… 144
図Ⅲ－108　遺物集中区，遺物(2) …… 145
図Ⅲ－109　遺物集中区，遺物(3) …… 146
図Ⅲ－110　遺物集中区，遺物(4) …… 147
図Ⅲ－111　遺物集中区，遺物(5) …… 148
図Ⅲ－112　包含層の土器(1) …… 152
図Ⅲ－113　包含層の土器(2) …… 153
図Ⅲ－114　包含層の土器(3) …… 154
図Ⅲ－115　包含層の土器(4) …… 155
図Ⅲ－116　包含層の土器(5) …… 156
図Ⅲ－117　包含層の土器(6) …… 157
図Ⅲ－118　包含層の土器(7) …… 158
図Ⅲ－119　包含層の土器(8) …… 159
図Ⅲ－120　包含層の土器(9) …… 160
図Ⅲ－121　包含層の石器(1) …… 163
図Ⅲ－122　包含層の石器(2) …… 164
図Ⅲ－123　包含層の石器(3) …… 165
図Ⅲ－124　包含層の石器(4) …… 166
図Ⅲ－125　包含層の石器(5) …… 167
図Ⅲ－126　包含層の石器(6) …… 168
図Ⅲ－127　包含層の石器(7) …… 169
図Ⅲ－128　包含層の石器(8) …… 170
図Ⅲ－129　土製品(1) …… 172
図Ⅲ－130　土製品(2) …… 173
図Ⅲ－131　土製品(3) …… 174
図Ⅲ－132　石製品，金属製品（古銭） …… 175
図Ⅲ－133　旧石器調査範囲と石器ブロックの位置 … 176
図Ⅲ－134　KSb－１ …… 178
図Ⅲ－135　ナイフ様石器・ナイフ様剥片 …… 179
図Ⅲ－136　母岩別資料６ …… 180
図Ⅲ－137　母岩別資料２ …… 181
図Ⅲ－138　母岩別資料８ …… 182
図Ⅲ－139　母岩別資料７ …… 183
図Ⅲ－140　母岩別資料１－(1) …… 184
図Ⅲ－141　母岩別資料１－(2) …… 185
図Ⅲ－142　母岩別資料５－(1) …… 186
図Ⅲ－143　母岩別資料５－(2) …… 187
図Ⅲ－144　母岩別資料３ …… 189
図Ⅲ－145　母岩別資料10－(1) …… 191
図Ⅲ－146　母岩別資料10－(2) …… 192
図Ⅲ－147　礫接合資料 …… 193
図Ⅲ－148　KSb－２ …… 194
図Ⅳ－１　桔梗２遺跡の完新世火山灰層序（グリッドＩ－29） …… 196
図Ⅳ－２　桔梗２遺跡のロームの重鉱物組成と粒度組成（グリッドＤ－40） …… 196
図Ⅳ－３　桔梗２遺跡のロームの粒度累積曲線 …… 197
図Ⅳ－４　桔梗２遺跡の完新世火山灰の鉱物組成 … 198
図Ⅳ－５　石川１遺跡のローム層標準柱状図 …… 198
図Ⅳ－６　石川１遺跡のローム層標準柱状図試料の重鉱物組成と粒度組成 …… 199
図Ⅳ－７　石川１遺跡のローム層標準柱状図試料の粒度累積曲線 …… 200
図Ⅳ－８　桔梗２遺跡のロームの角閃石－斜方輝石－単斜輝石量比 …… 200
図Ⅳ－９　ＫＨ－14炭化材分布 …… 203
図Ⅳ－10　出土炭化材の組織顕微鏡写真 …… 206
図Ⅴ－１　時期・発掘区別の土器分布 …… 209
図Ⅴ－２　ＫＨ－２，５，11炭化材分布 …… 211
図Ⅴ－３　ＫＨ－16，18炭化材分布 …… 212
図Ⅴ－４　動物形土製品 …… 220
図Ⅴ－５　日本近海のイルカ（粕屋1980b）と動物形土製品 …… 222
図Ⅴ－６　オホーツク文化のクジラを表現した遺物… 223
図Ⅴ－７　民族資料にみるシャチの造形 …… 224
図Ⅴ－８　ナイフ様石器・ナイフ様剥片・石核の分布 …… 227
図Ⅴ－９　石核集成図 …… 228
図Ⅴ－10　母岩別資料・ナイフ様石器・ナイフ様剥片集成図 …… 230

表目次

表Ⅰ－1　遺構一覧 …… 6
表Ⅰ－2　出土遺物一覧 …… 6
表Ⅱ－1　周辺の遺跡一覧 …… 11
表Ⅲ－1　石器ブロック・器種・石材別点数および重量 …… 177
表Ⅳ－1　函館市桔梗2遺跡出土の炭化材樹種同定結果 …… 204
表Ⅴ－1　KH－5炭化材一覧 …… 213
表Ⅴ－2　KH－11炭化材一覧 …… 214
表Ⅴ－3　KH－14炭化材一覧 …… 214
表Ⅴ－4　KH－16炭化材一覧 …… 216
表Ⅴ－5　KH－18炭化材一覧 …… 218

図版目次

図版1　遺跡の遠景・近景
1　遺跡遠景（北東から）
2　遺跡近景（北から，手前は石川1遺跡）
3　遺跡近景（東から）
図版2　北部及び沢部の調査
1　北部の調査（北から，左KH－5・6）
2　北部及び沢部の調査（南東から）
図版3　沢部及び南部の調査
1　沢部の包含層調査（北から）
2　南部の遺構調査（北から）
図版4　住居跡・KH－1，2
1　KH－1全景（東から）
2　KH－2全景（東から）
図版5　住居跡・KH－4
1　KH－4全景（南西から）
2　KH－4全景（北から）
図版6　住居跡・KH－3
1　KH－3調査（北西から）
2　KH－3遺物（南から）
3　KH－3調査（北から）
図版7　住居跡・KH－3
1　KH－3遺物（南から）
2　KH－3全景（北から）
図版8　住居跡・KH－5，6
1　KH－5，6調査（北西から）
2　KH5，6土層断面（南東から）
3　KH－5遺物（東から）
4　KH－6遺物（南から）
5　KH－6遺物（北から）
6　KH－5炭化材（西から）
図版9　住居跡・KH－3，4，5，6
1　KH－5，6全景（北から）
2　KH－3，4，5，6全景（南西から）
図版10　住居跡・KH－7，9
1　KH－7全景（北から）
2　KH－9全景（北東から，左上KP－62）
図版11　住居跡・KH－8
1　KH－8調査（北から）
2　KH－8全景（北から）
3　KH－8全景（南から）
図版12　住居跡・KH－10，11
1　KH－10全景（北西から）
2　KH－11調査（南西から）
図版13　住居跡・KH－11
1　KH－11炭化材（東から）
2　KH－11全景（南から）
図版14　住居跡・KH－12
1　KH－12遺物（西から）
2　KH－12全景（東から）
図版15　住居跡・KH－13，15
1　KH－13全景（東から）
2　KH－15全景（北東から）
図版16　住居跡・KH－14
1　KH－14遺物（北から）
2　KH－14遺物（北東から，手前左は動物形土製品）
図版17　住居跡・KH－14
1　KH－14炭化材（南西から）
2　KH－14全景（北から）
図版18　住居跡・KH－16
1　KH－16遺物（北東から）
2　KH－16土層断面（南西から）
3　KH－16炭化材調査（北から）
4　KH－16貼床（南から）
図版19　住居跡・KH－16
1　KH－16炭化材（南東から）
2　KH－16全景（北西から）
図版20　住居跡・KH－17，18
1　KH－17全景（南から）
2　KH－18全景（東から）
図版21　住居跡・KH－19
1　KH－19遺物（南東から，右上KH－16）
2　KH－19遺物（西から）

3　ＫＨ－19遺物（南東から）
図版22　住居跡・ＫＨ－19
1　ＫＨ－19遺物（南東から）
2　ＫＨ－19遺物（西から）
3　ＫＨ－19遺物（西から）
4　ＫＨ－19遺物（西から，左上土偶）
5　ＫＨ－19遺物（南東から）
6　ＫＨ－19石組炉（南東から）
図版23　住居跡・ＫＨ－19
1　ＫＨ－19遺物（東から）
2　ＫＨ－19床面の遺物（北西から）
3　ＫＨ－19全景（北から，右上ＫＨ－18）
図版24　フラスコ状ピット
1　フラスコ状ピット確認（北から，中段の黒い円形のしみ）
2　ＫＰ－63全景（西から）
図版25　フラスコ状ピット
1　ＫＰ－66土層断面（西から）
2　ＫＰ－66全景（西から）
3　ＫＰ－73土層断面（南から）
4　ＫＰ－73全景（東から）
5　ＫＰ－75土層断面（南から）
6　ＫＰ－75全景（南から）
図版26　円形・楕円形ピット
1　ＫＰ－４全景（北東から）
2　ＫＰ－13，14全景（西から）
3　ＫＰ－15全景（東から）
4　ＫＰ－18全景（北西から）
5　ＫＰ－19全景（北西から）
6　ＫＰ－29全景（北から）
図版27　円形・楕円形ピット
1　ＫＰ－33全景（東から）
2　ＫＰ－34全景（北西から）
3　ＫＰ－60全景（西から）
4　ＫＰ－62全景（南から，上ＫＨ－９）
5　ＫＰ－64全景（左側，南から）
6　ＫＰ－92全景（北から）
図版28　Ｔピット
1　Ｔピットの列（北から）
2　ＫＰ－47全景（東から）
3　ＫＰ－48全景（東から）
4　ＫＰ－51土層断面（東から）
5　ＫＰ－53全景（南東から）
図版29　Ｔピット，ＫＰ－82，焼土
1　ＫＰ－59全景（東から）
2　ＫＰ－87，88全景（南東から，左ＫＰ－87）
3　ＫＰ－82全景（東から）
4　ＫＦ－２調査（南西から）
5　ＫＦ－２遺物・土層断面（南から）
図版30　遺物集中区
1　遺物集中区全景（南から）
2　遺物集中区（北西から）
図版31　遺物集中区
1　遺物集中区（北から）
2　遺物集中区土層断面と遺物（南西から）
3　遺物集中区土層断面と遺物（南西から）
4　遺物集中区（東から）
5　遺物集中区（北東から）
6　遺物集中区調査（北から）
図版32　旧石器調査
1　旧石器出土状況（北西から）
2　旧石器出土状況（北から）
図版33　旧石器調査
1　旧石器出土状況（北から）
2　旧石器調査（南西から）
3　旧石器調査（西から）
4　旧石器出土状況（北から）
5　旧石器調査（南東から）
図版34　住居跡の土器(1)
1　ＫＨ－３の土器（図Ⅲ－６－1）
2　ＫＨ－５の土器（図Ⅲ－11－１）
3　ＫＨ－５の土器（図Ⅲ－11－２）
4　ＫＨ－６の土器（図Ⅲ－12－１）
5　ＫＨ－６の土器（図Ⅲ－12－２）
6　ＫＨ－８の土器（図Ⅲ－17－1）
図版35　住居跡の土器(2)
1　ＫＨ－12の土器（図Ⅲ－26－１）
2　ＫＨ－12の土器（図Ⅲ－26－２）
3　ＫＨ－12の土器（図Ⅲ－26－３）
4　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－１）
5　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－２）
6　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－３）
図版36　住居跡の土器(3)
1　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－４）
2　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－５）
3　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－６）
4　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－７）
5　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－34－８）
6　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－34－９）
図版37　住居跡の土器(4)
1　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－34－10）
2　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－34－11）
3　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－34－12）
4　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－43－１）
5　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－43－２）
6　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－43－３）

図版38　住居跡の土器(5)
1　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－43－４）
2　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－43－５）
3　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－44－６）
4　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－45－７）
5　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－46－８）
6　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－46－９）
図版39　住居跡の土器(6)
1　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－46－10）
2　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－46－11）
3　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－46－12）
4　ＫＨ－18の土器（図Ⅲ－53－１）
5　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－２）
6　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－１）
図版40　住居跡の土器(7)
1　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－３）
2　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－４）
3　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－５）
4　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－６）
5　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－７）
6　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－58－８）
図版41　住居跡の土器(8)
1　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－58－９）
2　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－58－10）
3　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－58－11）
4　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－58－12）
5　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－58－13）
6　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－59－14）
図版42　住居跡の土器(9)
1　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－59－16）
2　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－59－17）
3　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－59－18）
4　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－59－19）
5　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－59－20）
6　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－59－21）
図版43　フラスコ状ピット・遺物集中区の土器(1)
1　ＫＰ－63の土器（図Ⅲ－71－１）
2　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－１）
3　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－２）
4　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－３）
5　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－４）
6　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－５）
図版44　遺物集中区の土器(2)
1　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－６）
2　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－７）
3　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－８）
4　遺物集中区の土器（図Ⅲ－108－９）
5　遺物集中区の土器（図Ⅲ－108－10）
6　遺物集中区の土器（図Ⅲ－108－11）
図版45　遺物集中区の土器(3)
1　遺物集中区の土器（図Ⅲ－108－12）
2　遺物集中区の土器（図Ⅲ－108－13）
3　遺物集中区の土器（図Ⅲ－108－14）
4　遺物集中区の土器（図Ⅲ－109－15）
5　遺物集中区の土器（図Ⅲ－111－38）
6　遺物集中区の土器（図Ⅲ－111－39）
図版46　包含層の土器
1　包含層の土器（図Ⅲ－112－１）
2　包含層の土器（図Ⅲ－112－２）
3　包含層の土器（図Ⅲ－112－４）
4　包含層の土器（図Ⅲ－112－６）
5　包含層の土器（図Ⅲ－112－７）
6　包含層の土器（図Ⅲ－120－298）
図版47　包含層の土器片(1)
1　早期の土器
2　前期の土器(1)
図版48　包含層の土器片(2)
1　前期の土器(2)
2　前期の土器(3)
図版49　包含層の土器片(3)
1　中期の土器(1)
2　中期の土器(2)
図版50　包含層の土器片(4)
1　中期の土器(3)
2　中期の土器(4)
図版51　包含層の土器片(5)
1　中期の土器(5)
2　後期～続縄文の土器
図版52　土器の展開写真(1)
1　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－２）
2　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－３）
3　ＫＨ－14の土器（図Ⅲ－33－６）
図版53　土器の展開写真(2)
1　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－43－１）
2　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－43－３）
3　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－44－６）
図版54　土器の展開写真(3)
1　ＫＨ－16の土器（図Ⅲ－46－８）
2　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－２）
3　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－４）
図版55　土器の展開写真(4)
1　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－57－６）
2　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－58－８）
3　ＫＨ－19の土器（図Ⅲ－59－16）
図版56　土器の展開写真(5)
1　ＫＰ－63の土器（図Ⅲ－71－１）

2　遺物集中区の土器（図Ⅲ－107－５）
3　遺物集中区の土器（図Ⅲ－108－９）
図版57　包含層の石器(1)
1　剥片石器(1)
2　剥片石器(2)
図版58　包含層の石器(2)
1　剥片石器(3)
2　剥片石器(4)
図版59　包含層の石器(3)
1　礫石器(1)
2　礫石器(2)
図版60　包含層の石器(4)
1　礫石器(3)
2　礫石器(4)
図版61　土製品
1　動物形土製品
2　土偶
図版62　土製品・石製品・金属製品
1　土製品
2　石製品
3　古銭
図版63　旧石器(1)
1　石核，彫器，石刃
2　ナイフ様石器
図版64　旧石器(2)
1　母岩別資料６　接合状態
2　母岩別資料６　剥片，石核
3　母岩別資料３　接合状態
4　母岩別資料３　剥片，石核
図版65　旧石器(3)
1　母岩別資料２　接合状態
2　母岩別資料２　剥片，石核
3　母岩別資料８　接合状態
4　母岩別資料８　剥片，石核
図版66　旧石器(4)
1　母岩別資料10　接合状態
2　母岩別資料11　剥片，石核
図版67　旧石器(5)
1　母岩別資料７　接合状態
2　母岩別資料７　剥片，石核
図版68　旧石器(6)
1　母岩別資料１　接合状態
2　母岩別資料１　剥片，石核
図版69　旧石器(7)
1　母岩別資料５　接合状態
2　母岩別資料５　剥片，石核
図版70　旧石器(8)
1　石核，剥片
2　礫，接合状態

I　調査の概要

1　調査要項

事業名　一般国道5号函館新道道路改良用地内埋蔵文化財発掘調査
委託者　北海道開発局函館開発建設部
受託者　財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺跡名　桔梗2遺跡（北海道教育委員会登載番号：B－01－110）
所在地　函館市桔梗町408－25，406－26
調査面積　3,540m²
調査期間　昭和62年4月13日～昭和63年3月31日（現地調査　5月9日～10月28日）

2　調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター　理事長　植村　敏（昭和62年6月25日まで）
澤　宣彦（昭和62年6月26日から）
専務理事　山本慎一　　常務理事　藤本英夫（昭和63年2月3日まで）
業務部長　間宮道男　　調査部長　中村福彦
調査部調査第1課長　畑　宏明（発掘担当者）
同文化財保護主事　長沼　孝　　同文化財保護主事　佐川俊一（発掘担当者）
同嘱託　前田正憲　　同嘱託　石川　朗

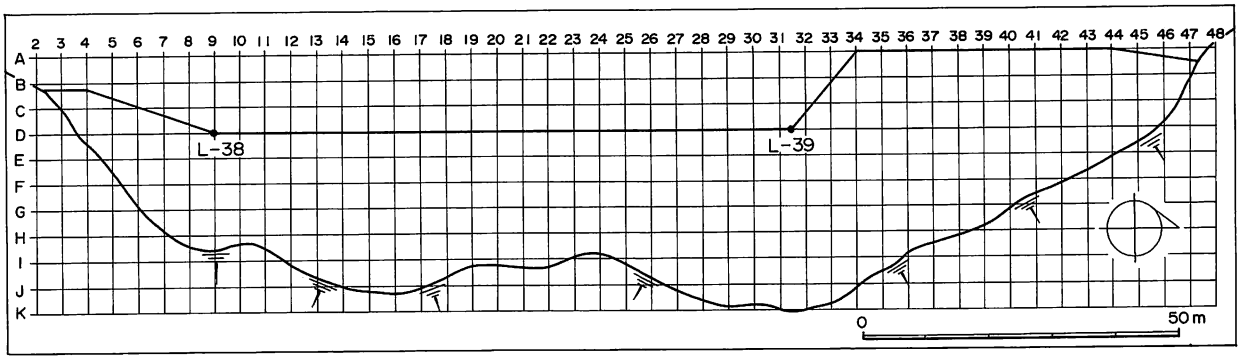
3　調査の経緯

一般国道5号線は，札幌と函館を結ぶ道内の主要幹線道路のひとつである。また，函館市を中心とし七飯，大野，上磯町を含めた函館圏の道路網の中でも重要な位置を占めている。函館市内の北部から七飯町峠下にかけては，代替道路がなく，近年交通容量以上の車が走行し，交通渋滞と環境の悪化が顕著になってきた。この国道5号線のうち亀田～大沼トンネル間約17kmの沿道には樹令100年を越すアカマツ約1,500本の並木がある。このアカマツは安政3年頃，佐渡から種子を仕入れ，育苗し，明治のはじめに天皇の行幸を記念して植樹したものと伝えられ，道南の名所のひとつとなっている。このような松並木も，環境の悪化で，損傷，立ち枯れが目立ちはじめ，昭和47年には北海道自然保護条例にもとづく環境緑地保護地区に指定され，保護されるようになった。

松並木

このような状況の中で，北海道開発局函館開発建設部（以下函館開建と記す）は，国道5号線の交通渋滞緩和と歴史的な松並木の保存などを目的に，函館新道建設を計画した。しかし，函館市内の工事区域は，サイベ沢遺跡などに近接しており，埋蔵文化財包蔵地の所在が予想されることから，昭和58年2月以降函館開建と北海道教育委員会（以下道教委と記す）の間でその取扱について協議が行われ，道教委は同年5月に所在確認調査，同年11月に範囲確認調査を行った。その結果，石川1遺跡とともに発掘調査が必要である，との結論が出された。そして工事の工程に従って，石川1遺跡の調査を昭和60年度から昭和

函館新道



図Ⅰ－1　発掘区設定図

62年度まで行い，本遺跡については昭和62年度に調査を実施した。　（長沼　孝）

4　調　査　概　要

(1)　発掘区の設定

発掘区は，アルファベットの大文字と数字の組合せで表示し，規格は4×4 mとした。設定の基準は，工事用地の境界杭L－38，L－39で，それらを結んだ線を南北の基線(Dライン)，その線に直交しL－38を通る線を東西の基線（9ライン）とし，図Ⅰ－1のように4 m間隔でラインを設定した。なお，L－38，L－39の測量成果は下記のとおりである。

L－38　　X＝－241,262.923m　　Y＝40,704.240m

L－39　　X＝－241,172.926m　　Y＝40,753.261m（平面直角座標　第Ⅺ系）

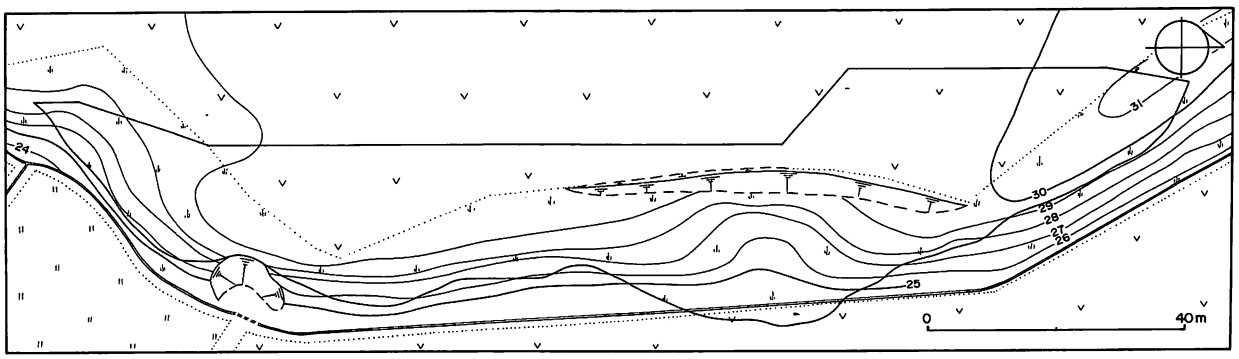
発掘区の呼称は，4 m四方の区画の南西隅のラインの交点で表示した。例えばEラインと20ラインの交点の北東側がE－20区画ということになる。

発掘区の方向は，平面直角座標の南北方向に対しN－7°6′45.77″－Wである。なお，各遺構の標高の測定にあたっては，遺跡の南西500mの比遅里神社境内に位置する一等水準点（24.76m）を利用した。　（長沼　孝）

(2)　調　査　方　法

調査手順

調査区域の現況は，畑地とグランド敷地で，部分的に削平されていた。また，調査区域の中央部には，沢を埋めた盛土が厚く堆積していた。したがって，調査は重機で，表土および盛土を除去することから開始した。その後は，発掘区設定，25%調査，包含層調査，遺構調査，旧石器調査の手順で調査を進めた。また，工事工程の都合上，沢の北側を先に



図Ⅰ－2　遺跡現況図

完了させ，次に沢の南側の調査を行った。なお，調査区域の西側は，沢の盛土および，たばこ産業株式会社のグランドフェンスの崩壊防止のため，幅２～３ｍのクリアランスをとった。

第Ⅰ～Ⅲ層の遺物については，基本的に４×４ｍの発掘区単位で取り上げた。住居跡や土壙内の遺物については，基本的に出土位置，レベルなどを記録したが，Ｔピットの覆土中から出土した遺物など，明らかに流れ込みとみられるものについては，遺構単位で一括して取り上げた。住居跡については，大きく覆土と床面に分け，さらに各層位に細分したが，一部層の認識や床面遺物の認定などで異なる点もある。なお，可能な限り出土状況を示したので参照願いたい。また，６軒の住居跡については炭化材が確認されたので，実測後，サンプリングし，一部のものについては樹種同定を行った（Ⅳ－３）。

遺物の取り上げ

炭化材住居

第Ⅳ層から出土した旧石器については，基本的にすべて４×４ｍの発掘区での座標値（南からと西からの距離，レベル）を記録し，１点ごとに発掘区単位で遺物番号を付け取り上げた。

（長沼　孝）

(3)　土壌サンプルとフローテーション，水洗処理

土壌サンプルは大きく二つの目的をもって採取した。一つはフローテーション，水洗処理をして土壌中に含まれている微細遺物を採取するもので，土のう袋またはポリ袋に収納した。もう一つは各種の分析を目的としたもので，地点，層位などを細かに記録し，ポリ袋に収納した。

目　的

フローテーション，水洗処理を行った土壌は乾燥状態で236.62kg，採取した炭化物，砕片，焼骨片，砂礫の総重量は2,268.1g（炭化物109.0g，砕片294.1g，焼骨片3.1g，砂礫1,832.6g）である。なお，砕片の点数は4,626点で，その他土器の小片が33点ある。

フローテーション，水洗処理には基本的には土壌用分析ふるい（JIS規格メッシュNo.60（0.25m/m），32（0.5m/m），16（1.0m/m））を使用したが，水洗処理については，料理用の大型ふるい（径30cm，網目1mm）を併用した。

フローテーションは，住居跡すべての焼土について，水洗処理は住居跡で砕片の集中した部分の土壌について行った。

炭化物については細かな選別は行っていないが，焼骨中には鳥獣骨と魚骨がみられた。鳥骨には頸椎，脛骨など，獣骨は細片のため種類，部位まではわからない。魚骨にはサメ類の椎体，サケ科魚類，ニシンの椎体などがある。

分析試料

分析用に採取した土壌と地点は下記のとおりである。

１．火山灰分析試料：Ⅰ－29土層断面

２．ローム分析試料：Ｄ－40石器出土地点

今回の報告では，火山灰・ローム分析の結果（Ⅳ－２）を掲載した。　（長沼　孝）

(4)　整理の方法

遺物の水洗，注記は現地で行い，その後，接合，復元作業などは札幌のセンターで行った。土器は可能な限り復元し，図化した。また，文様の明確なものの一部については展開写真を撮影した（図版52～56）。

展開写真

旧石器については，個体別分類を試み，接合作業を進めた，接合は美利河１遺跡（㈶北

海道埋蔵文化財センター1984a）同様，瞬間接着剤（ボンドアロンアルファ：コニシ株式会社発売）を使用した。接合は可能なものすべてについて行っている。なお，分離する場合は，「はがし液」（ボンドアロンアルファ用：コニシ株式会社発売）でも可能であるが，熱湯に浸し，さらに煮立たせるのが簡便である。（長沼　孝）

(5) 遺構・遺物の分類

遺構　掲載した遺構には，住居跡，土壙，焼土がある。以下，遺構ごとに使用した記号の説明を加える。なお，遺構記号の頭には，発掘区の呼称記号との混同および，同時に調査している石川１遺跡の遺物と混ざることを避けるため桔梗のイニシャル〝K〟を付した。

住居跡：〝KH〟で表示した。住居跡内より検出した焼土は〝HF〟を，付属ピットには〝HP〟を付した。掘りこみ炉で焼土のあるものは浅いピットを伴っても〝HF〟のみを付した。

土壙：〝KP〟で表示した。土壙はその形態から，フラスコ状ピット，円形・楕円形ピット，Ｔピットの３種類に分けた。

焼土：〝KF〟で表示した。

遺物　土器の分類については，基本的に大沼忠春のものに従っている（㈶北海道埋蔵文化財センター 1987『木古内町　建川２・新道４遺跡』）。

土器の分類　本書で報告する資料には，縄文時代早期から晩期および続縄文時代までのものがある。縄文時代早期から続縄文時代まで順にⅠ群～Ⅵ群の大分類をあて，それぞれに，二，三の類別を設けて記載する。以下，類別の後に本遺跡で出土している土器の型式名を記入した。

Ⅰ群（早期）

Ａ類：貝殻文土器（物見台式系，ムシリⅠ式系）

Ｂ類：縄文の施された土器（B_1類―東釧路Ⅲ式に相当するもの，B_2類―コッタロ式に相当するもの，B_3類―中茶路式に相当するもの，B_4類―東釧路Ⅳ式に相当するもの）※ただしB_2類は出土していない。

Ⅱ群（前期）

Ａ類：縄文の施された尖底土器（綱文土器，石川野式，春日町式）

Ｂ類：円筒土器下層式に相当する土器（円筒下層ｃおよびｄ式相当）

Ⅲ群（中期）

Ａ類：円筒土器上層式に相当する土器（A_1類―円筒上層ａ式，A_2類―円筒上層ｂ式，A_3類―サイベ沢Ⅶ式，見晴町式）

Ｂ類：榎林式，大安在Ｂ式，ノダップⅡ式に相当するもの

Ⅳ群（後期）：余市式，入江式，大湯式に相当するもの

Ⅴ群（晩期）：大洞C_2～Ａ式に相当するもの

Ⅵ群（続縄文）：恵山式，後北C_1式に相当するもの

図示にあたっては，実測図は１：４，拓本は１：３を原則としているが，変則的なものはそれぞれにスケールを付けている。

石器の分類　石器は器種別の大分類にとどめ，一器種における記号の細分はおこなっていない。今回報告するものについて，剥片石器には石鏃，ドリル，槍先またはナイフ，つまみ付ナイフ，へら状石器，スクレイパー類があり，礫石器には，石斧，たたき石，すり石，砥石，台石

または石皿がある。このほかに石核，フレイク・チップ，擦り切り痕のある礫，自然礫がある。表Ⅰ－2のUフレイクはutilized flakeのことである。

石製品には，玉，垂飾などがある。

土製品には，ミニアチュア土器，スプーン状土製品，漏斗状土製品，土偶，動物形土製品，土器片を利用した円盤状土製品，擦り切り痕のある土器片などがある。

金属製品には古銭がある。

このほか，炭化材，動物遺存体が検出されている。

旧石器時代のものには，ナイフ様石器，ナイフ様剥片，彫器，石刃，フレイク・チップ，石核，礫がある。

（佐川俊一・石川　朗）

(6) 遺跡の概要

今回の調査で発見された遺構，遺物は表Ⅰ－1，2のとおりである。

遺構

遺構数は，住居跡19軒，土壙93基（内訳は，フラスコ状ピット10基，円形・楕円形ピット38基，Tピット45基），焼土2か所である（図Ⅰ－3）。住居跡の時期は，縄文時代中期初頭1軒，中期中葉（サイベ沢Ⅶ式および榎林式の時期）14軒，不明4軒である。土壙の多くはその切り合い関係で時期の前後関係はわかるものの判明しているものは少ない。Tピットの時期は縄文時代中期以前と思われる。焼土の時期は，2か所とも中世までさかのぼる可能性がある。

遺物

遺物総数は，68,520点（うち表採・盛土部分の遺物778点を含む）で1 m²あたりの遺物点数は約19点である。遺物の内訳は，土器が42,953点，石器等（フレイク・礫を含む）23,389点，旧石器1,366点，土製品・石製品30点，金属製品（古銭）4点である。土器は，縄文時代中期が圧倒的に多く31,537点，ついで前期1,528点，早期403点，以下縄文時代後期～続縄文時代の土器がわずかに出土している。石器は925点出土しており，その内訳は，剥片石器654点，礫石器271点である。剥片石器のなかでは，スクレイパーが最も多く，ついで石鏃，やり先・ナイフ，つまみ付ナイフ，ドリルが出土している。礫石器のなかでは，すり石が最も多く，ついでたたき石，台石・石皿，石斧，砥石が出土している。土製品では住居跡の覆土中より出土した動物形土製品，土偶のほかにミニアチュア土器，円盤状土製品が出土している。石製品では有孔石製品が多い。金属製品では渡来銭が4点出土している。

石器ブロック

旧石器は石器のまとまりを2か所検出した。今回の報告ではこのまとまりを「石器ブロック」と呼称し，KSb－1，2で表わすことにする。KSb－2はG－11区にあるもので4点が出土した。その内訳は，彫器1点，石刃2点，石核1点である。KSb－1はおもにC・D－40区を中心に半径4 mの範囲に石器が分布している。ここからは総計1,362点，総重量4,993.8 gの石器が出土している。その内訳はナイフ様石器19点(113.9 g)，ナイフ様剥片17点(58.5 g)，フレイク775点(2,663,6 g)，石核17点(1,095.6 g)，礫534点(1,062.2 g)である。

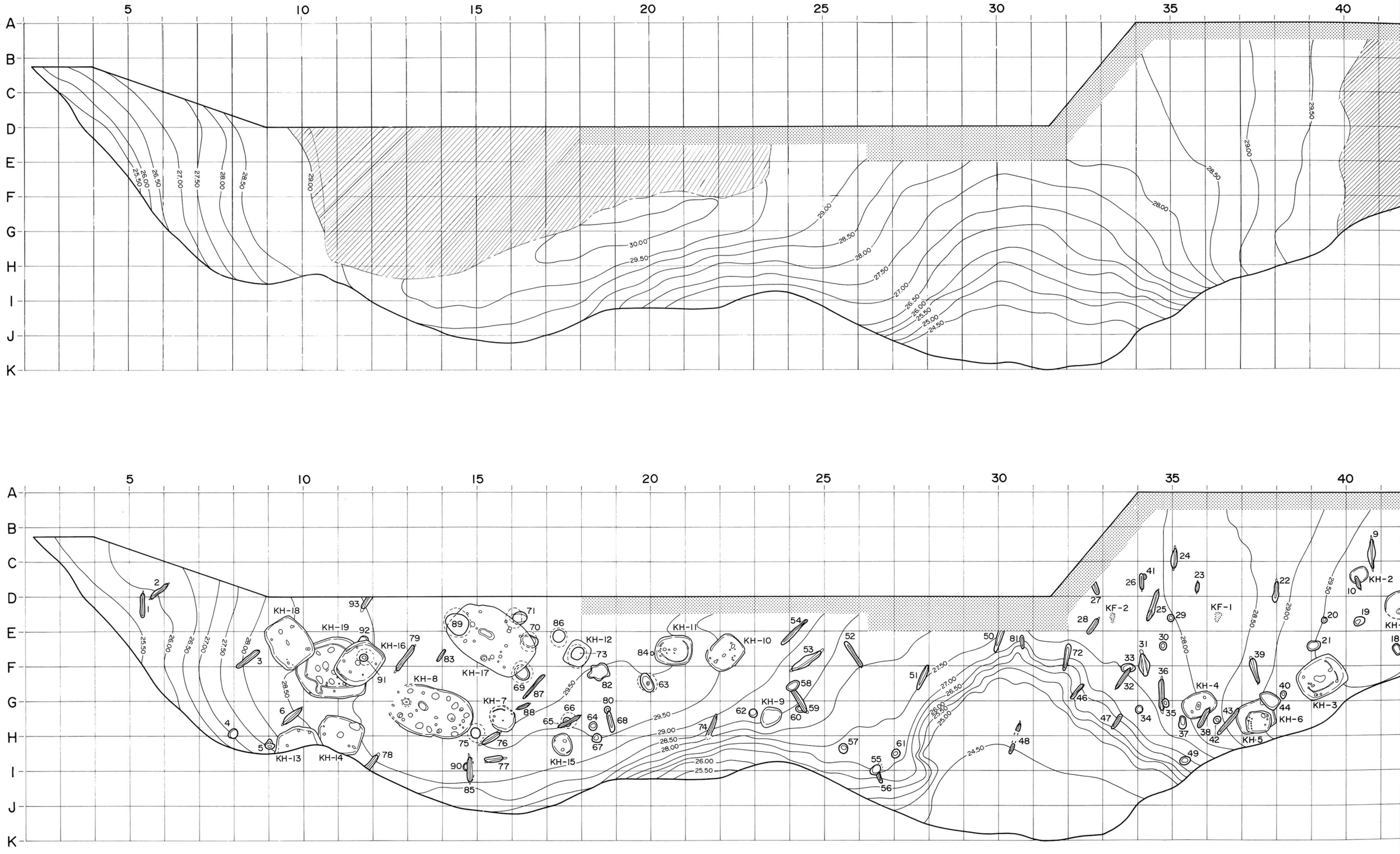
（佐川俊一・石川　朗）

表Ｉ－１　遺構一覧

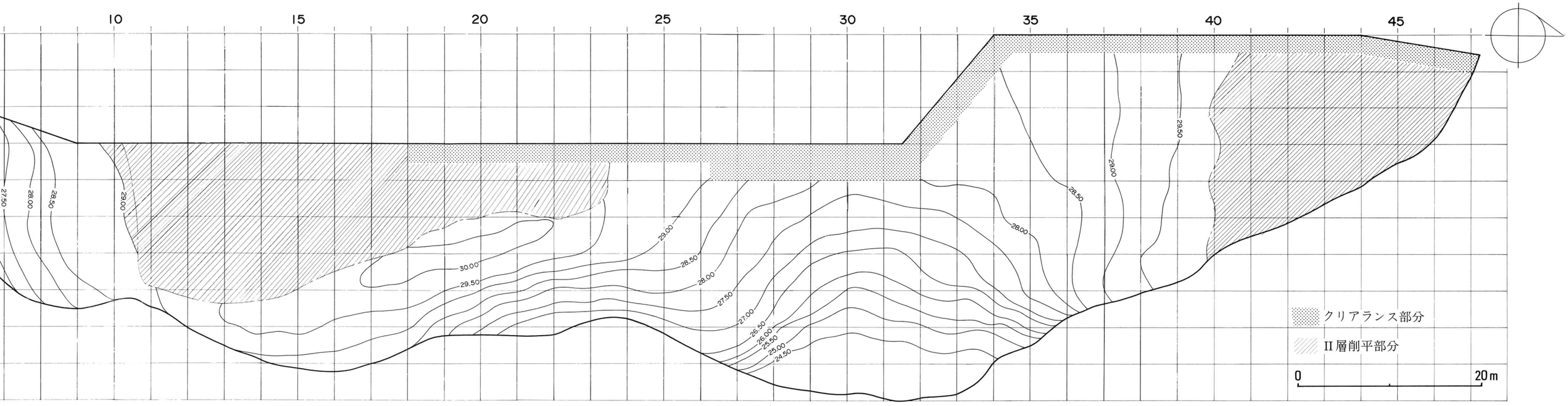
住　居　跡	フラスコ状ピット	円形・楕円形ピット	Ｔ　ピ　ッ　ト	焼　　土
19	10	38	45	2

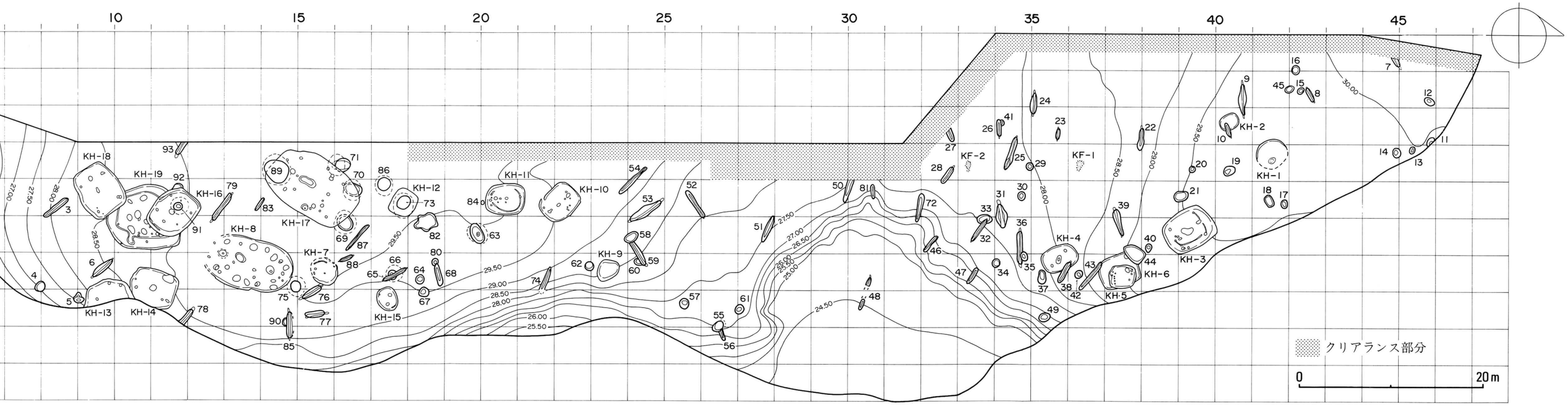
表Ｉ－２　出土遺物一覧

種　類	遺構					小　計	包含層	合　計	表採・盛土
	住居跡	フラスコ状ピット	円形・楕円形ピット	Ｔピット	焼　土				
縄文早期土器	3		9	85		97	306	403	14
縄文前期土器	23		50	50		123	1,405	1,528	30
縄文中期土器	11,352	150	86	343		11,931	19,606	31,537	550
縄文後期土器							14	14	1
縄文晩期土器							43	43	
続縄文土器							25	25	4
不明・その他	4	208	120	174	4	510	8,893	9,403	161
小　計	11,382	358	265	652	4	12,661	30,292	42,953	760
石　鏃	34	2		2		38	28	66	2
ド　リ　ル	4					4	9	13	
槍先・ナイフ	31			1		32	27	59	1
つまみ付ナイフ	7		1	1		9	27	36	5
スクレイパー	194	7		6		207	205	412	4
石　斧	9	2				11	13	24	1
た　た　き　石	37	1	2			40	32	72	
す　り　石	20	1	1	1		23	102	125	5
砥　石	7	1				8	5	13	
台石・石皿	13	7	1			21	10	31	
石　錘							1	1	
石　核	3	1		1		5		5	
Ｕフレイク	13					13	55	68	
フ　レ　イ　ク	18,056	161	116	68	37	18,438	2,796	21,234	
礫	773	71	17	8	1	870	360	1,230	
小　計	19,201	254	138	88	38	19,719	3,670	23,389	18
土・石製品	15					15	15	30	
金属製品					1	1	3	4	
旧　石　器							1,366	1,366	
合　計	3,0598	612	403	740	43	32,396	35,346	67,742	778



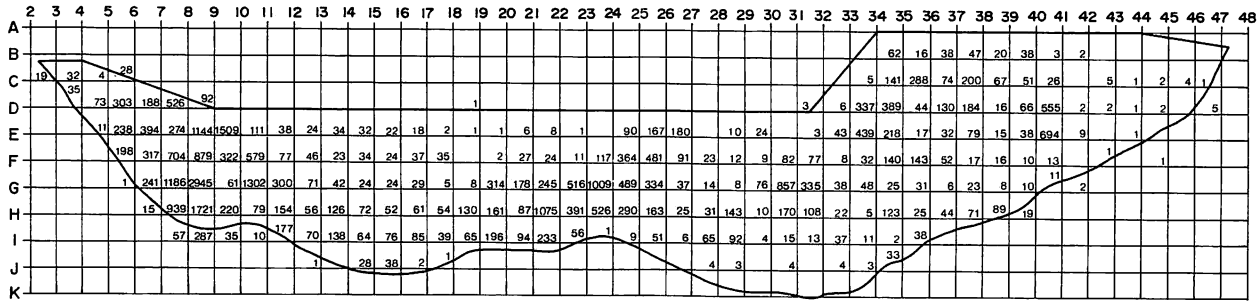
図Ⅰ－3　Ⅱ層上面の地形（上）と遺構分布図（下）





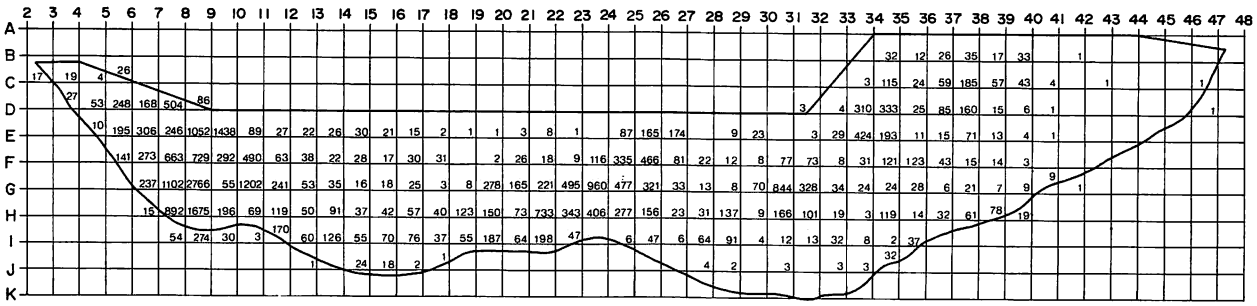
図Ⅰ－3　II層上面の地形（上）と遺構分布図（下）

遺物総点数



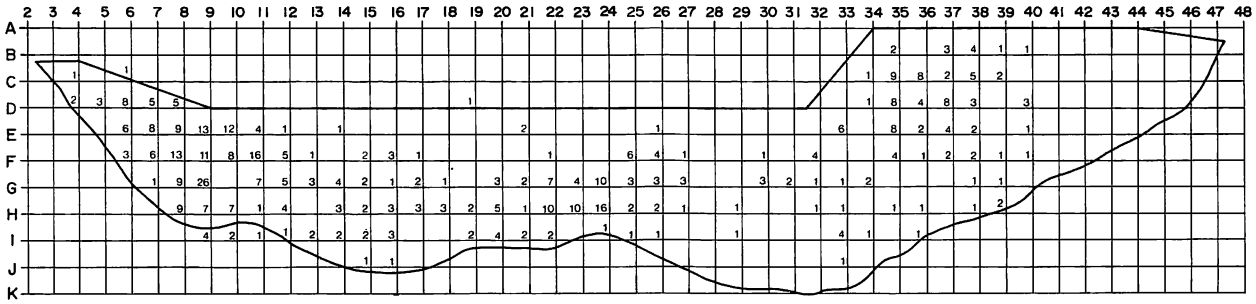
35346

土器総点数



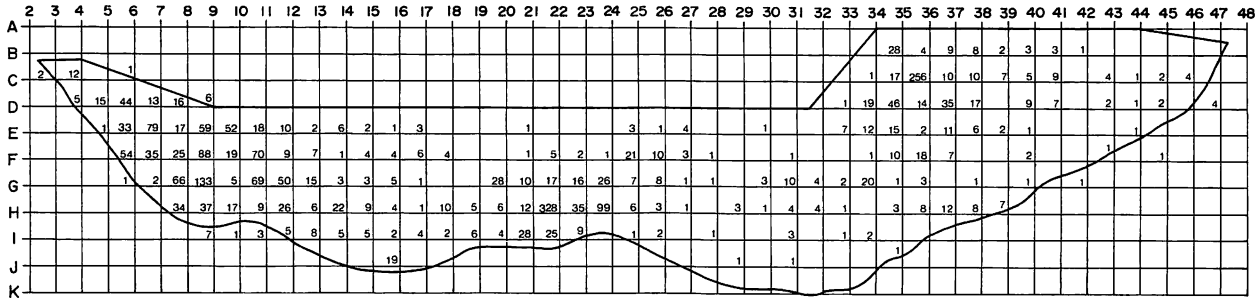
30292

石器総点数



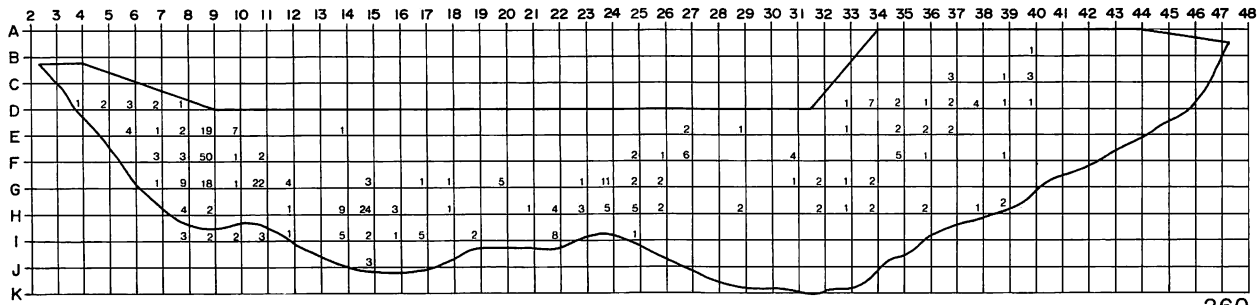
514

フレイク・チップ総点数



2796

礫総点数



360

図Ⅰ－4　発掘区別遺物出土点数

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と周辺の遺跡

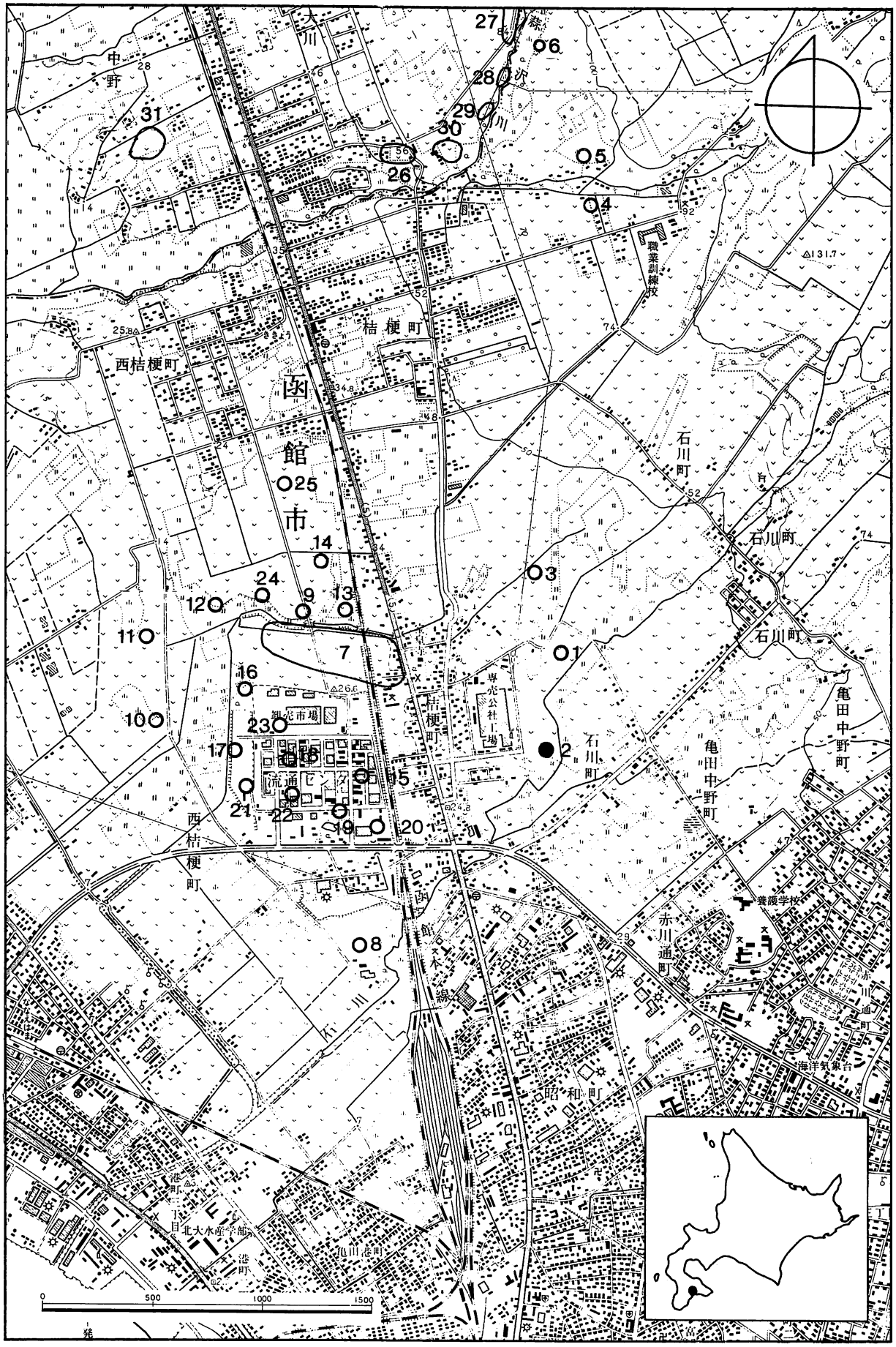
桔梗２遺跡は，JR 北海道函館駅の北方6.5km，日本たばこ産業函館工場の東側にあり，庄司山を源とする石川の右岸，標高30m の段丘上に位置する。ここでは桔梗２遺跡周辺の遺跡分布を図及び表（図Ⅱ－１，表Ⅱ－１）に従って概観する。遺跡の西北１ km には通称西桔梗台地と呼ばれる地域があり，縄文時代早期から室町時代中期に至る遺跡が集中している。このうち７遺跡が（17～23）が昭和47年，函館圏流通センター建設に伴って調査された（千代編 1974）。台地北縁には貝塚を含む縄文時代前～中期のサイベ沢遺跡がある。サイベ沢遺跡は昭和24年（市立函館博物館主体）と，昭和59，60年（函館市教育委員会主体）に調査されている。昭和24年の調査では，土器群が層位的に出土しており，北海道における縄文時代前期から中期の編年を組み立てる上で重要な遺跡の一つとして位置づけら

石川右岸

サイベ沢遺跡

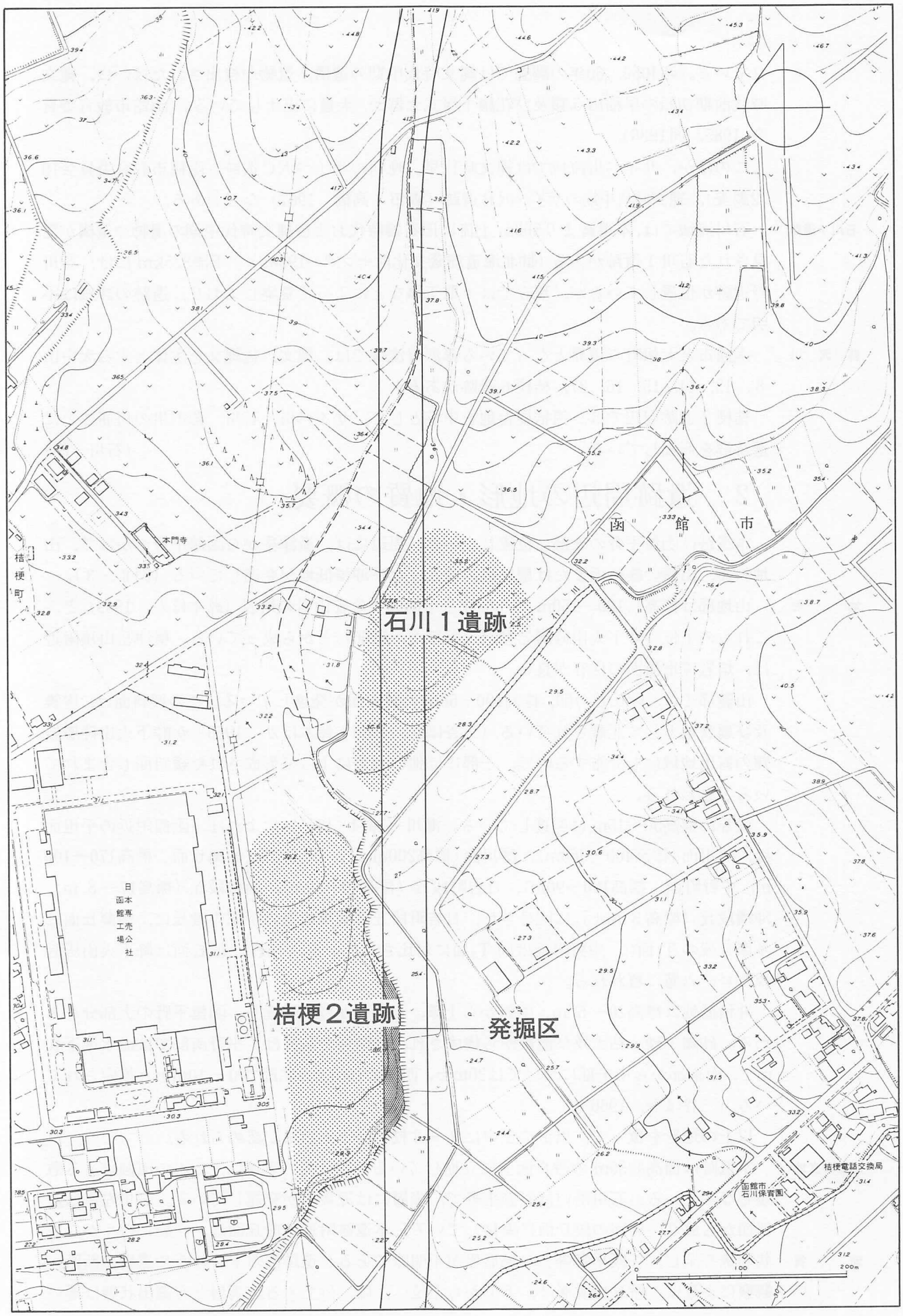
表Ⅱ－１　周辺の遺跡一覧

No.	名称	登載番号	所在地	時代
1	石川１遺跡	B・01・109	函館市石川町172-2　169-8	旧石器・縄文(早～晩期)続縄文
2	桔梗２遺跡	B・01・110	函館市桔梗町408-6	旧石器・縄文(早～晩期)続縄文
3	桔梗３遺跡	B・01・111	函館市桔梗町418-16,17,37	縄文(中期)
4	桔梗４遺跡	B・01・112	函館市桔梗町435-130,131,62	縄文(早・晩期)・続縄文
5	桔梗５遺跡	B・01・113	函館市桔梗町528-1	縄文
6	桔梗６遺跡	B・01・114	函館市桔梗町440-14,15,31	縄文
7	サイベ沢遺跡	B・01・ 82	函館市西桔梗町26-1,3,4,5,6,27,610-27～34-36,611-3,5,6,16 函館市桔梗町149,150-1,2,6	縄文(前・中期)
8	石川野遺跡	B・01・ 84	函館市西桔梗町555-8,9,558,559,563,567,574,575	縄文(早・前期)
9	サイベ沢Ｂ遺跡	B・01・ 85	函館市西桔梗町614,640-1,2	縄文(前・中期)
10	西桔梗Ｎ-1遺跡	B・01・ 86	函館市西桔梗町246-24他	縄文(早・前・中期)
11	西桔梗Ｎ-2遺跡	B・01・ 87	函館市西桔梗町503-1他	縄文(早・前・中期)
12	西桔梗Ｎ-3遺跡	B・01・ 88	函館市西桔梗町622他	縄文(早・晩期)
13	西桔梗Ｎ-5遺跡	B・01・ 89	函館市西桔梗町36-1	縄文(晩期)
14	西桔梗Ｎ-6遺跡	B・01・ 90	函館市西桔梗町39-3,41-1	続縄文
15	西桔梗Ｎ-7遺跡	B・01・ 91	函館市西桔梗町10-3	室町中期
16	西桔梗Ａ遺跡	B・01・ 92	函館市西桔梗町607-1,7,12他	縄文(早・前期)
17	西桔梗Ｂ１遺跡	B・01・ 93	函館市西桔梗町604-6,9,605-7,8,9	縄文(前・中期)
18	西桔梗Ｂ２遺跡	B・01・ 94	函館市西桔梗町598-4,6,9	続縄文(恵山式)
19	西桔梗Ｃ遺跡	B・01・ 95	函館市西桔梗町597-1,2,5	縄文(中・後期)
20	西桔梗Ｄ遺跡	B・01・ 96	函館市西桔梗町10-2	縄文(中・後・晩期)擦文
21	西桔梗Ｅ１遺跡	B・01・ 97	函館市西桔梗町598-13,14,18,19,35	縄文(早・前・中・晩期)
22	西桔梗Ｅ２遺跡	B・01・ 98	函館市西桔梗町598-19	縄文(中・晩期)続縄文(恵山式)
23	西桔梗Ｆ遺跡	B・01・ 99	函館市西桔梗町607-12	縄文(中期)
24	サイベ沢Ｃ遺跡	B・01・100	函館市西桔梗町615-1他	続縄文(恵山式)
25	桔梗１遺跡	B・01・105	函館市桔梗町44の1	縄文(中期)
26	大中山８遺跡	B・08・ 5	亀田郡七飯町字大川245	縄文(早・晩期)続縄文(恵山式)
27	大中山13遺跡	B・08・ 24	亀田郡七飯町字大川405～407,409,410,413,418	縄文(中期)続縄文(恵山式)
28	大中山14遺跡	B・08・ 25	亀田郡七飯町字大川273,275	縄文，続縄文(恵山式)
29	大中山15遺跡	B・08・ 26	亀田郡七飯町字大川272,273,275	縄文，擦文
30	大中山16遺跡	B・08・ 27	亀田郡七飯町字大川269,271,275	縄文
31	大中山27遺跡	B・08・ 57	亀田郡七飯町字中野117,118-1～5,119-1～4	続縄文(恵山式)



図Ⅱ－1　遺跡の位置と周辺の遺跡

（国土地理院発行２万５千分の１地形図，七飯・函館・赤川・五稜郭）



図Ⅱ－２　遺跡の範囲および周辺の地形

れている。昭和59，60年の調査では縄文時代中期の遺構，遺物が検出されたほかに，縄文時代前期初頭の早稲田5類及び花積下層式土器が，大量に出土している。(函館市教育委員会 1985，同1986)。

このほか，サイベ川流域では縄文時代早，晩期のサイベ沢C遺跡（函館市教育委員会1972調査），縄文時代中期のサイベ沢B遺跡（森田・高橋　1967）などがある。

石川1遺跡　石川流域では，本遺跡より500m上流に旧石器時代および縄文時代中期の遺物や遺構が発見された石川1遺跡がある（㈶北海道埋蔵文化財センター1988a)。下流3.5kmには，石川野遺跡が位置しているが，現在では土取工事などによって荒廃しており，遺跡の詳細は不明である。

蒜沢川　函館市と七飯町の境界となっている蒜沢川流域では，縄文，続縄文を主体とする大中山8，13，14，15，16，27，桔梗6遺跡がある。

桔梗2遺跡周辺では，西桔梗台地を中核として，サイベ川，石川，蒜沢川の川筋ごとに遺跡群を形成している。　（石川　朗）

2　遺跡周辺の地形・地質の概要

本遺跡は函館平野の東部に位置している。周辺には，横津岳から函館平野へかけて，山地斜面，山麓の緩斜面または扇状地，段丘，及び沖積低地が発達している（図Ⅱ－3）。

地　形　山地部は標高1,100—150mで，横津岳を構成する安山岩の熔岩（鈴木ほか，1969）と，これらの下位の峠下火山砕屑岩類（三谷ほか，1966）とから成っている。横津岳山頂附近は，熔岩流堆積面の保存が良い。

山麓部では，段丘との間，標高100—50mに緩斜面が発達している。この緩斜面は，崖錐及び扇状地として記載されている（三谷ほか，1966；鈴木ほか，1969）が峠下火山砕屑岩類の露出地域にも分布するので，一部には他の営力によって形成された緩斜面も含まれていると思われる。

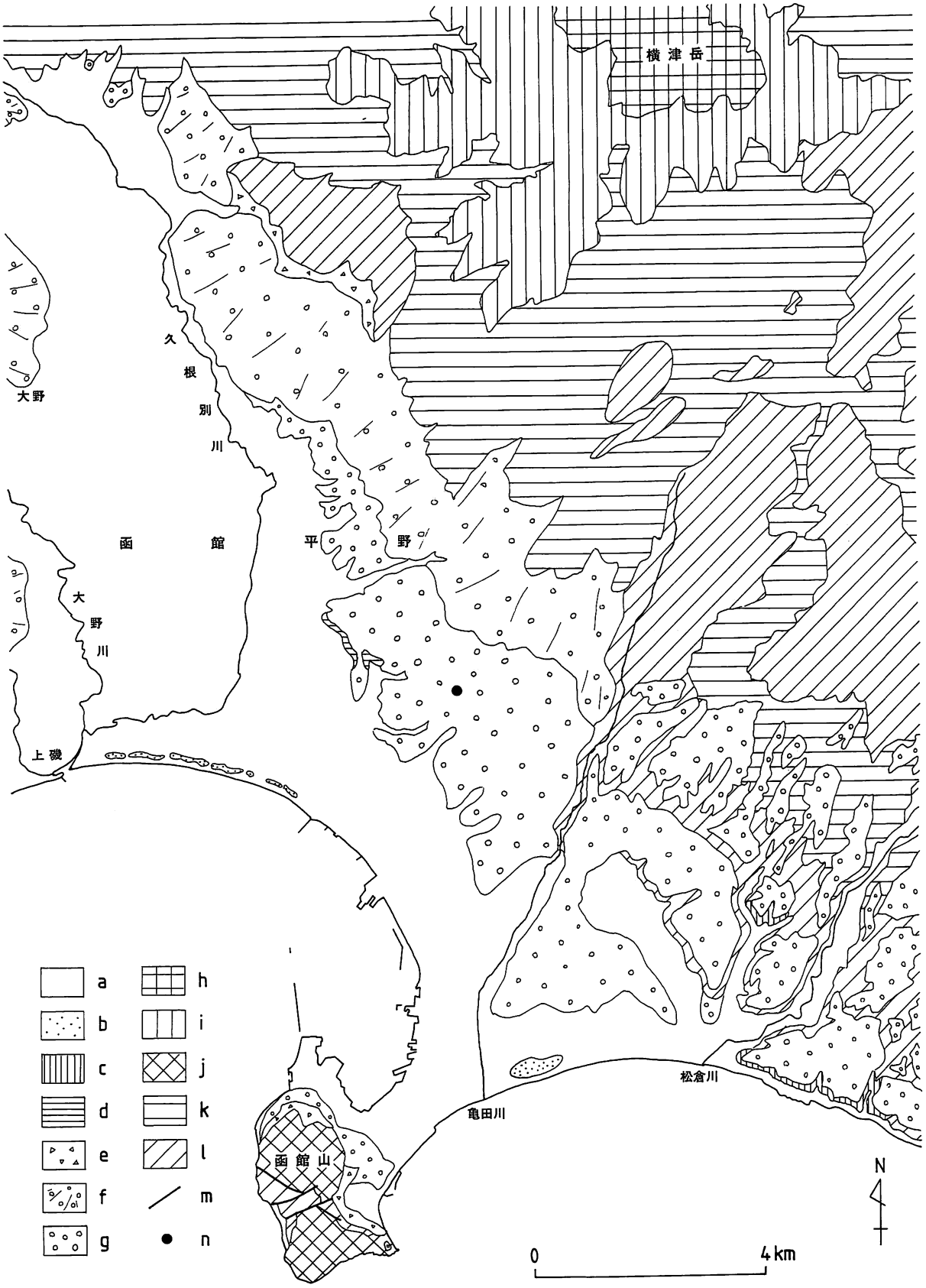
段丘は標高50—15mに発達している。瀬川（1974・1975）によれば，函館附近の平坦面は，鳴川面(標高460—360m)，鱒川面(標高200m±)，赤川段丘(鈴蘭丘面：標高170—100m，中野町面：標高100—90m)，日吉町段丘（標高60—50m)，函館段丘（標高17—8 m)，沖積段丘（標高5 m±）に区分され，日吉町段丘は関東地方の下末吉段丘に，鈴蘭丘面は多摩丘陵のT_1面に，中野町面は同T_2面に対比されている。一般に，段丘面は降下火山灰起源のローム層に覆われる。

沖積低地は標高20—5 m，函館から上磯，大野へかけて発達し，函館平野の大部分を占める。砂礫・砂・粘土及び泥炭から構成され，沖積層の基底は，平野南部では海水準下40m±，南東部から中央部にかけては20m±，西部で10m±，北部で0—10m±と推定されている（三谷ほか，1966)。

以上の地形を覆って，黒ボク土中に2—3枚の降下火山灰が認められる。

遺跡の立地　本遺跡は標高約30mの段丘面上に立地している。段丘面の東端は，石川の河蝕による急崖となっている。石川沿いは谷底平野で，表層には泥炭層が発達している。石川左岸は緩斜面から成り，周囲の段丘面に漸移している。本遺跡附近の段丘面は，一般に緩やかな波状起伏を呈し，谷底平野等との地形界が不明瞭である。

地　質　遺跡内のトレンチや遺構の断面の観察によれば，段丘構成層は，下位から上位へ，礫，砂である。両層とも露出状態は悪い



図Ⅱ－3　遺跡周辺の地質図

（長谷川・鈴木，1964；三谷ほか，1965；三谷ほか，1966；鈴木ほか，1969から引用。一部加筆・簡略化。）a：沖積低地　b 砂丘　c：銭亀沢火山灰層　d：文月層　e：崖錐堆積物　f：扇状地堆積物　g：段丘堆積物　h：横津岳上部熔岩　i：横津岳下部熔岩　j：函館山火山岩類　k：峠下火山砕屑岩類（松倉集塊岩層を含む）　l：その他の新第三系・貫入岩類　m：断層　n：桔梗2遺跡

が，砂は分級の良い中粒砂から成り，層厚6～50cm，橙色味を帯びる。下部には鉄鉱物の平行ラミナが良く発達している。砂層中には，径10～20mmの風化した淡橙色の軽石が散在する。砂層の特徴や段丘の分布位置から，本段丘は海成段丘と考えられる。段丘構成層はローム層に覆われる。ローム層からは旧石器時代の遺物，表層の黒ボク土からは縄文時代・続縄文時代の遺物が出土する。

日吉町段丘　本遺跡が立地している段丘は，瀬川(1974・1975)の日吉町段丘に対比される。瀬川(1975)は，西桔梗附近の日吉町段丘を西桔梗面と仮称し，西桔梗高位面と西桔梗低位面に二分した。本遺跡が立地している段丘が，このどちらに対比されるのかは不明である。

(花岡正光)

3　基　本　層　序

桔梗2遺跡における土層断面図を図Ⅱ－4に掲載した。発掘区の南北を通るFラインに沿ってセクション・ベルトを残し，その東壁の土層断面を観察し記録した。以下，図Ⅱ－4にしたがって基本層序を述べる。

Ⅰ層：表土，耕作土。層厚10～30cm。

Ⅱ層：黒色腐植土（縄文，続縄文，中世の遺物包含層）。層厚10～180cm。発掘区の北および南側の平坦地では，畑の耕作のためⅡ層が削平されている。Ⅱ層が残っているのは沢部および南側の斜面部のみで，その厚さは沢部の深い箇所で180cm，南側の斜面では10～20cmである。

掘り上げ土　発掘区のF－8～9の土層断面には，Ⅱ層中にKH－18の掘り上げ土と思われる土が堆積する（第14層）。層厚10～20cm。

Ⅲ層：暗褐色土（漸移層）。層厚10～20cm。沢部および南側の平坦地にはない。

Ⅳ層：明黄褐色ローム（旧石器遺物包含層）。

(佐川俊一)

Ⅲ　遺構と遺物

縄文時代，続縄文時代，中世，近代の遺物包含層である第Ⅰ～Ⅲ層と旧石器時代の包含層である第Ⅳ層に大別し，説明する。第Ⅰ～Ⅲ層では，住居跡，フラスコ状ピット，円形・楕円形ピット，Ｔピット，焼土，包含層の遺物の順に，第Ⅳ層では，石器ブロック，遺物の順に説明する。第Ⅰ～Ⅲ層の遺構出土の土製品・石製品については，重複するが包含層のところにも掲載し，詳細な説明は包含層のところで説明する。

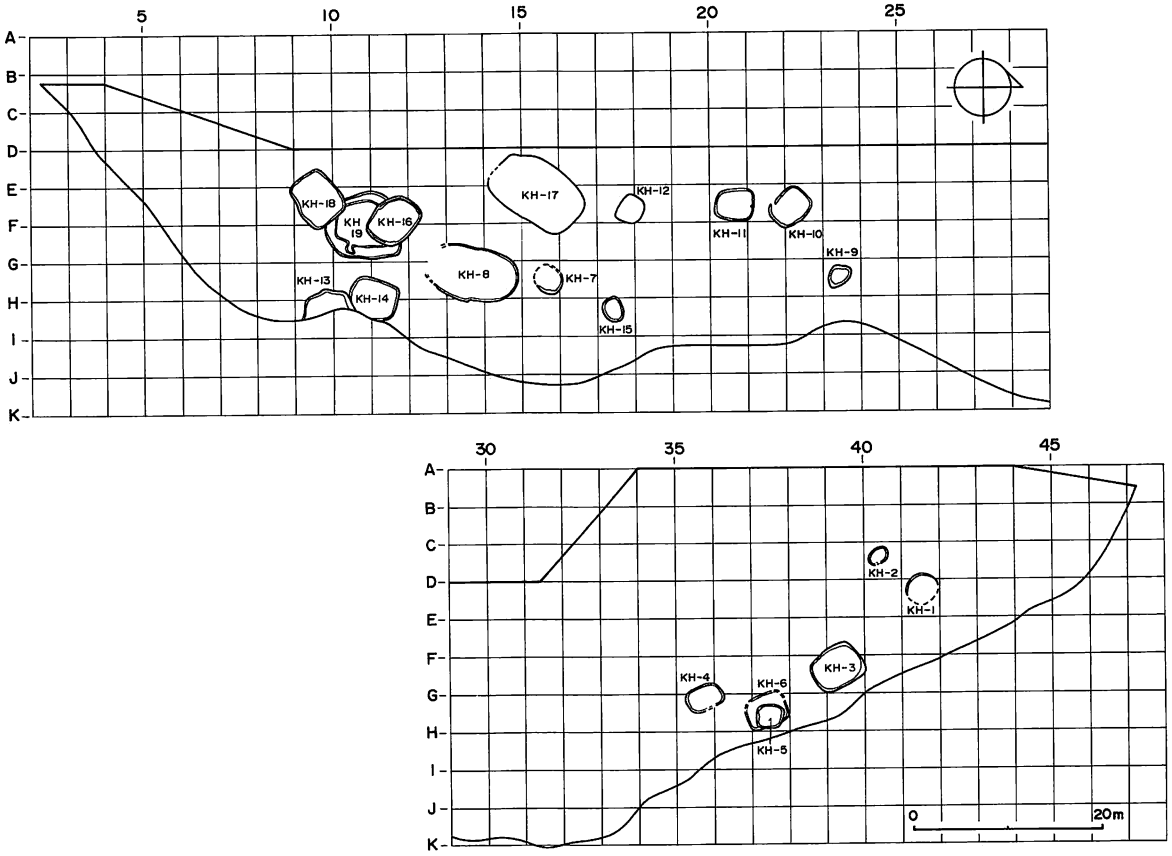
1　第Ⅰ～Ⅲ層の遺構と遺物

住居跡19軒，フラスコ状ピット10基，円形・楕円形ピット38基，Ｔピット45基，焼土２か所を確認した(図Ⅰ－３)。また，このほかに住居跡の掘り上げ土の下に，多くの土器が廃棄された遺物集中区が１か所ある。

(1)　住　居　跡

住居跡の時期

本遺跡より検出された住居跡は，全部で19軒である。時期は，縄文時代中期初頭が１軒(KH－19)，中期中葉のサイベ沢Ⅶ式のものが６軒(KH－８，12，14，16～18)，榎林式のものが５軒(KH－３，５，６，10，11)，中期後半～末葉にかけてのものが１軒(KH－７)，中期と思われるが細分できないものが２軒(KH－13, 15)，時期不明のもの４軒(KH－



図Ⅲ－１　住居跡分布図

1，2，4，9）である。

住居跡は，沢部をはさんだ北側に6軒，南側に13軒分布する。いずれも，現在の段丘縁辺部もしくはそれより12m程内側に入った平坦地に立地する。北側の6軒は，標高28.00～29.50mの間に長軸方向を等高線と直交する状態でつくられている。一番高いところにあるKH－1，2は，いずれも畑地の耕作やたばこ産業株式会社のグランド造成のために上部をかなり削平されており，KH－1などは床面が，かろうじて検出されるような状態であった。KH－1，2は2軒とも，住居跡の時期は不明である。KH－1，2から少し下がった標高28.50～29.50mの位置に榎林式の住居跡が3軒ある（KH－3，5，6）。KH－3は，5.5×4.7mの隅丸長方形の大きな住居跡にもかかわらず，復元された土器は，1個体しかなく遺物の出土量が少ない。KH－5とKH－6は，切り合い関係にあり，KH－5が新しく，KH－6が古い。覆土および床面から榎林式の土器が出土しており，住居跡の時期もその時期と思われる。またKH－5からは，残存状態の良好な炭化材が床面近くから多量に検出された。KH－5，6からさらに低い標高28.00mのところに3.6×3.2mの楕円形プランのKH－4がある。床面および覆土中から遺物が出土していないため時期は不明である。

榎林式

炭化材

沢部より南側には，13軒の住居跡がある。北寄りの標高28.50mのところには，隅丸方形のKH－9がある。時期の判明できる遺物が出土していないため時期は不明である。さらに南側の標高29.00～29.50mの広い平坦地には，7軒の住居跡がある。KH－10，11は，おおよそ4×3mの隅丸長方形のプランで住居跡の長軸上に2本の柱穴があるなど類似点がある。KH－11の床面とKH－10の覆土中より榎林式の土器が出土しているので，榎林式の住居跡と思われる。さらに南側にはKH－12がある。2.8×2.4mの隅丸方形のプランで，フラスコ状ピットKP－73の上に貼床をしてつくられている。住居跡はサイベ沢Ⅶ式の時期である。KH－12の東と南東には，KH－15，7がある。KH－15は，覆土中の遺物，周溝の存在より中期の時期と思われる。KH－7は，石組炉の存在から中期後半～末葉にかけての時期と思われる。さらに南側にはおおよそ10×6mの大型住居跡が2軒ある（KH－8，17）。2軒とも畑の耕作のため壁面が壊され，とくにKH－17は，床面の範囲と柱穴，炉跡を確認したのみである。2軒とも住居跡の規模，長軸方向が類似しており，時期はKH－8の床面よりサイベ沢Ⅶ式の土器が出土していることから，中期中葉と思われる。

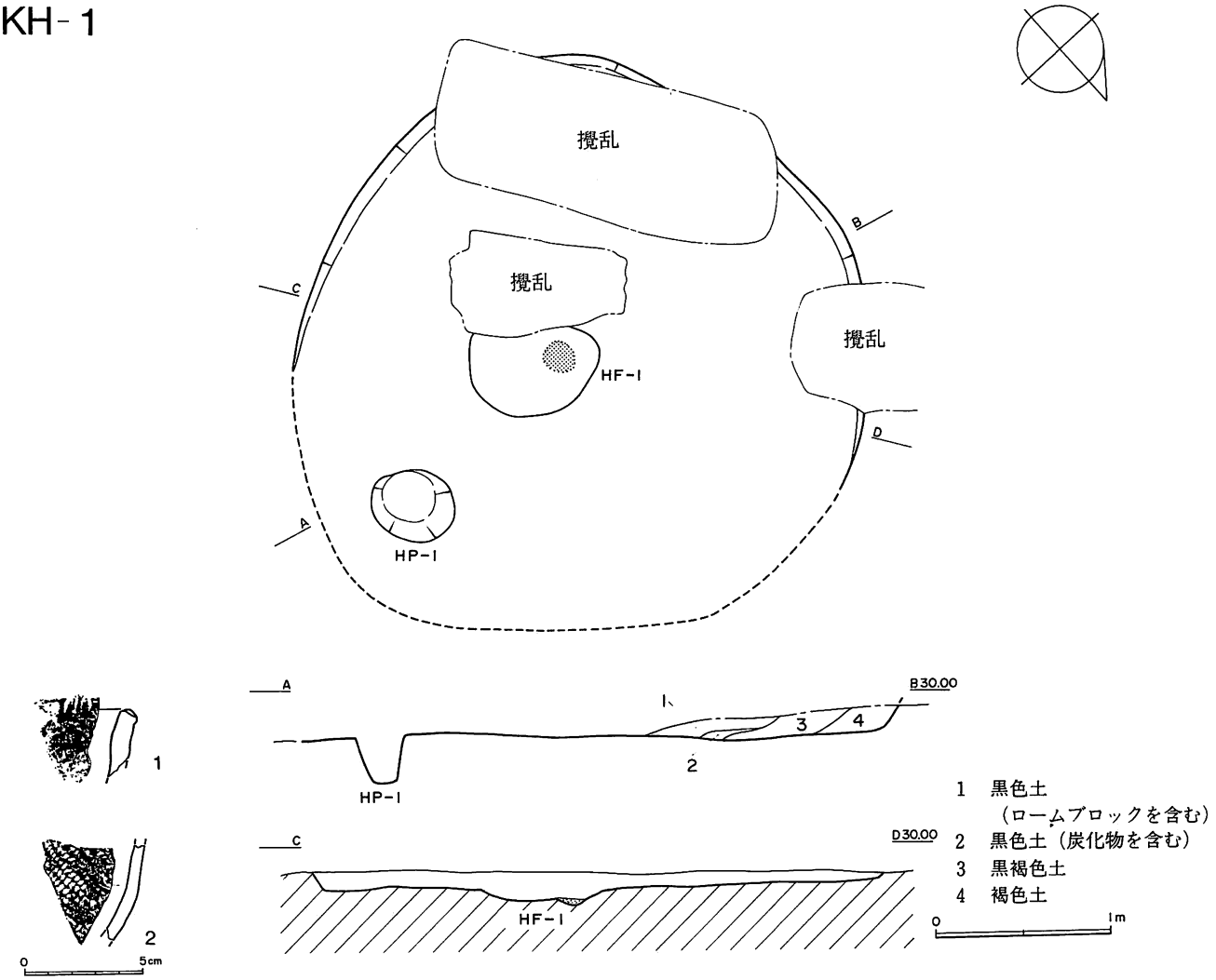
石組炉

KH－17，8の南側，標高28.00～29.00mの段丘の平坦地から斜面に変るところに，5軒の住居跡がある（KH－13，14，16，18，19）。KH－19は，平面形が五角形（7.6×6.7m）で，内側にベンチ構造をもつ住居跡である。時期は，床面出土の土器から，中期初頭（円筒上層a式相当）である。また，KH－19の覆土中からは多くの土器が廃棄された状態で出土しており，接合の結果21個体が復元された。KH－19は，北側をKH－16に，南側をKH－18によって切られている。KH－16，18はともに5×4mの隅丸長方形のプランで，床面および床面近くから出土した土器よりサイベ沢Ⅶ式の時期である。KH－16の床面からは残存状態のよい多量の炭化材が検出された。また覆土中からは，12個体の土器が復元された。

ベンチ構造

KH－16の東側の段丘縁辺部には，2軒の住居跡が切り合う状態で確認された（KH－13，14）。切り合い関係は，KH－14がKH－13を切っている。住居跡の時期は，KH－13が中期，KH－14が中期中葉（サイベ沢Ⅶ式）である。とくにKH－14の覆土中よりシャチを模倣したと思われる動物形土製品が一点出土した。ほかに，床面近くから多量の炭化材が，覆土

シャチ



図Ⅲ－2　住居跡(1)・KH－1，－1遺物

中からは14個体の土器が復元された。

以下，住居跡ごとに説明を加える。　（佐川俊一）

KH－1（図Ⅲ－2，図版4－1）

位置　C・D－41　　**規模**　3.26×3.24/3.21×3.12/0.11m

平面形　円形　　**床面積**　9.04m²

重複　なし。

確認・調査　発掘区の北側は，畑地やたばこ産業のグランド造成のため遺物包含層のⅡ層が削平されている。とくに西側はⅣ層上面まで削平され，ところどころにたばこ産業のフェンスの土台穴があいている。

壁　壁は時計回りに南東から北西にかけてわずかに残り（深さ13cm），それ以外の部分はⅣ層削平のため壊されている。

床　床面の一部はフェンスの土台穴により壊されている。壁の残っていない部分についてはローム面の汚れにより住居跡の範囲を判断した。

溝　なし。

柱穴　東部に1個検出されたのみである。深さは28cmである。

炉　中央部に75×(60)cmの楕円形の掘りこみ炉がある。

遺物出土状況　覆土中より土器片3点，フレイク1点が出土した。

遺物　1は，Ⅲ群A_3類の口縁部の破片である。口唇上には篦状工具による刻みがつけられている。外面は無文である。色調は赤褐色を呈し，胎土には小礫を含む。焼成は良好である。2はⅢ群A_3類の胴部破片である。RLの原体による斜行縄文が施されている。

時期　不明。　（佐川俊一）

ＫＨ－2（図Ⅲ－3，図版4－2）

位置　C－40　　**規模**　2.20×1.84/2.09×1.66/0.16m

平面形　楕円形　　**床面積**　2.69m²

重複　ＫＰ－10に切られる。

壁　全周とも立ち上がりは急である。

床　平坦でしまりがある。

溝　なし。

柱穴　なし。

炉　床面中央部より南東に焼土（HF－1）がある。

覆土　KH－1と同様上部が削平され，厚さ25cmしか残っていない。

炭化材　床面の北側⅔ほどに炭化材の小片が多く検出された。炭化材は樹種同定用のサンプルとして取り上げた。

遺物出土状況　床面からはめのう質頁岩のフレイクなどが出土している。これらは，後に述べる旧石器群の一部と考えられる。

旧石器群

遺物　1はめのう質頁岩製のスクレイパーである。2，3は長円形の礫である。使用した痕跡は特に認められないが床面より出土している。ハンマーとして利用されたものであろう。

時期　不明。　（佐川俊一）

ＫＨ－3（図Ⅲ－4～7，図版6・7）

位置　E・F－38・39　　**規模**　5.50×4.70/5.04×4.12/0.78m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　18.45m²

重複　なし。

確認・調査　第Ⅱ層下位でプランを確認した。掘り込み面はⅡ層中である。長軸方向とこれに直交するラインにセクションベルトを残し掘り下げた。第8層より上位の遺物は一括して取り上げ，これより下位の遺物は1点ずつ記録した。住居跡の長軸方向はN－35°－Wである。緩斜面に構築されている。

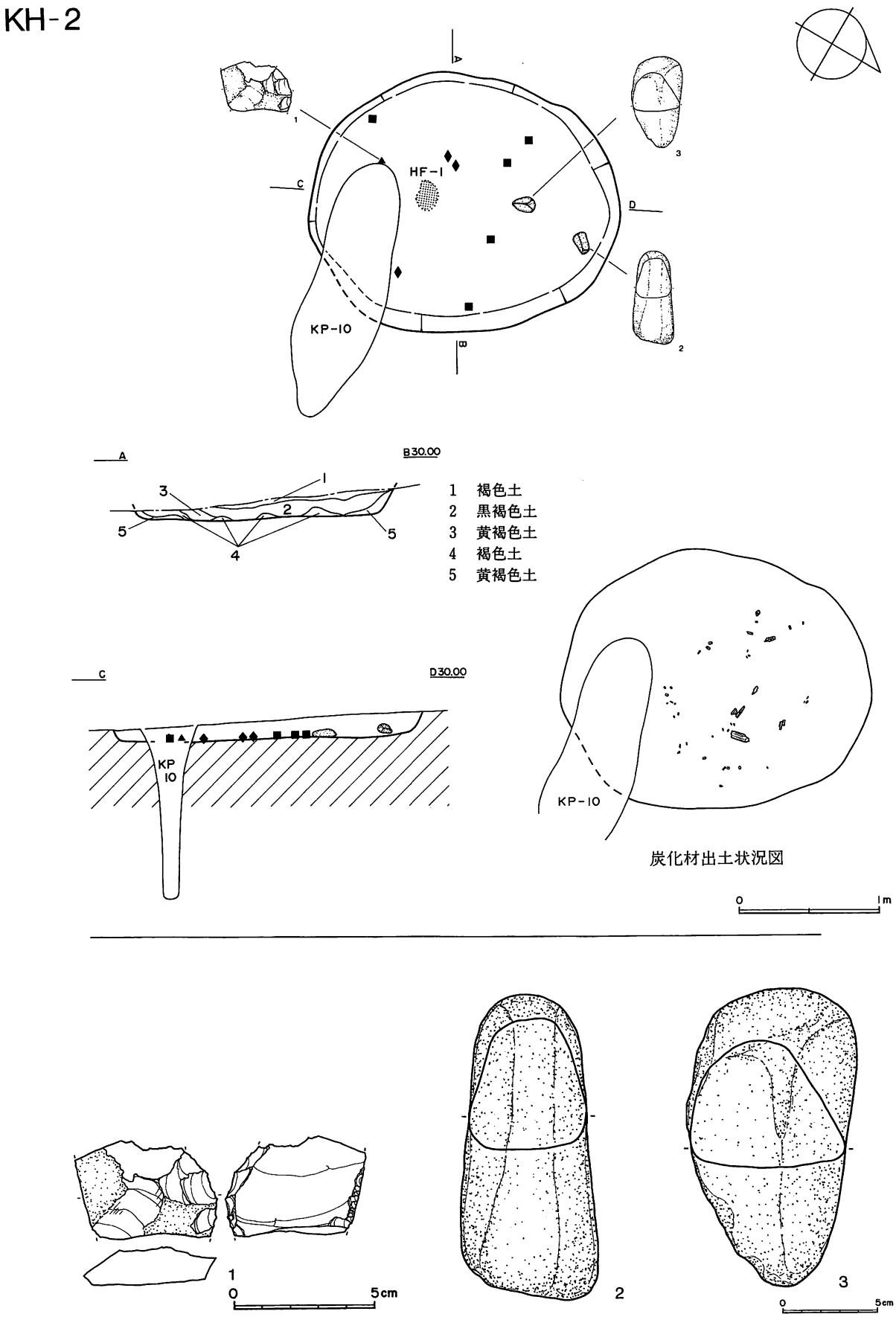
撹　乱

壁　東と南の壁面が近代の掘削により一部撹乱を受けている。他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。北壁と東壁は覆土との界面が明確であったが，西壁と南壁は色調が似ている。

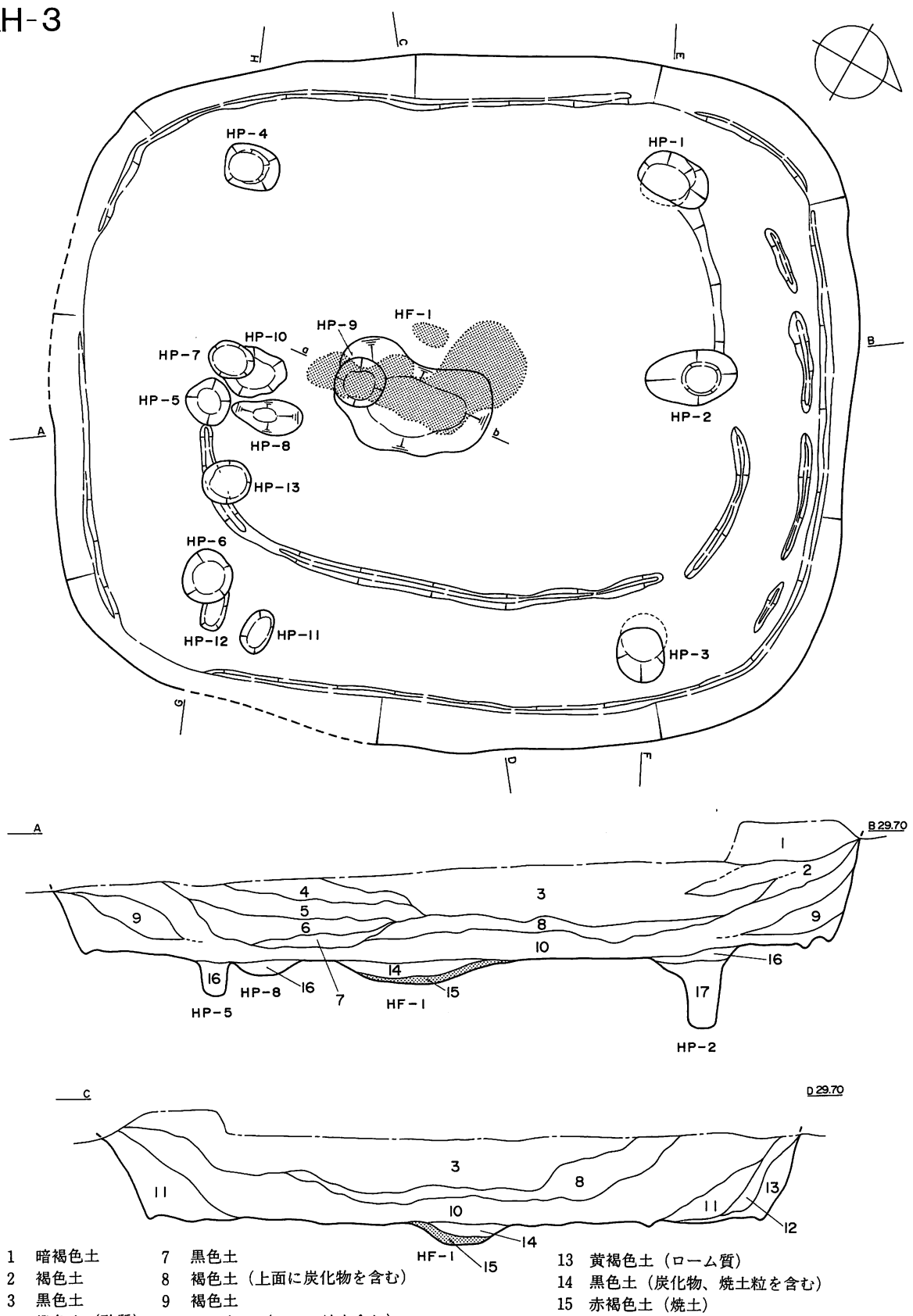
貼　床

床　砂質の黄色粘土を貼り，堅くしまっている。主柱穴の内側を繞る溝を界に，外側と内側では若干段差を有し，内側の方が低い。それぞれの面は水平に構築されている。中央には床面を掘り込んだ炉跡が，また南に偏して柱穴が集中する。

溝　壁際に沿って1本繞る。北壁部には，これに沿ってもう1本断続的に配される。さら



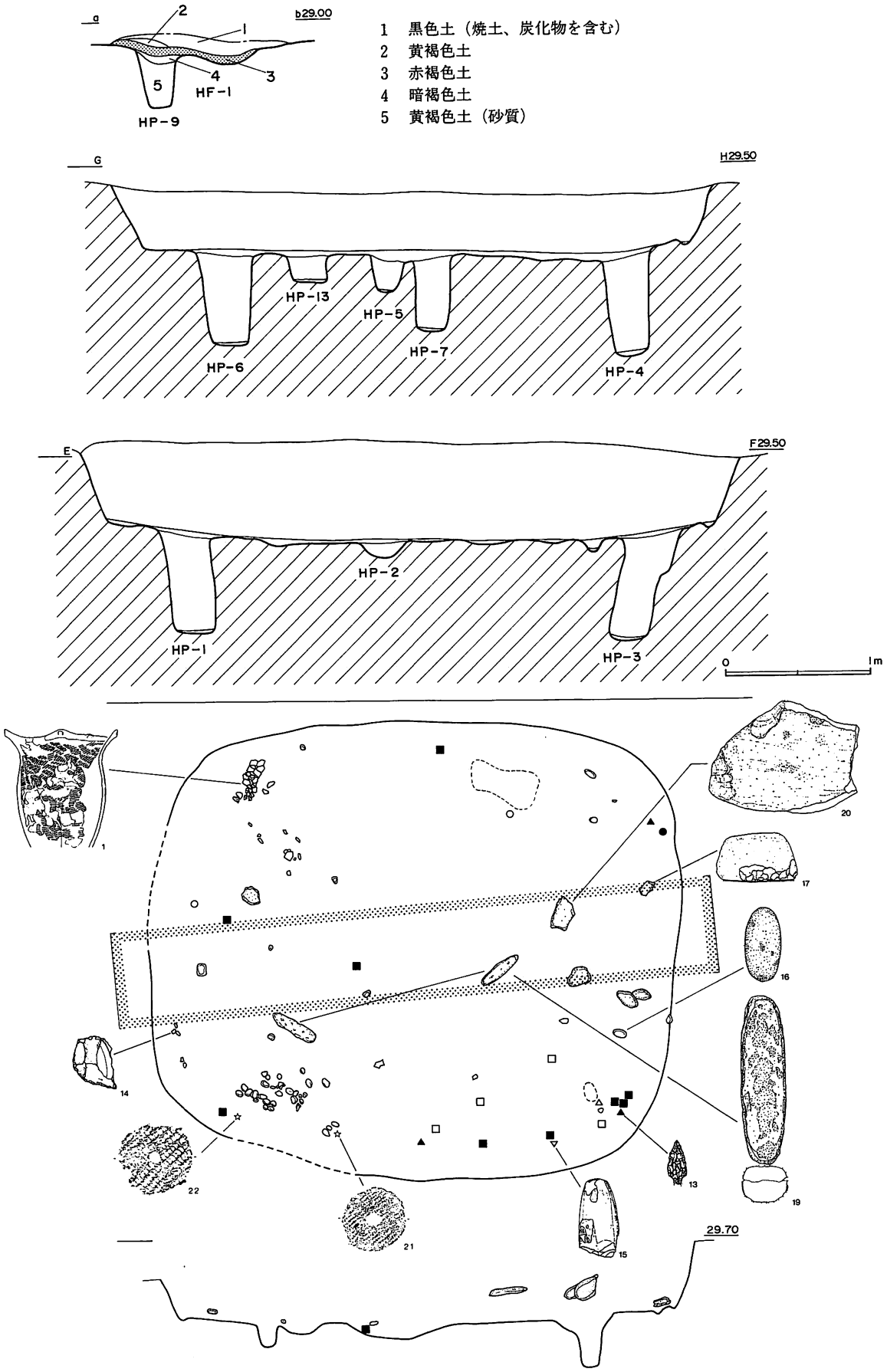
図Ⅲ－3　住居跡(2)・KH－2，－2遺物



1　暗褐色土
2　褐色土
3　黒色土
4　橙色土（砂質）
5　明褐色土
6　褐色土
7　黒色土
8　褐色土（上面に炭化物を含む）
9　褐色土
10　明褐色土（ローム粒を含む）
11　褐色土
12　明褐色土
13　黄褐色土（ローム質）
14　黒色土（炭化物、焼土粒を含む）
15　赤褐色土（焼土）
16　暗褐色土
17　褐色土（砂質）

図Ⅲ－4　住居跡(3)・KH－3

0　1m


a
b29.00
2
1
4
3
5
HF-1
HP-9
1　黒色土（焼土、炭化物を含む）
2　黄褐色土
3　赤褐色土
4　暗褐色土
5　黄褐色土（砂質）
G
H29.50
HP-13
HP-5
HP-7
HP-6
HP-4
E
F29.50
HP-2
HP-1
HP-3
0
1m
29.70

図Ⅲ－5　住居跡(4)・KH－3

に，床面の段差部，すなわち主柱穴 HP－1～3・5・6をつなぐ様，弧状に溝が配される。

柱穴　主柱穴は4ないし6本と考えられる。このうち HP－1・3・4・6は，径が30～40cm で床面からの深さが70～80cm 程あり，HP－1・3は互いに内側に傾いて掘り込まれる。また HP－2・7は径が25cm 程あり，床面からの深さは50cm である。その他の HP－5・8・10・13の柱穴状の窪みはいずれも浅い。HP－11～13は貼床の下位より検出され，これらは KH－3の構築以前にあった住居跡の柱穴の可能性がある。

炉　中央のやや南に偏し，16cm 程の窪みに焼土が堆積する。焼土と窪みの範囲は一致せず，焼土は窪みの外に広がる。HP－9は炉内にあり，焼土を被る。

覆土　8層上面には炭化物が堆積しており，このときに住居跡の窪みが何らかの形で利用されたことを示している。また，主だった石器類はこの面より検出された。

遺物出土状況　覆土からは，8層の上位から多く出土した。8層の下位及び床面からの出土遺物は少ない。覆土内の遺物総数は828点でこのうち土器は48%，石器類は52%である。

遺物　復元可能となった土器は1個体である。1は大きく開く口縁で，胴が膨らむ。口縁は粘土ひもを貼り肥厚させ，四方に配された山形突起には渦巻文を省略した圧痕を有する。Ⅲ群B類で榎林式と思われる。

拓影の土器は，早期・前期もあるが，覆土内より出土した土器は中期後半が主体である。

石器は，13の石鏃が床面からで，他は覆土中より出土した。19は器面長軸方向に擦痕が

焼　石　認められる。なお，床面南東コーナーに焼石が集中して認められ，これに伴って円盤状土製品が2点（21・22）検出された。焼石は，26点検出された。総重量は，4,050g あり平均156g で，平均した大きさは，長さ6.3cm，幅4.6cm である。表面には，炭化物が付着している。

時期　縄文時代中期中葉（榎林式）と思われる。　（前田正憲）

KH－4（図Ⅲ－8，図版5－1・2）

位置　F・G－35・36　　**規模**　3.66×3.20/3.34×2.94/0.4m

平面形　楕円形　　**床面積**　7.77m²

重複　KP－38に切られる。

KP－38　**確認・調査**　Ⅳ層上面で平面形を確認した。この段階で KP－38との新旧関係も判明した。KP－38完掘後，長軸方向にセクションベルトを設定し調査を進めた。

壁　住居跡が斜面部に位置するため，南壁は5 cm 程しか確認されなかった。

床　礫混じりのⅣ層中にある。平坦。

溝　なし。

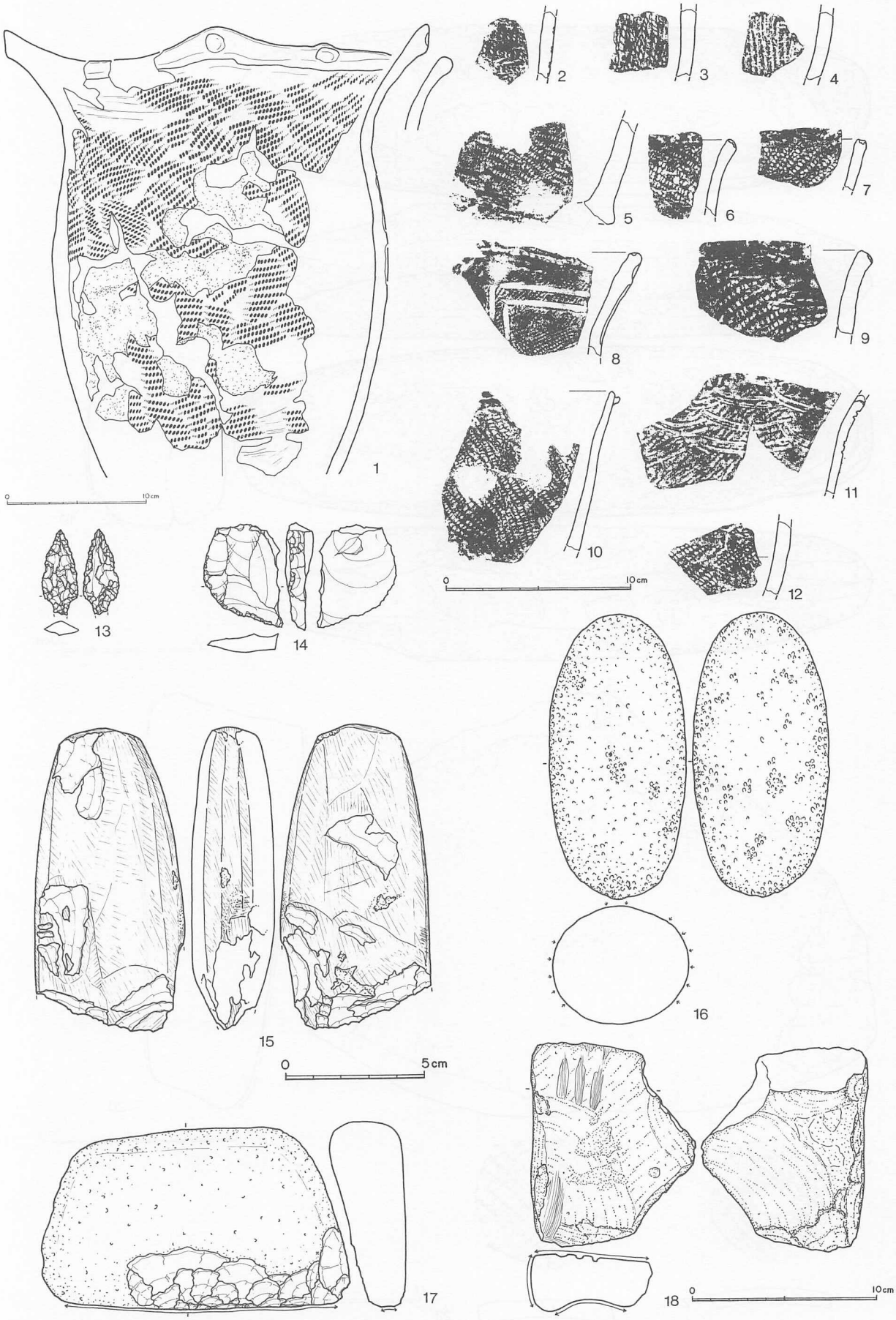
柱穴　付属ピットは3個検出された。このうち HP－1，3は深さがそれぞれ72cm，74cm あり，住居跡の長軸上に位置している。この2個が柱穴と考えられる。

炉　なし。

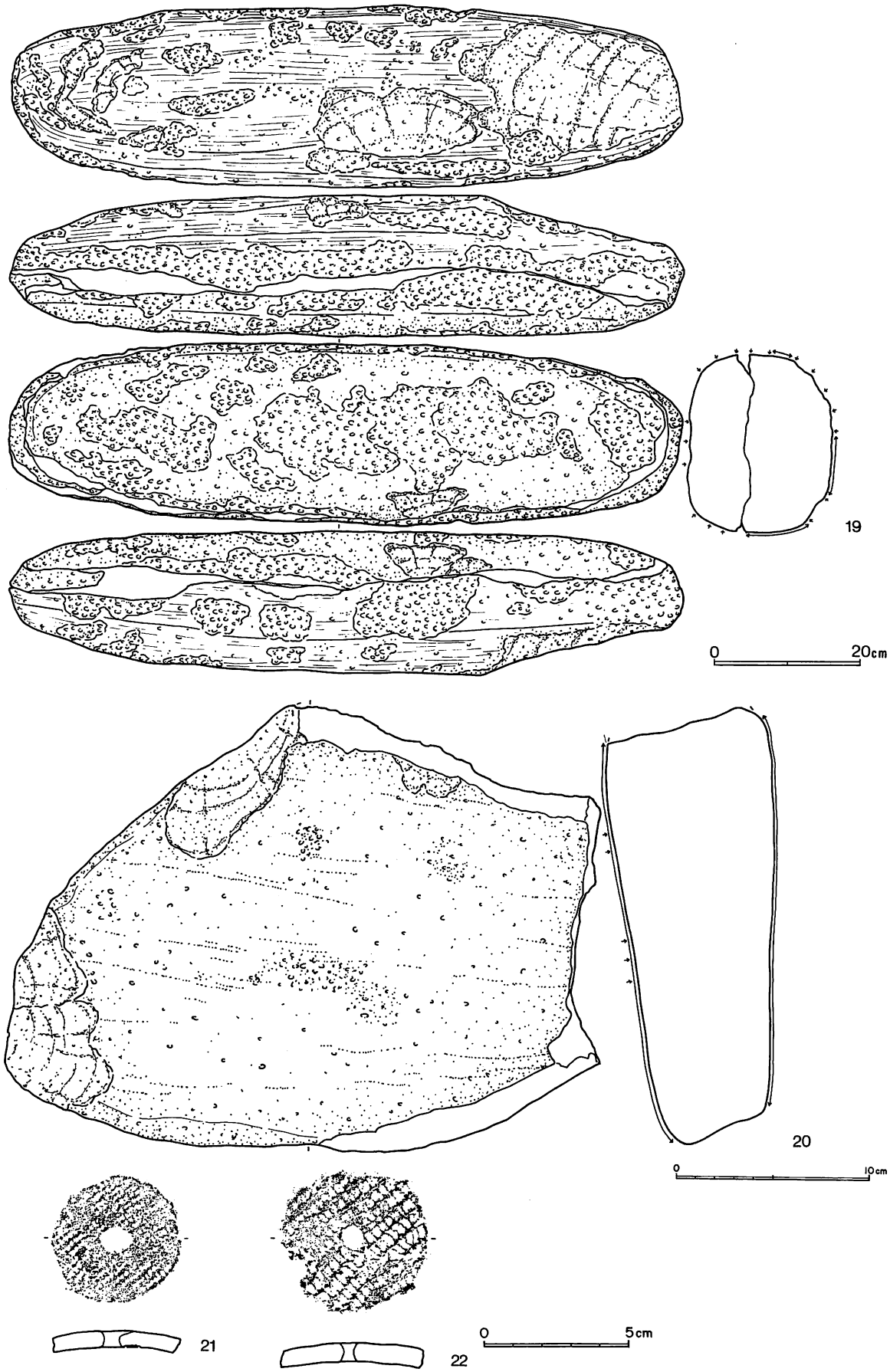
遺物出土状況　覆土2層から37点出土した。すべて石器である。

遺物　1はスクレイパー。縦長剝片を素材とし湾曲した刃部をもつもの。頁岩製。

時期　床面，覆土中より時期のわかる遺物は出土していないので不明である。　（石川朗）

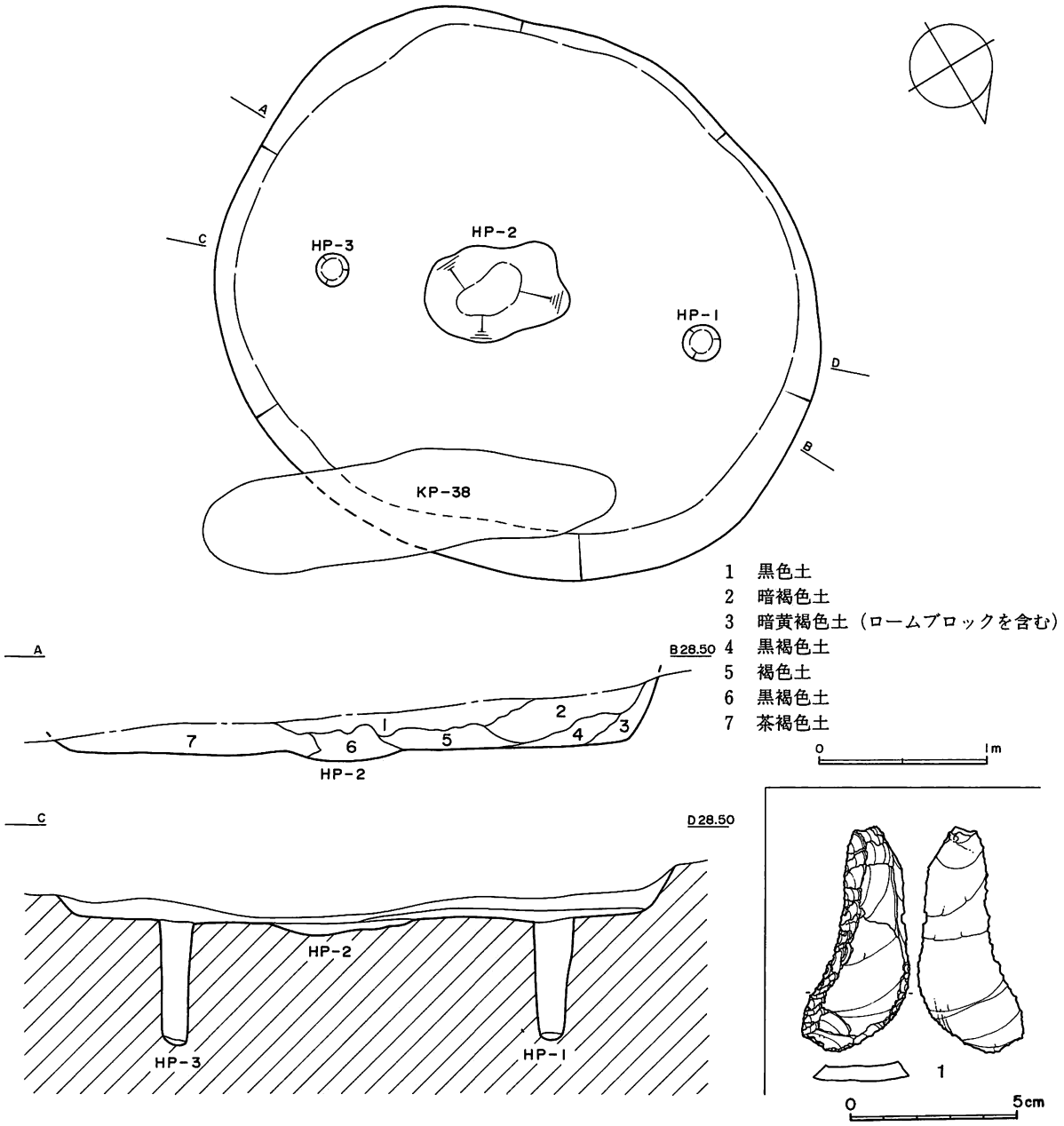


図Ⅲ－6　住居跡(5)・KH－3遺物



図Ⅲ－7　住居跡(6)・KH－3遺物

KH-4



図Ⅲ－8　住居跡(7)・KH－4，－4遺物

KH－5（図Ⅲ－9～11，図版8・9）

位置　G－37　　**規模**　3.23×2.94/3.01×2.93/0.94m

平面形　隅丸方形　　**床面積**　6.98m²

重複　KH－6を切る。

確認・調査　Ⅳ層上面で，長軸4 m，短軸3 mの隅丸長方形の住居跡が数軒切り合っているようなプランで確認された。確認面における覆土の状態は，中央部分に3×2 mの楕円形で黄褐色ロームが，その囲りに0.5～1.0mの幅で黒色土が，一番外側は褐色土がめぐっていた。遺構の切り合いが予想されたので，住居跡と思われるプランの長軸とそれに直交するように，十字にトレンチを設定し調査を開始した。プランの端の方は深さ20cmほどで

床面が検出されたが，中央部の方ではなかなか検出されないため，トレンチに沿ってセクションベルトを残し面的に掘り下げた。その結果，幅60cmのベンチが周囲をめぐり，床面までの深さが94cmと深い住居跡であると思われた。ところが，その後の調査で，ベンチ状と思われたものは土層断面の観察から別の住居跡（KH－6）であることが判明，KH－5とKH－6は切り合い関係にあることがわかった。新旧関係はKH－5の方が新しい。

KH－6

遺物は小片をのぞき位置，高さを記録し，1点ずつ取り上げた。炭化材は実測後，樹種同定のため番号をつけサンプルを取り上げた。

壁　全周とも急に立ち上がる。

床　床面は黄褐色砂質土の上につくられ，しまりはない。

溝　なし。

柱穴　住居跡の付属ピットは全部で11個検出された。HP－10・11は床面精査の段階で確認された。ピットの深さは10cm前後の浅いものと，40cm前後の深いものの2種類に分けられる。HP－1，2，3，10(9)，4(5，6)の5個が主柱穴と思われる。

炉　床面の中央部に黄褐色砂質土が焼けた状態で確認された。焼土の厚さは，1～2cmで遺物は出土していない。

覆土　1層は汚れたロームでほかの遺構の掘り上げ土であろうか。層厚40cm。2層は褐色土で焼土と思われる。径35cmの広がりで，その周囲に拳大より大きめの礫を2個確認した。ほかに遺物は出土していない。3層は自然堆積層である。

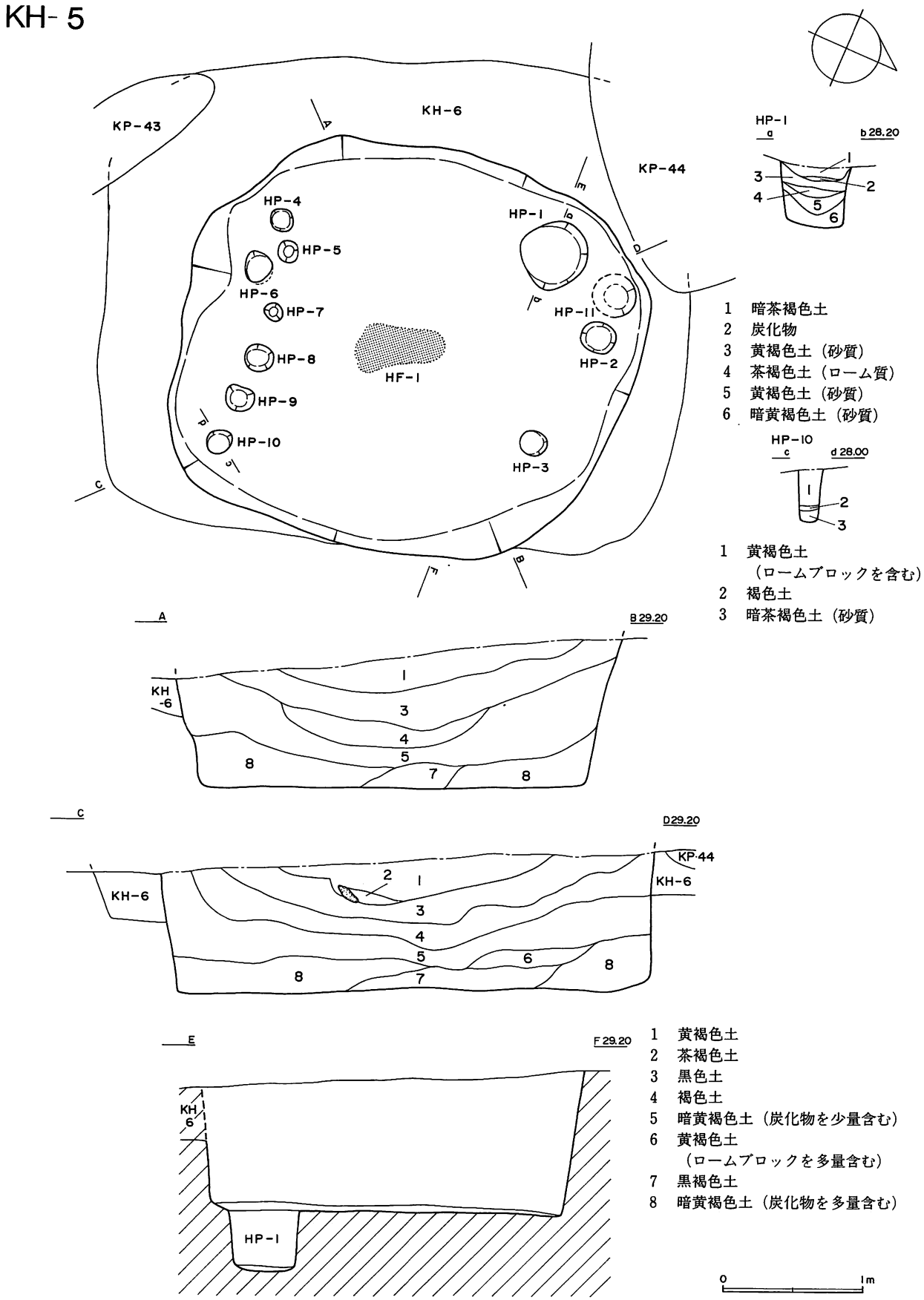
炭化材　床面の上5cmより検出された。床面の北東側をのぞいて全体に分布している。全体的には求心状に分布しているが，北西～南西の壁際では丸太状の炭化材が壁に貼り付いた状態で検出された。炭化材の残存状態は良好である。なお，遺構平面図中のセクションポイントA－B，C－Dにそって開けたトレンチからも炭化材は出土したが，発掘途中で取り上げたため炭化材の出土状況図ではぬけた状態となっている。

出土状況

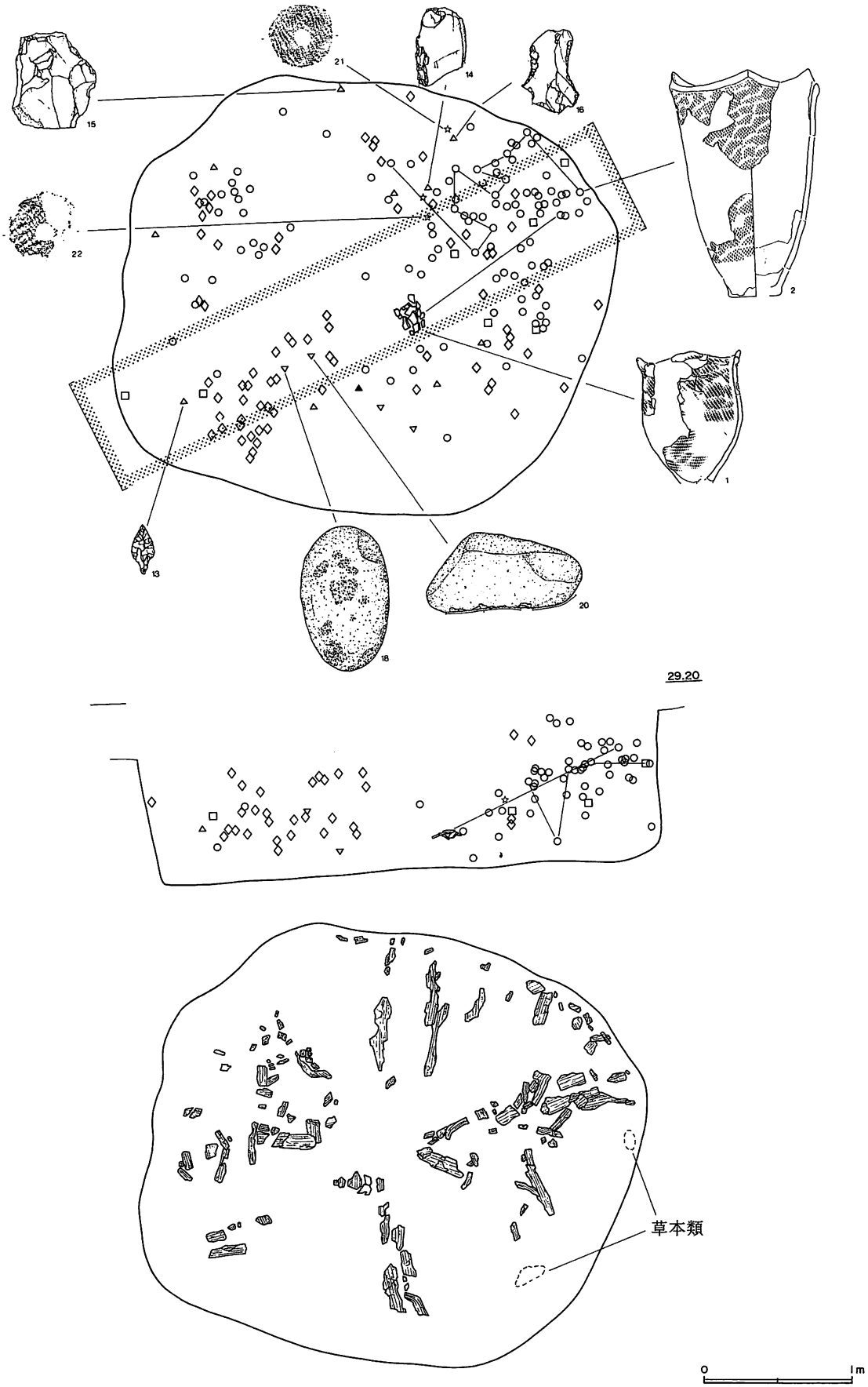
遺物出土状況　土器654点，石器等256点，土製品4点，計914点の遺物が出土した。このうち床面出土のものはスクレイパー1点，フレイク1点のみである。遺物の出土状況は，覆土中では散在している。遺物別では土器が北西側に，礫が東側にかたよって分布する。図Ⅲ－11－1の土器はプラン中央部の床上30cmから口縁部が比較的まとまった状態で出土した。

遺物　土器はⅢ群B類の榎林式のものが多い。復元できた土器は2個体である。1は，ゆるい山形の突起が4か所にある。胴部が若干ふくらみ，底部が急にすぼまる瓶形の土器である。地文は，RLの原体による斜行縄文で，口縁上部では斜行するが，胴部から底部にかけては横走する。施文は，浅いためかところどころ消えている。胎土は，ザラザラとしている。2は，先の尖った山形突起が口縁部に3か所ある。口唇部は，肥厚しその断面形は，切り出し形である。底部は若干張り出す。地文は，RLRの原体による複節の斜行縄文である。器面の調整は，内外面とも良好でとくに底部外面は，底部より5cm上までよく磨かれている。3は，Ⅰ群B_4類の胴部破片。4は，Ⅲ群B類の胴部破片である。厚みがあり，底部に近い部位と思われる。5～9，11はⅢ群B類（榎林式）の土器と思われる。5は口縁部の破片で，2本の横走する沈線文と口唇に1条の縄線が施文される。7の口縁上部にも1条の縄線文がみられる。9は，山形の突起部で，RLの原体による斜行縄文が口縁の上部まで施文されている。

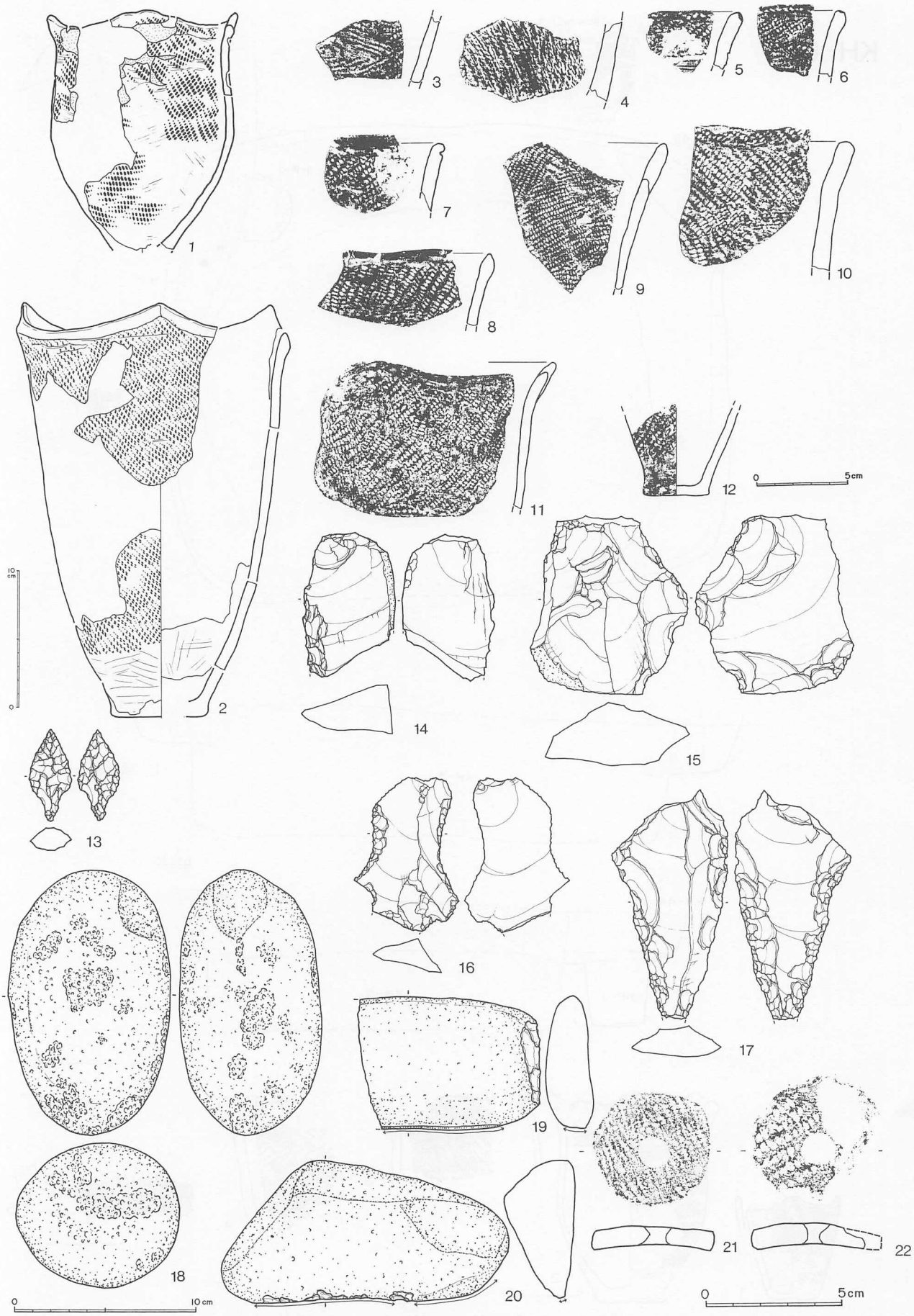
榎林式


KH-5
KH-6
KP-43
KP-44
HP-1
HP-2
HP-3
HP-4
HP-5
HP-6
HP-7
HP-8
HP-9
HP-10
HP-11
HF-1
HP-1
a
b 28.20
1 暗茶褐色土
2 炭化物
3 黄褐色土（砂質）
4 茶褐色土（ローム質）
5 黄褐色土（砂質）
6 暗黄褐色土（砂質）
HP-10
c
d 28.00
1 黄褐色土
（ロームブロックを含む）
2 褐色土
3 暗茶褐色土（砂質）
A
B 29.20
KH-6
C
D 29.20
KP-44
KH-6
E
F 29.20
KH-6
HP-1
1 黄褐色土
2 茶褐色土
3 黒色土
4 褐色土
5 暗黄褐色土（炭化物を少量含む）
6 黄褐色土
（ロームブロックを多量含む）
7 黒褐色土
8 暗黄褐色土（炭化物を多量含む）
0
1m

図Ⅲ－9　住居跡(8)・KH－5

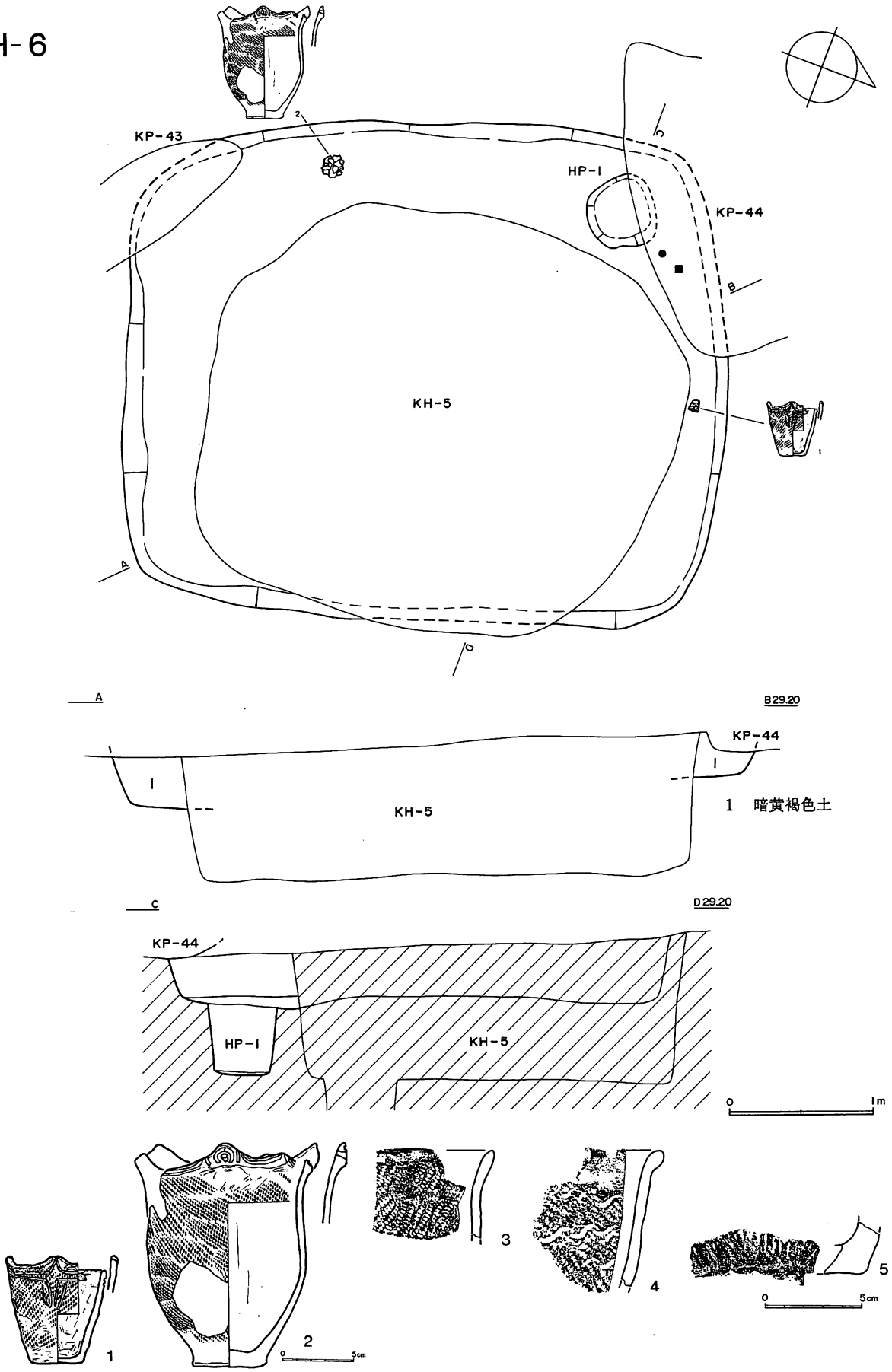


図Ⅲ－10　住居跡(9)・KH－5



図Ⅲ－11　住居跡(10)・KH－5遺物

KH-6



図Ⅲ－12　住居跡(11)・KH－6，－6遺物

石器は，13が石鏃，14～17がスクレイパー，18がたたき石，19・20はすり石である。20をのぞいて，いずれも覆土の上部から出土している。

円盤状土製品

21，22は円盤状土製品である。いずれも胎土の特徴からⅢ群Ｂ類（榎林式）の土器片を利用して作られたと思われる。KH－５からは，このほかに円盤状土製品が，２点出土している。いずれも覆土出土のもので，１点は径５cmで，中央に孔はあけられていない。もう１点は，径３cmで中央に孔があけられているが，全体の半分ほどしか残存しない。

時期　床面近くから出土した土器（図Ⅲ－11－１）から，縄文時代中期中葉（榎林式）の頃と思われる。なお、床面近くより検出された炭化材の^{14}C年代測定の結果は，3,950±60y.B.P.(KSU－1653）である。

（佐川俊一）

ＫＨ－６（図Ⅲ－12，図版８・９）

位置　Ｆ－37，Ｇ－36・37　　**規模**　4.21×3.44/4.02×3.30/0.38m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　12.35m²

重複　KH－５，KP－43・44に切られる。

壁　北西および南の壁の一部が，KP－43･44によって壊されている。そのほかは全周とも急に立ち上がる。

床　黄褐色ローム中につくられ，よくしまっている。

溝　なし。

柱穴　床面の西隅より１個検出されたのみである。柱穴については，さらに床面を精査したがこれ以上は検出できなかった。

ブロック状

覆土　覆土は１層のみである。暗黄褐色でよくしまっており，ところどころブロック状である。KH－５の覆土とは明らかに異なる。

遺物出土状況　床面より２個体分の土器が出土している。北西の床面より小さい完形土器（図Ⅲ－12－１）が横になった状態で，南の床面より図Ⅲ－12－２の土器が横につぶれた状態で出土した（図版８－４・５）。

遺物　１は，Ⅲ群Ｂ類の土器で口縁部に２個の山形突起がある。突起は，沈線文の構成が４単位であることから，本来は４か所にあったと思われる。地文は，LRの原体による斜行縄文である。内面調整及び焼成は良好である。２はⅢ群Ｂ類（榎林式）の土器である。突起は，円形の孔のあいた山形突起とそのすぐ右隣にそれより小さい突起の２個一組のものが，３か所にある。口縁および，大きな突起の円形の孔の周囲に一条の沈線文がある。内面の調整は，底部近くまでよく磨かれ良好である。５は，Ⅱ群Ｂ類（円筒下層c式相当）の底部破片である。地文はRLの撚糸文で，胎土中には繊維の混入及び細砂礫の混入が認められる。

榎林式

時期　床面出土の土器（図Ⅲ－12－２）から，縄文時代中期中葉（榎林式）である。

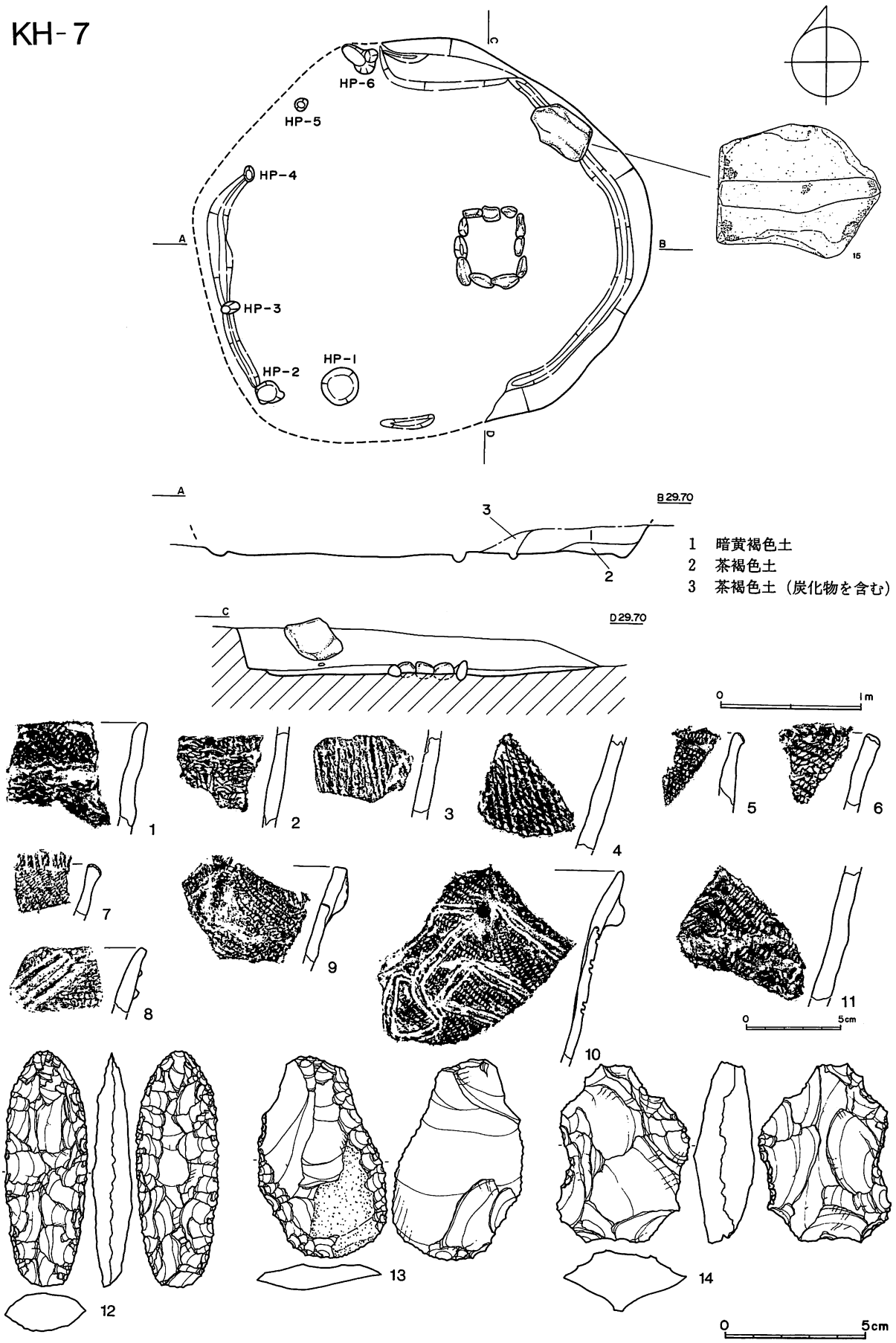
（佐川俊一）

ＫＨ－７（図Ⅲ－13・14，図版10－１）

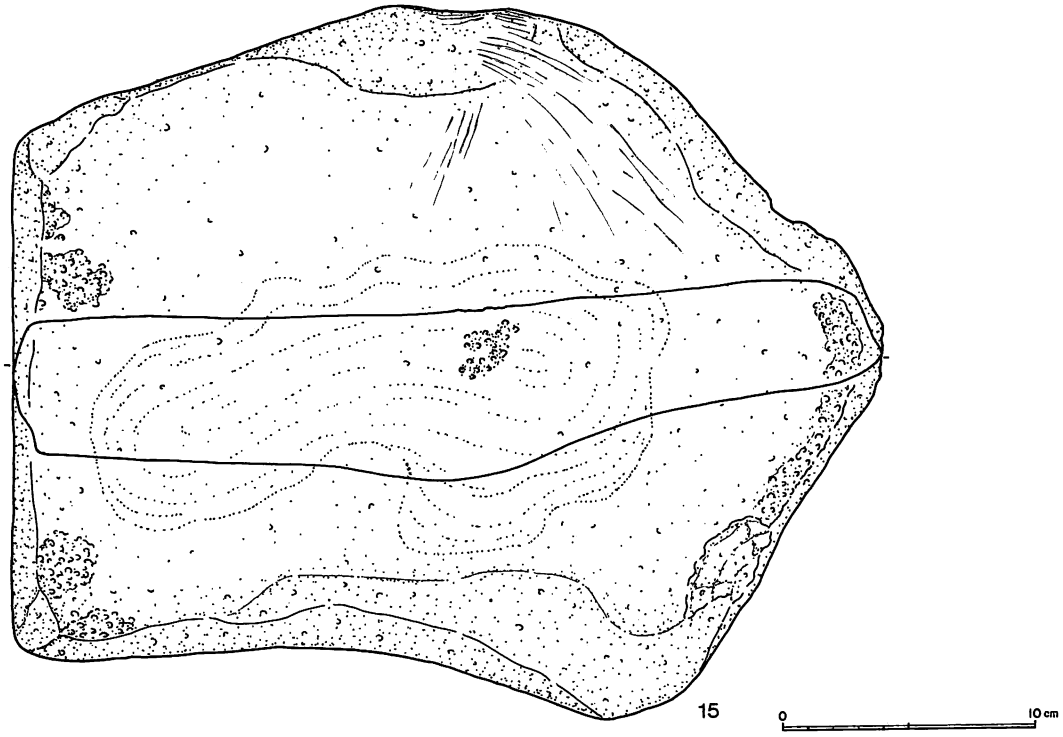
位置　Ｇ－15・16　　**規模**　3.28×2.83/3.04×2.64/0.34m

平面形　多角形　　**床面積**　5.46m²

重複　なし。



図Ⅲ－13　住居跡(12)・KH－7，－7遺物



図Ⅲ－14　住居跡⒀・KH－7遺物

壁　北から南東側の壁は残存するが，ほかは削平されてない。残存部の壁の立ち上がりは急である。

床　Ⅳ層中につくられている。西側は，壁面が壊されているが床面は残存する。

溝　東および西の壁際に一条の溝が認められた。

柱穴　南西壁より内側に深さ11cmのHP－1が検出された。

炉　床面中央部よりやや東寄りに60×50cmの方形の石組炉がある。炉を囲む石は全部で11個あったと思われるが，そのうち西側の2個は抜かれて現存しない。石はすべて上半部が焼け赤色化し，表面には黒色の有機物が付着している。　**石組炉**

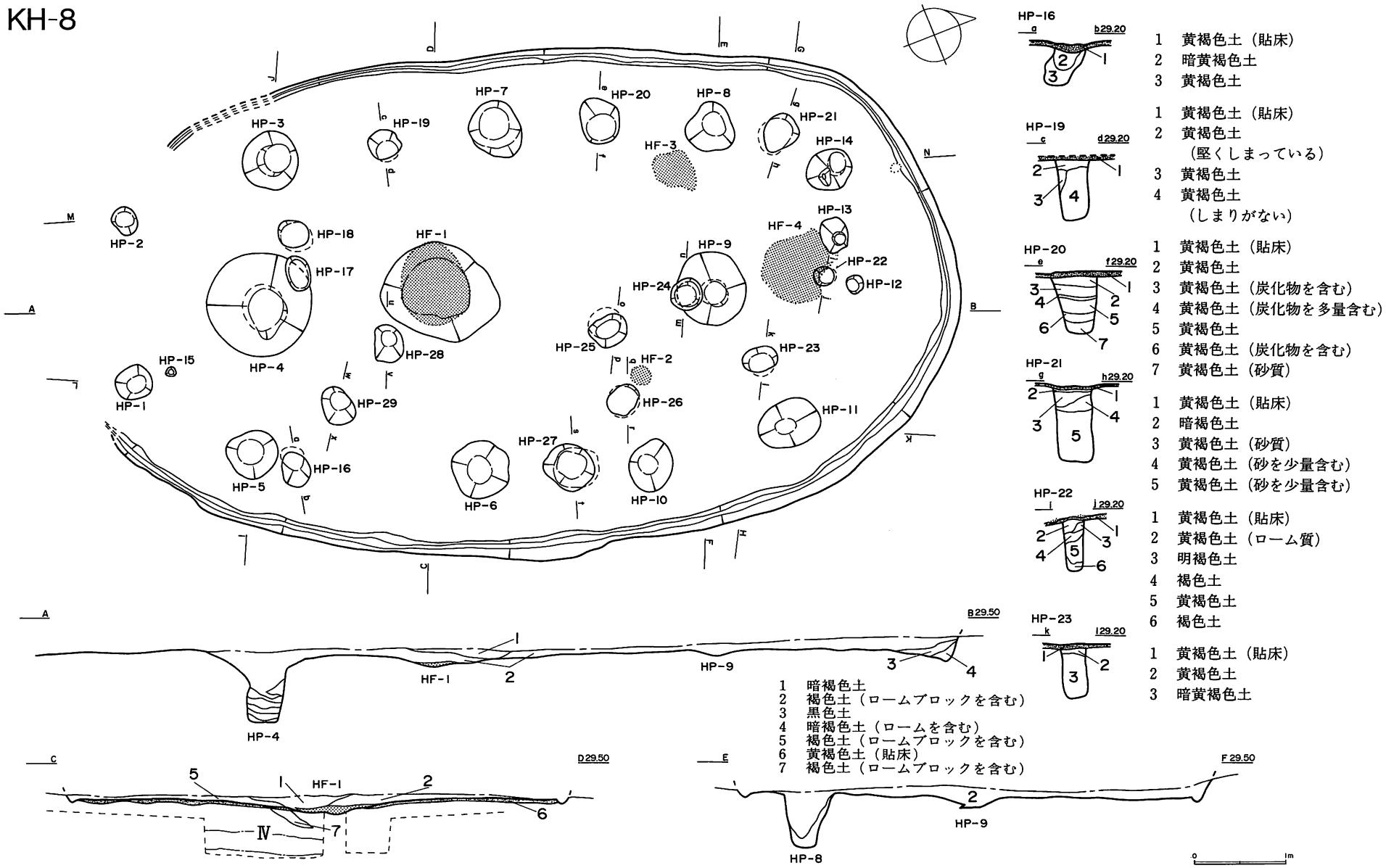
覆土　石組炉中の土である覆土3層には炭化物が含まれるほかは何も検出されていない。

遺物出土状況　覆土中より土器79点，石器等が18点出土している。床面出土のものは石組炉などの礫を含め19点である。北西の壁際からは大きな石皿が出土している。

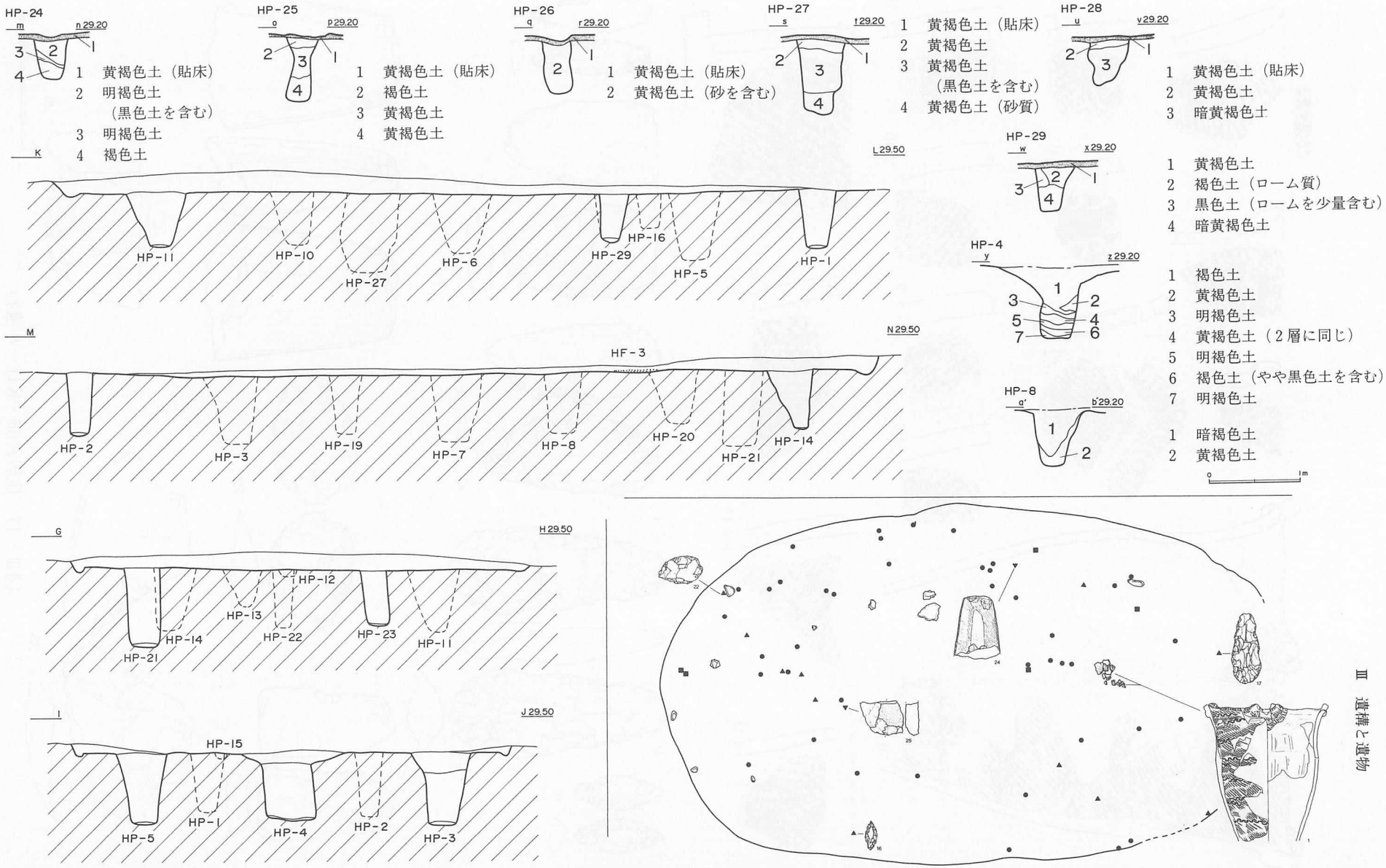
遺物　1～4は，Ⅱ群B類（円筒下層c式相当）の土器片である。2，3は，色調・胎土の特徴から同一個体のものと思われる。色調は，表面が茶褐色を呈する。胎土中には繊維の混入および砂粒の混入が多く認められる。5～10は，Ⅲ群A_3類の口縁部破片。11は，同じくⅢ群A_3類の胴部破片である。8は，横走するRLの原体による斜行縄文の上に断面が三角形に近い2本一組の貼付帯が斜めに施されている。11はRLの結束第二種斜行縄文が施された，やや厚みのある胴部の破片である。12は，槍先・ナイフ。13・14は，スクレイパー。15は，36×36cmの大きさの偏平で大型の台石・石皿である。使用面は一面のみである。　**台石・石皿**

時期　床面出土の遺物がないものの，石組炉の存在から縄文時代中期後半～末頃と思われる。

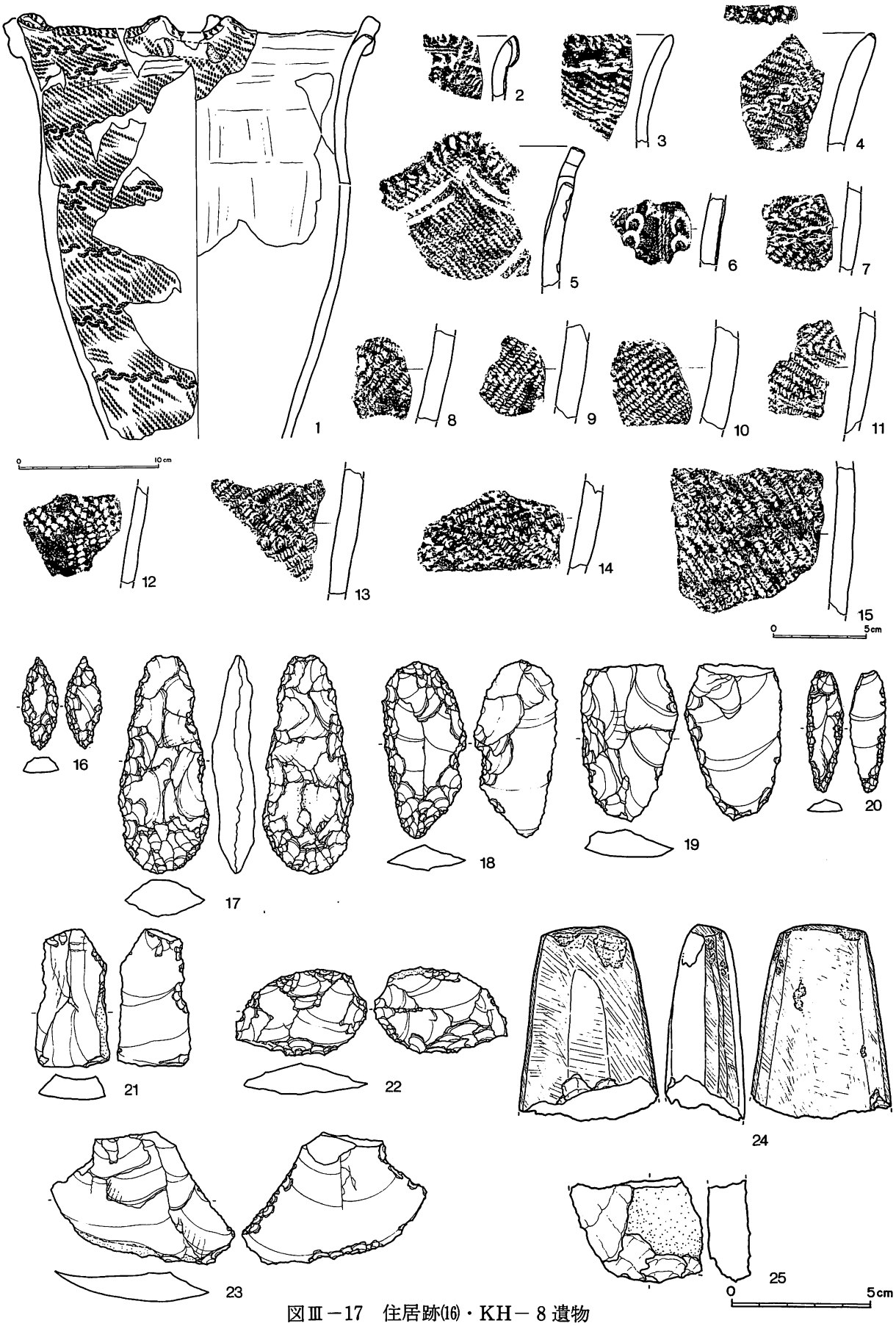
（佐川俊一）



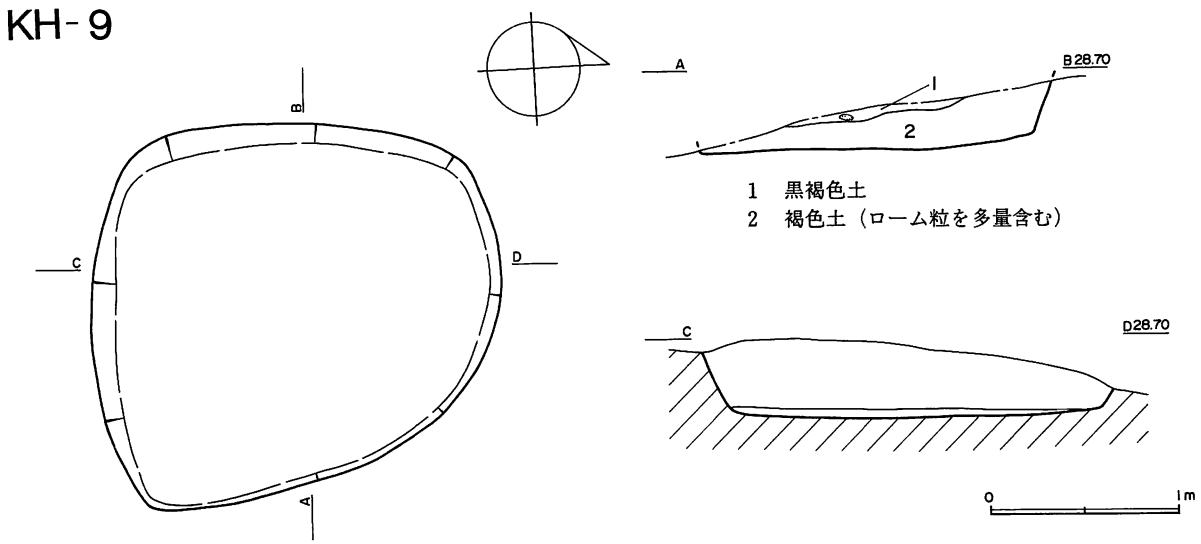
図Ⅲ－15　住居跡(14)・KH－8



図Ⅲ－16　住居跡⒂・KH－8



図Ⅲ－17　住居跡⑯・KH－8遺物



図Ⅲ－18　住居跡(17)・KH－9

KH－8（図Ⅲ－15～17，図版11）

位置　F・G－12～14，H－13・14　**規模**　(9.70)×5.66/(9.50)×5.20/0.14m

平面形　楕円形　**床面積**　37.82m²

重複　なし。

確認・調査　耕作土を剥いだ段階で平面形を確認した。この地区は，第Ⅲ層上面を近代の削平によって消失している。長軸方向と，これに直交する2本のセクションベルトを残し掘り下げた，貼床下位まで調査した。遺物はすべて1点ずつ記録した。住居跡の長軸方向は，N－25°－Eである。

壁　南西端は，床面まで削平されている。他は壁が若干残されており，ほぼ垂直に立ち上がる。覆土と壁の界面は明確である。

床　黄色粘土を貼り，堅くしまっている。床面は平坦に構築され，3か所に炉跡がある。　貼　床
貼床の厚さは5～10cm程あり，地山は砂質のロームである。

溝　壁際全周を繞る溝が1本認められた。

柱穴　貼床上から掘り込まれた柱穴のうち，HP－12・13・15を除く12個がKH－8に直接関わる柱穴と思われる。なお，HP－9は貼床面より約40cm掘り込まれている。貼床下位より検出された柱穴(HP－16～29)は平均して，掘り込みが浅く，これらの柱穴は，KH－8の構築以前にあった住居跡の柱穴と思われる。

炉　HF－2・3・4は地床炉で，HF－1は炉底が窪んでいる。

覆土　最下位が残存する。

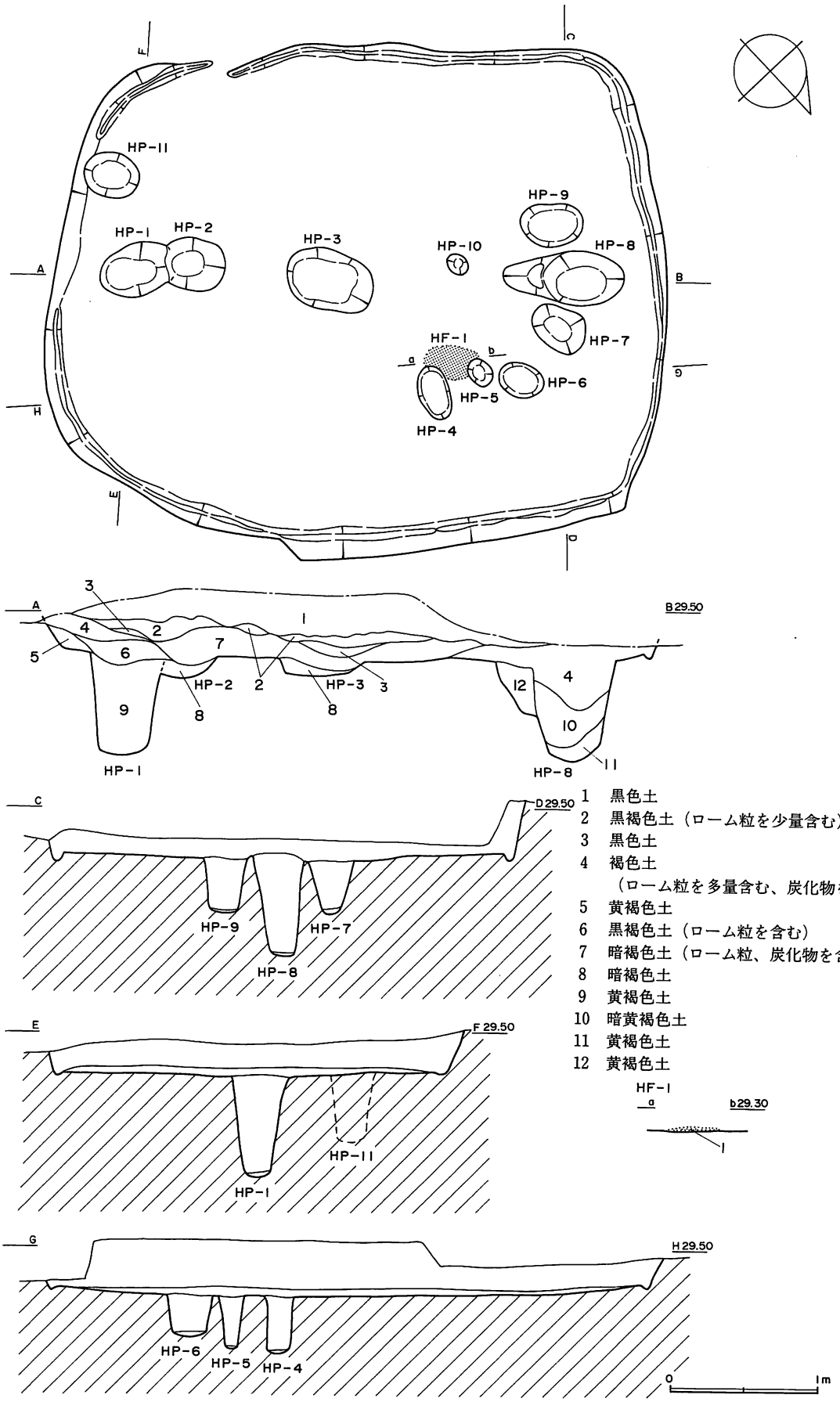
遺物出土状況　床面からの出土遺物は少ない。住居跡から出土した遺物総点数は230点で、このうち土器75%，石器等は25%である。

遺物　復元可能となった土器は1個体である。1は，胴部がやや膨らみ，口縁から若干開き平縁である。口唇には連続した縦方向の撚糸圧痕を付し，2個一組の突起を四方に配す。突起下位には，横位に粘土帯を貼付する。Ⅲ群A_3類でサイベ沢Ⅶ式と思われる。　サイベ沢Ⅶ式

拓影の土器は，すべてⅢ群A_3類の時期である。

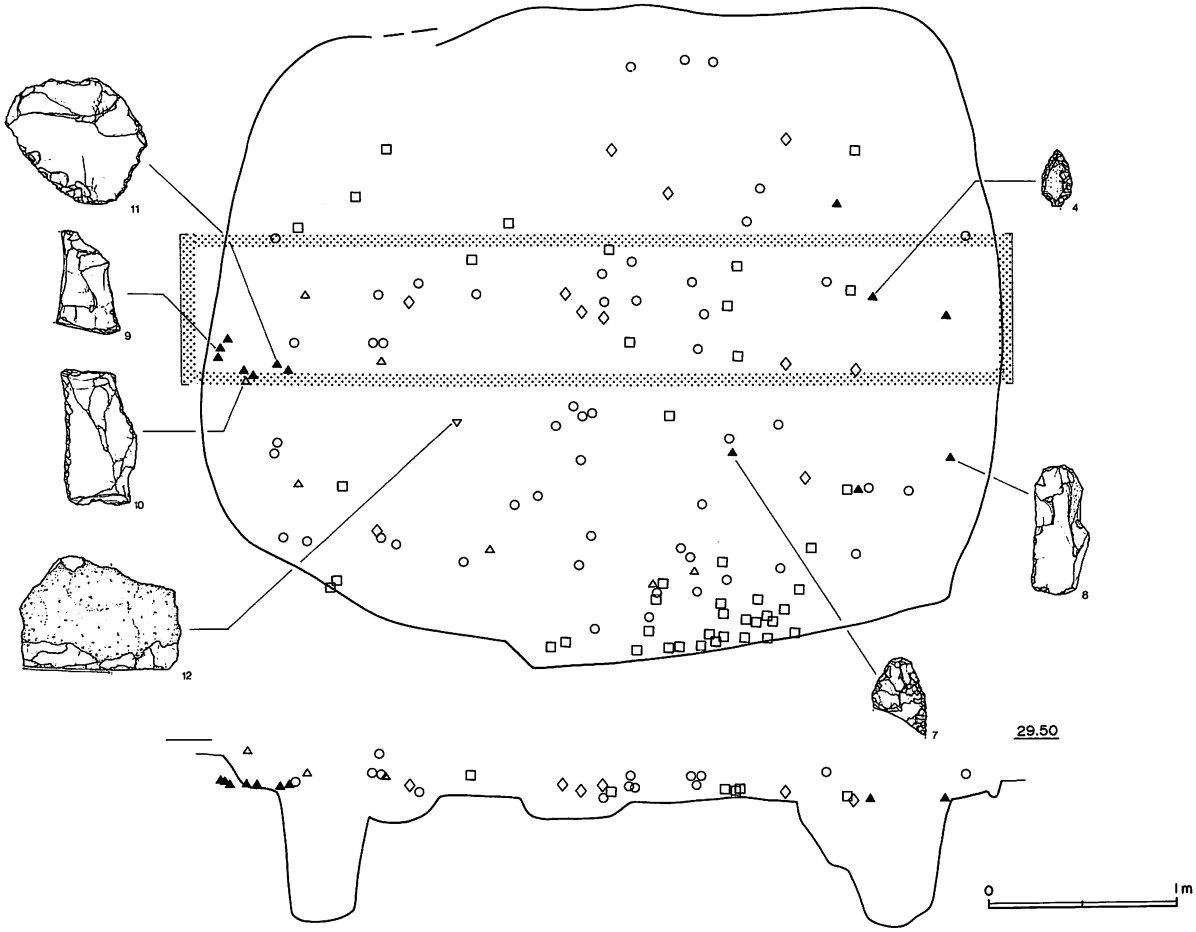
石器は，16の石鏃が貼床である黄色粘土中より検出された。17・22は両面加工のスクレ

KH-10



1 黒色土
2 黒褐色土（ローム粒を少量含む）
3 黒色土
4 褐色土
（ローム粒を多量含む、炭化物を含む）
5 黄褐色土
6 黒褐色土（ローム粒を含む）
7 暗褐色土（ローム粒、炭化物を含む）
8 暗褐色土
9 黄褐色土
10 暗黄褐色土
11 黄褐色土
12 黄褐色土

図Ⅲ－19　住居跡(18)・KH－10



図Ⅲ－20　住居跡⑲・KH－10

イパーである。

時期　縄文時代中期中葉と思われる。　（前田正憲）

ＫＨ－９（図Ⅲ－18，図版10－２）

位置　Ｇ－23　　**規模**　2.18×1.97/1.99×1.90/0.26m

平面形　隅丸方形　　**床面積**　3.09m²

重複　なし。

壁　東壁は５cm，西壁は35cmである。

床　平坦

溝・柱穴・炉　いずれも検出されなかった。

遺物出土状況・遺物　覆土２層から土器のみが８点出土した。いずれも細片であるが，器厚や混和材の状態から縄文時代中期に相当するものと考えられる。

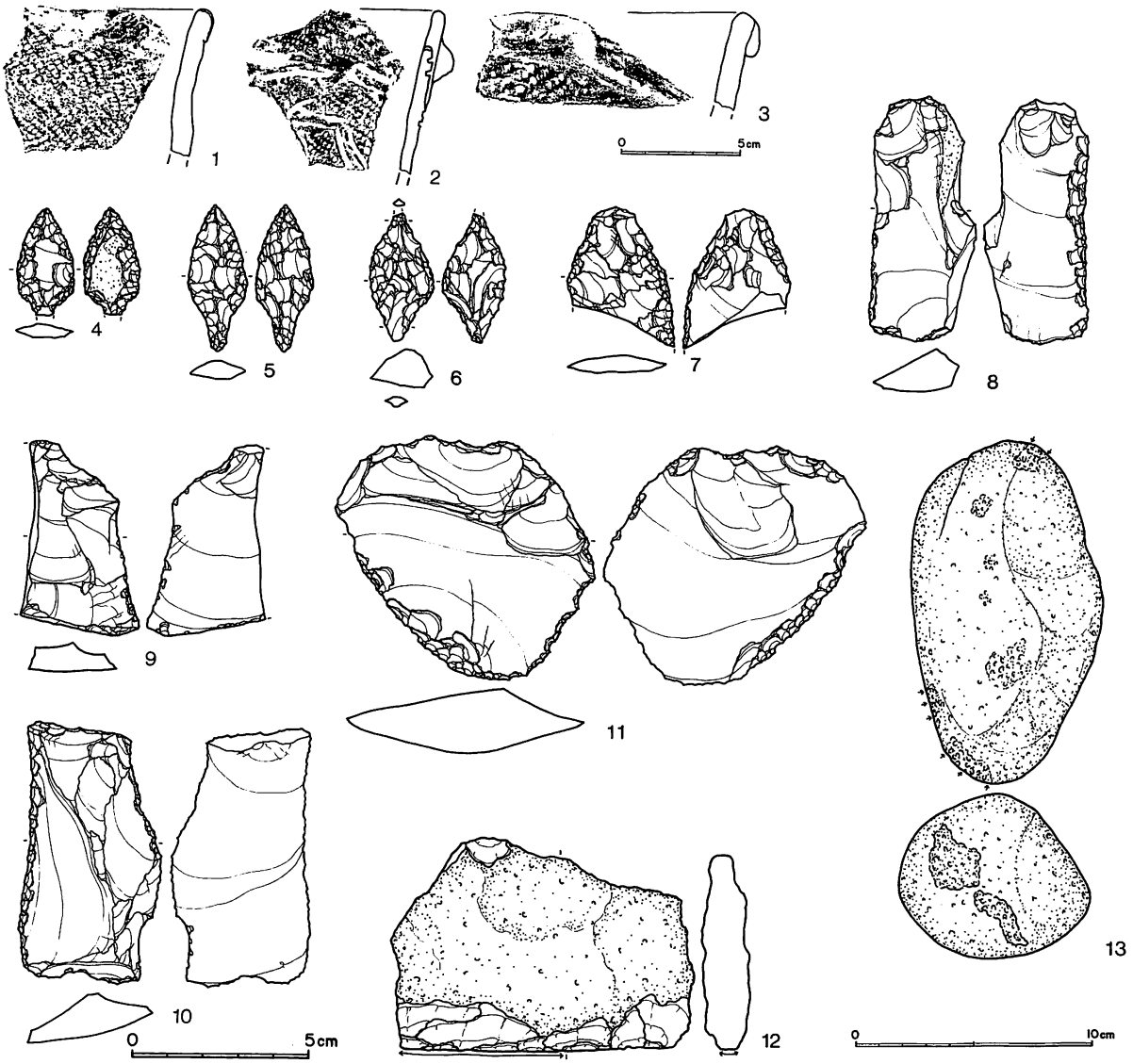
時期　不明　（石川　朗）

ＫＨ－10（図Ⅲ－19～21，図版12－１）

位置　Ｅ・Ｆ－22・23　　**規模**　4.19×3.45/3.96×3.26/0.36m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　11.11m²

重複　なし。



図Ⅲ－21　住居跡⑳・KH－10遺物

確認・調査　Fラインで断面を確認した。住居跡掘り込み面はⅡ層中にある。西半分はⅣ層中まで削平されていたのでセクションベルトは覆土の残りが良好な長軸方向に1本設定し，調査を進めた。床面で平面形を確認したピットの発掘作業が終了した後，床面を5 cm掘り下げ引き続きピットの検出を行った。

ピットの検出

壁　Fラインの土層観察から，壁の高さは約36cmである。削平を受けている部分では，約7 cm確認された。

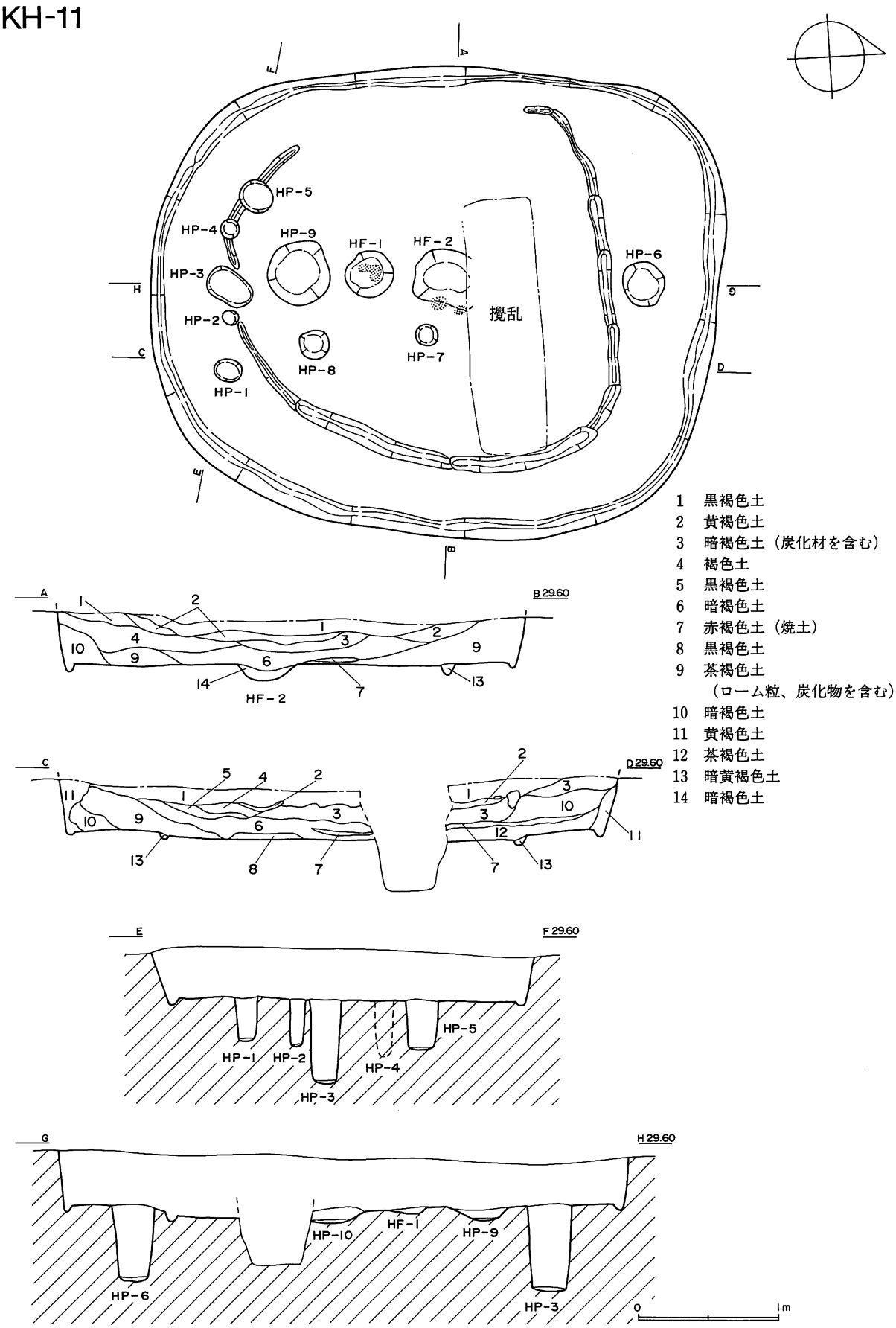
床　中央部がやや深い。

溝　南西コーナの一部を除き壁際にある。大きさは最大で幅9 cm，深さ6 cmである。

柱穴　付属ピットは合計11個検出された。このうち形状や規模からみてHP－2，3を除いたものが柱穴と考えられる。HP－1，8は深さがそれぞれ68，66cmあり長軸上に位置している。このほかは深さ30～46cmあるもので，HP－7，9は8の東と西に隣接している。HP－4，5の壙口の一部には焼土（HF－1）が形成されている。HP－6は床面下5 cmの深さで平面形が確認できたものである。

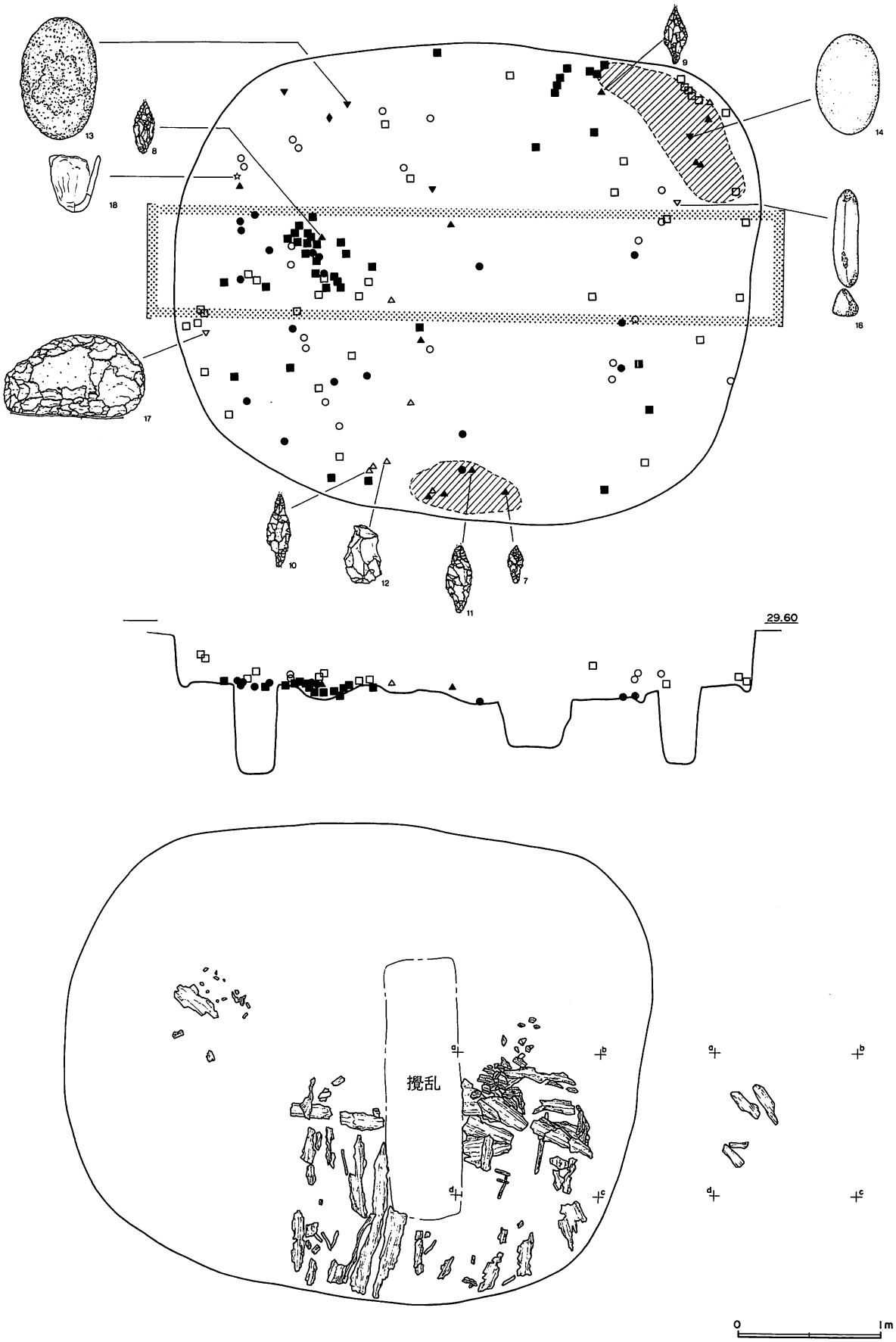
遺物出土状況　床面出土が12点，覆土出土が244点ある。垂直分布からみて，覆土出土の遺

KH-11

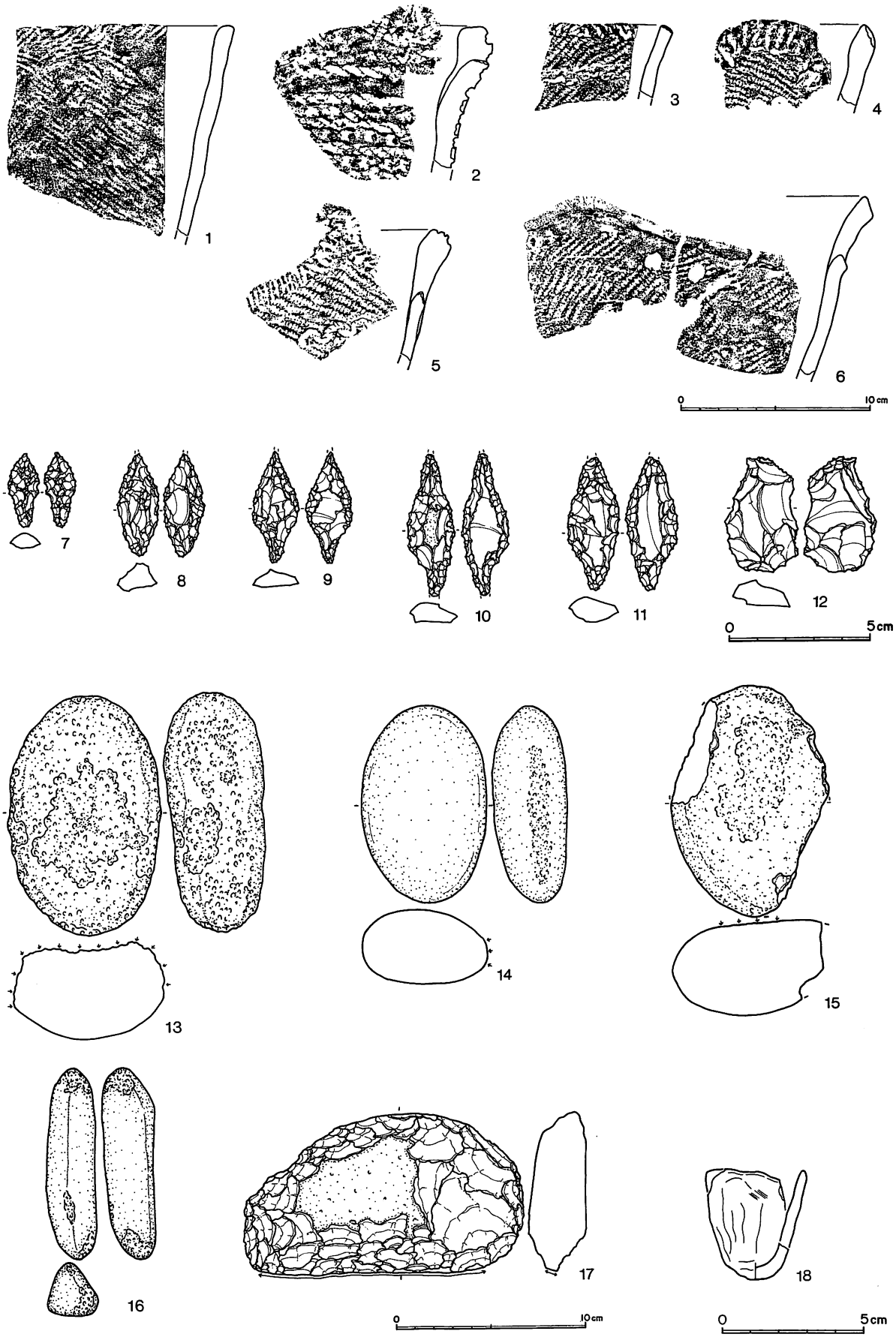


1　黒褐色土
2　黄褐色土
3　暗褐色土（炭化材を含む）
4　褐色土
5　黒褐色土
6　暗褐色土
7　赤褐色土（焼土）
8　黒褐色土
9　茶褐色土
　（ローム粒、炭化物を含む）
10　暗褐色土
11　黄褐色土
12　茶褐色土
13　暗黄褐色土
14　暗褐色土

図Ⅲ－22　住居跡(21)・KH－11



図Ⅲ－23　住居跡(22)・KH－11



図Ⅲ－24　住居跡(23)・KH－11遺物

物は住居跡廃絶後のくぼみに流れ込んだものと考えられる。

遺物　4・7～9・11は床面，2・5・13は付属ピット内，このほかは住居跡覆土から出土したもの。1，2はⅢ群A_3類土器。4～6は石鏃。4は背面に礫面が残っている。6は肉厚で先端がドリル状に細く尖がっている。7～11はスクレイパー，12はすり石，13はたたき石である。石質は4が黒曜石，5，6，8～11が頁岩，12，13が安山岩である。

時期　榎林式の住居跡であるKH－11と住居跡の規模，柱穴配置が類似しており，本住居跡も同時期と考えられる。

（石川　朗）

KH－11（図Ⅲ－22～24，図版12－2，13－1，2）

位置　E－20　　**規模**　4.02×3.33/3.88×3.88/0.38m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　10.24m²

重複　なし。

調査・確認　Ⅳ層上面で平面形を確認し長軸と短軸にそれぞれセクションベルトを設定した。

壁　床面から直角に近い角度で立ち上がる。

溝　壁際を一周するものと，壁より20～50cm内側に掘られたものがある。内側の溝は西側では確認されなかった。大きさは壁際のものが最大で幅8 cm，深さ5 cm，内側のものが幅15cm，深さ4 cmある。

床面　内側の溝より内部が，ほかと比べ約5 cm程深く，二段構造をなす。堅くしまっている。

柱穴　付属ピットは10個検出された。このうち断面が皿状をなすHP－9を除いたものが柱穴と考えられる。HP－3，6は深さがそれぞれ60cm，56cmあり，長軸上に位置している。これに次ぐものはHP－1，2，4，5で深さが30～40cmある。また1と5，2と4は口径が類似しており，これらはHP－3を中心にして東側にHP－2と1が，西側にHP－4と5が各おのおの対称する位置にある。このように主柱穴と考えられるものが2個長軸上にあり，一方の主柱穴の両脇にやや浅めの柱穴が配される状態はKH－10と共通している。

KH－10

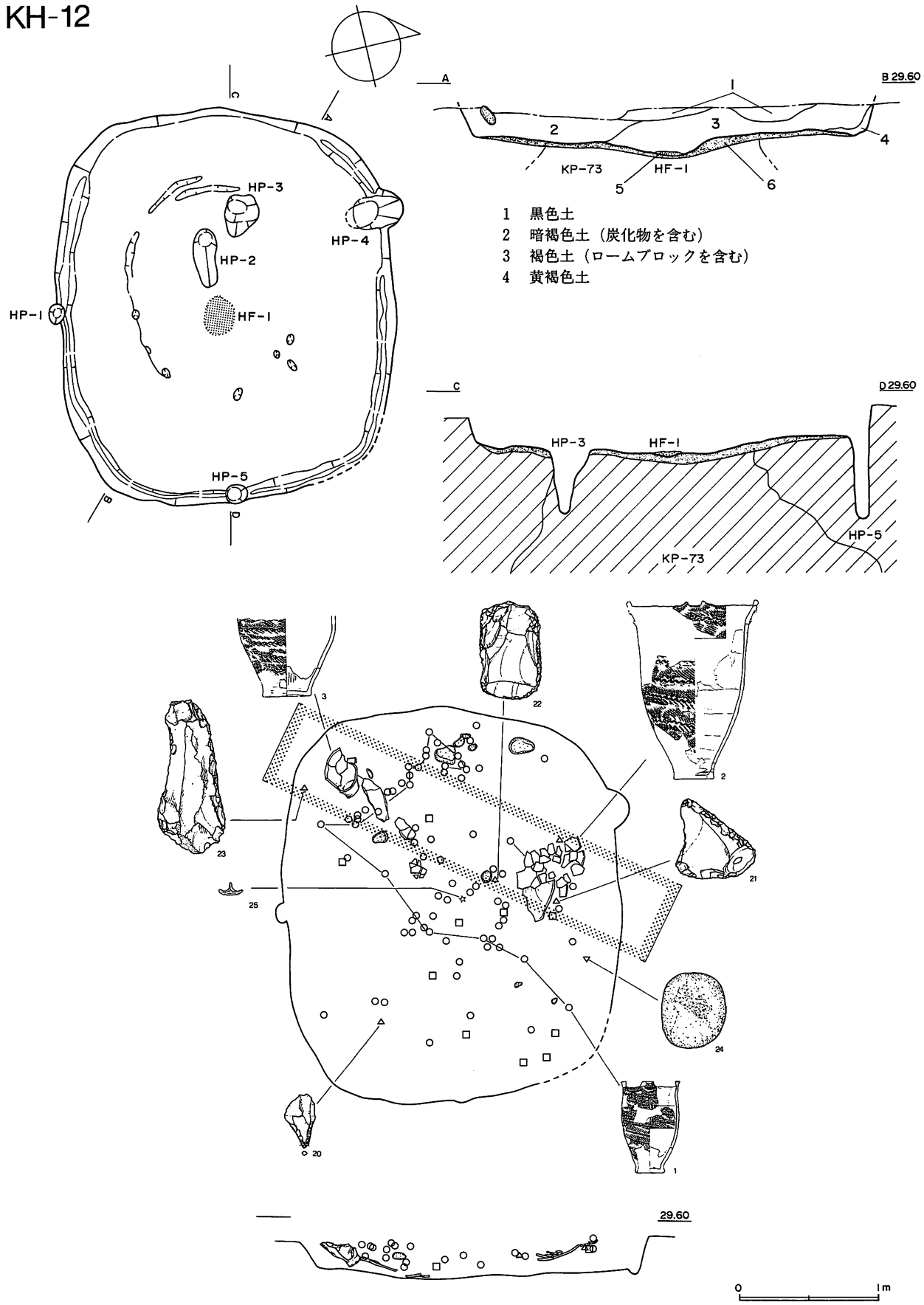
炉　長軸中央に2か所ある（HF－1，2）。いずれも下位に浅いピットをもつもので，その深さはHF－1が4 cm，HF－2が8 cmである。

覆土・炭化材　3，5層から多量の炭化材が検出され，火災住居であることがわかった。炭化材の残存度は北西部において最も良好で，このほかでは殆んど材として確認されなかった。炭化材には丸太状，板状，枝状のものと小片がある。丸太状材は変形が著しい。各材の大きさは，丸太状のものが巾15cm，厚さ8 cm，板状のものは，最大で長さ100cm，巾10cm，厚さ2 cm，枝状のものは直径が2～3 cmである。形状別に出土状態をみると，丸太状材が竪穴中央の長軸方向にあり，壁からこれにむかって板状，小枝状材が倒れこむ様子が観察された。下位の焼土層（7層）は炭化材の分布と一致している。

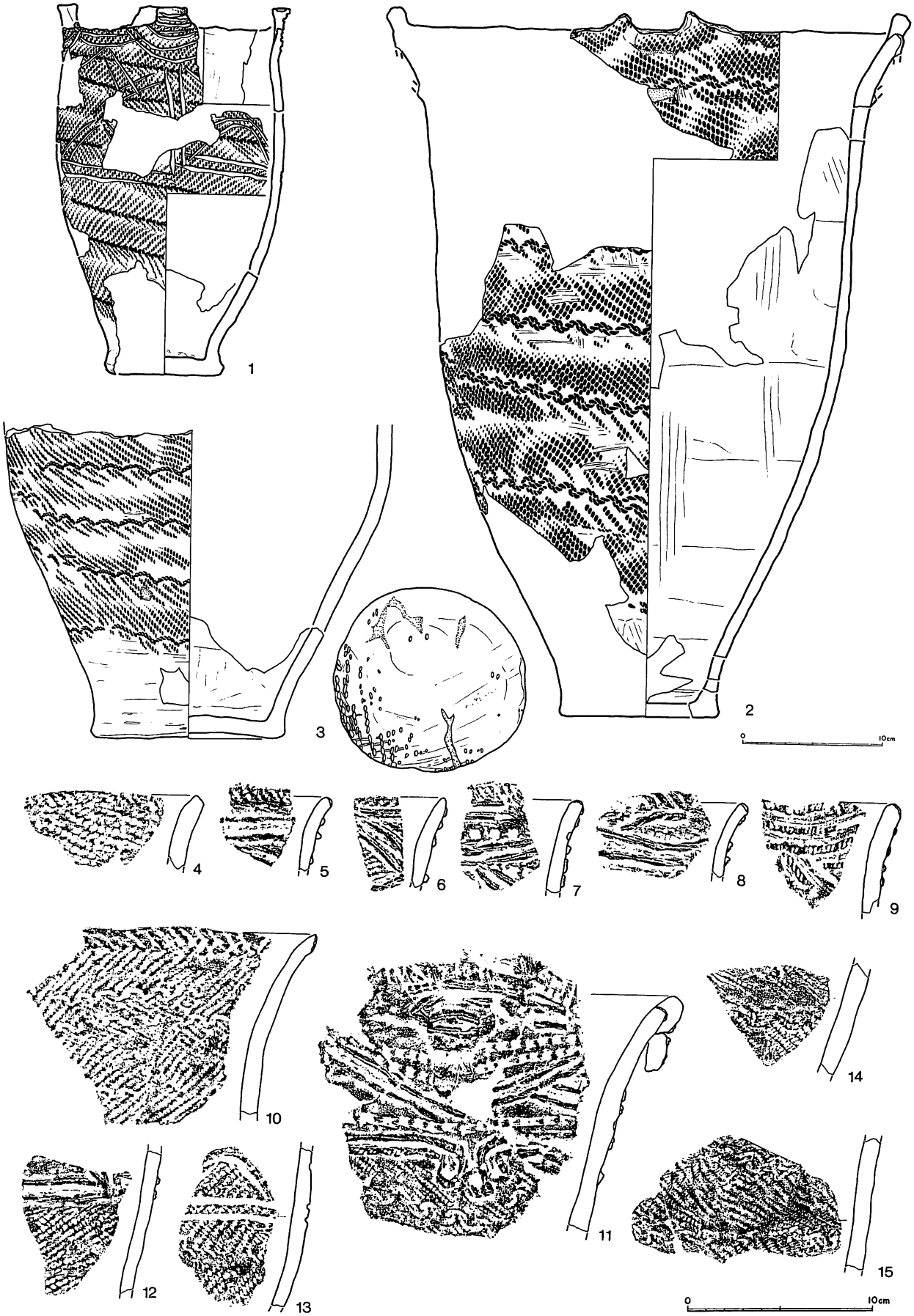
遺物出土状況　床面出土が336点，覆土出土が372点ある。床面出土遺物のうち273点のフレイク・チップは北西コーナー，東側の壁際，HP－9壙底の3か所に集中していた。北西コーナの集中箇所からは，たたき石も出土しており，住居内で石器製作が行なわれた可能性も考えられる。

石器製作

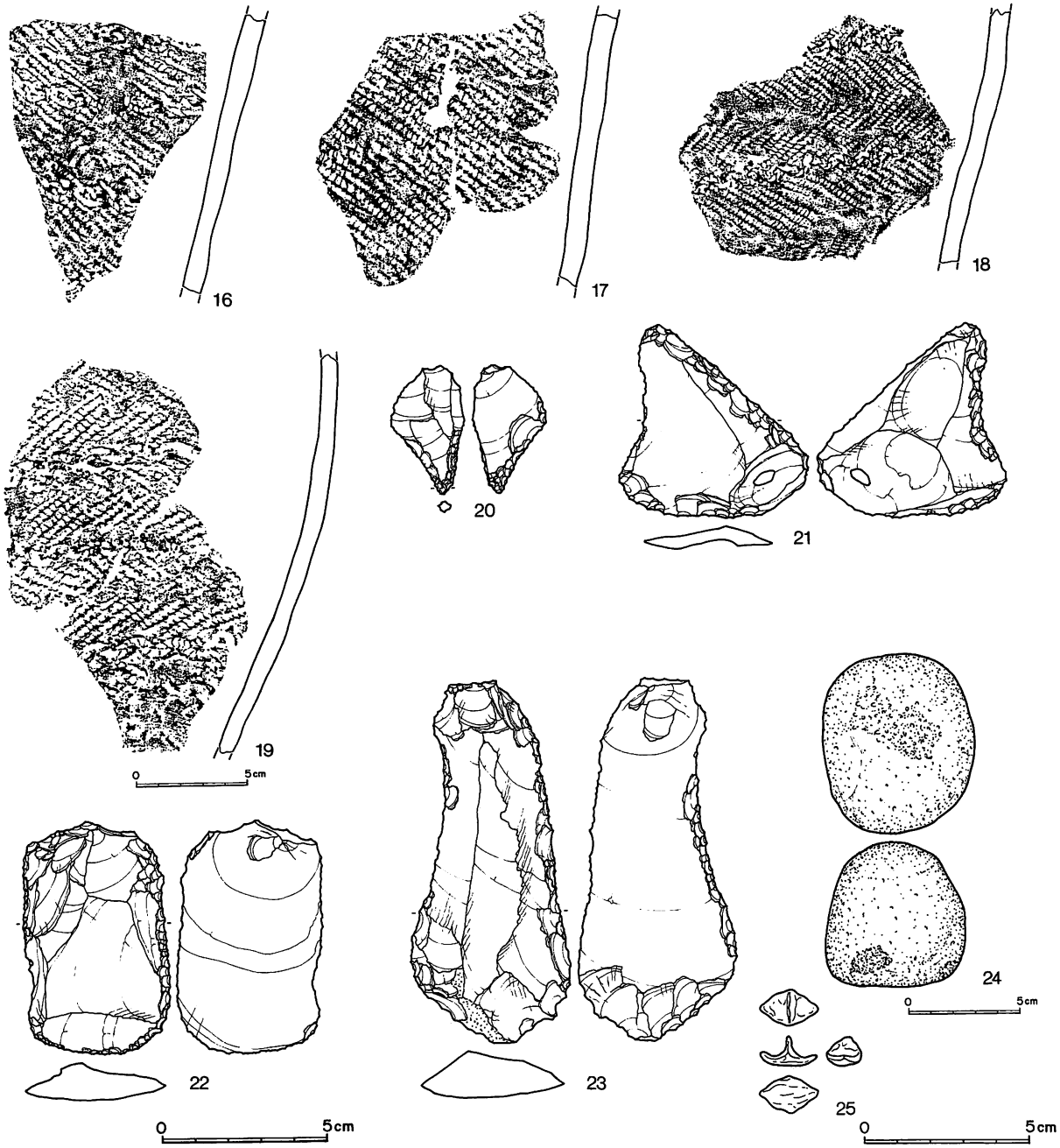
遺物　1，7～9，11，13，14は床面出土，1，6は榎林式土器。2は小突起をもつ口縁部破片。横位に6条の縄線文が施され，その間に縄と管状工具による刺突がみられる。Ⅲ群A_1



図Ⅲ－25　住居跡(24)・KH－12



図Ⅲ－26　住居跡(25)・KH－12遺物



図Ⅲ－27　住居跡㉖・KH－12遺物

類土器。3～5はⅢ群A_3類土器。7，9～11は有茎の石鏃。8は茎部の不明瞭な石鏃。12はスクレイパー。13，14，15は楕円礫，16は棒状礫をそれぞれ素材としたたたき石。17はすり石。石質は9が頁岩。7，8，10～12がめのう質頁岩，14，16が砂岩，13，15，17が安山岩である。

時期　床面出土の土器から，縄文時代中期中葉（榎林式）と考えられる。住居跡より出土した炭化材の^{14}C年代測定の結果は，3,920±35y.B.P.(KSU－1654）である。

（石川　朗）

KH－12（図Ⅲ－25～27，図版14－1，2）

位置　E－17・18　　**規模**　2.81×2.44/2.68×2.21/0.31m

平面形　隅丸方形　　**床面積**　5.06m²

重複　KP－73を切る。

確認・調査　耕作土を剥いだ段階でプランを確認した。この一帯は第Ⅱ・Ⅲ層を近代の削平により消失している。長軸方向にセクションベルトを残し掘り下げた。遺物はすべて1点ずつ記録した。住居跡の長軸方向はN－80°－Wである。

壁　上部が削平されているが，床からほぼ垂直に立ち上がる。東壁は，覆土と同色で界面が判然としない。北東コーナーの壁は近代の攪乱を受けている。

床　黄色粘土を貼り，固くしまっている。床面は中央がやや窪む。これは，下位にあるKP－73の覆土が，沈下したためと思われる。

KP－73

溝　西壁を除いて繞る。またHP－3にかかる弧状の溝が認められるが，これはKP－73の覆土の沈下に伴って生じたクラックの可能性がある。

柱穴　5個検出された。HP－3・5は径は細いが床面からの深さは，HP－4と同様50～60cm程ある。HP－1・2は床面からの深さが20～30cmである。床面中央に小規模のピットが並ぶが深さはいずれも5cm未満である。

炉　床面中央に位置し，0.26×0.22mの規模でやや窪む。

覆土　上位は削平されている。2層に炭化物が混入している。

遺物出土状況　主として覆土2・3層中より出土し，西に偏して密度が高い。遺物総数は772点で，このうち土器は95%，石器等は5%である。

遺物　復元可能となった土器は3個体である。1は，口縁に上端の窪む突起を四方に配す。胴部上半には，2本1単位の沈線で文様を描く。底部は張り出す。2は深鉢形で平縁の口縁に2個一組の突起を四方に配す。突起下位には，縦に橋状の粘土帯を貼付する。底部は若干張り出す。3は網代痕のあるやや張り出す底部を有す。いずれもⅢ群A_3類（サイベ沢Ⅶ式）と思われる。

網代痕

拓影の土器は，すべてⅢ群A_3類に含まれる。

石器は，20がドリルで，21～23がスクレイパー。24はたたき石である。

25は木の葉状の器形をし，中央部をつまみ出す土製品である。

時期　縄文時代中期中葉と思われる。　（前田正憲）

KH－13（図Ⅲ－28・29，図版15－1）

位置　G・H－9・10　　**規模**　4.8×(2.34)/4.26×(3.21)/0.64m

平面形　円形？　　**床面積**　(7.70)m²

重複　KH－14に切られる。

確認・調査　第Ⅱ層下位でプランを確認した。Hラインと10ラインに沿ってセクションベルトを残し掘り下げた。床の下位まで調査した。遺物はすべて1点ずつ記録した。斜面に構築されており，東側は崖で崩落している。

壁　北側と西側は傾斜があり，南側はほぼ垂直に立つ。北側の壁面は，覆土との界面があまり明確では無い。

貼床

床　砂質の黄色粘土で床を貼っており，硬質である。床面はやや凹凸があり，全体的に南側に低く，傾斜している。

溝　なし。

柱穴　3個検出された。床面からの深さは40～50cmである。貼床の下位からは検出されなかった。

炉　なし。

覆土　第7層は北側から流れ込んでおり，KH－14の掘り上げ土と思われる。また，西側からの流れ込みは，KP－6の掘り上げ土の可能性がある。　掘り上げ土

遺物出土状況　主として床面近くから出土する傾向がある。住居跡から出土した遺物の総点数は65点で，このうち土器は18%，石器等は82%である。

遺物　土器は完形となった個体は無く，拓影の土器はⅢ群A_1類（円筒上層a式相当）とⅢ群A_3類(サイベ沢Ⅶ式）である。

石器は8・10・12が床面より出土した。14は床面直上の第7層中より検出された。11・12は14の石核に接合した剥片である。　接合資料

時期　縄文時代中期と思われる。　（前田正憲）

ＫＨ－14（図Ⅲ－30～38，図版16，17）

位置　GH－10・11　　**規模**　5.28×(3.90)/5.09×3.68/0.36m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　(15.94)m^2

重複　KH－13を切る。

確認・調査　耕作土を剥いた段階でプランを確認した。住居跡の西半は，覆土上位が近代の耕地造成のため削平されている。Hラインと11ライン上に土層観察のためのベルトを残し掘り下げた。覆土内の遺物は基本的に1点ずつ記録した。長軸方向は，N－15°－Eである。

壁　ほぼ垂直に立ち上がる。南西隅は不明の落ち込みにより攪乱を受けている。東側は崖に面し南東隅はKH－13と重複する。

床　黄色粘土を貼っており，堅くしまっている。床面はほぼ水平に構築され，4か所炉跡がある。

溝　北・東壁に沿って検出された。

柱穴　KH－14に関わる柱穴は，HP－5・7・8～10の計5個である。貼床下に構築された柱穴は，HP－1・3・4・11・12で，このうち11の覆土を掘り込んで1が掘られている。

炉　4か所検出されたが，いずれも小規模なもので，HF－1は炉底をやや掘り窪め，2～4は地床炉である。

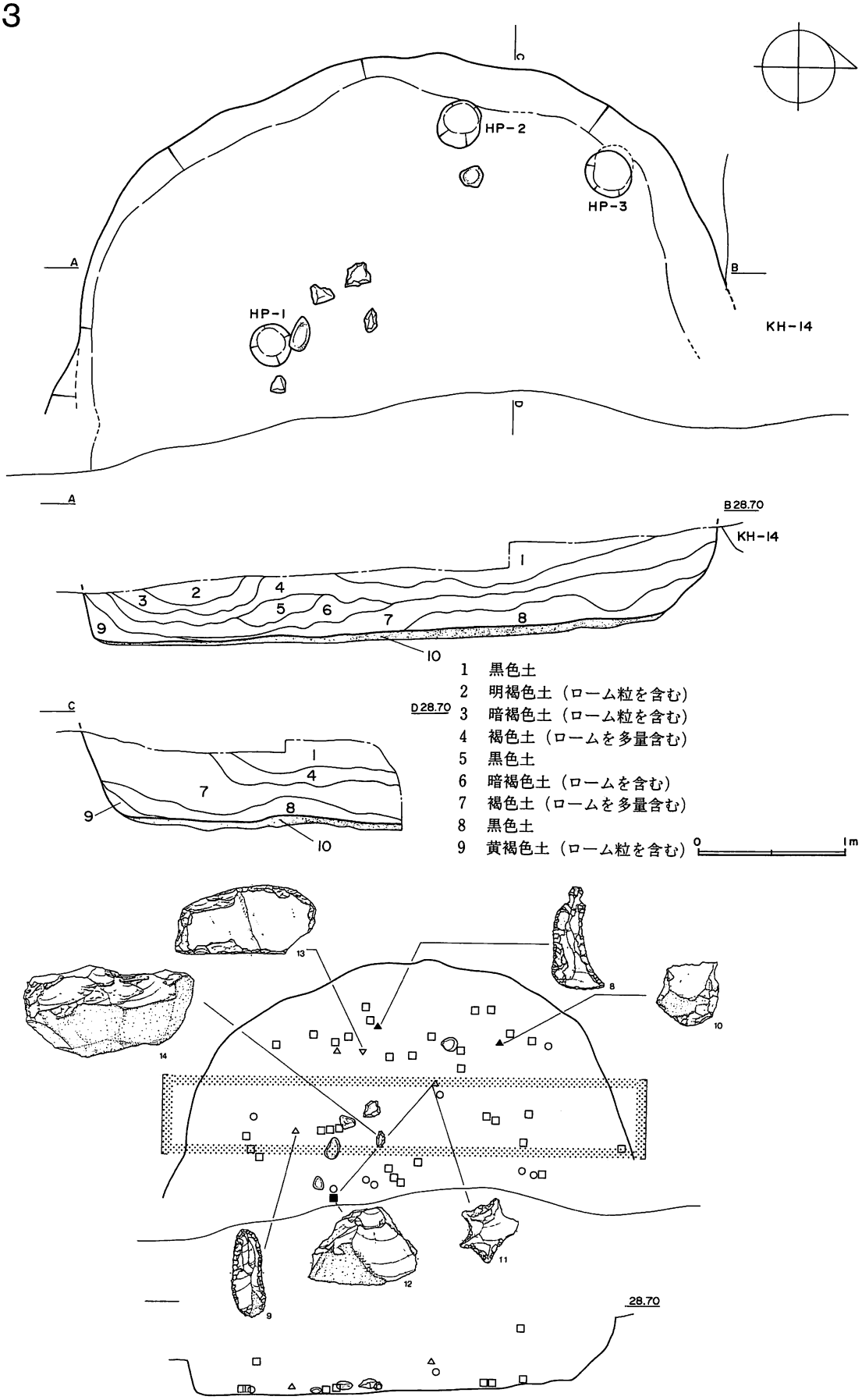
覆土　炭化材の分布などから，5層はKH－14の屋根の覆い土と思われる。

炭化材　主として5層上面に，住居跡に対し放射状に検出された。丸太状のものが多く，主として壁際に検出される。

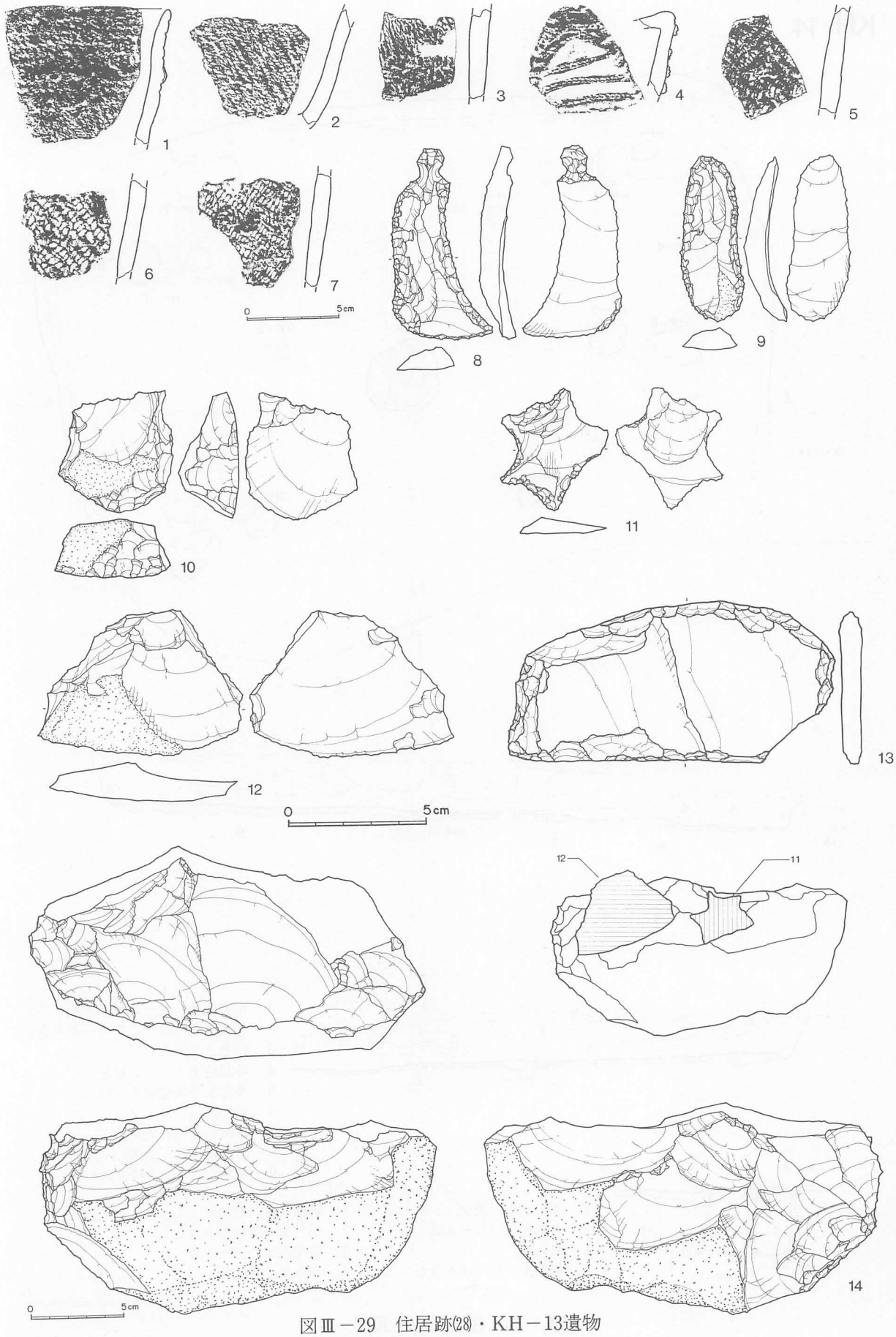
遺物出土状況　床面から出土した遺物は少なく，多くは覆土中位（5層）から上位にかけて検出された。土器は完形となるものが多く，横位に押しつぶされた状態で検出された。　完形土器
また，住居跡中央2か所の覆土中に，フレイク・チップの集中する部位が認められ，どちらも5層より上位である。動物形土製品も覆土上位より出土し，Ⅲ群A_3類(サイベ沢Ⅶ式)の土器に伴って検出された。覆土中の遺物総数は12,151点で，このうち土器は17%，石器1%で，剥片が82%である。

遺物　土器は図示したものすべてがⅢ群A_3類に含まれると思われる。図Ⅲ－33－1は，口

KH-13

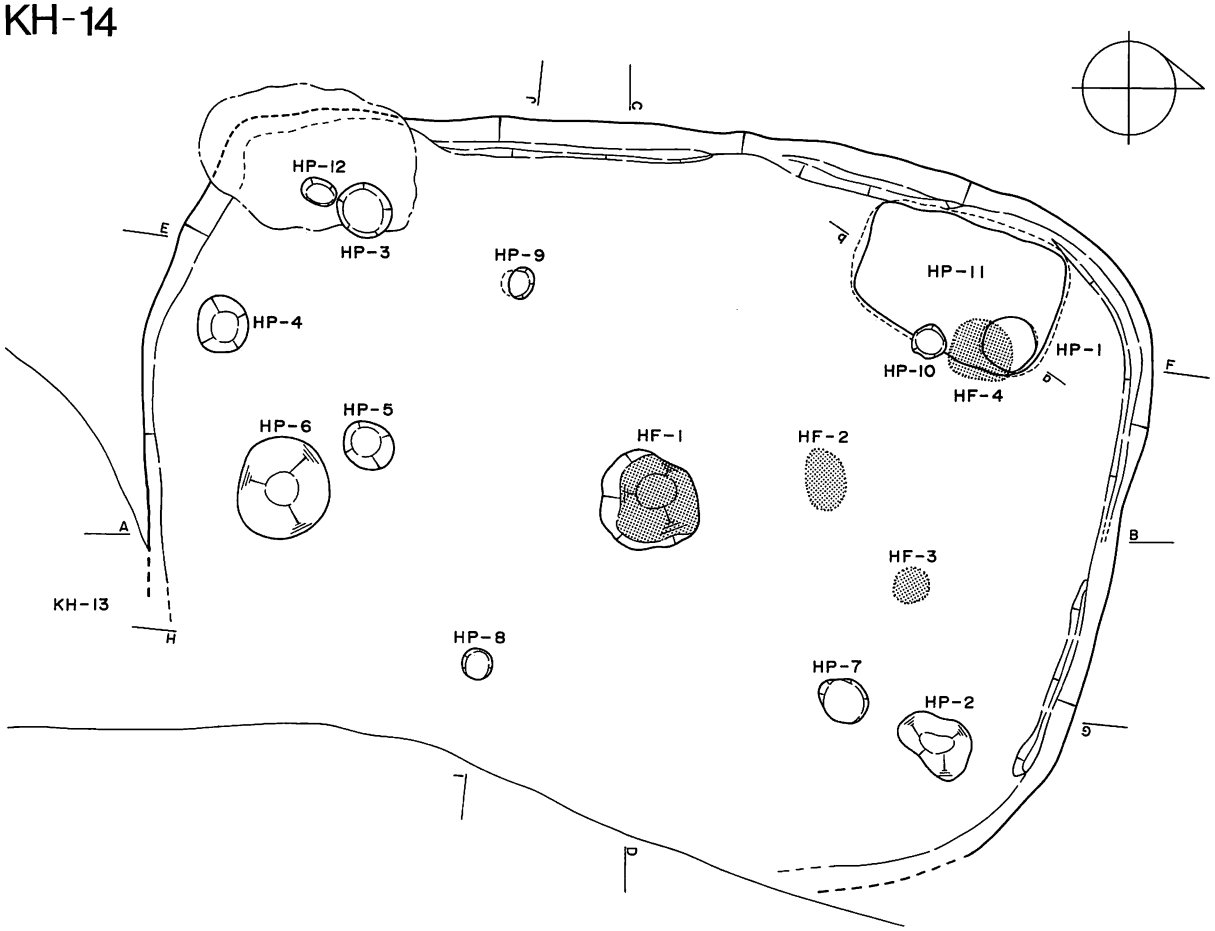


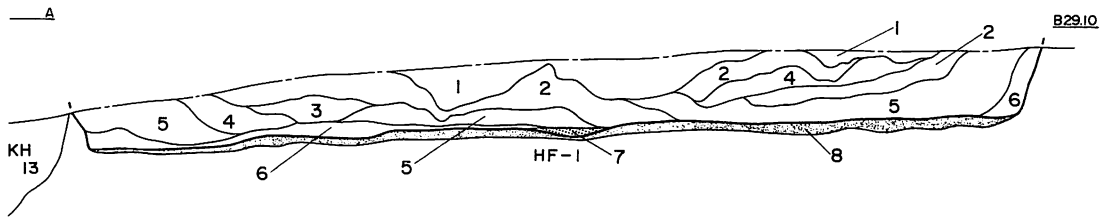
図Ⅲ－28　住居跡(27)・KH－13

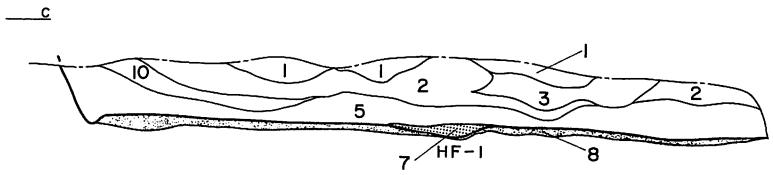


図Ⅲ－29　住居跡(28)・KH－13遺物

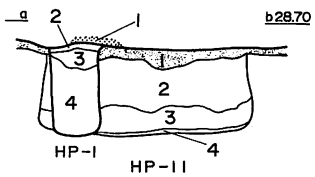
KH-14







1 暗褐色土（ローム粒を含む）
2 明褐色土（ロームブロックを含む）
3 橙色土（焼土）
4 暗褐色土（ローム粒を含む）
5 黒色土（炭化物を含む）
6 褐色土
7 赤褐色土（焼土）
8 暗黄褐色土（貼床）
9 黒色土（ローム粒を含む）

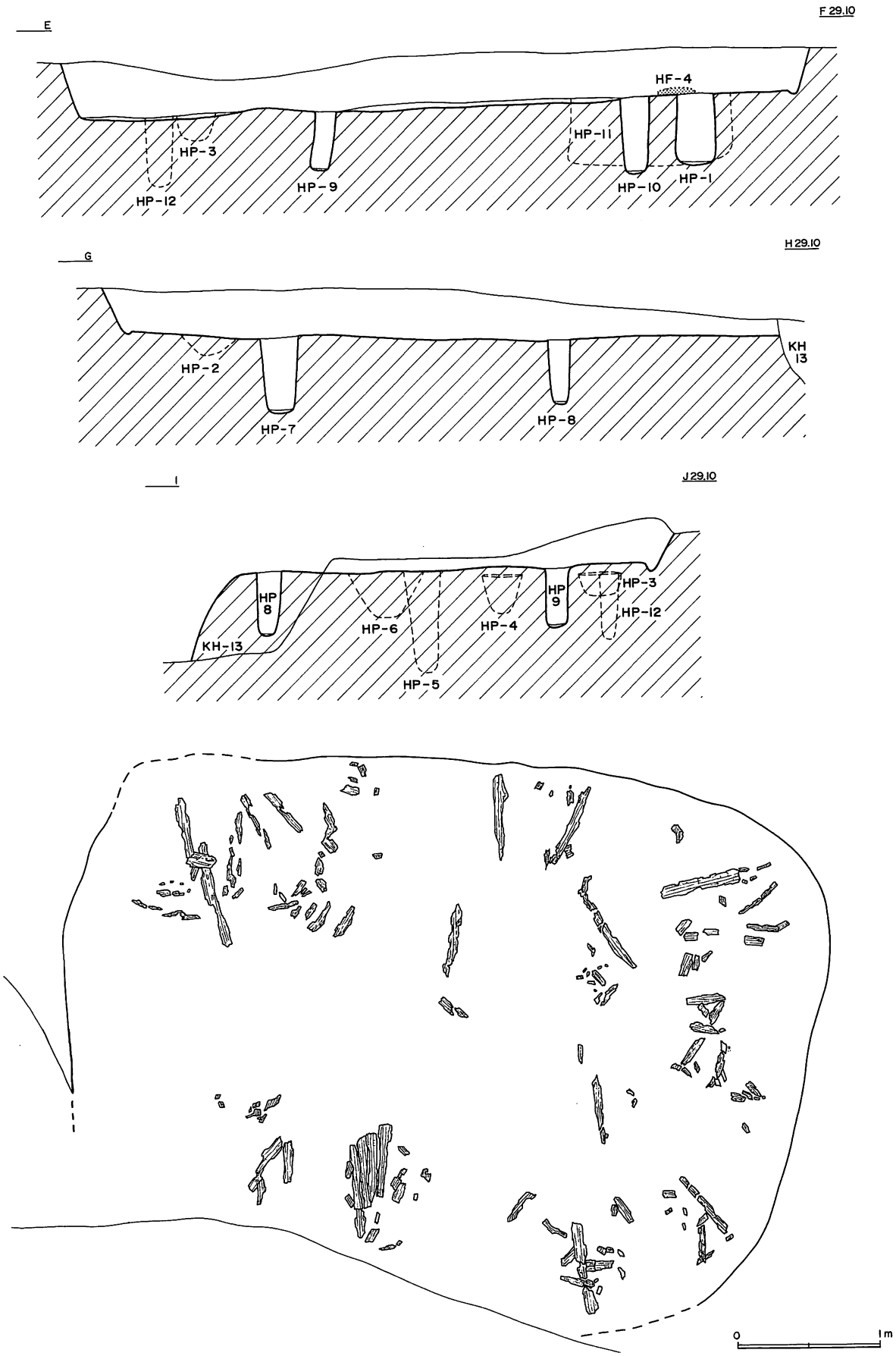


HP－1
1 赤褐色土（焼土）
2 黄褐色土（ローム質）
3 褐色土
4 褐色土（炭化物を含む）

HP－11
1 黄褐色土（貼床）
2 褐色土（炭化物を含む）
3 黄褐色土（ローム質）
4 黒色土（炭化物）

0 1m

図Ⅲ－30 住居跡(29)・KH－14



図Ⅲ－31　住居跡(30)・KH－14

図Ⅲ－32　住居跡(31)・KH－14

唇に縦方向の撚糸圧痕を有するもので平縁である。2は大きく開く口縁で，四方に山形突起を配す。口唇部は粘土紐を貼り肥厚させ，縦位に撚糸圧痕を付す。胴部文様帯は，2本一組の粘土紐を貼り付ける。粘土紐は撚糸圧痕を施す。馬蹄形圧痕を有し，山形突起下方には，渦巻状に粘土紐を貼付する。底部付近は縦方向にミガキ痕が認められる。3は，口縁が開き山形突起を有する。山形突起下には，Y字状把手を付す。文様帯は，2本一組の粘土紐と，馬蹄形圧痕で構成される。文様帯下位に繞らす太い粘土帯部にも馬蹄形圧痕を付す。底部は張り出す。4は口縁に2個一組の突起と，単独の突起を交互に配す。各突起の下位には横位に橋状の粘土帯を貼付する。口唇には縦方向に粘土を貼付し，その上部に撚糸圧痕を付す。文様帯の粘土紐上には，縦方向に撚糸圧痕を付す。底部は張り出す。5は口縁に2本の粘土紐を貼付する。口縁はゆるやかな波状を呈すかも知れない。6は口縁がやや開く。口縁の四方に突起があり，2個一組の突起と，単独の突起を交互に配す。突起の下位は，縦方向に橋状の粘土帯を貼り付ける。口縁部には粘土紐を2本一組で貼付し，弧状の連続文を構成する。粘土紐上には，2条の撚糸圧痕文を付す。7は胴部から口縁にかけて直線的に開く器形である。2本一組の沈線で山形突起を結ぶ様にめぐらす。胴部中央にも同様の2本一組の沈線を繞らす。沈線は半截竹管状工具の内側で施文する。口唇には縦方向に撚糸圧痕文を施す。8は口縁に山形突起を有し，その端部に縦方向の刻文を施す。口縁部文様帯は，2本一組の沈線で，半截竹管状工具の内側で施文する。底部付近は縦方向のミガキ痕がある。9は口縁に1対の突起を有し，その下位に瘤状突起を貼付する。口唇に縦方向に縄の圧痕文を施す。底部はやや張り出す。10は他と比べ砂粒に富む胎土である。ゆるやかな山形口縁である。口唇断面形は鋭角的に作出され，縦方向に縄の圧痕を付す。11は，口唇部に粘土帯を貼付し，縦方向に縄の圧痕を付す。底部はやや張り出す。12は大きく開く口縁で，山形突起はやや内向する。山形突起には直径1 cm程の小孔を穿つ。底部付近は縦方向のミガキ痕がある。13は大きく外反する口縁を有する。口唇に胴部と同じ縄文を施す。口縁部に補修孔を穿つ。底部はやや張り出す。底部付近には縦方向にミガキ痕を有する。

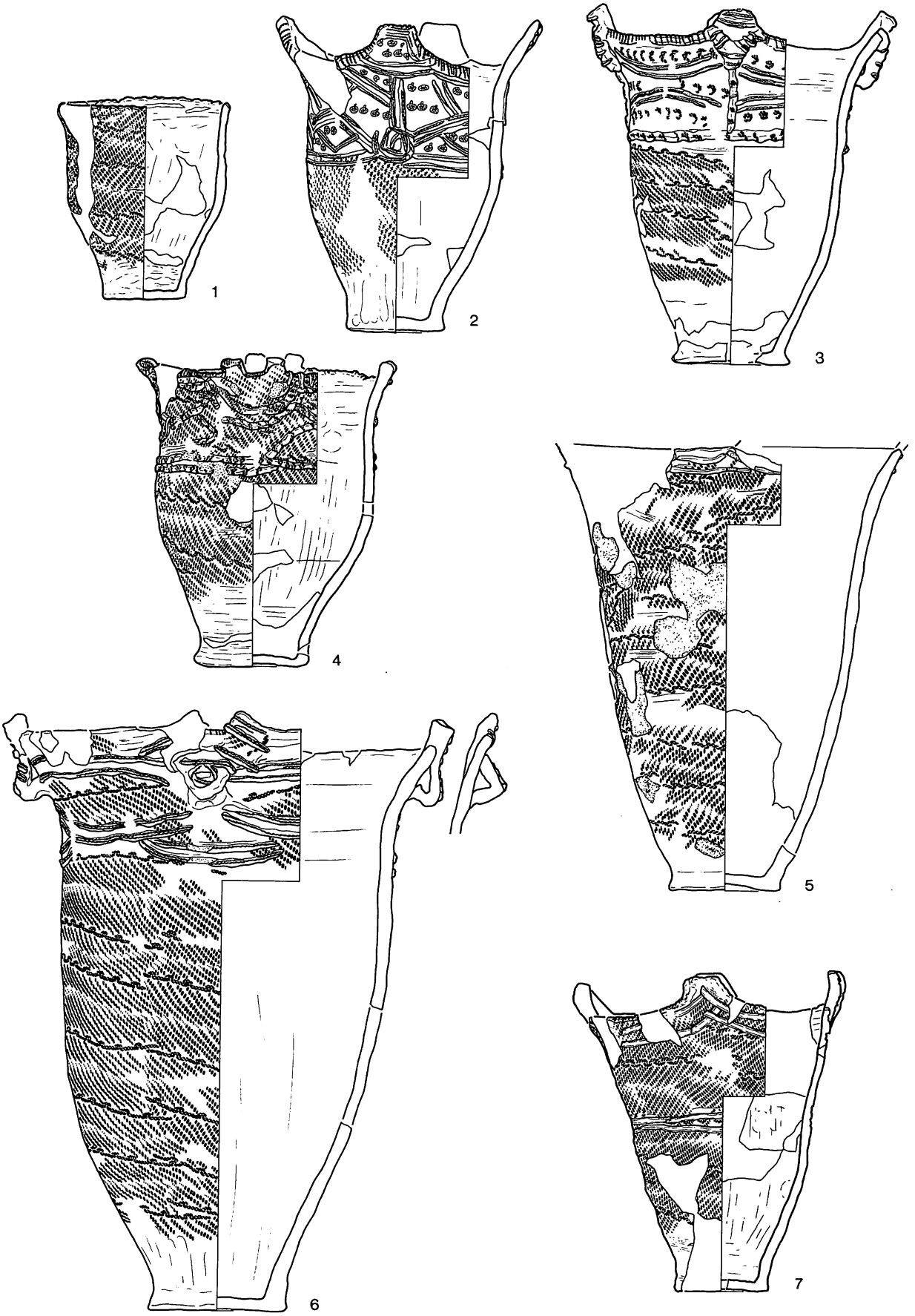
拓影の土器は，14がⅠ群A類で，15はⅡ群B類，16～22はⅢ群A_3類である。石器は，23～27が石鏃で，25～27は先端部あるいは基部が欠損する。28はドリル。29～32がつまみ付ナイフで，31は両面加工のもの。32は打点に対し側縁方向につまみを有するもの。

拓影土器

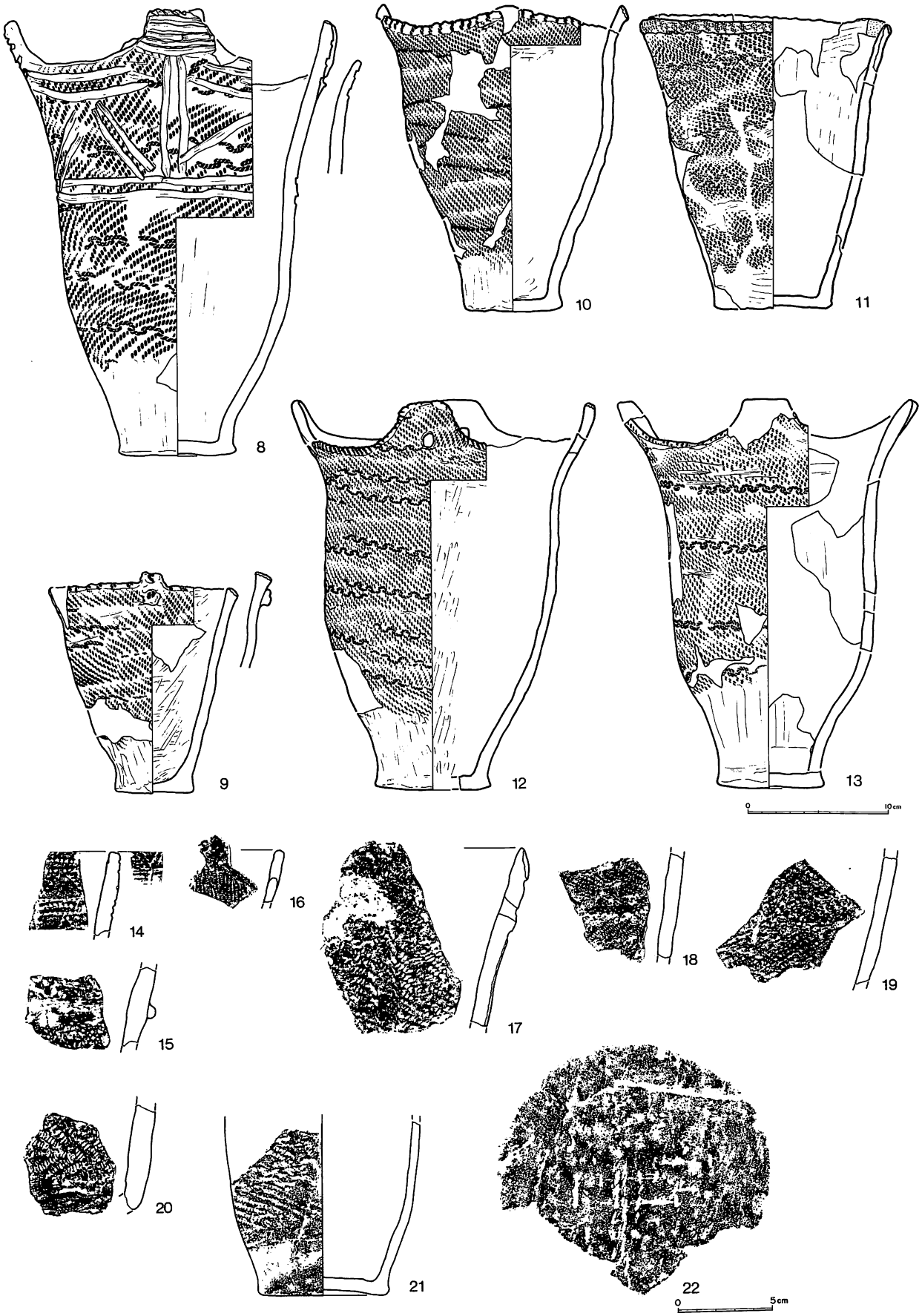
33～39はスクレイパーで，両側縁あるいは一側縁に刃部を有するもの。刃部は両刃のものもある。40～47は槍先あるいはナイフと思われるものである。40と45は同一地点より検出された。ここからフレイク・チップが38点検出され，それぞれの石器に2点ずつ剥片が接合している。41～43は住居跡東側の剥片集中出土地点（4,932点）より検出され，それぞれの石器に2点ずつ剥片が接合した。45～47は，住居跡西側の剥片集中出土地点（4,623点）より検出され，45に2点，46に3点接合した。47は被熱している。48・49の石斧は先端部が欠損する。50・51はすり石で一側縁に使用痕を有す。52・54が砥石。53がたたき石で端部に使用痕が認められる。55は台石あるいは石皿と考えられ，被熱し赤化した部位が認められる。

フレイク・チップの集中

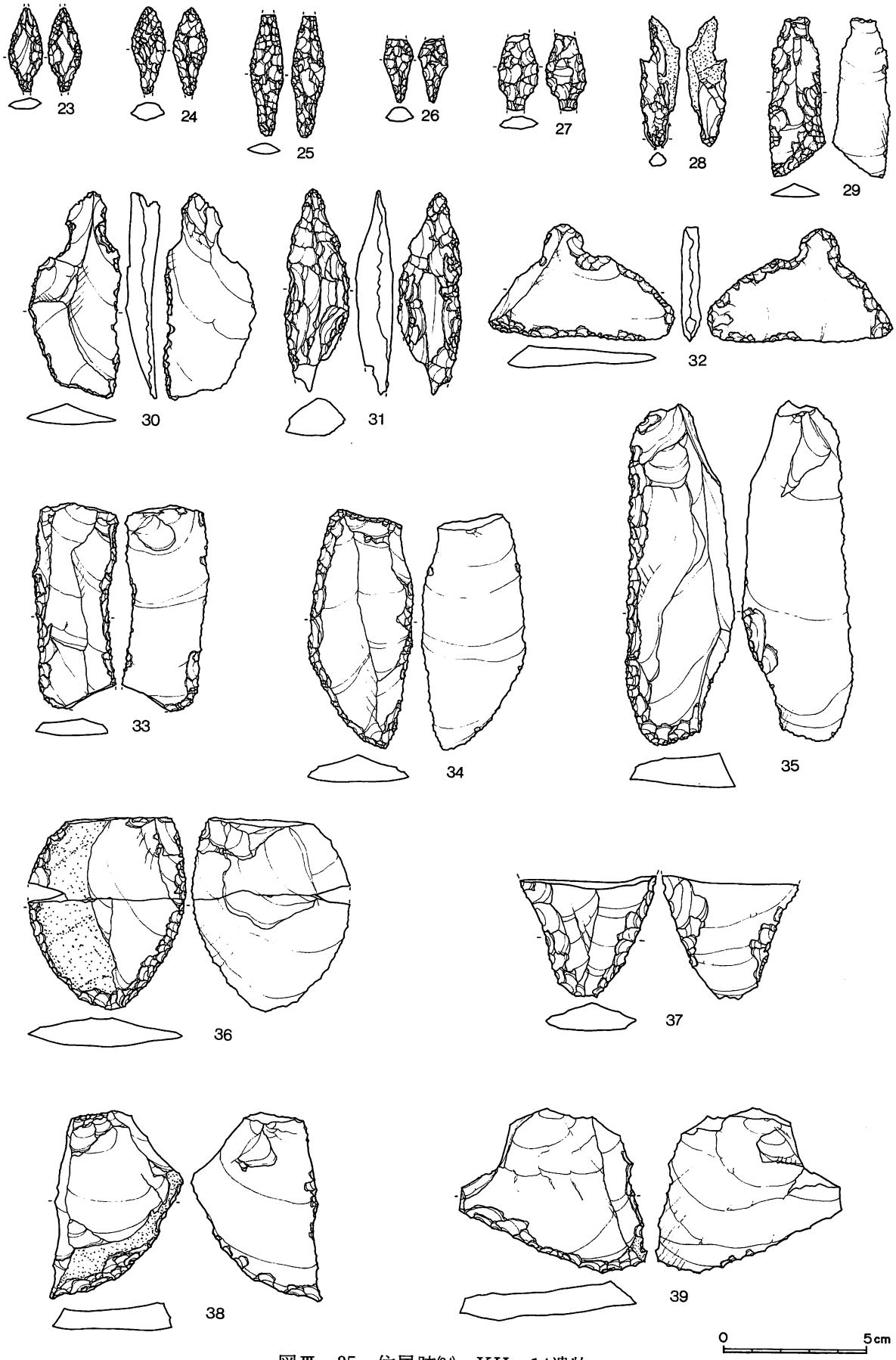
土製品・石製品は6点図示した。56・57はミニアチュアの土器で，58は脚付土器の脚部破片である。60・61は石製品で，端部に小孔を穿つ。59は動物形土製品で，シャチを模したものと思われる。59に関してはⅤ－3で詳述する。



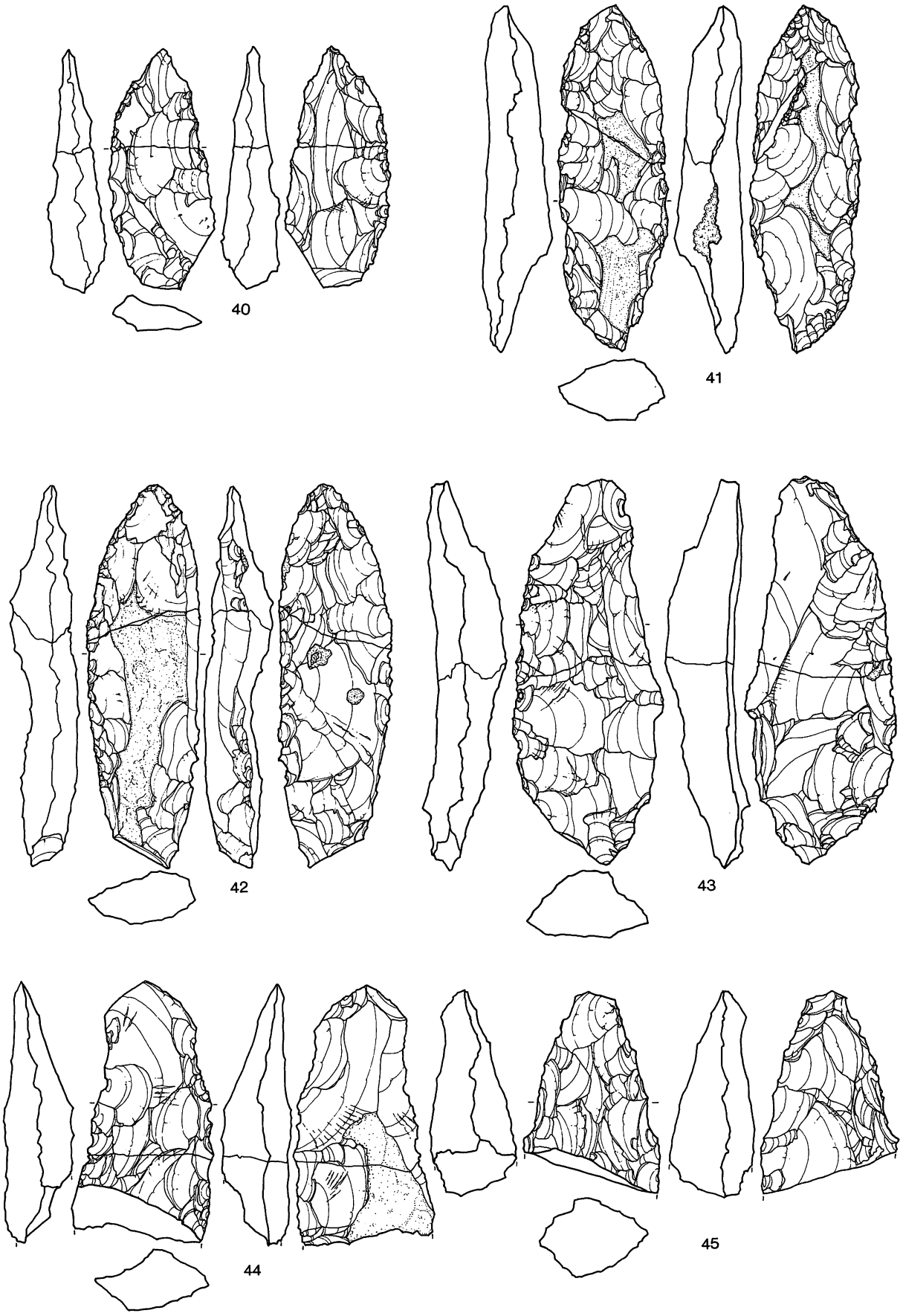
図Ⅲ－33　住居跡(32)・KH－14遺物



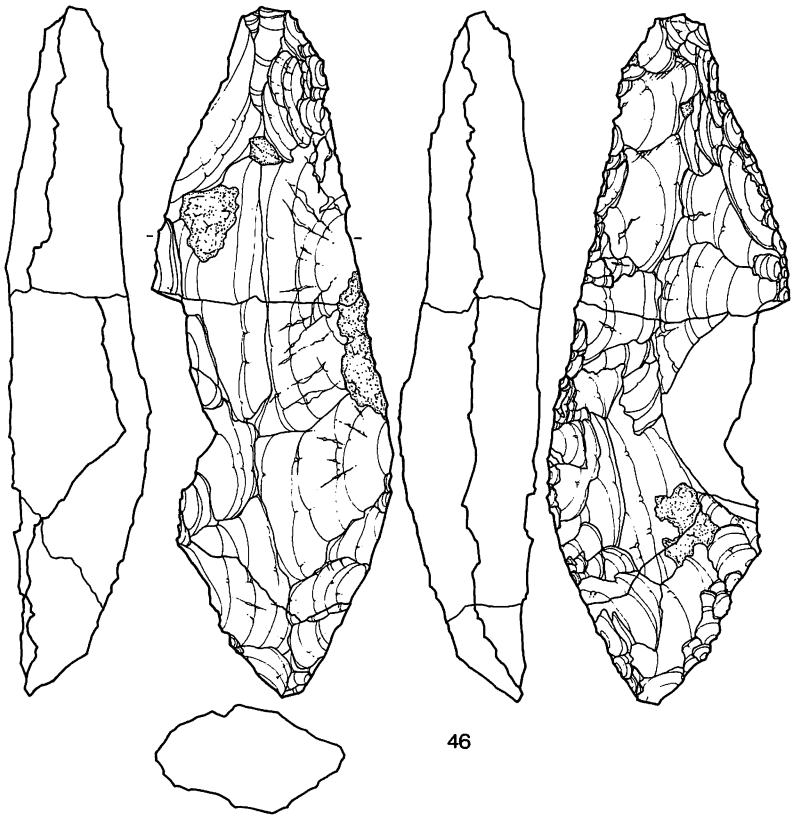
図Ⅲ－34　住居跡(33)・KH－14遺物

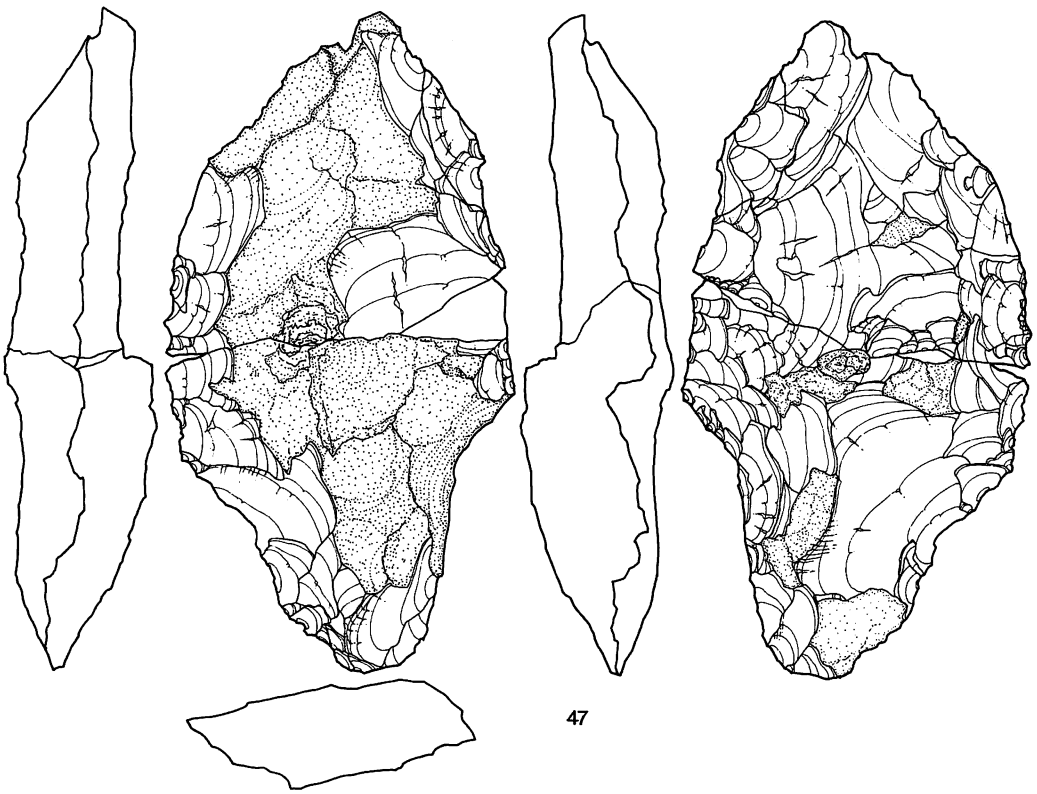


図Ⅲ－35　住居跡(34)・KH－14遺物



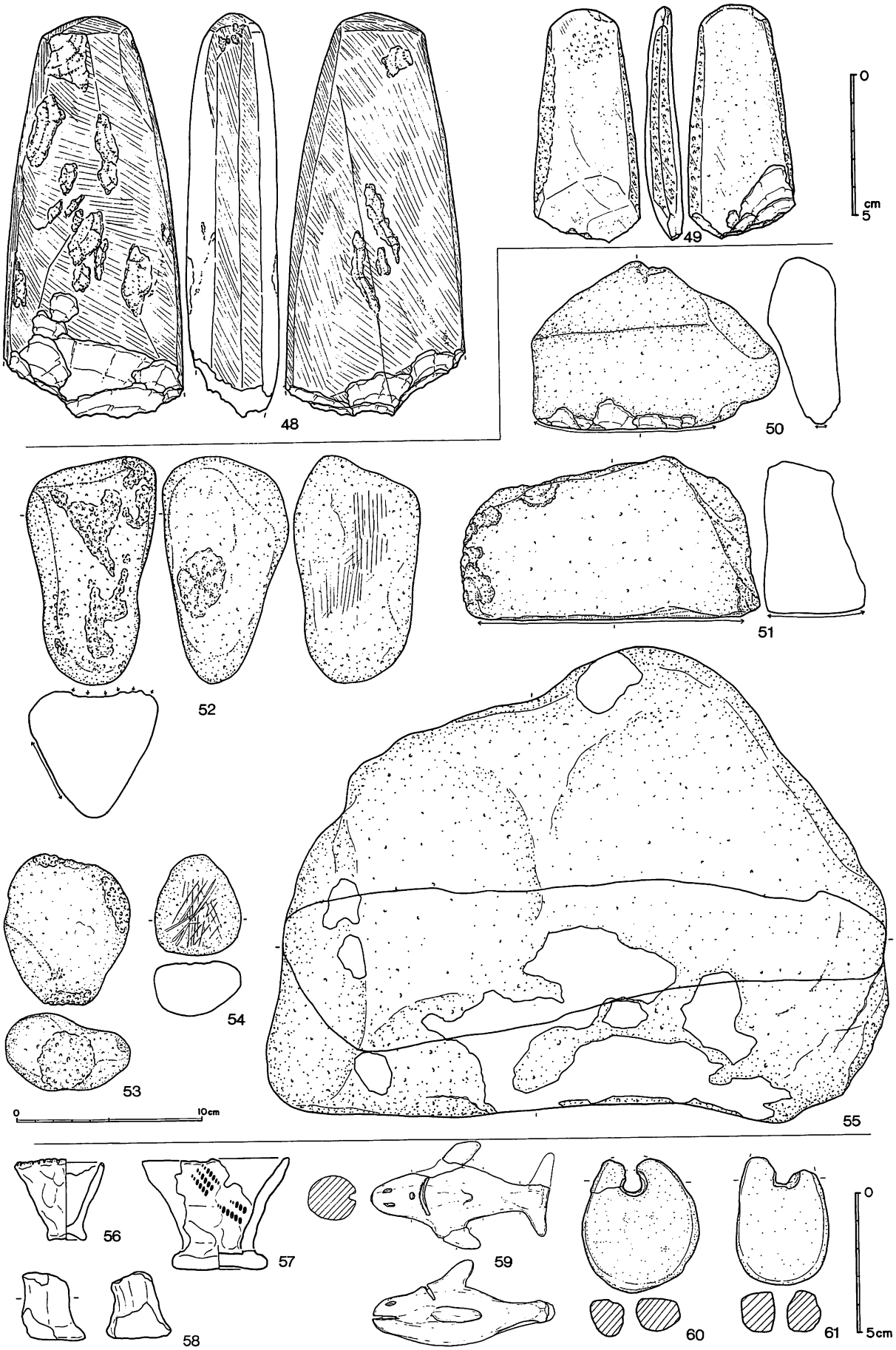
図Ⅲ－36　住居跡(35)・KH－14遺物





0 5cm

図Ⅲ－37　住居跡(36)・KH－14遺物



図Ⅲ－38　住居跡(37)・KH－14遺物

時期　縄文時代中期中葉と思われる。なお，覆土第5層中より出土した炭化材の^{14}C年代測定の結果は3,900±40y.B.P.(KSU－1655) である。　(前田正憲)

ＫＨ－15（図Ⅲ－39，図版15－２）

位置　Ｇ・Ｈ－17　　**規模**　2.30×2.06/2.12×1.78/0.38m

平面形　隅丸方形　　**床面積**　3.05m²

重複　なし。

壁　壁の立ち上がりは全周とも急である。

床　Ⅳ層中につくられている。踏み硬められるほどではないがしまりがある。

溝　壁際に一条あるが，西の壁際の一部が途切れている。

柱穴　付属ピットは全部で４個検出された。HP－１をのぞきいずれも10cm以下の浅いものである。

炉　なし。

遺物出土状況　遺物はすべて覆土中より出土している。土器が24点，石器等が８点の計32点である。HP－２の近くから，人頭大より大きめの礫が１点出土している。床面より若干上のレベルから出土している。礫の表面に使用の痕跡は認められない。

礫

遺物　１，２はⅢ群A_3類の口縁部の破片である。３～５は，同じくⅢ群A_3類の胴部破片である。

時期　溝があることから縄文時代中期と思われる。　(佐川俊一)

ＫＨ－16（図Ⅲ－40～48，図版18・19）

位置　Ｅ・Ｆ－10～12　　**規模**　5.32×4.20/4.79×3.56/0.50m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　15.30m²

重複　KH－19，KP－92を切る。KP－91に切られる。

壁　全周とも急に立ち上がる。

床　床は全体に堅くしまっている。本住居跡と切り合い関係のあるKH－19とをつなぐトレンチを入れたところ，KH－19との切り合い部分については厚さ35cmのロームで貼床をしていることが判明した。

溝　壁際に一条あるが，部分的に途切れる。とくにKH－19との境は確認できなかった。

炉　床面中央部に浅い掘りこみの炉を確認した。炉の焼土（HF－１の２層）をフローテーション・水洗処理した結果，獣骨・魚骨，チップを検出した。

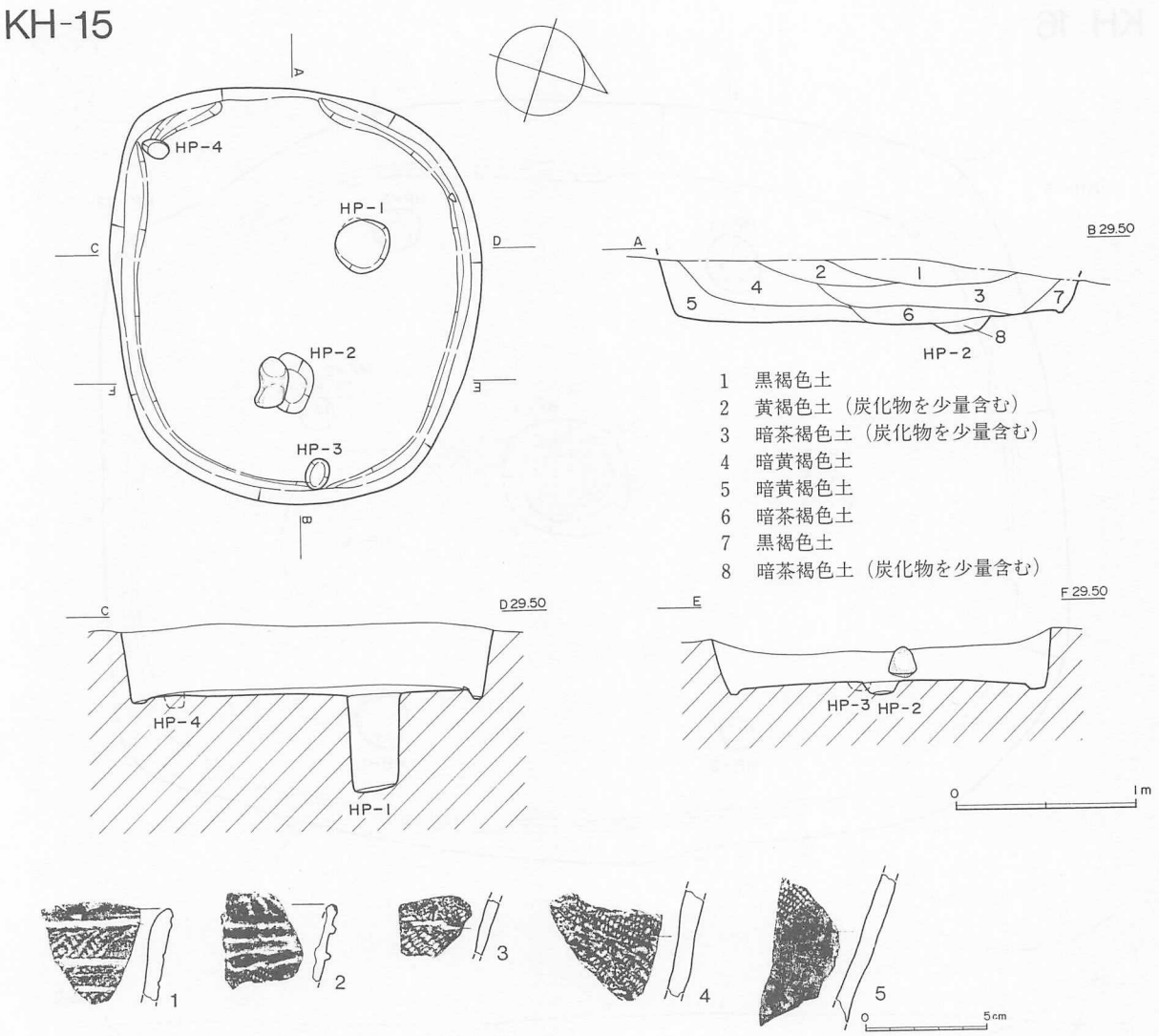
焼　骨

覆土　１，２層はKP－91が掘られた後の自然堆積層である。３層はKH－16に関連するか，もしくはほかの遺構の掘り上げ土であると思われる。４，５層は色調が異なるが炭化物を少量含む点では共通する。８層はKH－19の低い床部分を貼床にしたものである。

炭化材　床面の６cm上より炭化材の多く分布することを確認した。炭化材は６個の柱穴で囲んだ線より内側にあり，とくにHP－１，６，５の付近には残存状態の良好なものが分布する。またKP－91はKH－16より後から掘られたため，その部分には炭化材が分布していない。なお，炭化材は，樹種同定のため実測後，番号を付けサンプルとして取り上げた。

ＫＰ－91

遺物出土状況　実測土器・石器を中心に覆土上部出土のもの（図Ⅲ－42上段）と床面近くおよび床面出土のもの（図Ⅲ－42下段）に分けて図示した。



図Ⅲ－39　住居跡(38)・KH－15, －15遺物

覆土上部より出土した復元土器は７個体，実測石器は13点である。土器の出土状況は，多くがその場でつぶれたような状態で出土した。しかしそのなかで６，７の土器はやや散在した状態で出土している。覆土上部より出土した石器等の分布には特にかたよりがみられない。覆土上部の西壁（チップ集中地点No.１）および東壁（チップ集中地点No.２）近くの２か所でチップが集中して出土した。これらについては，土ごと取り上げ選別した結果，めのう質頁岩，頁岩のチップが3,039点検出された。このうちチップ集中地点No.１では，半半分ほどのチップが焼けて赤褐色化していた。南側の覆土上部で出土した石皿の破片１点が，フラスコ状ピットKP－75，86の石皿片と接合している。（図Ⅲ－73－24）。

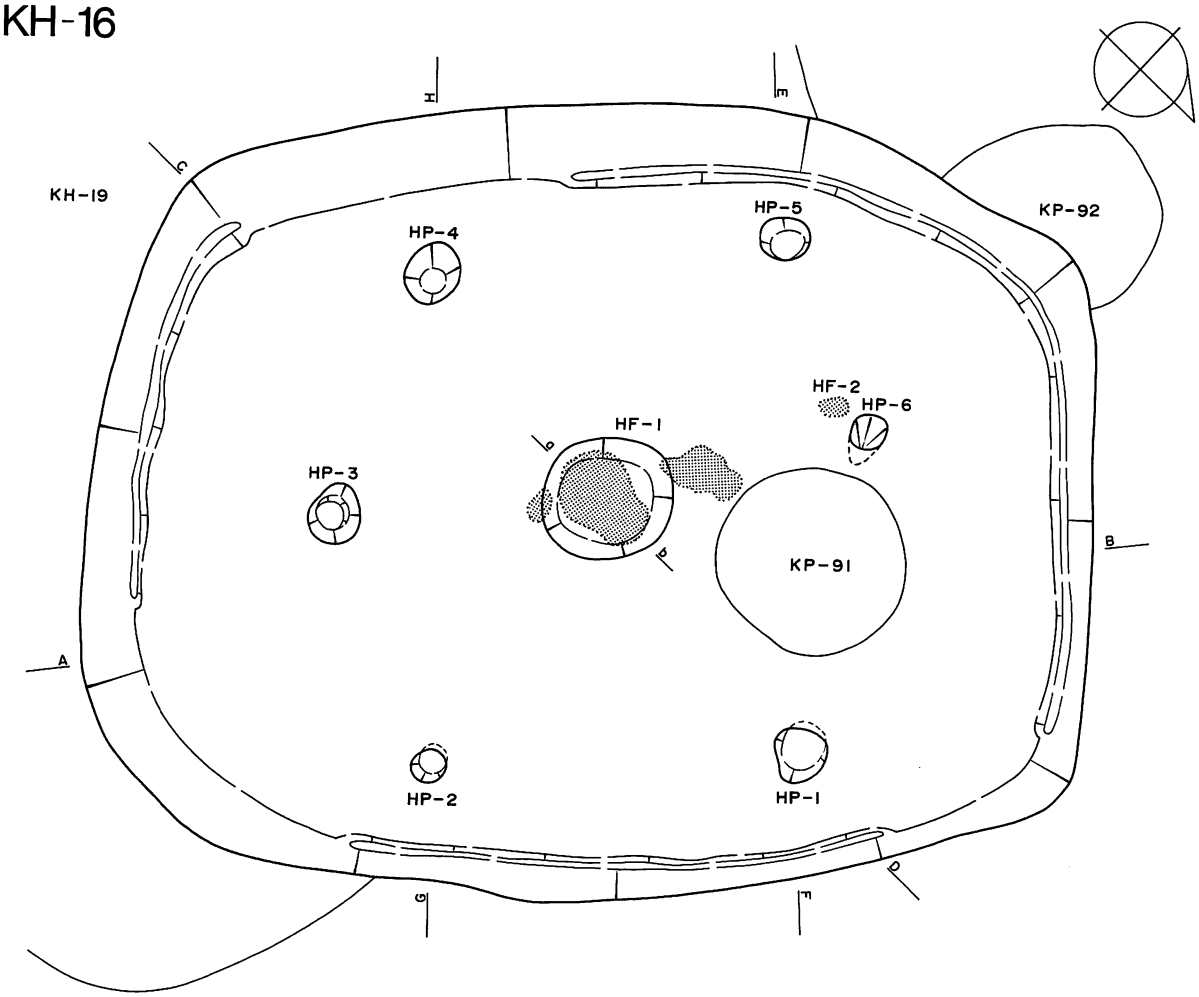
チップ集中

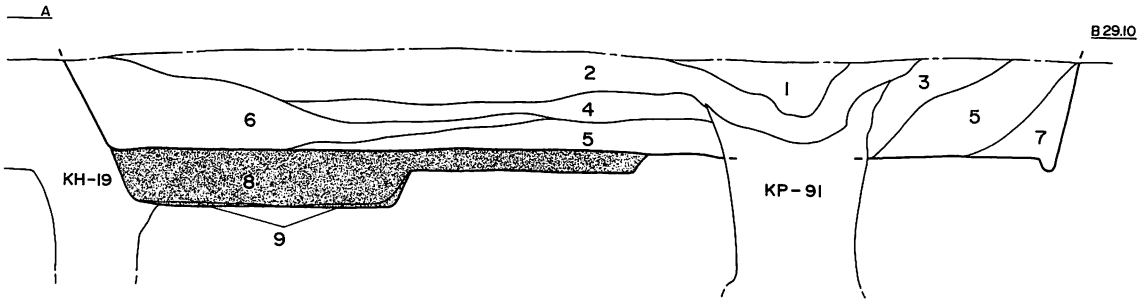
接合資料

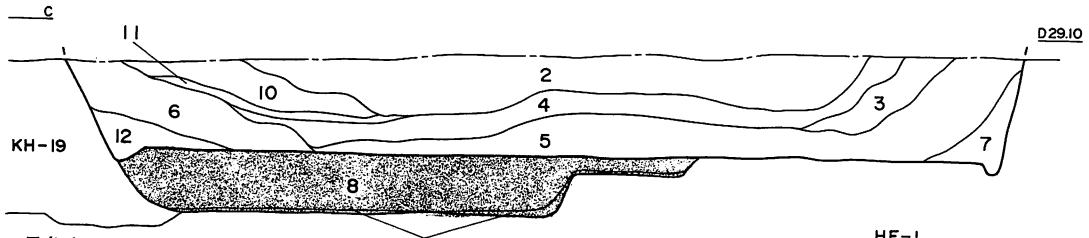
またチップ集中地点No.２の北西１ｍのところに45×30cmの範囲で，骨，チップを含んだ焼土が検出された。土ごと取り上げフローテーション・水洗処理を行なった。その結果については後述する。

床面，床面近くより出土した遺物は以下のとおりである。床面からは，頁岩製のスクレイパーが１点(図Ⅲ－47－20)とその近くより同じ石質のフレイクが11点集中して出土した。

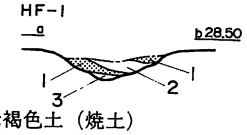
KH-16







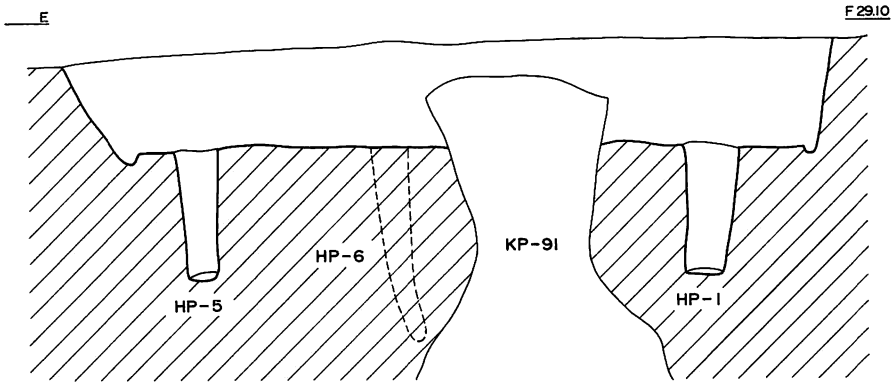
1 黒色土
2 黒褐色土
3 黄褐色土
4 黄茶褐色土（炭化物を少量含む）
5 褐色土（ローム粒、炭化物を少量含む）
6 褐色土
7 黄褐色土
8 暗黄褐色土（貼床）
9 淡黒褐色土
10 黄茶褐色土
11 黒褐色土
12 黒褐色土

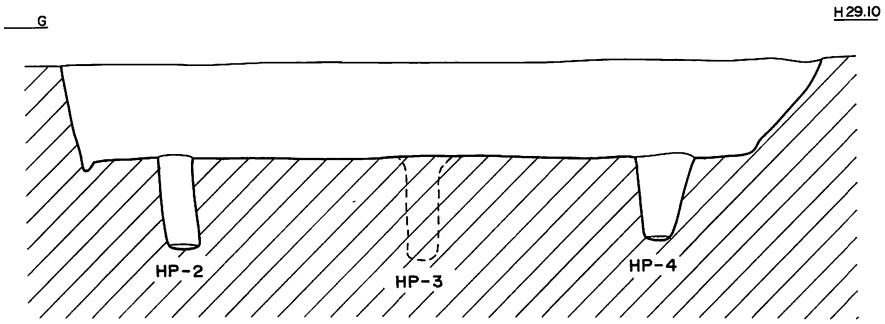


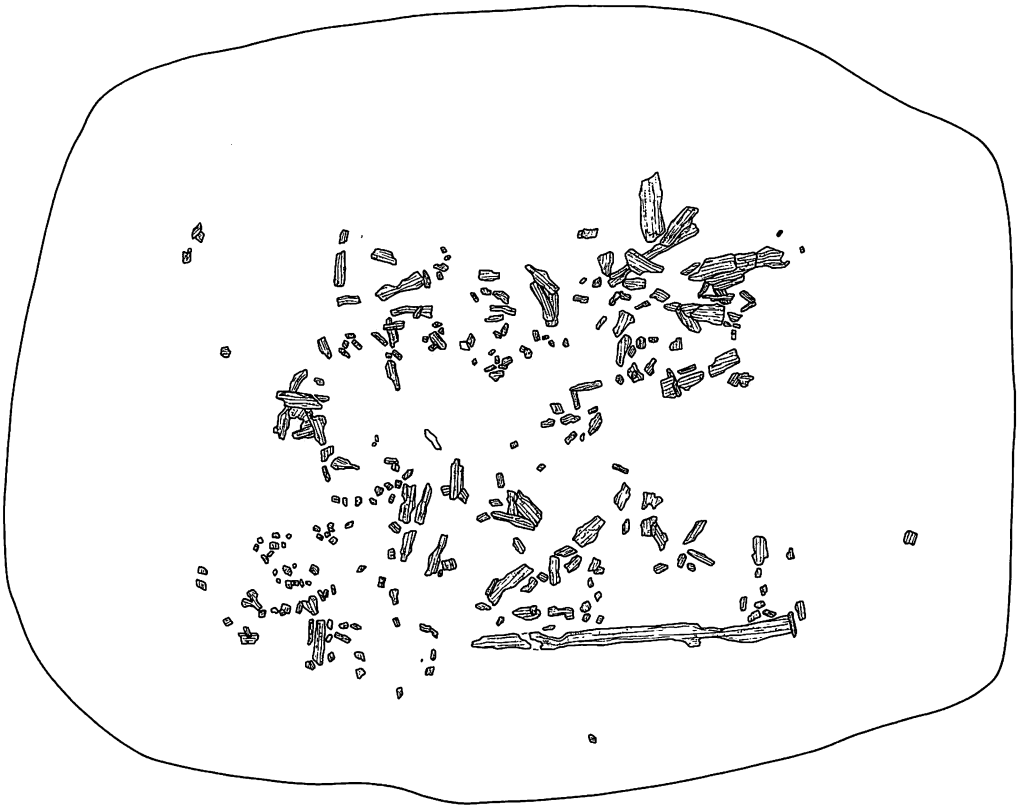
1 赤褐色土（焼土）
2 暗黄褐色土（焼骨、焼土粒を含む）
3 黄褐色土

0 1m

図Ⅲ－40　住居跡(39)・KH－16

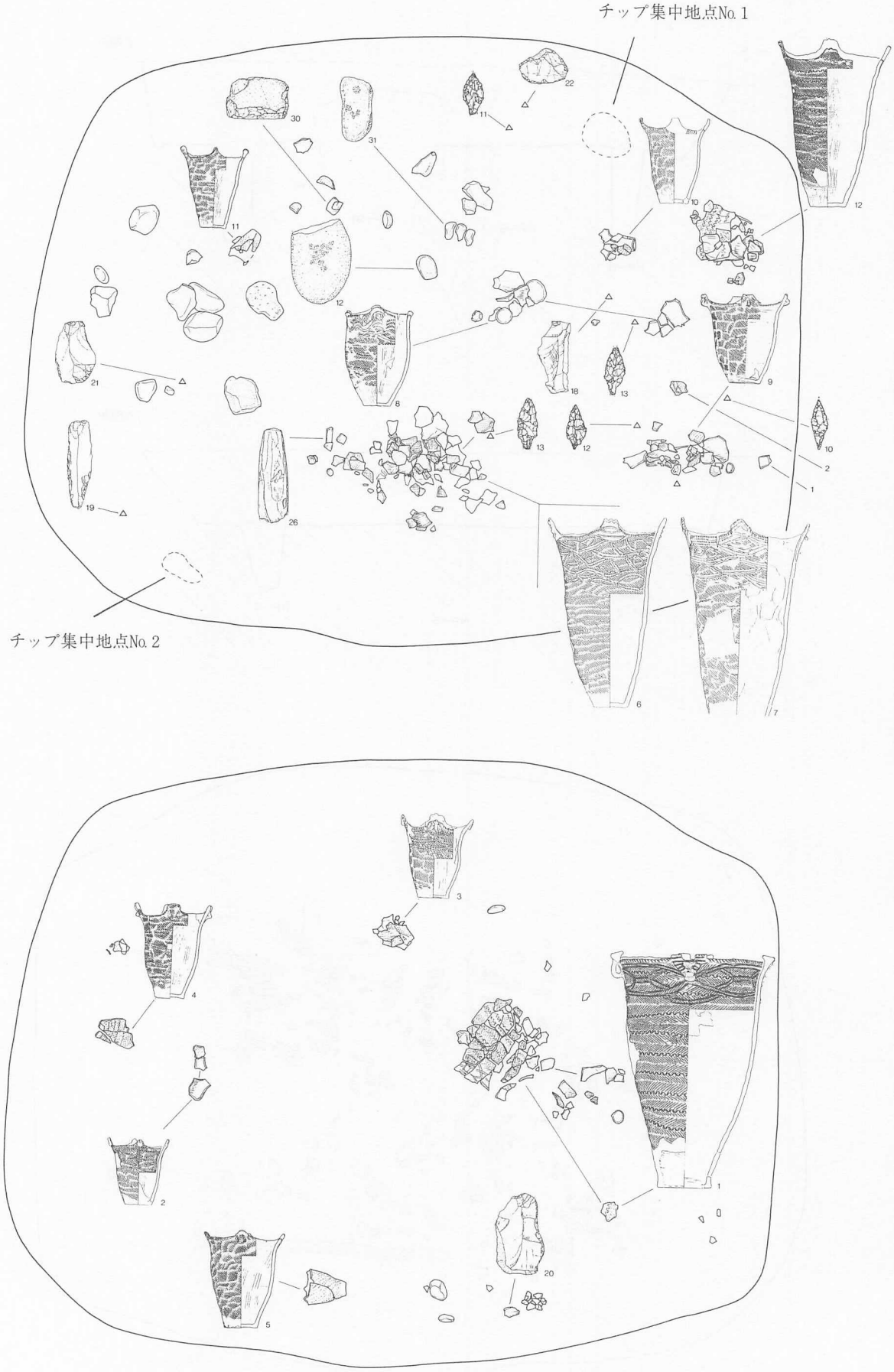






図Ⅲ－41　住居跡(40)・KH－16

0　1m



図Ⅲ－42　住居跡(41)・KH－16

床面近くからは，実測土器が5個体出土した。それらは，1個体の土器が横倒しになり完形もしくはつぶれた状態で出土した。図Ⅲ－43－1，2の土器は床面近くより出土しているが（図Ⅲ－43下段），覆土上部から出土した土器片も各一点ずつ接合している（図Ⅲ－43上段の1，2）。また，図Ⅲ－43－1の土器は床直上から出土しているように見えたが，その土器の下より炭化材が出土している。このことからこれらの土器は床面近くより出土しているものの，本住居跡に伴うものではないと思われる。

つぎに，KH－16の覆土中のチップ混入土壌，焼土のフローテーション・水洗処理の結果をのべる。資料は，覆土中のチップ集中地点No.1・No.2，同じく覆土中の焼土，覆土4層中のチップ混入土壌，炉跡（HF－1）の焼土の5か所について採取した。以下，地点ごとにその結果をのべる。

チップ集中地点No.1からは，チップが2,396点，骨が少量得られた。チップは，めのう質頁岩，頁岩で全体の量の半分程は，火熱を受け赤褐色化している。骨は，種不明であるが獣骨の小片がみられる。

チップ集中地点No.2からは，チップが643点得られている。チップの多くは，めのう質頁岩で火熱を受けた跡は認められなかった。骨は得られていない。

焼　骨

覆土中の焼土からは，頁岩のチップが88点，骨が2.1g得られた。骨は，獣骨（種不明）と魚骨が得られている。魚骨は，ホッケもしくはアイナメの小椎体，ニシンの椎体，サケ科の大型椎体片がみられる。

炉跡（HF－1）の焼土中からは，頁岩のチップが32点，骨が0.3g得られた。骨はいずれも小片のため種不明である。

覆土4層中のチップ混入土壌からは，チップ18点と鳥の脛骨が得られている。

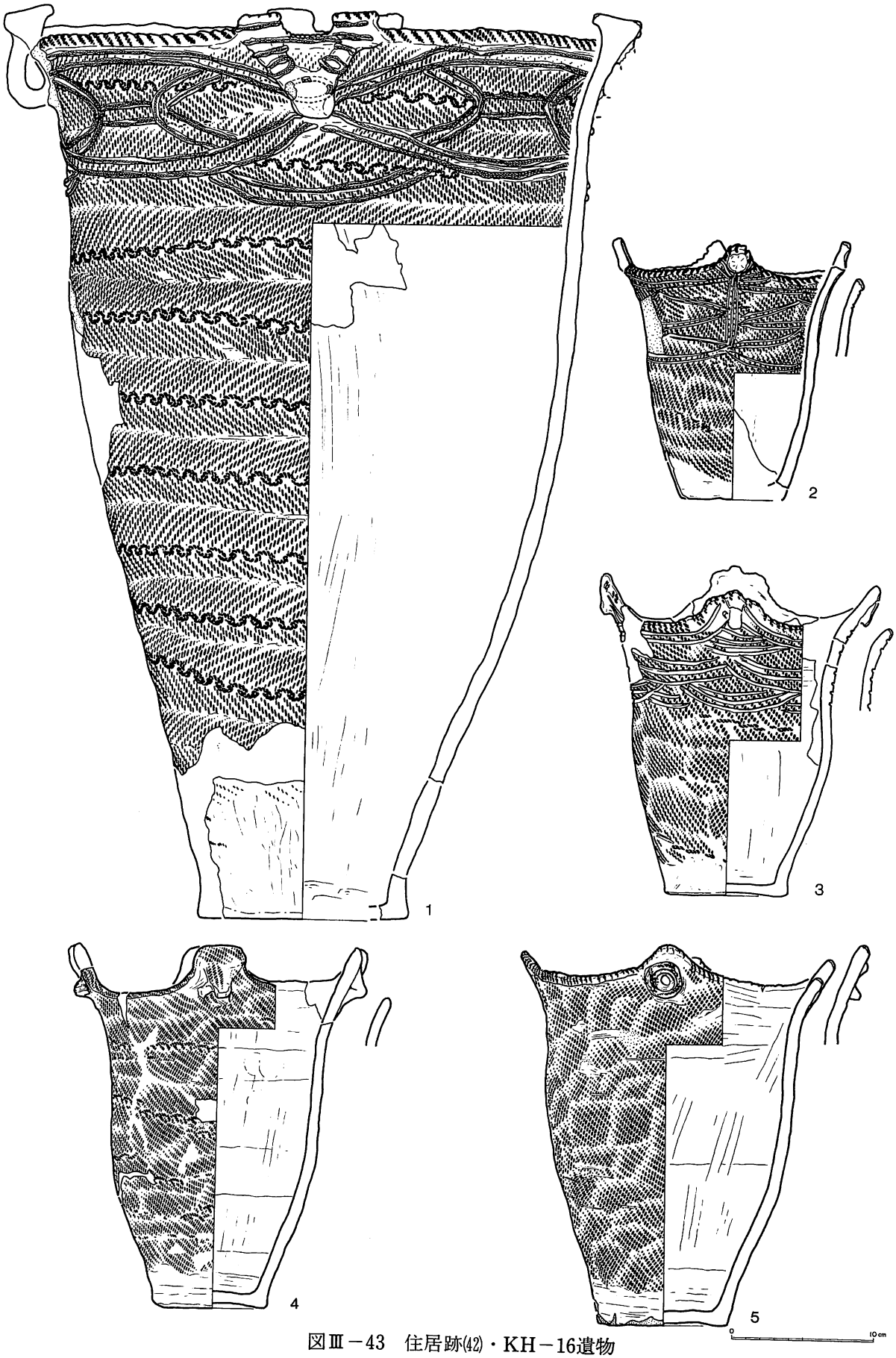
実測土器

遺物　実測土器のうち1～5は床面近くで出土したもの（図Ⅲ－43），6～12は，覆土上部から出土したものである（図Ⅲ－44～46）。拓影土器では，5が床面近くから出土しているほかは，いずれも覆土上部より出土している（図Ⅲ－47）。以下，掲載遺物の特徴について説明を加える。

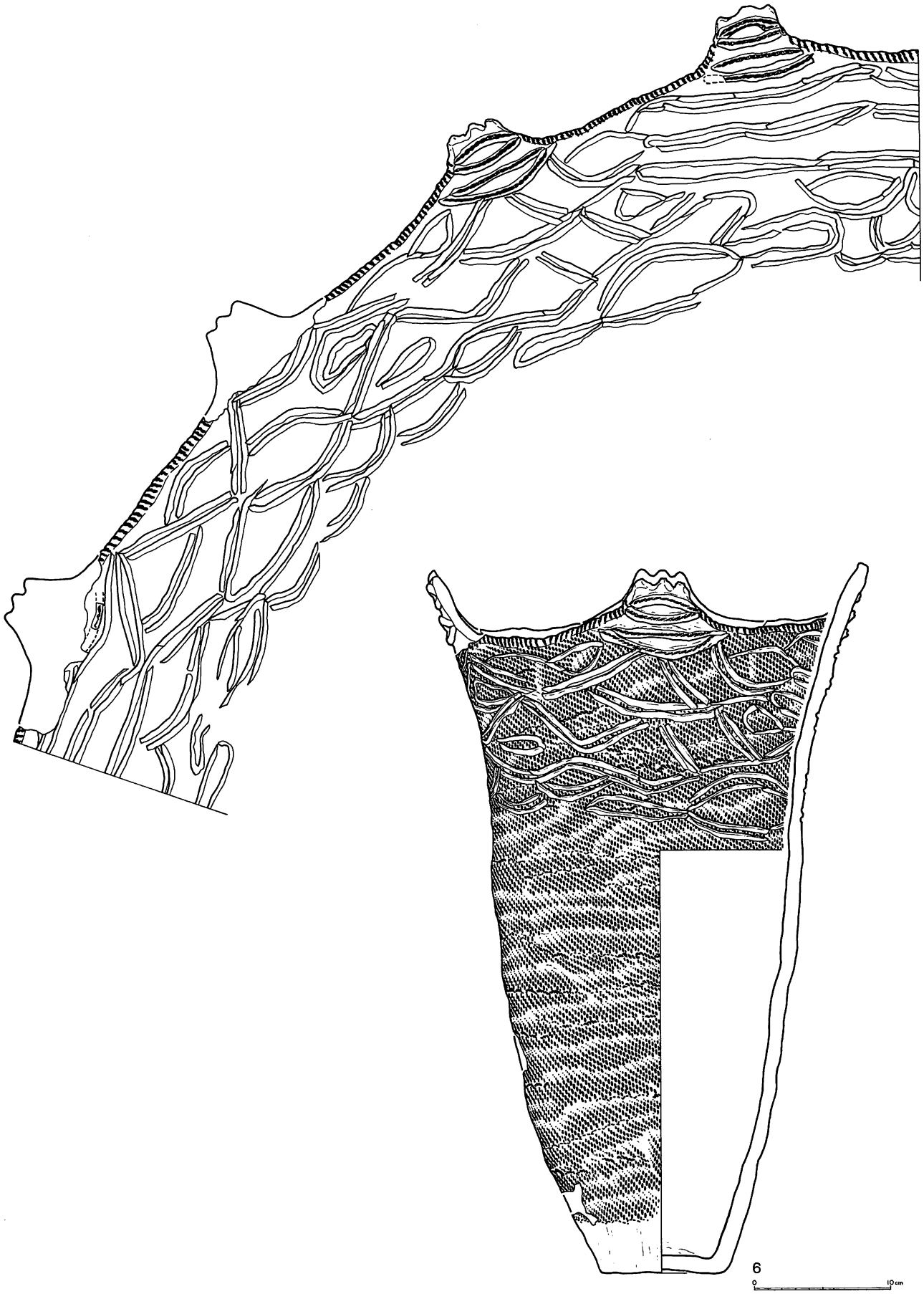
大型土器

1は，口径45cm，器高64cmの大型土器である。2個一組の棒状突起が1対，1個の棒状突起が1対，計4か所に突起がある。突起下には，橋状把手およびY字状の把手がある。口縁部には，2本単位の貼付帯が，弧状または平行につけられている。棒状突起や把手，口縁部に施された貼付帯上には1～2条の縄の圧痕が認められる。地文は，LR－RLの結束第二種羽状縄文が施される。2，3は4個の山形突起をもち．突起の外面に，横位の貼付けや指頭によるくぼみをつける。口縁部文様帯は，2～3本単位の沈線で，ゆるい弧状，直線状の文様を描く。地文は，2がRLRの複節の斜行縄文，3がRLの原体による斜行縄文である。4，5は，文様が縄文のみのものである。4は，弁状突起の外面に縦長の貼付があり，地文はRL－RLの結束第二種斜行縄文である。内面調整は良好である。胎土中には，3 mm以下の小礫が多く認められる。5は，4個の山形突起のうちの1つに環状の貼付けがある。地文は，RLの斜行縄文，口唇にはLRの縄の圧痕がある。胎土中には，5 mm位の小礫を含んでいる。実測図の正面右側には1対の補修孔が認められる。

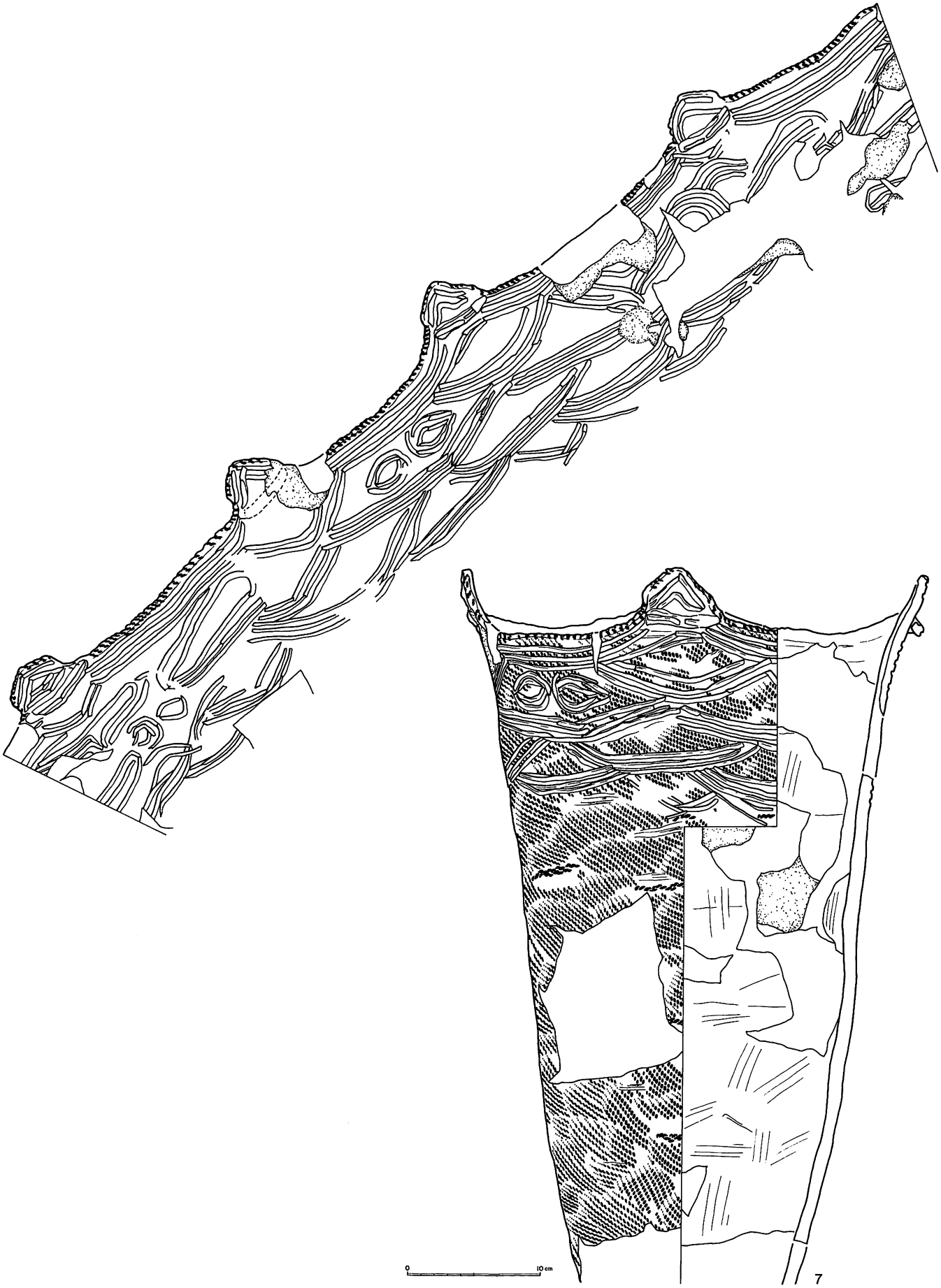
6は，3頂の山形突起を4か所にもち，突起の外面に弧状および直線状の貼付けが横位につけられている。口縁部の文様帯は，胴部の上部⅓までが2本一組の沈線により，弧状・直線状の文様が施されている。7は，五角形の突起が4か所にあり，突起の外面に横長の



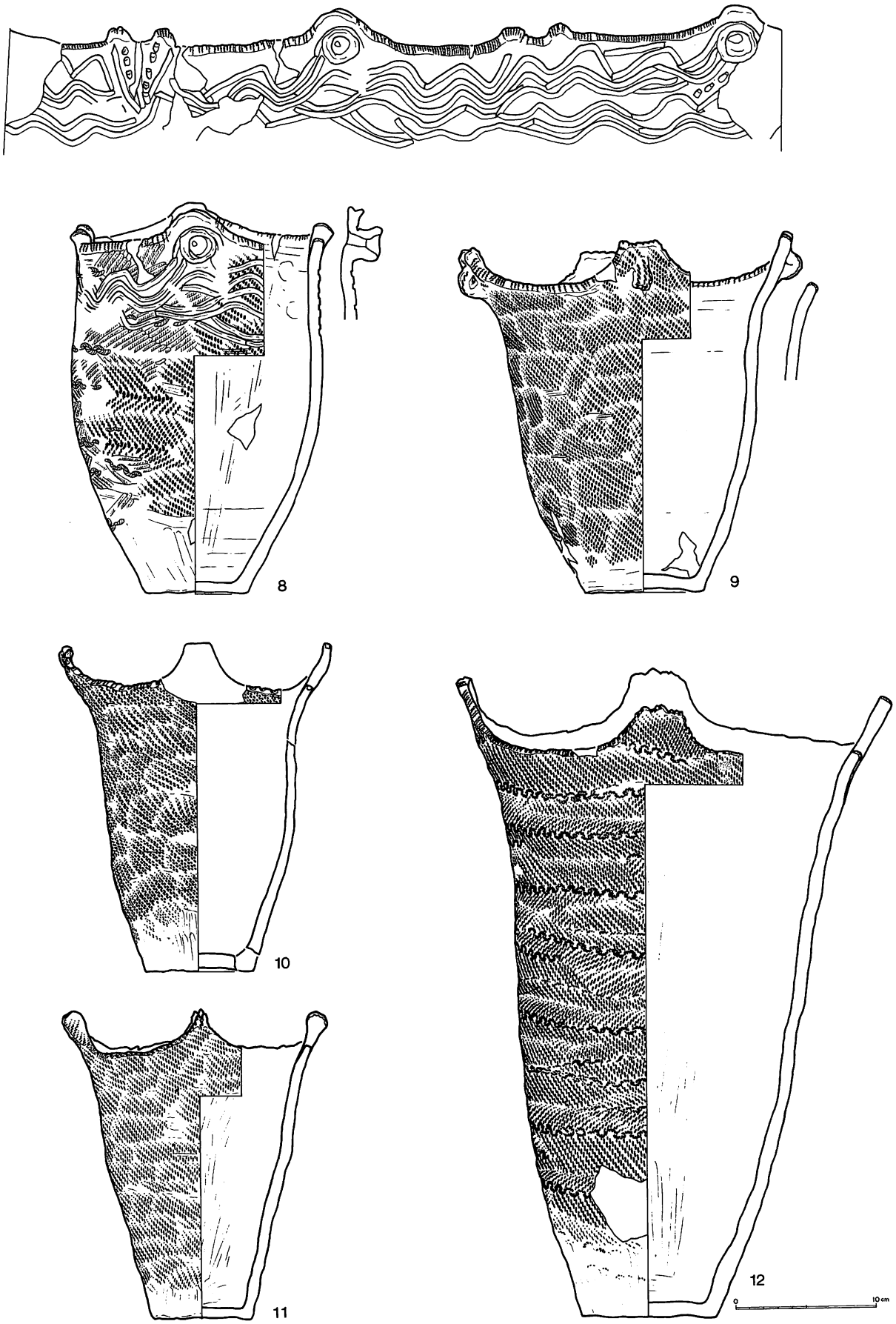
図Ⅲ－43　住居跡(42)・KH－16遺物



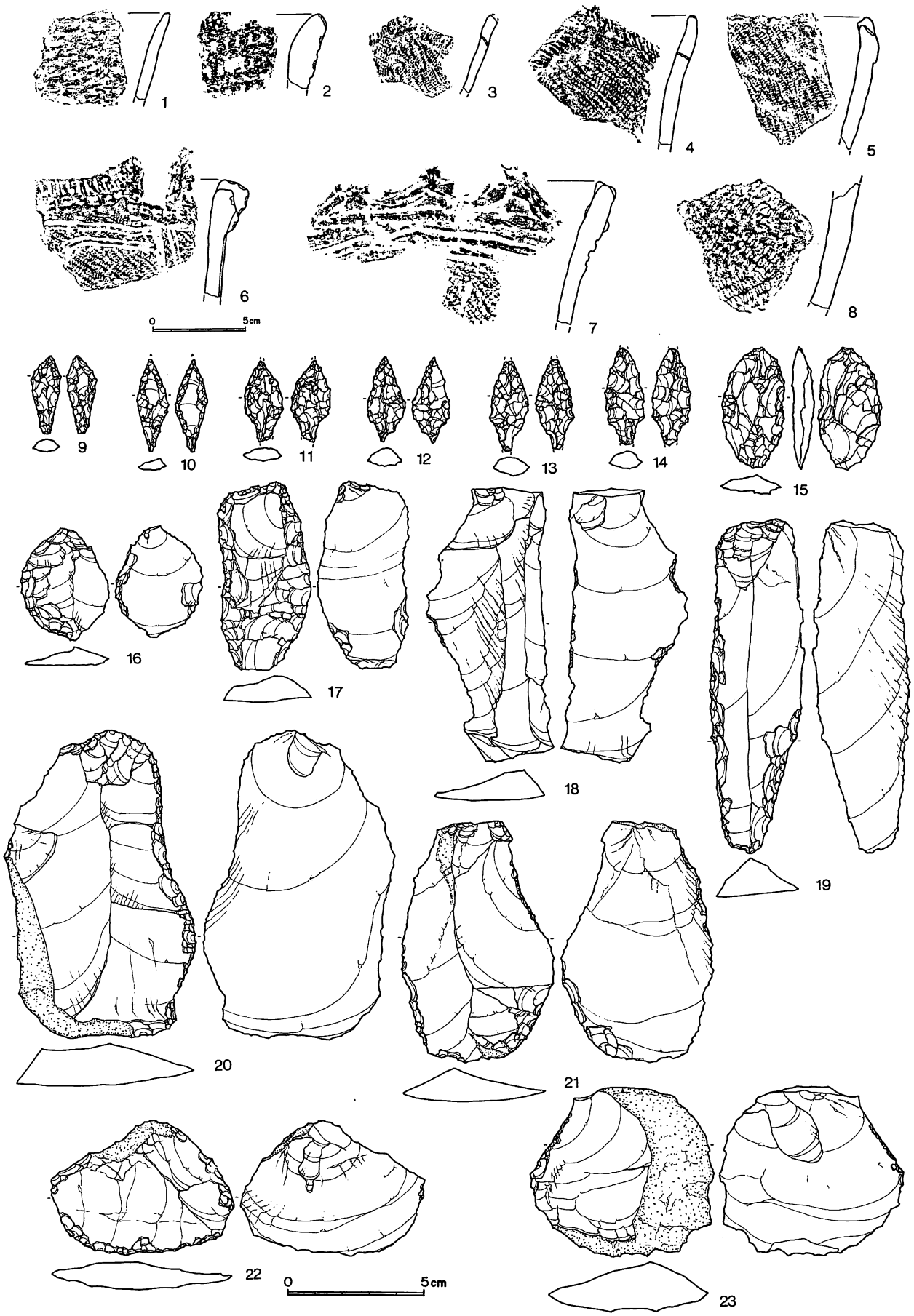
図Ⅲ－44　住居跡(43)・KH－16遺物



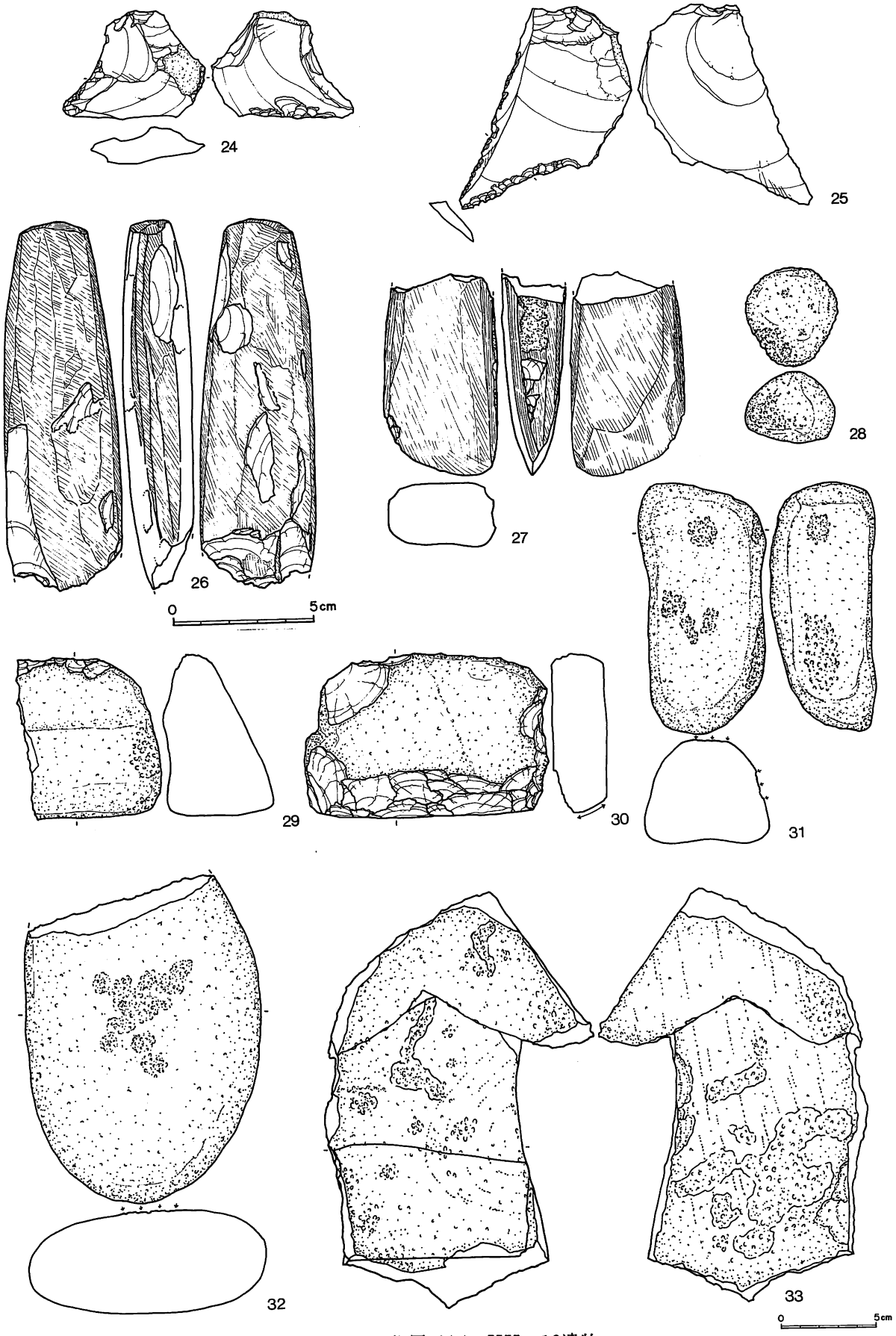
図Ⅲ－45　住居跡(44)・KH－16遺物



図Ⅲ－46　住居跡(45)・KH－16遺物



図Ⅲ－47　住居跡(46)・KH－16遺物



図Ⅲ－48　住居跡(47)・KH－16遺物

貼付けが1本，その上に2本一組の沈線が山形状に配されている。口縁部文様帯には，3条の沈線によるゆるい弧状の文様が描かれている。7は，底部を欠失しているが，6の土器とほぼ同じ大きさのものと思われる。8は，2個1対の突起が4か所に配されている。1対の突起は，山形状の突起で環状の貼付があり頂部には1条の溝がある。ほかの1対の突起は，2個の小さな山形突起が並んだもので，そのうちの1組の突起下には，竹管状工具による縦の刺突文がある。口縁部の文様帯は，波状の沈線が5～6段めぐる。地文は，結束第一・二種羽状縄文が施されている。4～11は，文様帯が地文のみのものである。9は4個の弁状突起があり，その外面には縦長の太い貼付がある。地文は，RL(一部LR)の原体による斜行縄文が施されている。10は，4個の弁状突起をもち，口唇上には竹管状工具による刻み目が施されている。地文は，RLRの原体による複節の斜行縄文である。11は，細い山形突起があり，突起上にはRLの縄の圧痕が縦に1条ある。地文は，RLの原体による斜行縄文が施されている。12は弁状突起上の中央に1つの小突起をもち，口唇上には，細い縄の圧痕が認められる。地文は，RL－LRの結束第二種羽状縄文である。

拓影土器　拓影土器は，1がⅡ群B類の口縁部破片である。胎土中には，繊維の混入の痕が多く認められる。2は，Ⅲ群A_1類の口縁部破片である。3～8はⅢ群A_3類の口縁部および胴部の破片である。3は，その大きさからミニアチュア土器の口縁部と思われる。8は，結束第一種羽状縄文が施された土器で，胎土中には，小礫・砂粒が多く含まれている。

石　器　石器の多くは，覆土上部より出土している。9～14は石鏃，すべて頁岩製である。15は槍先・ナイフ。16～25はスクレイパー，このうち20は床面出土のものである。26，27は石斧で，2点とも緑色泥岩製である。26は刃部を欠失している。27は，右側面に擦り切り痕がみられる。28，31は，たたき石。このうち28はHP－1の覆土中より出土したものである。29，30はすり石。32，33は，台石・石皿である。33は，接合資料で，図の上部のものは，床面近くより，下部の方は，覆土上部より出土したものである。

時期　床面近くの土器より，縄文時代中期中葉（サイベ沢Ⅶ式）の頃と思われる。なお，床面近くの炭化材の^{14}C年代測定の結果は，4,160±35y.B.P.(KSU－1656)である。

（佐川俊一）

KH－17（図Ⅲ－49，50，図版20－1）

位置　D・E－14～16，F－15・16　**規模**　10.50×6.44m（床面のみ）

平面形　楕円形　**床面積**　53.46m²

重複　KP－69，70，71を切る。KP－89に切られる。

削　平　**確認・調査**　すでにⅣ層上面まで耕作が及んでいたため，床面，付属ピット，炉が確認できたにとどまる。調査はこれらを記録した後に床面をさらに掘り下げ，そのほかの付属ピットなどの検出を行なった。

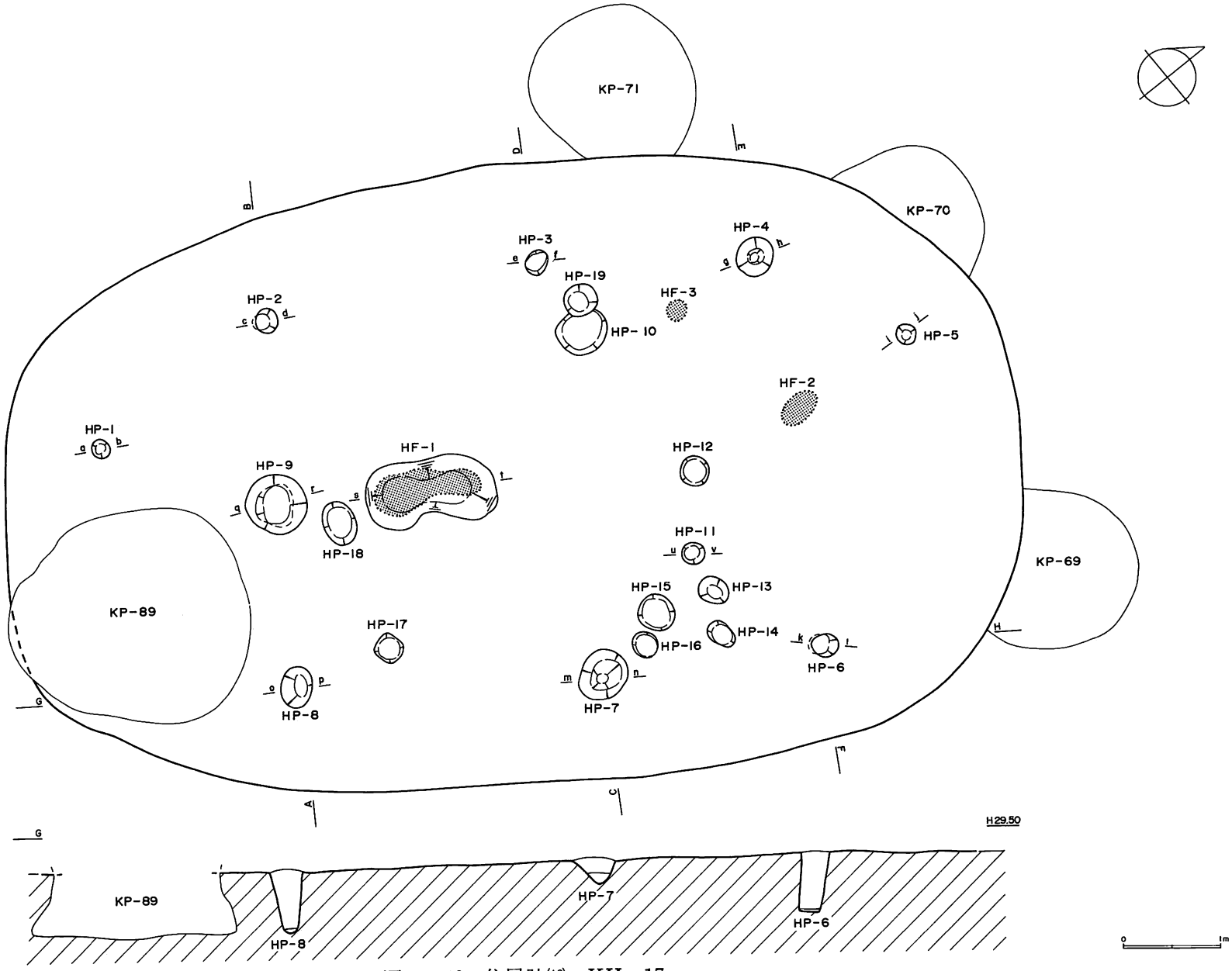
壁　耕作によって消失している。

床　Ⅳ層上面で楕円形の暗黄褐色を呈する範囲を確認した。この暗黄褐色土はKP－69，70，71の壙口の一部を覆い，KP－89の壙口には認められなかった。これらのことから各ピットとの新旧関係がわかった。床面はわずかに南側に傾斜する。

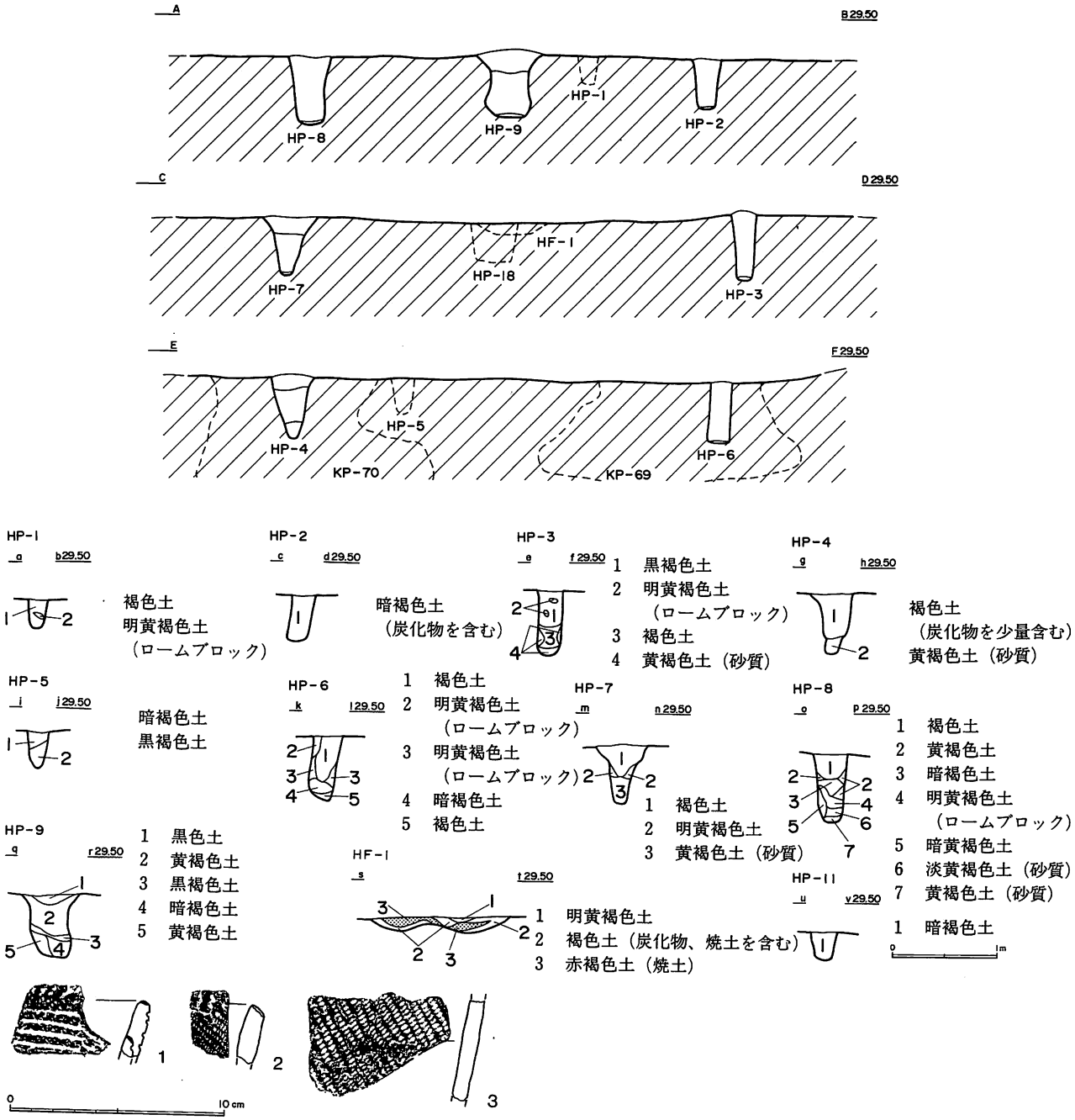
溝　なし。

柱穴　合計19個の付属ピットがある。HP－1～9，12は床面で，11，13～19は床面を約30

KH-17



図Ⅲ－49　住居跡(48)・KH－17



図Ⅲ－50　住居跡(49)・KH－17, －17遺物

cm掘り下げた段階でそれぞれ確認された。これらは深さが28～90cmとばらつきが大きいが，断面形や覆土の状態から柱穴と見なし得るものである。HP－1～8は床面外周より約1m内側にあり，長軸を中心にHP－2と8，HP－3と7，HP－4と6がそれぞれ対称する位置にある。HP－1に対応するものはKP－89によって切られた可能性がある。HP－5に対応するものは検出できなかったが，これを含めて10個の柱穴が主柱穴をなすものと考えられる。　主柱穴

炉　長軸上やや南寄りの位置とHP－4および5の南側の3か所に地床炉がある。長軸上のもの（HF－1）は下位に深さ10cmの皿状のピットがある。

遺物出土状況　すべて付属ピットおよび炉内から出土したもので合計702点である。このうち604点はHF－1覆土を水洗処理した結果得られたチップである。　水洗処理

遺物　1は弁状突起部破片。体部には縄文地に4条の平行沈線文が，口唇には縄の圧痕がそれぞれ施されている。1～3はいずれもⅢ群A_3類土器。4はつまみ付ナイフ。つまみ部を作り出した粗雑なもの。背面には自然面が残されている。5は石斧。6はたたき石。石質は4がめのう質頁岩，5が泥岩，6が安山岩である。

時期　縄文時代中期中葉と思われる。　（石川　朗）

ＫＨ－18（図Ⅲ－51～53，図版20－2）

位置　E・F－21・22　　**規模**　4.19×3.45/3.96×3.26/0.36m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　11.11m²

重複　KH－19を切る。KP－3より新しい。

確認・調査　Ⅱ層調査中に平面形と黄褐色土の広がりを確認した。この黄褐色土はKH－18の覆土にはなく周辺のD・E－7～9区，F－8区，およびKH－19竪穴内に分布しており，遺物がまったく出土しなかった。このことから本住居跡の掘り上げ土と考えられる。なおKP－3との新旧関係は，この掘り上げ土が壙内に直接堆積していることから判断した。

壁　立ち上がりは明瞭で，高さは34cmある。

床　平坦である。

溝　北コーナーを除き壁際に掘られている。大きさは最大で幅10cm，深さ5cmである。

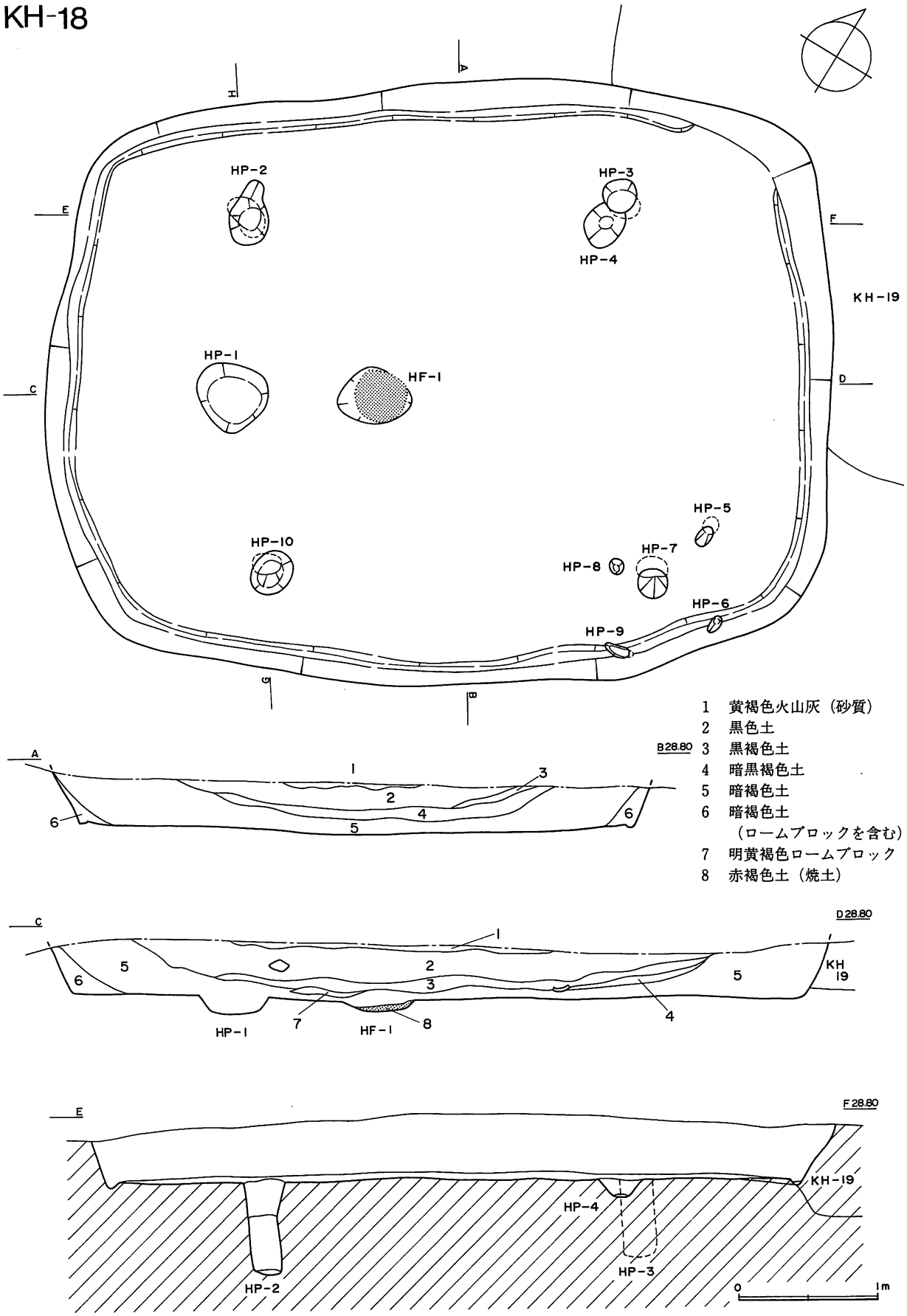
柱穴　付属ピットは10個検出された。このうちHP－2，3，7，10は深さが50cm以上あり，この4本が主柱穴をなすものと考えられる。

炉　長軸上やや西寄りの位置に1か所あり，その下位に深さ7cmの浅い皿状のピットがある。

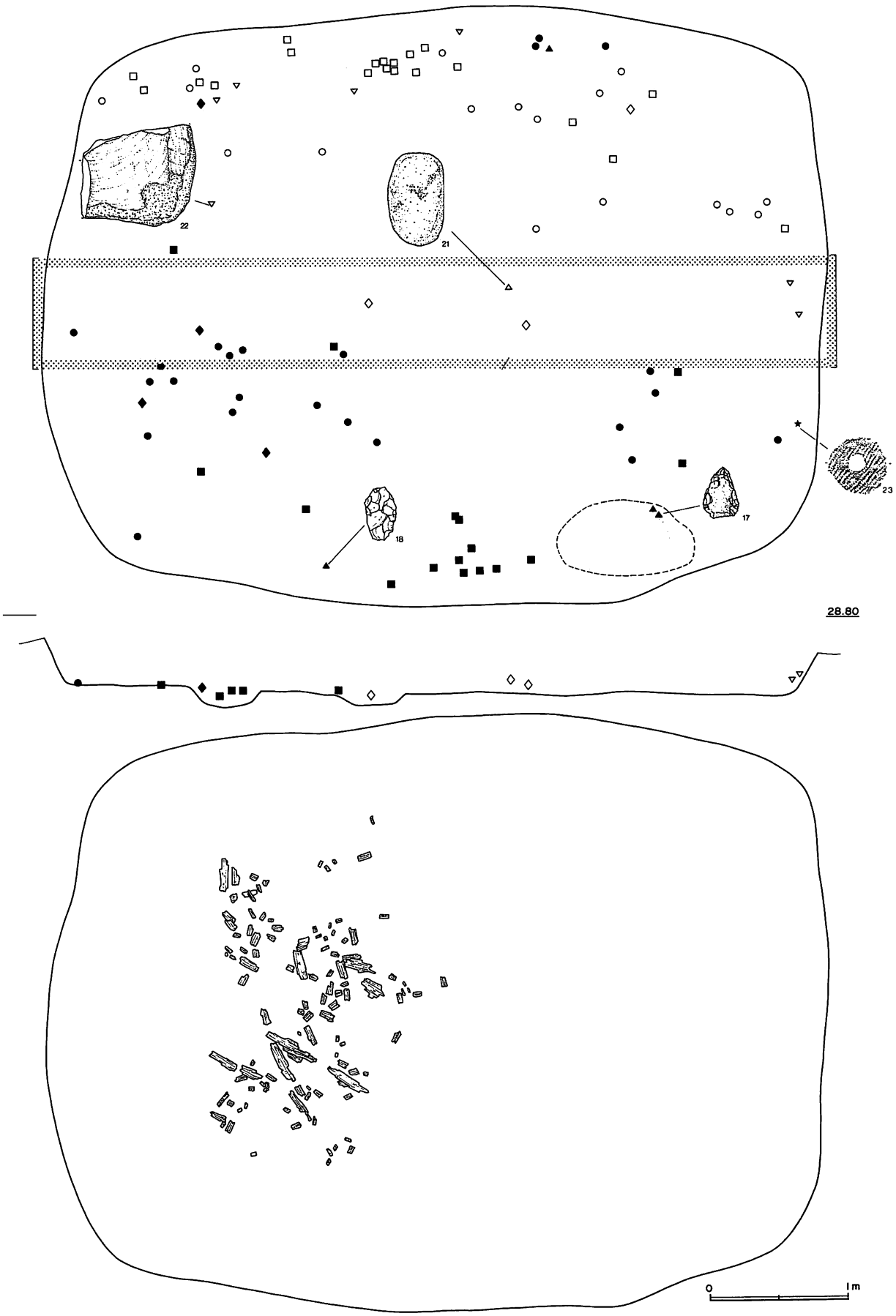
覆土・炭化材　1層は黄褐色火山灰。遺構覆土で火山灰層が確認されたのは本住居跡のみである。床面から5～10cm上位の5層中で炭化材が検出された。このことから本住居跡は火災住居と考えられる。これらは平面的には西半分に分布している。炭化材の形状による特徴的な分布傾向は認められなかった。　火災住居

遺物出土状況　床面出土が156点，覆土出土が978点ある。床面出土遺物は南半に片寄る傾向がある。南東コーナ付近からは100×56cmの範囲でチップの集中が認められた。これは土ごと採集し水洗した結果329点のチップが得られた。　チップの集中

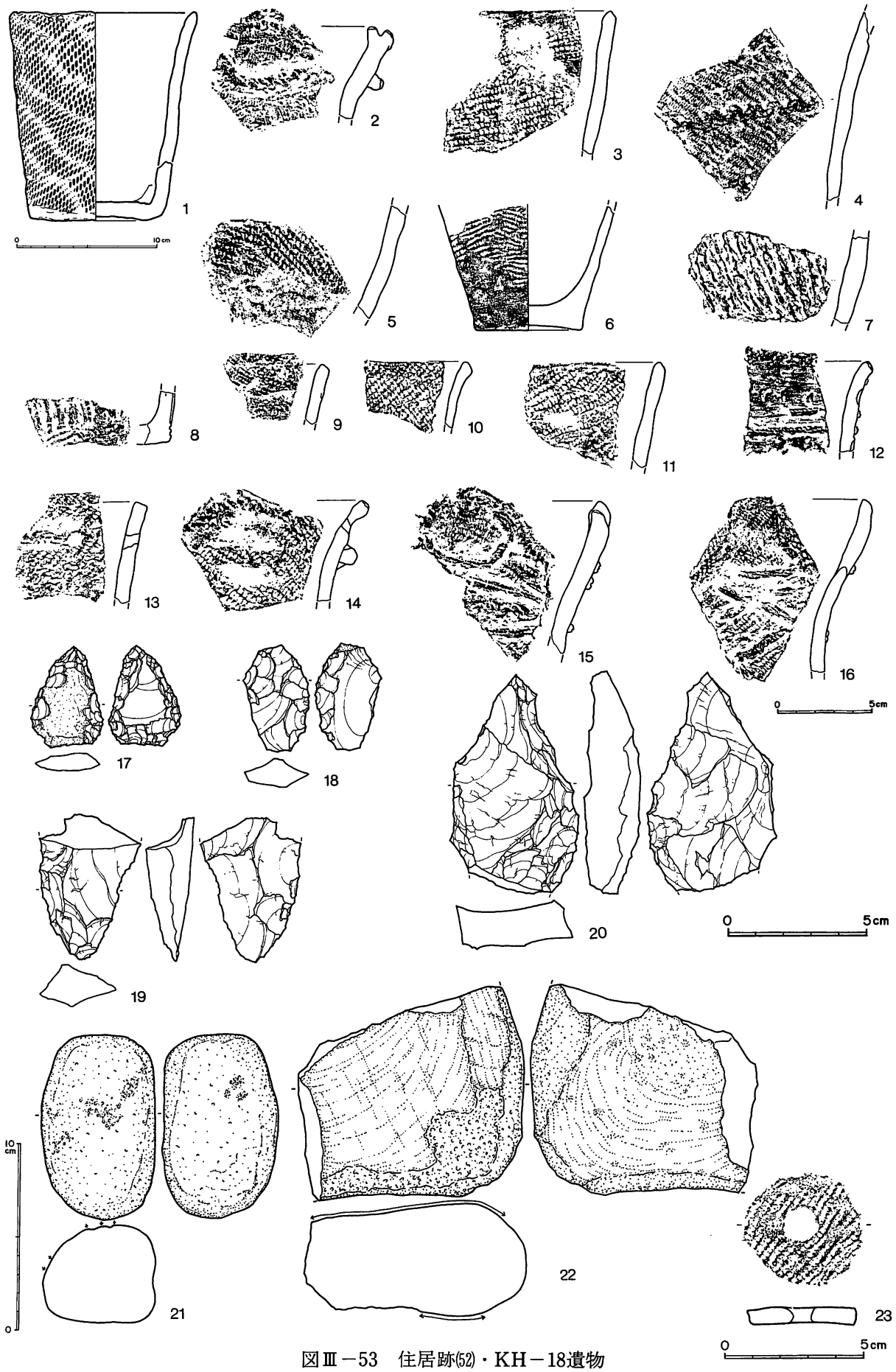
遺物　2～6，17，18は床面，そのほかは覆土から出土したもの。7はⅡ群B類土器の底部および胴部破片。無節の撚糸文が施されている。1はⅢ群A_1類土器。内面，底面ともよく磨



図Ⅲ－51　住居跡(50)・KH－18



図Ⅲ－52　住居跡(51)・KH－18



図Ⅲ－53　住居跡(52)・KH－18遺物

かれている。14はⅢ群A_3類土器の口縁部破片。横位の耳状突起が貼付されている。17, 18, 20はスクレイパー。17はチップ集中箇所から出土したもの。20は槍先またはナイフの未製品の可能性もある。19は槍先またはナイフ。21はたたき石。22は石皿・台石。23は円盤状土製品。

時期　縄文時代中期。床面出土の炭化材の^{14}C年代測定結果は,3,930±40y.B.P.(KSU－1657)である。　(石川　朗)

ＫＨ－19（図Ⅲ－54～63, 図版21～23）

位置　Ｅ・Ｆ－９～11　　**規模**　7.60×6.74/7.48×6.46/0.58m

平面形　五角形　　**床面積**　41.74m²（上段を含む総床面積）

重複　KH－16・18に切られる。

確認・調査　Ⅳ層上面で北側と南側の一部をKH－16, KH－18にそれぞれ切られる細長い五角形のプランを確認した。長軸はほぼ南北方向で南側は角，北側は五角形の底辺の部分にあたる。北東コーナーはほぼ直角で，東側の二辺は直線的であるのに対し，西側はやや丸味を帯びている。土層の観察はメインセクションであるＦライン，これと直交する方向，KH－16長軸延長セクションの３面で行なった。入れ子状に住居跡が重複している可能性も想定し，覆土の掘り下げにあたってはセクションベルト脇にサブトレンチを設け，重複の有無，遺物の出土状態について予備調査を行なった。その結果，本住居跡は床面が２段あり，「ベンチ状」「ベット状」と呼ばれる構造をもつものであること，大量の土器が住居跡廃絶後何枚かの面に一括投棄されていること,KH－18の掘り上げ土と類似するが分布範囲の異なる土層があることがわかった。　住居跡の重複

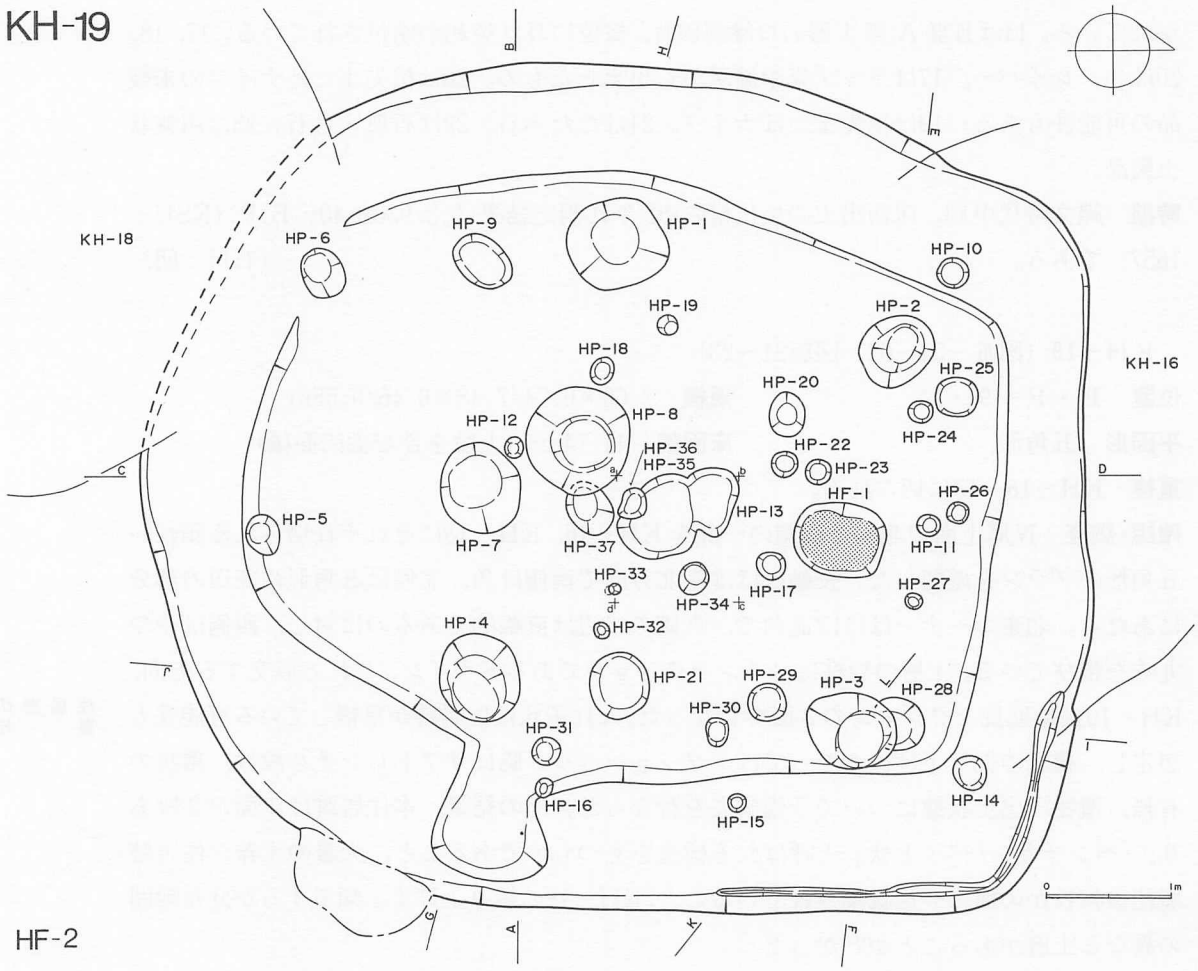
これらのことから本格的な掘り下げにあたっては可能な限り遺物出土状態の実測，出土層位の記録を行い面の把握に努めた。遺構の実測，写真撮影などの作業がすべて終了した後に床面をさらに10cm掘り下げ付属ピットの検出を行なった。

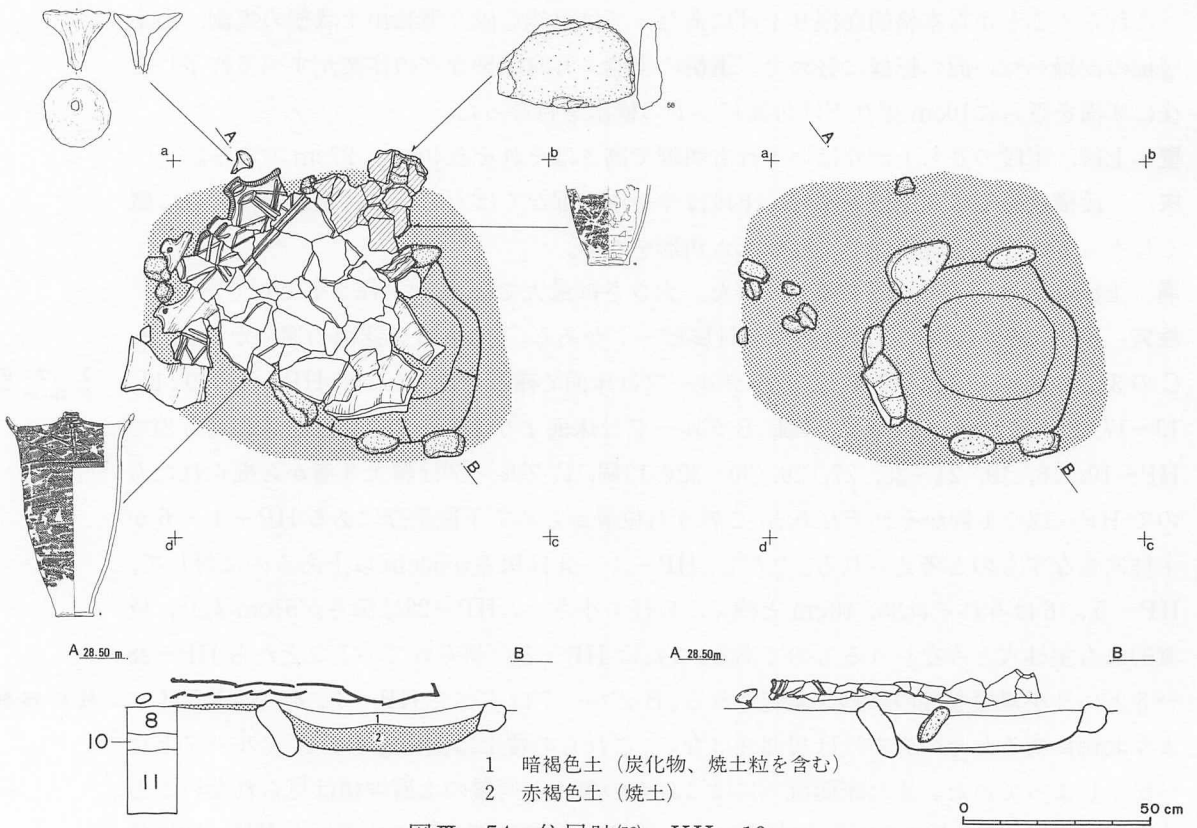
壁　上段，下段の立ち上がりはいずれも明瞭で高さはそれぞれ40cm, 27cmである。

床　二段構造をなす。上段は平坦，下段はやや中央部がくぼんでいる。上，下段ともに堅くしまっている。下段床面の平面形は六角形をなす。

溝　上段北東コーナ部壁際で確認された。大きさは最大で幅16cm，深さ８cmである。

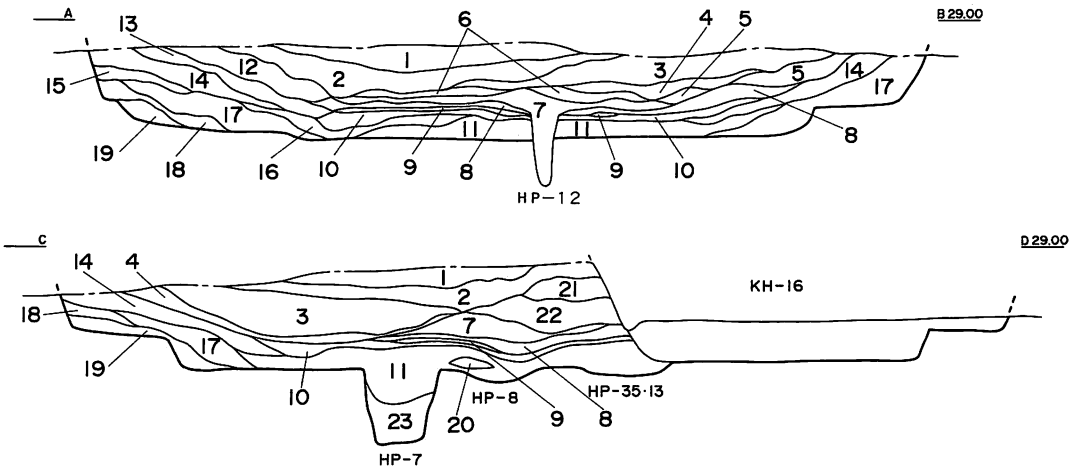
柱穴　KH－19竪穴内には合計37個の付属ピットがある。これらは確認面の違いからA, B, Cの３つのグループに分けられる。Aグループは床面で確認されたものでHP－１～９,11, 13～17, 20, 26, 28, 33～37の23個，Bグループは床面より５cm下位で確認されたものでHP－10, 18, 19, 21～25, 27, 29, 30～32の13個，Cグループは覆土８層から掘られたものでHP－12の１個がそれぞれある。このうち位置からみて下段壁際にあるHP－１～６が主柱穴をなすものと考えられる。ただし，HP－１～４は深さが50cm以上あるのに対して，HP－５，６はそれぞれ30, 10cmと浅く，口径も小さい。HP－28は深さが57cmあり，位置的にも主柱穴とみなしうるものである。これはHP－３に切られていることからHP－28→３という小規模な柱の移動が想定される。Bグループはすべて HP－１，４を結ぶラインより北側にあるがその分布には規則性はない。これらの覆土は黄褐色土でＡグループと比べ堅くしまっていた。また床面直上にはこれらの覆土と同質の土層堆積は見られないことから，意図的に埋めもどされた可能性がある。Cグループは確認面の位置からKH－19に付　３つのグループ　柱の移動

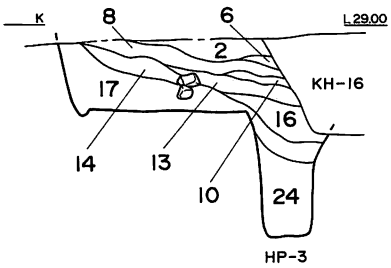




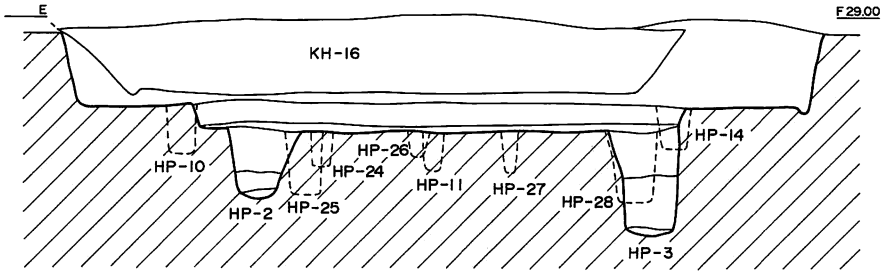
1　暗褐色土（炭化物、焼土粒を含む）
2　赤褐色土（焼土）

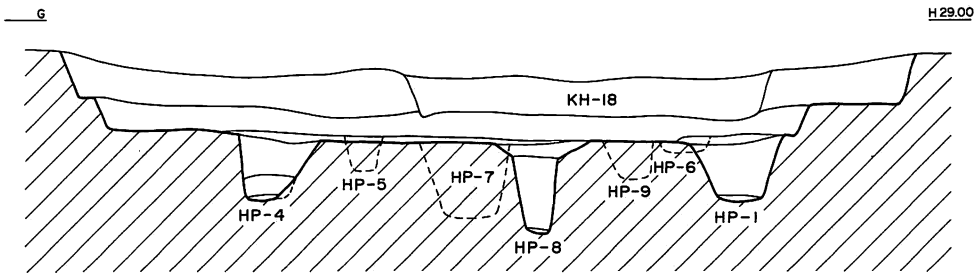
図Ⅲ－54　住居跡(53)・KH－19

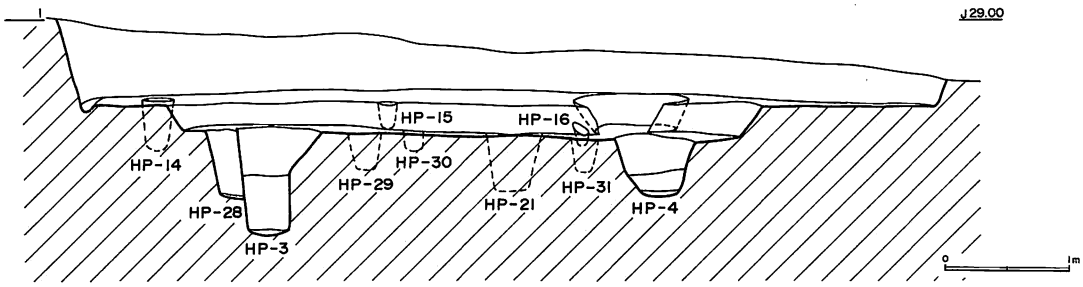




1　褐色土（ロームブロックを含む）
2　暗褐色土（ロームブロックを少量含む）
3　黄褐色土（KH－18掘り上げ土）
4　黒色土
5　黒色土
6　黒色土
7　黒褐色土（ロームブロックを含む）
8　暗茶褐色土（ローム粒を少量含む）
9　黄褐色土
10　黒色土
11　茶褐色土（ローム粒を多量含む）
12　黄褐色土
13　暗褐色土
14　茶褐色土
15　褐色土
16　茶褐色土
17　暗茶褐色土
（黒色土ブロックを少量含む）
18　黒褐色土
19　黒色土
20　暗黄褐色土
21　黒色土
22　黒褐色土
23　暗黄褐色土
24　暗黄褐色土

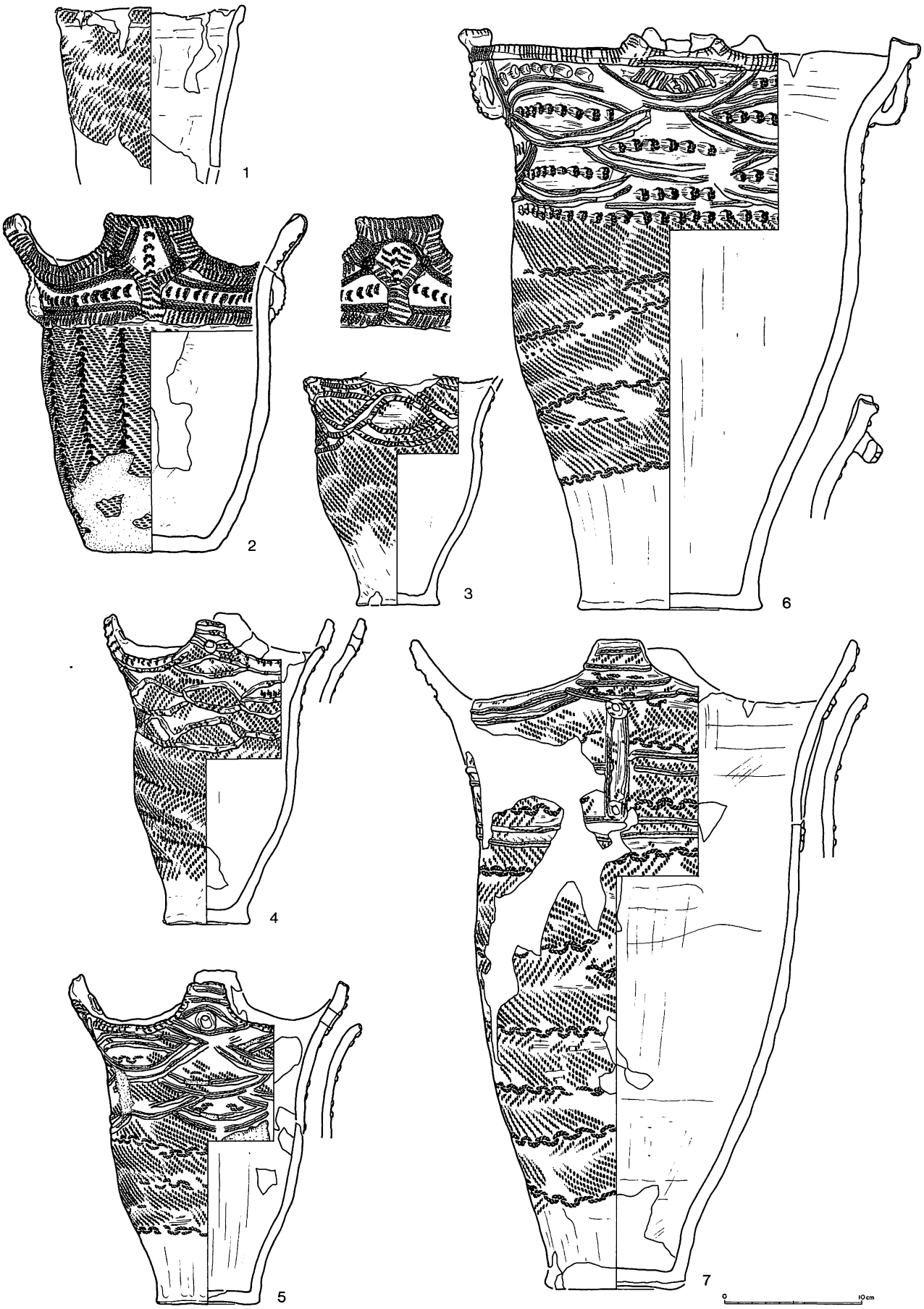




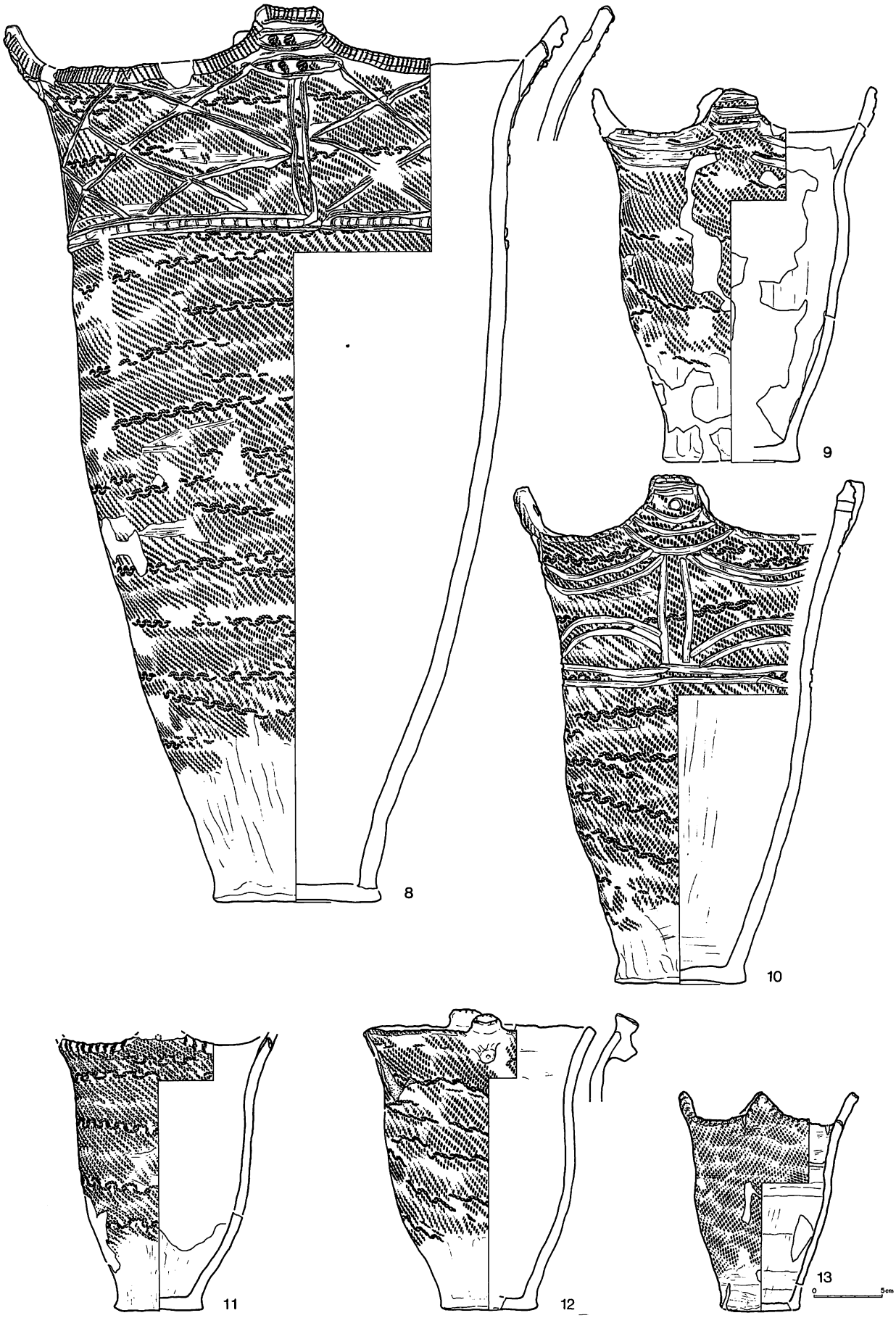


図Ⅲ－55　住居跡(54)・KH－19

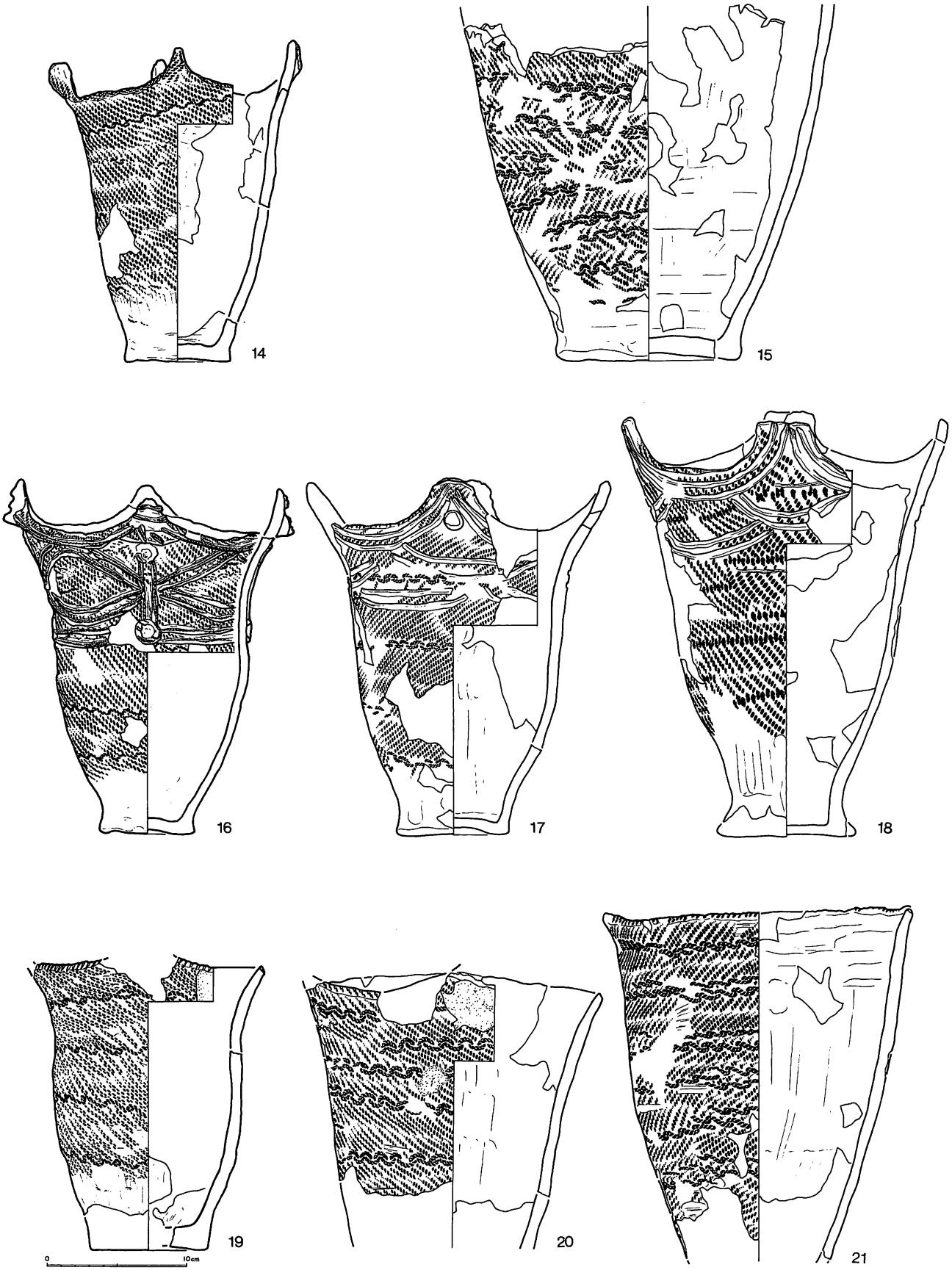
図Ⅲ－56　住居跡(55)・KH－19



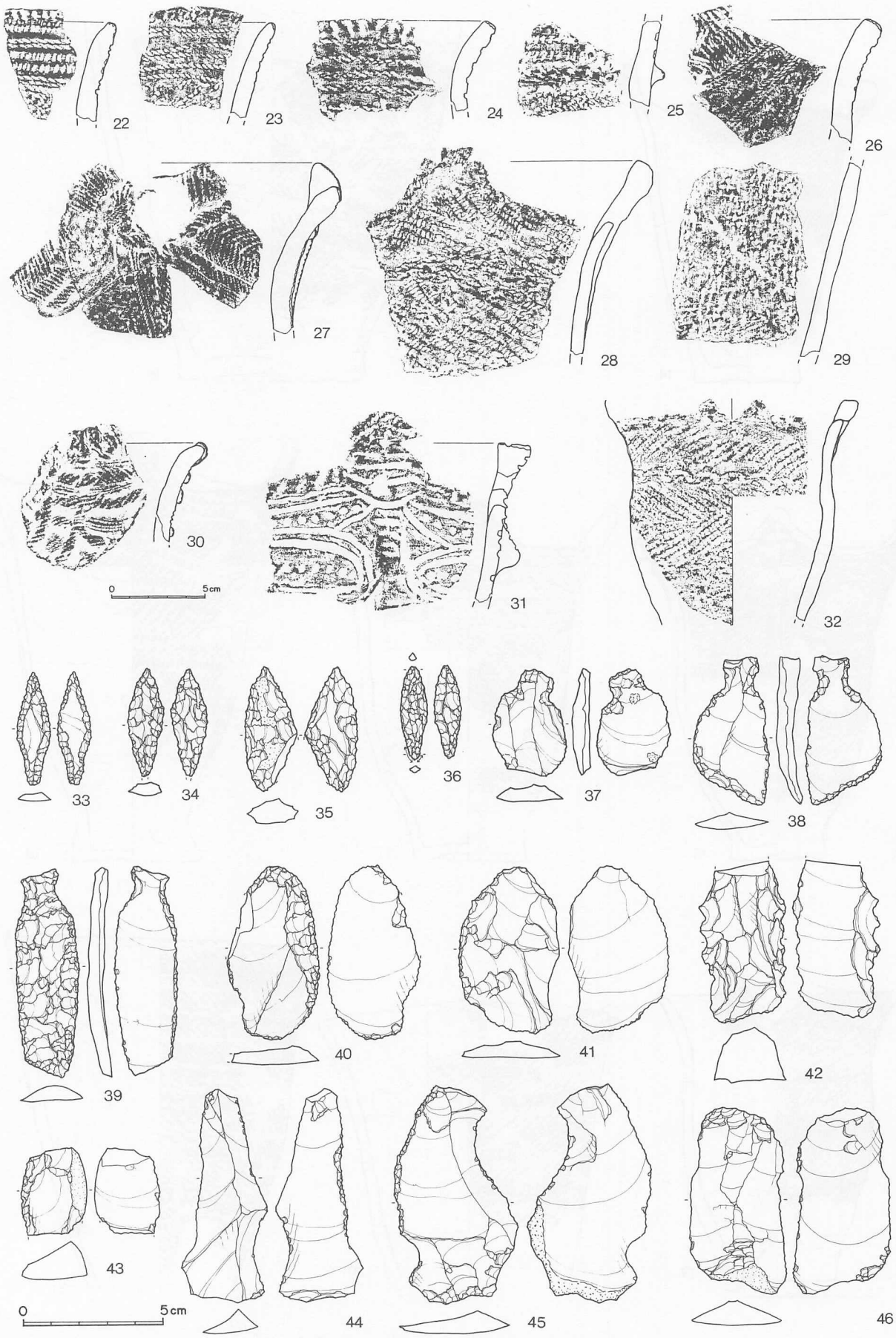
図Ⅲ－57　住居跡(56)・KH－19遺物



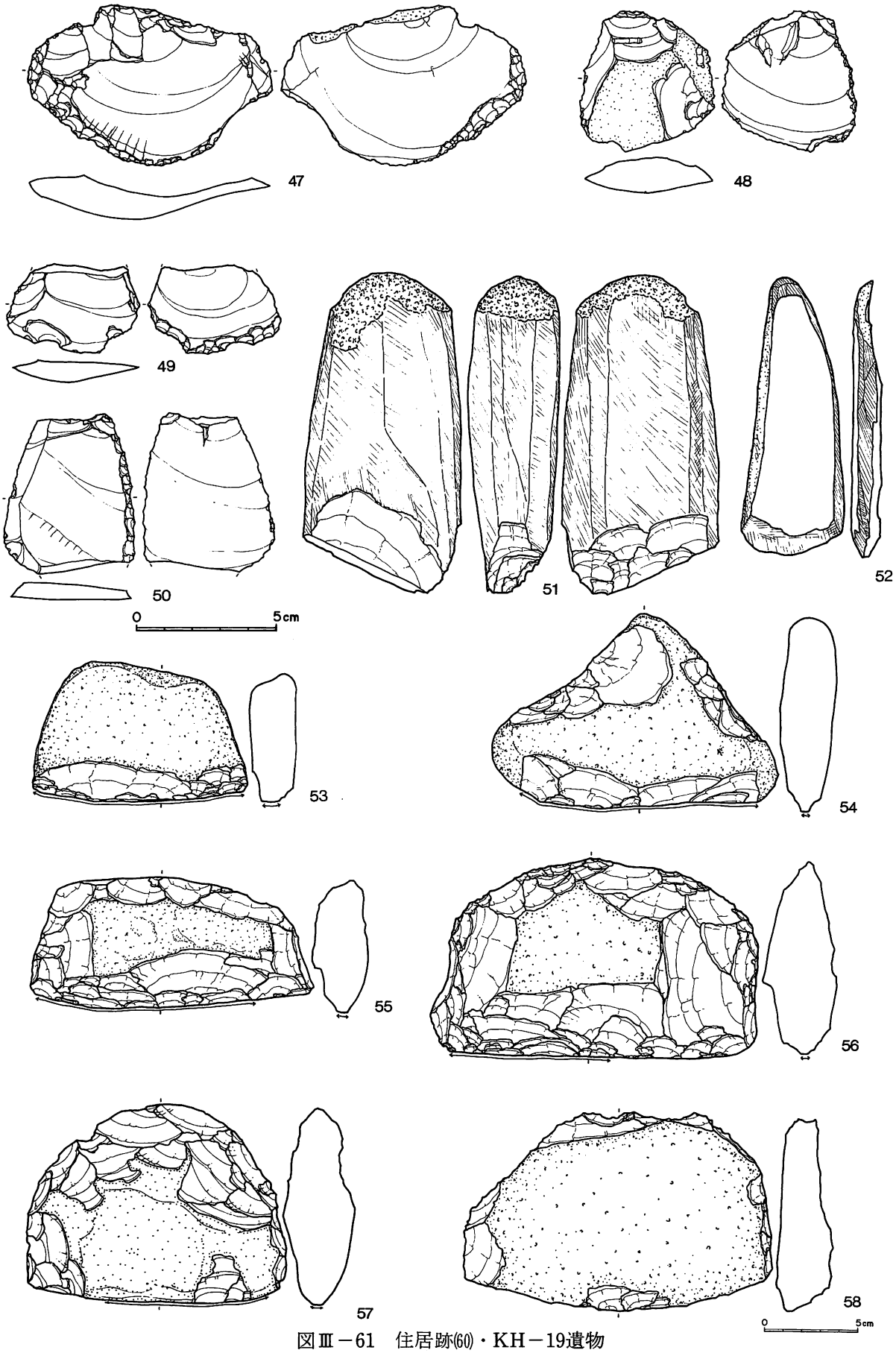
図Ⅲ－58　住居跡(57)・KH－19遺物



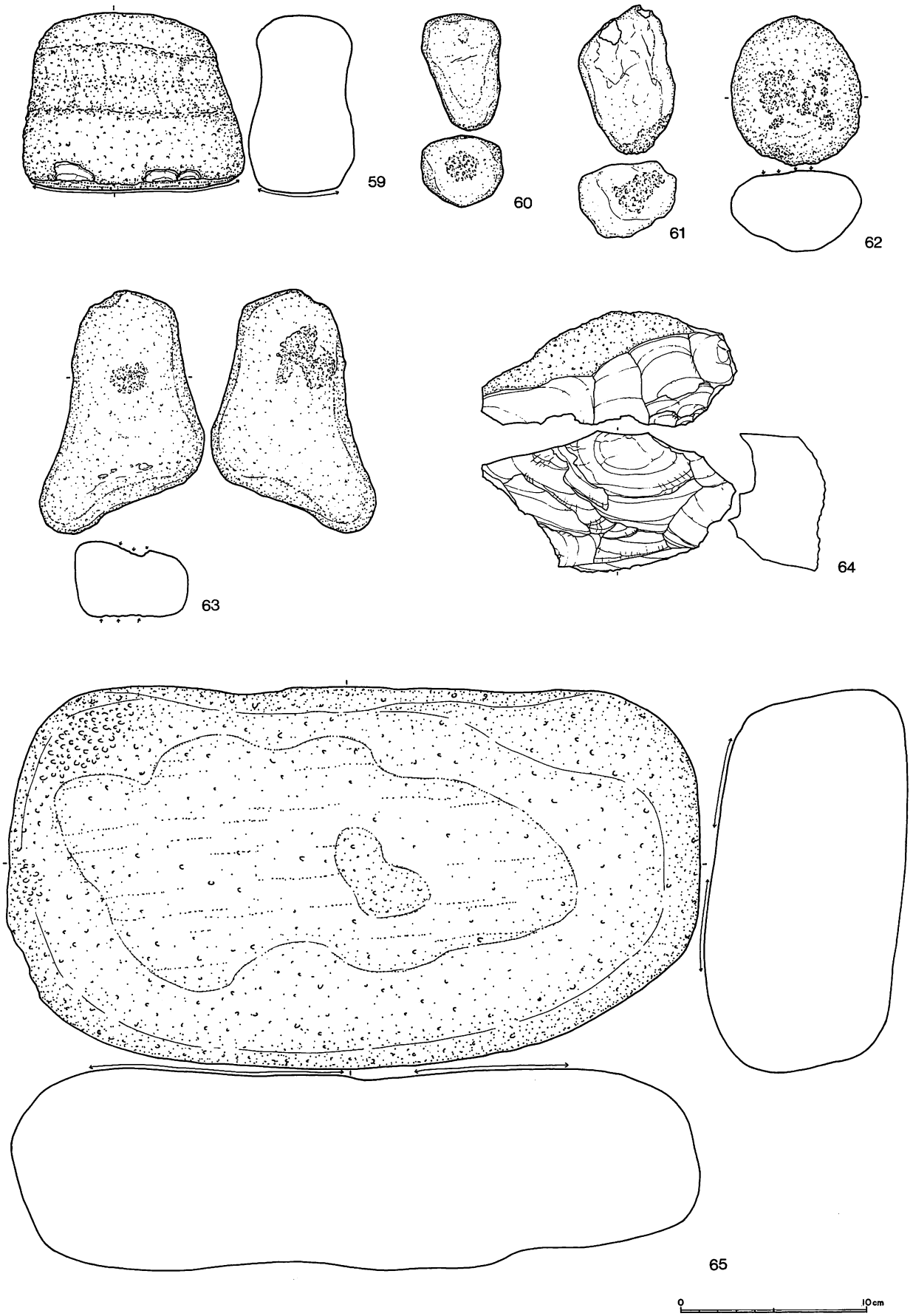
図Ⅲ－59　住居跡(58)・KH－19遺物



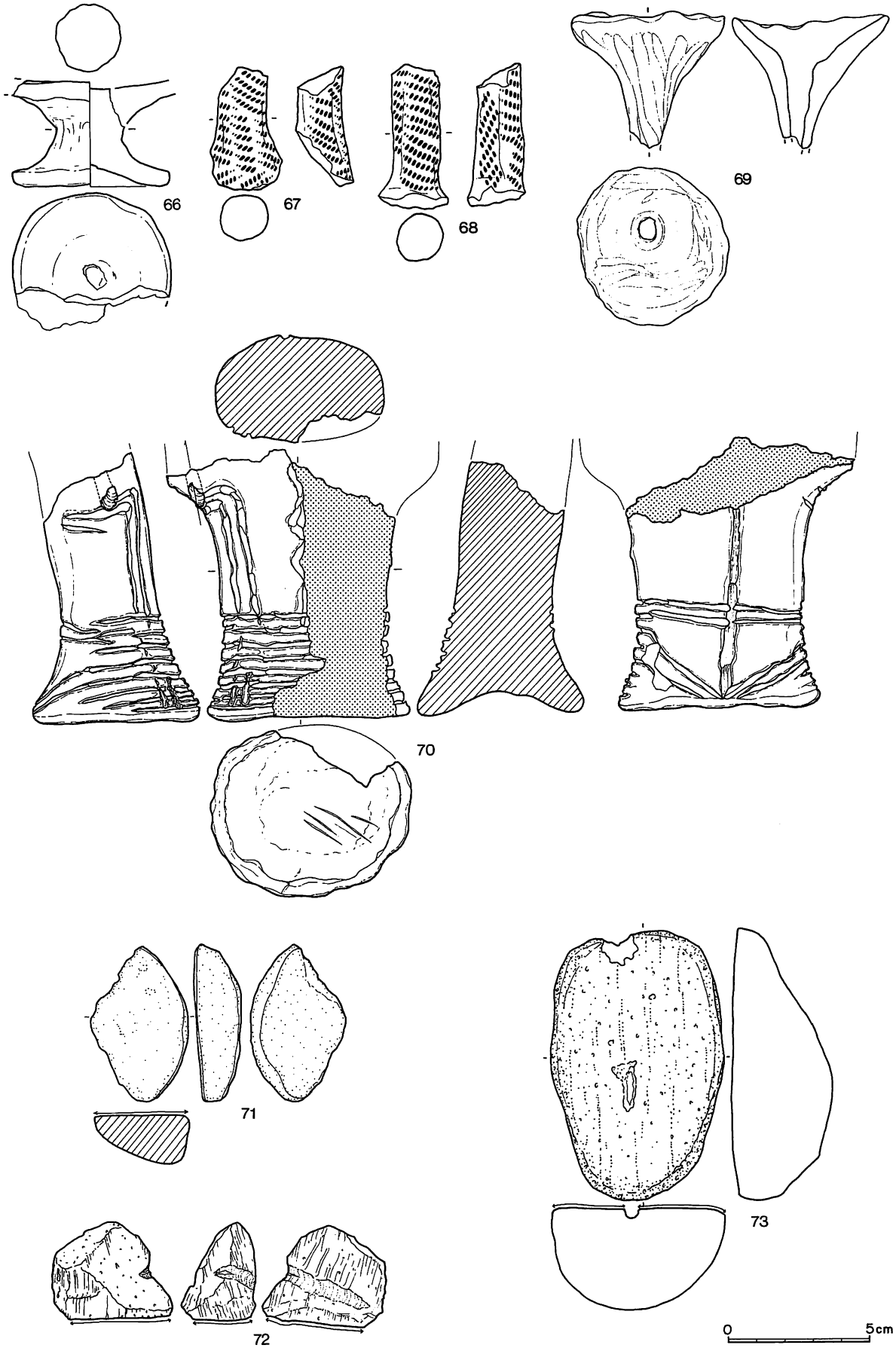
図Ⅲ－60　住居跡(59)・KH－19遺物



図Ⅲ－61　住居跡(60)・KH－19遺物



図Ⅲ－62　住居跡(61)・KH－19遺物



図Ⅲ－63　住居跡(62)・KH－19遺物

属するピットではない。

炉　KH－19に伴うものが1か所（HF－1），覆土内で検出されたもの（HF－2）が1か所ある。HF－1はHP－2と3の中間にあり下位に長さ73cm，幅58cm，深さ5 cmのⅢ状のピットがある。HF－2は竪穴中央，8層中で検出された。これは長さ57cm，幅48cm，深さ9 cmのピットに6個の石組みをもつものである。焼土はピット内および周辺に広がっている。

覆土　8～11，13，20，23，24層は住居廃絶後に竪穴内に流れ込んだものである。8層の堆積途中に竪穴のくぼみ中央では，HF－2，HP－12が作られている。3層はKH－18の掘り上げ土である。12層は均質な黄褐色土でかつ無遺物層である，3層同様一度に堆積したものと考えられる。しかし，KH－19東側から中央に向かって堆積しており，乗直方向においても3層とは結びつかない。これらのことから別遺構の掘り上げ土の可能性がある。

遺物出土状況　床面出土が47点，覆土出土が4,365点ある。出土層位別に大きく床面，4層以下，1～2層内の3つに分類される。床面では上段壁際で図Ⅲ－57－1の土器が出土した。このほかでは石器類が下段から出土している。4層以下では17，19層相当から正立した状態で図Ⅲ－57－2の土器が出土した。これは周辺の土層を観察することは出来なかったが，埋甕の可能性がある。HF－2と同レベルないし直上からは図Ⅲ－58－8，図Ⅲ－59－15の土器や漏斗状土製品，すり石が出土した。4層上面では9個体の土器（図Ⅲ－57－3，4，5，図Ⅲ－58－9～13，図Ⅲ－59－14）がまとまって出土した。いずれもほぼ完形の土器で，接合はすべて4層上面の遺物だけで帰結している。これらは3層に直接覆われておりKH－18が掘られる直前ないし，その作業中に意図的に廃棄されたものと考えられる。1～2層からは土偶1個を含む6個体の土器（図Ⅲ－59－16～21）が出土している。4層上面の土器同様，ほぼ完形でその場で押し潰されたような状態で出土している。平面的にも住居内東半に集中しており一括廃棄された可能性が強い。

埋　甕

遺物　土器が3,827点，石器が58点ある。1，43，51が床面出土。このほかは覆土から出土した。1，22～25，29はⅢ群A_1類土器，1は口縁部が肥厚する。胎土に植物繊維が微量含まれる。29は多軸絡条体の回転文が施される胴部破片。2，26，27，30はⅢ群A_2類土器。2は縄の圧痕のある貼付帯で文様帯を区画し，貼付帯内際をR 2本，L 1本の3本の縄を平行して押圧し，馬蹄状圧痕文を加えたもの。胴部は結束第一種羽状縄文を縦方向に施文している。上記以外の土器はすべてⅢ群A_3類土器である。3は口縁部に波状，円弧状の2本1組の貼付帯をもつもの。貼付帯上には縄により刻みがある。6は口唇部に3個一組の突起と1個の突起を1対ずつ配し，3個突起の直下には横形の耳状把手，1個突起の下には縦形の耳状把手がそれぞれある。口縁部には2本一組の貼付帯を円弧状に5段施している。貼付帯上には同方向の撚りの2本の縄の押圧がある。円弧状内部の4分の3周は馬蹄形圧痕文が，残り4分の1周は管状工具による刺突が施されている。7は口縁部を2本一組の貼付帯で区画し，さらにその内部を弁状突起の最下位貼付帯から垂下する2本一組の貼付帯によって4等分している。胴部文様は結束第二種羽状縄文である。8の口縁部の区画の方法は7と同じである。区画内は貼付帯を網目状に配している。胴部文様は結束第二種縄文。10は沈線によって7，8と同じ区画を行なったもの。区画内は沈線による円弧文を2段施している。11～14は，口縁部に区画をもたないもの。18は口縁部に2本一組の沈線を弧状に2段施したもの。胴部文様は17が結束第二種羽状縄文，18が結束第一種羽状縄

土　器

文である。19は複節の結束第二種羽状縄文が施されたもの，口唇部には撚紐による刻みがある。

33～35は石鏃。いずれも茎部が不明瞭なもの。36は棒状のドリル。両端に使用による磨滅がみられる。37～39はつまみ付ナイフ。37はつまみ部のみを作り出したもの。39は二次加工が背面には全面，腹面には右側縁に浅く施されるもの。このような加工のあり方から縄文時代早期に属するものと考えられる。40～50はスクレイパー。51，52は石斧。51は基部を敲打調整している。52は火熱を受け表面が剝落している。53～59はすり石。53～58は半円状扁平打製石器と呼ばれるもの。59は北海道式石冠。60～63はたたき石。64は石核。打面と剝片剝離作業面のなす角度はほぼ90°である。65は台石・石皿。石質は，33，35，37，38，46～48がめのう質頁岩。34，36，39～45，49，50，64が頁岩。51が輝緑岩。52が泥岩。53～59，62，65が安山岩。60，61が珪岩。63が砂岩である。　**石　　器**

66は台付土器の台部破片。底面は上げ底になっている。67，68は脚付土器の脚部破片。焼成，施文が共通しており同一個体片と考えられる。69は漏斗状土製品。70は土偶，71～73は軽石製の石製品である。　**土・石製品**

時期　縄文時代中期初頭，Ⅲ群 A_1類土器の時期である。　（石川　朗）

(2)　フラスコ状ピット　（図Ⅲ－64～73，図版24・25）

フラスコ状ピットは10基検出された。これらはすべて東西方向11ラインと20ライン間の台地上に分布している。この地区はすべてⅣ層まで削平されており，遺構の確認は，KH－12，16内にあるKP－73，91を除きすべてⅣ層上面で行なった。時期は明確に決める判断材料を欠くが，覆土出土の土器や，遺物の接合状態，周辺の出土土器などから，おおむね縄文時代中期に相当するものと考えられる。

ＫＰ－63（図Ⅲ－65，図版24－２）

位置　F－19・20　　**規模**　2.38×1.80/2.50×2.20/1.32m

平面形　楕円形　　**重複**　なし

特徴　壙底面中央に深さ11cmの皿状のピットがある。

遺物出土状況　遺物はすべて覆土から出土した。東側オーバーハング部直下から完形土器が１個出土している。　**完形土器**

遺物　総遺物点数は51点。その内訳は土器が43点，石器等が８点である。１，４はⅢ群 A_2類土器。２，３はⅢ群 A_3類土器である。１は口縁部を太い貼付帯で区画し，馬蹄形圧痕文を施したもの。口縁直下には蛇行する貼付帯がある。貼付帯上には縄による刻みがある。胴部文様は結束第一種羽状縄文。５は石斧。折れ面を中心に敲打調整が行なわれている。石質は輝緑岩。

時期　縄文時代中期前半。Ⅲ群 A_2類の時期と考えられる。

ＫＰ－66（図Ⅲ－66，図版25－１，２）

位置　G－17　　**規模**　1.18×1.14/1.60×1.58/1.30m

平面形　円形　　**重複**　KP－65に切られる。

遺物　総遺物点数は45点。その内訳は土器が1点，石器等が44点である。すべて覆土出土。6はつまみ付ナイフ。剝片の端部につまみ部を作り出している。石質は頁岩。

時期　覆土出土土器から縄文時代中期と考えられる。

ＫＰ－69（図Ⅲ－66）

位置　E－15，F－15・16　　**規模**　1.98×1.62/2.48×2.55/1.04m

平面形　楕円形　　**重複**　KH－17に切られる。

遺物　総遺物点数は15点。その内訳は土器が8点，石器等が7点である。すべて2層下位の覆土から出土した。7，8はⅢ群A_3類土器，9は無茎の石鏃。石質は頁岩。

時期　縄文時代中期。

ＫＰ－70（図Ⅲ－67）

位置　E－16　　**規模**　2.12×1.70/2.30×2.16/1.60m

平面形　楕円形　　**重複**　KH－17に切られる。

遺物　なし。

時期　縄文時代中期と考えられる。

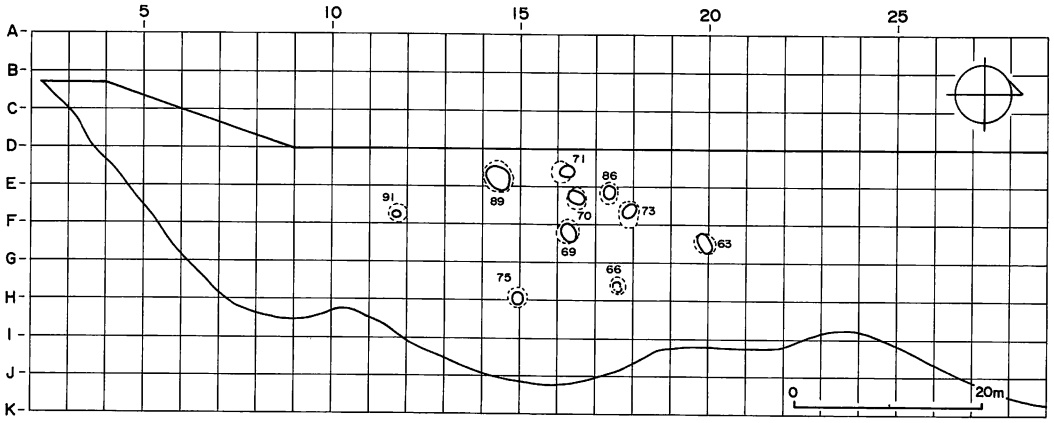
ＫＰ－71（図Ⅲ－67）

位置　D－15・16　　**規模**　(古)　――　/　――　/0.76m
(新)1.79×1.58/2.32×1.56/1.94m

平面形　楕円形　　**重複**　壙口部の同じものが重複している。KH－17に切られる。

礫　**遺物**　覆土から礫が35点出土している。

時期　縄文時代中期と考えられる。



図Ⅲ－64　フラスコ状ピット分布図

ＫＰ－73（図Ⅲ－68，図版25－３，４）

位置　E－17・18　　**規模**　1.60×1.46/2.70×2.41/1.15m

平面形　楕円形　　**重複**　KH－12に切られる。

特徴　KH－12　壙口はKH－12の貼床で閉じられている。

遺物　覆土からスクレイパーが１点出土している。

時期　縄文時代中期と考えられる。

ＫＰ－75（図Ⅲ－68，図版25－５，６）

位置　G・H－14・15　　**規模**　1.50×1.38/2.32×2.22/1.42m

平面形　楕円形　　**重複**　なし。

遺物　総遺物点数は70点。その内訳は土器７点，石器等63点である。すべて６層より下位から出土したものである。10～14はⅢ群A_1類土器。15～16はスクレイパー。18はすり石。19はたたき石。20は台石・石皿。21は砥石。扁平な円礫の平坦面に細い溝がある。石質は，16がめのう質頁岩，17が頁岩，他は安山岩である。

時期　縄文時代中期と考えられる。

ＫＰ－86（図Ⅲ－69）

位置　D・E－17　　**規模**　1.58×1.54/1.86×1.84/0.79m

平面形　円形　　**重複**　なし。

遺物　総遺物点数は19点。その内訳は土器９点，石器等10点である。すべて覆土から出土したものである。23はⅢ群A_3類土器。22，24は台石・石皿。24はKH－16とKP－75の覆土から出土したものと接合した状態で図示している。　接合資料

時期　縄文時代中期と考えられる。

ＫＰ－89（図Ⅲ－69）

位置　D・E－14　　**規模**　2.49×2.23/3.00×2.80/0.67m

平面形　楕円形　　**重複**　KH－17を切る。

遺物　礫が１点覆土から出土している。

時期　縄文時代中期と考えられる。

ＫＰ－91（図Ⅲ－70）

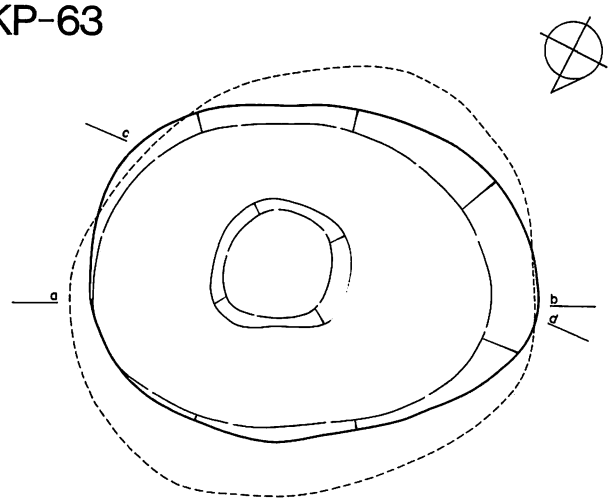
位置　E－11　　**規模**　1.00×1.00/1.62×1.48/1.72m

平面形　円形　　**重複**　KH－16を切る。

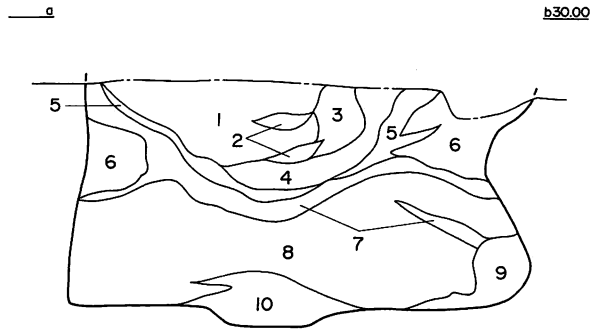
特徴　壙底面に直径12cm，深さ５cmの小ピットがある。KH－16の覆土４層上面から掘り込まれている。

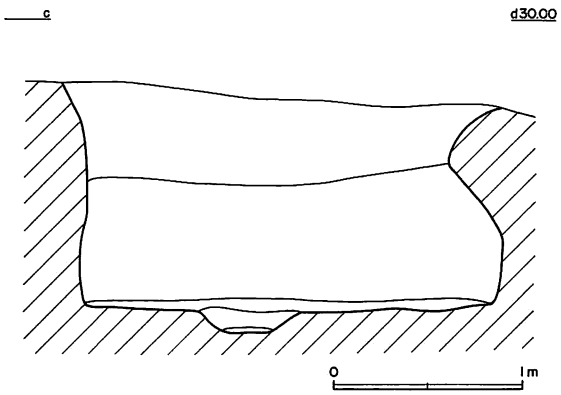
遺物　総遺物点数は411点。その内訳は土器188点，石器等が223点ある。すべて覆土から出土した。25はⅢ群A_1類土器，26～37はⅢ群A_3類土器である。Ⅲ群A_3類土器のうち８層から出土した２点が，KH－16のもの（図Ⅲ－43－１）と接合した。38は有茎の石鏃。39は槍先・ナイフ。40は石斧。火熱を受け部分的に変色している。石質は38，39が頁岩，40は緑色泥岩である。

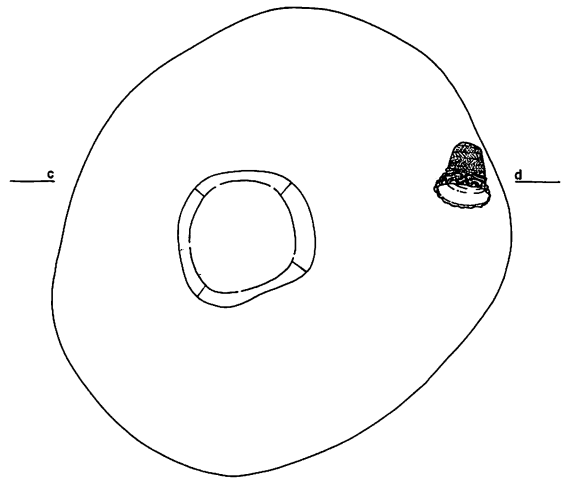
KP-63

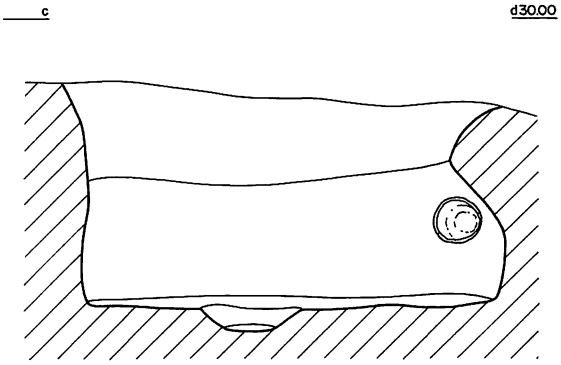


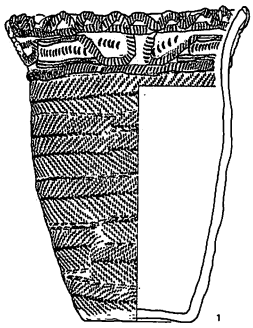
1　暗褐色土（ローム粒を含む）
2　褐色土（ローム粒を含む）
3　明褐色土（黒色土を含む）
4　暗褐色土（ローム粒を含む）
5　褐色土（ロームを多量含む）
6　黄褐色土
7　褐色土
8　黄褐色土（ローム質）
9　黄褐色土（砂質）
10　暗褐色土（黒色土を多量含む）





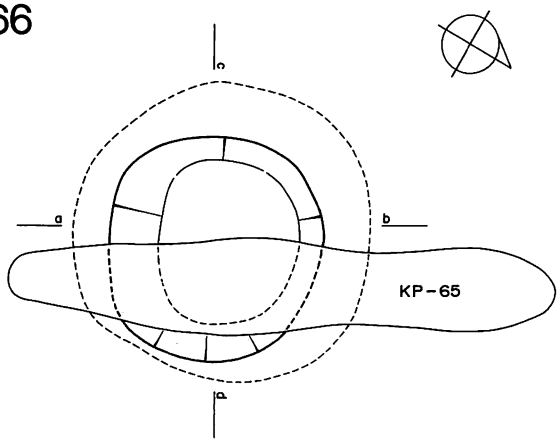




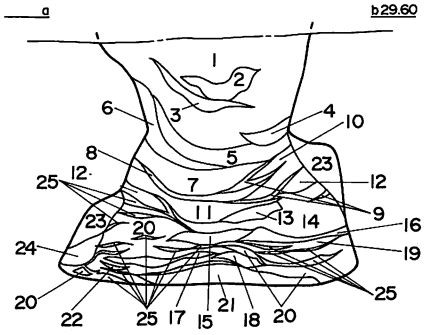


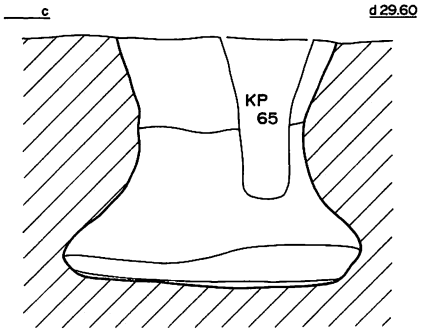
図Ⅲ－65　フラスコ状ピット(1)・KP－63

KP-66

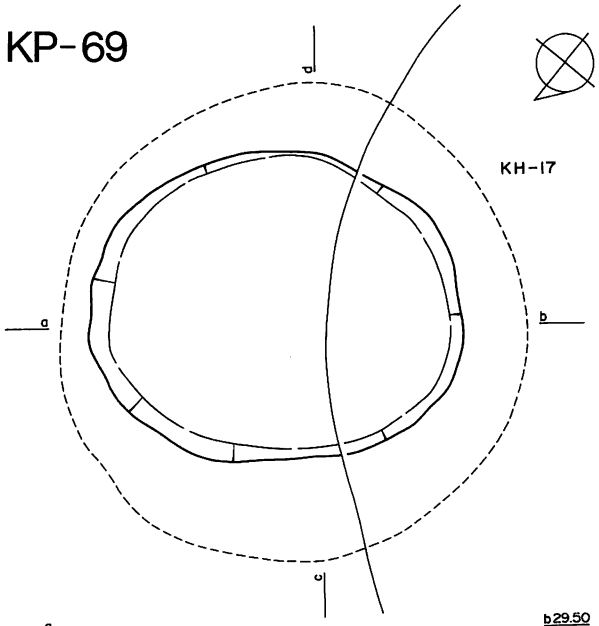


1　黒褐色土
2　暗褐色土
3　黒色土
4　褐色土
　（ロームブロックを含む）
5　暗褐色土
6　褐色土
　（ロームブロックを含む）
7　黒褐色土
8　褐色土
9　黒色土
10　黄褐色土
11　暗褐色土
　（ロームブロックを含む）
12　灰黄褐色土
13　黒褐色土
14　黄褐色土
15　黒褐色土
16　暗褐色土
17　茶褐色土
18　黒褐色土
19　褐色土
20　黄褐色土
21　黒褐色土
　（炭化物を含む）
22　暗橙色土（ローム質）
23　暗黄褐色土
24　黒褐色土
25　黒色土

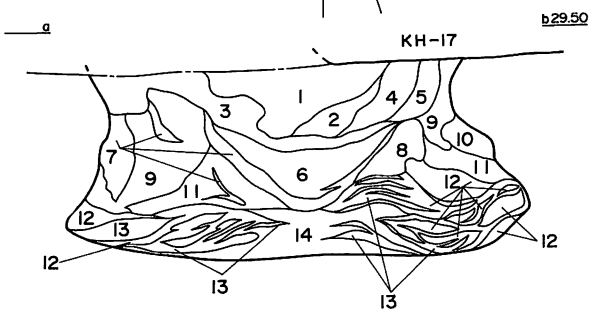


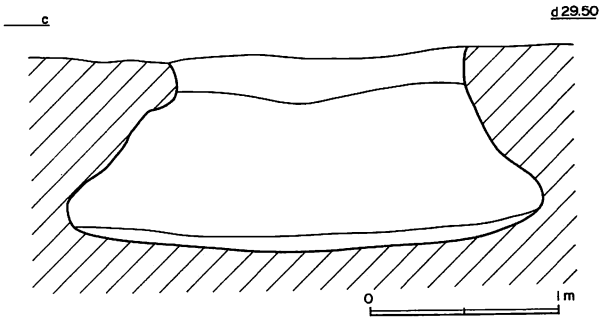


KP-69

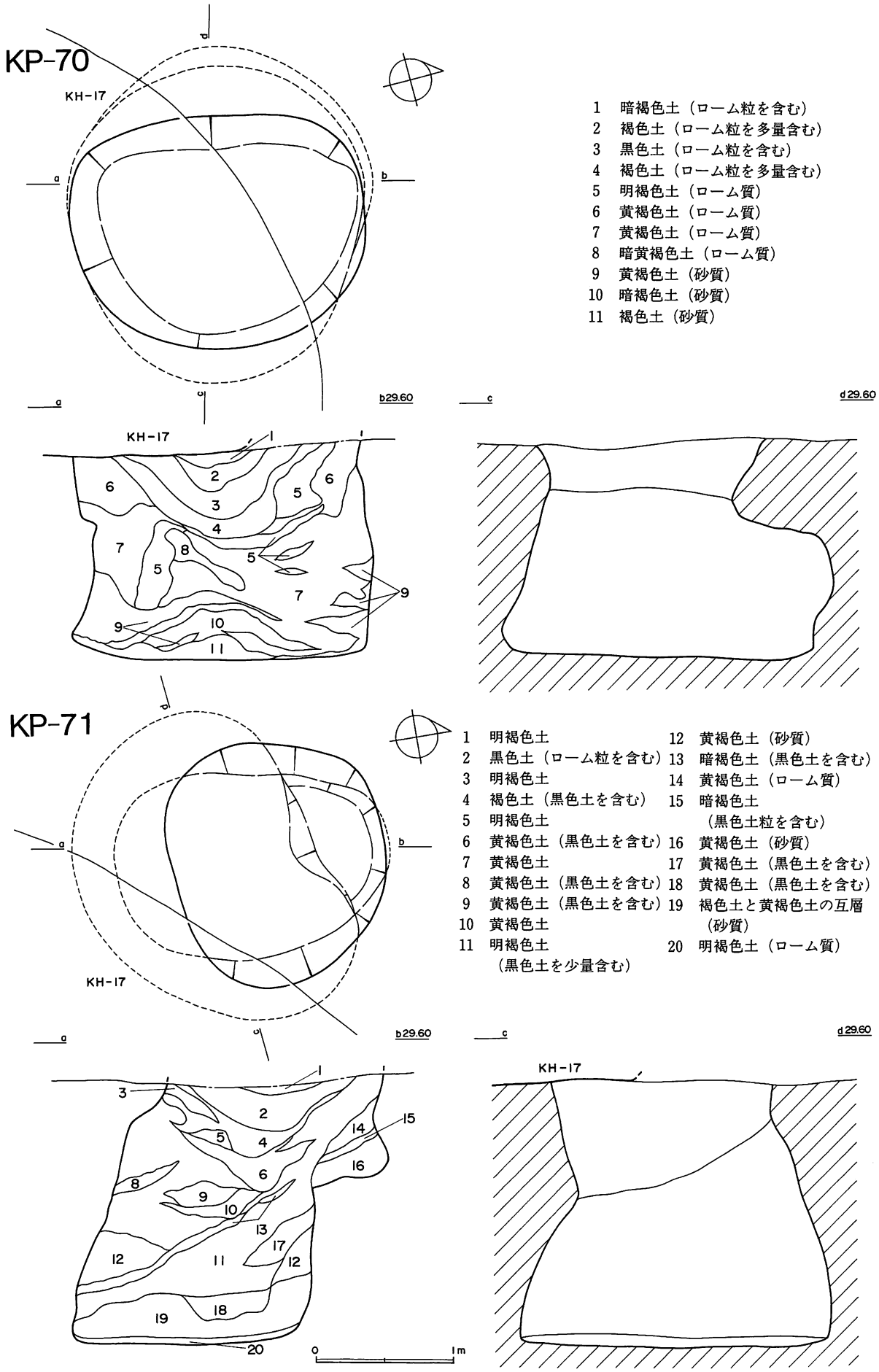


1　褐色土（ローム粒を含む）
2　黒色土（ローム粒を少量含む）
3　明褐色土（ローム粒を多量含む）
4　褐色土（ローム粒を含む）
5　明褐色土（ローム粒を多量含む）
6　黄褐色土（黒色土粒を含む）
7　明褐色土（黒色土を少量含む）
8　暗黄褐色土（黒色土ブロックを含む）
9　黄褐色土（ローム質）
10　暗褐色土（黒色土粒を多量含む）
11　暗褐色土（黒色土粒を多量含む）
12　黄褐色土（ローム質）
13　黒色土
14　暗褐色土（黒色土を多量含む）





図Ⅲ－66　フラスコ状ピット(2)・KP－66, 69

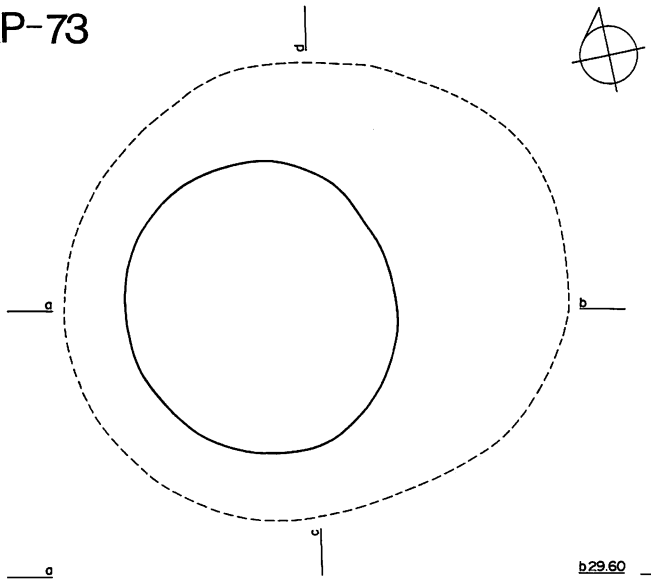


1　暗褐色土（ローム粒を含む）
2　褐色土（ローム粒を多量含む）
3　黒色土（ローム粒を含む）
4　褐色土（ローム粒を多量含む）
5　明褐色土（ローム質）
6　黄褐色土（ローム質）
7　黄褐色土（ローム質）
8　暗黄褐色土（ローム質）
9　黄褐色土（砂質）
10　暗褐色土（砂質）
11　褐色土（砂質）

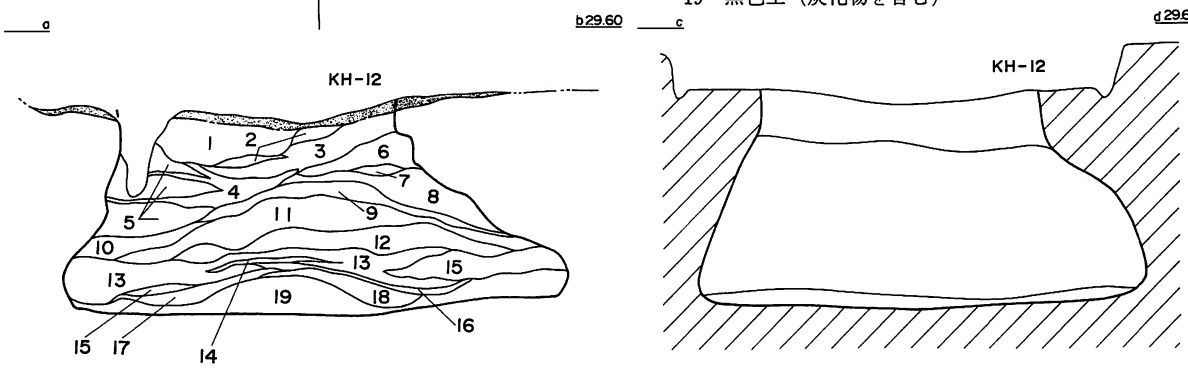
1　明褐色土
2　黒色土（ローム粒を含む）
3　明褐色土
4　褐色土（黒色土を含む）
5　明褐色土
6　黄褐色土（黒色土を含む）
7　黄褐色土
8　黄褐色土（黒色土を含む）
9　黄褐色土（黒色土を含む）
10　黄褐色土
11　明褐色土
（黒色土を少量含む）
12　黄褐色土（砂質）
13　暗褐色土（黒色土を含む）
14　黄褐色土（ローム質）
15　暗褐色土
（黒色土粒を含む）
16　黄褐色土（砂質）
17　黄褐色土（黒色土を含む）
18　黄褐色土（黒色土を含む）
19　褐色土と黄褐色土の互層
（砂質）
20　明褐色土（ローム質）

図Ⅲ－67　フラスコ状ピット(3)・KP－70，71

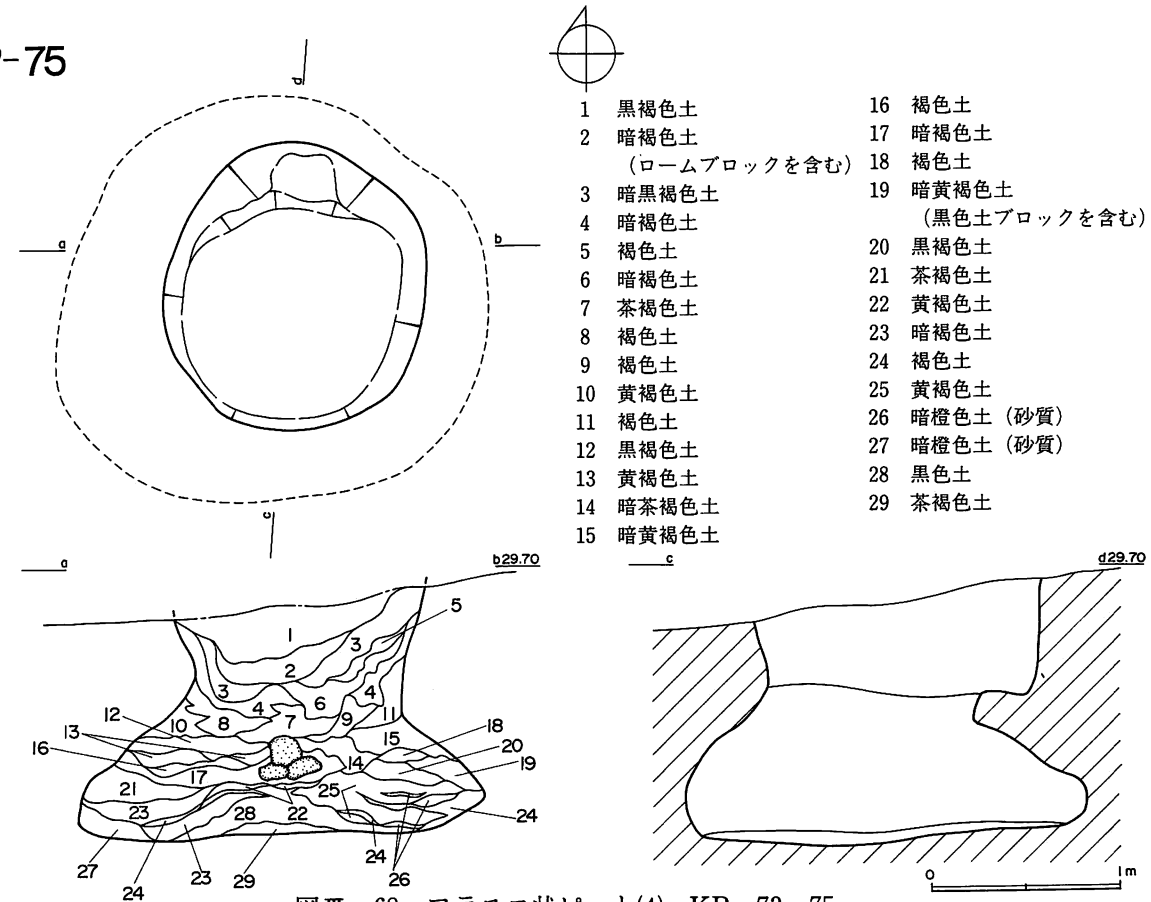
KP-73



1　黄褐色土（ローム質）
2　暗褐色土（ローム粒を含む）
3　褐色土（ローム粒を含む）
4　暗褐色土（ローム粒・黒色土粒を多量含む）
5　黄褐色土（ローム質）
6　明褐色土（ローム質）
7　暗褐色土（ローム粒を含む）
8　黄褐色土と黒色土の互層
9　黒色土
10　黄褐色土と黒色土の互層
11　明褐色土（黒色土を少量含む）
12　褐色土
13　黄褐色土（ローム質）
14　暗褐色土（黒色土を含む）
15　灰色土（砂質）
16　黒色土（炭化物を含む）
17　暗褐色土（黒色土を含む）
18　灰色土（砂質）
19　黒色土（炭化物を含む）



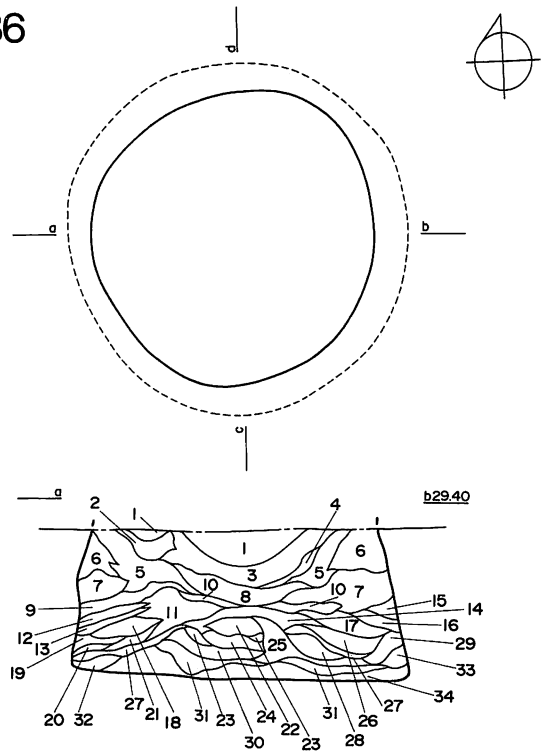
KP-75



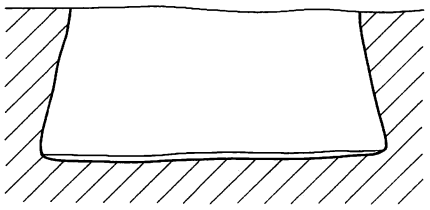
1　黒褐色土
2　暗褐色土
　（ロームブロックを含む）
3　暗黒褐色土
4　暗褐色土
5　褐色土
6　暗褐色土
7　茶褐色土
8　褐色土
9　褐色土
10　黄褐色土
11　褐色土
12　黒褐色土
13　黄褐色土
14　暗茶褐色土
15　暗黄褐色土
16　褐色土
17　暗褐色土
18　褐色土
19　暗黄褐色土
　（黒色土ブロックを含む）
20　黒褐色土
21　茶褐色土
22　黄褐色土
23　暗褐色土
24　褐色土
25　黄褐色土
26　暗橙色土（砂質）
27　暗橙色土（砂質）
28　黒色土
29　茶褐色土

図Ⅲ－68　フラスコ状ピット(4)・KP－73，75

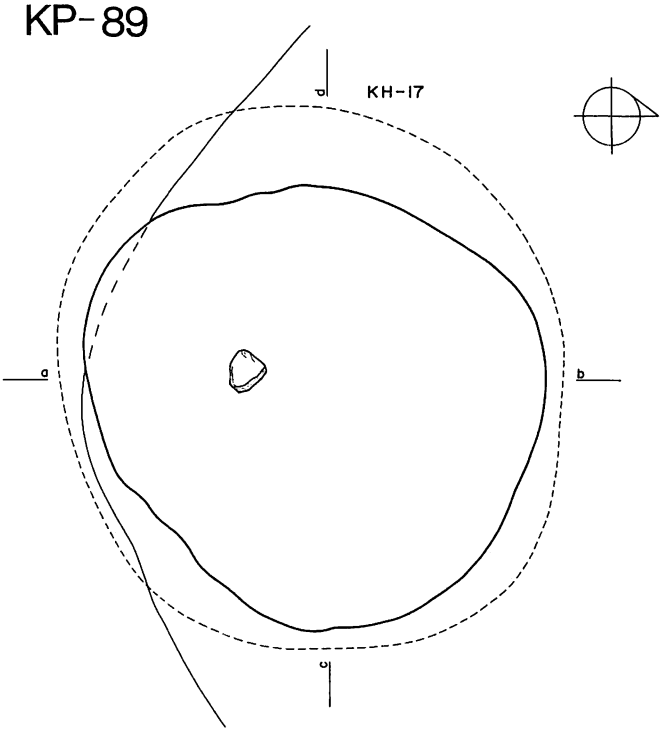
KP-86



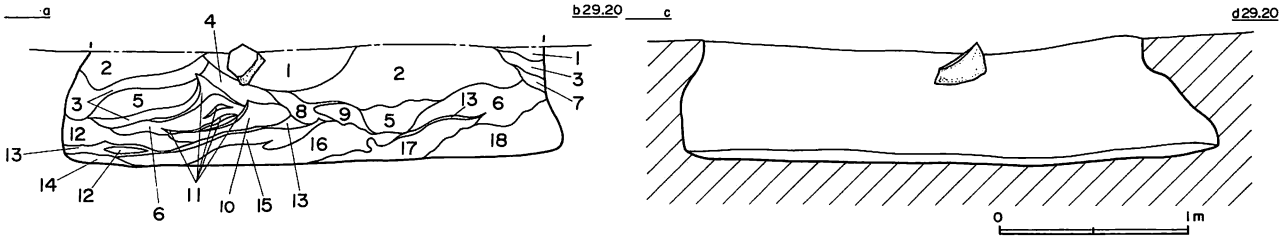
1 黒褐色土（ローム粒を多量含む）
2 暗黄褐色土
3 暗黄褐色土（砂質）
4 黄褐色土
5 黄褐色土
6 黄褐色土
7 黄色土
8 黄褐色土
9 暗黄褐色土
10 褐色土（ロームブロックを含む）
11 黄褐色土
12 黄褐色土
13 明褐色土
14 暗褐色土
15 黄褐色土
16 黄褐色土
17 黄褐色土（砂質）
18 黄褐色土
19 黄褐色土
20 橙色土（砂質）
21 黄褐色土
22 暗黄褐色土（砂質）
23 青灰色土（砂質）
24 暗黄褐色土（砂質）
25 暗褐色土（ロームブロックを含む）
26 黄褐色土
27 黒褐色土
28 黄褐色土
29 黄褐色土
30 褐色土（砂質）
31 黄褐色土（砂質）
32 黄褐色土
33 青灰色土（砂質）
34 青灰色土（砂質）



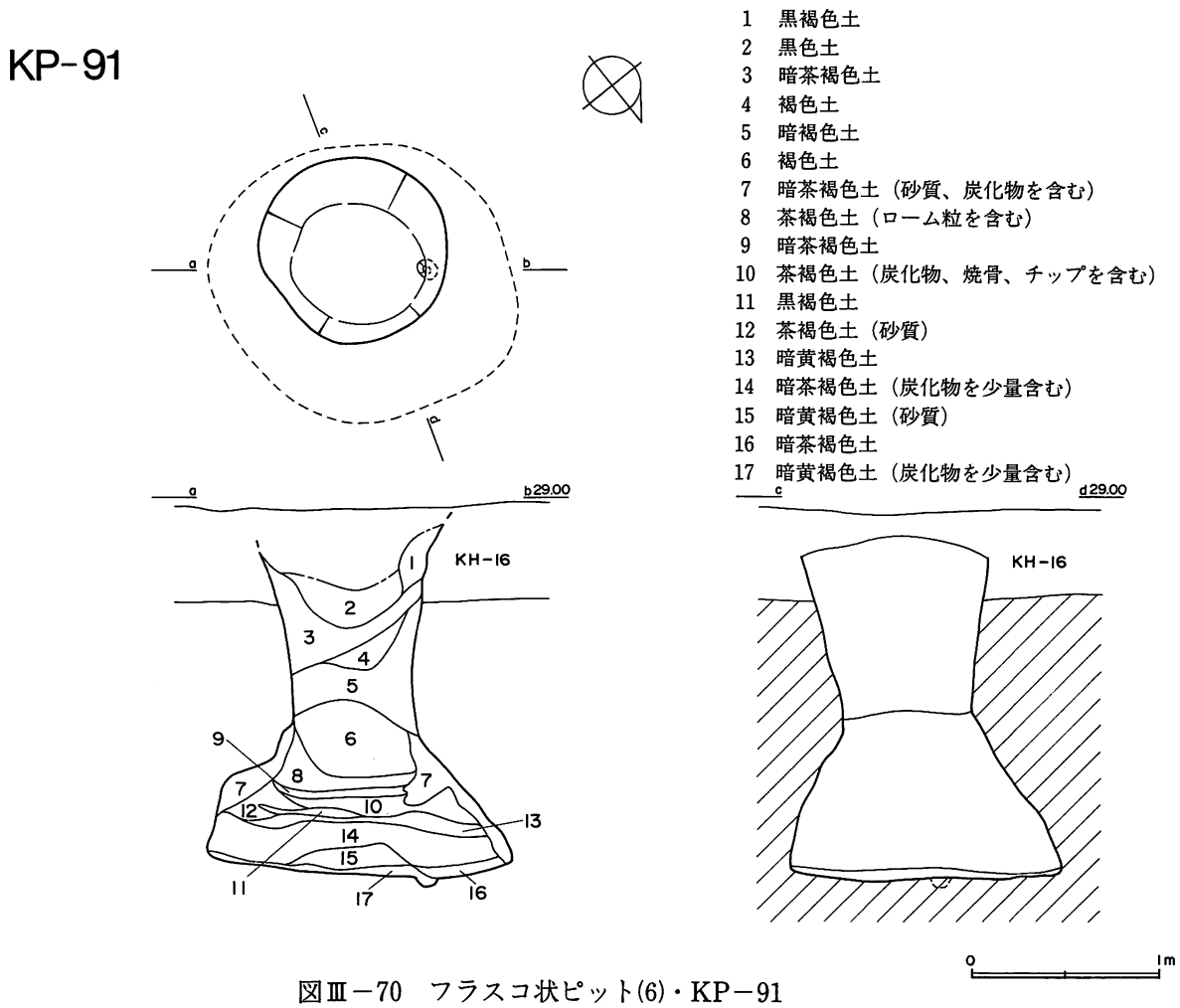
KP-89



1 暗褐色土（ロームブロックを含む）
2 暗黄褐色土
3 黄褐色土
4 褐色土
5 黄褐色土
6 暗黄褐色土
7 暗褐色土
8 褐色土
9 暗黄褐色土
10 茶褐色土（ロームブロックを含む）
11 黒色土
12 黄褐色土
13 黒色土
14 暗橙色土（砂質）
15 茶褐色土
16 暗茶褐色土
17 暗黄褐色土
18 黄褐色土



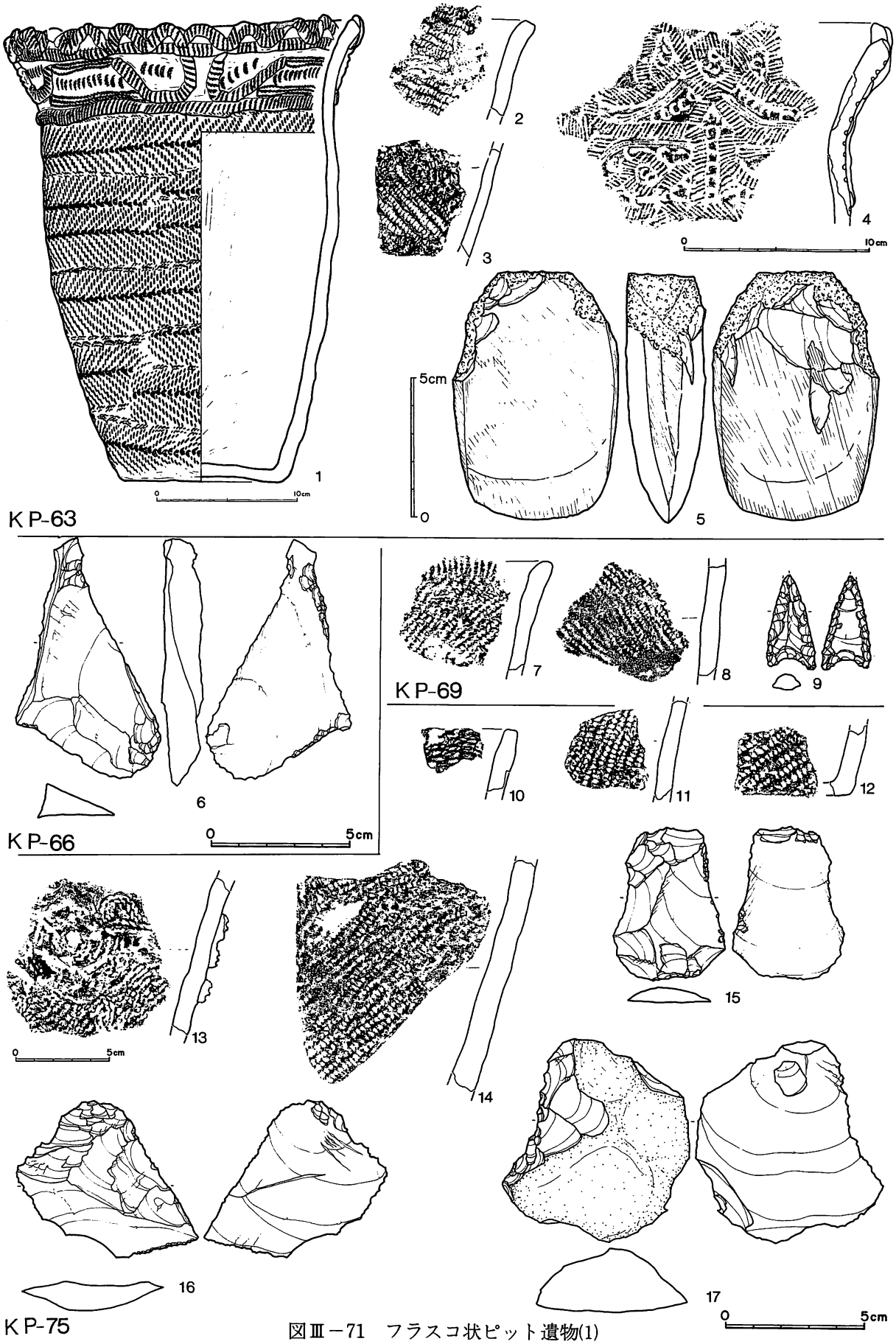
図Ⅲ－69　フラスコ状ピット(5)・KP－86，89



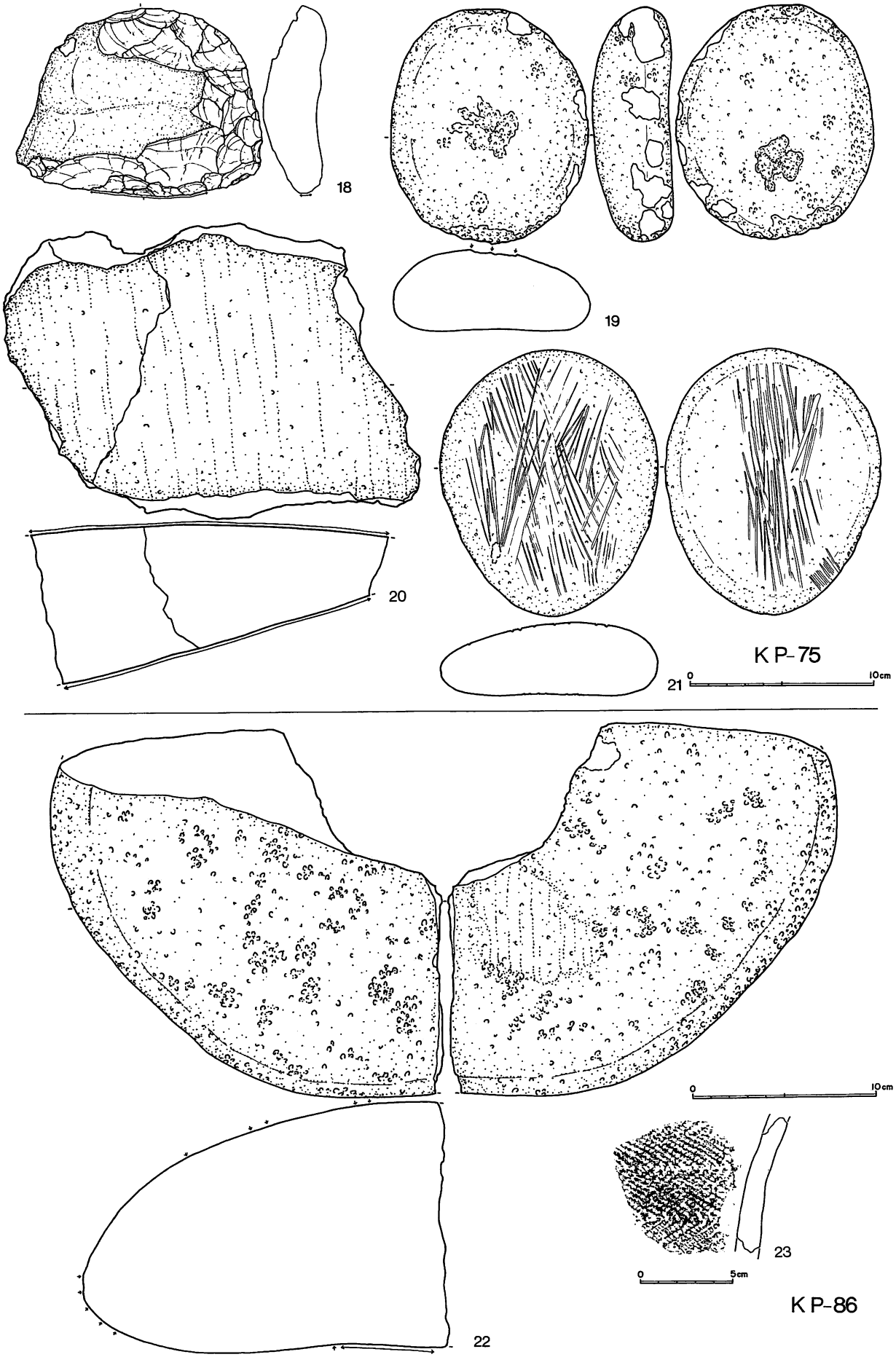
図Ⅲ－70　フラスコ状ピット(6)・KP－91

KP－91の覆土14層よりチップ，骨が検出されている。チップ，骨は土ごと取り上げてフローテーション及び水洗処理をした結果，チップが138点，骨はサメ類（メジロザメに酷似）の椎体，鳥の頸骨，種不明の獣骨の小片などが出土している。　**チップ・骨**

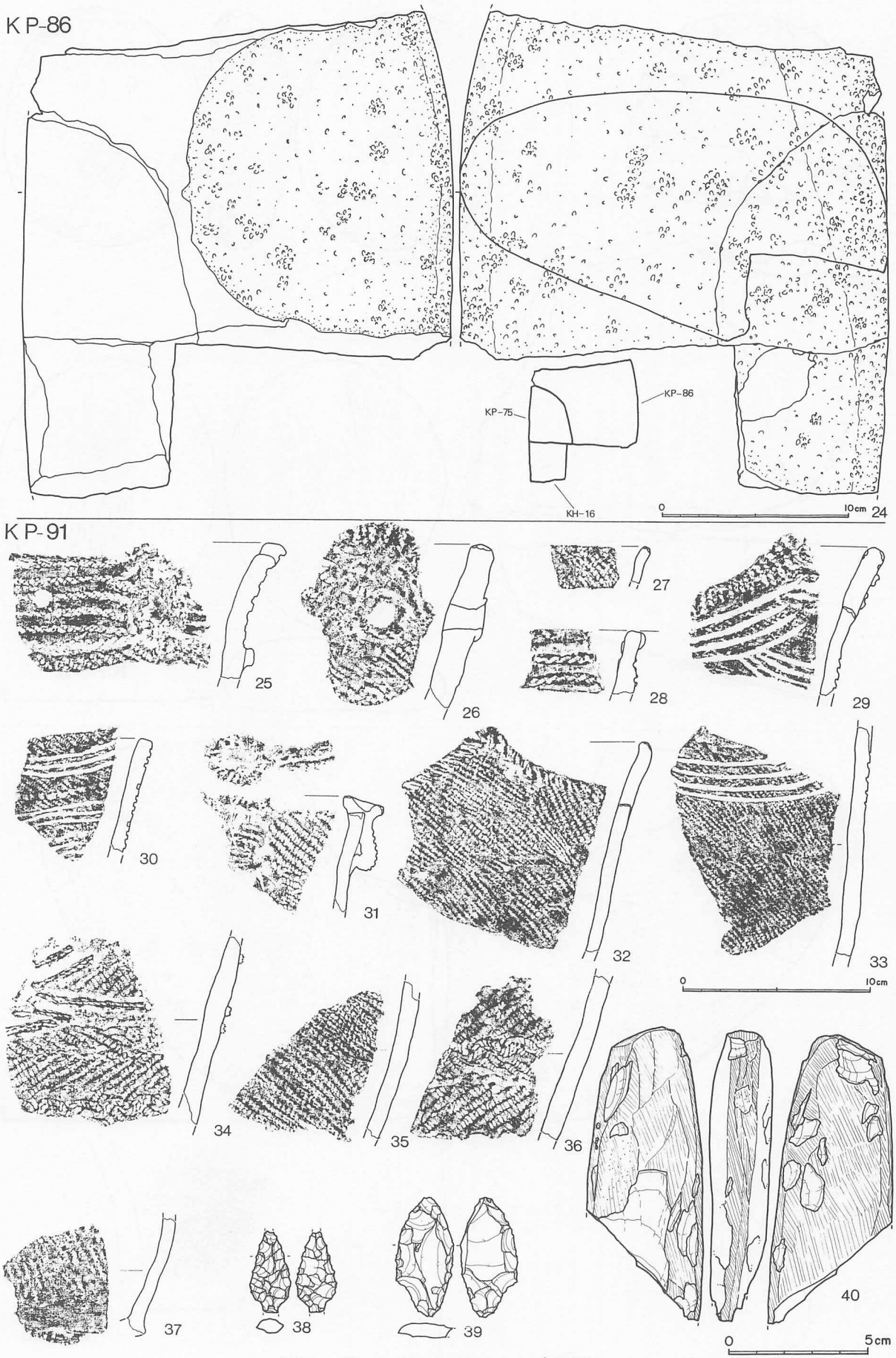
時期　縄文時代中期中葉（サイベ沢Ⅶ式）と考えられる。　（石川　朗）



図Ⅲ－71　フラスコ状ピット遺物(1)



図Ⅲ－72　フラスコ状ピット遺物(2)



図Ⅲ－73　フラスコ状ピット遺物(3)

(3)　円形・楕円形ピット（図Ⅲ－74～85，図版26，27）

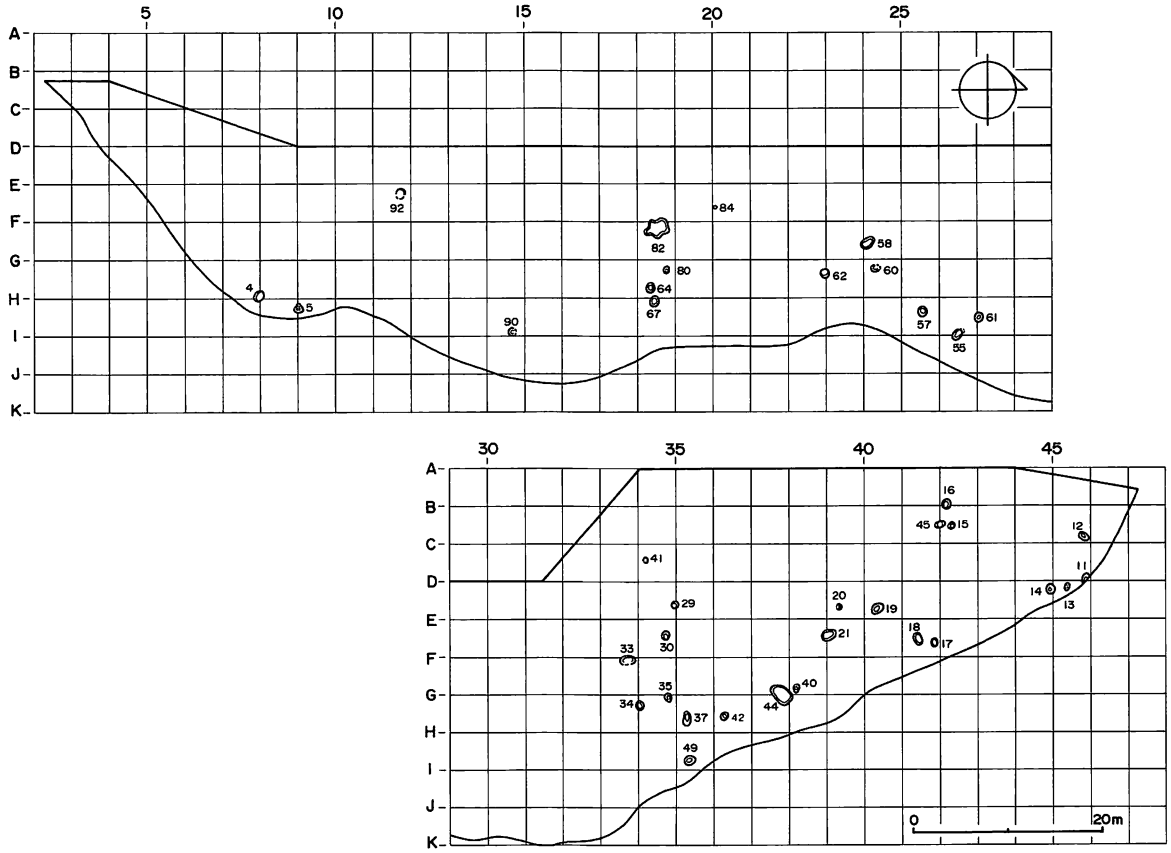
本遺跡より検出された円形・楕円形ピットは，全部で38基である。形状別の内訳は，円形ピットが16基，楕円形ピットが19基，その他が３基である。以下，形状別に分け説明を加える。

円形ピット

円形ピットは，沢の北側に10基，南側に６基分布する。沢の北側では，緩斜面の35ラインあたりに集中するほかは，その背後の平坦地に点在する。沢の南側では，段丘縁辺部および平坦地に点在する。円形ピットの規模は，径0.4～1.26m，深さ0.09～0.68mで，なかでも径0.7～0.8m，深さ0.5m程度のものが多い。覆土の状態は，壙底および壁面に黄褐色土が少量堆積し，その上に黒色もしくは褐色の土が堆積する例が多い。遺物の出土状況は，覆土中より少量の土器片，石器等が出土する例が多い。特異な例としては，円形ピットの覆土上部より土器の底部が正立した状態で出土したものがある（KP－84）。土器の時期は，Ⅲ群 A_1類である。円形ピットの重複は，KP－35がTピット（KP－36）を切るものと，KP－41がTピット（KP－26）に切られる２例がある。

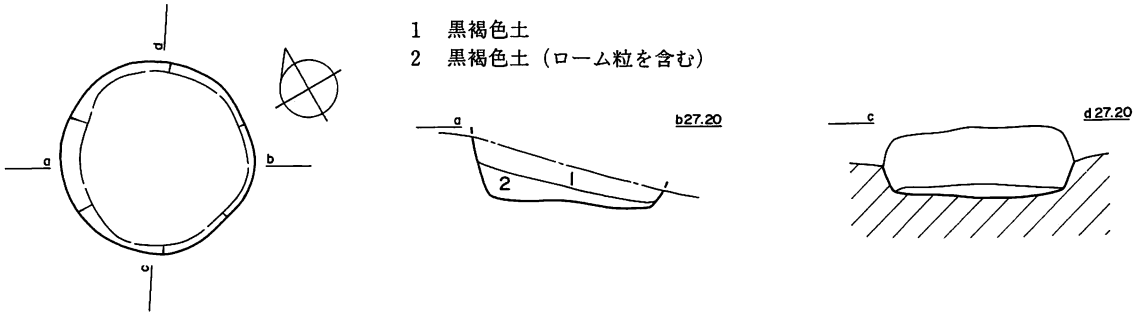
楕円形ピット

楕円形ピットは，沢の北側に11基，沢の南側に８基分布する。ピットは両地点とも段丘縁辺部から平坦地にかけ点在した分布を示す。楕円形ピットの規模は，0.75～1.70m（長軸）×0.6～1.24m（短軸），深さ0.10～1.38mで，平均的なものは1.0m（長軸）×0.8m（短軸），深さ0.4mである。覆土の状態は，円形ピットと同じ堆積をするものがほとんどであるが，なかには汚れた黄褐色ロームのみが堆積する例（KP－37，45），覆土の下部に茶褐色土が，上部に自然堆積層が埋っている例（KP－60）などは特異である。遺物の出土状況は，円形ピ

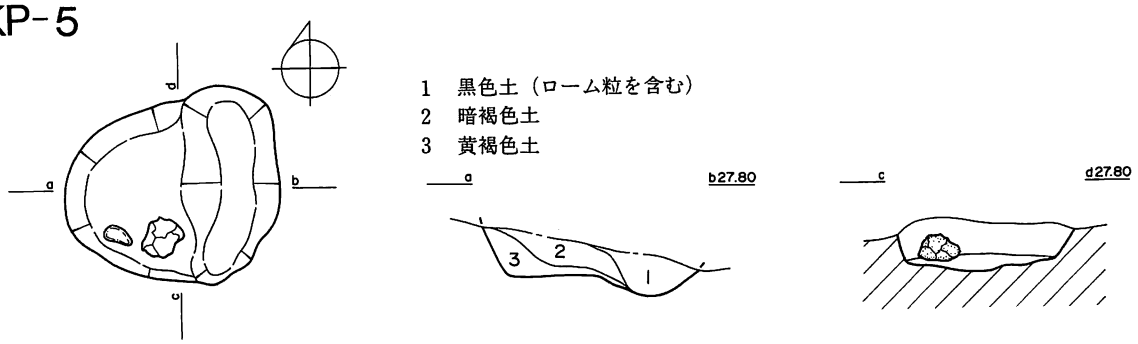


図Ⅲ－74　円形・楕円形ピット分布図

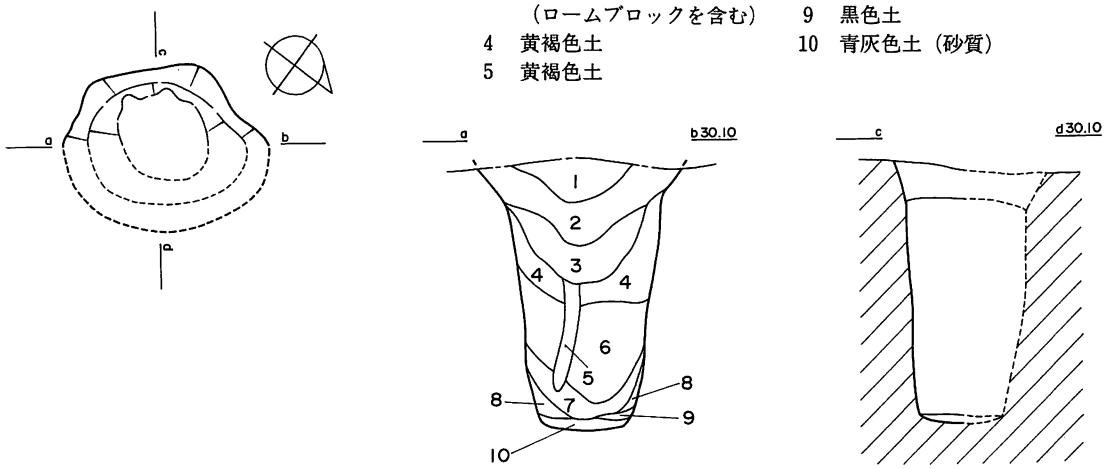
KP-4



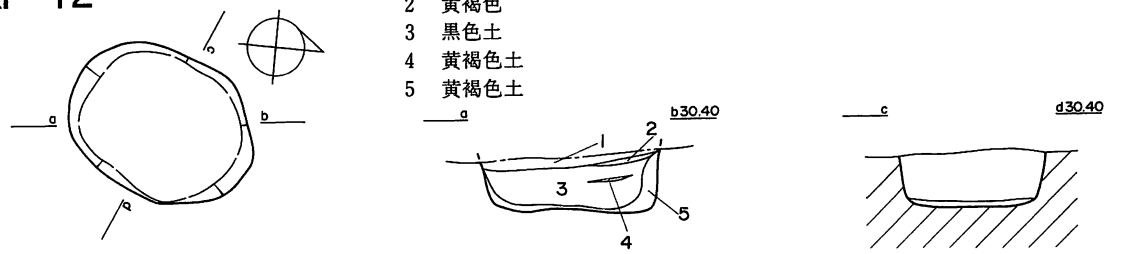
KP-5



KP-11

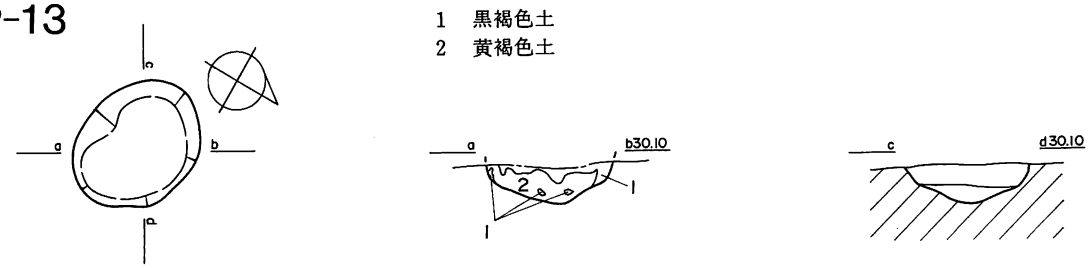


KP-12

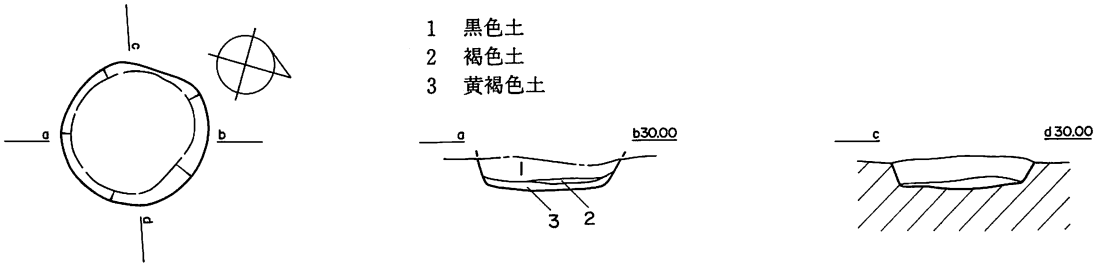


図Ⅲ－75　円形，楕円形ピット(1)・KP－4，5，11，12

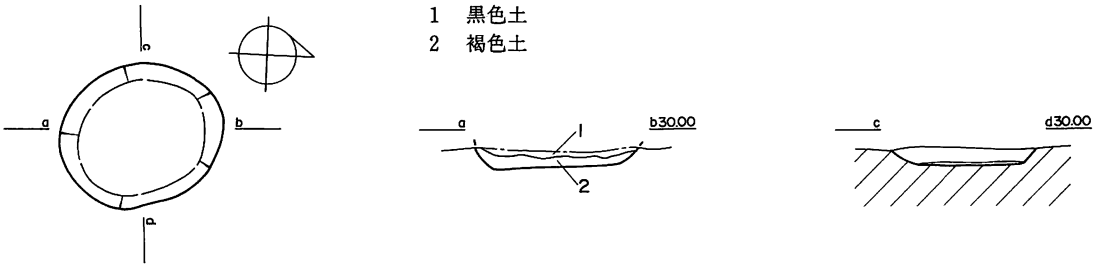
KP-13



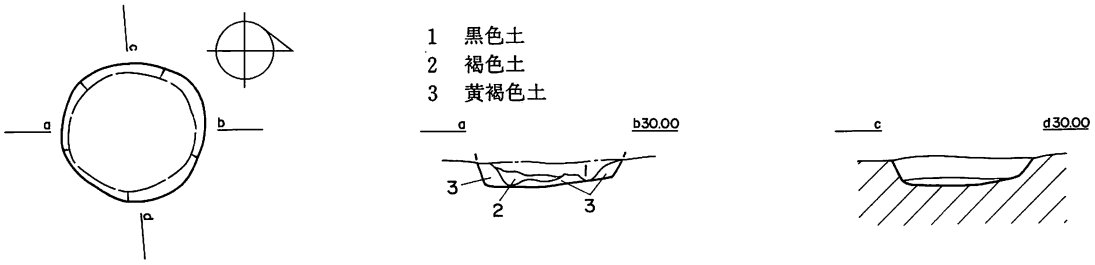
KP-14



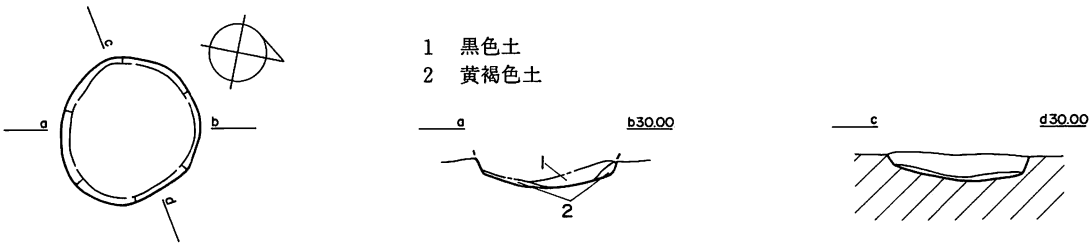
KP-15



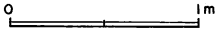
KP-16



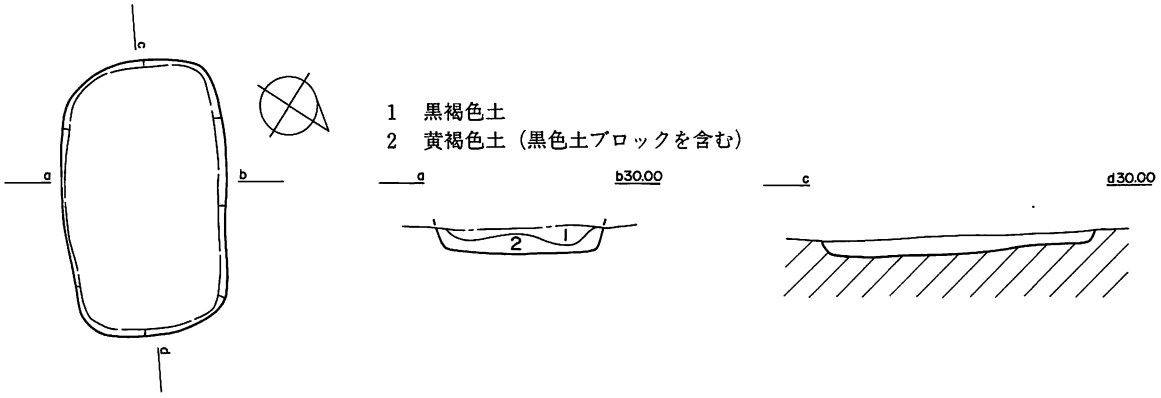
KP-17



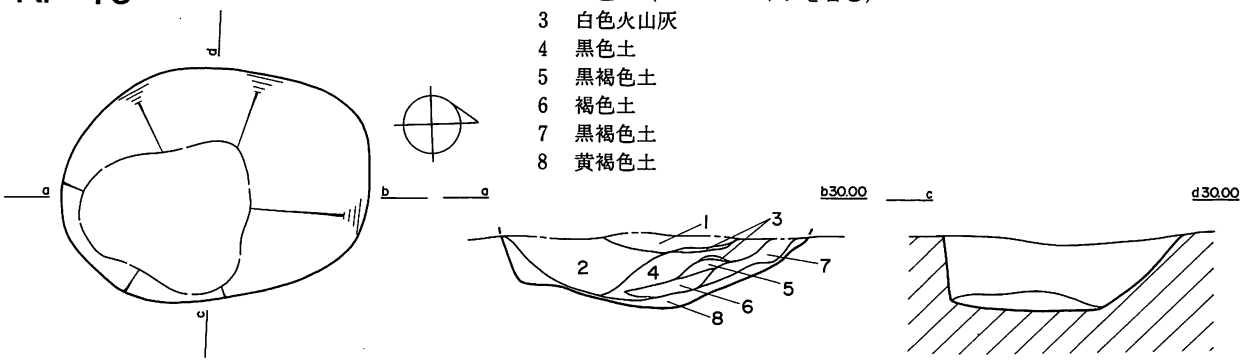
図Ⅲ－76　円形，楕円形ピット(2)・KP－13，14，15，16，17



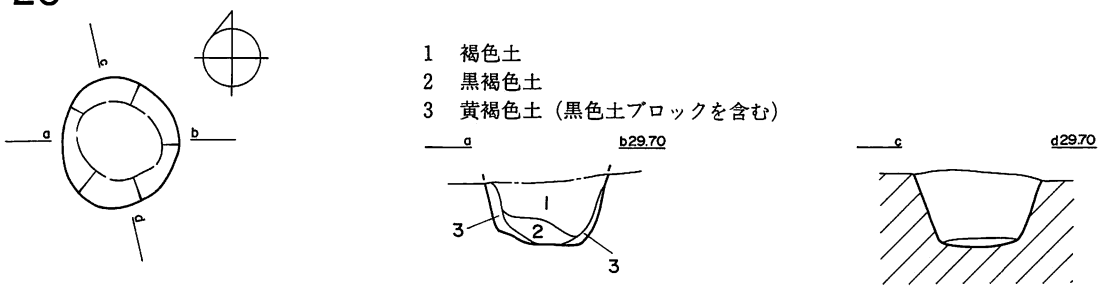
KP-18



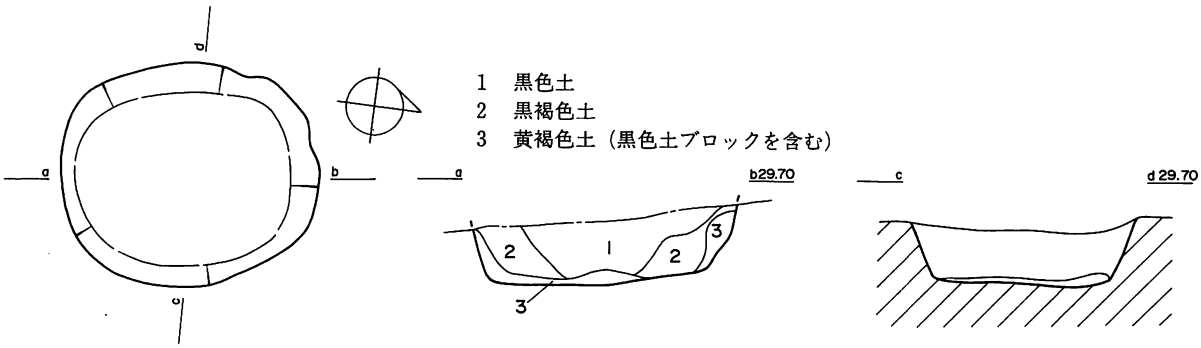
KP-19



KP-20



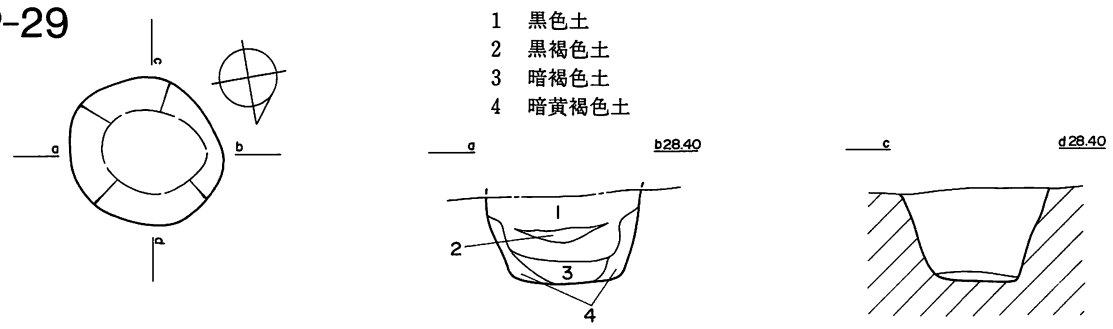
KP-21



図Ⅲ－77　円形，楕円形ピット(3)・KP－18，19，20，21　0 1m

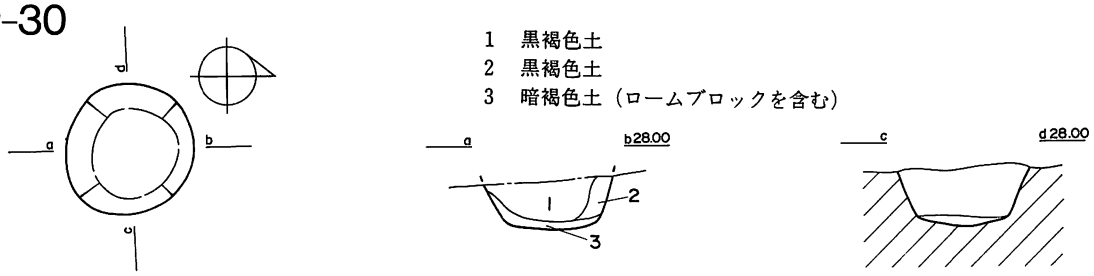
KP-29

1　黒色土
2　黒褐色土
3　暗褐色土
4　暗黄褐色土



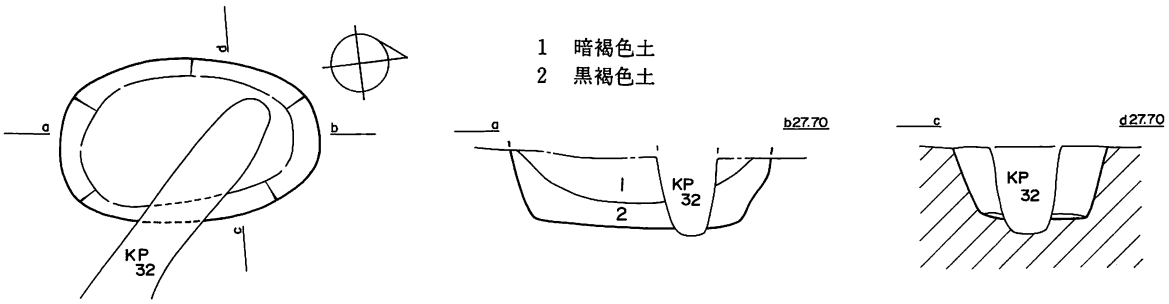
KP-30

1　黒褐色土
2　黒褐色土
3　暗褐色土（ロームブロックを含む）



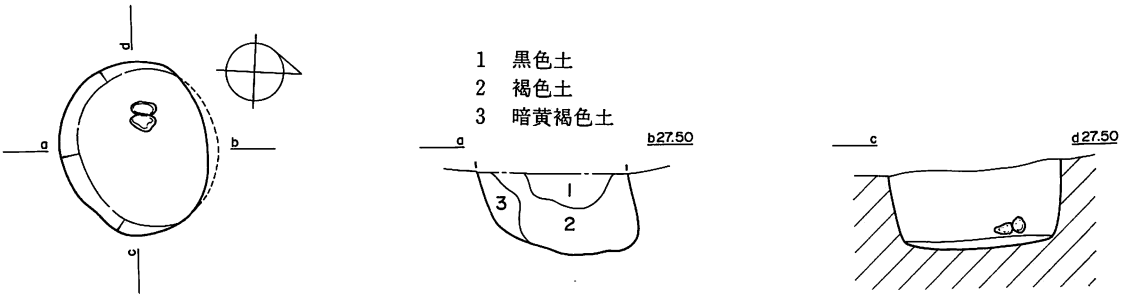
KP-33

1　暗褐色土
2　黒褐色土



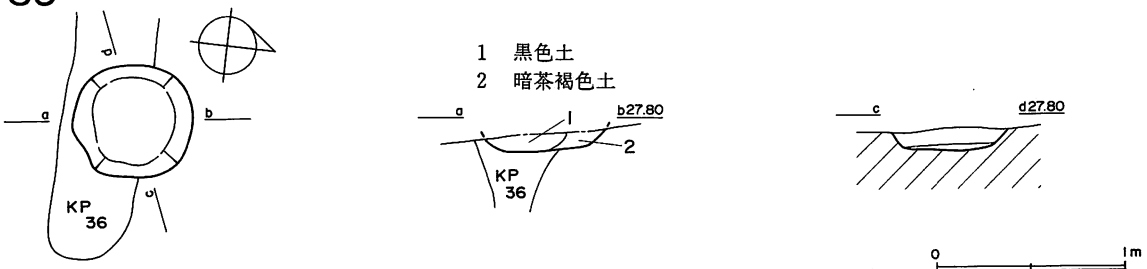
KP-34

1　黒色土
2　褐色土
3　暗黄褐色土



KP-35

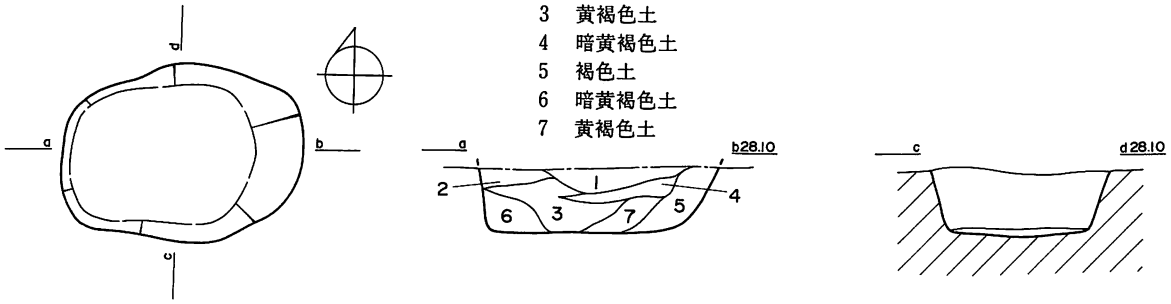
1　黒色土
2　暗茶褐色土



図Ⅲ－78　円形，楕円形ピット(4)・KP－29，30，33，34，35

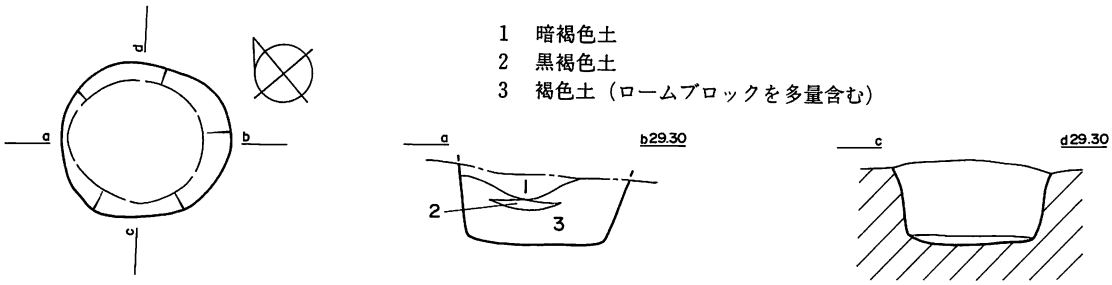
KP-37

1　暗黄褐色土
2　茶褐色土
3　黄褐色土
4　暗黄褐色土
5　褐色土
6　暗黄褐色土
7　黄褐色土



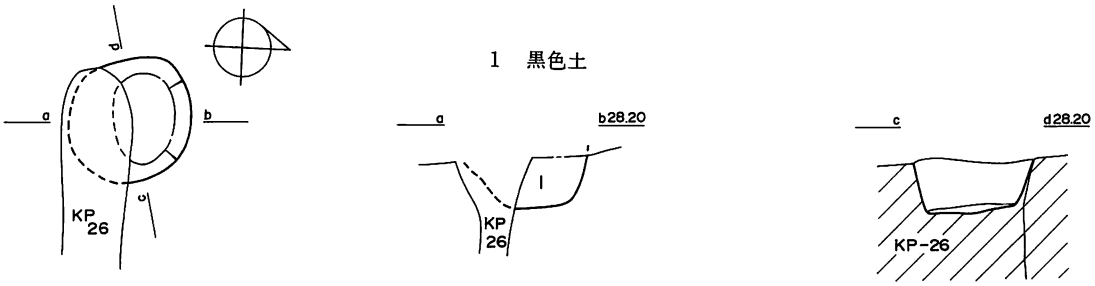
KP-40

1　暗褐色土
2　黒褐色土
3　褐色土（ロームブロックを多量含む）



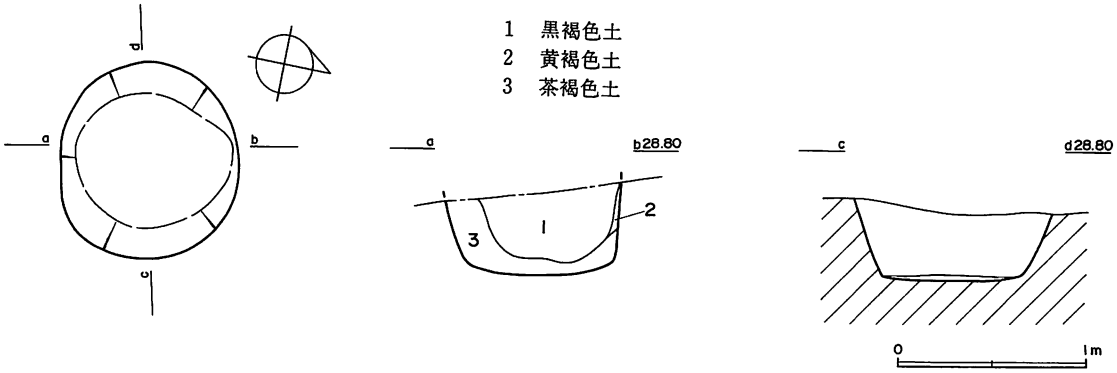
KP-41

1　黒色土



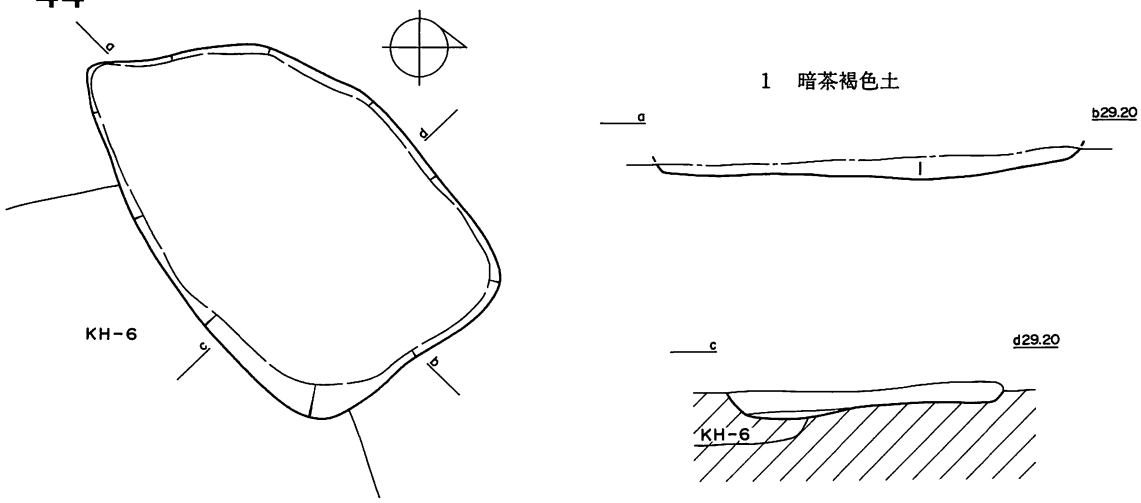
KP-42

1　黒褐色土
2　黄褐色土
3　茶褐色土

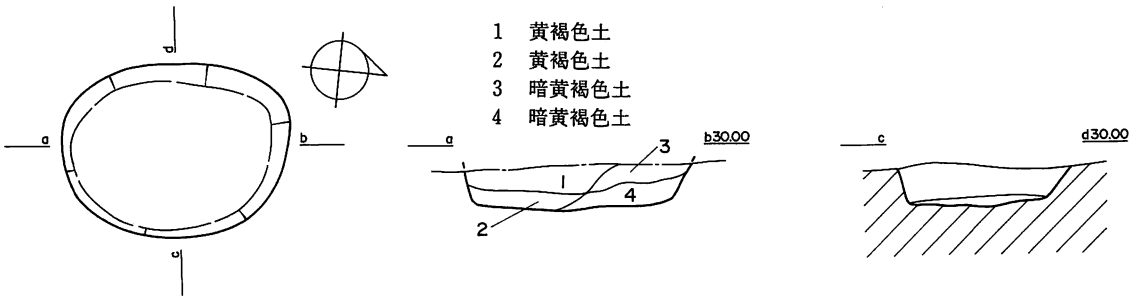


図Ⅲ－79　円形，楕円形ピット(5)・KP－37，40，41，42

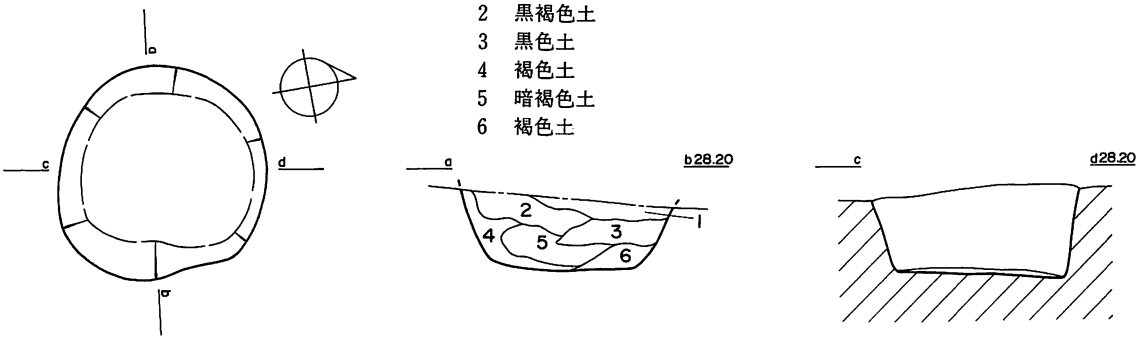
KP-44



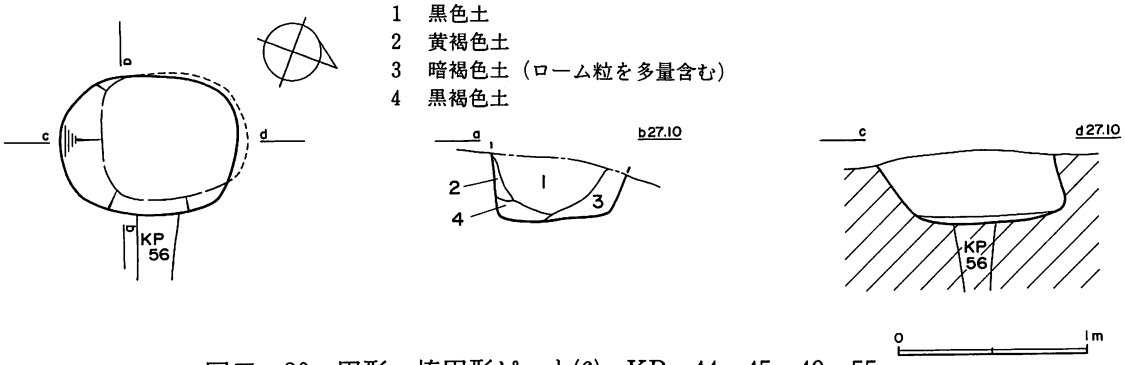
KP-45



KP-49

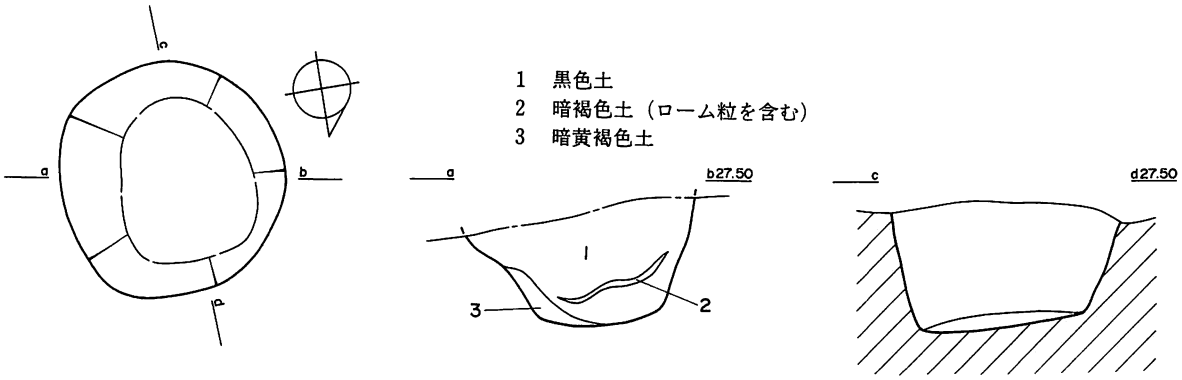


KP-55

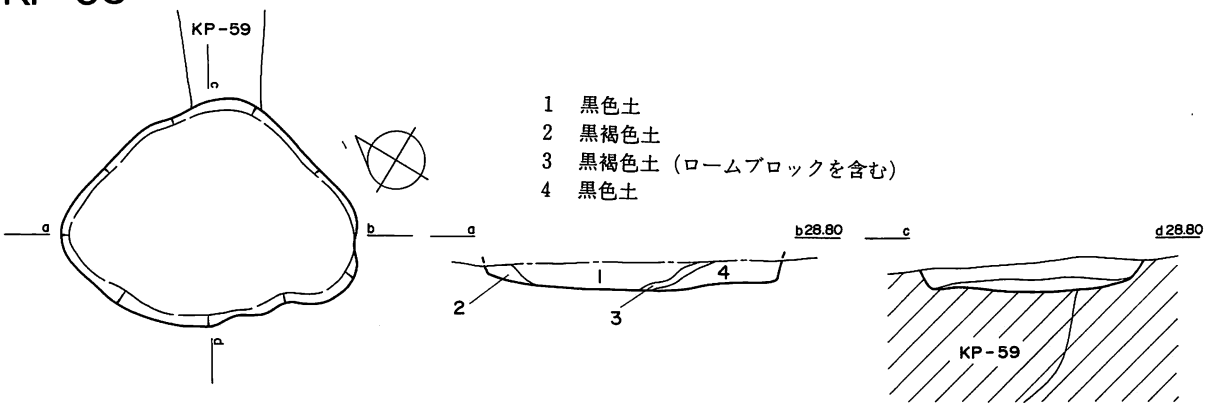


図Ⅲ－80　円形，楕円形ピット(6)・KP－44，45，49，55

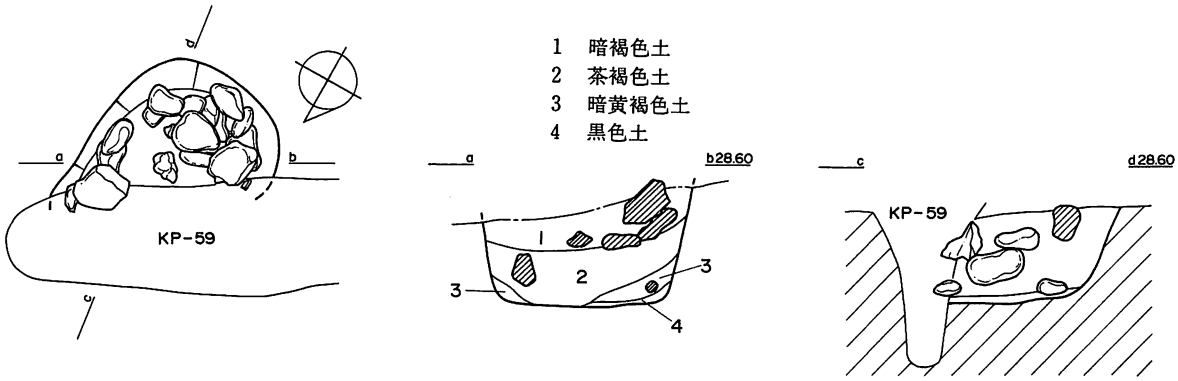
KP-57



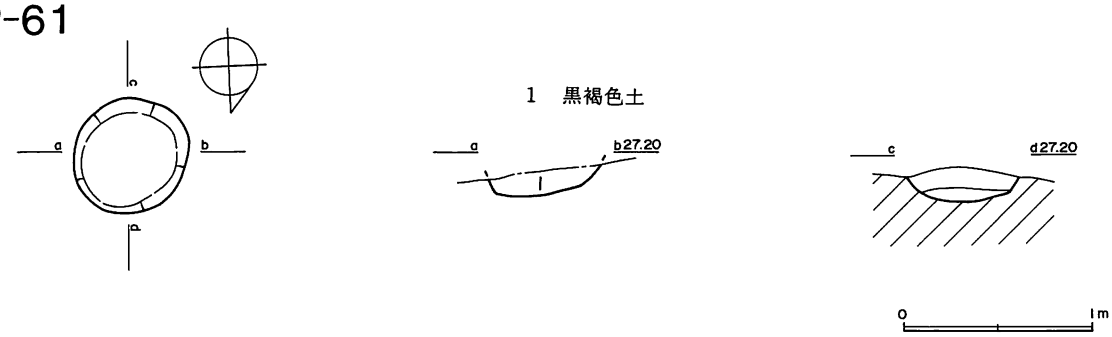
KP-58



KP-60



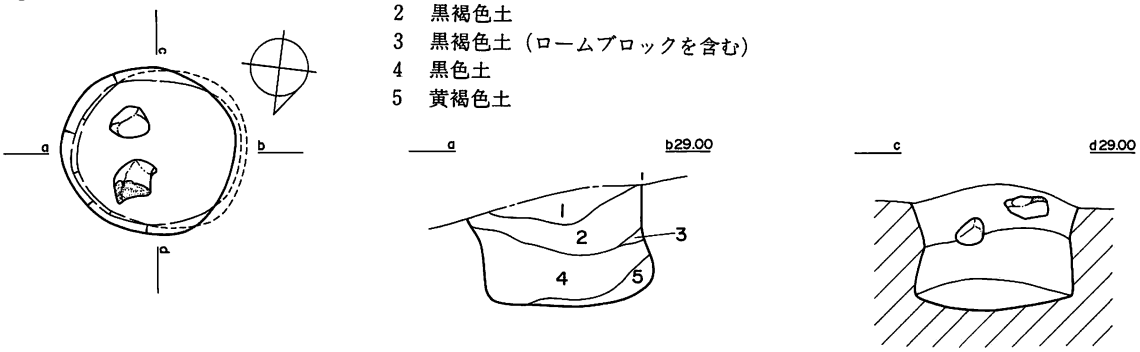
KP-61



図Ⅲ－81　円形，楕円形ピット(7)・KP－57，58，60，61

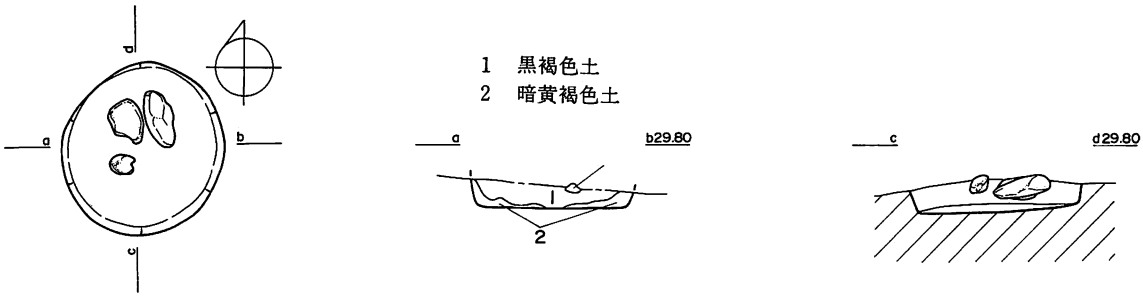
KP-62

1　褐色土（ローム粒を多量含む）
2　黒褐色土
3　黒褐色土（ロームブロックを含む）
4　黒色土
5　黄褐色土



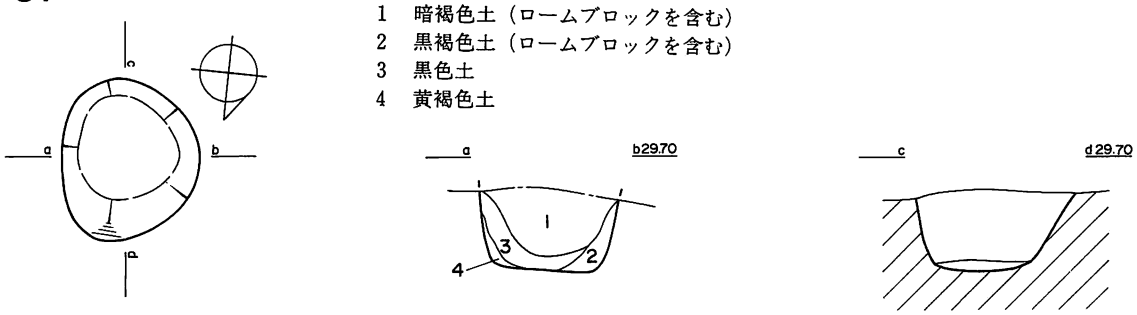
KP-64

1　黒褐色土
2　暗黄褐色土



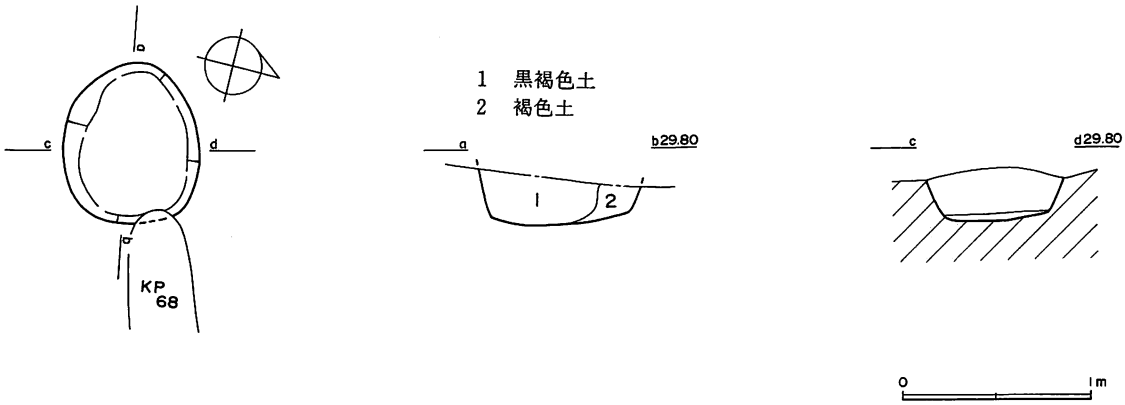
KP-67

1　暗褐色土（ロームブロックを含む）
2　黒褐色土（ロームブロックを含む）
3　黒色土
4　黄褐色土

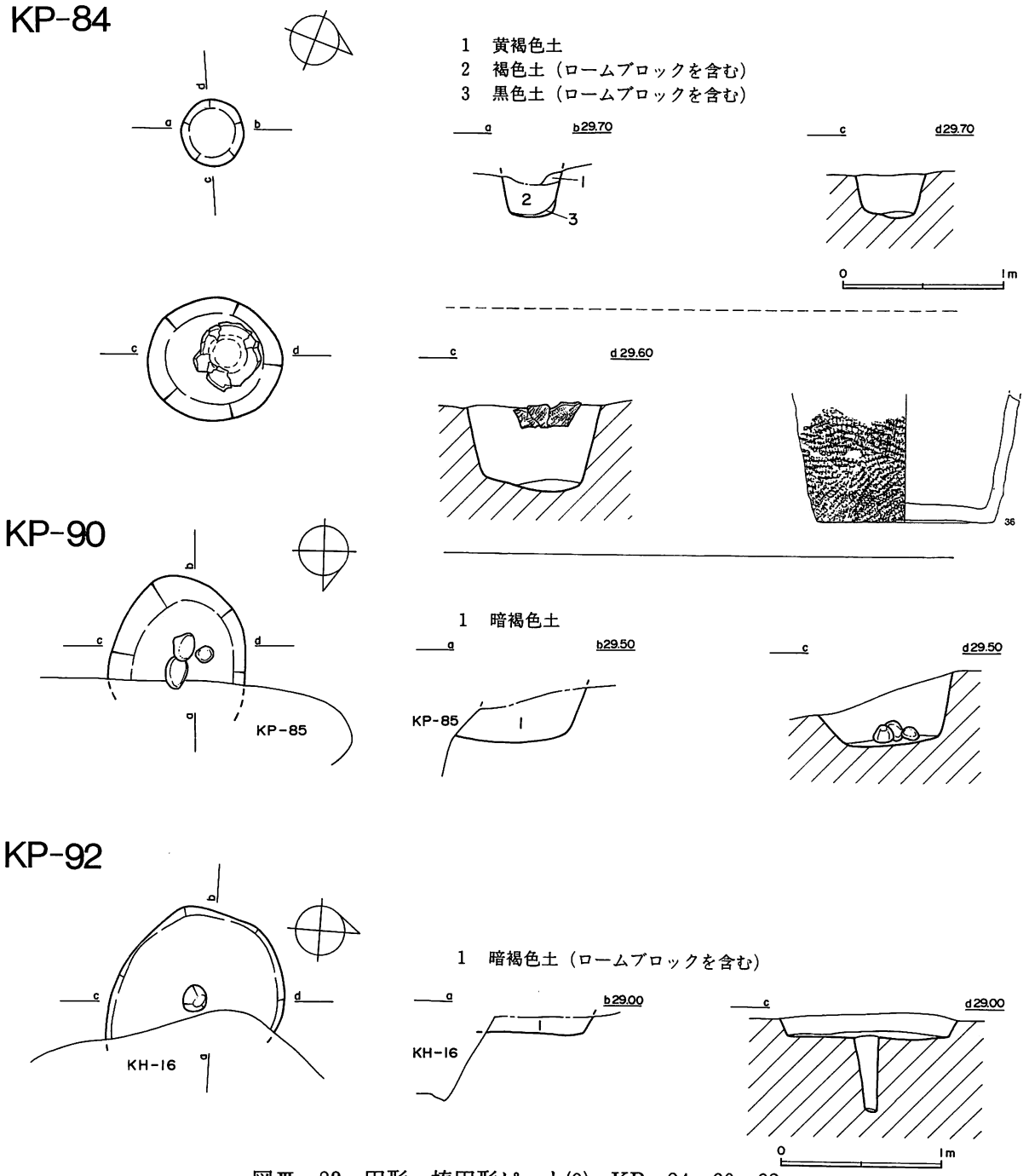


KP-80

1　黒褐色土
2　褐色土



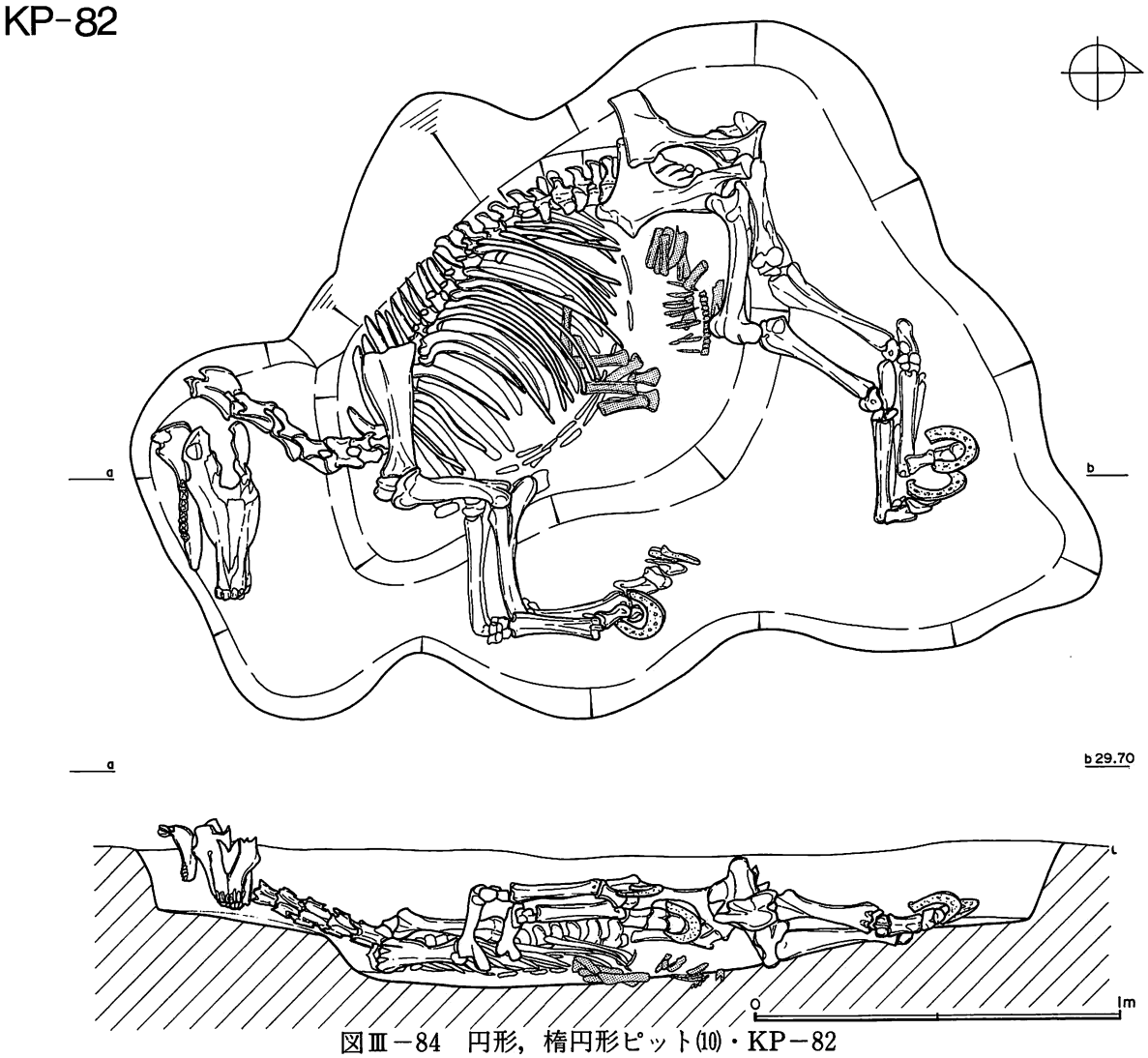
図Ⅲ－82　円形，楕円形ピット(8)・KP－62，64，67，80



図Ⅲ－83　円形，楕円形ピット(9)・KP－84，90，92

ット同様覆土中から少量の遺物が出土する例が多い。その他の例としては，以下のようなものがある。KP－60は覆土中より礫25点，フレイク37点などが出土している。覆土中の土器は，Ⅱ群Ｂ類の時期であるが，遺構の時期については不明である。KP－34，90の壙底面近くからは，拳大より大きめの礫が１～３点出土している。KP－11は，他のピットにくらべ深さが1.38mもあり，土層の堆積状況から，Ｔピットの可能性もある。楕円形ピットの重複は，住居跡に切られるもの（KP－92），Ｔピットを切るもの（KP－55，58），Ｔピットに切られるもの（KP－33，80，60，90）がある。

その他のピット　その他のピットとしたものは形状が長方形のもの（KP－18），五角形のもの（KP－44）とがある。このほかに馬を埋葬した楕円形のピット（KP－82）が１例ある。KP－44は，



図Ⅲ－84　円形，楕円形ピット⑽・KP－82

住居跡KH－6を切っている。KP－82は，雌の馬が一頭埋葬されており，その馬の腹部付近には胎児の骨も見られた。時期は，このあたりを畑地として利用していたころと思われる。

ピット出土の遺物

円形・楕円形ピットより出土した遺物は，土器265点，石器5点，フレイク・礫が133点の計403点である。以下，図Ⅲ－85に掲載した遺物のおもなものについて説明を加える。

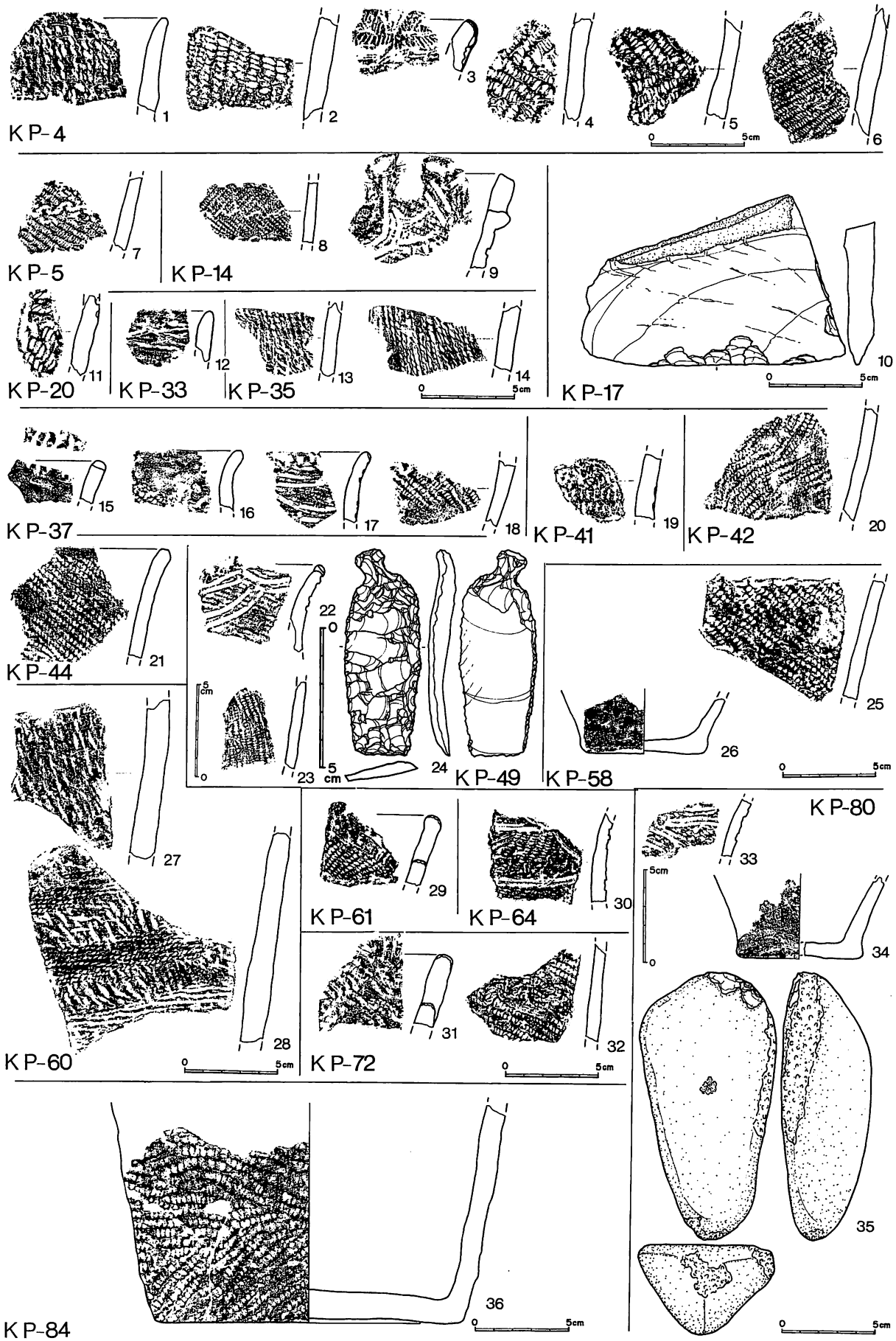
KP－4　1，2はⅢ群A_1類の口縁部および胴部である。2点とも内面がよくみがかれており，胎土中には繊維の混入の痕が多くみられる。4～6は，いずれもⅢ群A_3類の胴部である。地文は，結束第一種の羽状縄文である。胎土中には，砂粒，小礫を多く含んでいる。

KP－14　8は，Ⅲ群A_3類の胴部で，内面は横位に調整の痕がみられる。

KP－33，35　12，13は，Ⅱ群B類の口縁部，胴部の破片である。14の内面は，よくみがかれている。

KP－37　15～18は，Ⅲ群A_3類の口縁および胴部の破片である。15の口唇上には，管状工具による刻み目がある。16の口唇断面は丸味を帯び，口縁上部は無文である。

KP－41　19は，Ⅱ群A類の底部近くの破片である。爪形文が2段にわたり施文されている。



図Ⅲ－85　円形・楕円形ピット遺物

ＫＰ－42，44　20，21は，Ⅲ群Ｂ類（榎林式）の土器片である。２点とも複節の斜行縄文が施され，硬質な感じのするものである。内面の調整は良好である。

ＫＰ－60　27，28は，同一個体と思われるⅡ群Ｂ類の胴部破片である。土器片は厚みがあり，内面調整は良好で，炭化物が薄く付着している。

ＫＰ－84　36はⅢ群A_1類の底部である。LRの原体による斜行縄文を，器面全体に施文している。底径は16cmで若干上げ底である。内面・底面の調整は良好である。

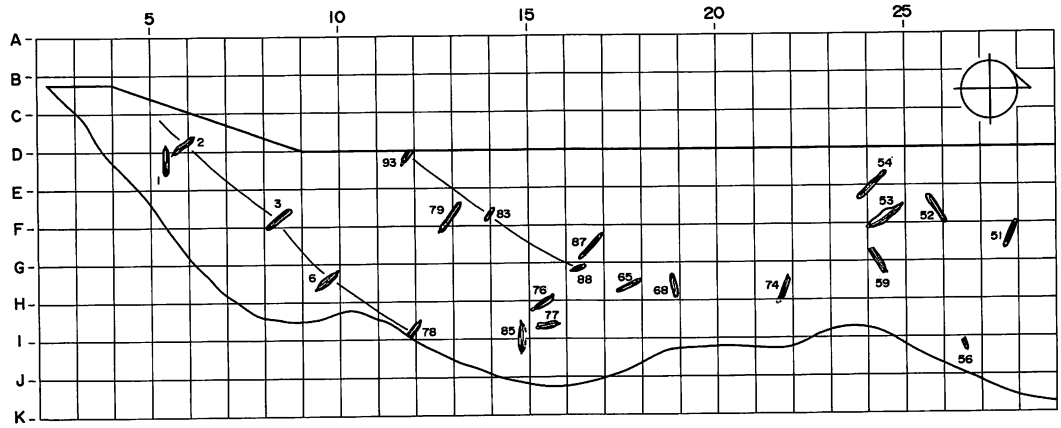
（佐川俊一）

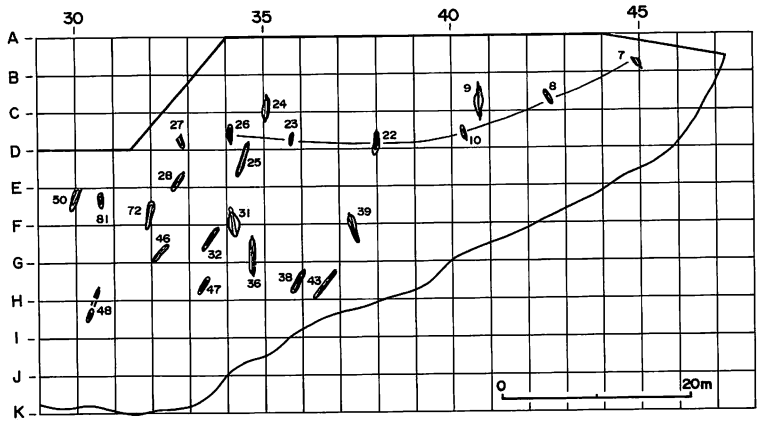
(4)　Ｔピット（図Ⅲ－86～104，図版28，29－１～３）

桔梗２遺跡からＴピットは44基検出された。これらは調査区全域にわたって分布している。確認はKP－48を除きⅣ層上面でおこなった。規模は壙底面の最大長の比較から2.5m未満のもの（KP－８・10・22・23・26・28・38・46・47・56・68・81・83・88）と2.5m以上のもの（KP－１・２・３・６・９・24・25・31・32・36・39・43・48・51・52・53・54・59・65・72・76・77・78・79・85・87）の２つに大きく分けられる。平面形は確認面の深さや壁の崩落度合いによる違いがあるものの総じて長円形をなすものである。重複は住居跡を切るものが３基（KP－10・38・43），フラスコ状ピットを切るもの１基（KP－65），円形・楕円形ピットと重複するもの７基（KP－26・32・36・56・59・68・85）がそれぞれある。Ｔピットどうしの重複例はない。また，KP－３はKH－18の掘り上げ土が直接壙内に堆積していることから，これよりも古い時期のものであることがわかった。Ｔピット列は，長軸方向，規模の共通性などからＡ・Ｂ・Ｃの３列が確認された。Ａ列はKP－２・３・

重　　複

Ｔピット列





図Ⅲ－86　Ｔピット分布図

6・78の4基から成るもので，南斜面から台地縁辺部にかけて分布している。列方向は北東－南西をさす。規模は（以下いずれも壙底面における最大長×最大幅）平均3.23×0.22m，ピット間隔は平均10.6mである。B列はKP－83・88と93がこれに加わるものと考えられる。台地上に分布し，列方向は北東－南西をさす。規模は平均1.84×0.16m，ピット間隔は平均10.8mである。C列はKP－8・10・22・23・26と7・27がこれに加わるものと考えられる。32ライン以北の緩斜面に分布している。列方向は北－南ないし北北西－南南東をさす。規模は平均1.69×0.95m，ピット間隔は平均8.7mである。このほかに調査区中央の

湾入部 湾入部付近にはTピットの長軸が等高線に対して直交するものがあるが（KP－32・36・38・43・46・47・50・72・81），長軸方向にばらつきが見られ，列として抽出することはできなかった。湾入部にあるKP－48は，Ⅱ層中に壙底面があるもので，台地縁辺部の急斜面にあるKP－46・47の確認状態と考え合せると，これらのTピットが掘られた時期において，

遺物 この湾入部はかなり埋没していたものと考えられる。遺物はすべて覆土から出土したものである。土器は総計652点出土した。その内訳はⅠ群が85点，Ⅱ群が50点，Ⅲ群が343点，不明・その他が174点である。石器等は総計88点出土した。その内訳は石鏃2点，槍先またはナイフ1点，つまみ付ナイフ1点，スクレイパー6点，すり石1点，石核1点，フレイク68点，礫8点である。図示したものについて以下に概要する。

KP－1　Ⅲ群A_1類，Ⅲ群A_3類土器が出土している。3は無茎鏃。石材は頁岩。

KP－3　5はⅡ群B類土器，胎土には繊維を含む。ほかはⅢ群A_3類土器。

KP－6　12～14はⅡ群B類，このほかはⅢ群A類土器である。18は有茎鏃，19はスクレイパー。20は石核。これは接合しなかったがKH－13の石核（図Ⅲ－29－14）と同一母岩であると考えられる。石材は，18がチャート，19・20が頁岩である。

KP－8，9　21・23ともにつまみ付ナイフ。加工のあり方から縄文時代早期のものと判断される。石材はともに頁岩。

KP－10，22　24～26はⅠ群B_3類土器。

KP－25　30はⅠ群B_4類，31はⅢ群A_3類土器。32はつまみ付ナイフ。石材は頁岩。

KP－28　33はⅠ群A_1類のムシリⅠ式系土器。

KP－31　34，37～39はⅠ群B_4類。35・40はⅢ群A_3類。

KP－32　41はⅠ群B_4類土器。

KP－36　42はⅢ群A_3類土器。43はすり石。石材は安山岩。

KP－38　44はⅢ群B類，45はⅢ群A_3類，46はⅠ群B_4類土器。

KP－39，51　47，48，51はⅢ群A_3類土器。

KP－50　50はⅠ群B_3類土器。

KP－52　52，53はⅢ群A_1類土器。54はスクレイパー。石材は頁岩。

KP－53　55～59はⅢ群A_3類土器。61は両面加工の槍先またはナイフ破片。石材は頁岩。

KP－54　62，63はⅢ群A_3類土器。

KP－59　66はⅢ群A_1類土器。ほかはⅢ群A_3類土器。

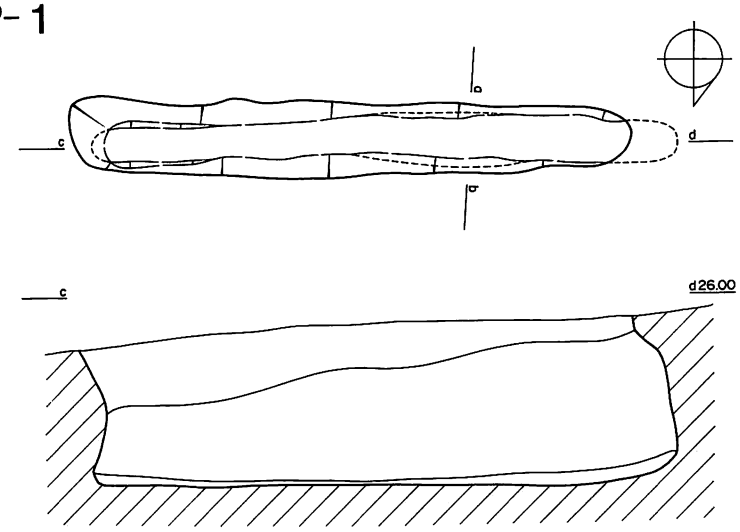
KP－65　71はⅢ群A_3類，72はⅠ群B_4類土器。

KP－67　73はⅢ群A_3類，74はⅢ群A_1類土器。

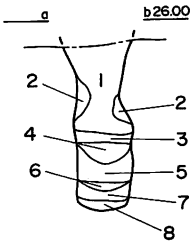
KP－68，74，77　75～77，80はⅢ群A_3類土器。

KP－78　81はⅡ群B類土器。ほかはⅢ群A_3類土器。

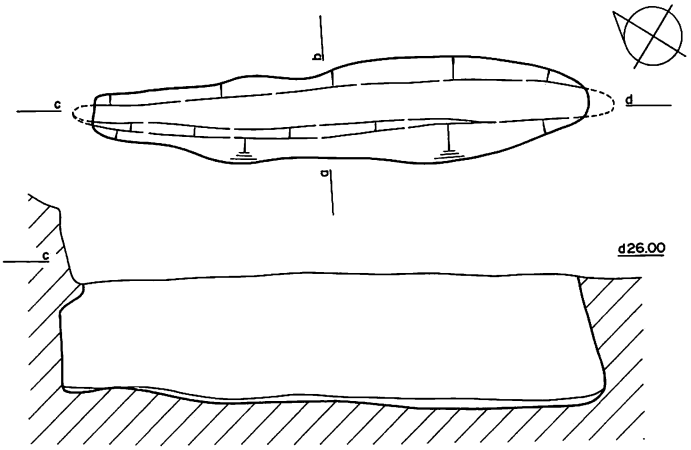
KP-1



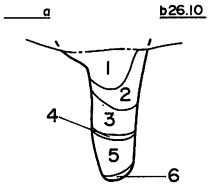
1　黒色土
2　黒褐色土（ローム粒を含む）
3　暗黄褐色土
4　黒褐色土（ロームブロックを含む）
5　茶褐色土
6　黒褐色土
7　黄褐色土
8　黒褐色土



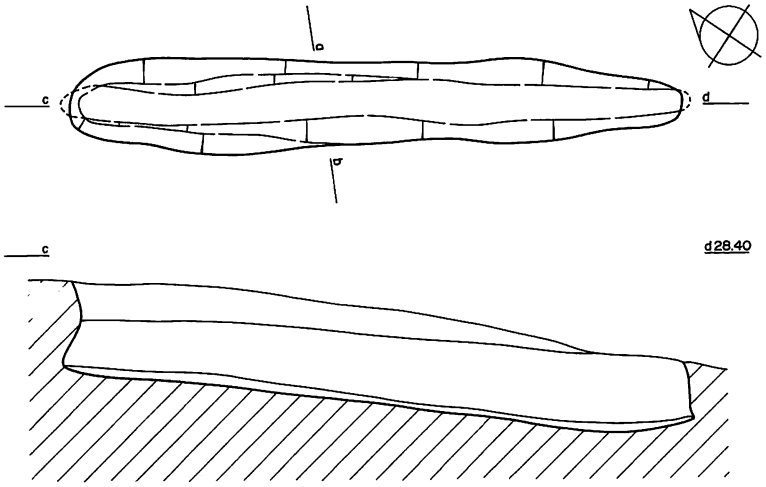
KP-2



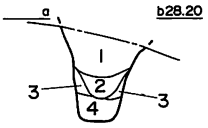
1　黒色土
2　茶褐色土（砂質）
3　黒褐色土
4　黒色土
5　茶褐色土
6　暗黄褐色土

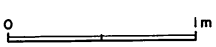


KP-3



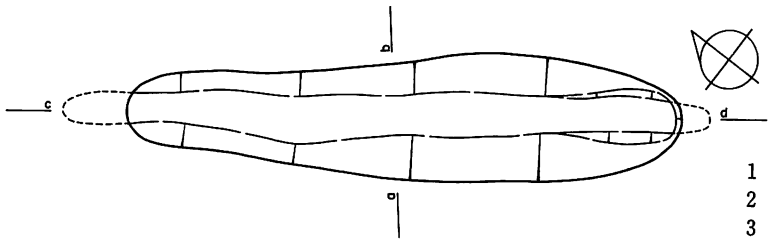
1　暗黄褐色土（KH－19の掘り上げ土）
2　明黒褐色土
3　黄褐色土
4　黒褐色土（ローム粒を含む）



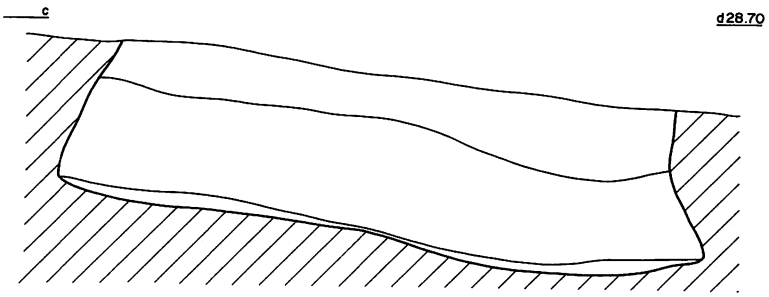


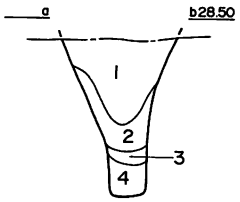
図Ⅲ－87　Tピット(1)・KP－1，2，3

KP-6

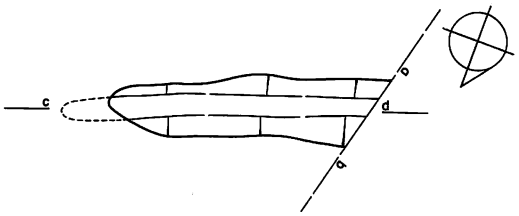


1　暗黄褐色土（KH－19の掘り揚土）
2　暗黒褐色土
3　黄褐色土
4　黒褐色土

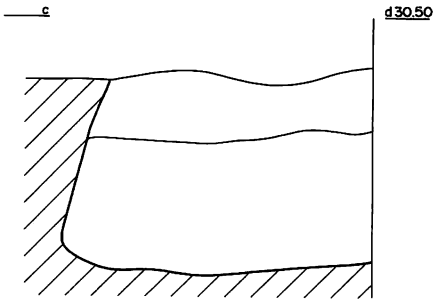


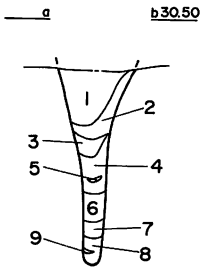


KP-7

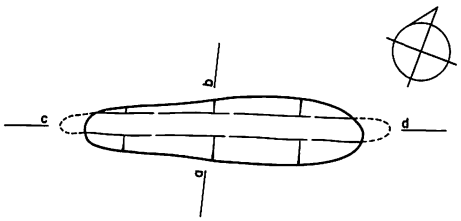


1　黒色土
2　黄褐色土
3　黒褐色土
4　黄褐色土
5　黒色土
6　黒色土
7　黒褐色土（ロームブロックを含む）
8　黄褐色土
9　黒色土

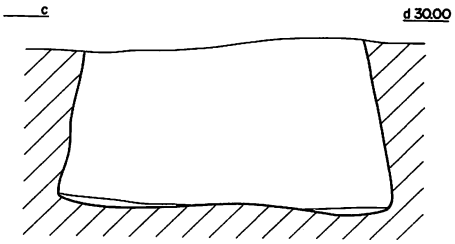


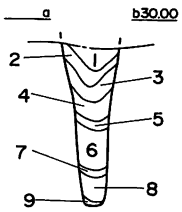


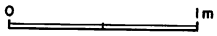
KP-8



1　黒色土
2　黄褐色土
3　黒色土
4　黄褐色土
5　黒色土
6　黄褐色土
7　黒褐色土
8　黄褐色土
9　黒色土

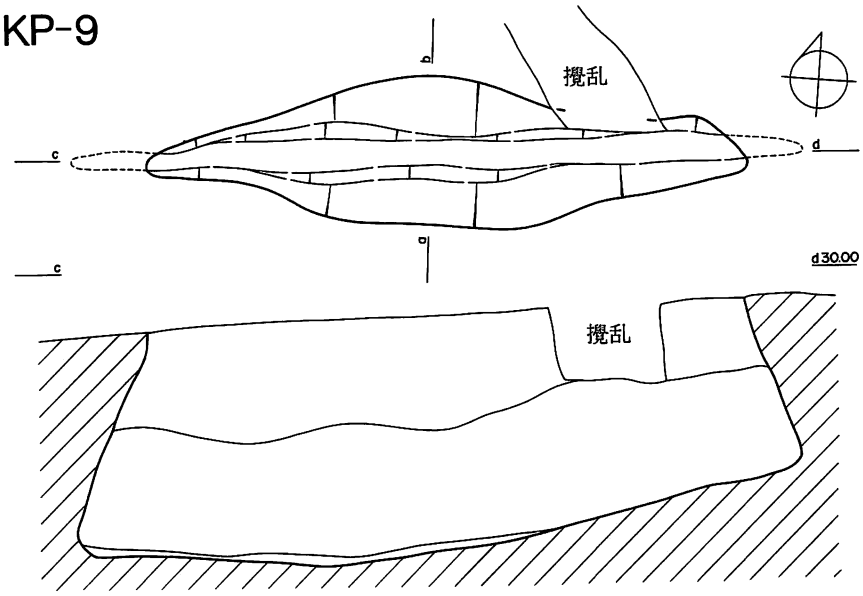






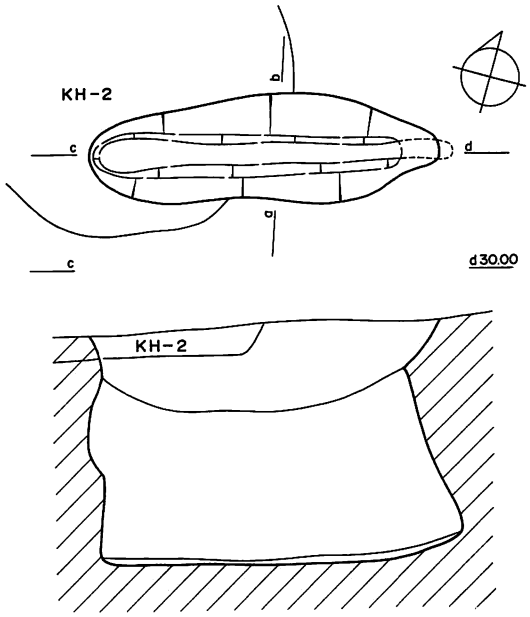
図Ⅲ－88　Tピット(2)・KP－6，7，8

KP-9



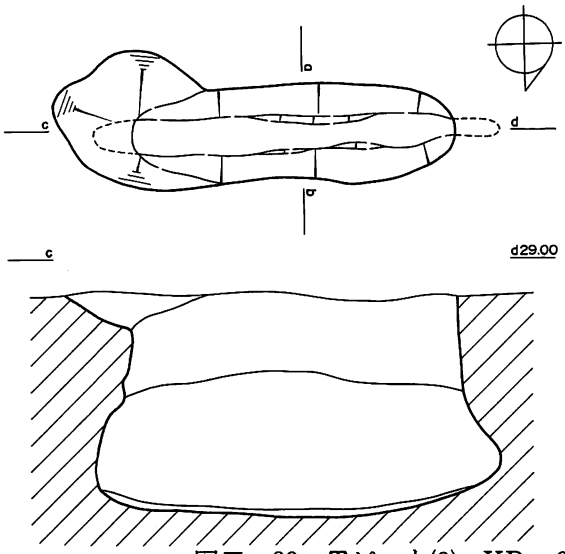
1　黒色土
2　黄褐色土
3　黒褐色土
4　黄褐色土
5　黒褐色土
6　褐色土（ロームブロックを含む）
7　黒褐色土（ロームブロックを含む）
8　黄褐色土
9　黒色土
10　黄褐色土（黒色土ブロックを含む）

KP-10



1　黒色土
2　黄褐色土
3　黒色土（ロームブロックを含む）
4　褐色土（ロームブロックを含む）
5　黄褐色土
6　黄褐色土
7　黒褐色土（ロームブロックを含む）
8　黄褐色土
9　黄褐色土
10　黄褐色土
11　黒色土
12　褐色土

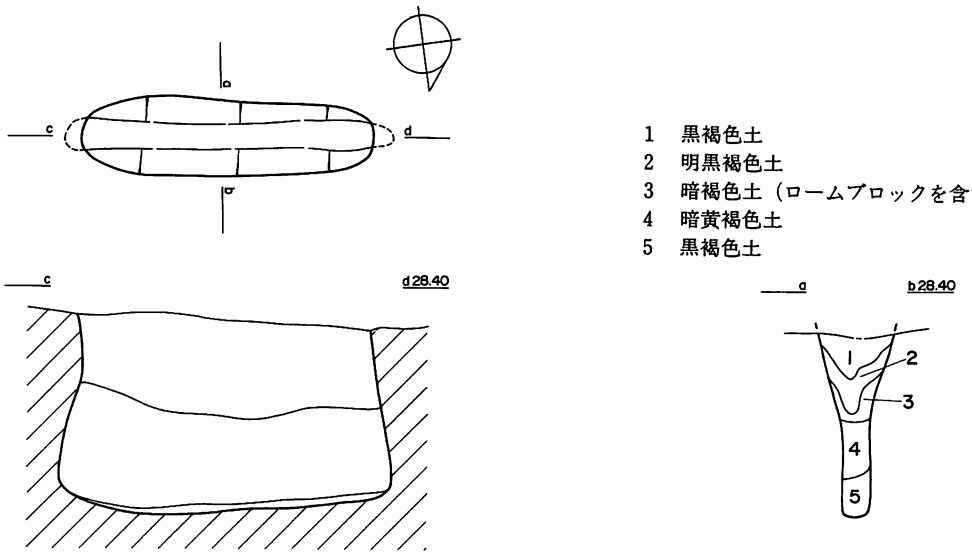
KP-22



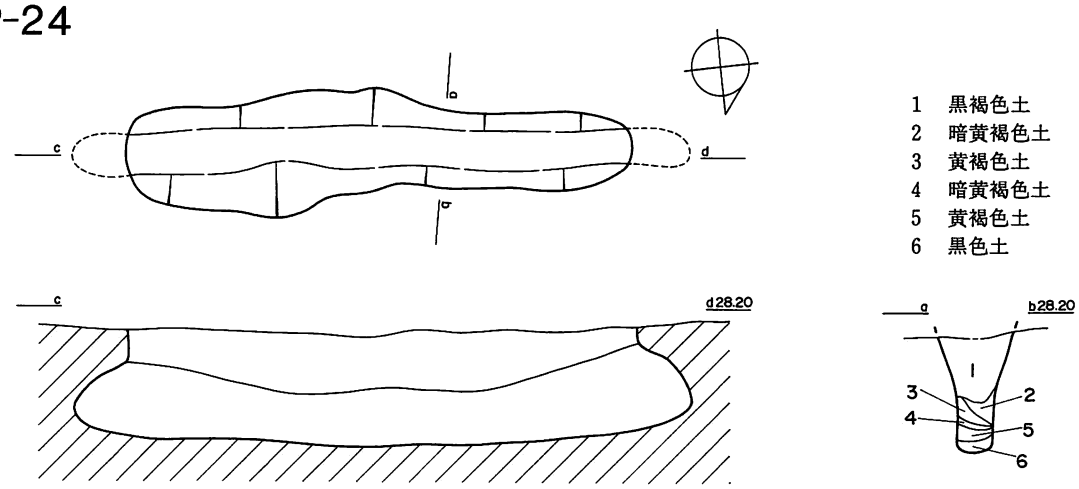
1　黒色土
2　黄褐色土
3　黒褐色土
4　褐色土
5　黄褐色土
6　黒褐色土
7　暗橙色土（砂質）
8　黒褐色土

図Ⅲ－89　Tピット(3)・KP－9，10，22

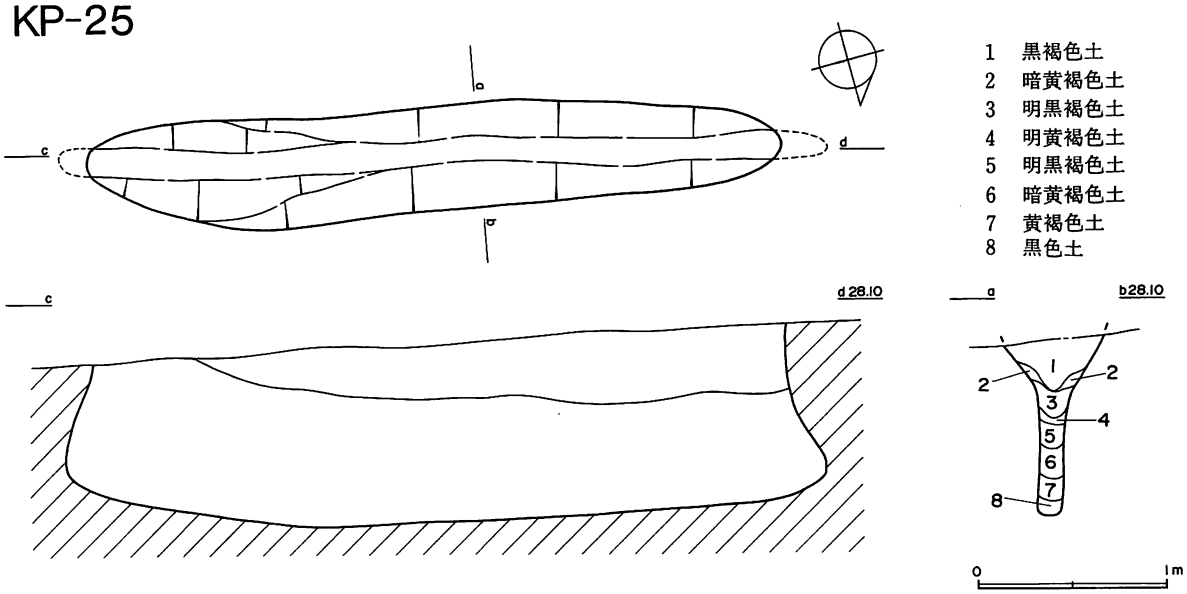
KP-23



KP-24

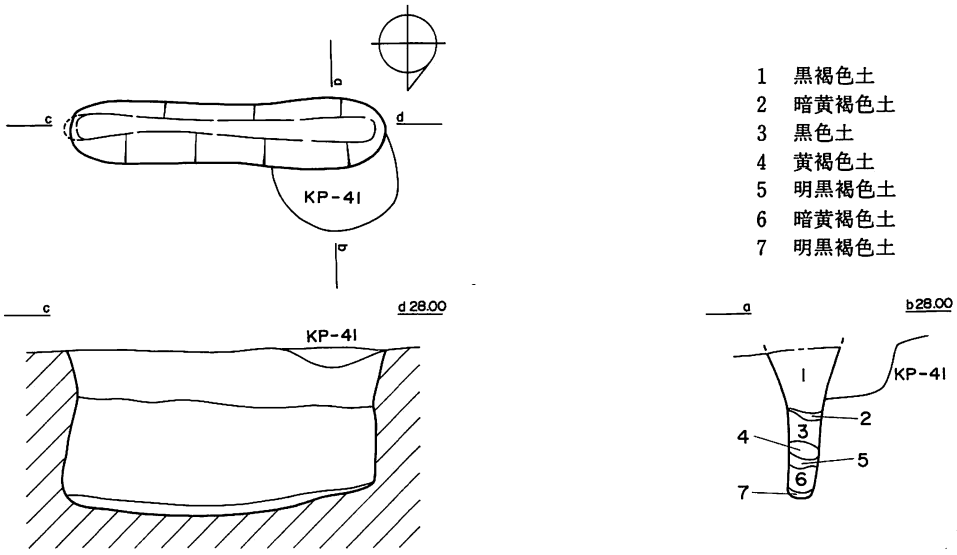


KP-25



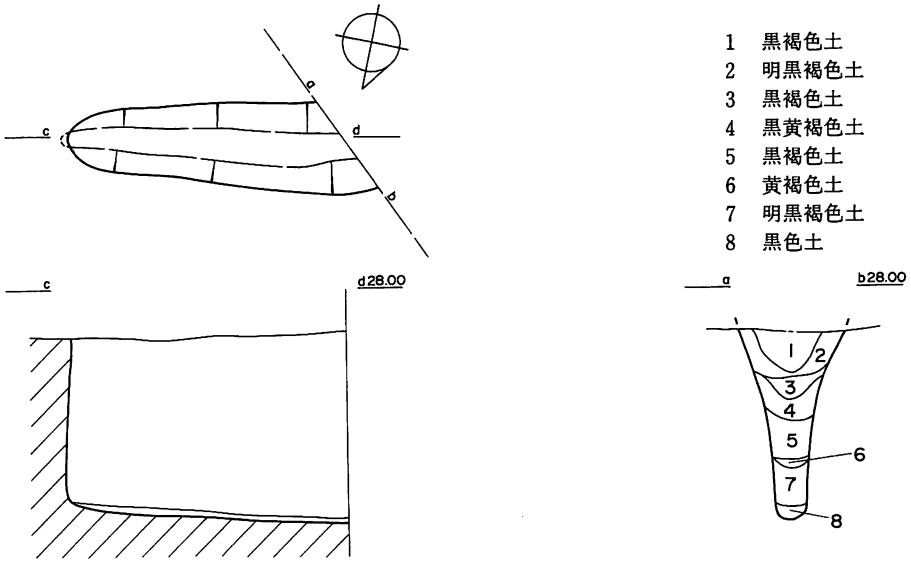
図Ⅲ－90　Tピット(4)・KP－23, 24, 25

KP-26



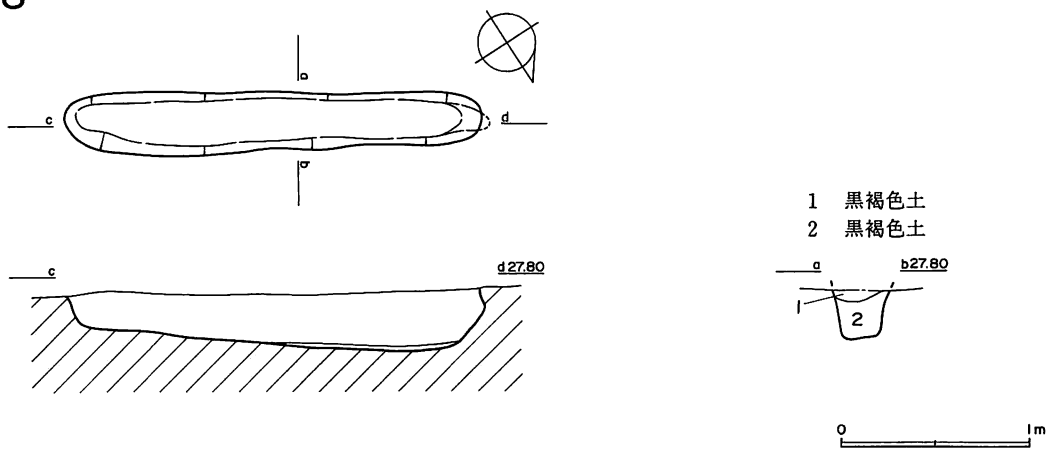
1　黒褐色土
2　暗黄褐色土
3　黒色土
4　黄褐色土
5　明黒褐色土
6　暗黄褐色土
7　明黒褐色土

KP-27



1　黒褐色土
2　明黒褐色土
3　黒褐色土
4　黒黄褐色土
5　黒褐色土
6　黄褐色土
7　明黒褐色土
8　黒色土

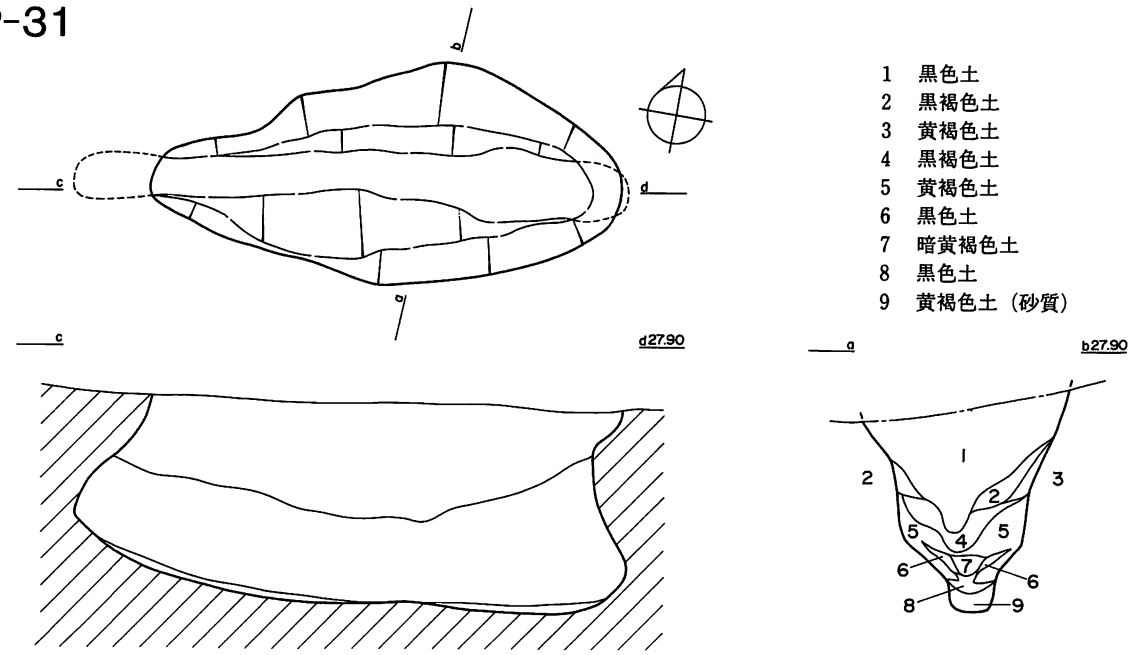
KP-28



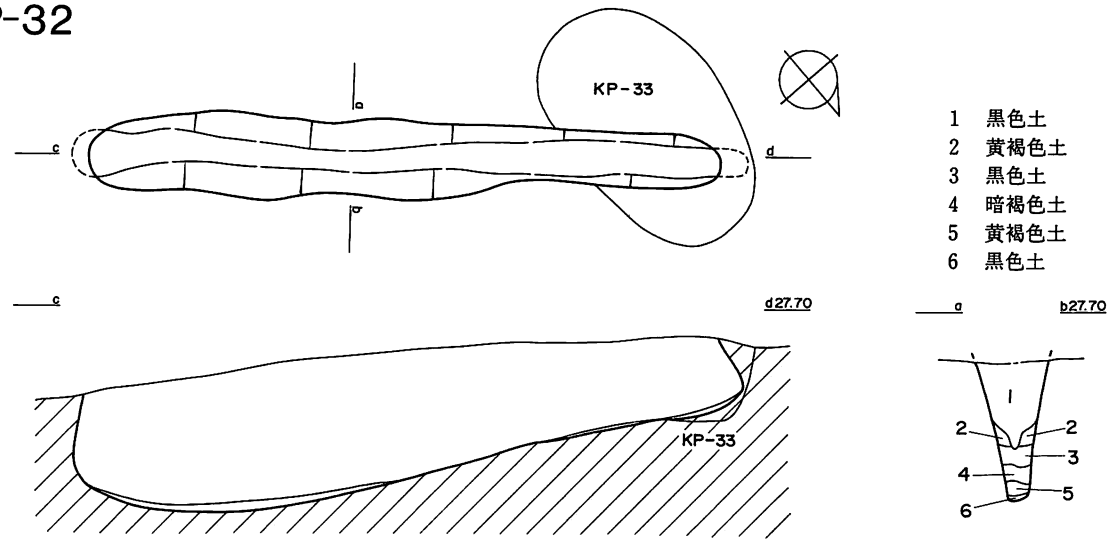
1　黒褐色土
2　黒褐色土

図Ⅲ－91　Tピット(5)・KP－26, 27, 28

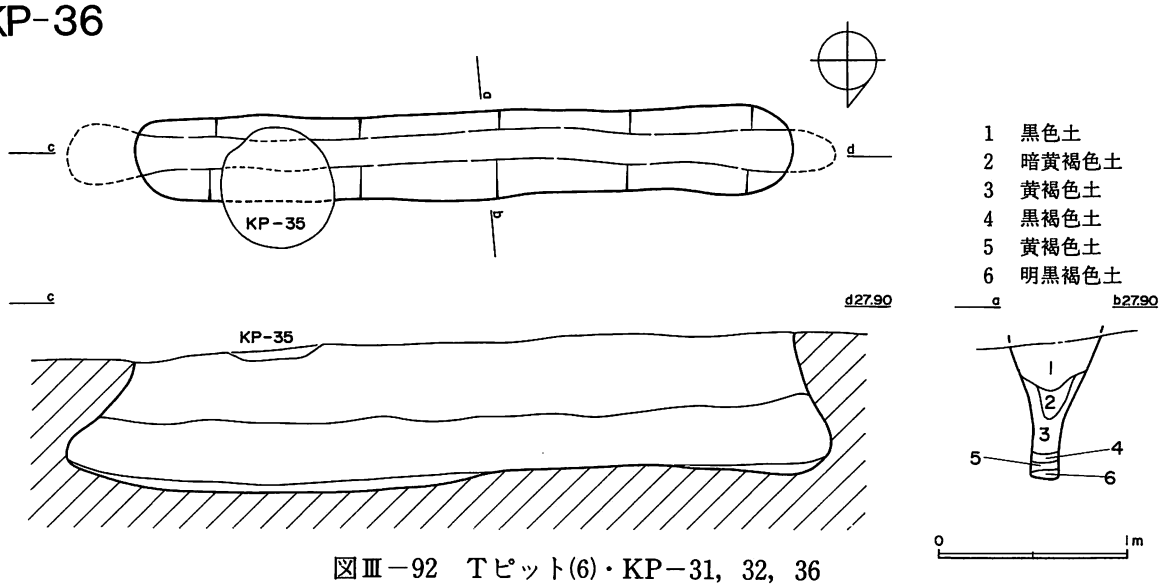
KP-31



KP-32

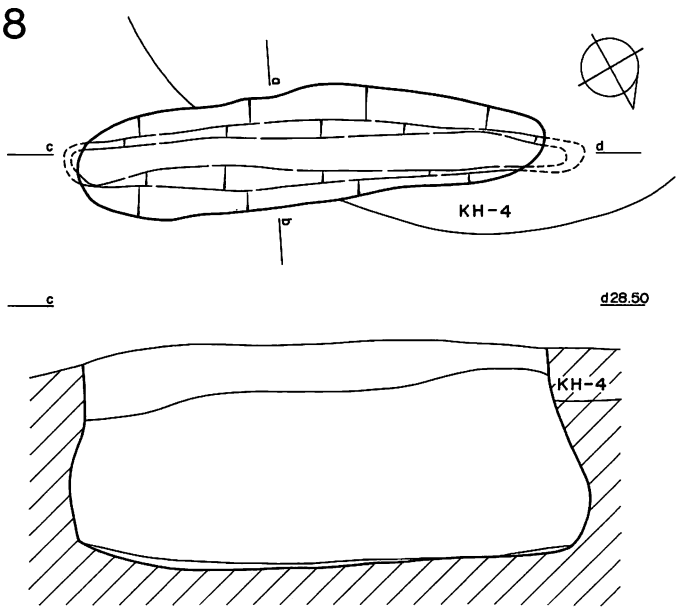


KP-36

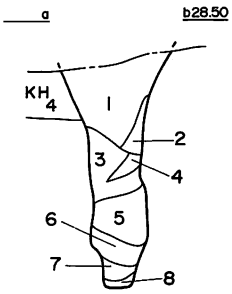


図Ⅲ－92　Tピット(6)・KP－31, 32, 36

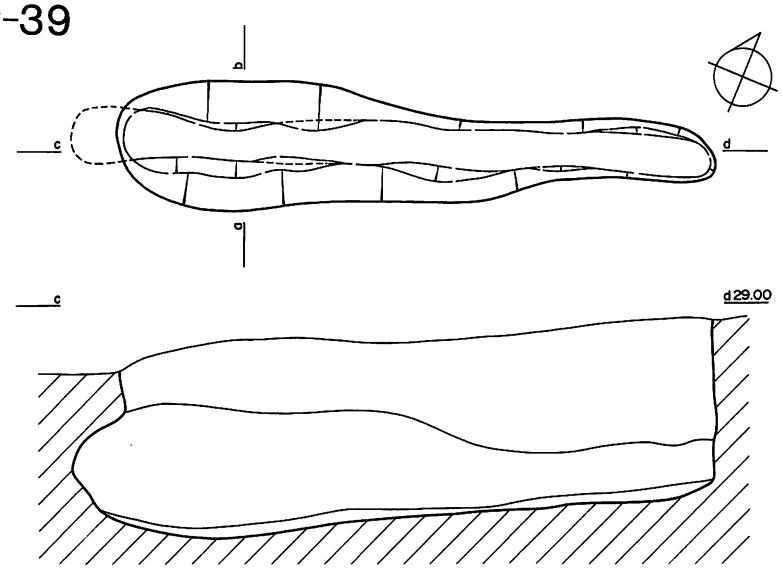
KP-38



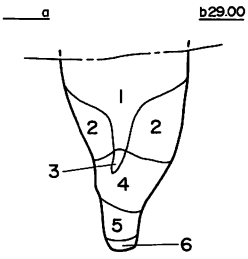
1　黒褐色土
2　黄褐色土
3　黒褐色土
4　黄褐色土
5　黄橙色土（砂質）
6　黒褐色土
7　黄褐色土（砂質）
8　黒色土



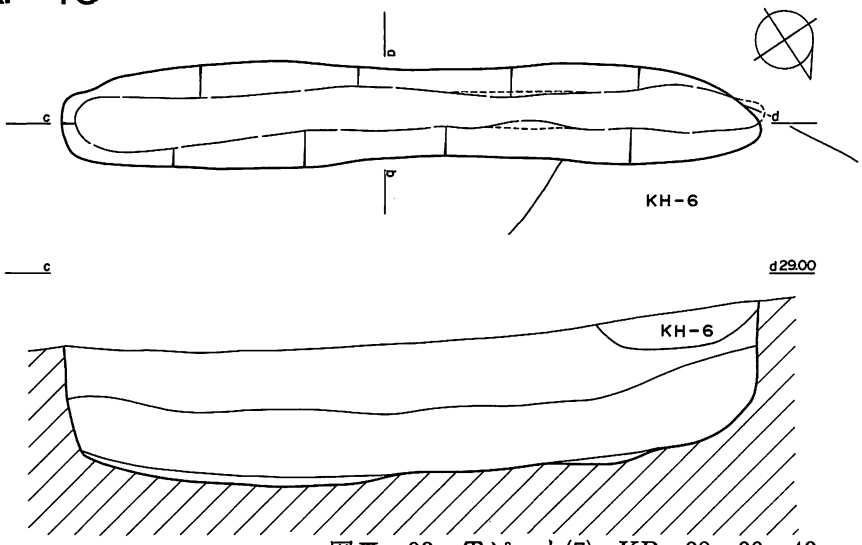
KP-39



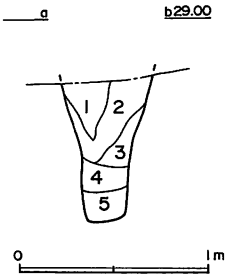
1　黒褐色土
2　黄褐色土
3　暗黄褐色土
4　黄褐色土（砂質）
5　黒褐色土
6　暗黄褐色土



KP-43

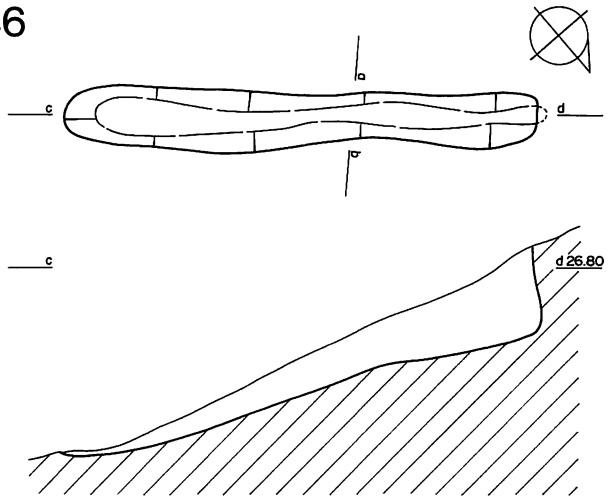


1　黒褐色土
2　茶褐色土
3　暗黄褐色土
4　茶褐色土
5　黒褐色土

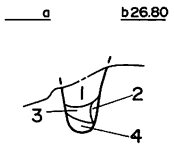


図Ⅲ－93　Tピット(7)・KP－38, 39, 43

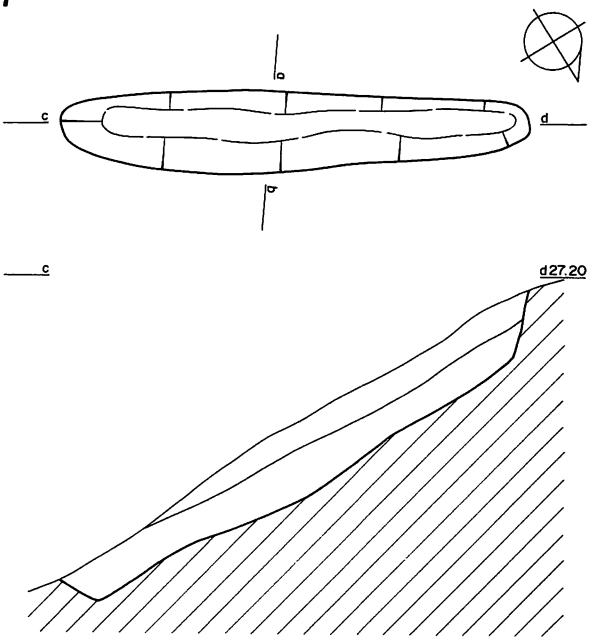
KP-46



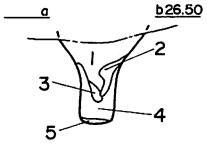
1　黒色土
2　黄褐色土（砂質）
3　暗褐色土（砂質）
4　黒色土



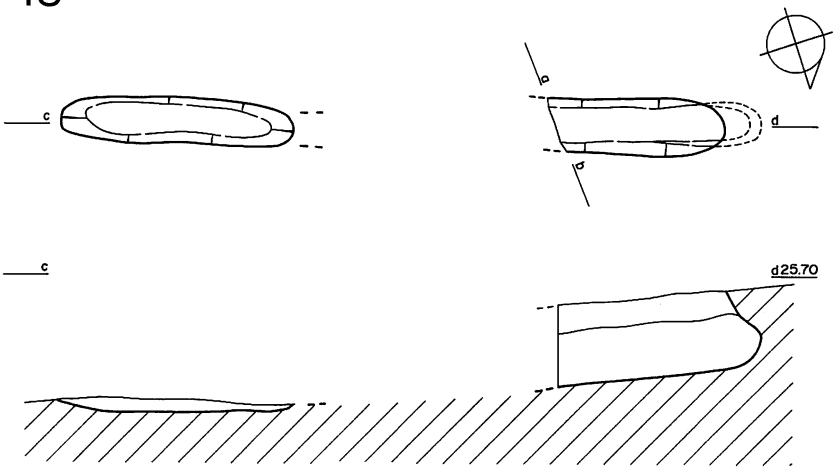
KP-47



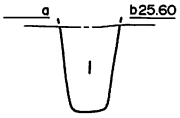
1　黒色土
2　暗褐色土（砂質）
3　黒褐色土（砂質）
4　黄褐色土（砂質）
5　黒色土

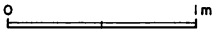


KP-48



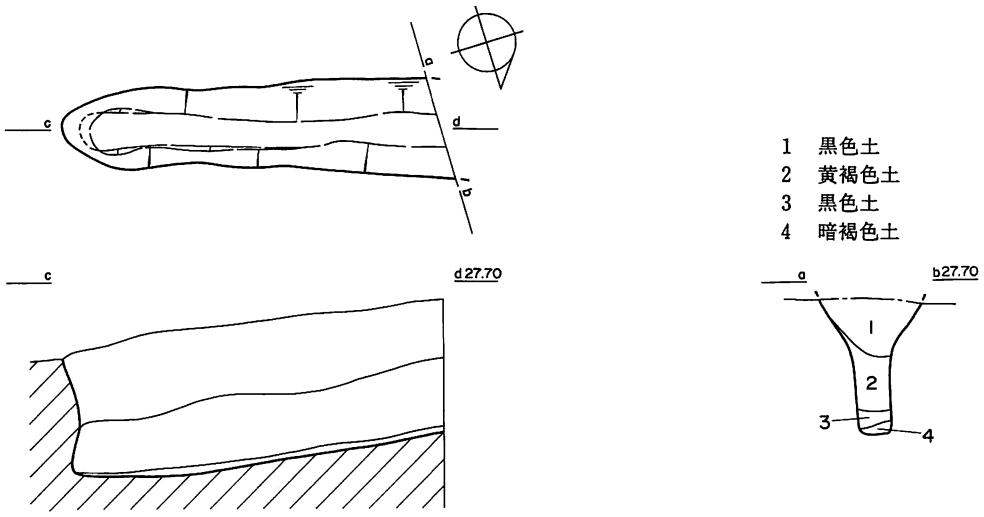
1　黒褐色土





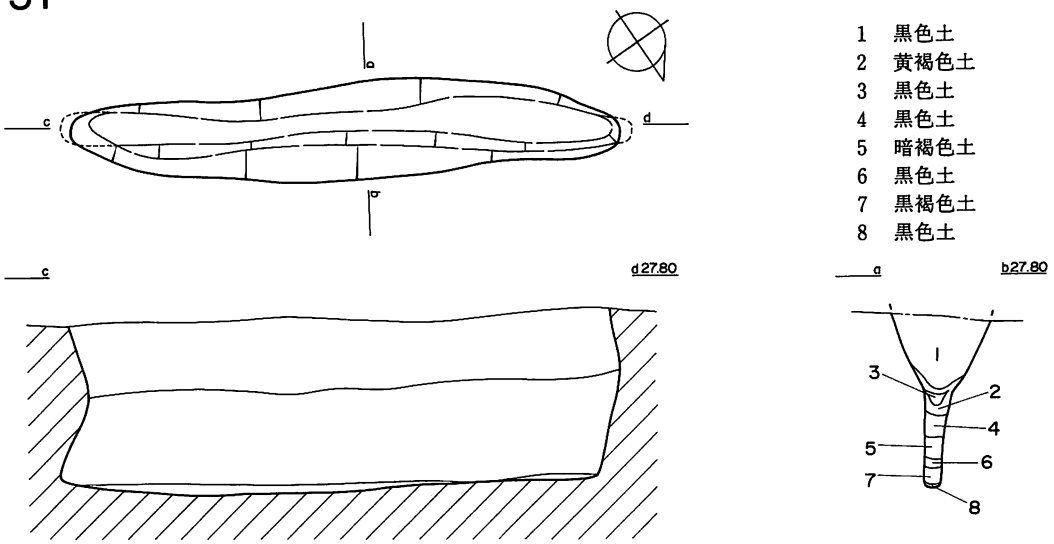
図Ⅲ－94　Tピット(8)・KP－46, 47, 48

KP-50



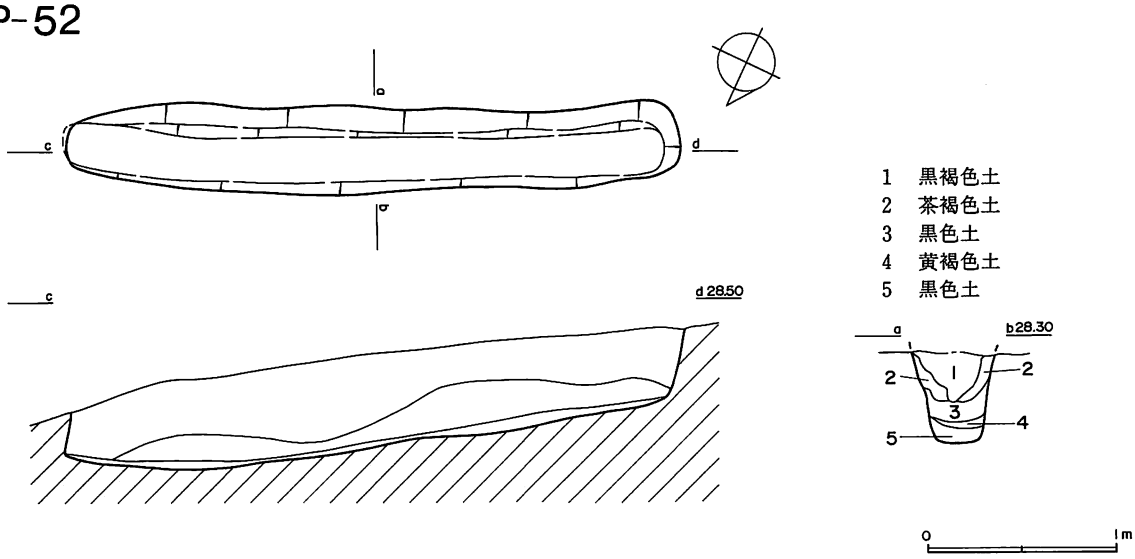
1　黒色土
2　黄褐色土
3　黒色土
4　暗褐色土

KP-51



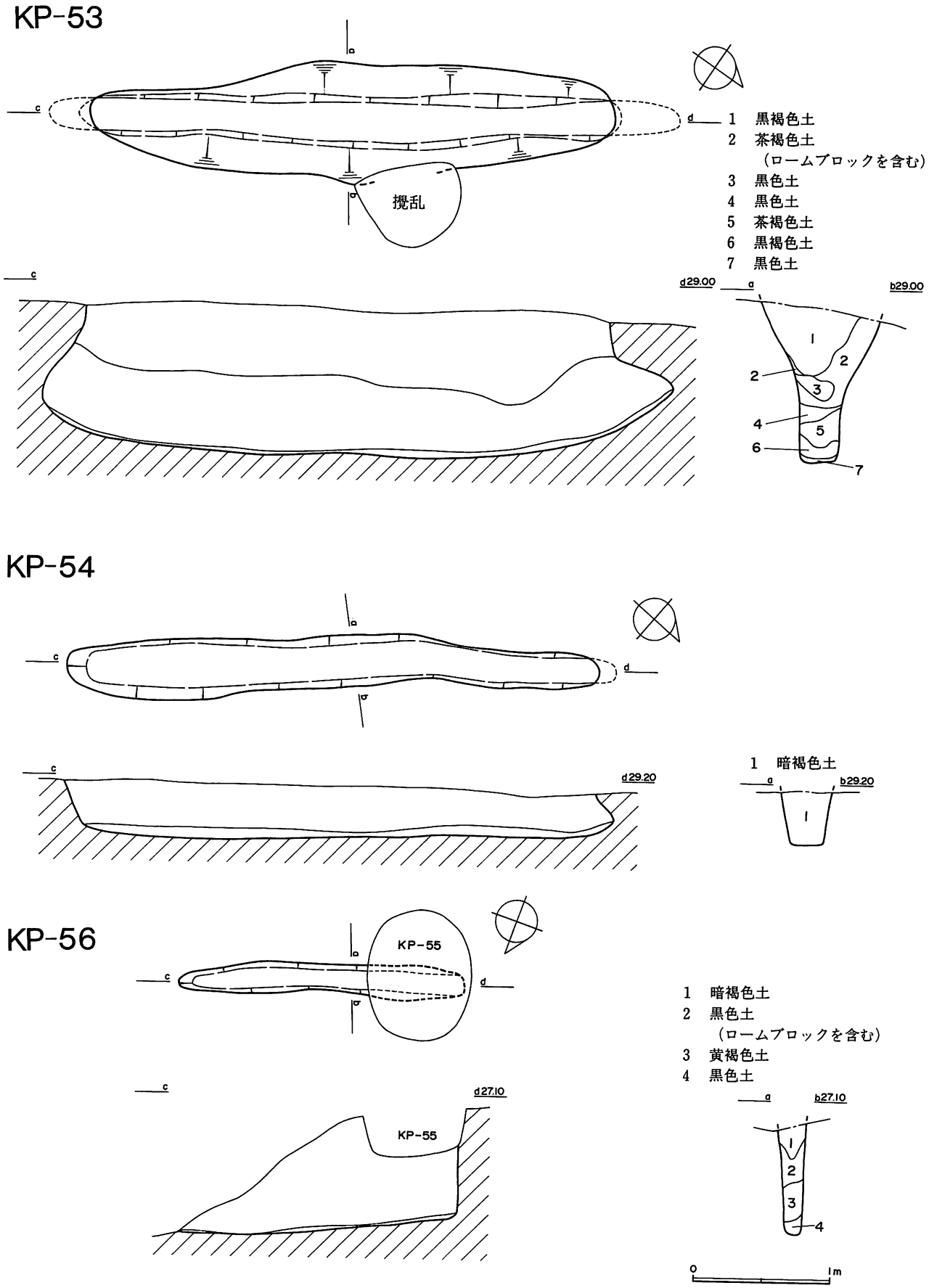
1　黒色土
2　黄褐色土
3　黒色土
4　黒色土
5　暗褐色土
6　黒色土
7　黒褐色土
8　黒色土

KP-52



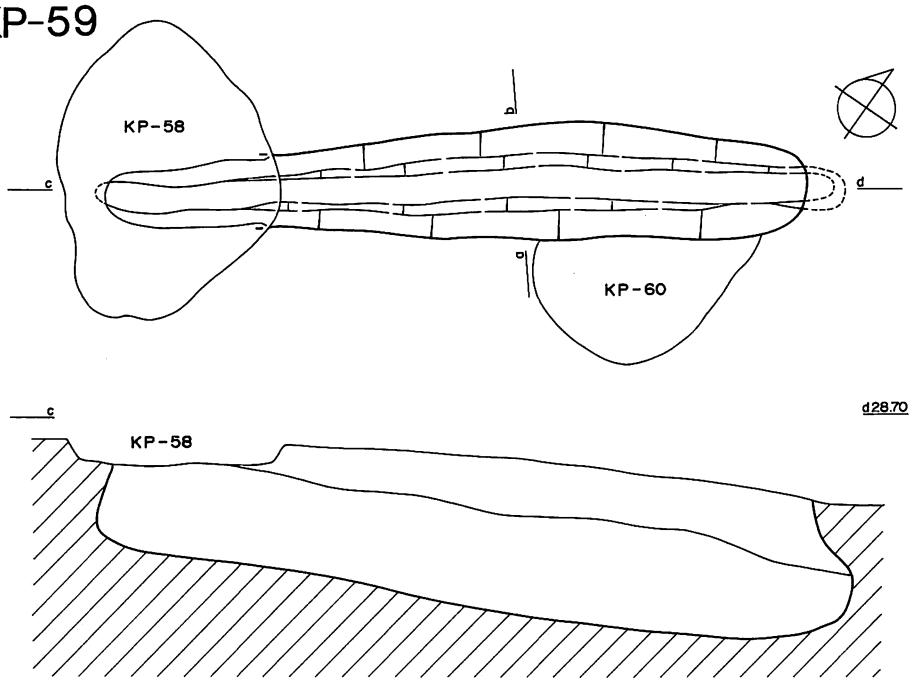
1　黒褐色土
2　茶褐色土
3　黒色土
4　黄褐色土
5　黒色土

図Ⅲ－95　Tピット(9)・KP－50，51，52



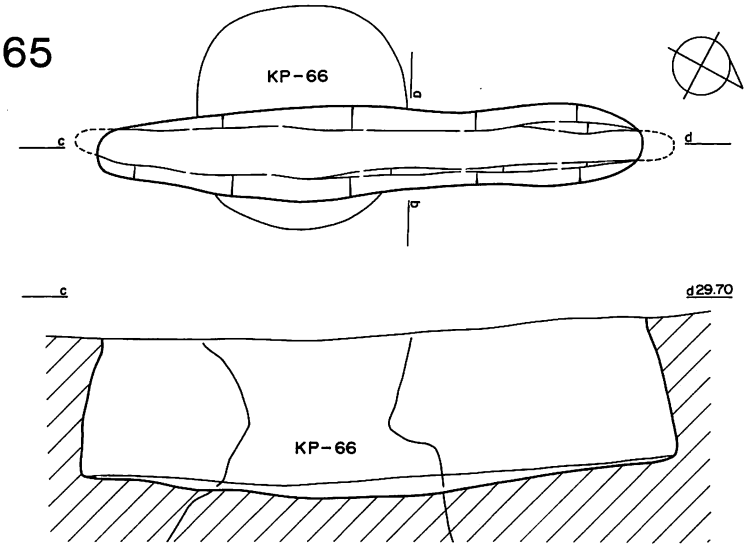
図Ⅲ－96　Tピット(10)・KP－53, 54, 56

KP-59



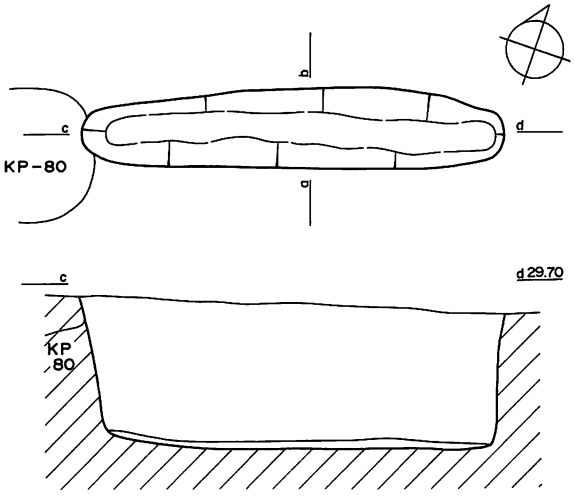
1　黒褐色土
2　褐色土
3　黄褐色土
4　暗褐色土
5　黒色土
6　黄褐色土
7　黒褐色土
8　黒色土

KP-65



1　黒褐色土
2　黄褐色土
3　黒色土
4　暗黄褐色土
5　黒色土
6　暗黄褐色土
7　黒色土

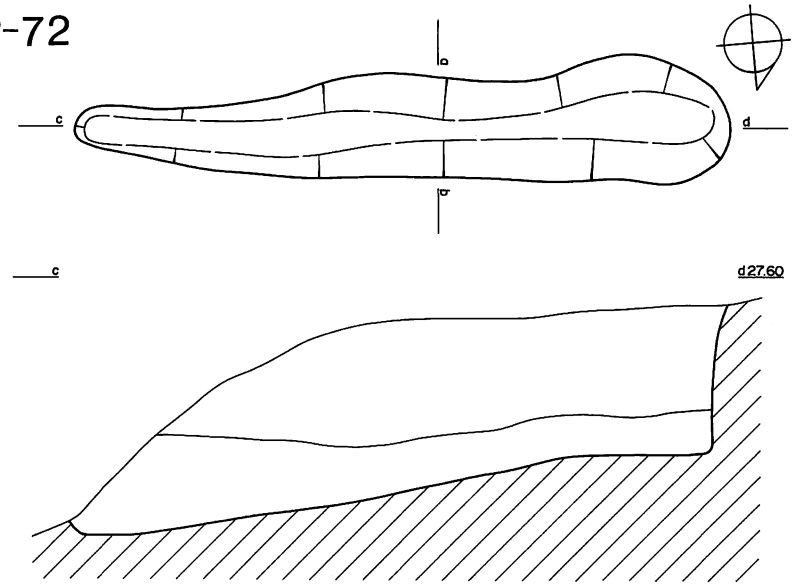
KP-68



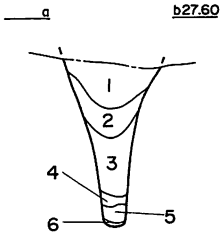
1　黒褐色土
2　黒褐色土
　（ロームブロックを含む）
3　黒色土
　（ロームブロックを含む）
4　暗黄褐色土
5　黄褐色土
6　黒色土

図Ⅲ－97　Tピット(11)・KP－59，65，68

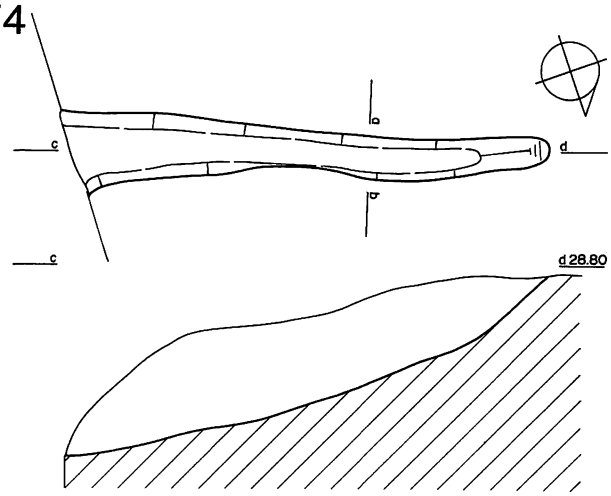
KP-72



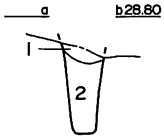
1　黒色土
2　黒褐色土
　（ロームブロックを含む）
3　黄褐色土
4　黒色土
5　黄褐色土
6　暗褐色土



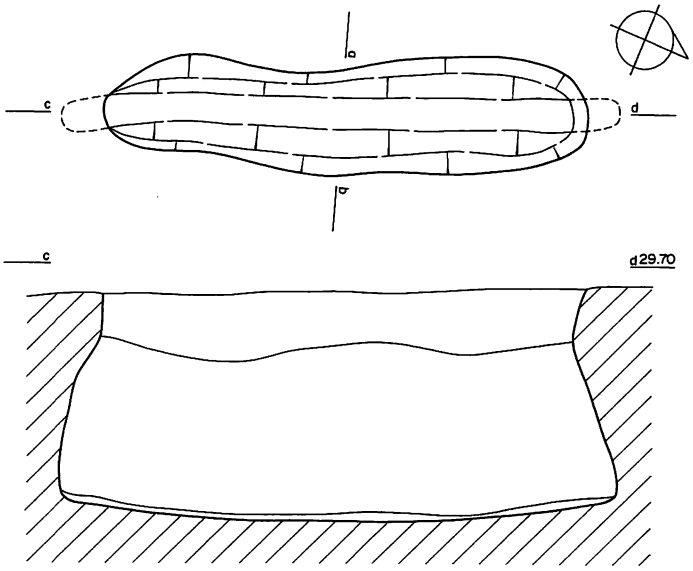
KP-74



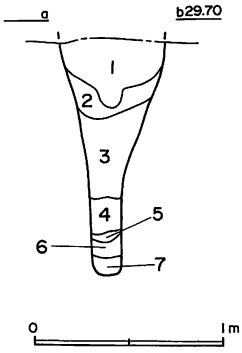
1　黒色土
2　暗茶褐色土（ローム粒を含む）



KP-76

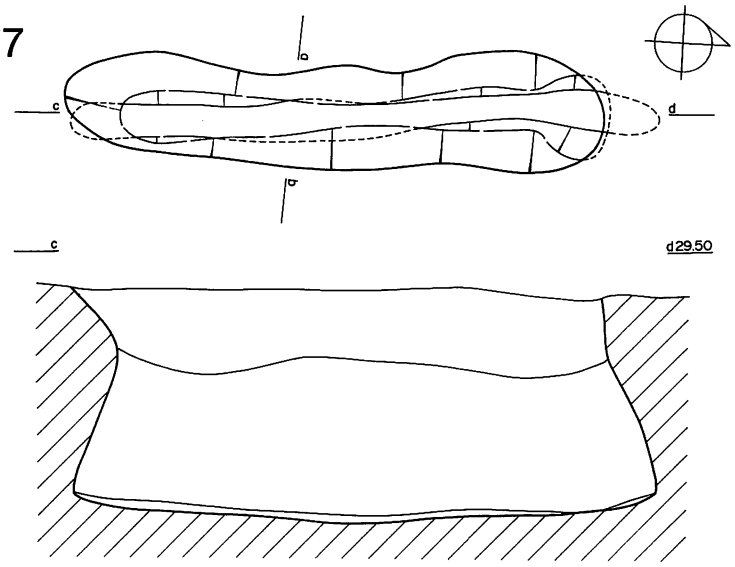


1　褐色土
2　黄褐色土
3　黄褐色土
4　黄褐色土
5　暗茶褐色土
6　黄褐色土
7　暗茶褐色土

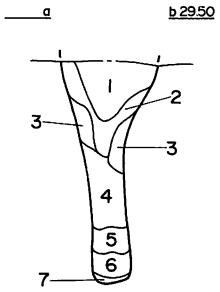


図Ⅲ－98　Tピット(12)・KP－72，74，76

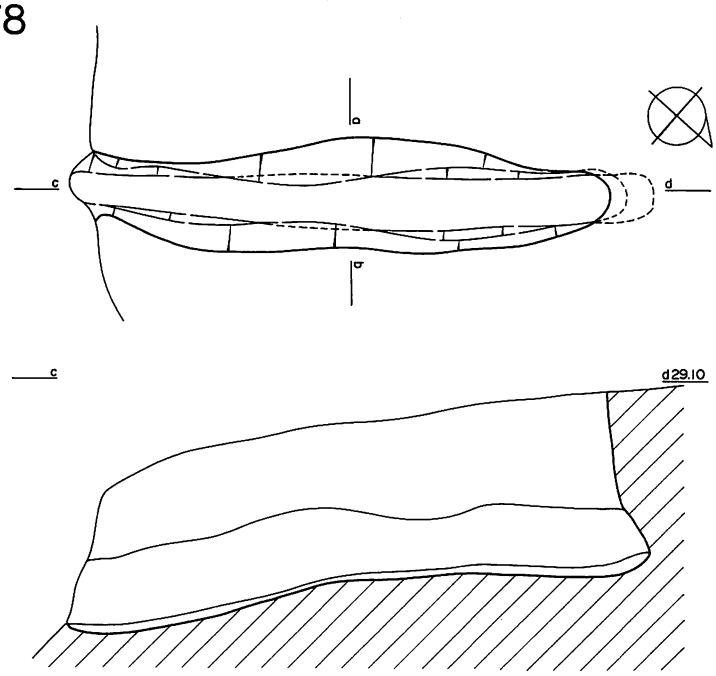
KP-77



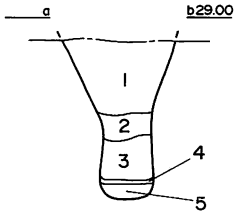
1　黒色土
2　黒褐色土
3　黄褐色土
4　黄褐色土
5　暗茶褐色土
6　黄褐色土
7　明黒褐色土



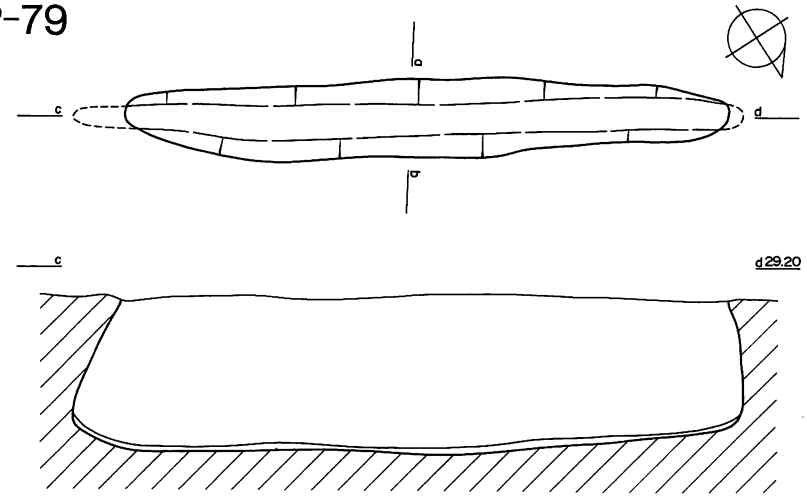
KP-78



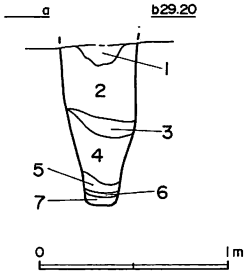
1　褐色土
2　暗黄褐色土
3　黄褐色土
4　暗茶褐色土
5　黄褐色土



KP-79

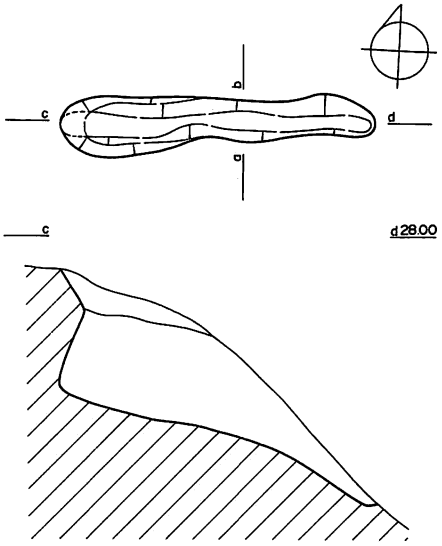


1　褐色土
2　黄褐色土
3　暗黄褐色土
4　黄褐色土
5　暗黄褐色土
6　褐色土
7　暗黄褐色土

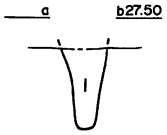


図Ⅲ－99　Tピット(13)・KP－77，78，79

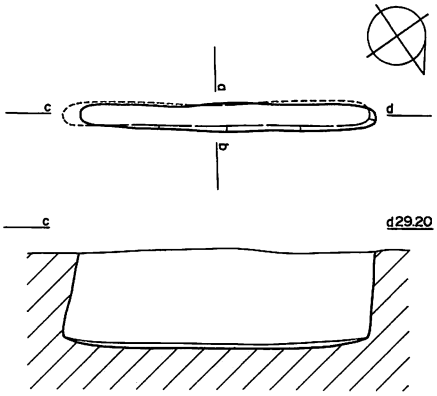
KP-81



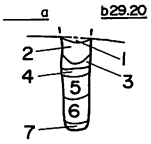
1　暗褐色土



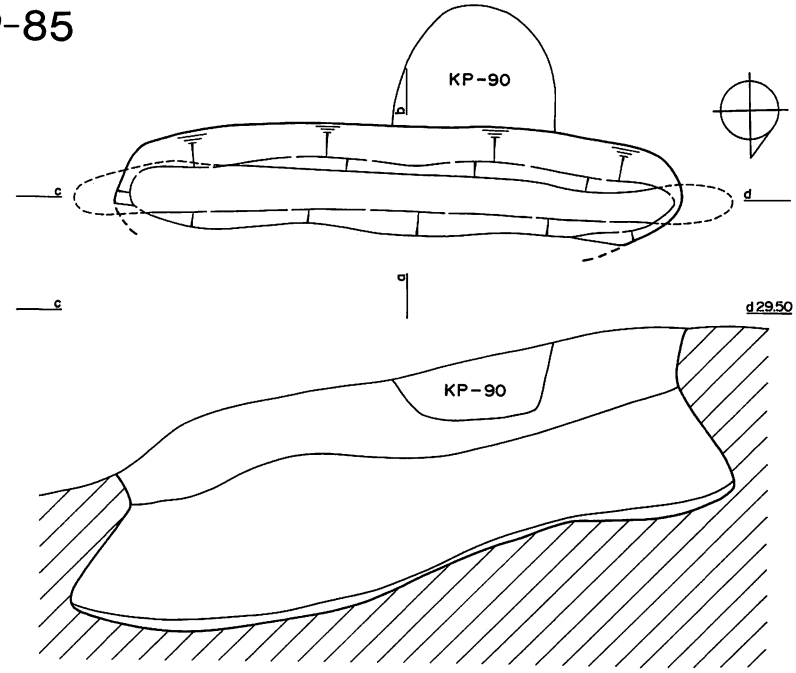
KP-83



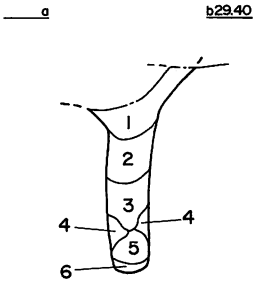
1　明黄褐色土
2　暗褐色土
3　黄褐色土
4　黒褐色土
5　暗褐色土
6　黄褐色土
7　黒色土



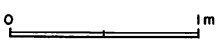
KP-85



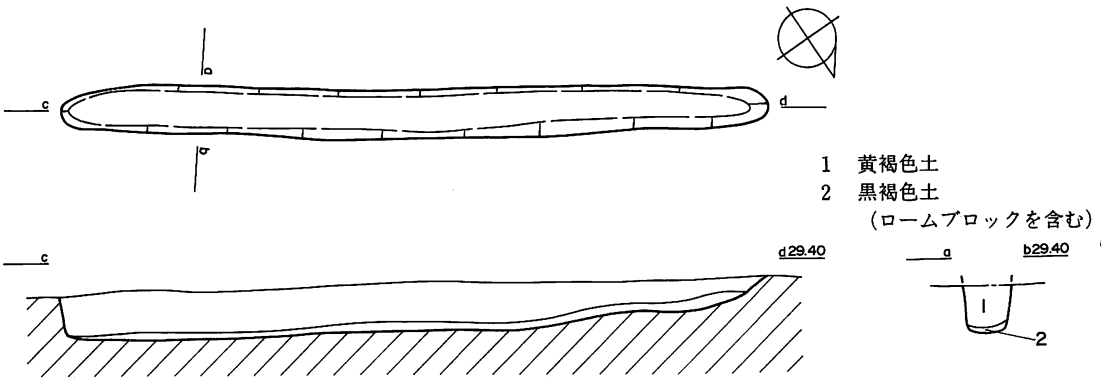
1　黒色土
2　黄褐色土
3　黒褐色土
4　明黄褐色土
5　黄褐色土（砂質）
6　黒色土



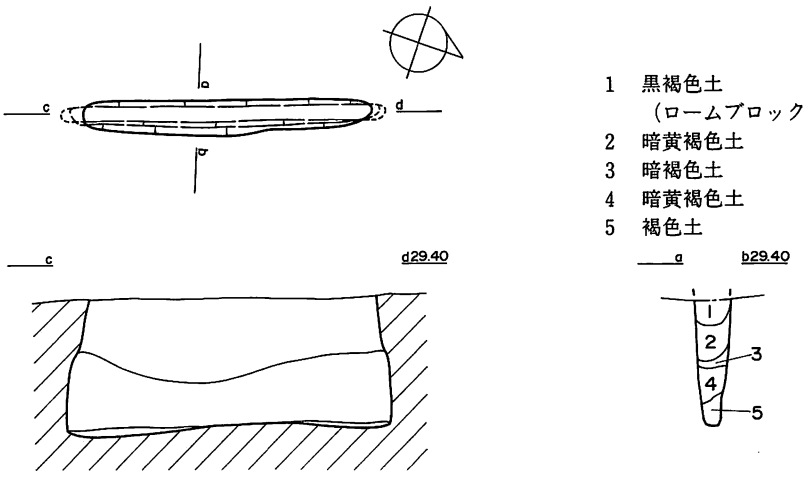
図Ⅲ－100　Tピット(14)・KP－81，83，85



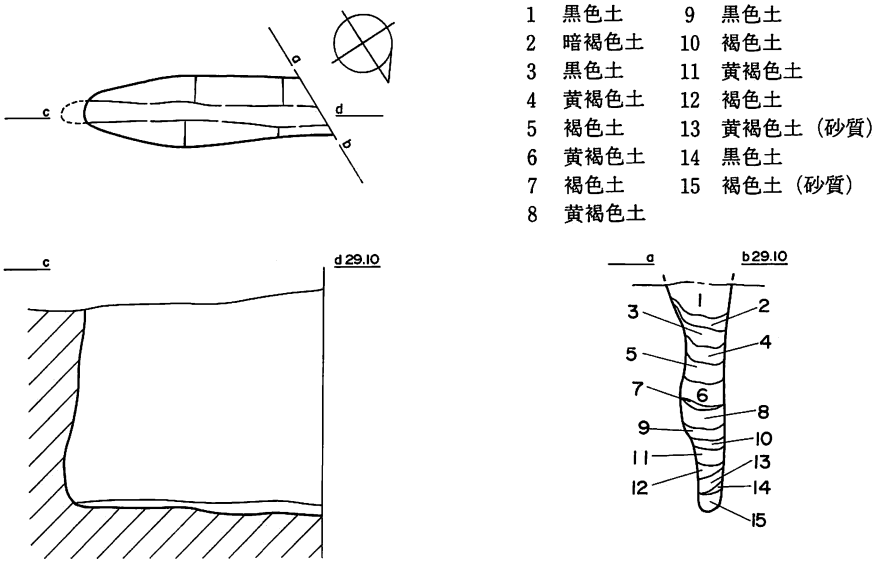
KP-87



KP-88

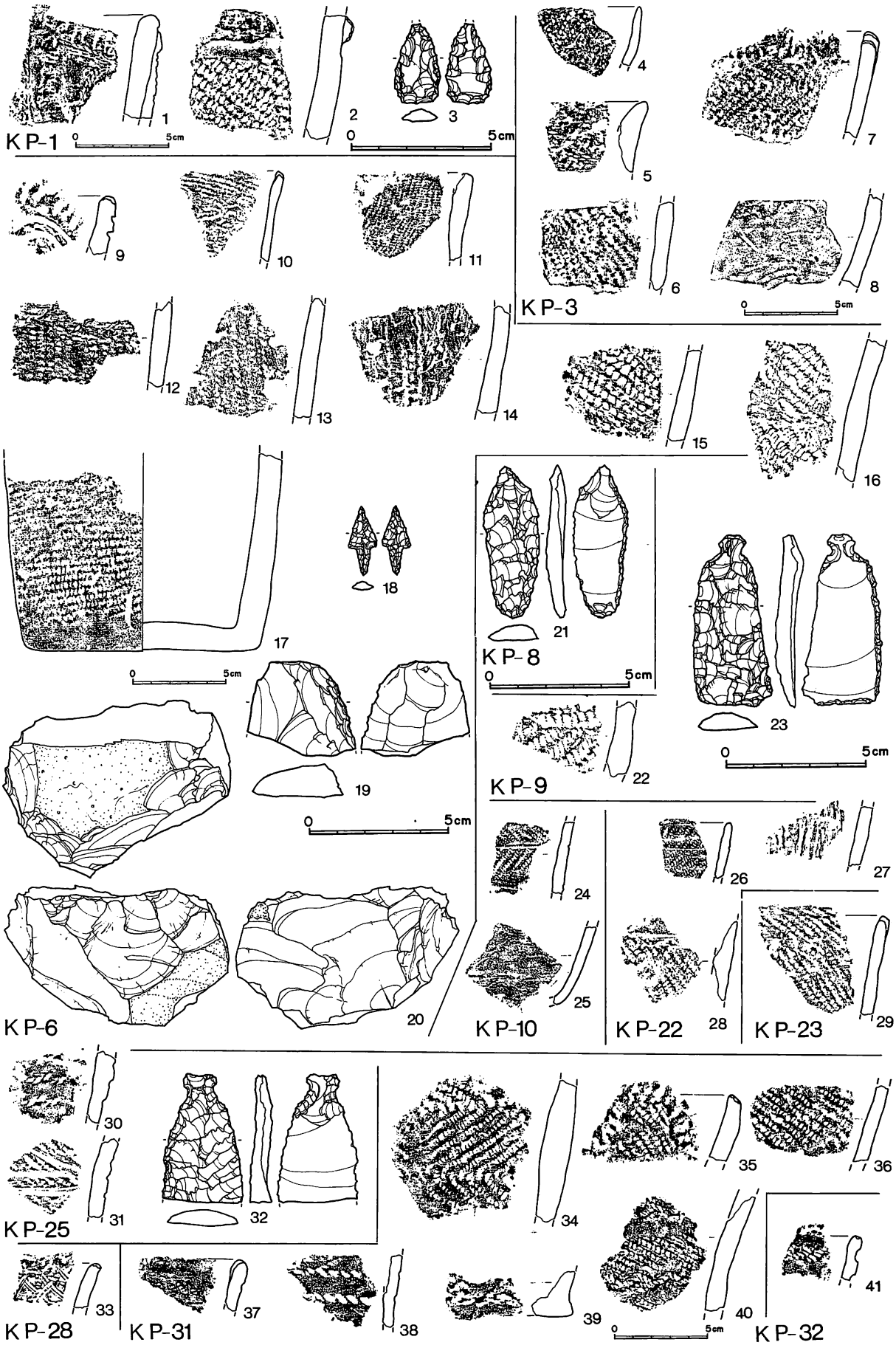


KP-93

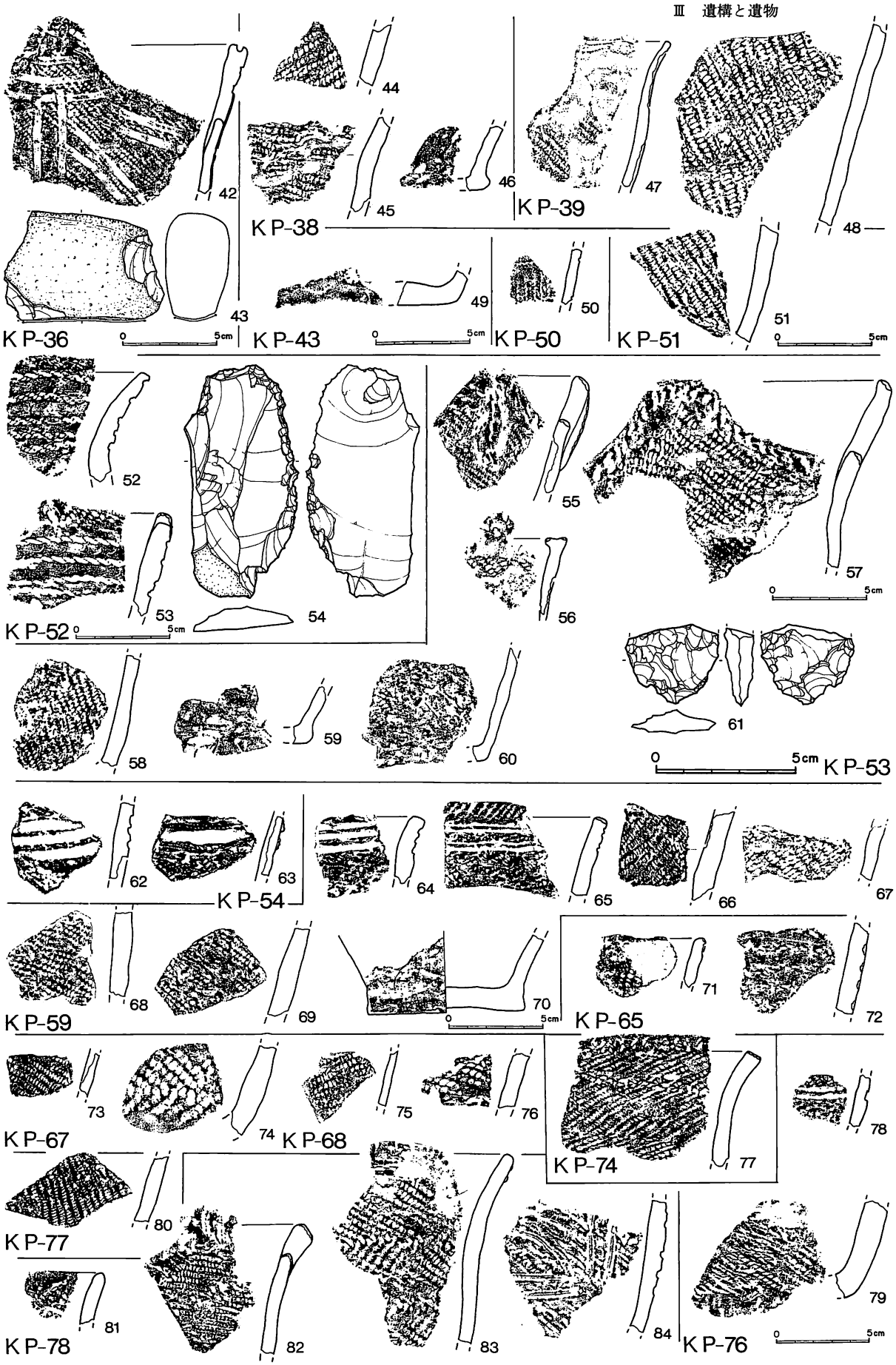


図Ⅲ－101　Tピット(15)・KP－87，88，93

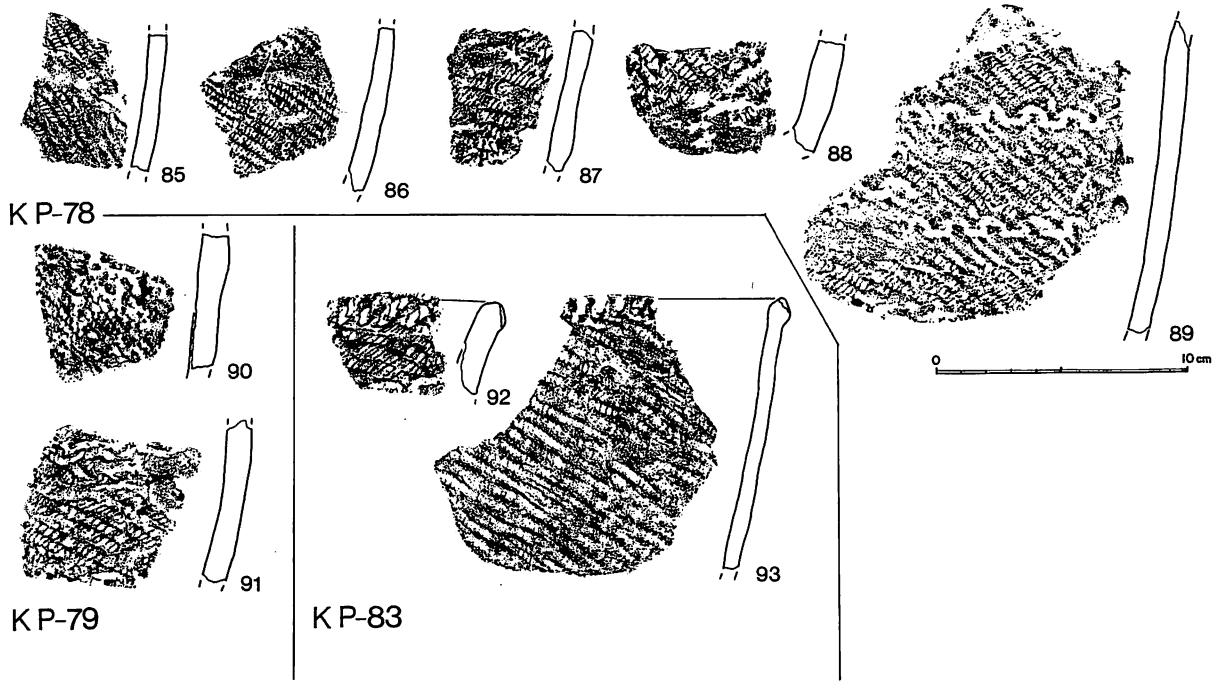
0　1m



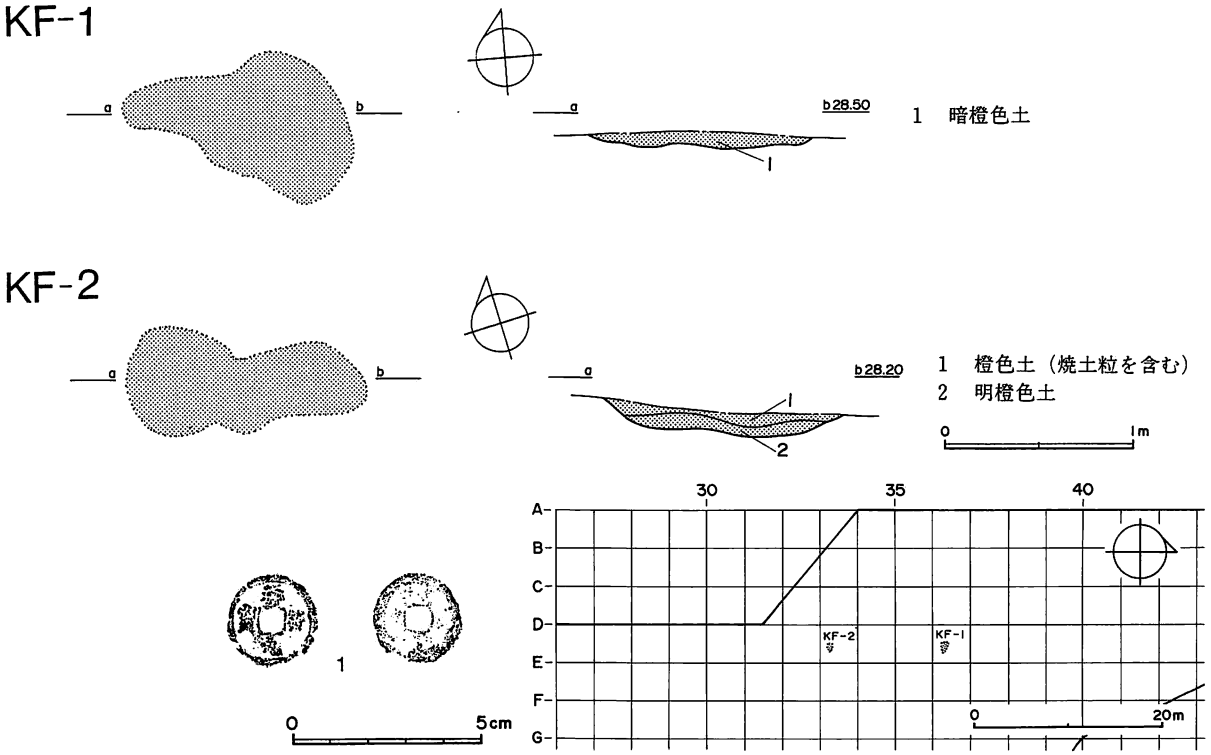
図Ⅲ－102　Ｔピット遺物(1)



図Ⅲ－103　Ｔピット遺物(2)



図Ⅲ－104　Ｔピット遺物(3)



図Ⅲ－105　焼土分布図，KF－１，２

ＫＰ－79，83　90～93はⅢ群 A_3 類土器。

時　　期　これらの遺物は，各Ｔピット周辺の包含層出土のものと接合しなかったが，時期的に共通しており自然営力によって流れこんだものと考えられる。よってＴピットの時期は縄文時代中期以前に属するものと考えられる。　（石川　朗）

(5)　焼土（図Ⅲ－105，図版29－4，5）

焼土は2か所検出された。KF－1，2はともにⅡ層中で確認されたものである。

ＫＦ－2　1層から祥符元宝（初鋳1008年）が1点出土した。火熱を受け4つに破砕している。時期は出土遺物から中世までさかのぼるものと考えられる。　（石川　朗）　中　世

(6)　包含層の遺物（図Ⅲ－106～132，図版43－4～51，57～62）

1）遺物集中区（図Ⅲ－106～111，図版30，31，43－4～6，44，45－1～4）

D・E－7～9区およびF－8・9区ではⅡ層中にKH－18の掘り上げ土が確認され，この上，下から大量の土器，石器が層位的に出土した。ここではそれらの遺物をほかのⅡ層出土のものと分けて報告する。　掘り上げ土

掘り上げ土は1～6・8・9層に分けられる（図Ⅲ－106）。1～6層は色調に僅かな違いがあるが，いずれも均質な黄褐色土で，層厚は最大30cmをはかる。8層は炭化物を多量に含む黒褐色土，9層は暗褐色土である。1～6層は無遺物層である。

遺物は1～6層の直上と直下から出土しており，取り上げ時に前者をⅡa，後者をⅡbとした。Ⅱaの総遺物点数は196点で，その内訳は土器185点（復元個体数2），石器11点である。土器はグリットポイントD－9付近から2個体が押し潰された状態で出土したもので，縄文時代中期中葉のⅢ群A_3類である。石器には石鏃（2点），ドリル（1点），槍先またはナイフ（1点），つまみ付ナイフ（1点），スクレイパー（3点），たたき石（3点）がある。　Ⅱa

Ⅱbの総遺物点数は2,386点で，その内訳は土器2,229点（復元個体数19），石器22点，フレイク53点，礫81点，土製品1点である。土器には完形に近いものがその場で押し潰された状態で出土したもの（図Ⅲ－107～109－1～8・10・15）と，数個体の破片が一箇所にまとまって出土したもの（図Ⅲ－108－9・11～14）がある。すべて縄文時代中期初頭のⅢ群A_1類土器である。石器にはドリル（1点），つまみ付ナイフ（1点），スクレイパー（9点），石斧（2点），すり石（6点），たたき石（3点）がある。　Ⅱb

Ⅱbの遺物　復元土器は19個体で，そのうち全体および胴部上半まで復元できたもの15個体を掲載した（図Ⅲ－107～109－1～15）。これらの土器はいずれもⅢ群A_1類に分類されるもので，器形・口縁部文様帯・器面調整・胎土などの共通するものが多い。すなわち，器形は円筒形で口縁部が少し外へ開き，胴部から底部にかけては少しずつ狭まり，底部は平底である。1個あるいは2個一組の低い山形突起が4か所に配される。口縁部文様帯は概して狭く，縄線文・短縄文の組合せにより施文される。器面の調整は，内面・底面ともに良好で，滑沢をおびる。胎土には繊維が少量含まれるが，小礫・砂粒の混入は少ない。　Ⅲ群A_1類

以下，体部文様から4種類に分け説明を加える。なお，拓影土器については，体部文様の不明なものがあるので一括して説明する。

①　多軸絡条体の回転文と普通の撚糸文のもの（1，2，12）

1・2は，2個一組の突起とその間の突起下に縦に棒状の貼付帯がある。口縁部文様帯は，2条一組の縄線文と縄端の圧痕もしくは短縄文の組合せにより施文される。文様帯の幅は，5～6cmである。2の口縁部は，大きく外反する。12は，口縁部を欠失している。地文は底部の一部にLRの原体による斜行縄文を施し，その上からRLの太い撚糸文を底部まで施す。底部は他の土器と異なり上げ底である。胎土中には，繊維混入の痕が多く認め

られる。

② 複節の斜行縄文のもの（3～5）

3は，瘤状突起が4か所にあると思われ(現存するのは1か所のみ)，口縁部が少し外反する小型の土器である。土器の内面・底面の調整は良好であるが，胎土のせいかザラザラした感じである。4は，低い突起が4か所にあり，突起下には橋状把手がある。把手の高さの位置には幅2.5cmの浅い溝が，横位にめぐる。地文は，口縁部で斜行し，胴部では縦走する。5は，片流れの山形突起が4か所にある。口唇部には縄の圧痕が，口縁部には絡条体圧痕が4段施文される。縄文は，胴上部では斜行し，それより下では縦走する。

③ 単節の斜行縄文のもの（6～10，13，14）

6，7は浅鉢である。6は山形突起が2か所にあり，それらの下に円い孔が1個ずつあけられている。器面には，口唇から底部までLRの原体による斜行縄文がていねいに施文される。7は，2個一組の山形突起が4か所にあり，突起下に橋状把手がある。把手の高さの位置には，幅2 cmの浅い溝がめぐる。8は，口縁が凸帯状につくり出されている。施文は，LRの原体を上部では横に，下部では縦に回転させている。9，10は，2個1組の低い山形突起を4か所に配し，突起に対応して，棒状もしくは逆T字状の貼付帯が口縁部につけられる。口縁部文様帯は，2条一組の縄線文，絡条体圧痕文，短縄文の組み合せにより施文されている。9の口縁部文様帯の下には，貼付帯が横位にめぐり，その上に縦の縄の圧痕が施文される。13，14は，口縁部を欠失する。2点ともLRの原体による斜行縄文が，体部全面に施文されている。

橋状把手

④ 口縁部文様帯の幅が広いもの，口縁が強く外反するもの（11，15）

11は，2個一組の低い山形突起が，4か所に配される大型土器である。2個一組の突起はその片方が少し大きく，突起下にはJ字形の貼付帯がある。貼付帯の下には，横位に貼付帯がめぐる。口縁と貼付帯との間には，13～14段の縄線文が施文されている。地文は，胴部の上半までは斜行するが，それより下は横走する縄文が底面近くまで施文されている。

J字形

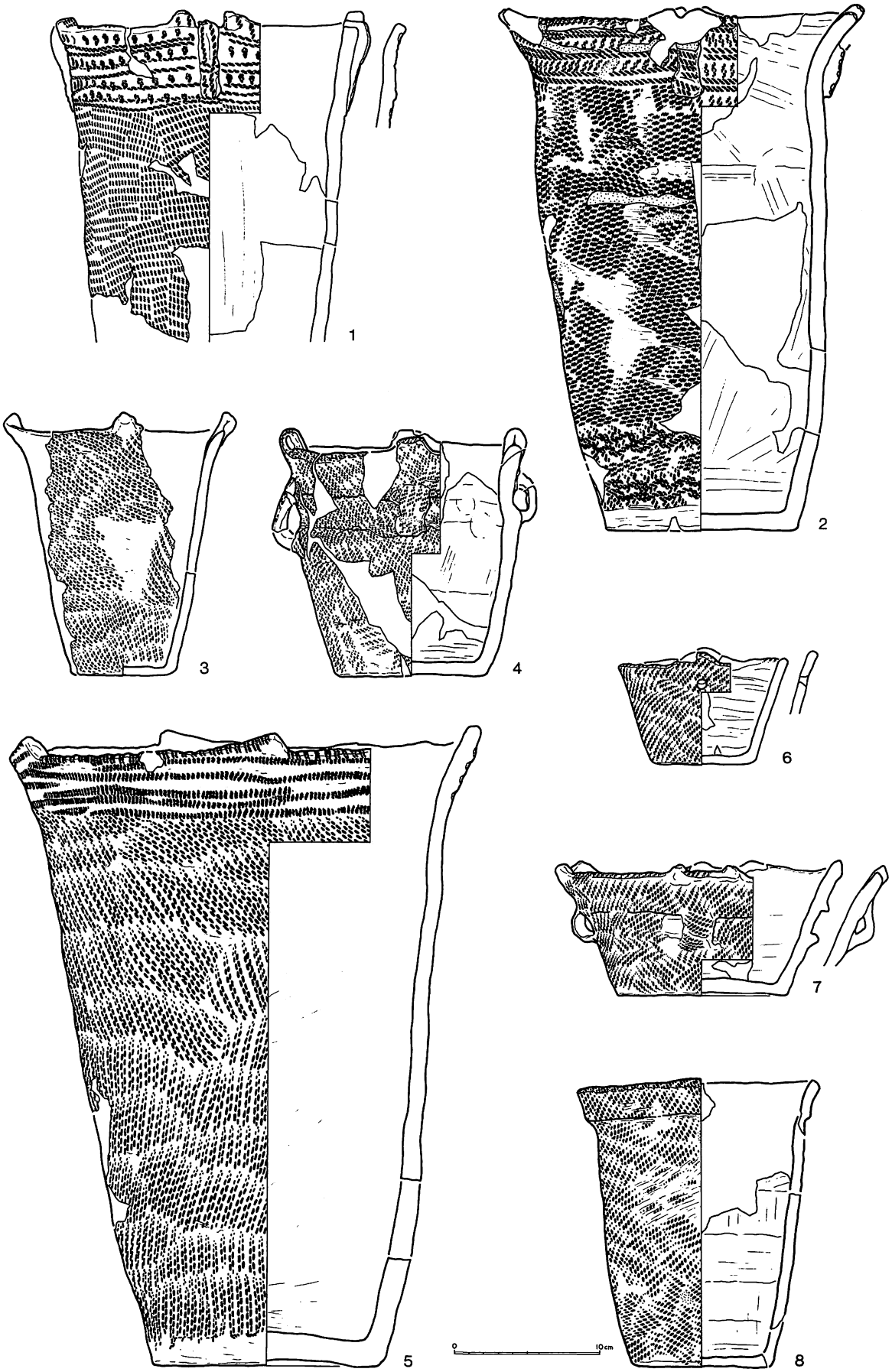
15は，大きな深鉢形土器である。器形は，口縁部が外反し胴部がふくらむ。口縁には4か所に突起があり，突起下には菱形および垂下する一本の貼付帯がある。菱形の貼付帯の中央には，円い孔が開けられている。垂下する一本の貼付帯の両側には蕨状の貼付けがあり，その下には，横位の貼付帯がめぐる。4個の突起間には，2個一組の低い瘤状の突起があり，その下には，環状の貼付けがある。さらにその下には，逆U字状の貼付けがある。口唇部および貼付帯上には，縄の圧痕が施文されている。口縁から横環する貼付帯までの間には，撚りの異なる2条一組の縄線文と短縄文の組合せが数段にわたり施文されている。文様帯の範囲は，突起部において18cmと広い。地文は結束第一種羽状縄文が底面近くまで施文されている。胎土中には，小礫・砂粒を含む。

拓影土器

16～26は，Ⅱb層出土の拓影掲載土器である。16～19は，口縁部が斜行縄文のみのもので，16～18は単節，19は複節である。20は，縄線文と短縄文が施文されている。21，22，24は，縄線文が施文されている。23は，3条一組の縄線文が横だけではなく鋸歯状にも施文されている。

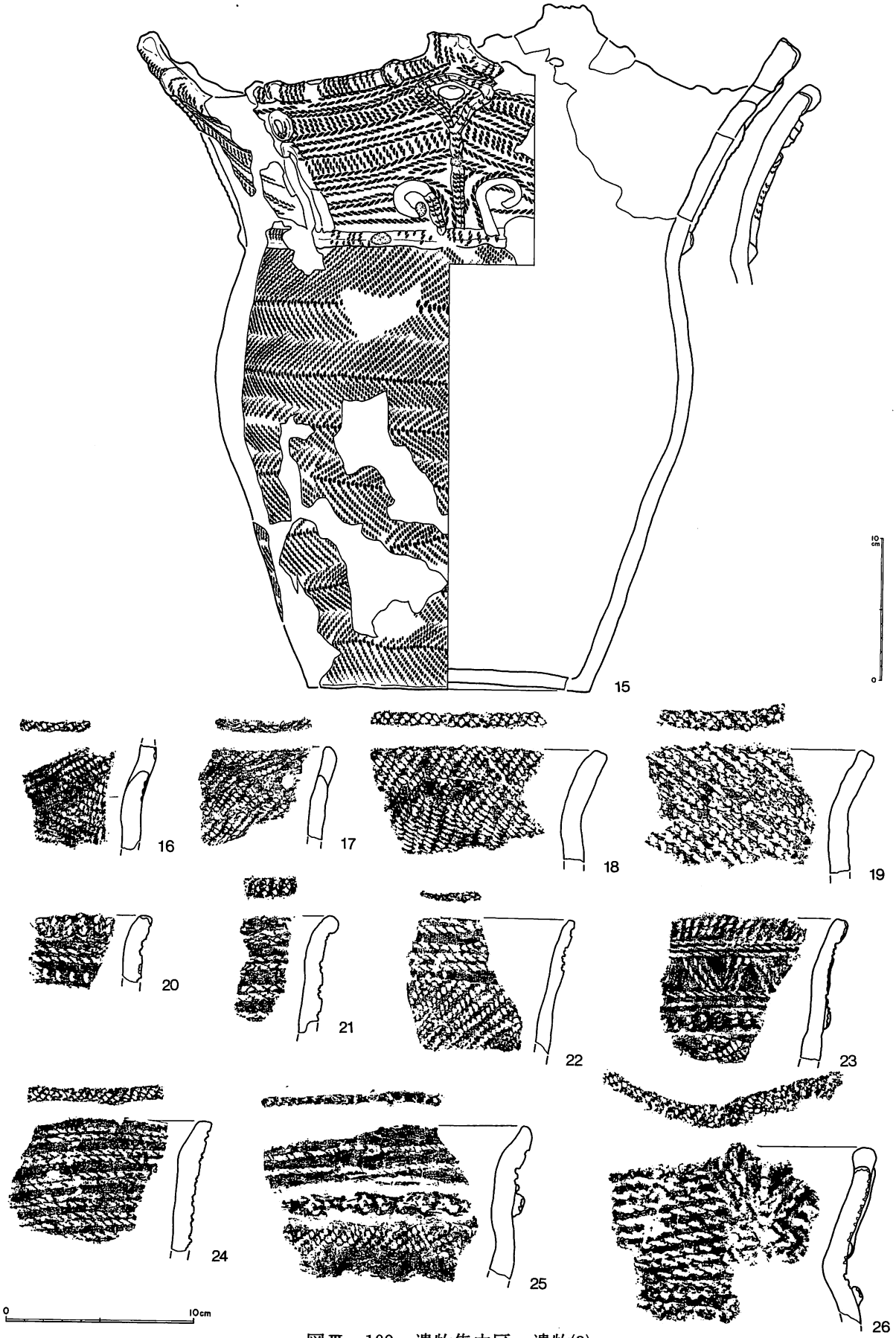
23，25，26は，口縁部の下に横位の貼付帯がめぐる。貼付帯上には，管状工具による刺突，縄による縦の圧痕がみられる。26は，2頂の突起部であり，突起下の縦の貼付帯の間

図Ⅲ－106　遺物集中区，遺物分布図

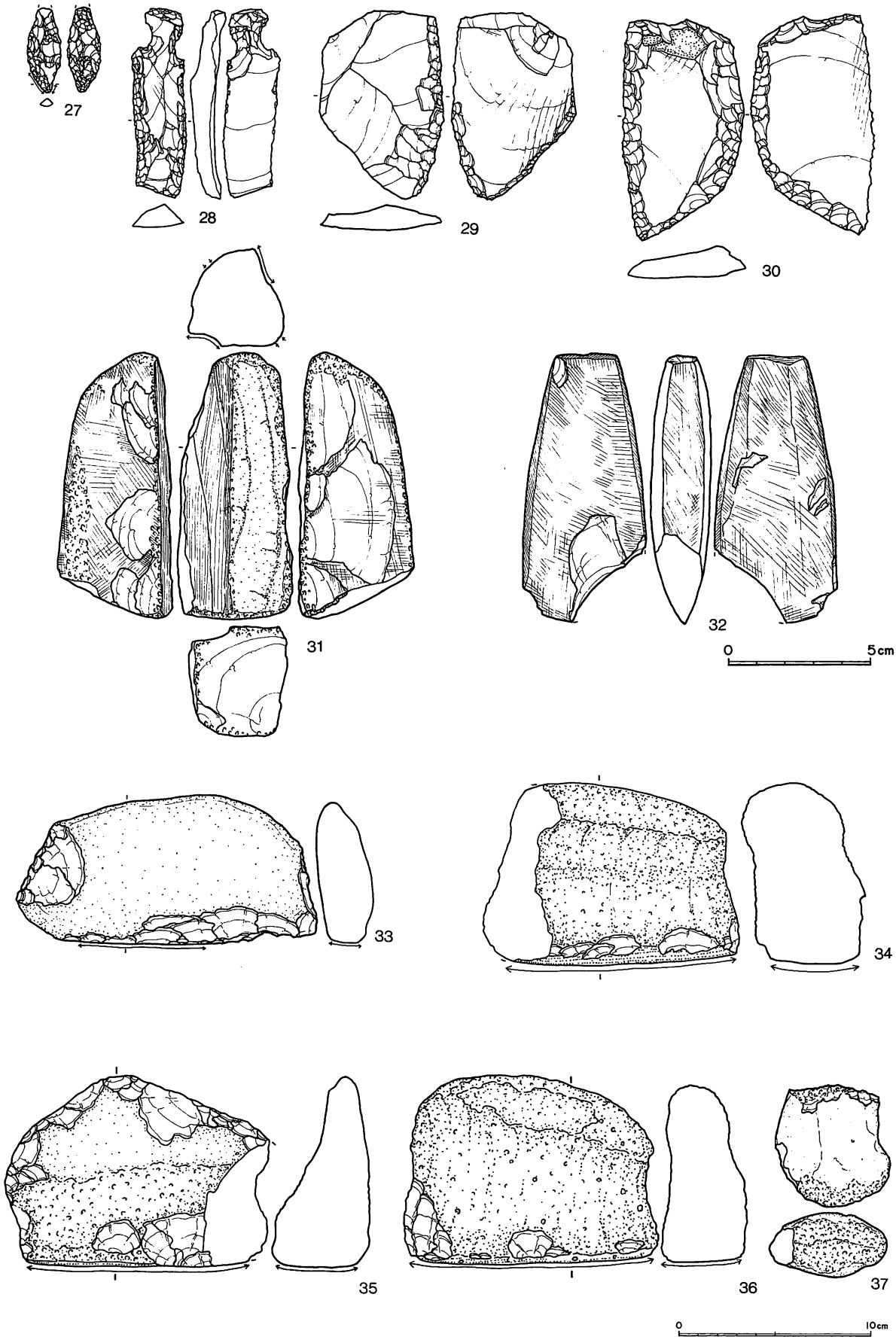


図Ⅲ－107　遺物集中区，遺物(1)

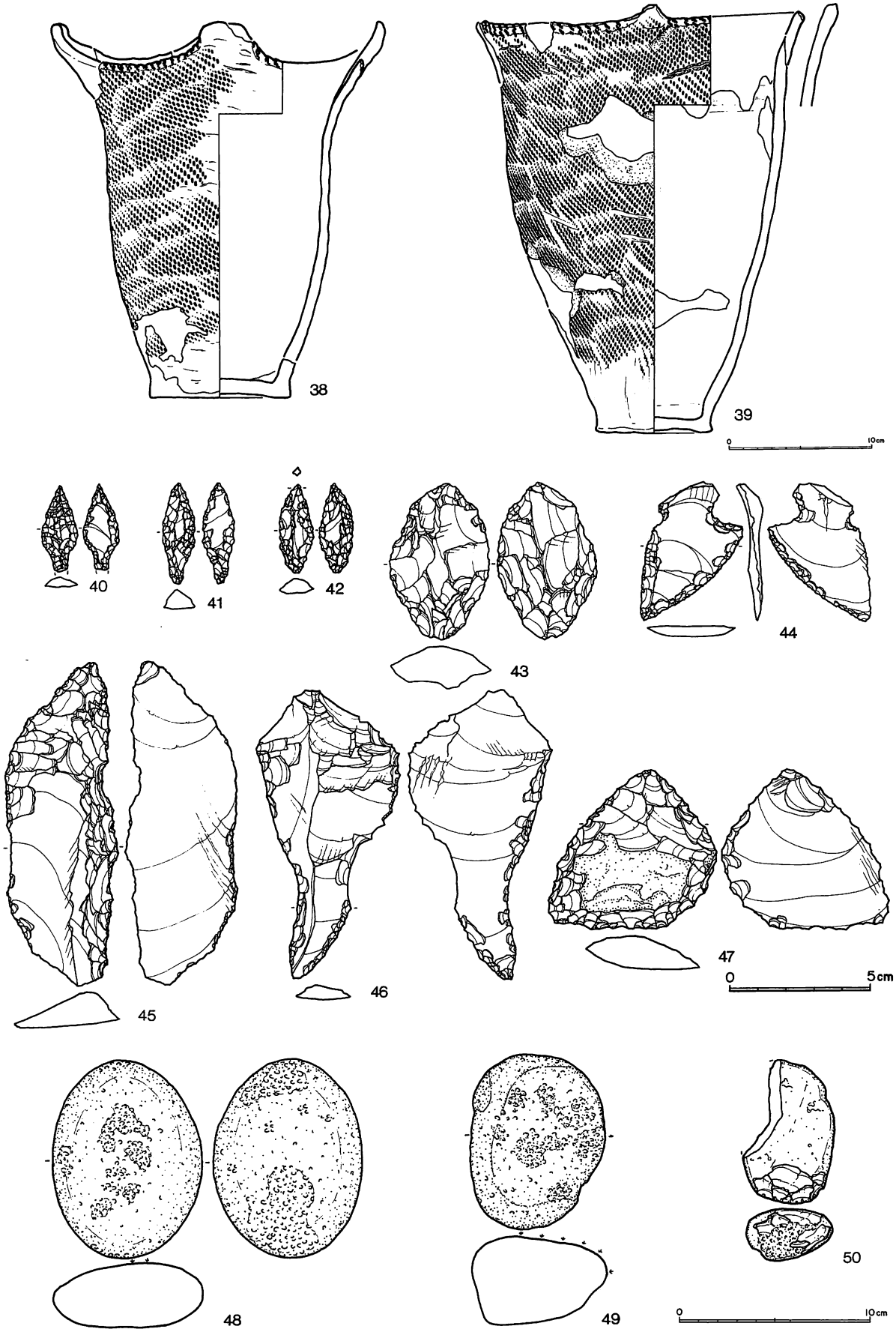
図Ⅲ－108　遺物集中区，遺物(2)



図Ⅲ－109　遺物集中区，遺物(3)



図Ⅲ－110　遺物集中区，遺物(4)



図Ⅲ－111　遺物集中区，遺物(5)

に，竹管状工具による刺突がみられる。

出土石器22点の内訳は，ドリル１点，つまみ付ナイフ１点，スクレイパー９点，石斧２点，たたき石３点，すり石６点である。27はドリル。先端部が磨耗している。28はつまみ付ナイフ。加工は表面側縁におこなわれている。29･30はスクレイパー。31は石斧未製品。角柱状をなし，二条の擦り切り痕がある。稜線部には敲打痕がある。32は石斧。基端部，側縁部は平坦に作られている。33～36はすり石。33は半円状偏平打製石器と呼ばれるもの。34～36は北海道式石冠。37はたたき石。石材は27～30が頁岩，31・32が緑色泥岩，33が砂岩，34が輝緑岩，35・36が安山岩，37は珪岩である。

Ⅱａの遺物　38は口縁部に４個の弁状突起をもつ土器。地文はRLの原体による斜行縄文であるが，器面調整だけで施文されていない部分もある。口唇部には，縄による刻みをもつ。39は口縁部に山形の小突起をもつもの。出土石器11点の内訳は，石鏃２点，ドリル１点，つまみ付ナイフ１点，スクレイパー３点，たたき石３点である。40，41は有茎鏃。42はドリル。43は木葉形の槍先またはナイフ。加工は両面とも全面におこなわれている。44は横形のつまみ付ナイフ。加工は縁辺部に限定されている。45～47はスクレイパー。48～50はたたき石。石材は40～46が頁岩，47がめのう質頁岩，48・49が安山岩，50が珪岩である。

（佐川俊一・石川　朗）

２）土器（図Ⅲ－112～120，図版46～51）

包含層より出土した土器の総数は，30,292点である。時期別には，Ⅲ群Ａ類が最も多く全体の64.3％を占め，以下，Ⅱ群4.6％，Ⅰ群１％，Ⅲ群Ｂ類0.4％，Ⅴ群0.2％，Ⅵ群0.1％，Ⅳ群0.1％，である。このほかに細片のため時期不明のものが29.3％ある。時期別の分布についてはⅤ－１で述べる。以下，本書に掲載した資料について時期別に説明を加える。

Ⅰ群Ａ類（図Ⅲ－113－１～10）　１は物見台式系の口縁部に近い破片である。貝殻腹縁による鋸歯状の文様があり，その下に沈線が２本横位に施文されている。色調は外面が黄褐色，内面が暗黄褐色を呈する。胎土には砂粒が多く含まれ，焼成は良好である。物見台式系の土器片は，このほかにKH－14の覆土より口縁部が一点出土している（図Ⅲ－34－14）。２～７は，貝殻条痕文の施された口縁部，胴部である。口唇断面は角型をなし，外反する。内外面に貝殻条痕が横位に施文される。器面調整は良好である。胎土には，多くの砂粒を含む。焼成は良好である。８～10は，ムシリⅠ式系と見られる胴部，底部である。薄手の土器で，外面には２～３本の沈線が横位・縦位に施文される。器面調整は良好である。胎土中には，砂粒を多く含む。器厚，底径から小形の土器であろうか。

物見台式系

ムシリⅠ式系

Ⅰ群B_1類（図Ⅲ－113－11，12）　11，12は東釧路Ⅲ式相当と思われる口縁部である。口唇断面は角型で，縄の圧痕が斜に深く押捺されている。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

東釧路Ⅲ式相当

Ⅰ群B_3類（図Ⅲ－113－13～36）　中茶路式相当と思われる破片である。口唇断面は，切り出し状のものと，少し丸味を帯びたものがある。口縁部は，やや外反する。文様は，微隆起線文，短縄文，綾絡文，斜行縄文が底部近くまで施されている。底部は平底で，立ち上がりはゆるい。

中茶路式相当

Ⅰ群B_4類（図Ⅲ－113－37～60）　東釧路Ⅳ式に相当すると思われるものである。薄手のもの（37～44）と厚手のもの（45～60）に分けられる。

東釧路Ⅳ式相当

薄手のものは，口唇断面が少し丸味を帯びた形状で，地文には口縁から撚糸文が施文されている。

厚手のものは，口唇断面は角が丸味を帯びた角型である。口縁上部には，太い縄の圧痕が横位に施され，胴部には結束第一種羽状縄文，斜行縄文が施される。60は内面にも施文されている。胎土には砂粒を多く含み，器面はザラザラしている。51には絡条体圧痕文が施される。これら厚手の土器は東北の早稲田Ⅴ類に近いものとみられる。

Ⅱ群A類(図Ⅲ－114－61～101)　61～68は，仮称桔梗野式とみなされるものである。61～63は，花積下層式相当と思われ，斜の刻文が施されている。65～67は太い無節の斜行縄文が，68は，撚りの異なる原体の斜行縄文が施文されている。67，68は，胎土に多くの砂粒が含まれている。内面調整は良好である。

石川野式　69～98は石川野式である。口唇断面が切り出し型で，口縁部文様帯には箆状工具による爪形文が1～5段施され，一番上部の爪形文上には棒状工具による押捺を加えている。口唇部は磨かれている。胴部には，斜行縄文が深く施文され，縄端の圧痕がみられる(69～79，91～95)。82～86は，コンパス文の施されたもの。87，88は円形刺突文の施されたもの。93にはループ文がみられる。96～98は，底部近くの破片である。箆状工具による爪形文が，数段にわたり施文されている。胎土には，小礫・砂粒を含む。内面には横位のなで調整痕の残るものが多い。

コンパス文
ループ文

春日町式　99～101は，春日町式である。99・100は押し引きの痕が，101は沈線文が施されている。胎土には小礫，砂粒を含み，内面調整は良好である。

Ⅱ群B類(図Ⅲ－112－1，114－102～162)　1，102～153は円筒下層c式相当のもの，154～162は同d式相当のものと思われる。

円筒下層c式相当　1は，円筒形の土器で口縁はゆるく波打ち，口唇断面は丸型である。口縁部はRLの横走する撚糸文が，胴部には，同じ原体による縦走する撚糸文が右傾して施文される。口縁と胴部の境は少しもりあがり，境の下1cmほどは磨かれ無文となっている。内面は底部近くまでよく調整されている。胎土には繊維の混入が少しみられる。口縁と胴部は直接接合しないが，同一個体である。

102～119は，口縁部文様帯が，斜行縄文もしくは撚り戻しの原体による縄文が施文されるもの。107は口縁部文様帯の下が横位に隆起し，その上を箆状工具による刻み目がみられる。113は，文様帯の下に沈線文がみられる。116は，文様帯の下に指頭によるかと思われる丸い圧痕がみられる。

120～125は，口縁部文様帯がおもに撚糸文により施文されるもの。120，121は，撚糸文を施文した後に，2本一組の沈線を横位，縦位，斜位に施している。122は，網目状撚糸文が施文される。123～125は，口縁部に撚糸文が縦に施文されている。

126～128は，文様帯に沈線文が加わるもの。126は，地文にLRの撚り戻しの縄文を施し，その上に太い円棒状工具により縦位に2本，口縁上部に横位に1本沈線文が施されている。127，128は同一個体と思われるが，LRの地文の上に，横位，斜位の沈線が施文される。

129～137は，口頸部である。129は網目状撚糸文。130，134は撚り戻しの縄文。131～133は口縁上部では横方向へ，それより下では縦方向に撚糸文が施文されている。135～137は，口頸部に隆起帯のあるものである。

138～148は胴部の破片である。141，142は多軸絡条体の回転文。143は網目状撚糸文。144，

145は，条の幅の太い撚糸文。146は撚り戻しの縄文の上に横走する撚糸文を施文したもの。147，148は底部近くの破片である。

149～153は底部の破片である。149，150は底面にも施文されている。底は揚げ底である。

154～162は，円筒下層ｄ式相当と思われるものである。154～157，159は多軸絡条体の回転文，160～162は底部の破片である。底部は平底で，角は丸味を帯びている。161，162は多軸絡条体の回転文。

円筒下層ｄ式相当

円筒下層ｃ式の土器の口縁部，胎土，内面調整の特徴は以下のとおりである。口唇断面は丸味を帯びた形状で，少し外反するものが多い。胎土には繊維を多く含む。内面調整は良好で滑沢を帯びるものと，ザラザラした感じのものとがあるが，これらの間に文様上の違いはない。円筒下層ｄ式の土器は胴部・底部のみである。

Ⅲ群 A_1 類（図Ⅲ－112－２，116－163～211）　円筒上層ａ式相当と思われる土器である。この時期の土器は，前述したように遺物集中区で多く出土し，その特徴を述べたのでここでの説明は簡単にふれる。口縁部文様帯の特徴により以下のように分けた。

円筒上層ａ式相当

①　縄文のみのもの（163～166）　163，164は単節の斜行縄文，165は複節の斜行縄文，166は，結束第一種羽状縄文が施文されている。166の口唇断面は切り出し状を呈し，ほかのと異なりここに入らないかもしれない。

②　縄線文によるもの（167～176）　縄線文が横位，斜位，縦位に施文される。169，174，175は斜位に施文された例。176は横位と縦位の組合せによるもの。突起の部分はいずれも背の低い山形突起でその下に縦に貼付帯のつくものもある。

③　縄線文のほかに短縄文，縄端の圧痕が施文されるもの（177～179）　178は短縄文，馬蹄形状圧痕文が施文されている。179は，縄端の圧痕が施文されている。

④　絡条体圧痕文によるもの（180～182）　182は山形突起の部分で，突起下の両側にＶ字状の貼付帯がある。絡条体圧痕文は，口唇部，貼付帯上，口縁部に施文される。

⑤　把手状の貼付帯がつくもの（183～186）　口縁部文様帯には斜行縄文，縄線文が施文され，突起下に把手状の貼付帯がつく。183の口唇部，184の口唇部と貼付帯の下に撚糸の円形状の圧痕が施文される。

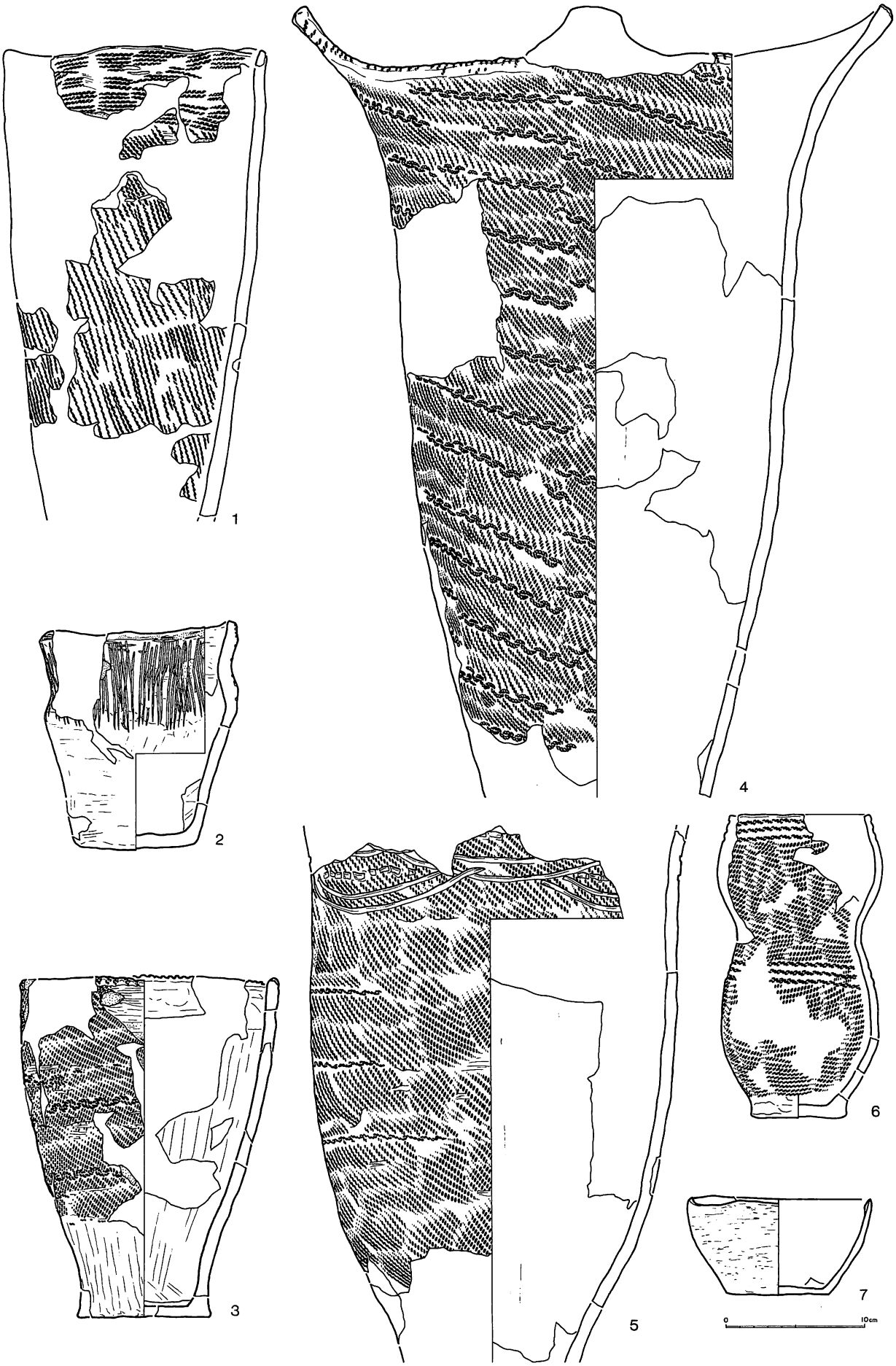
⑥　逆Ｊ字の貼付帯がつくもの（187～189）　突起下に逆Ｊ字の貼付帯があり，口縁部文様は縄線文，短縄文，管状工具による刺突文が施文される。口縁部文様帯の下には，横位の隆起帯がめぐり，隆起帯上には縄線文および横からの押し引きがある。

⑦　環状の貼付けがつくもの（190～194）　山形，台形状の突起で，口縁上部に環状の貼付けがあり，その両側や下方に縦位の貼付帯や菱形状の貼付けがつく。口縁は，縄線文と短縄文の組合せにより施文される。

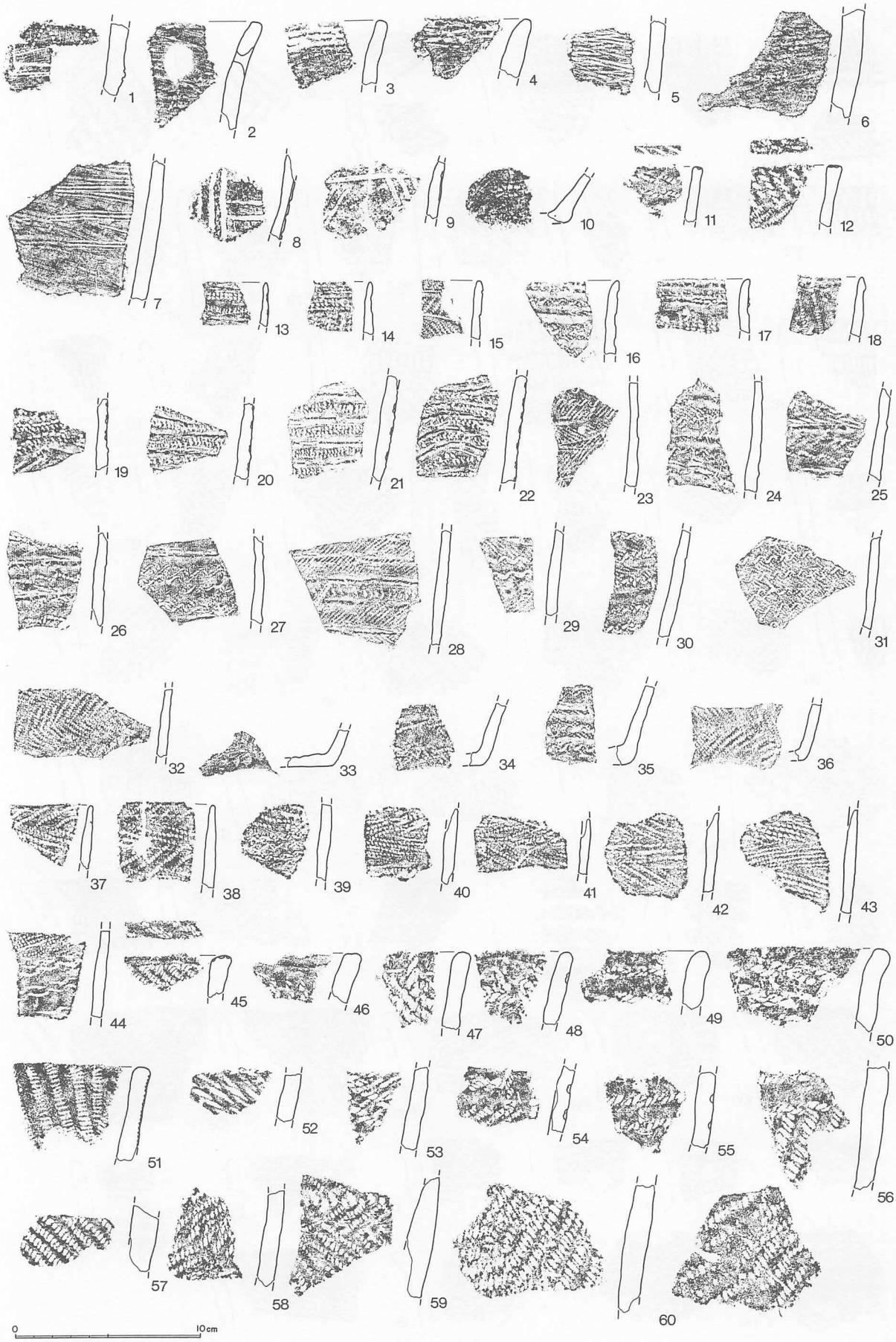
⑧　その他（２，195～211）　２は口縁部に縦位の細い沈線が施された壺形土器である。口唇断面は角型である。口縁はゆるく波打ち外反する。胎土には，径３ mm ぐらいの砂粒，石英粒を多く含む。

195～205は胴部破片である。単節・複節の斜行縄文のものがある。底部近くになると204のように横走した縄文が施文される。

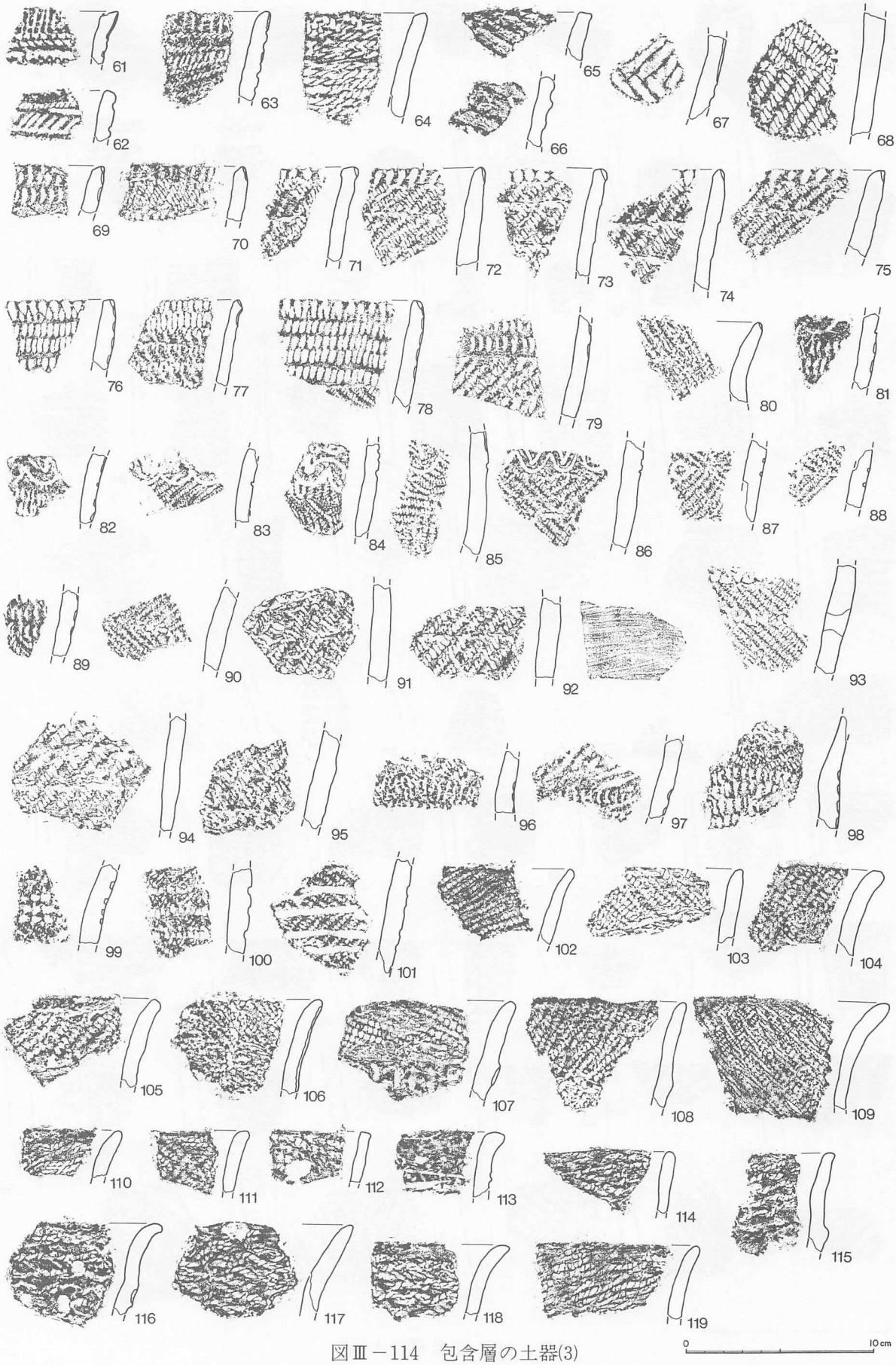
206～211は底部破片である。206～208は単節の斜行縄文。209は結束第一種羽状縄文。210は撚り戻しの縄文。211は横走する縄文。底部まで施文されている。底部は平底で角は丸味を帯びている。



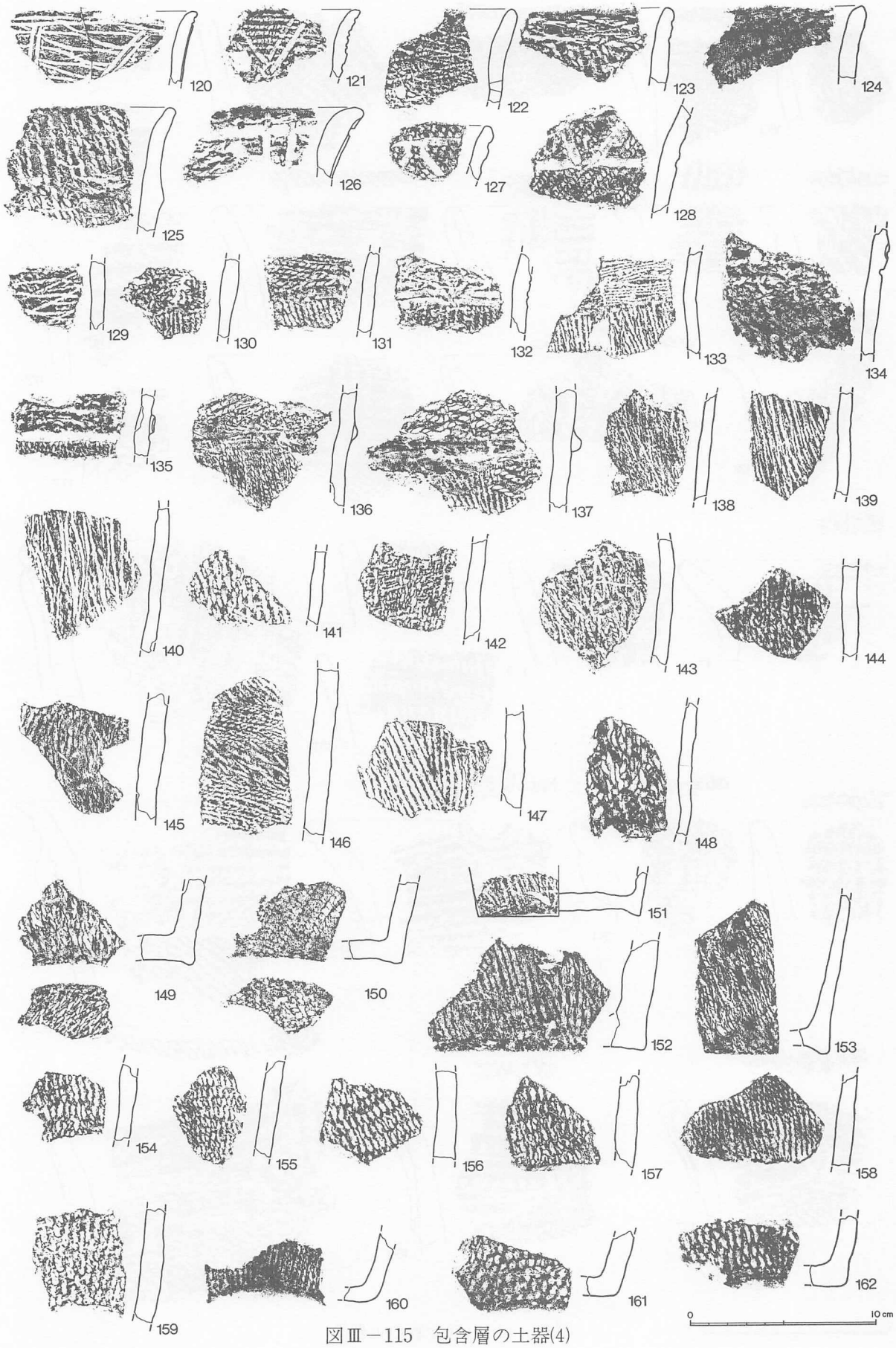
図Ⅲ－112　包含層の土器(1)



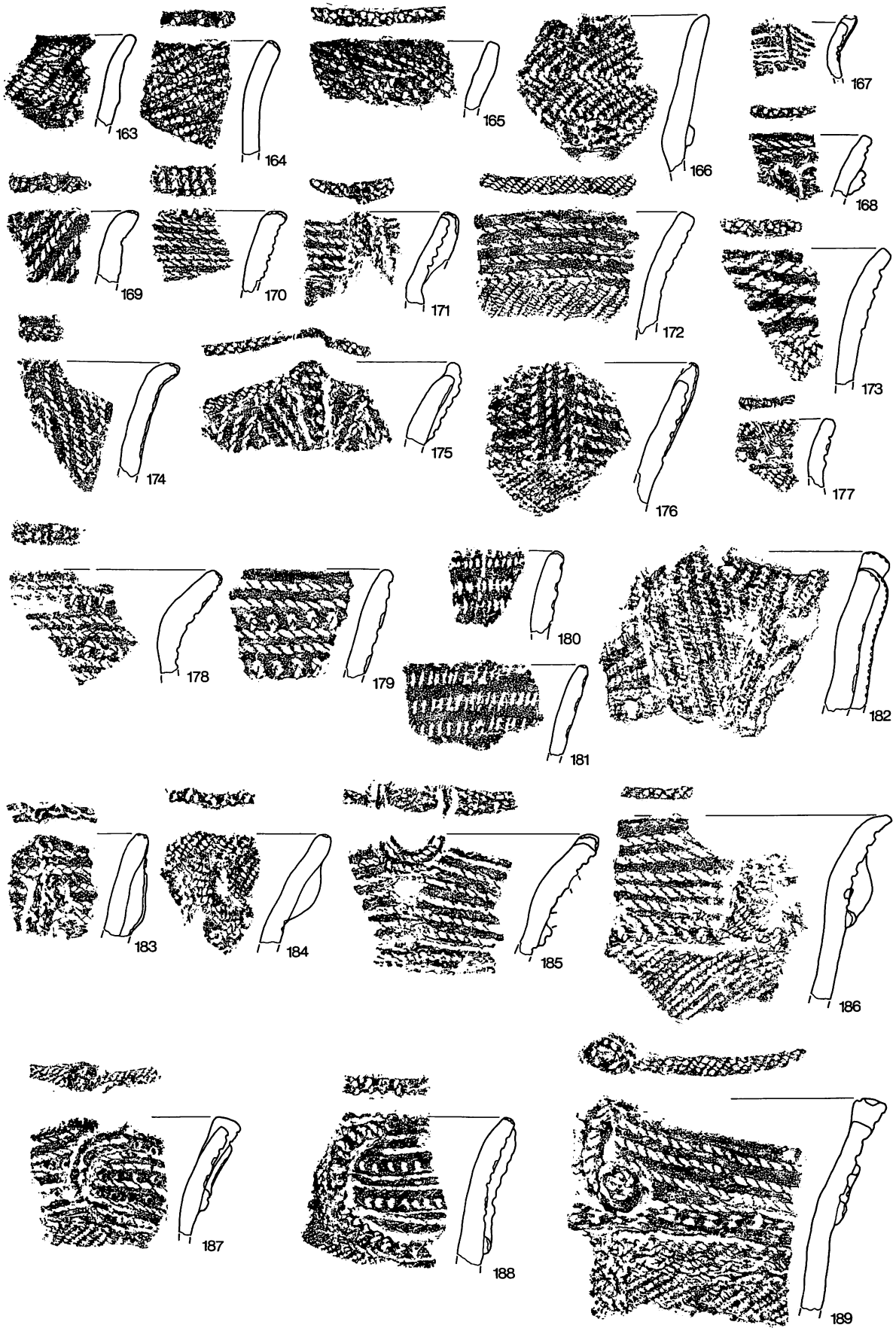
図Ⅲ－113　包含層の土器(2)



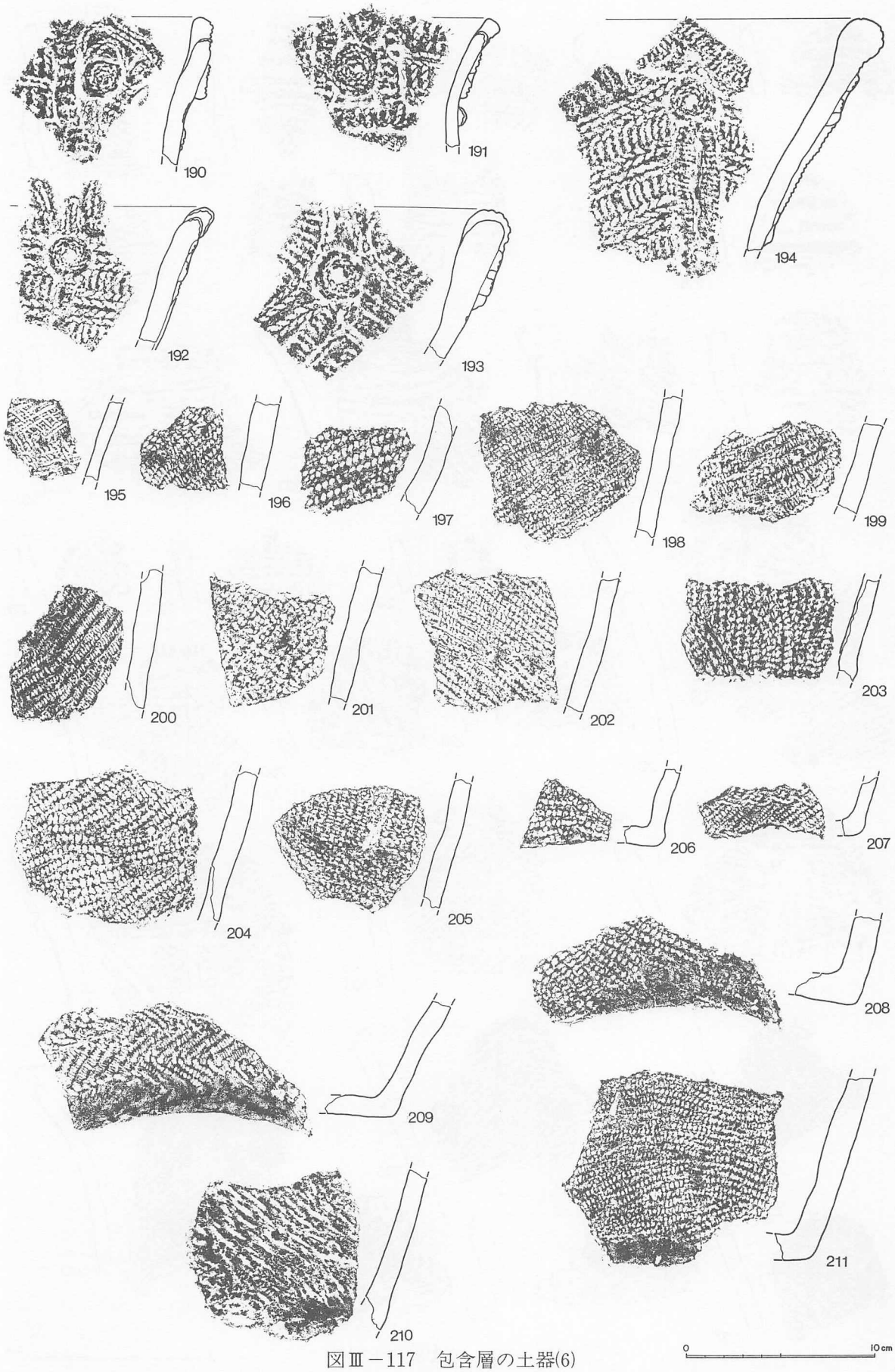
図Ⅲ－114　包含層の土器(3)



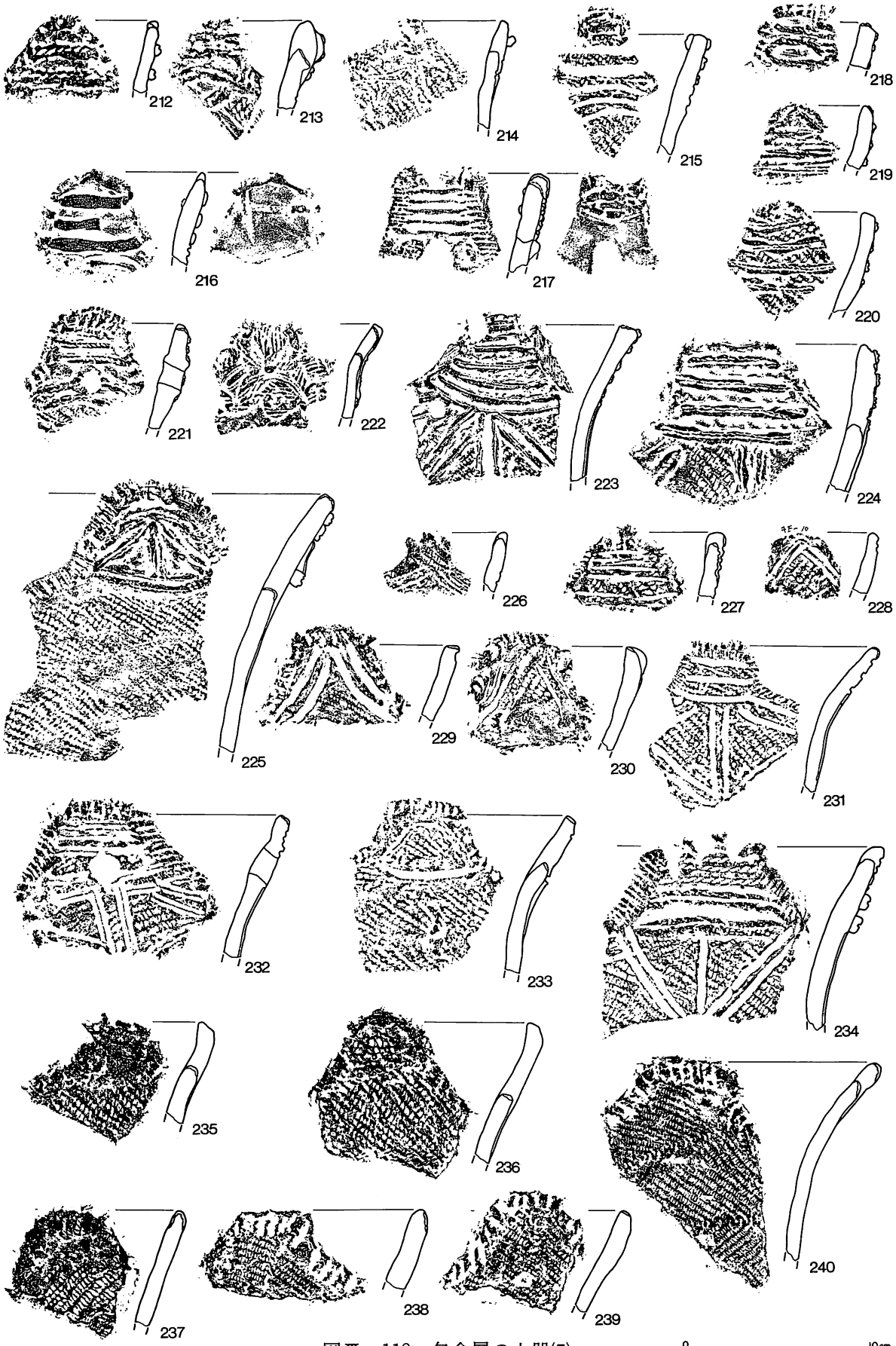
図Ⅲ－115　包含層の土器(4)



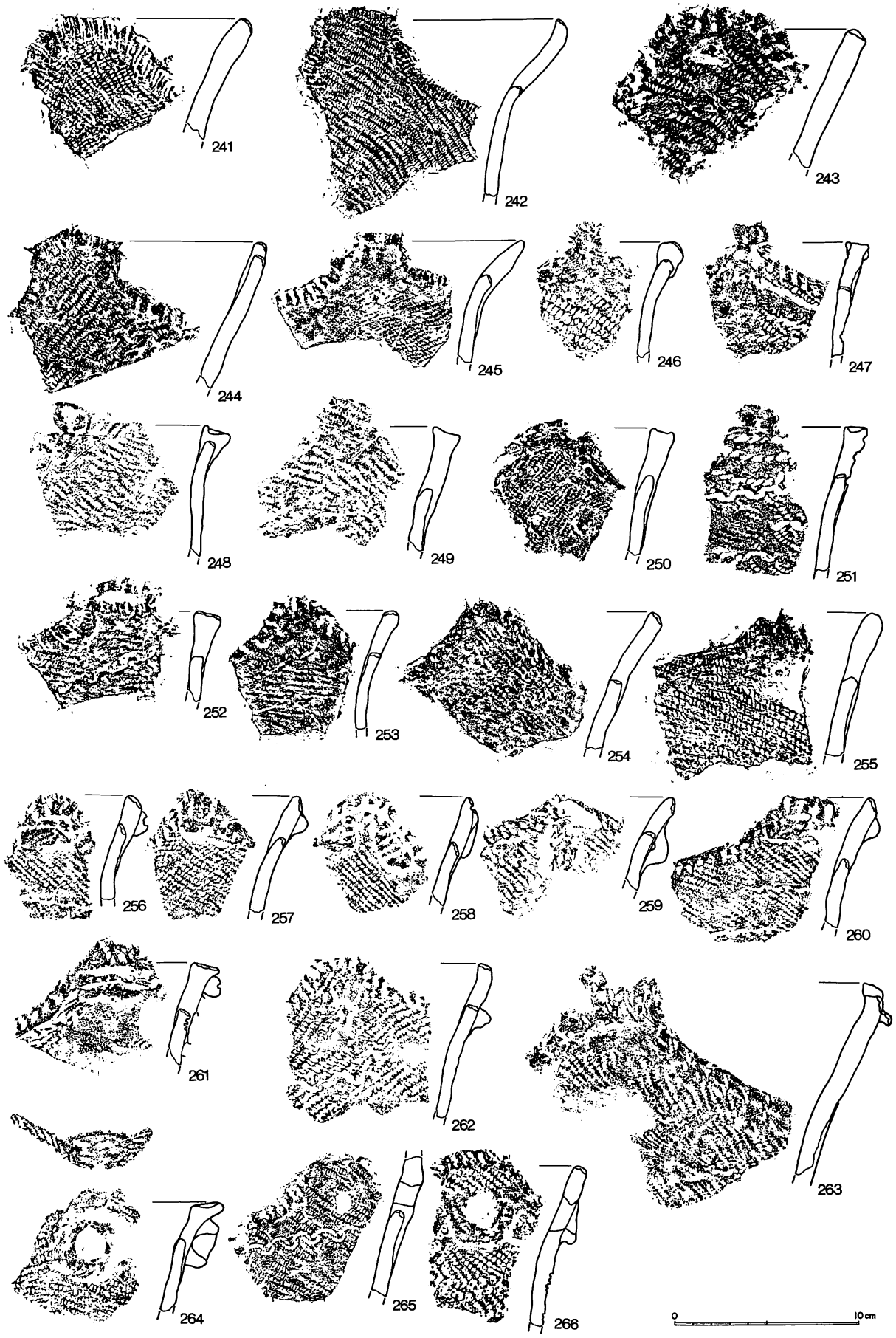
図Ⅲ－116　包含層の土器(5)



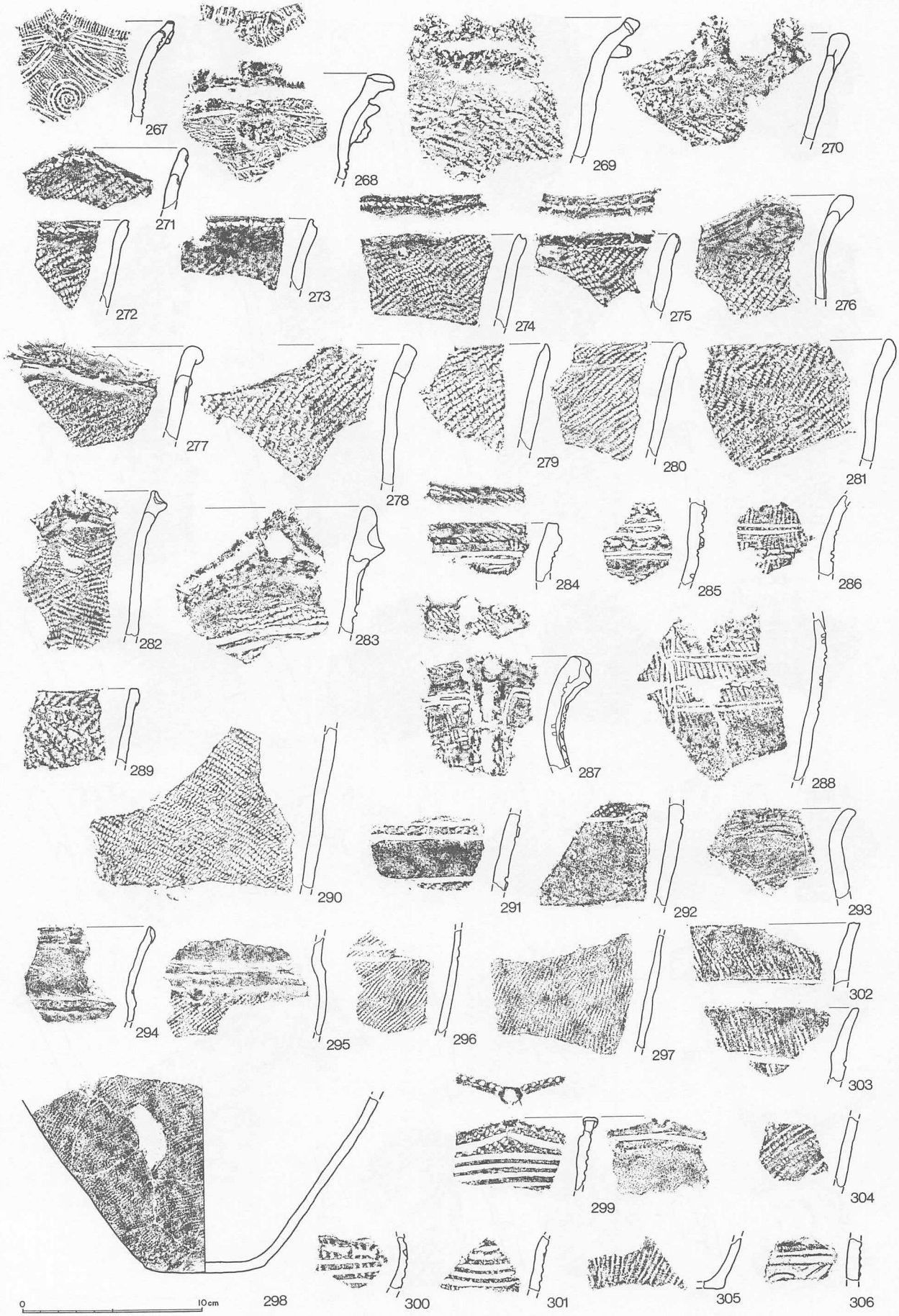
図Ⅲ－117　包含層の土器(6)



図Ⅲ－118　包含層の土器(7)



図Ⅲ－119　包含層の土器(8)



図Ⅲ－120　包含層の土器(9)

Ⅲ群 A_1類の土器の胎土，器面調整については遺物集中区のところで説明したのでここでは省略する。

Ⅲ群 A_3類（図Ⅲ－112－３～５，118－212～270）

本類の土器は，遺構の遺物のところでその多くを取り上げた。ここでは包含層出土の復元土器（図Ⅲ－112－３～５）をのぞき，突起部のみを掲載しその施文方法により以下のように分けた。　**突起部**

①　貼付帯によるもの（212～225）　突起の形状は，三角形状，弁状，２頂の山形突起などがあり，その外面，内面に貼付帯がつけられる。貼付帯上には縄の圧痕が施される例が多いが，つけられないものもある。214～216は，貼付帯の下に沈線文もみられるが，一応ここに入れておく。

②　沈線文によるもの（５，226～234）　５は口縁部，底部を欠失する。２本一組の沈線による連弧文と管状工具による横位の押し引き文が施されている。拓影土器では，弁状突起が多いが，その他に弁状突起上に１個の小突起があるもの(226，227)，４頂の突起があるもの（234）がある。234は突起の外面に横位の貼付帯があるが，一応ここに入れておく。

③　斜行縄文のみのもの（４，235～255）　４は弁状突起を４か所にもつ大型土器である。底部を欠失する。地文はRL－RL結束第二種斜行縄文である。胎土には，小礫，砂粒を含む。

拓影掲載土器は弁状突起のほかに，弁状突起上にさらに１個の小突起がつくもの（244，245)，弁状突起がやや細くなって肥厚し，その上面観が楕円形となるもの(246～252)，弁状突起が細くなったもの（253～255）がある。

④　その他（3，256～270）　３は平縁で，口縁から胴部にかけてすぼまり底部で張り出す。器高がある割には厚みのある土器である。口唇には縄の圧痕が施される。RL－RL結束第二種斜行縄文。底部のけずりは顕著である。

拓影掲載土器では③の突起外面に小さい瘤状の貼付けがつくもの(256～263)，突起外面の中央に環状の貼付けおよび円孔があるもの（264～266）などがある。267は沈線による横位，弧状，渦巻状の文様が施されている。268は口縁が二重になっているもの。269は３頂の小さい突起をもつもの。270は２個一組の瘤状の突起をもつもの。

Ⅲ群 A_3類の土器の地文は，単節の斜行縄文，結束第二種斜行縄文が多くみられる。胎土には，砂粒・小礫を含み，とくに小礫を多く含むものがある。内面調整，焼成ともに良好である。

Ⅲ群Ｂ類（図Ⅲ－112－６，120－271～288）　６は大安在Ｂ式相当と思われる土器である。地文は，横走するLRの原体による斜行縄文が口縁部から底部近くまで施文されている。口縁上部と胴上部のくびれた部分より少し下に３条の縄線文がある。内面調整・焼成ともに良好である。　**大安在Ｂ式相当**

271～283は榎林式である。口縁部が肥厚し，口唇断面は丸味を帯びる。口唇部から口縁上部にかけてみがかれている。口縁に折り返しがあるものもある(275，277，280)。271～275は，口唇部に一条の縄線文が施文されたもの。282，283は突起の口唇部上に縄の圧痕などによると思われる楕円形・円形のくぼみがある。そのほかの口唇部上には縄の回転圧痕，沈線文が施文されている。283の口縁部には沈線文が２本認められる。胎土には，砂粒の混　**榎林式**

入がみられるものもあるが多くはない。胎土はザラついた感じがするのが特徴である。内面の調整・焼成ともに良好である。地文はほとんど斜行縄文であるが横走するものもみられる。

ノダップII式　284～288は，ノダップII式である。同じ発掘区から出土しており，同一個体と思われる。口唇断面は角型を呈し，外反する。口縁は折り返し口縁で平縁と思われる。口縁部文様帯は，折り返しの口縁上部に円形のくぼみがありそこから2本の貼付帯が垂下する。口縁下部では，横位の貼付帯もある。貼付帯上には，竹管状工具による刺突が施される。口縁部文様はその他に2本一組の沈線文が横位・縦位に，2条一組の刺突文が横位に施文される。地文は縦走する縄文である。胎土には小礫・砂粒を含む。内面の調整は良好である。

IV群（図III－120－289～293）　289，290は余市式と思われる。290は，LRの原体を縦に回転施文している。291，292は入江式に相当すると思われる。胎土中に砂粒を多く含む。内面の調整は良好である。293は大湯式と思われる口縁部である。胎土中には石英，黒雲母などを多量に含む。外面は無文であるが，横へなでた痕がある。内面の調整は良好である。

大洞C_2～A式相当　**V群**（図III－112－7，120－294～298）　大洞C_2～A式に相当するものが出土している。7は，無文で土器の外面，内面にはベンガラと思われるものと黒色の有機物質が付着している。ベンガラと思われるものは，内面により多く付着する。土器の外面はよく磨かれている。294，295は浅鉢形土器の口縁部破片である。298は口縁部を欠失した深鉢形土器。

恵山式　**VI群**（図III－120－299～306）　299～305は恵山式である。299は浅鉢形土器の口縁部破片である。300，301は同一個体と思われる胴部の破片である。302，303は口縁部破片。口唇断面は，角度のゆるい切り出し型である。外面には口縁から縦走する縄文を施し，下位には横位の沈線が一本ある。胎土には砂粒を含む。内面の調整は顕著である。304は胴部破片，305は底部破片。いずれも内面調整は良好である。306は，後北C_1式の胴部破片。横位，斜位，弧状の微隆起線文が施される。後北式の破片はこの一点のみである。　（佐川俊一）

後北C_1式

3）石器（図III－121～128，図版57～60）

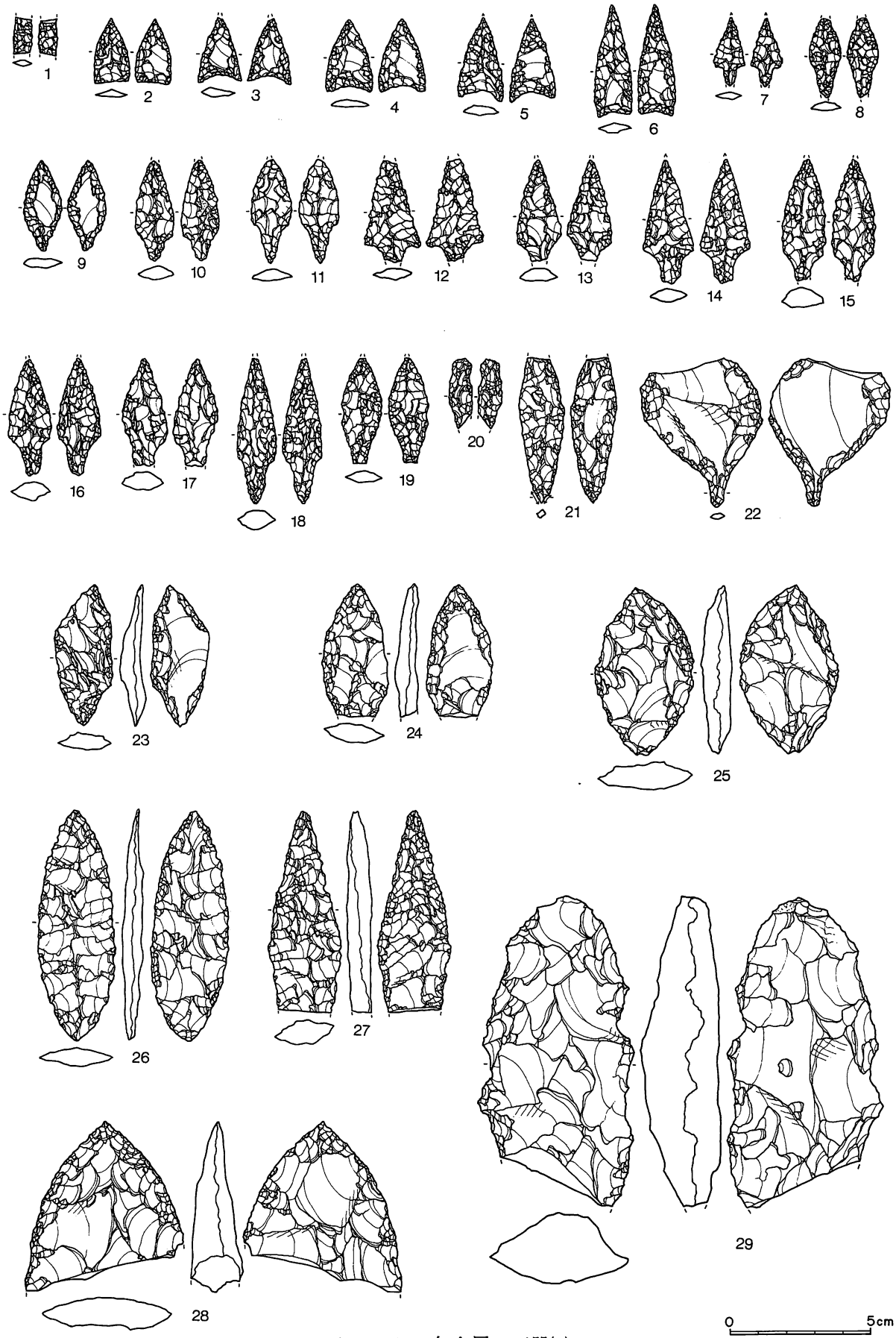
包含層からは，剥片石器296点，礫石器163点，Uフレイク55点，フレイク2,796点，礫360点が出土した。I－4－(2)で述べたように，部分的にIV層上面まで削平・耕作が及ぶ調査区があるため，石器の分布はこれに左右されている。（図I－3，4）

剥片石器では，スクレイパーが67％を占め，石鏃，槍先またはナイフ，つまみ付ナイフが9％とこれに次いでいる。礫石器ではすり石が63％を占め，たたき石19％，石斧8％を占めている。

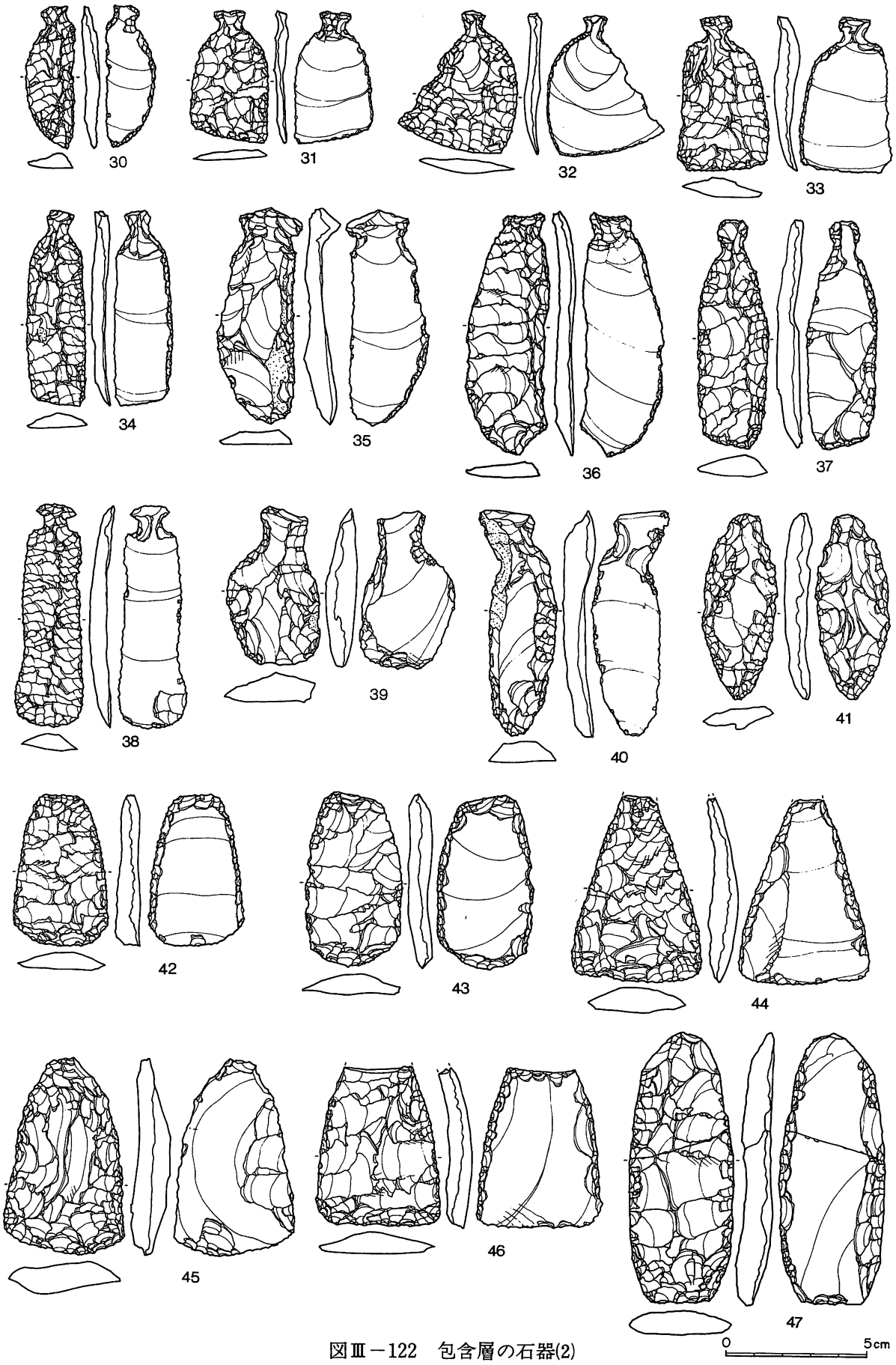
剥片石器の石質はめのう質頁岩が多く，頁岩，チャートがこれに次ぐものである。黒曜石は51点を数えるのみである。礫石器では，安山岩が多く，砂岩，珪岩，輝緑岩などがある。

石鏃（図III－121－1～19，図版57－1）　28点が出土した。形状別の内訳は有茎鏃（8～18）18点，無茎鏃（2～5）8点，柳葉形のもの(19)1点，形状不明のもの(1)1点である。有茎鏃と無茎鏃には分布上の差は認められない。無茎鏃の基部形態には平坦なもの(2)と，湾入しているもの(3～6)がある。1は両端部を欠損しているが，側縁の形状から柳葉形のものの可能性がある。石材は3・17がめのう質頁岩，10・12・14がチャート，2・4～9・11・13・15・16・18・19が頁岩，1が黒曜石である。

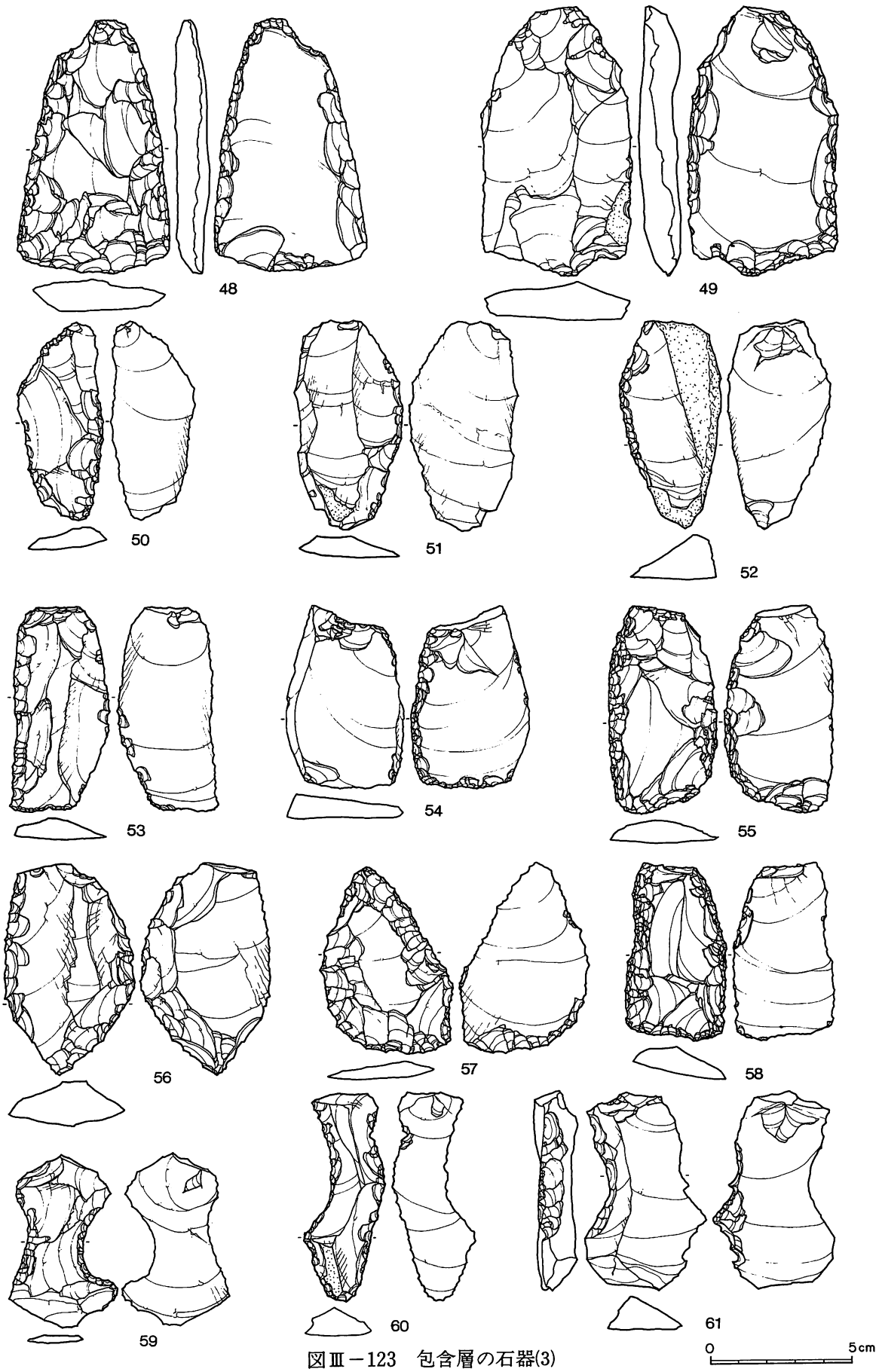
ドリル（図III－121－20～22，図版57－1）　9点が出土した。これらは遺跡全域に分布



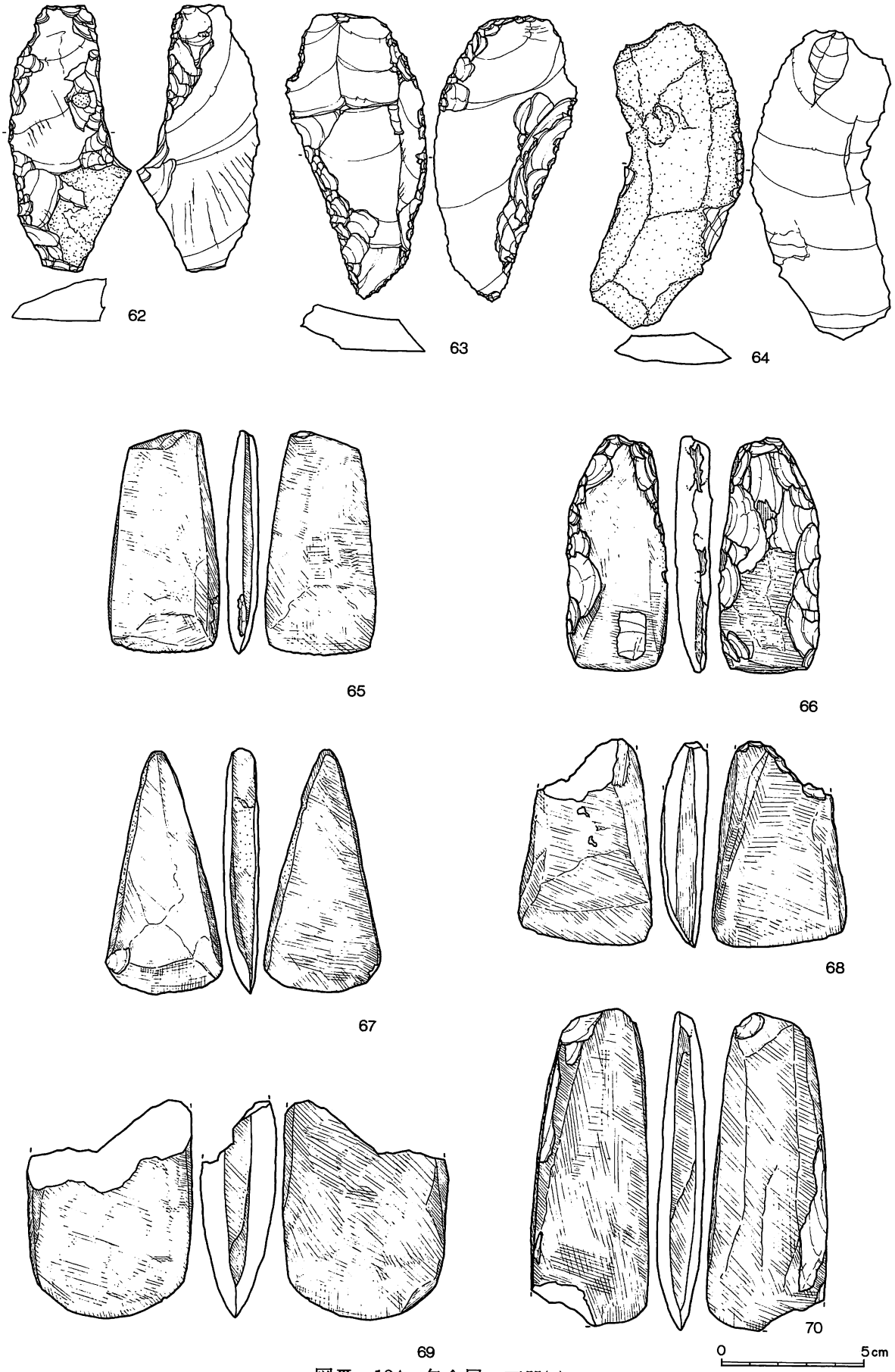
図Ⅲ－121　包含層の石器(1)



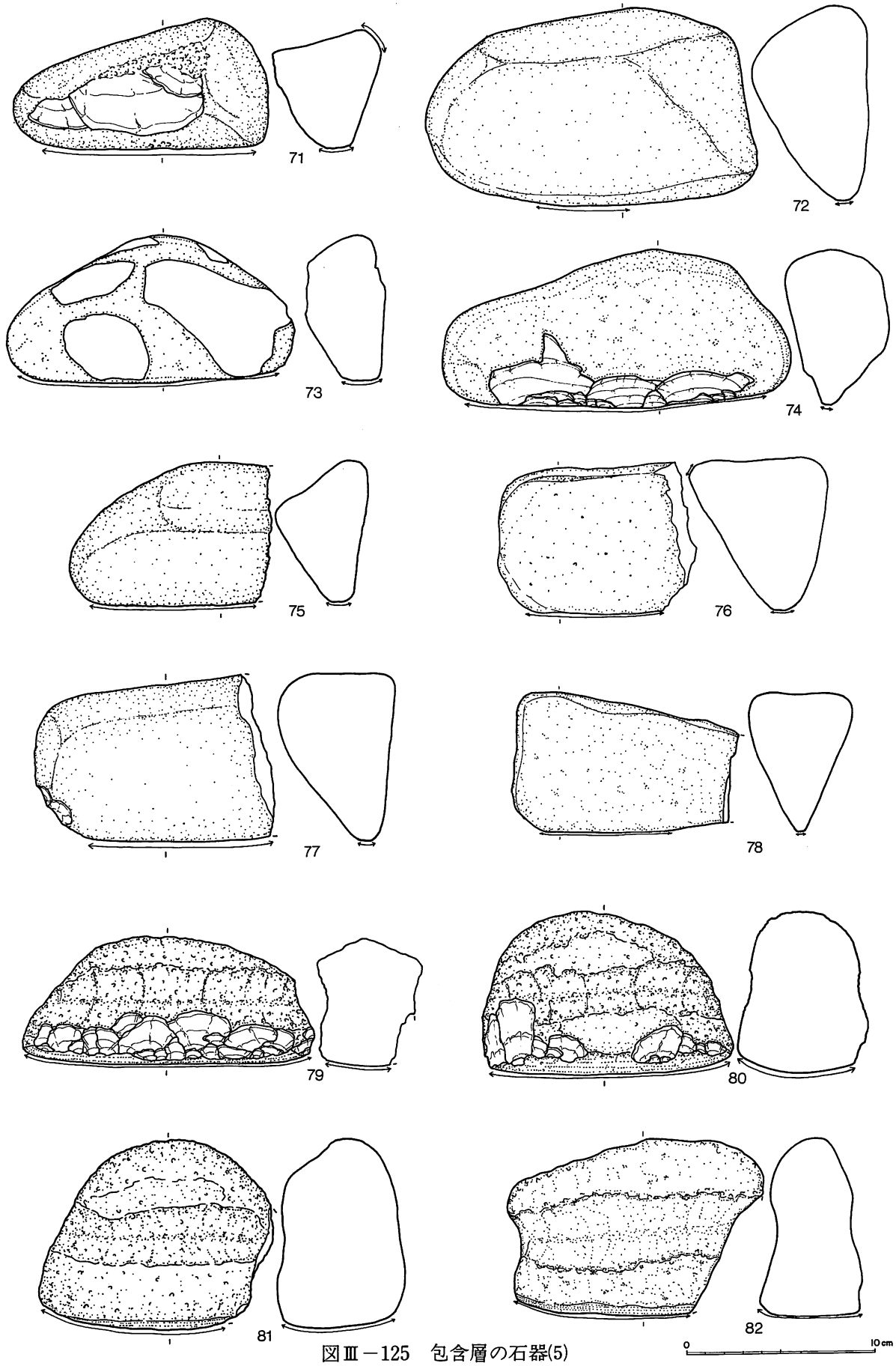
図Ⅲ－122　包含層の石器(2)



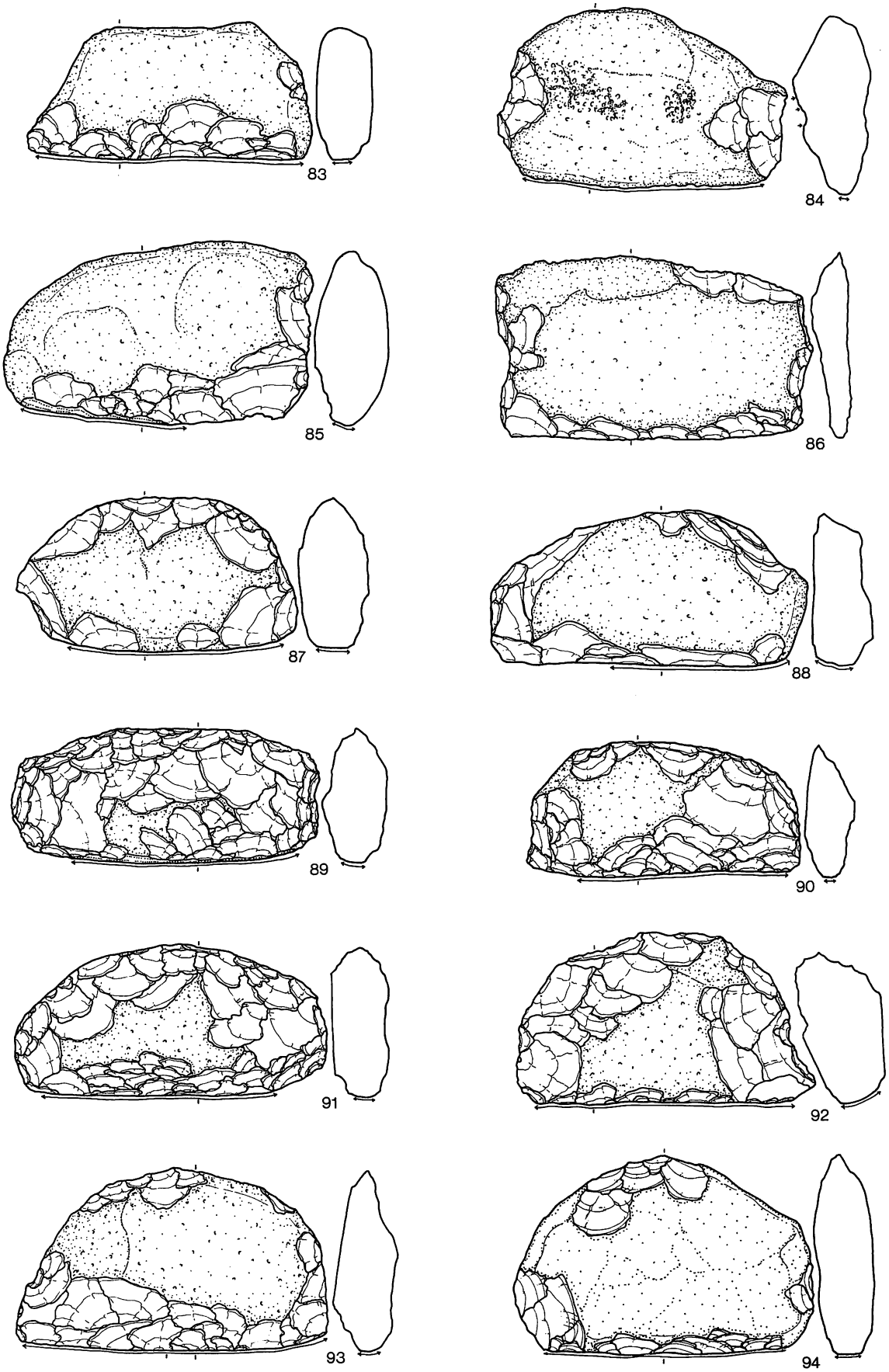
図Ⅲ－123　包含層の石器(3)



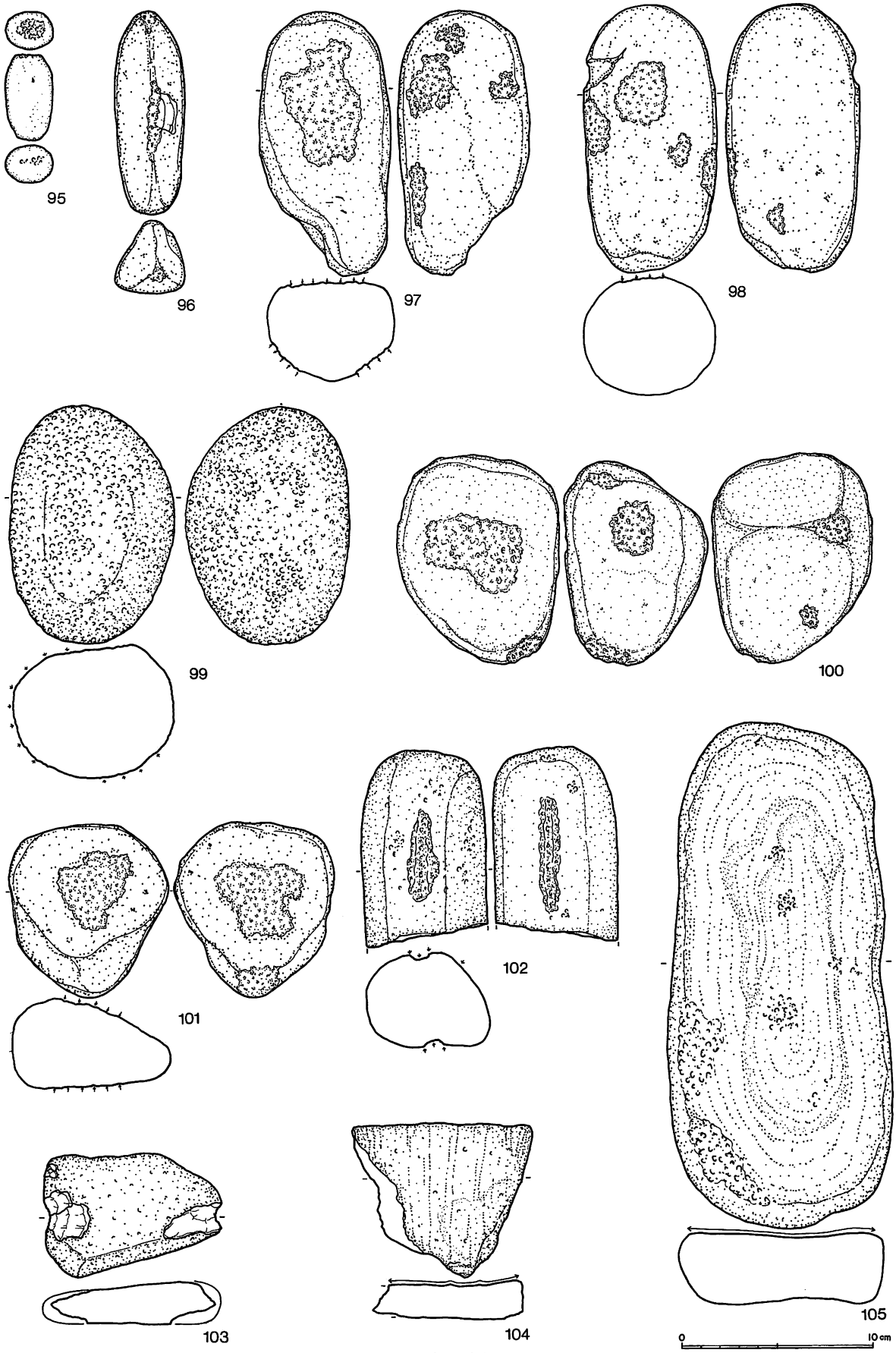
図Ⅲ－124　包含層の石器(4)



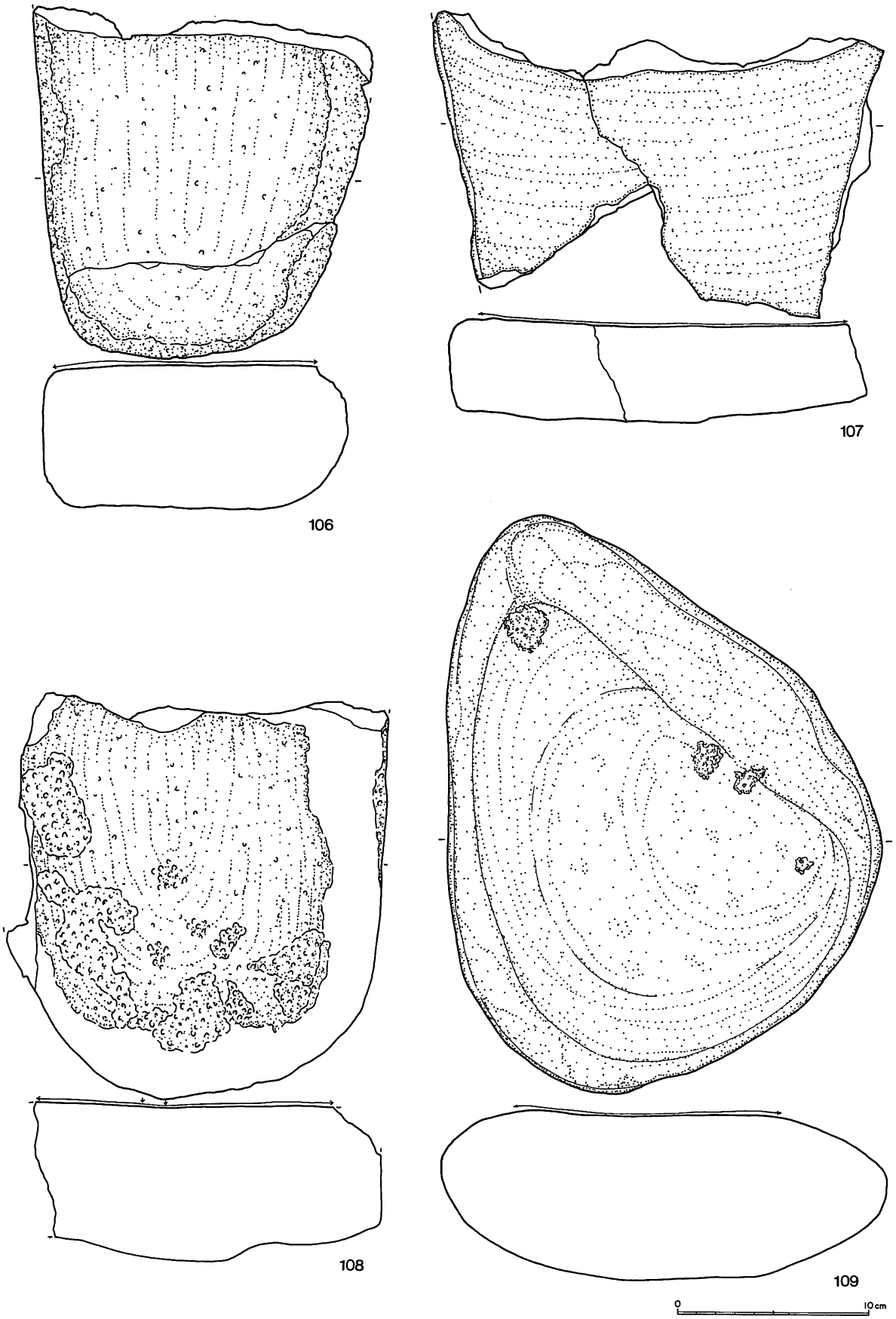
図Ⅲ－125　包含層の石器(5)



図Ⅲ－126　包含層の石器(6)　0　10cm



図Ⅲ－127　包含層の石器(7)



図Ⅲ－128　包含層の石器(8)

している。棒状のもの（20・21）と剝片の一端に刺突部を作りだしたもの(22)がある。石材は20が珪藻岩，21・22が頁岩である。

槍先またはナイフ（図Ⅲ－121－23～29，図版57－1）　27点が出土した。これらは欠損するものが多く，形状の傾向は明確にし得ない。23・24は裏面の加工が周縁のみにおこなわれるもの。25，26は木葉形のもの。29は大形で加工の粗いもの。石材はすべて頁岩である。

つまみ付ナイフ（図Ⅲ－122－30～41，図版57－2）27点が出土した。30～37は表面が全面加工，裏面は一側縁に刃潰し状の加工を施したもの。38は表面全面に平行剝離を施したものである。これらは加工のあり方から縄文時代早期に属するものと考えられる。これらは13点あるが，そのうち10点がA～C－34～37区にあり，Ⅰ群土器の分布に重なる。39・40は表面は周辺部に浅い加工が，裏面はつまみ部を中心に加工が施されるもの。41は両面全面加工のもの。つまみ部の作出は不明瞭である。石材は30・39がめのう質頁岩。このほかは頁岩。

Ⅰ群土器

スクレイパー（図Ⅲ－122～124－42～64，図版58－1・2）　205点が出土した。42～49はへら状石器と呼ばれるもので12点がある。このうち9点は32ライン以北に分布している。42～48は表面が全面に，裏面は縁辺部に加工がおこなわれるもの。49は表面の加工が粗い。45・46は素材の剝離方向を短軸に設定している。石材はすべて頁岩である。50～64はスクレイパー。図示したものは縦長剝片を素材として，その縁辺部に加工が施されるものである。59・60は湾入する刃部をもつものである。石材は61・64がめのう質頁岩，このほかは頁岩である。

へら状石器

石斧（図Ⅲ－124－65～70，図版59－1）　13点が出土した。すべて30ライン以南に分布している。66～68は片刃石斧。石材は66・67・69・70が緑色泥岩，65が片岩，68が蛇紋岩である。

すり石（図Ⅲ－125・126－71～94，図版59－2）　102点が出土した。71～78は断面が三角形をなす礫を素材としたものである。25点があり，このうち17点は30ライン以北に分布している。73は火熱を受け表面が剝落している。79～82は北海道式石冠。8点がありすべて30ライン以南に分布している。83～94は半円状偏平打製石器と呼ばれるもので69点があり，このうち64点が30ライン以南に分布している。板状節理による礫(86)と偏平な楕円礫（83～85・87～94）を素材としたものがある。84は平坦面に敲打痕があるもの。長軸両端の剝離はこの敲打痕より新しいことから，たたき石から転用されたものの可能性がある。

30ライン以南

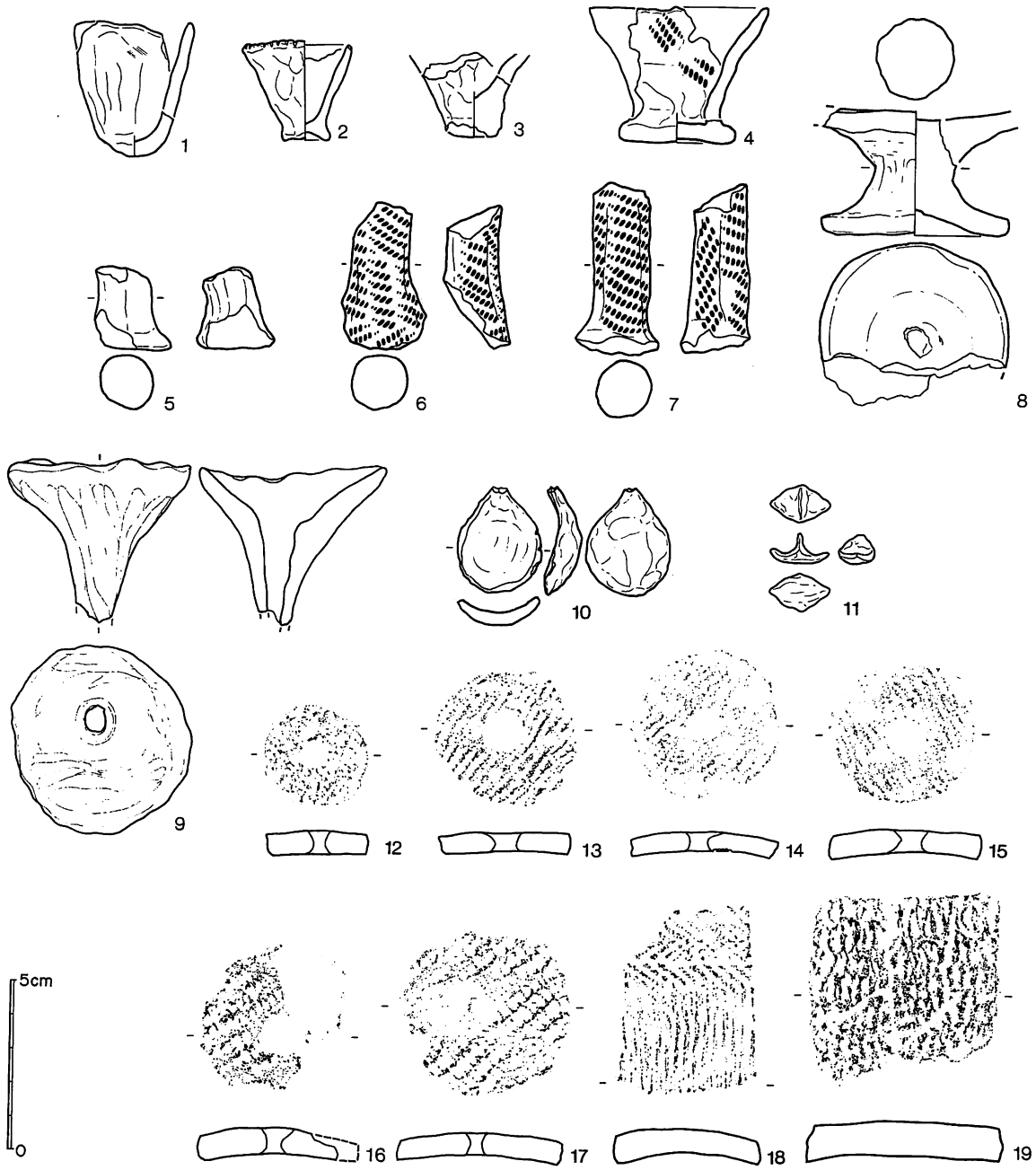
石材は75・76・78・79・81・83～89・91～94が安山岩，74・80が輝緑岩，77が泥岩，ほかは砂岩である。

たたき石（図Ⅲ－127－95～102，図版59－1）　32点が出土した。これらは，遺跡全域に分布している。95・96は棒状礫の両端部にたたき痕のあるもの。97～102は円礫を素材としたもの。石材は97～101が安山岩，96・102が砂岩，95が珪岩である。

石錘（図Ⅲ－127－103，図版60－2）　1点が出土した。長軸両端に抉りをもつものである。石材は安山岩。

砥石（図Ⅲ－127－104・105，図版60－2）　5点が出土した。石材は104・105ともに砂岩である。

台石・石皿（図Ⅲ－128－106～109，図版60－2）　10点が出土した。石材は106～109と



図Ⅲ－129　土製品(1)

もに安山岩である。　　（石川　朗）

4）土製品，石製品など（図Ⅲ－129～132－1～31，図版61，62－1・2）

土製品が10点，石製品が5点出土した。ここでは遺構から出土したものも合せて図示した。1～4はミニアチュア土器。5～7は脚付き土器の脚部破片。6・7は文様，焼成が共通しており同一個体片であると考えられる。8は台付土器の台部破片。9は漏斗状土製品。口縁は朝顔状に大きく開く。10はスプーン状土製品。11はスタンプ様をなす土製品。12～19は土器片を利用した土製品。18，19は擦り切り痕をもつもの。18は遺物集中区のⅡb層より出土したものである。出土状態，胎土，文様などから，18・19はⅢ群A_1類土器の時期，その他はⅢ群A_3類，Ⅲ群B類（榎林式）土器の時期にそれぞれ所属するものである。

ミニアチュア土器

土偶

20・21は土偶。ドットスクリーントーン部は欠損面を表わす。20はやや後傾するプロポー

ションをもつもので，胸，腹部の表現はない。胴部は緩くくびれている。底面は上げ底である。文様は沈線のみで，脇の下からの刺突がある。胎土には砂粒，石英粒が含まれている。21も20と同様，上げ底状をなすものである。文様は沈線が正面とこれから側縁にかけて，環状の貼付が側縁のくびれ部にそれぞれ施されている。22は動物形土製品。大きさは，6.3×3.9×2.9cm，重さは22.0gをはかる。刺突によって，目，噴気孔が表現されており，背びれの前部に刻みが施されている。この詳細についてはⅤ－3で述べる。23はコハク玉。断面形はレンズ状をなす。孔は器体中央にあり，両面から穿孔されている。24は有孔自然石。石材は泥岩。25～27は軽石製の垂飾。28～30は平坦に調整された面をもつ石製品。29は溝状のくびれをもつ。石材はいずれも軽石。31は敲打痕をもつ片岩。石斧未製品であろうか。25～30は共伴土器からⅢ群A_3類土器の時期と考えられる。（石川　朗）

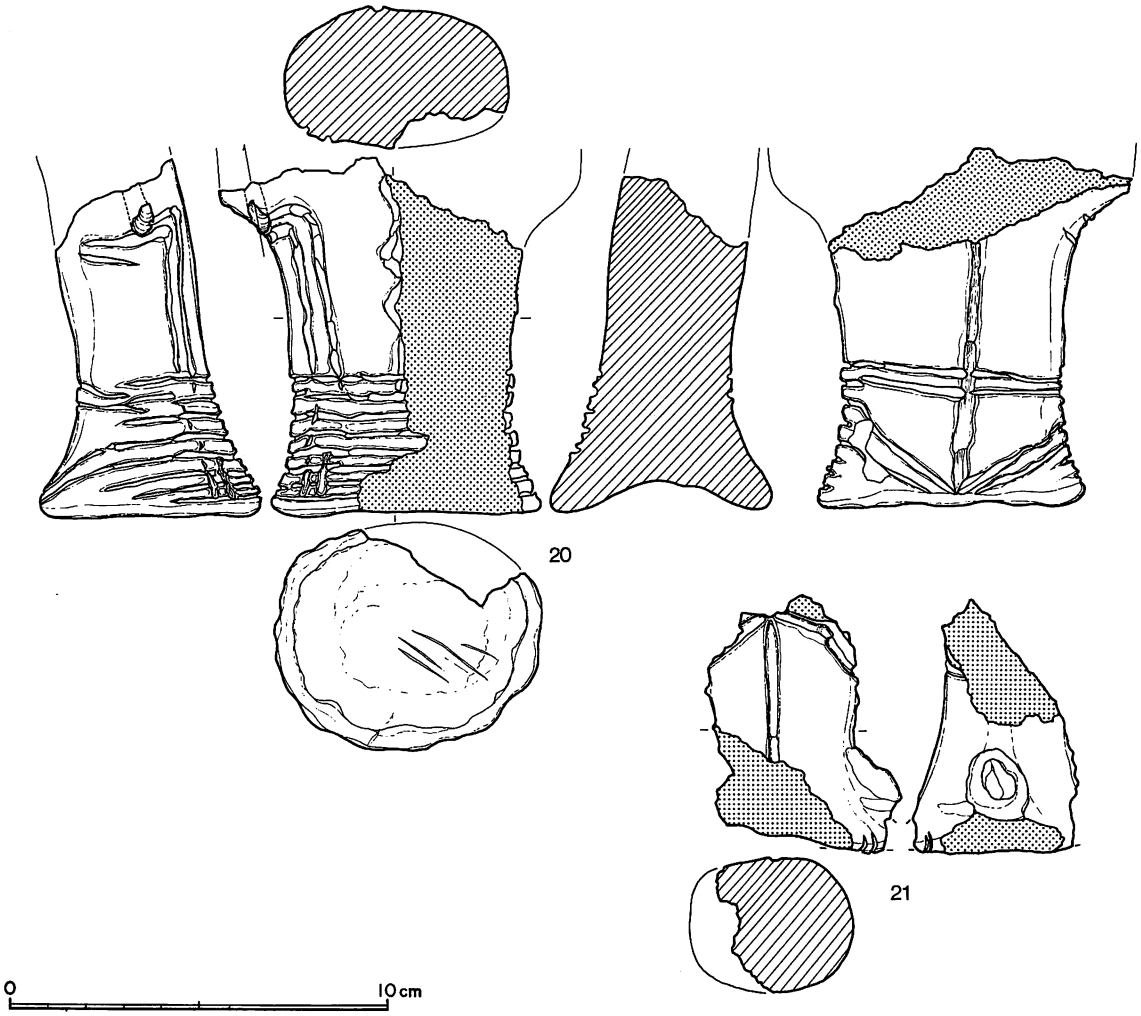
動物形土製品

コハク玉

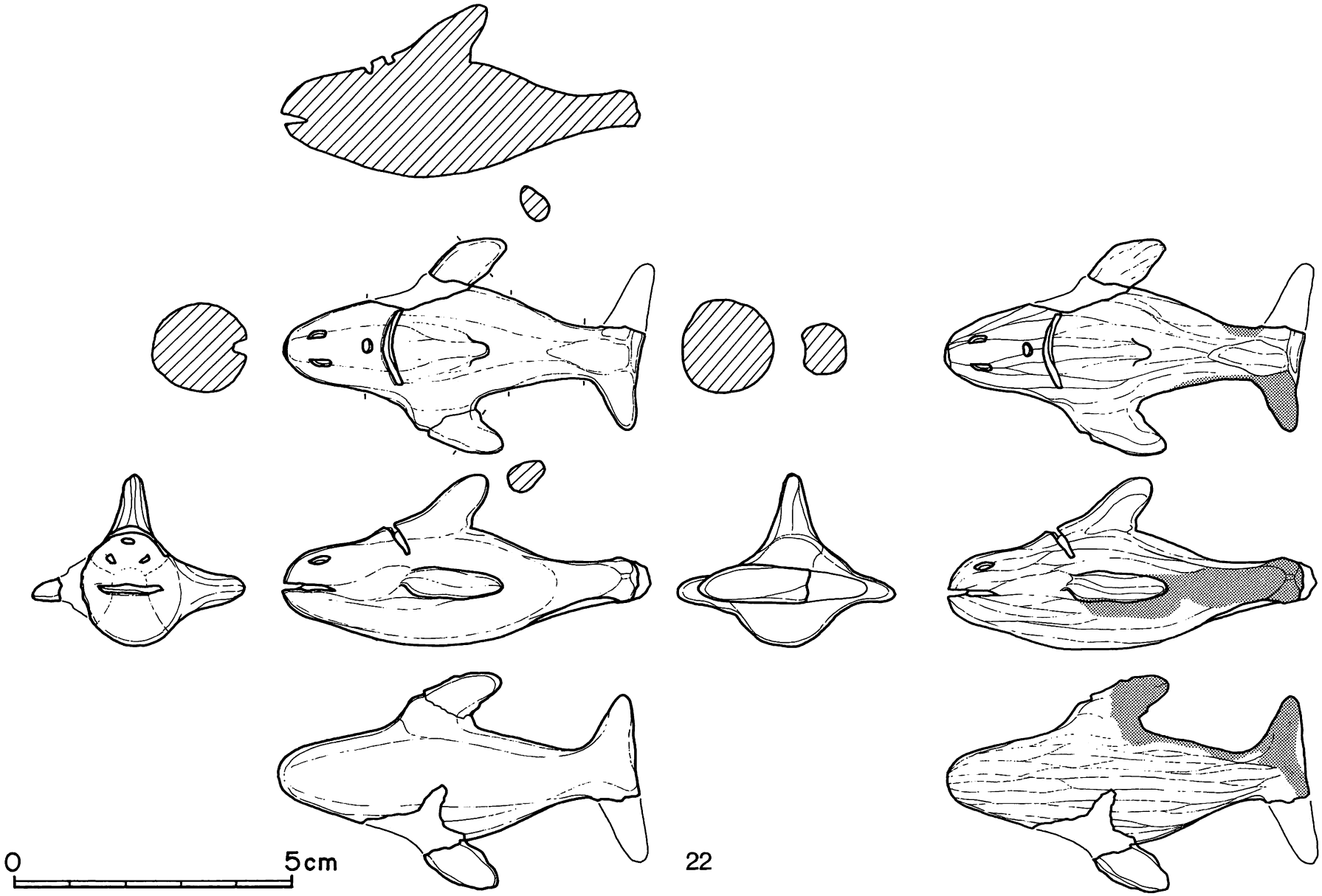
5）金属製品（図Ⅲ－132－32～35，図版62－3）

渡来銭が4点出土した。32は祥符元宝（初鋳1008年），33は皇宋通宝（初鋳1039年），34は熙寧元宝（初鋳1068年）である。35は判読不明。（石川　朗）

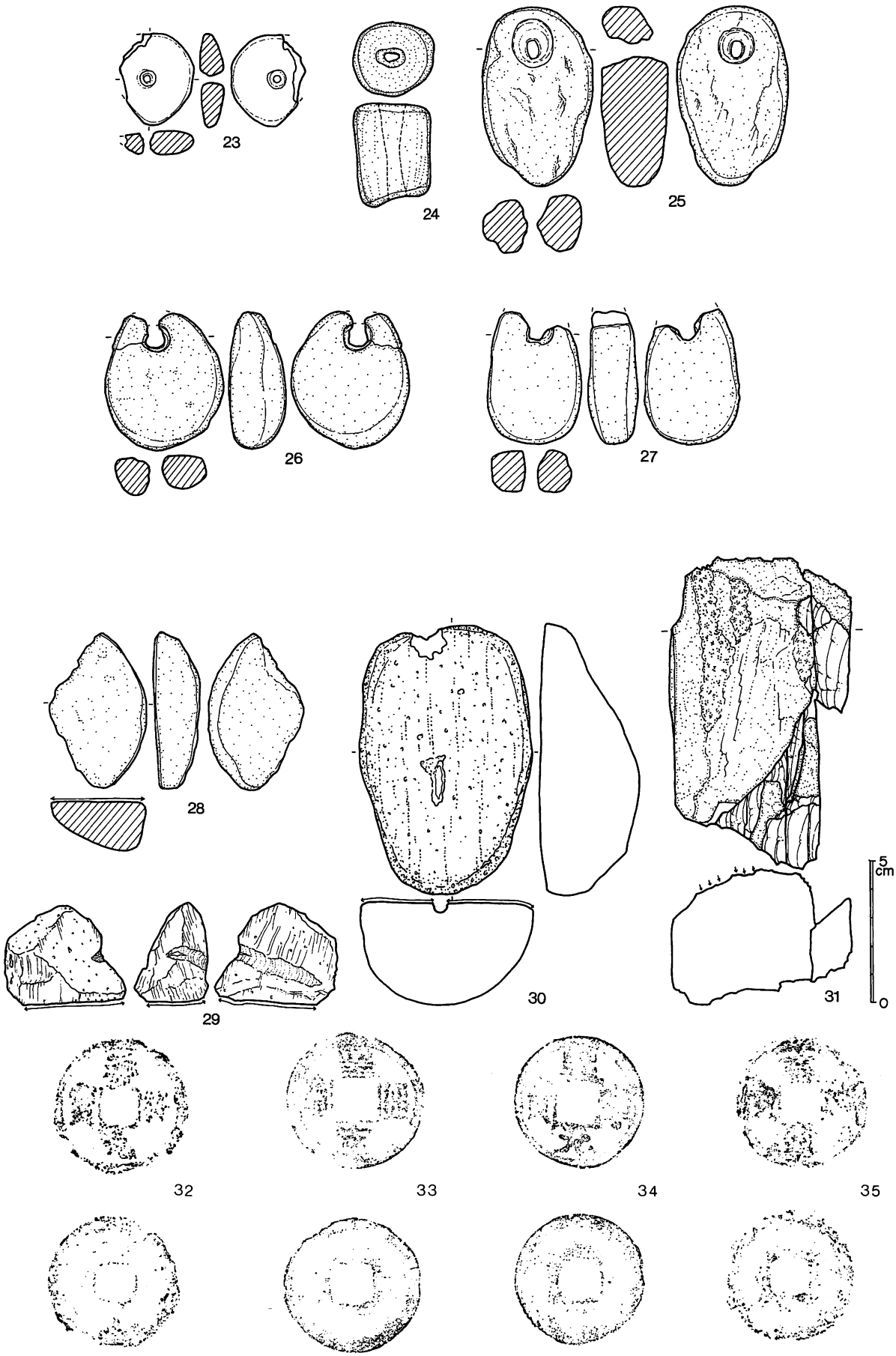
渡来銭



図Ⅲ－130　土製品(2)



図Ⅲ－131　土製品(3)



図Ⅲ－132　石製品，金属製品（古銭）

2　第Ⅳ層の遺構と遺物

本遺跡における第Ⅳ層からの旧石器出土は，隣接する石川１遺跡の状況からみて，可能性が高いと判断し，縄文時代の包含層，遺構調査終了後，順次第Ⅳ層の調査を行った。確認調査は66ヵ所の発掘区（1,056m²）で実施し，その結果，11ヵ所の発掘区で旧石器が出土した。出土位置は，沢の北側と南側の二つの地域で，北側は10ヵ所（B－40，C－39～41，D－39～41，E－39・40，F－40），南側は１ヵ所（G－11）の発掘区である。北側は，C－40とD－40にまたがる径４ｍの集中域を中心に16×８ｍの範囲に石器類が分布するが，南側は４点のみが散在するだけである。北側および南側の石器ブロックをそれぞれKSb－１，KSb－２と呼ぶ。

石器ブロック

遺物総数

出土遺物総数は1,366点，その内訳はナイフ様石器19点，ナイフ様剥片17点（個体数は15点），彫器１点，石刃２点（個体数は１点），石核18点，剥片775点，礫片534点で，剥片と礫が96％を占める。総重量は5,481.0g，そのうち石器は1,755.2g，剥片・礫は3,725.8gで，その比率は32：68である。

総重量

石器，剥片類の石材はめのう質頁岩と頁岩がみられるが，めのう質頁岩が99％を占める。礫はすべて火熱をうけ破砕した状態で，石材は安山岩，砂岩，頁岩などみられるが，頁岩が大半を占める。また，母岩別分類を試みたところ，めのう質頁岩13個体，砂岩１個体，頁岩３個体が抽出できた。さらに母岩別資料17個体のうち，９個体については，原石の状態に近い形まで接合することができた。以下，石器ブロックの特色と石器について説明する。

母岩別分類

（長沼　孝）

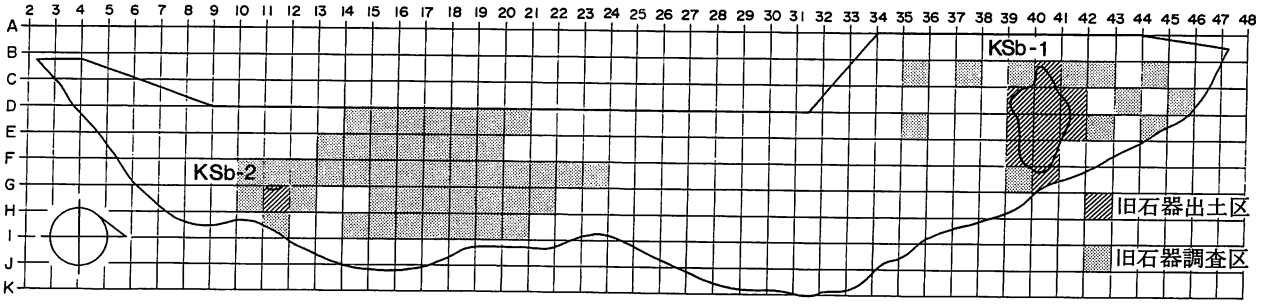
(1)　石器ブロックと石器

KSb－１（図Ⅲ－134，図版32・33）

分布　石器はB－40，C－39～41，D－39～41，E－39・40区に分布する。おおきさは東西約16m，南北約８ｍで，厚さ20cmである。最も遺物が集中するのはC－40，D－40区にまたがった径約４ｍの範囲で，ここからは総点数の90％，総重量の81％が出土している。また礫は，そのなかのさらに径約２ｍからの総点数の97％，総重量の96％が出土している。このように本ブロックは礫群を中心に形成している。

石器　1,362点が出土した。その内訳はナイフ様石器19点，ナイフ様剥片17点，石核17点，剥片775点，礫534点で総重量は4,993.8ｇある。礫は火熱をうけて破砕したもので１点あたりの平均重量は約２ｇである。剥片にも同様に表面が黒く変色したり，ひび割れを生じたものが19点ある。これらはすべて剥離後に火熱をうけたものである。

礫の平均重量



図Ⅲ－133　旧石器調査範囲と石器ブロックの位置

表Ⅲ－1　石器ブロック・器種・石材別点数および重量

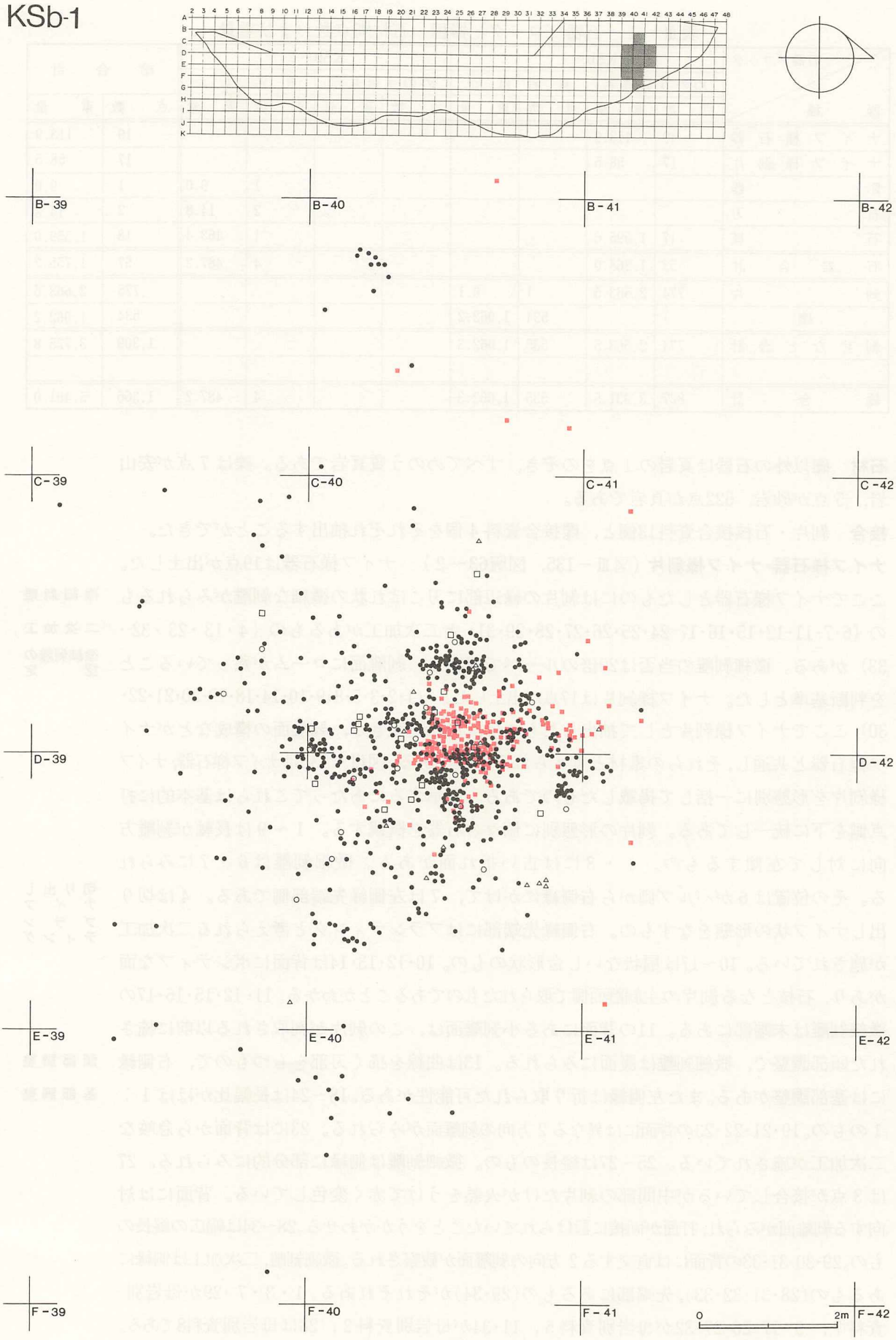
石器ブロック／器種	KSb－1 めのう質頁岩 点数	KSb－1 めのう質頁岩 重量	KSb－1 頁岩ほか 点数	KSb－1 頁岩ほか 重量	KSb－2 めのう質頁岩 点数	KSb－2 めのう質頁岩 重量	KSb－2 頁岩ほか 点数	KSb－2 頁岩ほか 重量	総合計 点数	総合計 重量
ナイフ様石器	19	113.9							19	113.9
ナイフ様剥片	17	58.5							17	58.5
彫器							1	9.0	1	9.0
石刃							2	14.8	2	14.8
石核	17	1,095.6					1	463.4	18	1,559.0
石器合計	53	1,268.0					4	487.2	57	1,755.2
剥片	774	2,663.5	1	0.1					775	2,663.6
礫			534	1,062.2					534	1,062.2
剥片など合計	774	2,663.5	535	1,062.3					1,309	3,725.8
総合計	827	3,931.5	535	1,062.3			4	487.2	1,366	5,481.0

石材　礫以外の石器は頁岩の１点をのぞき，すべてめのう質頁岩である。礫は７点が安山岩，５点が砂岩，522点が頁岩である。

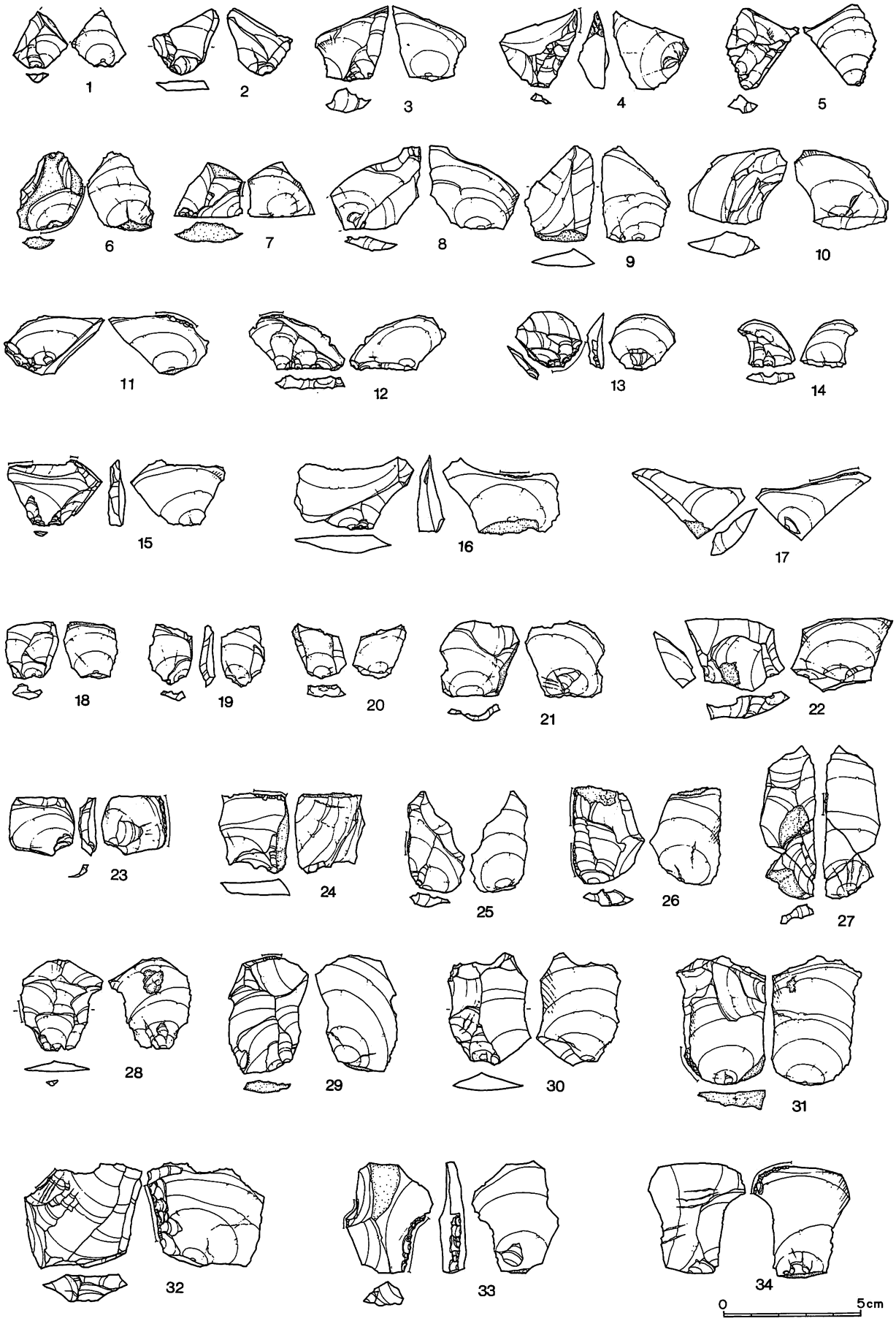
接合　剥片・石核接合資料13個と，礫接合資料４個をそれぞれ抽出することができた。

ナイフ様石器・ナイフ様剥片（図Ⅲ－135，図版63－２）　ナイフ様石器は19点が出土した。ここでナイフ様石器としたものには剥片の縁辺部に刃こぼれ状の微細な剥離がみられるもの（6・7・11・12・15・16・17・24・25・26・27・28・29・31）と二次加工があるもの（4・13・23・32・33）がある。微細剥離の当否は20倍のルーペで観察し，剥離面にロームが残っていることを判断基準とした。ナイフ様剥片は17点が出土した。（1・2・3・5・8・9・10・14・18・19・20・21・22・30）ここでナイフ様剥片として抽出したものは，形状，大きさ，剥離面の構成などがナイフ様石器と共通し，それらの素材と考えられるものである。図Ⅲ－135はナイフ様石器，ナイフ様剥片を形態別に一括して掲載したものである。図示するにあたってこれらは基本的に打点側を下に統一してある。剥片の形態別に個々の石器を概観する。１～９は長軸が剥離方向に対して左傾するもの。１・８には古い折れ面がある。微細剥離は６・７にみられる。その位置は６がバルブ側から右側縁にかけて，７は左側縁先端部側である。４は切り出しナイフ状の形態をなすもの。右側縁先端部にはブランティングと考えられる二次加工が施されている。10～17は扇状ないし台形状のもの。10・12・13・14は背面にポジティブな面があり，石核となる剥片の主剥離面側で取られたものであることがわかる。11・12・15・16・17の微細剥離は末端部にある。11の背面にある小剥離面は，この剥片が剥取される以前に施された頭部調整で，微細剥離は腹面にみられる。13は曲線を描く刃部をもつもので，右側縁には基部調整がある。また左側縁は折り取られた可能性がある。18～24は長幅比がほぼ１：１のもの。19・21・22・23の背面には異なる２方向の剥離面がみられる。23には背面から急峻な二次加工が施されている。25～27は縦長のもの。微細剥離は側縁に部分的にみられる。27は３点が接合しているが中間部の剥片だけが火熱をうけて赤く変色している。背面には対向する剥離面がみられ，打面が両接に設けられていたことをうかがわせる。28～34は幅広の縦長のもの。29・30・31・33の背面には直交する２方向の剥離面が観察される。微細剥離，二次加工は側縁にあるもの(28・31・32・33)，先端部にあるもの(29・34)がそれぞれある。１・３・７・29が母岩別資料７，９・17・26・27・32が母岩別資料５，11・34が母岩別資料２，28は母岩別資料8である。

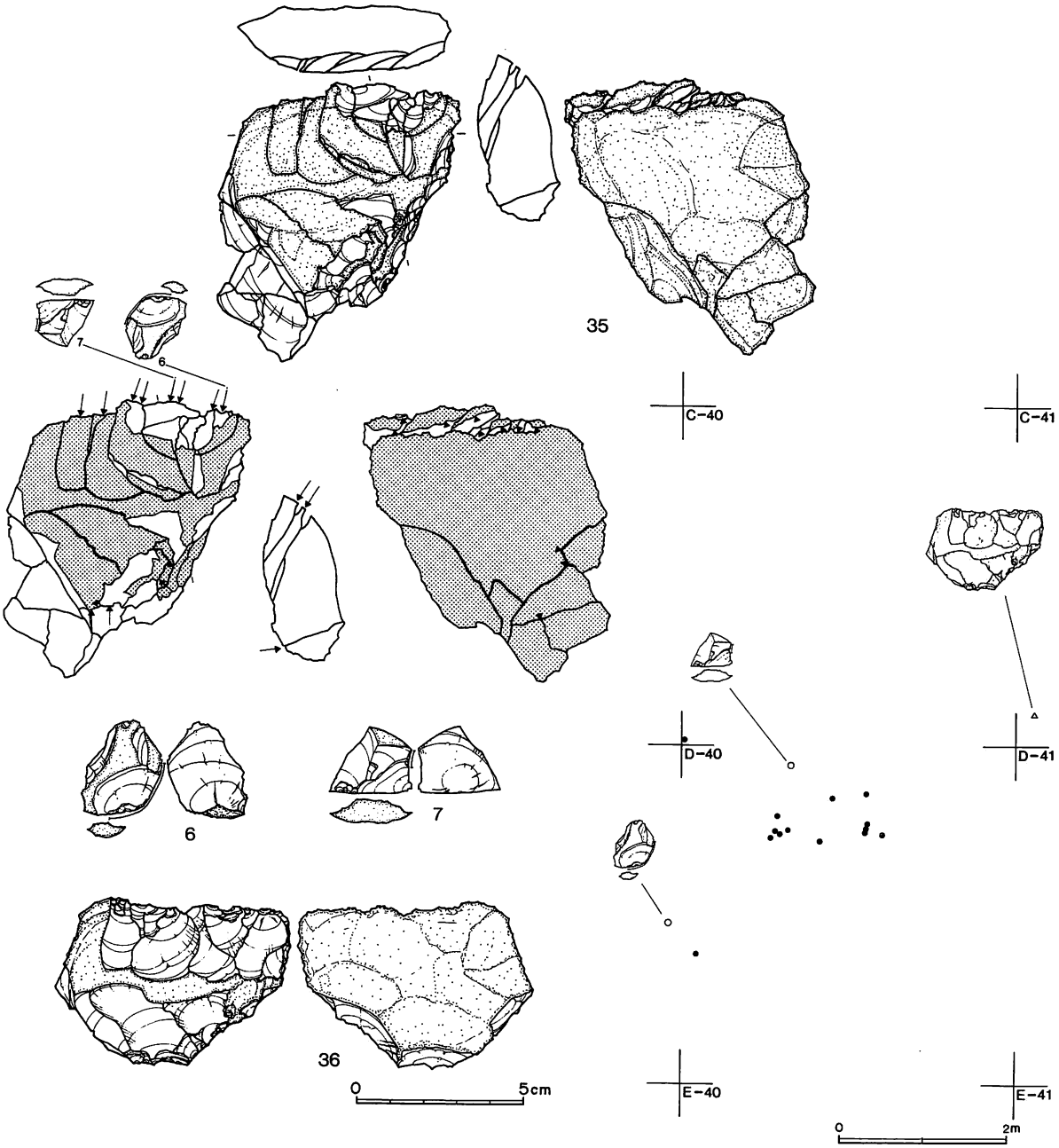
微細剥離
二次加工
微細剥離の認定
切り出しナイフブランティング
頭部調整
基部調整


KSb-1
B-39
B-40
B-41
B-42
C-39
C-40
C-41
C-42
D-39
D-42
E-39
E-40
E-41
E-42
F-39
F-40
F-41
F-42
0
2m

図Ⅲ－134　KSb－1



図Ⅲ－135　ナイフ様石器・ナイフ様剥片



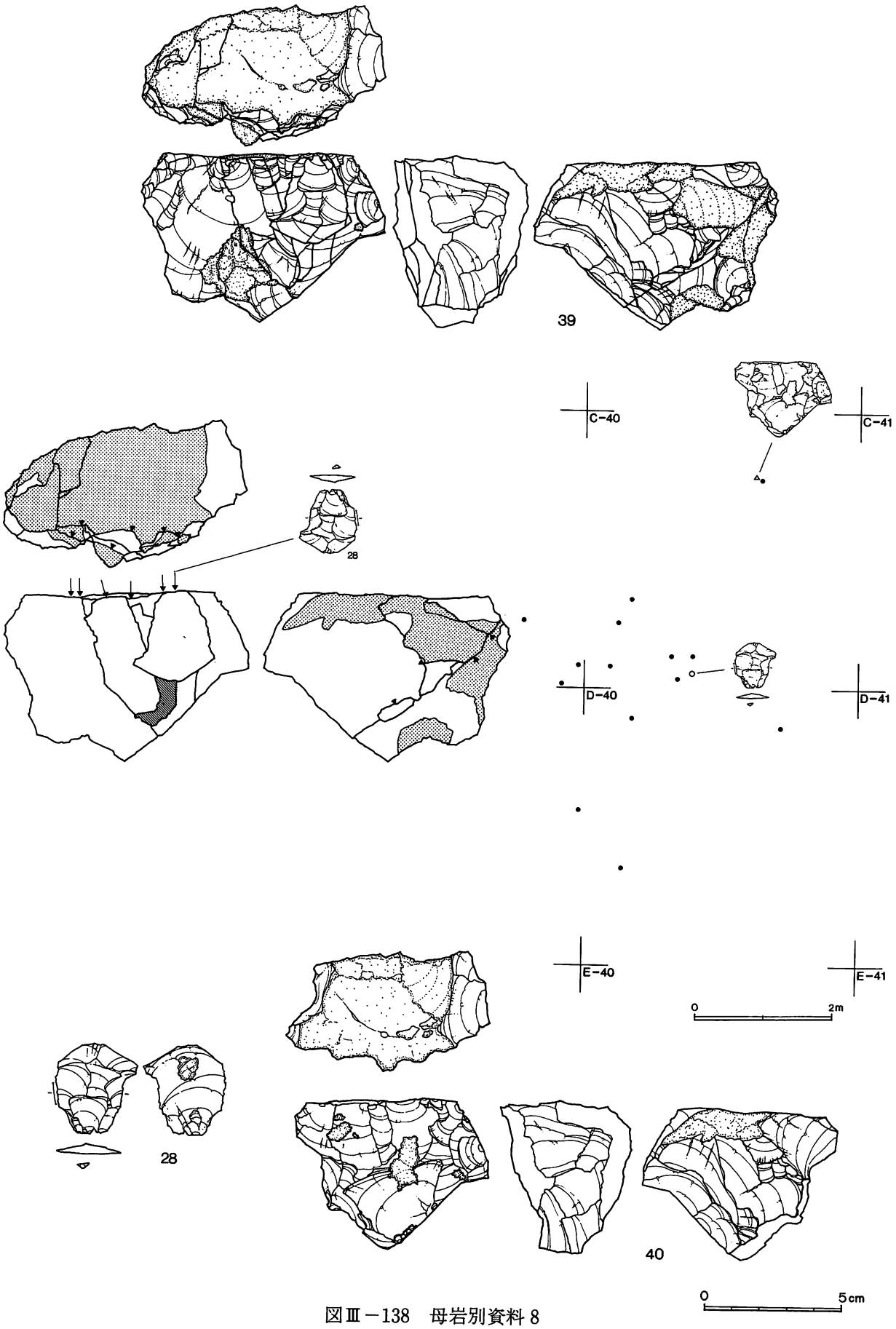
図Ⅲ－136　母岩別資料６

４・10・12・13・14・18・19・20・23は母岩別資料10，そのうち12・13は38の石核から13→12の順に（個体別資料Ｃ），４・19・23は４・23・19の順に（個体別資料Ｄ）それぞれ連続して剥取されたものである。石材はすべてめのう質頁岩。

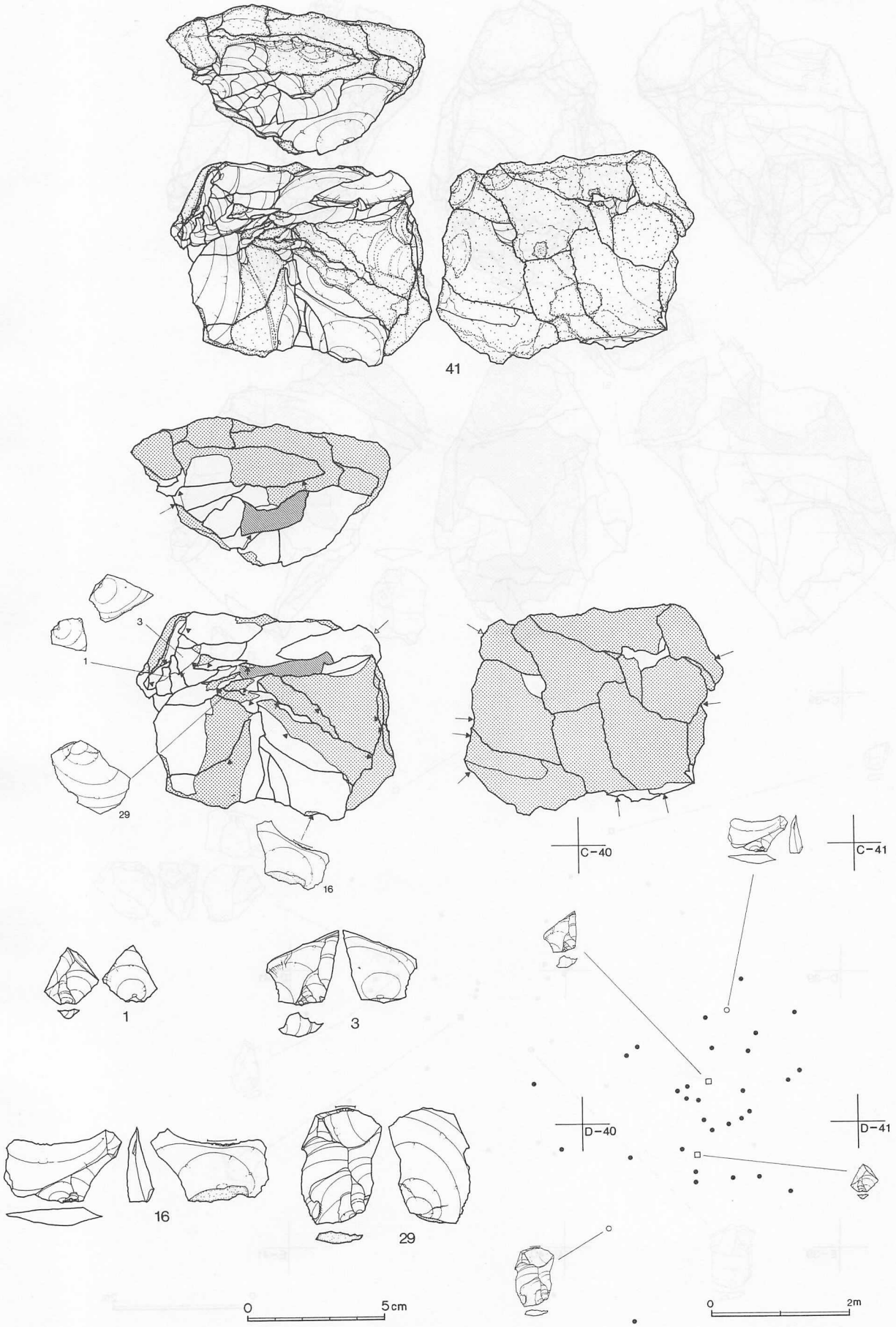
剥片・石核接合資料（図Ⅲ－136～146，図版64～69）　KSb－１から出土した礫以外の剥片，石核は接合作業の結果，母岩別に13個の接合資料が抽出され，このうち８個は原材の形状を推定することができた。ここではその８資料について剥片剥離過程を中心に述べる。図は最終接合図，剥離模式図，接合分布図，ナイフ様石器，ナイフ様剥片，石核実測図を一組にして掲載した。

母岩別資料６　35は母岩別資料６の最終接合図である。18点が接合しており，その内訳はナイフ様石器２点，剥片15点，石核１点で，総重量は113.7gである。これらはＣ－40・41，Ｄ－39・40に分布している。分布の主体はＤ－40にあるが，石核は単体でＣ－41から出土した。石材は灰

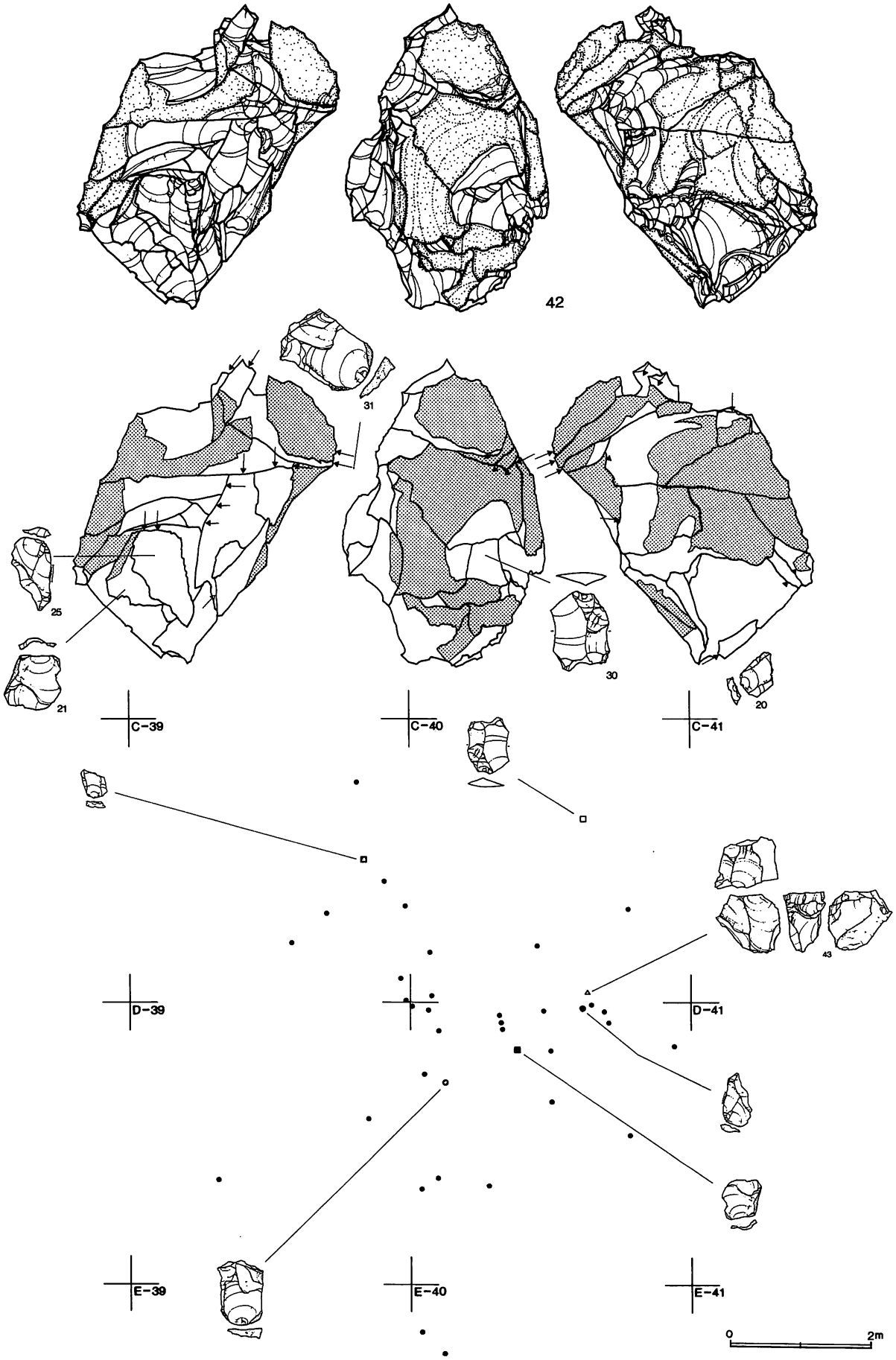
図Ⅲ－137　母岩別資料 2



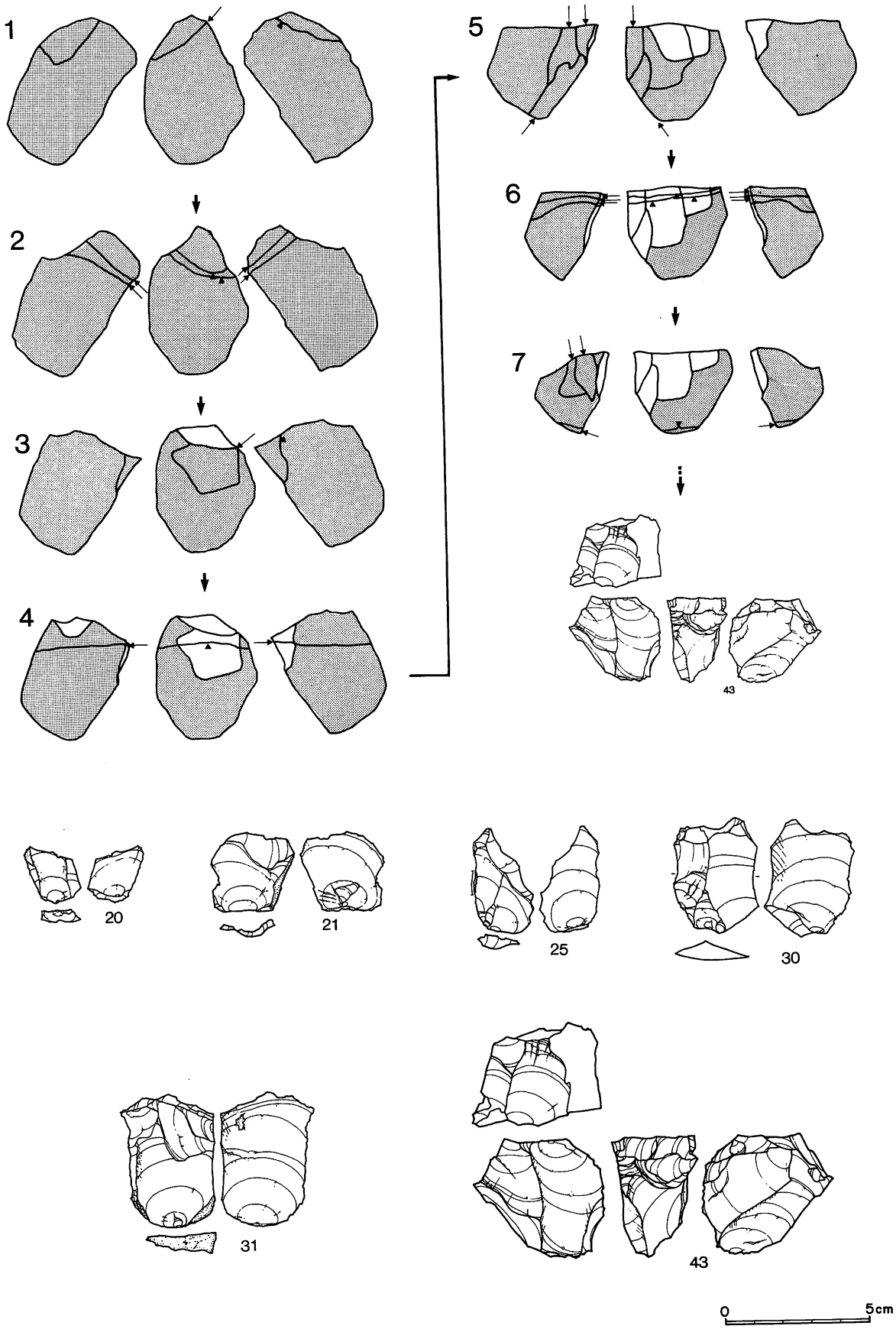
図Ⅲ－138　母岩別資料 8



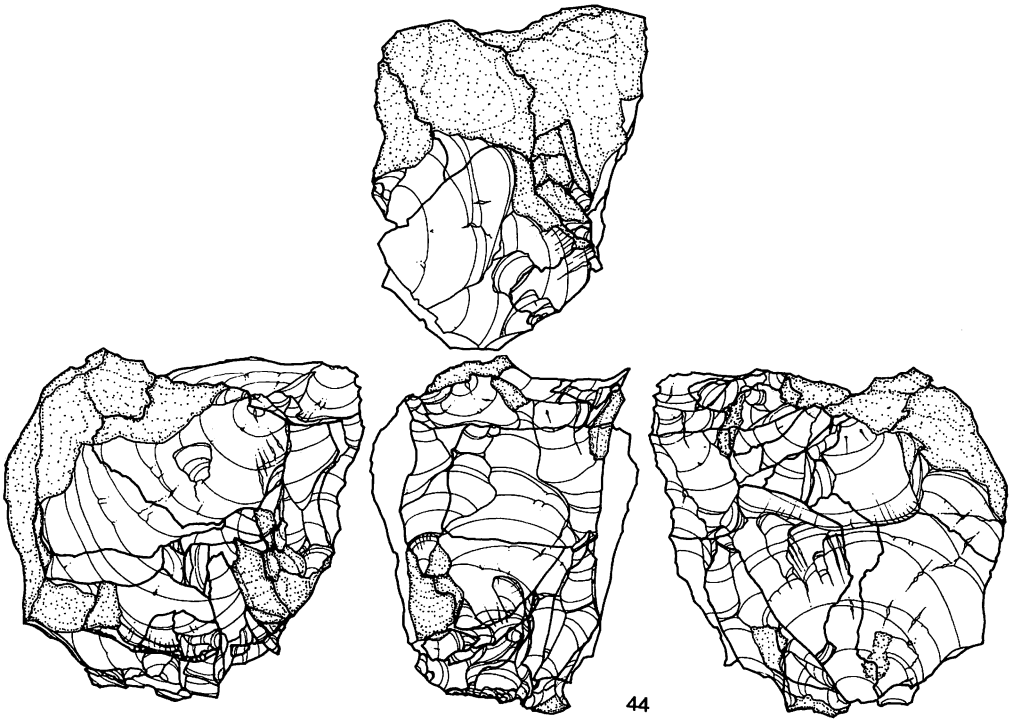
図Ⅲ－139　母岩別資料７

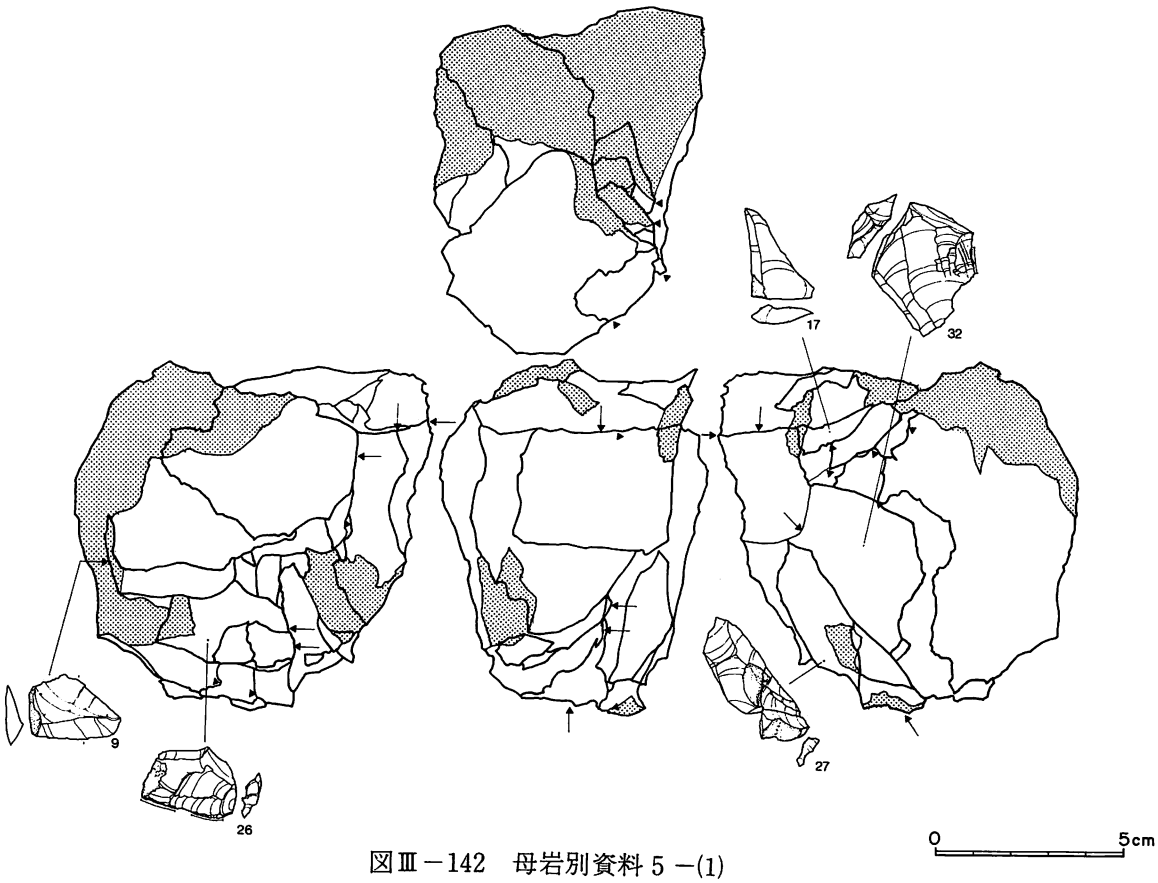


図Ⅲ－140　母岩別資料１－(1)

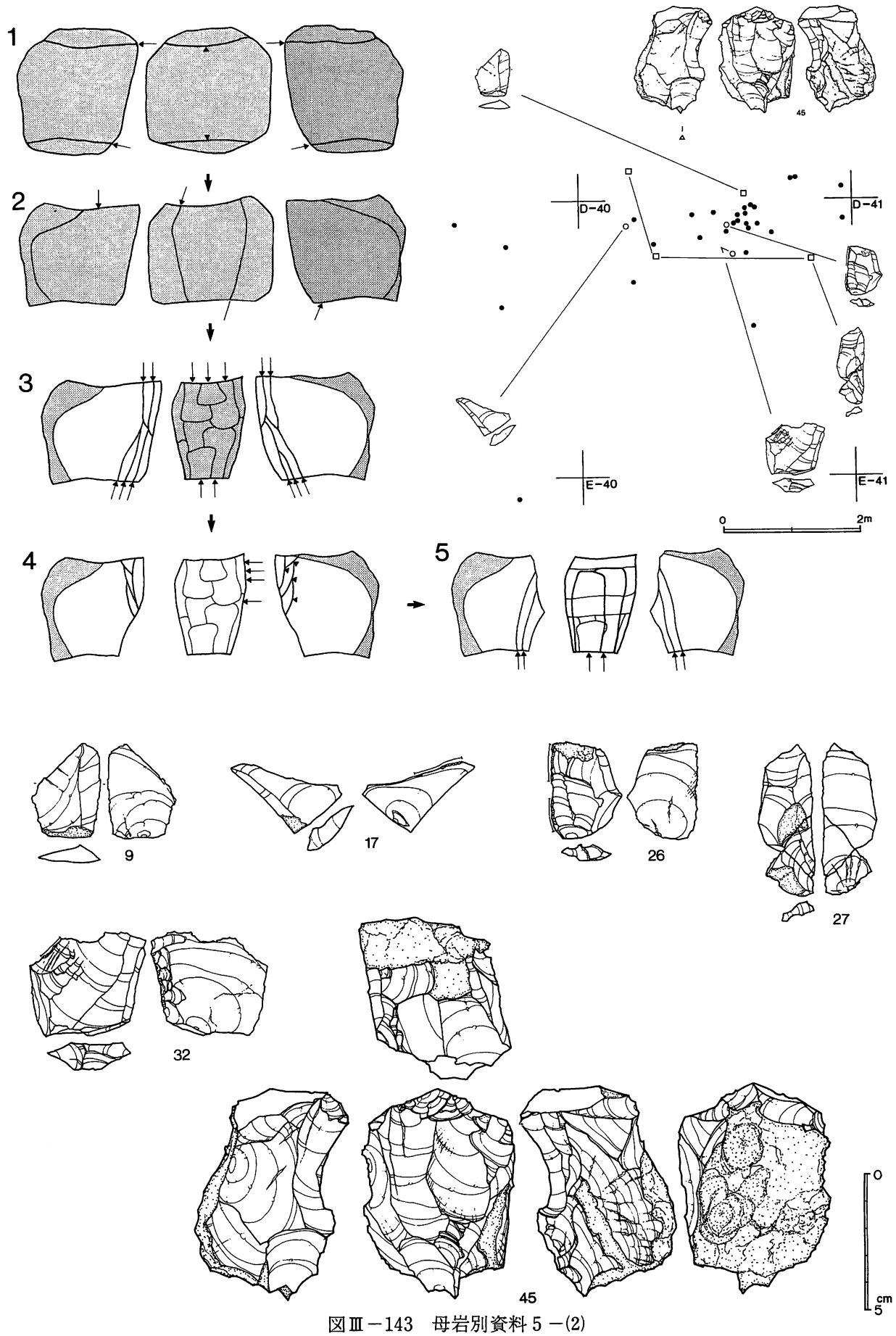


図Ⅲ－141　母岩別資料１－(2)





図Ⅲ－142　母岩別資料５－(1)



図Ⅲ－143　母岩別資料５－(2)

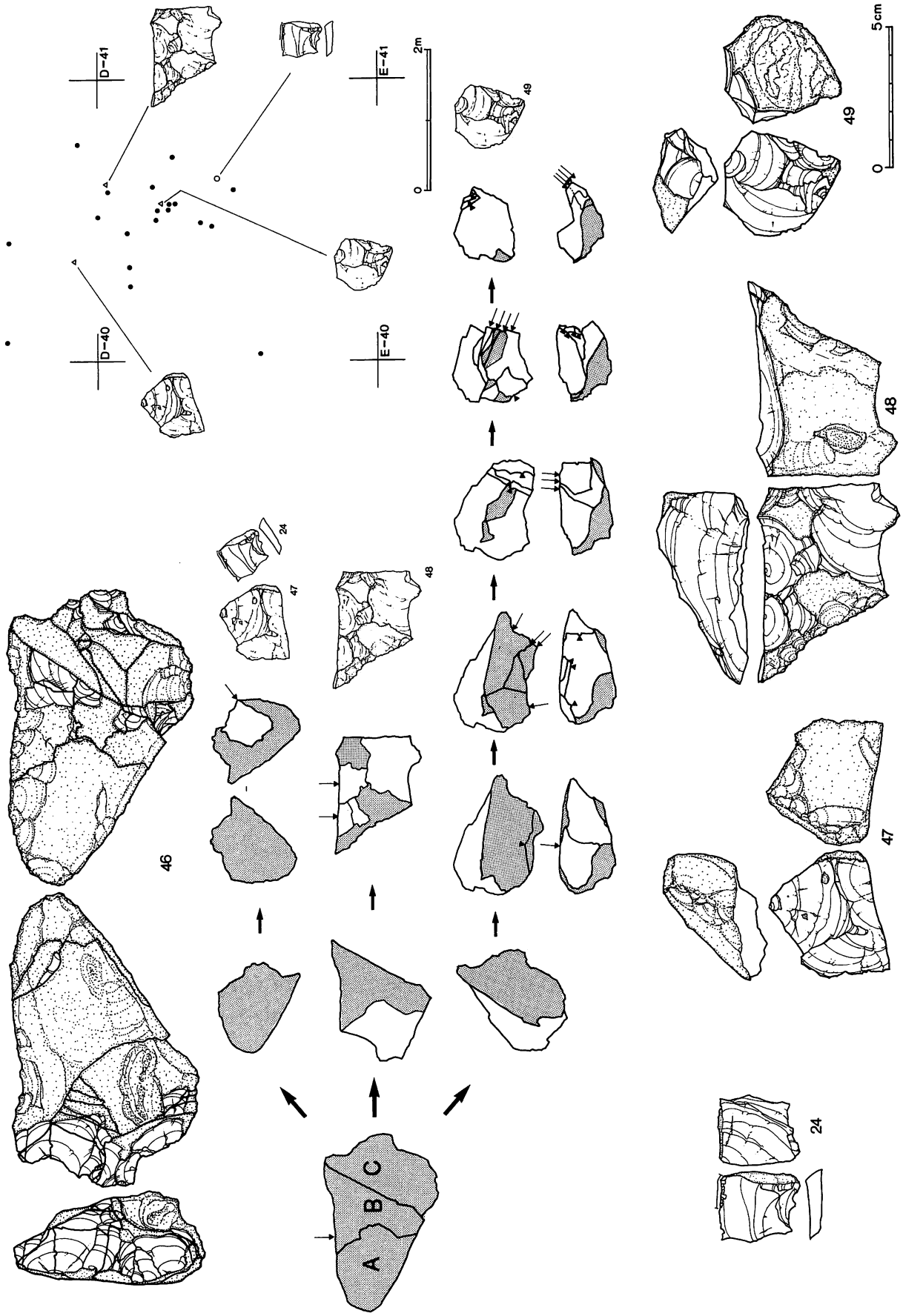
色のめのう質頁岩で礫皮面には珪藻質部がみられる。原材の形状は偏平礫，剥片剥離がおこなわれている面はポジティヴな面で，この面は茶色に変色していることから古い段階で形成されたものと考えられる。接合図中上縁では背面の礫皮面に打面を設定し，打点を横に移動させながら連続して8個の剥片が剥取されている。それらのうちにはナイフ様石器が2個含まれている。下縁では1回の剥離であらかじめ打面を作出し，3個の剥片が剥取されている。

母岩別資料2　37は母岩別資料2の最終接合図である。8点が接合しており，その内訳はナイフ様石器2点，剥片5点，石核1点で，総重量は304.2gである。これらはC－39･40，に分布し，その分布状態はまばらで集中する箇所はみられない。石材はめのう質頁岩。礫皮面は黄茶褐色で珪藻質部が部分的にみられ，内面は鼠色を基調に白色部が縞状にまじっている。原材は角礫状をなすものと考えられる。接合状態から復元される剥離工程は，平坦な礫皮面からの剥片剥離→頭部調整→剥片剥離→原材からの分割→下縁礫皮面への打面転位→分割面側への剥片剥離の順に進行している。頭部調整の剥離は幅広かつ浅いもので，打面側から見ると縁辺が直線的に整形されている。原材からの分割は剥離面の切り合いがないため明かではないが最初の剥片剥離よりも先におこなわれた可能性がある。ナイフ様石器は接合図正面と分割面に1点ずつ接合している。

母岩別資料8　39は母岩別資料8の最終接合図である。15点が接合しており，その内訳はナイフ様石器1点，剥片13点，石核1点で総重量は228.9gである。このうちナイフ様石器と剥片12点はグリッドポイントD－40を中心に半径約2mの範囲から出土したが，石核はこの分布域からはずれている。斜線スクリーントーン部の剥片は剥離されたあとに折れ，さらに火熱をうけたものである。石材は白色のめのう質頁岩で，内部には空洞がみられる。原材の形状は角礫。剥片剥離は平坦な礫皮面ないし剥離面から求心状におこなわれているが，図中上面の礫皮面からの剥片剥離の直前には，母岩別資料2と同様の頭部調整が行なわれている。

母岩別資料7　41は母岩別資料7の最終接合図である。34点が接合しており，その内訳はナイフ様石器2点，ナイフ様剥片2点，剥片30点で総重量は293.5gである。これらはC－39･40，D－39･40に分布している。このうちC－40，D－40からは29点が出土した。剥片のうち5点は接合作業の結果，1個の剥片が剥離後火熱をうけ破砕したものであることがわかった。石材は灰白色のめのう質頁岩で礫皮面には珪藻質部が部分的にみられる。原材は断面が三角形をなす角礫。最終接合図は連続的な打点の移動が観察される面を正面にみたものである。剥片剥離はまず正面図中左上で礫皮面，剥離面を打面とし打点を中心部に移動させながら連続的におこなわれる。ここで1，3のナイフ様剥片が得られている。つぎにほぼ直角をなす原材縁辺に打点を移動させ背面の礫皮面を除去し，再び正面にもどり右上部で剥片を剥取したものと考えられるが，この部分の剥片は出土していない。つぎに正面の稜線部から打点を後退もしくはジグザグ状に移動させながら剥片を剥取し，16・29のナイフ様石器を得ている。下部中央の空白が残核に相当するが，出土しておらず遺跡外に持ち出されたものと考えられる。

母岩別資料1　42は母岩別資料1の最終接合図である。48点が接合しており，その内訳はナイフ様石器2点，ナイフ様剥片3点，剥片42点，石核1点で，総重量は438.5gである。これらはC－39･40，D－39･40，E－40から出土しており今回抽出された母岩別資料のなかで最も分布域



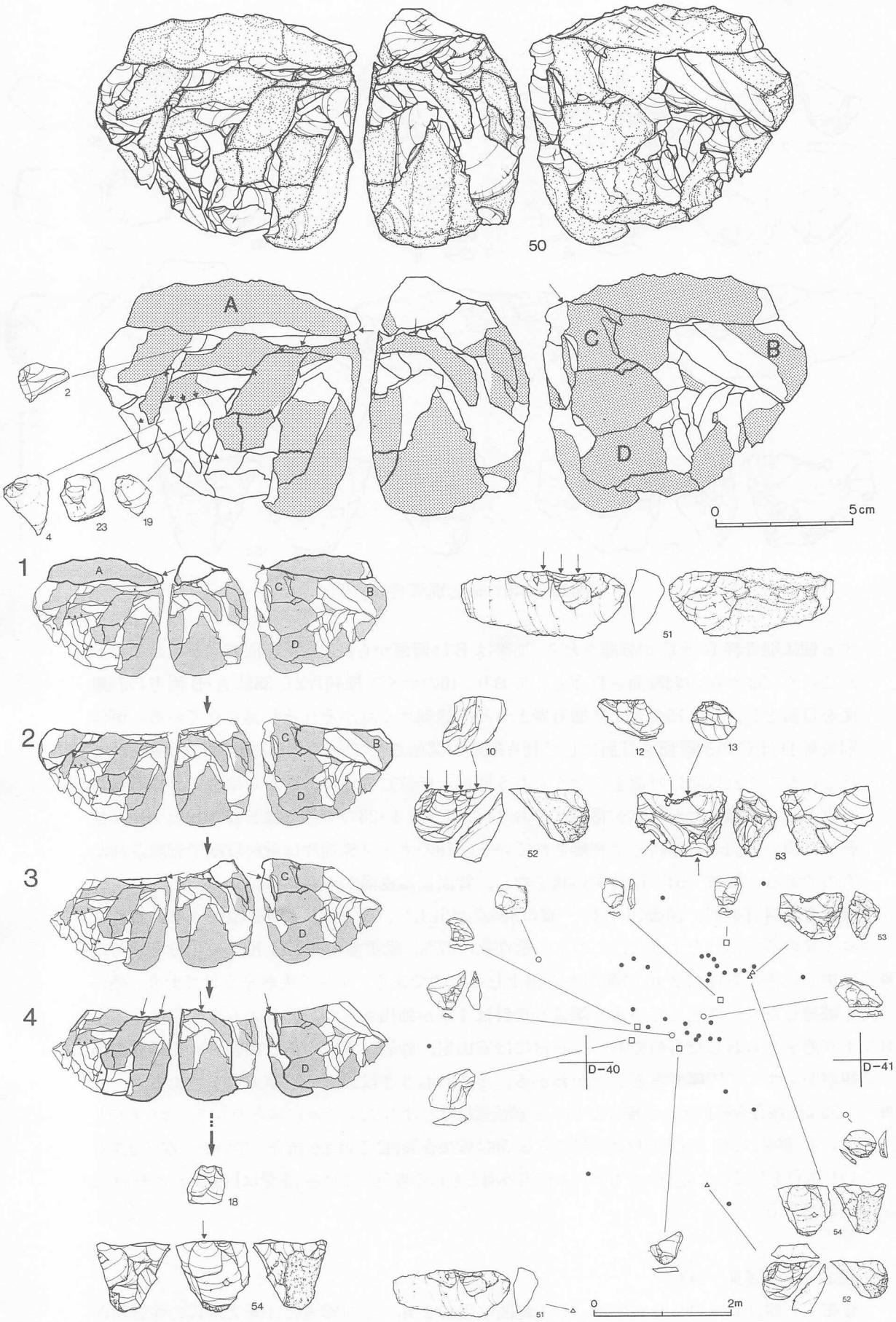
図Ⅲ－144　母岩別資料３

が広い。グリッド別の出土点数は上記の順に8点，6点，2点，21点，1点である。剥片には剥離後火熱をうけたものと，剥離後折れ，さらに火熱をうけたものがそれぞれ2点ある。石材は灰色のめのう質頁岩。原材の形は柱状の角礫である。剥片剥離の概略は図－141に示した。1から4までは打面と作業面を交互に変え剥片を剥取している。5：両接打面から剥離がおこなわれている。後者はバルブ部分が欠損しているため打面の詳細は不明である。6・7：1～4と同じ様に打面を交互に変えての剥片剥離がおこなわれている。7の剥離で25のナイフ様石器と21のナイフ様剥片が得られている。このあと石核を転がすようにして縦長の剥片を剥取して，全工程を終了している。43はその残核でサイコロ状をなす。

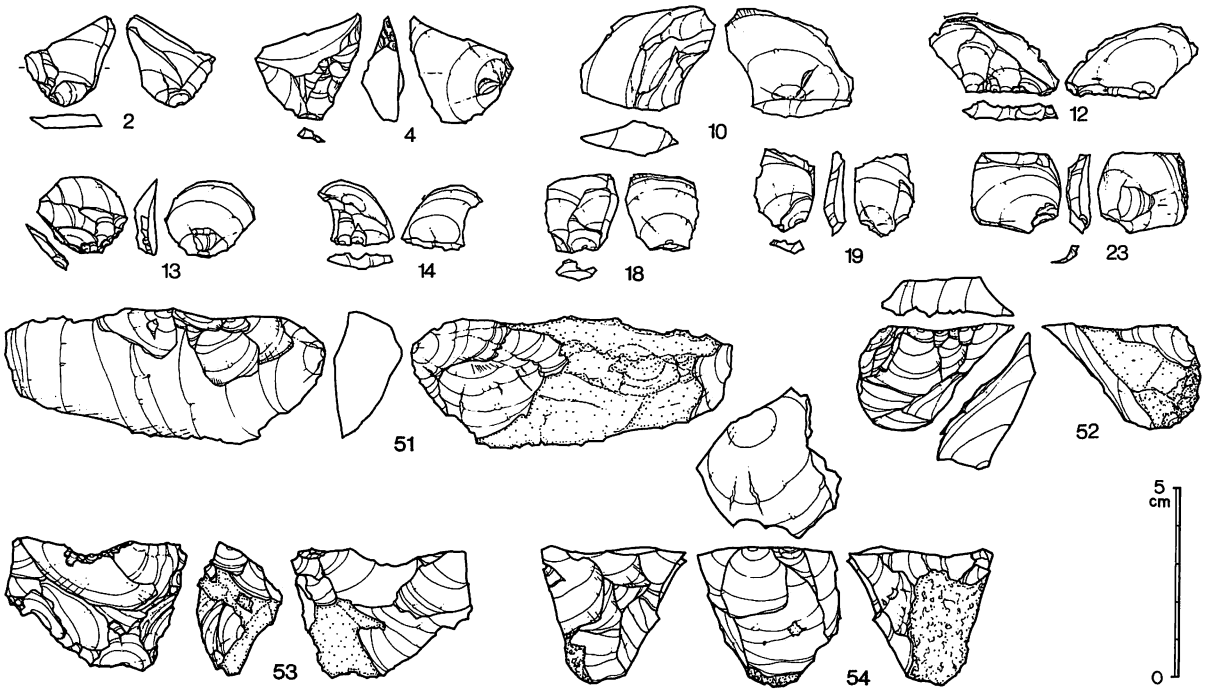
母岩別資料5　44は母岩別資料5の最終接合図である。37点が接合しており，その内訳はナイフ様石器4点，ナイフ様剥片1点，剥片32点，石核1点で，総重量は569.9gをはかる。これらはC－40，D－39・40，E－39から出土している。グリッド別の出土点数は上記の順に6点，3点，27点，1点である。平面分布をみるとD－40半径約1mの範囲に集中する傾向がうかがえる。石材はめのう質頁岩。礫皮面は茶色で凹凸が著しい。内面はくすんだ灰色で中心部には空洞がみられる。原材の形状は角礫と考えられる。44は最初の打面作出剥片の打点側を正面においている。剥片剥離工程の概略を以下に述べる。1・2：分割または剥離によって，石核の形状を直方体様に整える段階で，この分割面・剥離面が3以下の打面になっている。3・4：両接打面からの剥片剥離。3は上下両打面から正面の礫皮面へ，4は2で作出された右打面から3の剥離面へそれぞれ剥片がとられている。接合状態から3と4と同じ方向の打面転位→剥片剥離はこのあと少なくとも3回おこなわれ，5以前には背面の礫皮面を打面として側面へ剥片を剥取していることがわかった。図示したナイフ様石器，ナイフ様剥片はすべて3と4の段階のものである。5：最終剥離。打面を厚く残した縦長剥片が2枚取られている。45は残核の状態で，背面に礫皮面をのこす柱状の形態になっている。このように打面を交互に変えて剥片剥離がおこなわれる点，両接打面をもつ点で母岩別資料1と類似している。

母岩別資料3　46は母岩別資料3の最終接合図である。27点が接合しており，その内訳はナイフ様石器1点，剥片24点，石核3点で，総重量は212.5gである。石材は灰色のめのう質頁岩。原材の形状は偏平礫である。剥片剥離は原材を3分割したあと，個別におこなわれている。Aは原材の端部にあたるもので礫面を打面としたナイフ様石器1点が，BはCとの分割面を打面とした剥片2点がそれぞれ接合している。Cは礫面ないし前段階の剥離面を打面とし剥離模式図にみるように少なくとも5回，打面と作業面を変えながら20個の剥片を得ている。

母岩別資料10　50は母岩別資料10の最終接合図である。48点が接合しており，その内訳はナイフ様石器4点，ナイフ様剥片5点，剥片35点，石核4点で，総重量は321.8gをはかる。これらはC－39・40，D－39・40に分布している。このうちC－40から38点が出土しており分布の偏りがみられる。石核のうち36と37はこの集中域から2m以上はなれて出土している。剥片のなかには剥離後火熱をうけたものが2点ある。石材は灰白色のめのう質頁岩で，礫皮面には珪藻質部がみられる。原材の形状は円礫。石核には剥片を素材とし，その腹面で剥片剥離作業をおこなうもの（51，52，53）と，打面を次々に転位しながら剥片を剥取するもの（54）がある。剥片剥離は前者の石核素材剥片の獲得から開始されている。まず原材を長軸方向に縦割り，51を石核とする個体別資料Aが剥離されている。剥離面の観察から珪藻質の礫皮面を打面として3個の剥片が取られていることがわかる。次に52，53をそれぞれ石核と



図Ⅲ－145　母岩別資料10－(1)



図Ⅲ－146　母岩別資料10－(2)

する個体別資料ＢとＣが剥離される。加撃はＢは側面から，ＣはＡと同方向からおこなわれている。52はＡの剥離面を打面としており，10のナイフ様剥片が，38はＡ･Ｂ両方の剥離面を打面とし，14，15のナイフ様石器とナイフ様剥片１点がそれぞれ得られている。個体別資料ＤはＣの剥離面を打面にして剥片剥離が開始されている。剥片剥離の順序は明らかではないが，これ以降は打面を少なくとも５回以上転位している。Ｄからはナイフ様石器が２点とナイフ様剥片が３点が得られており，このうち４･23のナイフ様石器と19のナイフ様剥片は同一打面から連続して剥離されている。18のナイフ様剥片は最終段階で剥離されたものである。残核（54）は角すい状をなし，背面に礫皮面がみられる。

礫接合資料（図147，図版70－２）　礫は534点が出土し，総重量は1,0623ｇである。石器ブロックの所でふれたように，このうち総点数の97%，総重量の96%はKSb－１分布域のほぼ中心にあたる径約２ｍの範囲から出土したものである。すべて火熱をうけており，細かく破砕したり，変色している。礫接合資料は４個が抽出された。図47の右上の図はその出土状態をあらわしたものである。石材には安山岩，砂岩，頁岩があり接合資料や礫皮面の観察からすべて円礫であることがわかる。そのおおきさは最大でも拳大以下である。

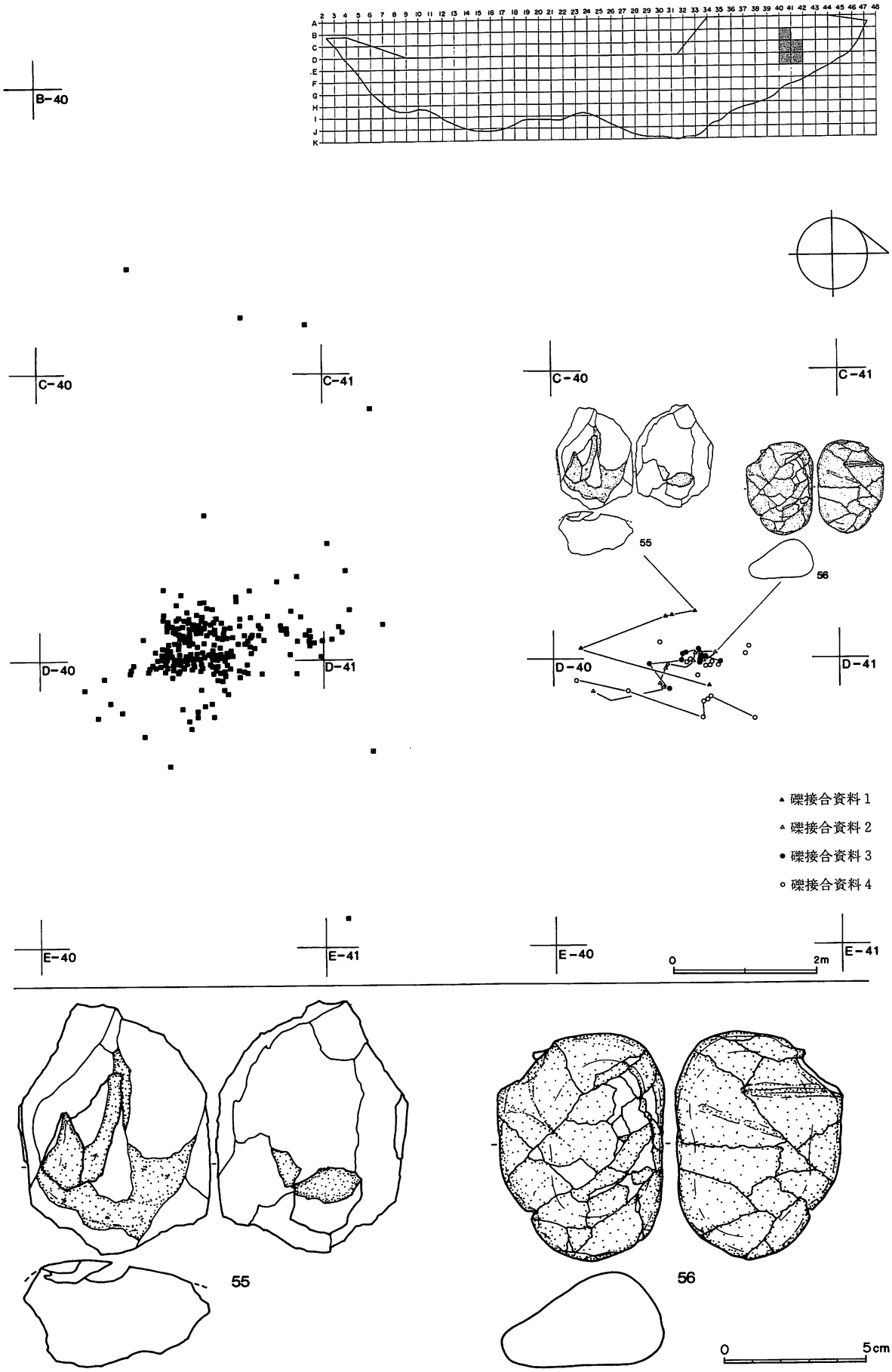
火熱破砕

石　　材

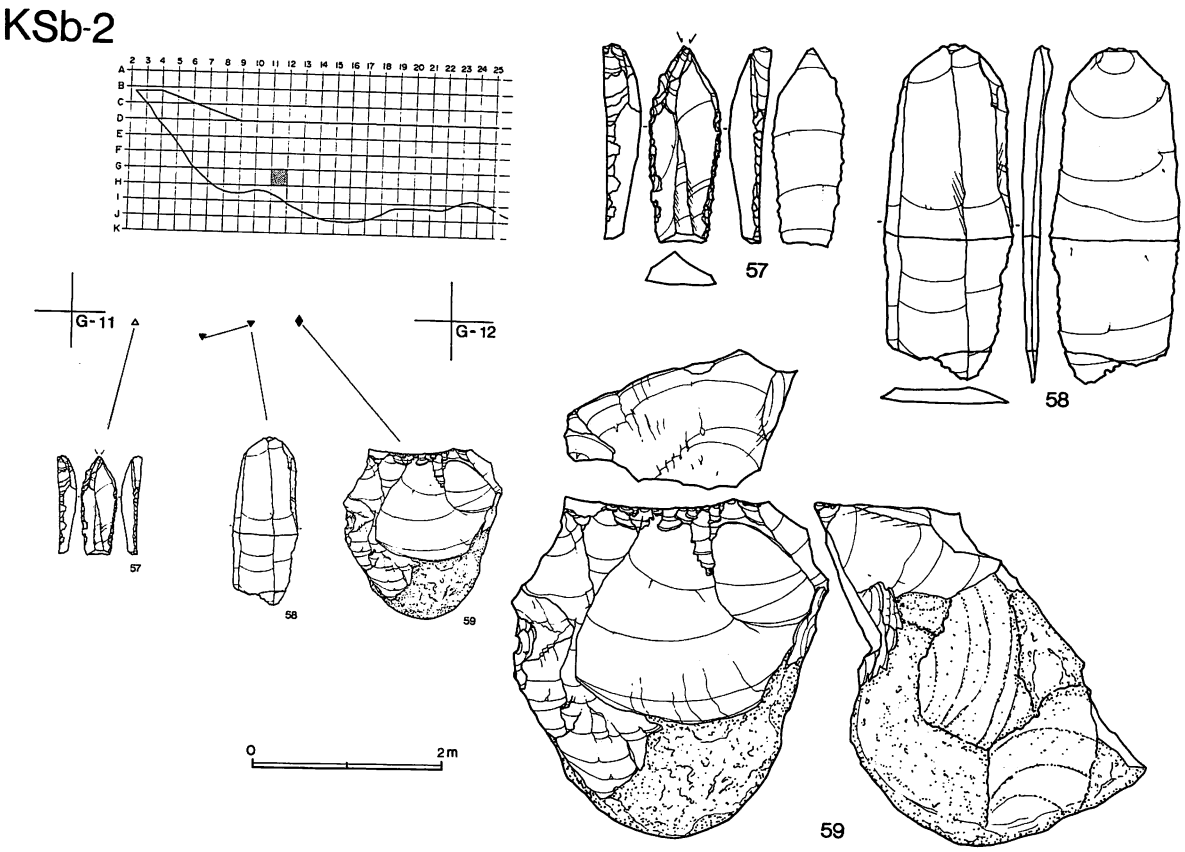
変　　色　55は礫接合資料1で6点が接合している。礫皮面ははじけとび，わずかに残るのみで，赤く変色している。重量は243.7gで石材は砂岩である。56は礫接合資料2で30点が接合している。本来は黒ないし灰色をしていたものとおもわれるが内外面とも白く変色している。重量は199.2ｇで石材は頁岩である。

KSb－２（図Ⅲ－148）

分布　石器はＧ－11に分布する。その範囲は径約２ｍ。この周辺には縄文時代の住居跡が集中しており，それらによってブロックが破壊されている可能性がある。


B-40
C-40
C-41
D-40
D-41
E-40
E-41
55
56
▲ 礫接合資料 1
△ 礫接合資料 2
● 礫接合資料 3
○ 礫接合資料 4
0
2m
0
5cm

図Ⅲ－147　礫接合資料



図Ⅲ－148　KSb－2

石器　4点が出土した。その内訳は彫器1点，石刃2点，石核1点で，総重量は488.9gである。57は先端で交差する樋状剥離がある彫器。樋状剥離は右側に2面，左側に4面ある。58は石刃，59は石核。原材の形状は円礫。打面は単剥離面で幅広の剥片が剥取されており末端ではヒンジーフラクチャーとなっている。背面は節理面で割れている。

石材　4点とも珪質分の多い頁岩である。この種の石材は縄文時代のものとは異なる。

接合　器体中央で折れた石刃2点が接合している。　（石川　朗）

Ⅳ　各種分析，同定

1　液体シンチレーション炭素年代測定結果

山　田　　治
（京都産業大学）

測定番号 KSU－1653	KH－5	（No.73，74）木炭	3,950±60y.B.P.
測定番号 KSU－1654	KH－11	（No.70）木炭	3,920±35y.B.P.
測定番号 KSU－1655	KH－14	（No.34）木炭	3,900±40y.B.P.
測定番号 KSU－1656	KH－16	（No.252）木炭	4,160±35y.B.P.
測定番号 KSU－1657	KH－18	木炭	3,930±40y.B.P.

※ ^{14}C の半減期は5,568年，y.B.P.は西暦1950年よりさかのぼる年数

2　桔梗2遺跡の火山灰について

1　はじめに

本遺跡で認められる火山灰は，粘土質の更新世降下火山灰（いわゆる「ローム」。以下，この語を使用。）と完新世降下火山灰である。ここでは，これらの火山灰について，火山灰の対比や遺物・遺構の編年の基礎資料とするために，主に鉱物組成上の特徴を記載する。ロームについては粒度分析を合わせて行い，旧石器の産出層準を検討した。

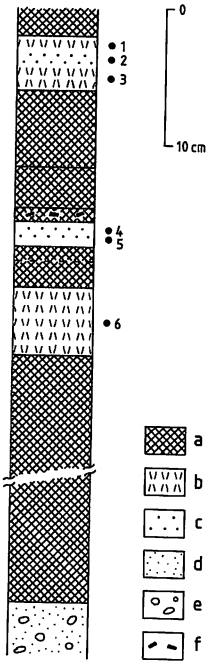
目　的

グリッドC－41におけるトレンチ断面の観察では，ローム層は明褐色・黄褐色を呈し，層厚約1mである。上部はやや硬く褐色味が強い。下半部は軟かく橙色味が強い。ローム層の直下は段丘堆積物の砂層である。この砂は，上位のローム層中に塊状に産出することがあり，かなり上方にも認められる。ローム層は層厚の変化が大きく，概して，現地表面の傾斜方向へ薄くなるようである。

擾　乱

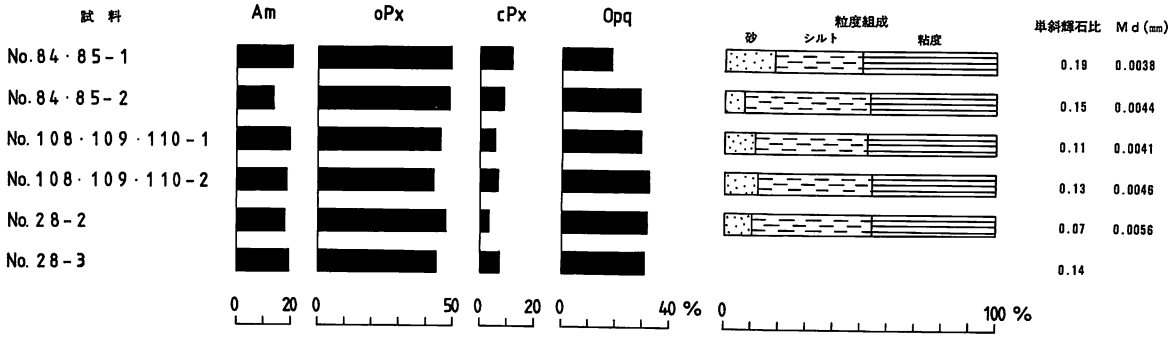
ローム層は，堆積後かなり擾乱を受けていると思われるので，ローム試料の採取は遺物直下に限定し，これを旧石器産出層準の検討試料とした。

完新世の降下火山灰は，表層部の黒ボク土中にレンズ状・薄層を成して産出する（図Ⅳ－1）。下位の火山灰は黄褐色・褐色・淡黄色のシルト質火山灰である。層厚5cm±。中位の火山灰はにぶい黄褐色の砂質火山灰である。層厚1.5－2cm。下半部は中粒砂質，上半部は細粒砂質である。上位の火山灰は灰白色の火山灰で，三つのフォールユニットから成る。下位から上位へ，シルト質→細粒砂質→シルト質で，これらの間には堆積間隙は認められない。各フォールユニットの層厚は1－2cmである。完新世の火山灰は，すべて縄文時代・続縄文時代の遺物・遺構の上位に堆積し，これらを直接に覆うことはない。



a：黒～赤黒色腐植土（黒ボク土）　b：シルト質降下火山灰　c：砂質降下火山灰　d：砂　e：礫　f：炭化植物片

図Ⅳ－1
桔梗2遺跡の完新世火山灰層序（グリッドI－29）



Am：角閃石　oPx：斜方輝石　cPx：単斜輝石　Opq：不透明鉱物（鉄鉱物）　Md(mm)：中央粒径(mm)

図Ⅳ－2　桔梗2遺跡のロームの重鉱物組成と粒度組成（グリッドD－40）

2　試料の処理

ロームについては，グリッドD－40の遺物№28（フレイク），№84・85（フレイク），及び№108・109（石核）・110（フレイク）の直下から，2.5cm間隔の連続した試料を採取した。完新世火山灰については，グリッドⅠ－29の地質断面から上・中・下位の火山灰試料を採取した。採取試料は検鏡の他，ロームについては粒度分析に供した。

手　順

検鏡用試料は次の手順で処理した。水洗→6％ H_2O_2・10％ HCl 処理→水洗→乾燥→篩分け→粒径1/4－1/8mm についてカナダバルサムを封入剤としてプレパラートを作成→偏光顕微鏡下で，ロームについては重鉱物を250粒前後，完新世火山灰については全鉱物を350粒前後検鏡→各鉱物量比を粒数％で表わす。

粒度分析は，砂分（粒径2－1/16mm）以上を篩分け法，泥質分（粒径1/16mm＞）をピペット法で行った。ピペットによる吸い上げは粒径1/256mm までである。

一部の試料については，浸液法による火山ガラスの屈折率を測定した。また，火山ガラスについては，以下のように形態分類を行い，各型の量比を粒数％で表わした。

火山ガラスの形態

B型：気泡が微細で粒子全体の形状が漿果状。

F型：扁平で，気泡が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

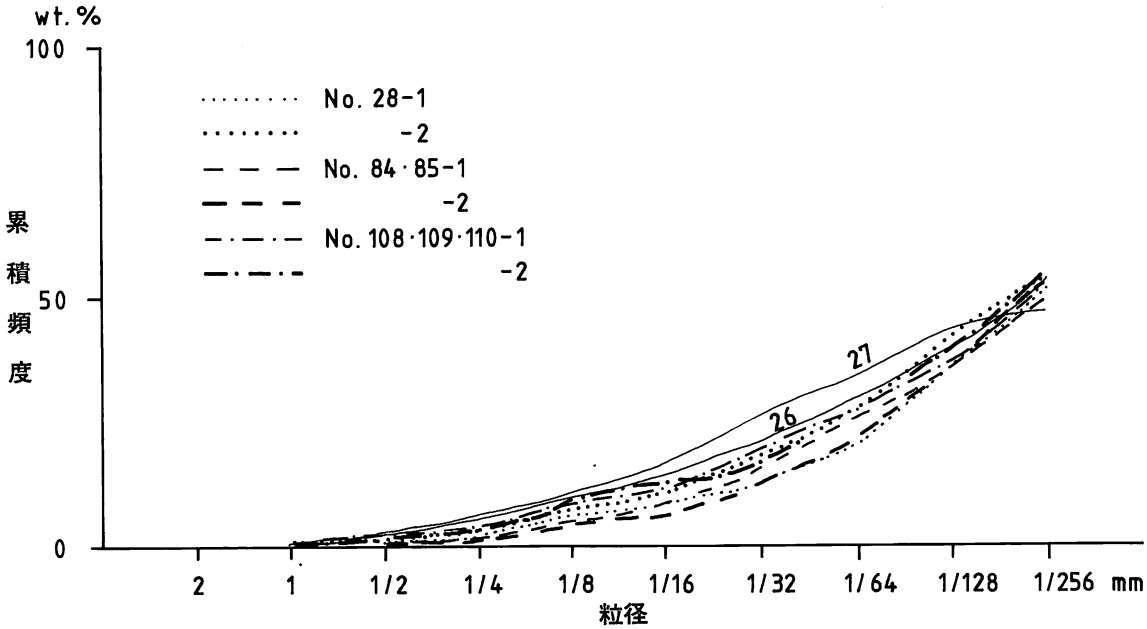
L－C型：気泡が破砕し，泡壁が ridge をなして直線～曲線状に走るもの。

M型：気泡と泡壁がつくる模様が網目状にみえるもの。

N型：扁平～塊状で，針状の気泡・条線が認められるもの。針状の微少結晶を包有することが多い。

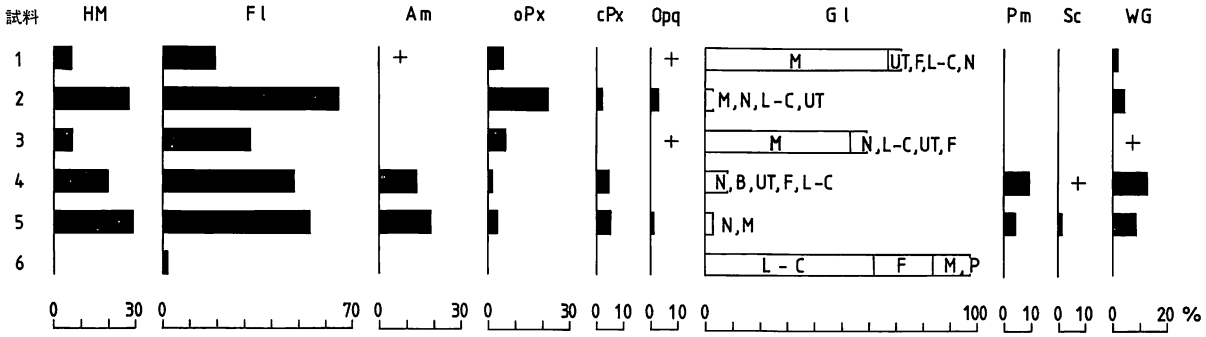
P型：薄い平板状。

UT：未分類。



（26・27は石川1遺跡のローム層標準柱状図試料4－26・4－27）

図Ⅳ－3　桔梗2遺跡のロームの粒度累積曲線



HM：重鉱物　Fl：長石　Am：角閃石　oPx：斜方輝石　cPx：単斜輝石　Opq：不透明鉱物（鉄鉱物）
Gl：火山ガラス（M、F等は火山ガラスの型。本文参照。）　Pm：軽石　Sc：スコリア　WG：風化鉱物粒　＋：1％>

図Ⅳ－4　桔梗2遺跡の完新世火山灰の鉱物組成

3　鉱物組成・粒度組成上の特徴

(1)　ロ　ー　ム

重鉱物組成を図Ⅳ－2に示す。試料には，上部から下部へ，－1，－2，－3の番号を添付してある。ただし，No.28－1は遺物の側方に位置する試料で粒度組成のみ(図Ⅳ－3)，No.28－3は重鉱物組成のみを示している。重鉱物量は，各試料とも斜方輝石に富み，不透明鉱物（鉄鉱物）がこれに次いでいる。単斜輝石は少なく，単斜輝石比（単斜輝石量／全輝石量）は0.07－0.19である。

斜方輝石

粒度組成を図Ⅳ－2及び図Ⅳ－3に示す。各試料はシルト質または粘土質で，砂分を8－20%含んでいる。No.84・85－1は砂分が比較的多い。中央粒径Md (mm) は0.0038－0.0056である。

(2)　完新世火山灰

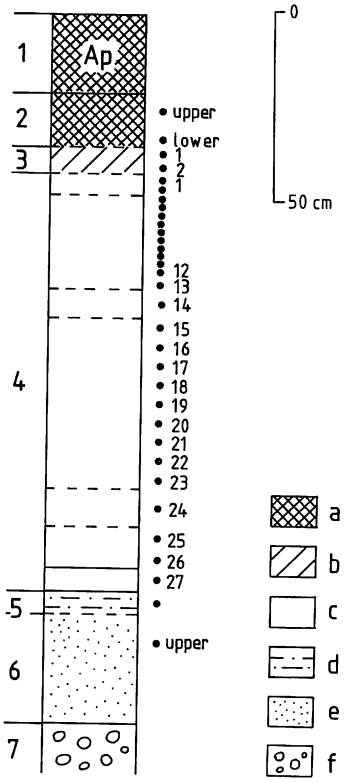
鉱物組成を図Ⅳ－4に示す。下位の火山灰（試料6）は，ほとんど火山ガラスから成り，重鉱物を含んでいない。アルカリ長石を僅量含む。火山ガラスは，L－C型が多く，F型・M型・P型を伴う。火山ガラスの屈折率は1.505－1.521である。

火山ガラス

斜長石

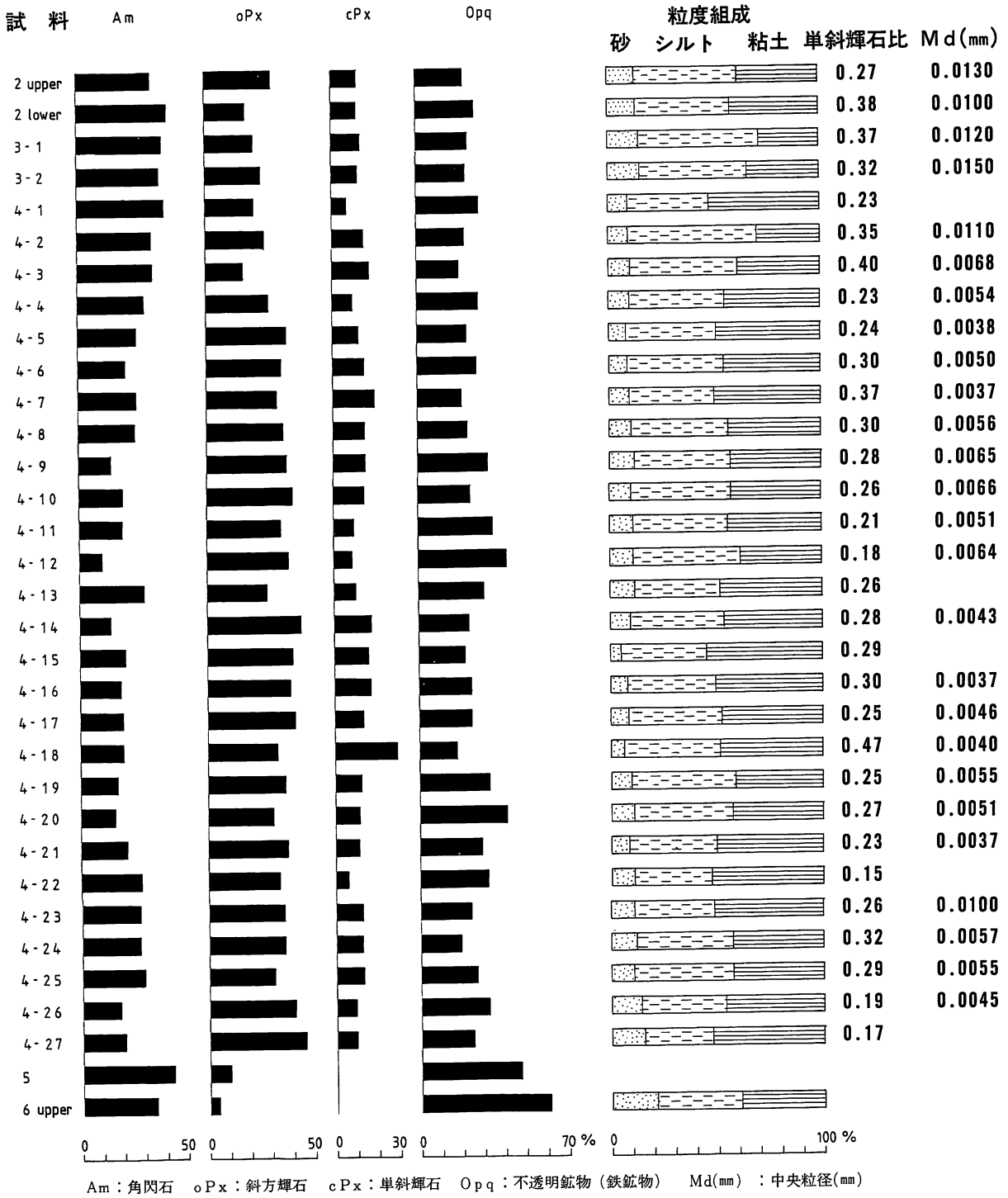
中位の火山灰（試料4・5）は主に斜長石から成る。火山ガラスは少ない。下半部（試料5）の重鉱物量は，角閃石＞単斜輝石＞斜方輝石＞不透明鉱物。単斜輝石比0.58。上半部(試料4）の重鉱物量は，角閃石＞単斜輝石＞斜方輝石。単斜輝石比0.70。上・下半部ともに，軽石・スコリアを含んでいる。

上位の火山灰は，シルト質部で火山ガラス，砂質部で斜長石に富む。下部のフォールユニット（試料3）では，主に火山ガラスと斜長石から成る。火山ガラスはほとんどがM型で，F型・L－C型・N型を僅量含む。重鉱物は少なく，斜方輝石≫不透明鉱物である。中部のフォールユニット（試料2）では，主に斜長石から成る。火山ガラスは少ない。重鉱物量は，斜



a：黒～赤黒色腐植土（黒ボク土）
b：暗褐色腐植土　c：ローム　d：シルト質粘土　e：砂　f：礫

図Ⅳ－5　石川1遺跡のローム層標準柱状図

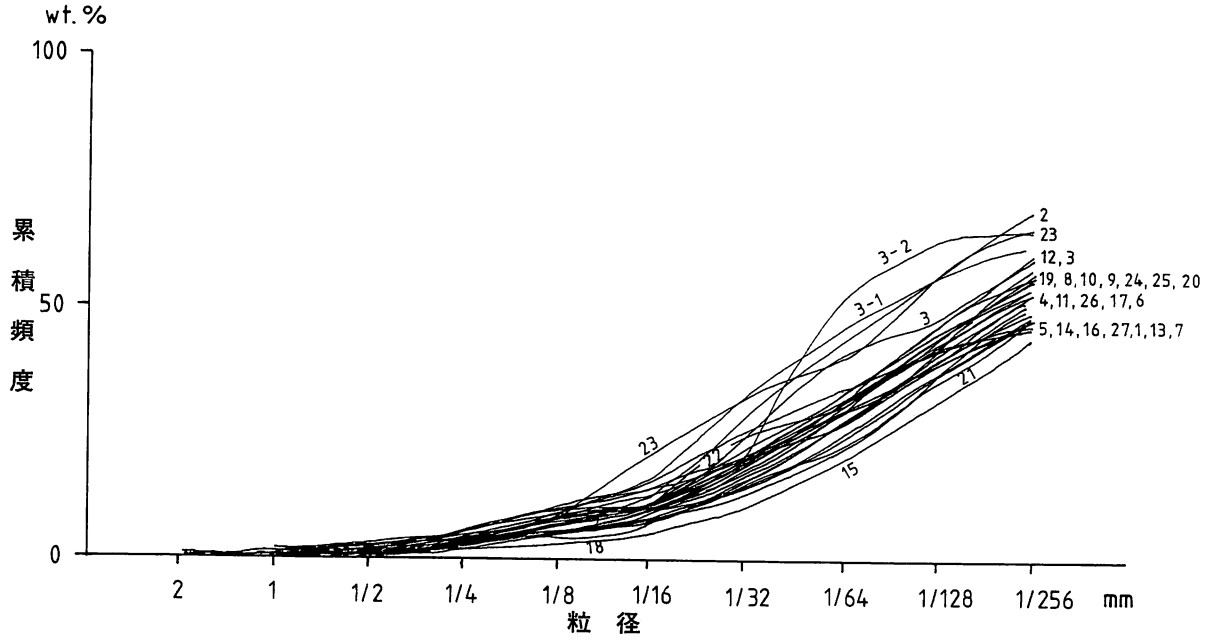


図Ⅳ－6　石川1遺跡のローム層標準柱状図試料の重鉱物組成と粒度組成

方輝石≫不透明鉱物＞単斜輝石。単斜輝石比0.09。上部のフォールユニット（試料1）では，主に火山ガラスから成る。火山ガラスはほとんどがM型で，F型・L－C型・N型を僅量含む。重鉱物は少なく，斜方輝石≫不透明鉱物≒角閃石。火山ガラスの屈折率は，各フォールユニットともに，1.500－1.505である。

火山灰の対比

以上の完新世の火山灰のうち，下位の火山灰は，特異な鉱物組成，火山ガラスの形態と屈折率，及び層準から，「白頭山―苫小牧火山灰」（町田ほか，1981；町田ほか，1984）に対比される。上位の火山灰は，同様の観点から，湯の里3遺跡の「Yn－b火山灰」，札苅遺



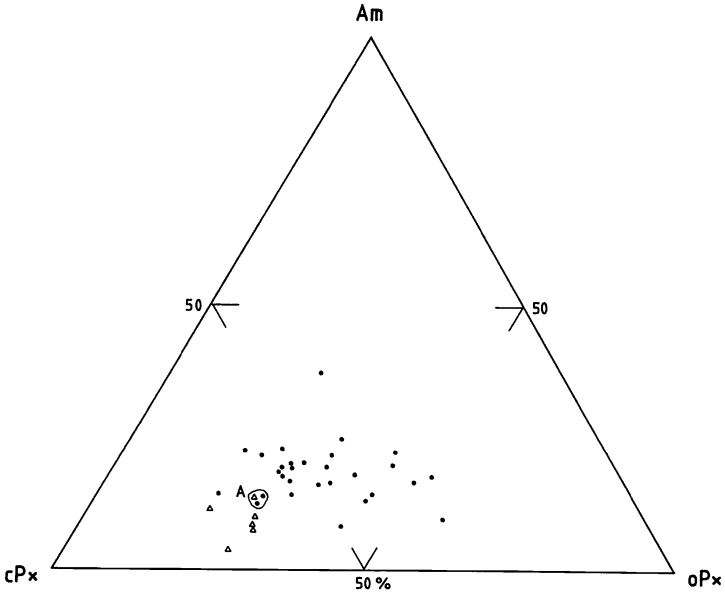
図Ⅳ－7　石川1遺跡のローム層標準柱状図試料の粒度累積曲線

跡の「St－a火山灰」，建川2遺跡と新道4遺跡の「Sm－a」，及び矢不来2遺跡の「Yf－a」(㈶北海道埋蔵文化財センター，1986a.b・1987a.b）に対比される。ただし，これらの火山灰と各フォールユニットとの関係は未詳である。

4　旧石器産出層準の検討

旧石器はローム層から産出し，その産出層準を明らかにすることは，遺物の編年ばかりではなく，函館周辺の第四紀地史を編む上でも重要である。

産出層準を検討する一つの方法は，ローム層断面から連続した柱状試料を採取し，鉱物組成・粒度組成・鉱物の屈折率等を明らかにして，これらと遺物の垂直分布との関係を調べることである。ただし，本遺跡のローム層はかなりの擾乱を受けていると思われる（前述）ので，同じ段丘面上に立地している，隣接する石川1遺跡のローム層を標準とし(図Ⅳ－5)，これと本遺跡の遺物直下のローム試料とを比較した(石川1遺跡におけるロームの特徴を，図Ⅳ－5～7に示す)。



Ａｍ：角閃石　ｏＰｘ：斜方輝石　ｃＰｘ：単斜輝石　●：石川１遺跡のローム層標準柱状図試料　△：桔梗２遺跡のローム試料　Ａ：４－26・４－27，No.84・85－１

図Ⅳ－８　桔梗２遺跡のロームの角閃石―斜方輝石―単斜輝石量比

本遺跡における遺物直下のロームの角閃石－斜方輝石－単斜輝石量比を図Ⅳ－8に示す。この図において，ほぼ一致するのはＡの範囲にある三試料である。この範囲には，本遺跡のNo.84・85－１，石川１遺跡の４－26・４－27が含まれる。この三試料の粒度累積曲線を比較すると，No.84・85－１と４－26は概ね一致する(図

Ⅳ－3)。この二試料は，ともに単斜輝石比0.19，比較的多くの砂分を含み，互いに対比されるものであろう。

一方，No.84・85－1が石川1遺跡の4－26に対比されるとすれば，No.84・85－1の層準は，図Ⅳ－5においてローム層の基底から上方10cmの位置である。しかし，本遺跡の遺物は，ローム層基底附近ではなく，現地表面に近いローム層上部から産出する。このことは，本遺跡のローム層が擾乱を受けているという推定を支持する。遺物直下の試料自体も鉱物量比はあまり一致しない（図Ⅳ－8）。

ローム層の擾乱

遺物の垂直分布は，ある幅に集中し，著しい擾乱を受けていないと思われる。したがって，遺物の年代はローム層擾乱後である。また，本遺跡の遺物直下のロームは，遺物産出層準を直接に示すものではないと考えられる。

5　ま　と　め

桔梗2遺跡で認められた火山灰は，更新世の降下火山灰起源のロームと完新世の降下火山灰である。完新世の火山灰のうち，下位の火山灰は，800－900年前の白頭山一苫小牧火山灰（町田ほか，1981；町田ほか，1984）に対比される。上位の火山灰は三つのフォールユニットから成り，細粒均質である。比較的広範囲に分布している可能性がある。

グリッドC－41のトレンチ断面の観察や旧石器直下のロームの鉱物組成から，本遺跡のローム層は擾乱を受けていると考えられる。本遺跡の旧石器直下のローム試料を，隣接する石川1遺跡のローム層標準柱状図（㈶北海道埋蔵文化財センター，1988）の試料と比較すると，標準柱状図におけるローム層基底から上方10cmに対比される。しかし，これは，旧石器の産出層準を直接示しているものではない。

旧石器の絶対年代資料はないが，ローム層の擾乱後であろう。本遺跡の旧石器産出層準は，今回行った野外観察や室内実験のみでは不明である。　（花岡　正光）

引用文献

㈶北海道埋蔵文化財センター（1986a）：木古内町札苅遺跡．128pp.

㈶北海道埋蔵文化財センター（1986b）：知内町湯の里3遺跡．54pp.

㈶北海道埋蔵文化財センター（1987a）：上磯町矢不来2遺跡．91pp.

㈶北海道埋蔵文化財センター（1987b）：木古内町建川2・新道4遺跡．614pp.

㈶北海道埋蔵文化財センター（1988）：函館市石川1遺跡（印刷中）．

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）：日本海を渡ってきたテフラ．科学，**51**，pp.562－569.

町田　洋・新井房夫・小田静雄・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）：テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－．古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」，984pp.，同朋舎：pp.865－928.

3　函館市桔梗2遺跡より得た炭化木片について

三　野　紀　雄
（北海道開拓記念館）

函館市桔梗2遺跡より得た炭化木片について樹種同定をおこなった。炭化木片は図Ⅳ－9の地表下30cmの縄文中期中葉の竪穴住居址KH－14より採取した資料である。人間が木材を利用する形態として，1）建築・土木建造物の材料，2）什器・器具・道具類の材料，3）暖房あるいは炊事のための燃料，土器あるいは器具・道具類を製作するための燃料，4）その他が考えられる。ここでの竪穴住居址より得た資料はその1）と推定されるが，遺跡より採取した木質遺物の樹種を調査することにより樹木に対する当時の人々の考え方とその利用のされ方それに当時の遺跡周辺の環境を知る一助となる。この調査の機会を与えて下さった畑宏明氏，長沼孝氏はじめ財団法人北海道埋蔵文化財センターの方々に感謝申し上げる。

木材利用形態

1　方　　法

処理手順

遺跡の発掘地より採取した資料を，風乾の後それぞれ3個の小片に分割し，それらの小片を木材組織の木口面，柾目面，板目面を観察できるように安全剃刀でカッティングし，試料台に伝導性接着剤ドウタイトD－550で接着，さらに金蒸着の後に走査電子顕微鏡（JEOL－JSM－SI型）で木材組織を観察し樹種を同定した。その際，現生樹木の組織標本および記載文献を参照した[1,2]。

走査電顕

2　結　　果

縄文中期中葉の竪穴住居址KH－14より採取した炭化木片は住居の構造材と考えられるが，径数cmの丸太状のものが僅かに見られるほかは，ほとんどが枝状のほそい木材である。

桔梗2遺跡では，縄文早期から縄文中期にかけての19軒の住居址が確認，発掘され，そのうちKH－14住居址ほか5軒の住居址で炭化木片が検出されている。KH－14住居址は大きさ5.28×(3.90)m，深さ36cm，隅丸長方形で，主柱穴は壁際に4個そして地床炉とみられる焼土が中央部に3ヵ所みられる。炭化木片は壁際から竪穴住居址中央に向かって放射状に倒れた状態で検出された。

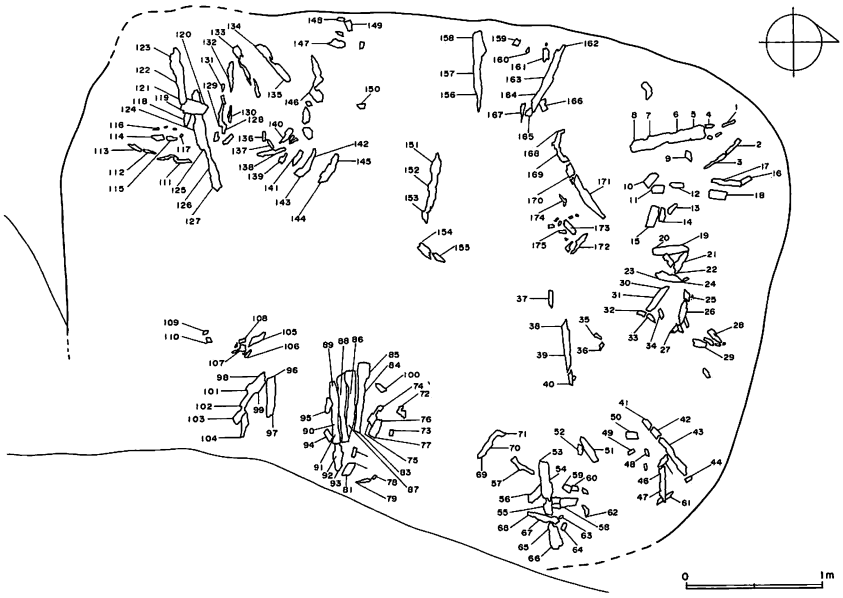
KH－14

炭化木片の樹種同定結果を表Ⅳ－1に示した。その結果，樹種不明（広葉樹散孔材あるいは広葉樹環孔材）のものも見られたが，他はクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）がほとんどで，ヤチダモ？と思われるトネリコ属材（*Fraxinus* sp.）が僅かに見られた。クリ材は木理通直，割裂容易でまた耐久性があり，用材として有用である。トネリコ属材についても同様である。クリ材が多用されていることは，それが植生の主要構成要素とも見られるが，選択的に伐採・利用された可能性も充分考えられる。

クリ
トネリコ属
クリ材多用
選択的利用

それぞれの資料の樹種同定根拠は次のとおりである。クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）：広葉樹環孔材，大型の導環は1列あるいは多列，小導環は放射状あるいは火炎状に配列，導管は単穿孔でチロースが発達する，射出線は単列そして広射出線は存在しない。トネリコ属（*Fraxinus* sp.）：広葉樹環孔材，大型の導環は1列あるいは多列，小導環は数

同定根拠



図Ⅳ－9　KH－14炭化材分布

少なく散在，導管は単穿孔，射出線は単列および2，3列。カバノキ属（*Betula* s.p.）？：広葉樹散孔材，導管は放射状に配列する，階段状穿孔を有する，射出線は単列および3，4列。なお，不明・広葉樹散孔材としたもののうち資料74：大型の導管が放射状に配列し，その大きさの移行が急でまた数を減じる，この資料はクルミ属（*Juglans* sp.）の可能性がある。

3　ま　と　め

今回の縄文中期中葉の竪穴住居址KH－14ではクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）が多用されている。北海道では，これまでのところクリ材が建築材あるいはその他の用材として使用された竪穴住居址の発見例は道南地方に限られている[3,4,5]。このことは，道南地方の植生の反映あるいは木材のもつ特性からの選択的利用を示しているものと思われる。

クリ材多用

本州地方では，クリは食糧源のみならず建築材，燃料材としても重要な位置を占め，その積極的な保護，管理の可能性のあることが指摘されている[6]。しかし，本道においてそのようなクリの撫育，管理が行われていたかどうかは今のところ不明である。さらに多くの発掘資料の調査が必要である。

本州のクリ

参考文献

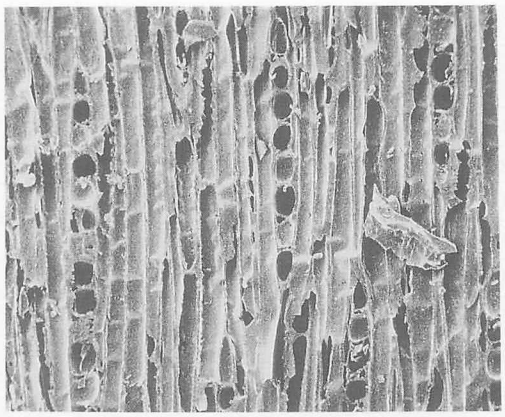
1)　小林彌一（1957）本邦における針葉樹材のカード式識別法　林業試験場研究報告（98）
2)　須藤彰司（1959）本邦広葉樹材の識別　林業試験場研究報告（118）
3)　石田茂雄（1974）縄文時代住居址内発見の炭化材について　西桔梗－函館圏流通センター建設用地内遺跡調査報告書
4)　三野紀雄（1988）新道4遺跡CH－2住居址から出土した炭化木材の樹種同定
新道4遺跡－津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書（5）北埋調報　52
5)　三野紀雄（1988）石川1遺跡H－5住居址から出土した炭化木材の樹種同定
石川1遺跡－一般国道5号函館新道道路改良用地内埋蔵文化財発掘調査報告書　北埋調報　45
6)　千野裕道（1984）縄文時代のクリ－炭化木材の樹種を中心に－　歴史公論10巻6号

表Ⅳ－1　函館市桔梗2遺跡出土の炭化材樹種同定結果

資料番号	樹　　種	摘　　要	資料番号	樹　　種	摘　　要
1	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		44	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
2	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		45	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
3	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		46	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
4	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		47	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
5	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)	丸太	48	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
6	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)	丸太	49	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
7	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)	丸太	50	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
8	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)	丸太	51	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
9	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		52	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
10	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		53	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
11	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		54	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
12	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		55	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
13	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		56	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
14	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		57	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
15	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		58	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
16	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		59	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
17	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		60	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
18	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		61	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
19	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		62	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
20	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		63	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
21	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		64	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
22	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		65	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
23	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		66	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
24	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		67	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
25	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		68	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
26	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		69	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
27	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		70	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
28	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		71	不明・広葉樹散孔材	
29	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		72	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
30	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		73	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
31	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		74	不明・広葉樹散孔材	
32	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		75	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
33	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		76	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
34	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		77	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
35	不明・広葉樹環孔材		78	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
36	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		79	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
37	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		80	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
38	不明・広葉樹環孔材		81	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
39	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		82	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
40	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		83	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
41	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		84	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
42	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		85	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	
43	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		86	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ	

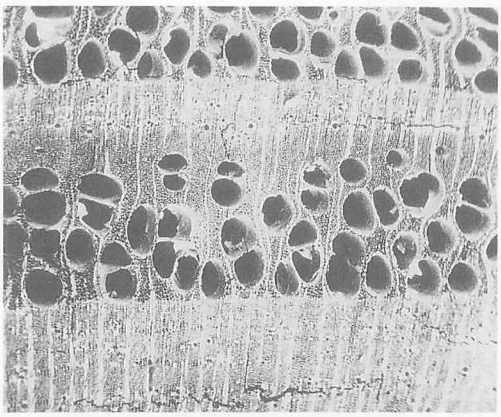
資料番号	樹　　種	摘　　要	資料番号	樹　　種	摘　　要
87	不明・広葉樹散孔材・資料74に同じ		132	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
88	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		133	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
89	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		134	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
90	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		135	不明・広葉樹散孔材	
91	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		136	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
92	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		137	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
93	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		138	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
94	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		139	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
95	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		140	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
96	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		141	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
97	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		142	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
98	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		143	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
99	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		144	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
100	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		145	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
101	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		146	不明	細粉
102	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		147	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
103	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		148	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
104	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		149	不明・広葉樹環孔材	
105	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		150	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
106	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		151	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
107	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		152	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
108	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		153	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
109	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		154	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
110	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		155	カバノキ属(*Betula* sp.)？	
111	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		156	カバノキ属(*Betula* sp.)？	
112	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		157	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
113	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		158	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
114	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		159	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
115	不明・広葉樹散孔材		160	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
116	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		161	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
117	不明・広葉樹散孔材・資料115に同じ		162	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
118	―	資料無し	163	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
119	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)	丸太	164	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
120	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		165	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
121	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		166	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
122	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		167	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
123	トネリコ属(*Fraxinus* sp.)		168	不明・広葉樹散孔材	
124	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		169	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
125	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		170	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
126	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		171	不明	細粉
127	不明・広葉樹		172	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
128	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		173	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
129	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		174	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
130	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		175	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	
131	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)		176	クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc)	

木口面　×30

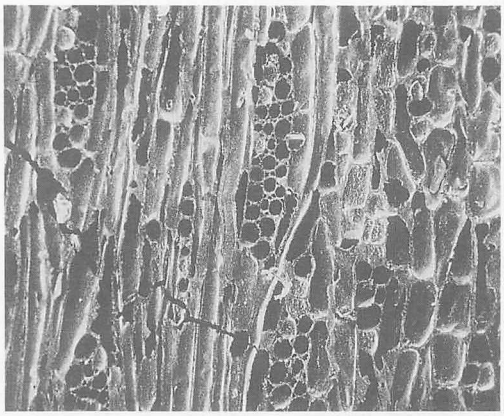


板目面　×300

クリ(*Castanea crenata* Sieb.et Zucc)　資料No.19

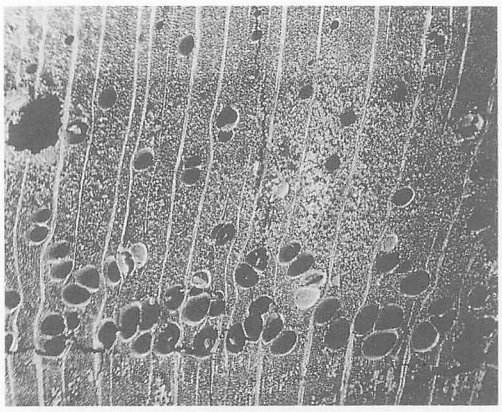


木口面　×30

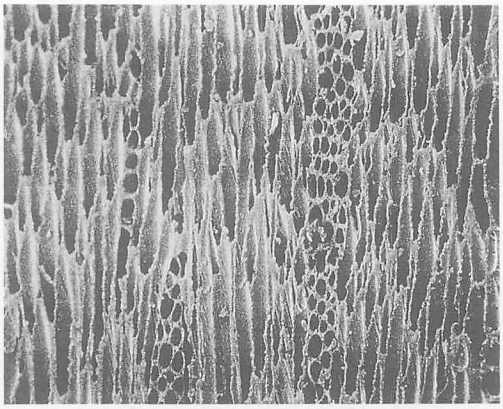


板目面　×300

トネリコ属(*Fraxinus* sp.)　資料No. 5



木口面　×30



板目面　×300

不明・広葉樹散孔材　資料No.74

図Ⅳ－10　出土炭化材の組織顕微鏡写真

Ⅴ まとめ

桔梗2遺跡は，函館湾に注ぐ石川右岸の標高25～30mの東側に向いた段丘上にある。今回はその段丘縁辺部3,540m²について調査を行った。調査区は遺跡のごく一部であり，遺跡全体の様子がどのようなものかは不明であるが，調査の結果からは，縄文時代中期中葉を主体として旧石器時代，縄文時代(早期～晩期)，続縄文時代，中世の生活の痕跡を残す遺跡であることが判明した。遺跡の性格は，遺構・遺物の時期と種類から類推すると旧石器時代には石器製作跡であり，縄文時代には集落跡，狩猟の場であったと思われる。それ以外の時期については不明である。

以下，本遺跡の特徴的な事柄のいくつかについて取り上げまとめとしたい。

1 縄文時代・続縄文時代の遺構と土器の分布について

ここでは縄文時代・続縄文時代の遺構と土器の分布を通して，遺跡の変遷を概観する。なお，旧石器時代についてはⅤ－4で述べることとする。

早期の遺構は検出されていない。土器は2か所にまとまりがみられる。1か所は，北部の台地奥で中茶路式相当，東釧路Ⅳ式相当，ついで東釧路Ⅲ式相当，貝殻文が少量分布する。もう1か所は発掘区南端の南斜面に中茶路式相当と貝殻文が少量分布する。2か所の分布のうち前者については，段丘縁辺より台地奥にあることからその広がりはさらに西側へのびるものと思われる。後者については，斜面の上の台地上に早期の主体がありそこからの流れ込みによると思われる。

前期の遺構については，確実にその時期といい得るものは検出されていない。土器は前期初頭から末葉までのものが出土しているが，その点数は円筒下層c式をのぞけばわずかである。土器は，仮称桔梗野式（函館市教育委員会 1985）と思われるものが北部の台地奥および段丘の縁辺に，石川野式は北部の台地奥（C－34区を中心とした地点）に，春日町式は南斜面に分布する。前期後半の円筒下層c，d式は遺跡全体に分布するが，そのうち円筒下層c式は，とくに沢部のⅡ層上位から出土しており，ここから図Ⅲ－112－1の土器が復元された。沢部からは，このほかにも数個体分の土器片が散在して出土していることから，これらの土器は沢上部からの流れこみによるものと思われる。円筒下層c式は前期の土器の中でも多く出土しているが，この時期の住居跡は検出されていない。 流れこみ

中期は前半のⅢ群A_1～A_3類と後半のⅢ群B類に分けられる。

Ⅲ群A_1類の時期の遺構は，発掘区南端の台地縁辺にベンチ状構造をもつ住居跡が1軒（KH－19）検出されたのみである。Ⅲ群A_1類の土器は，この住居跡南側の遺物集中区より多く出土しており19個体の土器が復元された。これらの土器はKH－19を構築した人達が廃棄したものか，それともさらに西側の未調査区にこの時期の住居跡があるのであろうか。Ⅲ群A_1類の土器は，このほかに沢部南の緩斜面（23～28ライン間）にも分布する。

Ⅲ群A_2類の時期は，南部の台地上に壙底面近くより該期の完形土器が1個体出土したフラスコ状ピット（KP－63）がある。また，この付近のⅢ群A_3類の住居跡KH－12，17に切られたフラスコ状ピット（KP－69，70，71，73）もこの時期の遺構かもしれない。Ⅲ群A_2 フラスコ状ピット

類の土器は，その出土点数が少なく10ライン以南の南斜面に分布する。

多くの住居跡　Ⅲ群 A_3類の時期には，多くの住居が南部の台地上につくられた。大型住居が2軒(KH－8，17)，中型住居が3軒（KH－14，16，18)，方形で小型の住居が1軒（KH－12）である。このうち中型住居跡KH－14の覆土中からはシャチを模倣したと思われる動物形土製品が1点出土した。また，中型住居跡の3軒からは，住居の構造材と思われる炭化材が検出された。このうちKH－14の炭化材の樹種同定結果についてはⅣ－3で報告している。

サイベ沢Ⅶ式　Ⅲ群 A_3類の土器は，おもに10ライン以南の南斜面と，沢部南側の緩斜面(21～26ライン間)に分布する。沢部南側の緩斜面上からは図Ⅲ－112－3～5の3個体の土器が出土した。これらの土器は，その出土状況から流れこみによるものではなく，その場所へ廃棄されたものと思われる。

Ⅲ群 A_3類は，サイベ沢Ⅶ式を主体とする土器群で，桔梗2遺跡では最も多く出土している。また，本遺跡と同じく函館新道関係で当センターが調査を行なった石川1遺跡でもこの時期の土器が多く出土する。サイベ沢Ⅶ式の主文様である連弧文を施文するのに桔梗2遺跡では貼付けによるものが多く，沈線によるものは少ない。一方，石川1遺跡では貼付けによるものがほとんどなく，沈線による施文が主体を占める。このことから，両遺跡では同じサイベ沢Ⅶ式を出土するものの本遺跡の方が若干古い方に属すと思われる。両遺跡のサイベ沢Ⅶ式土器については更に細かな比較が必要と思われるが，今回はそれを行っていない。

Ⅲ群B類の時期では，榎林式の住居跡が北部の段丘縁辺部に3軒(KH－3，5，6)，沢南側の台地上に2軒（KH－10，11）検出されている。土器はこれらの住居跡の周囲と南部の斜面(9ライン以南)にも分布する。榎林式の住居跡のうちKH－5，11からは住居の構造材と思われる炭化材が多く検出された。

炭化材　炭化材を伴う住居跡は，6軒検出された。榎林式期の住居跡が2軒，Ⅲ群 A_3類の住居跡3軒，そして時期不明のものが1軒である。6軒のうち4軒からはとくに残存状態の良好な炭化材を検出しており，道南におけるこの時期の住居の構造材，当時の植生などを知る上で貴重な資料と思われる。

ノダップⅡ式の土器は同一個体と思われるものが沢部のG－30区から出土している。大安在B式相当と思われる土器(図Ⅲ－112－6)は，出土地点の詳細は不明であるが，たばこ産業㈱のグランド造成の際の盛土中より出土している。いずれも点在的な出土状況である。

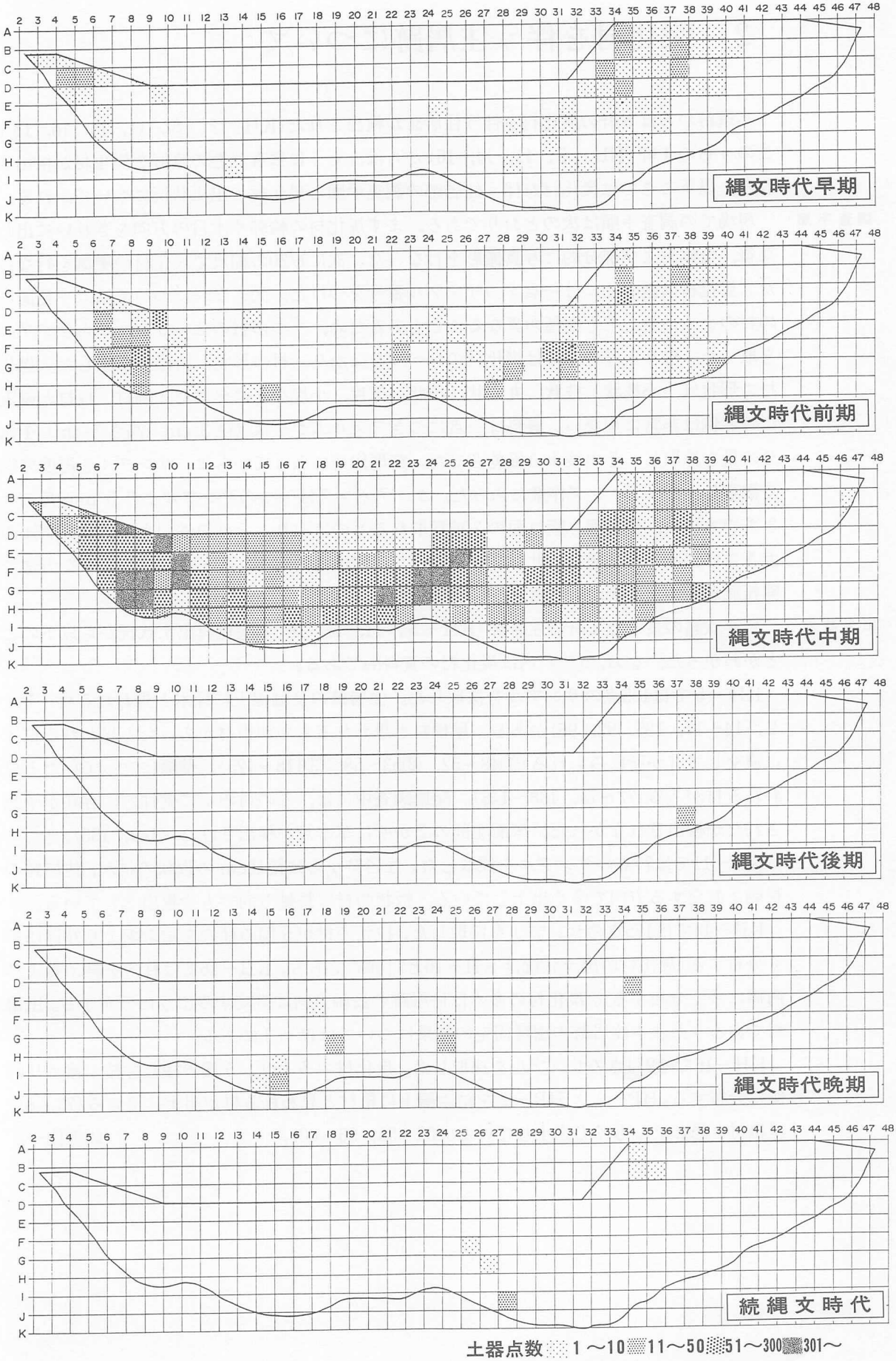
中期後半～末葉の石組炉をもつ住居跡が，南部の台地上から1軒(KH－7)検出されている。

後期の土器は余市式，入江式，大湯式のものが少量出土している。余市式のものは，榎林式の住居跡（KH－5，6）の上部より出土しており，この住居跡の凹みに廃棄されたものであろうか。

晩期の土器は，大洞 C_2～A式相当と思われる別個体のものが，それぞれ離れた4か所のグリッドより出土している。

続縄文時代の土器は，恵山式の別個体と思われるものが，3か所のグリッドより出土している。また，後北 C_1式の土器片が1点出土している。なお，後期～続縄文時代にかけての遺構は検出されていない。

（佐川俊一）



図Ⅴ－1　時期・発掘区別の土器分布

2　炭化材を伴う住居跡について

本遺跡からは6軒の炭化材を伴う住居跡が検出された(KH－2，5，11，14，16，18)。このうちの4軒(KH－5，11，14，16)からは，とくに残存状態の良好な炭化材が検出された。以下ここでは炭化材を伴う住居跡の調査手順と炭化材の出土状況についてふれる。

調査手順　現場での調査手順は次のとおりである。まず炭化材の輪郭や木目の方向をきれいに出した後，全体および部分的に写真撮影を行なった。次に1/20の縮尺で炭化材の実測を行なった。炭化材は基本的には一点ずつサンプル番号をつけた。大きな材については，一見同一の材のように見えても樹種の異なることもあるため，一つの材の2～3か所からサンプルを取った。取り上げの際には炭化材のレベルをはかり，材の形状，特徴を観察した。炭化材の形状は，小枝状，枝状，丸太状，板状，薄片，小片などに分けた。割材，板材と確実に判る例は非常に少ない。資料は一点につきフィルムケース（径3 cm，高さ5 cm）1個分の量を採取し，その後十分風乾させた。整理作業に入ってからは，サンプルを再度肉眼で観察し，カッティング作業に入った。カッティングは一つのサンプルより5 mm角の大きさで木口面，柾目面，板目面の3種類取れるものは取り，それ以外のものはサンプルの大きさにより1～2種類のサンプルを取った。樹種の同定は，Ⅳ－3にあるような方法で開拓記念館の三野氏が行った。

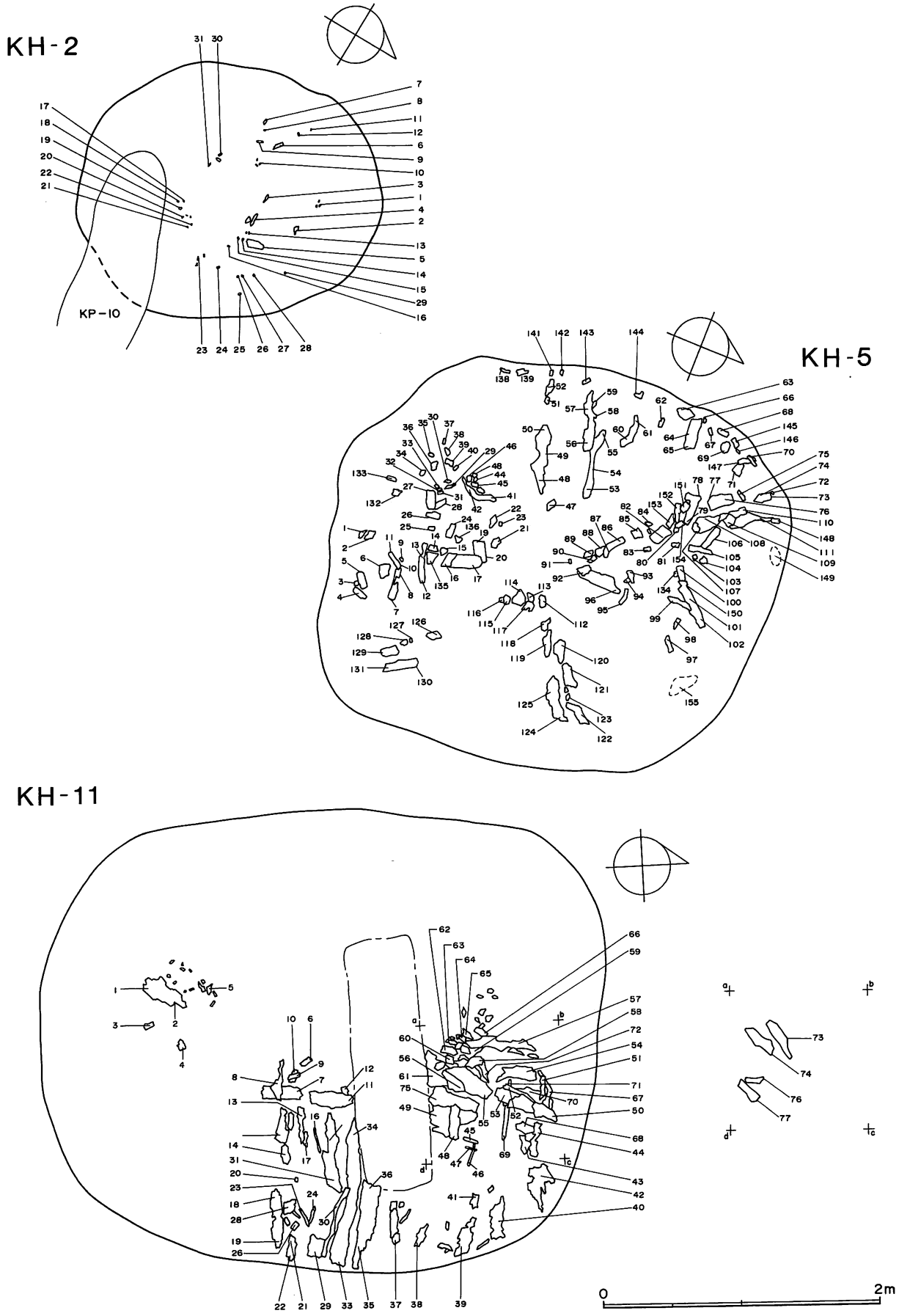
出土状況　残存状態の良好な4軒の住居跡(KH－5，11，14，16)の炭化材出土状況から以下のことがわかった。なお，(　)内は炭化材の資料№である。

KH－5では155点のサンプルを採取した。住居跡の長軸線上に棟木と思われる材（1，2，14～17，135，92，96)がある。屋根材と思われるものが桁材があったと思われる位置に直交して3か所にみられる(①48～52，②53～58，③118～125)。壁際に立っていたと思われる材がある(72～74，138～148)。発掘調査中には，この材の下に壁柱穴の存在が予想されたが検出されなかった。床面北部の2か所に草本類が検出された（149，155)。

KH－11では77点のサンプルを採取した。住居跡からは幅10cmの板状の材が，住居跡の長軸と直交する方向で多く出土している。板状の材は長軸方向でも少量出土している。

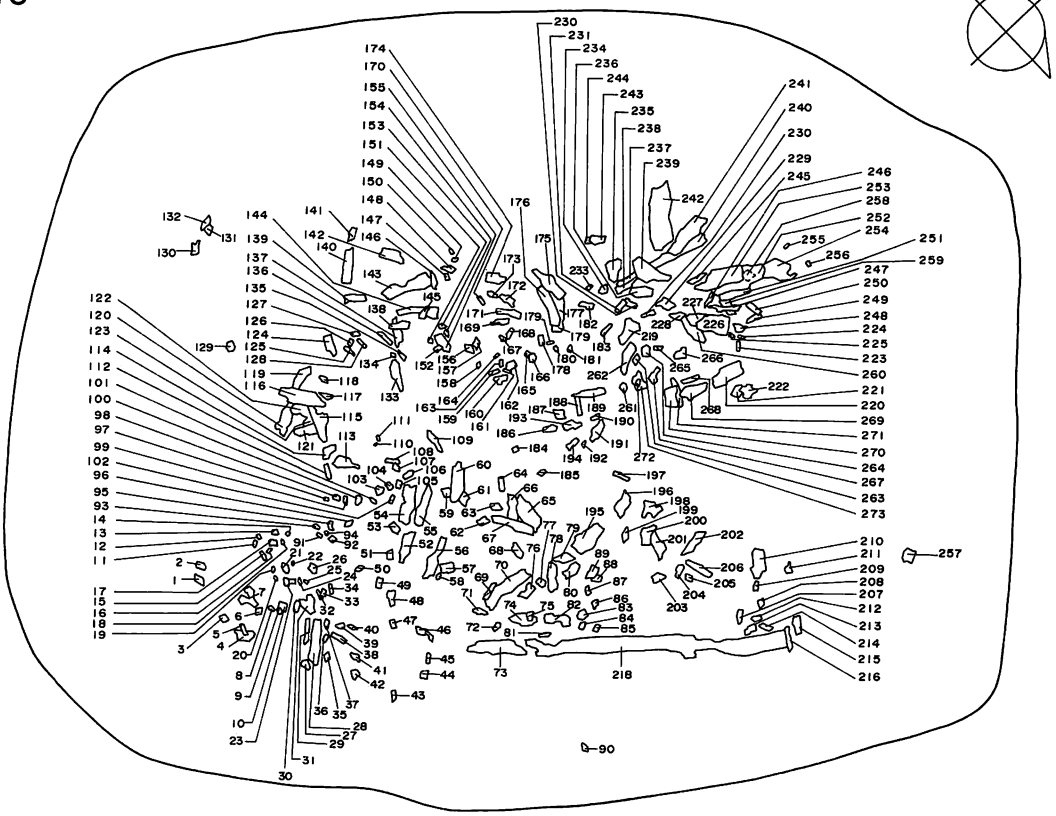
KH－14では175点のサンプルを採取した。枝状の材が5個の柱穴を結ぶ線より外側に多く分布する(炭化材の出土状況はKH－16と対称的である。KH－16では柱穴を結ぶ線より内側に多く分布する)。炭化材の多くは住居跡の長軸方向に直交するように分布する。屋根材であろうか。本住居跡の樹種同定の結果についてはⅣ－3にある。

KH－16では274点のサンプルを採取した。炭化材の多くは，5個の柱穴を結ぶ線より内側に分布する。HP－1とHP－2を結ぶ線上に桁材と思われる材が出土している(73, 28)。屋根材と思われるものも出土している（52～55，56・60)。　(佐川俊一)

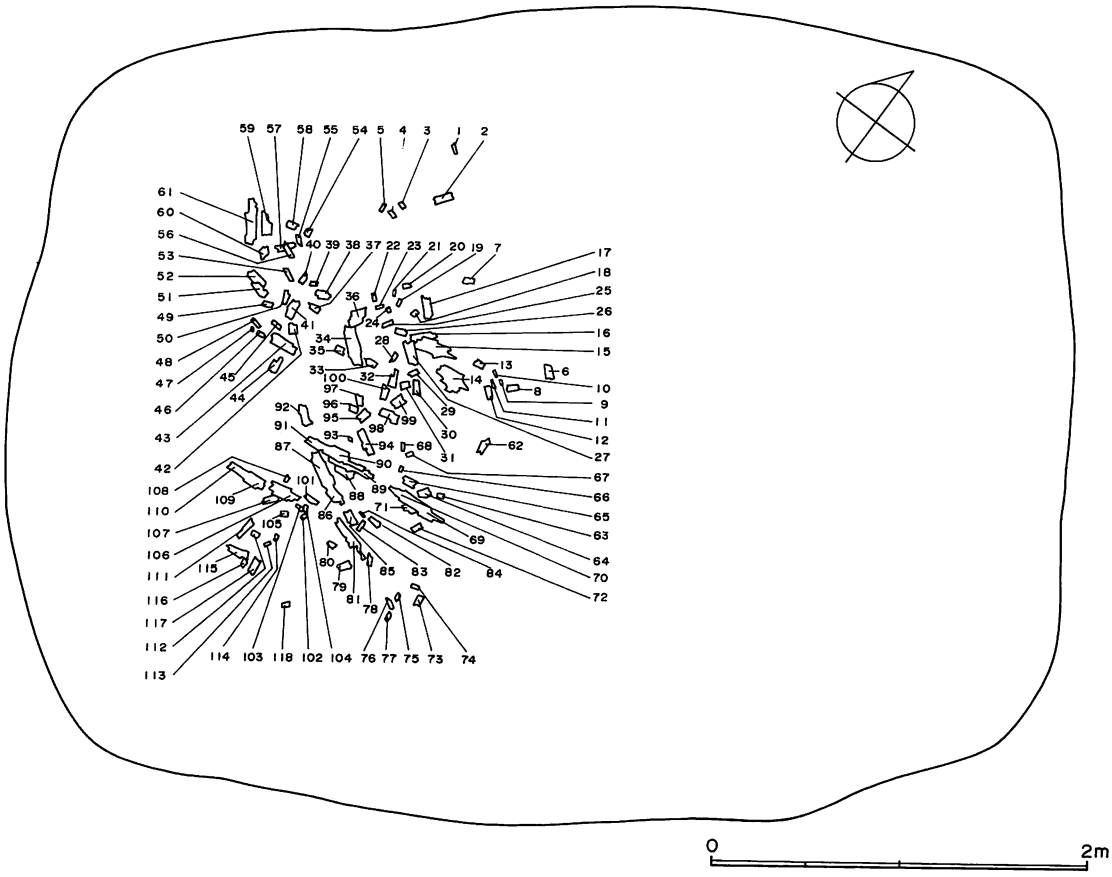


図Ⅴ－2　KH－2，5，11炭化材分布

KH-16



KH-18



図Ⅴ－3　KH－16，18炭化材分布

表V－1　KH－5　炭化材一覧

No.	形状	備考	No.	形状	備考	No.	形状	備考
1	薄片	2と同一，壁際にあり	49		48・50と同一	97	薄片	
2	〃	1と同一	50		48・49と同一	98	丸太状	
3	丸太状	形崩れている	51	薄片	48・49・50と同一？材の下に焼土あり	99		
4	〃		52	〃	48・49・50と同一？材の下に焼土あり	100		101・102と同一？
5			53		54・55と同一	101	薄片	100・102と同一？
6			54	薄片(もとは丸太状)	53・55と同一	102	〃	100・101と同一？
7	板材？		55	丸太状	53・54と同一	103		106と同一 105の下にあり
8			56	板材？	57と同一	104		
9	細い丸太状		57	〃	56と同一	105	丸太？	106と組んである？
10	丸太状	11と同一	58	薄片		106		103と同一，108・109の下にあり
11	〃	10と同一	59	割材(半割)	57の下にあり	107		107～111同一
12	〃	13と同一	60		61と同一	108	丸太状	107～111同一
13	〃	12と同一	61		60と同一	109		107～111同一？
14	板状？	厚さ4 cm	62	小片		110		107～111同一
15			63	薄片	壁際にあり	111		107～111同一
16	丸太がつぶれた状態	17と同一	64	板材？	65と同一	112	板材？	
17	〃	16と同一	65	〃	64と同一	113		
18	薄片		66			114	薄片	
19	〃		67			115		
20	板状薄片		68	丸太状	壁際に斜に立つ	116	丸太状	
21	薄片		69	割材(半割)？		117		
22	〃	23と同一？	70		壁中段に横に位置する	118		
23	〃	22と同一？	71			119		
24	〃		72		72～77同一？72～74壁際に立つ	120		
25	〃		73		72～77同一？^{14}C年代測定用サンプル	121		
26	丸太状	材の下に焼土あり	74		72～77同一？^{14}C年代測定用サンプル	122	板材？	
27			75		72～77同一？	123	〃	
28			76		72～77同一？	124		
29	枝状		77		72～77同一？	125		
30			78		79と同一？，HP－1に入り込む	126		
31	丸太状	32と同一	79		78と同一？	127	小枝状	
32		31と同一	80	薄片	107～111と同一？	128		
33			81	丸太小片		129		
34		36と同一？	82	薄片		130	丸太状	131と同一，材の中心空洞
35	薄片		83			131	〃	130と同一，材の中心空洞
36	丸太状	34と同一？	84			132		壁際にあり
37	薄片		85			133		壁際にあり
38	〃		86	丸太？	87と同一	134		
39			87	丸太	86と同一	135	薄片	
40		41・42と同一？	88	？		136	丸太状	材の中心空洞
41	丸太状	40・42と同一？	89			137	草本	壁際につく
42	〃	40・41と同一？	90	樹皮		138	薄片	138～148壁際に立つ
43	〃	46と同一	91	割材？		139	〃	140と同一？
44			92	樹皮	96と同一	140		139と同一？
45			93	小丸太状		141		
46	小径丸太	43と同一	94			142		
47	薄片		95	薄片		143		
48		49・50と同一	96	樹皮	92と同一	144	半割材	

No.	形　　状	備　　考	No.	形　　状	備　　考	No.	形　　状	備　　考
145	半割材		149	草本	壁際につく	153	丸太状	
146	〃		150	薄片		154	薄片	
147			151	丸太状		155	草本	床面にあり
148			152					

表Ⅴ－2　KH－11　炭化材一覧

No.	形　　状	備　　考	No.	形　　状	備　　考	No.	形　　状	備　　考
1	丸太状		27	板状	28と同一	53	板状	
2	板状		28	〃	27と同一	54	小枝状	
3	薄片		29	〃		55	丸太状	
4	〃		30	枝状		56	〃	
5	板状		31	板状	32と同一	57	〃	
6	〃		32	〃	31と同一	58	板状	
7	丸太状		33	〃	34と同一	59	丸太状	
8	板状		34	〃	33と同一	60	薄片	
9	〃		35	〃	36と同一	61	丸太状	
10	〃		36	〃	35と同一	62	板状	
11	丸太状		37	〃		63	小枝状	
12	薄片		38	〃		64	薄片	
13	板状		39	〃		65	板状	
14	〃		40	〃		66	〃	
15	板状	31と同一	41	〃		67	小枝状	
16	小枝状		42	〃		68	板状	
17			43	〃		69	小枝状	71と同一
18	板状	19と同一	44	〃		70		^{14}C年代測定用サンプル
19	〃	18と同一	45	小枝状		71	小枝状	69と同一
20	〃		46	〃		72		
21	〃		47	〃		73	丸太状	
22	〃		48	〃		74	〃	
23	小枝状		49	〃		75	〃	
24	〃		50	板状		76	〃	
25	板状		51	小枝状		77	〃	
26	薄片		52	板状				

表Ⅴ－3　KH－14　炭化材一覧

No.	形　　状	備　　考	No.	形　　状	備　　考	No.	形　　状	備　　考
1	小枝状		14	枝		27	枝	25・26と同一
2	〃		15	〃		28	〃	
3	〃		16	小枝	17と同一？	29	枝	
4	〃		17	小枝	16と同一？	30	〃	31と同一
5	丸太状	5～8同一？	18	枝		31	〃	30と同一
6	〃	〃	19	〃	20と同一	32	？	
7	〃	〃	20	〃	19と同一	33	？	
8	〃	〃	21	〃	22と同一	34	？	^{14}C年代測定用サンプル
9	枝状		22	〃	21と同一	35	？	
10	〃		23	〃	24と同一	36		
11	〃		24	〃	23と同一	37	小枝	
12	〃		25	〃	26・27と同一	38	枝	39・40と同一
13	？		26	〃	25・27と同一	39	〃	38・40と同一

No.	形状	備考	No.	形状	備考	No.	形状	備考
40	枝	38・39と同一	86	枝	87・88と同一	132	枝	
41	〃	41～44同一	87	〃	86・88と同一	133	?	
42	〃	〃	88	〃	86・87と同一	134	?	135と同一
43	〃	〃	89	〃	89～93同一	135	?	134と同一
44	〃	〃	90	〃	〃	136	?	
45	〃	46・47と同一	91	〃	〃	137	?	
46	〃	45・47と同一	92	〃	〃	138	?	
47	〃	46・47と同一	93	〃	〃	139	枝	
48	?		94	?		140	小枝	
49	?		95	?		141	?	
50	?		96	〃	97と同一	142	枝	143と同一
51	?		97	〃	96と同一	143	〃	142と同一
52	?		98	〃		144	?	145と同一
53	枝	54・55と同一	99	〃	101～103と同一	145	?	144と同一
54	〃	53・55と同一	100	?		146	?	
55	〃	53・54と同一	101	枝	99と同一	147	?	
56	〃		102	〃	〃	148	?	
57	小枝		103	〃	〃	149	?	
58	枝		104	〃		150	樹皮	
59	?		105	〃		151	枝	152・153と同一
60	?		106	?		152	〃	151・153と同一
61	枝		107	?		153	〃	151・152と同一
62	?		108	?		154	?	
63	?		109	?		155	?	
64	小枝		110	?		156	枝	157・158と同一
65	枝	66と同一	111	?		157	〃	156・158と同一
66	〃	65と同一	112	枝	113と同一	158	〃	156・157と同一
67	小枝	68と同一	113	〃	112と同一	159	?	
68	〃	67と同一	114	〃	115と同一	160	?	
69	枝	70・71と同一	115	〃	114と同一	161	?	
70	〃	69・71と同一	116	?		162	枝	162～165同一
71	〃	69・70と同一	117	?		163	〃	〃
72	?		118	?		164	〃	〃
73	小枝		119	丸太	120と同一	165	〃	〃
74	〃	75と同一	120	〃	119と同一	166	?	
75	〃	74と同一	121	枝	122・123と同一	167	?	
76	枝	77と同一	122	〃	121・123と同一	168	小枝	
77	〃	76と同一	123	〃	121・122と同一	169	?	
78	小枝	79と同一	124	〃	124～127同一	170	枝	171と同一
79	〃	78と同一	125	〃	〃	171	〃	170と同一
80	枝	81と同一	126	〃	〃	172	?	
81	〃	80と同一	127	〃	〃	173	?	
82	小枝		128	?	128～131同一	174	?	
83	枝	84・85と同一	129	?	〃	175	?	
84	〃	83・85と同一	130	?	〃	176	?	
85	〃	83・84と同一	131	?	〃			

表Ⅴ－4　KH－16　炭化材一覧

No.	形状	備考	No.	形状	備考	No.	形状	備考
1		2と同一？	49			97		98と同一？
2		1と同一？	59			98		97と同一？
3			51			99		
4			52		55と同一？	100		
5			53			101		
6			54			102		
7			55		52と同一？	103	板状	
8	丸太	9と同一？	56	丸太？		104	〃	
9		8と同一？ 10の下にあり	57			105		
10	丸太？	9の上にあり	58			106		
11			59		60の下にあり	107		
12			60	丸太状	59の上にあり	108		
13	板状		61			109		
14			62			110		
15			63			111		
16	枝状		64			112		114と同一？
17			65			113		
18			66			114		112と同一？
19		20と同一？	67			115	板状	115～117同一？
20		19と同一？	68	丸太？		116		115～117同一？ 119の上にあり
21		22と同一？	69		70と同一	117	板状	115～117同一？
22		21と同一？	70		69と同一	118	〃	
23			71			119	丸太状	120と同一？ 116の下にあり
24			72			120		119と同一？
25	板状		73	丸太状	217・218と同一？	121	板状	
26	丸太		74		82と同一？ 75の下にあり	122	枝状	123の同一？
27			75		74の上にあり	123		122と同一？
28	丸太	29と同一	76			124		
29		28と同一	77			125		
30			78			126		
31	板状		79		195と同一？	127		
32			80	丸太状		128		
33			81		218と同一？	129	丸太？	
34			82		74と同一？	130		
35			83	丸太？		131	板状	
36			84			132		
37			85			133		
38	板状		86			134	枝状	
39			87			135		136と同一？
40			88			136		135と同一？ 137の下にあり
41		42と同一？	89			137		136の上にあり
42		41と同一？	90			138	板状	137の上にあり
43			91			139		
44	丸太状	45と同一？	92		94と同一？	140		
45		44と同一？	93	丸太？		141		
46	丸太？		94	枝状	92と同一？	142	板状	
47	板状		95			143	〃	
48			96			144		145の下にあり

No.	形状	備考	No.	形状	備考	No.	形状	備考
145	割材	144の上にあり	189			233		
146			190	板状	191と同一？ 一括土器の下にあり	234		235と同一？
147			191		190と同一？ 一括土器の下にあり	235	丸太	234と同一？
148			192			236	〃	253と同一？
149			193			237	〃	238と同一 238の上？
150			194	丸太		238	〃	237と同一，240と同一？，237の下？
151			195		79と同一？	239	〃	241の上にあり
152		155の下にあり	196	板状		240		238と同一？ 239の下にあり
153			197			241		240の上にあり
154			198		200と同一？	242		
155		152の上にあり	199			243		244の上にあり
156		157と同一？	200		198と同一？	244		243の下にあり
157		156と同一？	201			245		252と同一？
158			202			246		247の下にあり
159			203			247		246の上にあり
160			204	板状		248		224～227と同一？
161			205	〃		249		
162			206			250		
163			207			251		252と同一？
164			208	板状		252		245.251,253と同一？， ^{14}C年代測定用サンプル
165			209			253		252と同一
166			210	板状		254	丸太	256と同一？
167		168の下にあり	211	〃		255	板状	
168	板状	167の上にあり	212			256		254と同一？
169			213		217の下にあり	257	板状	
170	板状		214		217の下にあり	258	〃	
171			215	丸太		259	〃	
172	板状		216	丸太状	217の上？	260	〃	一括土器の下にあり
173	〃		217		216の上？，213・214の上にあり	261		
174	〃		218		81と同一？	262		
175			219			263		
176	板状	177と同一？ 177の上にあり	220			264		
177	〃	176と同一？ 176の下にあり	221		222の下にあり	265		
178			222		221の上にあり	266		
179			223			267		
180			224		224～227・248と同一？	278		
181			225		〃	269		
182			226		〃	270		
183			227		〃	271		
184			228			272		
185			229			273		
186			230			274		
187			231					
188			232					

表Ⅴ－5　KH－18　炭化材一覧

No.	形　状	備　考	No.	形　状	備　考	No.	形　状	備　考
1	小片		41			81		
2	偏平		42			82		
3	小片		43			83		
4	〃		44			84		
5	〃		45	小片		85		
6	割材？		46	〃		86		
7	小片		47	〃		87		
8	〃		48	〃		88		
9	〃		49			89		
10	〃		50			90		91と同一？
11	〃		51			91		90と同一？
12			52			92		
13			53	小片		93	小片	
14			54	〃		94		
15	偏平		55	〃		95		
16	〃		56	〃		96		
17			57	〃		97		
18	小片		58	〃		98		
19	〃		59			99	丸太？	
20	〃		60		板目	100		
21	〃		61	丸太？		101		
22	〃		62			102	小片	
23	〃		63	小片		103	〃	
24	〃		64			104	〃	
25			65	小片		105	〃	
26			66	〃		106		
27			67	〃		107		
28			68	〃		108	小片	
29			69			109		110と同一？
30			70		征目	110		109と同一？
31			71			111		
32			72			112	小片	
33			73		征目	113	〃	
34			74		〃	114	〃	
35			75			115		
36			76		征目	116		
37	小片		77		〃	117		
38	〃		78			118	小片	
39	〃		79					
40			80	小片				

3 動物形土製品について

KH－14の覆土中から出土した動物形土製品は部分的に欠損しているものの，全体の形状を知ることができ，いくつかの特徴から，動物の種類も推定することができる。以下，いくつかの点について説明する。

出土状況 KH－14の北西隅，覆土の上位から出土した。発見と同時に取り上げてしまったため，詳細な出土状況は不明であるが，大きく二つに割れた状態であったらしい。また，胴部発見後，その周囲から左右の胸びれが出土した。当初より割れ，いくつかの破片になっていたものと思われる。KH－14の覆土中からはこの土製品のほか多数の遺物が出土している。覆土の出土遺物総数は12,151点，土器2,009点，石器84点，剥片類10,054点，土・石製品4点である。土器は2個体のミニアチュア土器を含めて15個体が復元できた。時期は縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器である。出土遺物中最も多い剥片類の大部分は北側の二か所のブロックから出土したもので，めのう質頁岩のやり先またはナイフを製作した際のものである。やり先またはナイフの破損品も同時に8個体出土し，剥片と共に投棄された可能性がある。

住居廃絶後の投棄

KH－14の覆土の土器・石器などは，量の多さとその出土状況などからみて，住居廃絶後の凹みに投棄されたものと考えられ，動物形土製品も同様とみられる。

土製品の大きさ・特徴 部分的に欠損しているが，全体の形状は復元することができる（図V－4）。大きさは長さ6.3cm，幅3.9cm，高さ2.9cm，重さは22.0g（復元後）である。欠損しているのは右胸びれのつけ根および右尾びれ，破損しているのは左右の胸びれと胴部の中央である。割れ口，表面はかなりもろい状態であったので，水洗，乾燥後，5～10%程度のパラロイドB72液を全体に塗布した後，接合，復元を行った。

胴部

全体の形状は流線形に近いが，胴部が膨らんでいる。上方からみた場合，左右対称ではなく，左側が直線的であるのに対し，右側はやや膨らみをもち，全体に左側にわずかに曲がっている感じがする。従って，左右の胸びれの状態が少し異っている。また，欠損しているが，尾びれの状態も異っている可能性がある。

頭部

頭部は丸味のある三角形で，左右の目は長さ4 mm，幅1.5mm，深さ2 mmの凹みで表現されている。口は長さ1 cm，幅2 mm，深さ5 mmで，横方向に切られている。さらに目の後ろ6 mmのところに長さ2 mm，幅1.5mm，深さ2 mmの噴気孔とみられる凹みがある。

噴気孔

背びれ

背びれはつけ根部分で幅1.3cm，厚さ6 mm，高さは1 cmで，噴気孔の後ろに鋭角的に作られている。また，そのつけ根に長さ1.4cm，幅2 mm，深さ2 mmの横一文字の沈線があるが，何を表現しているかは不明である。

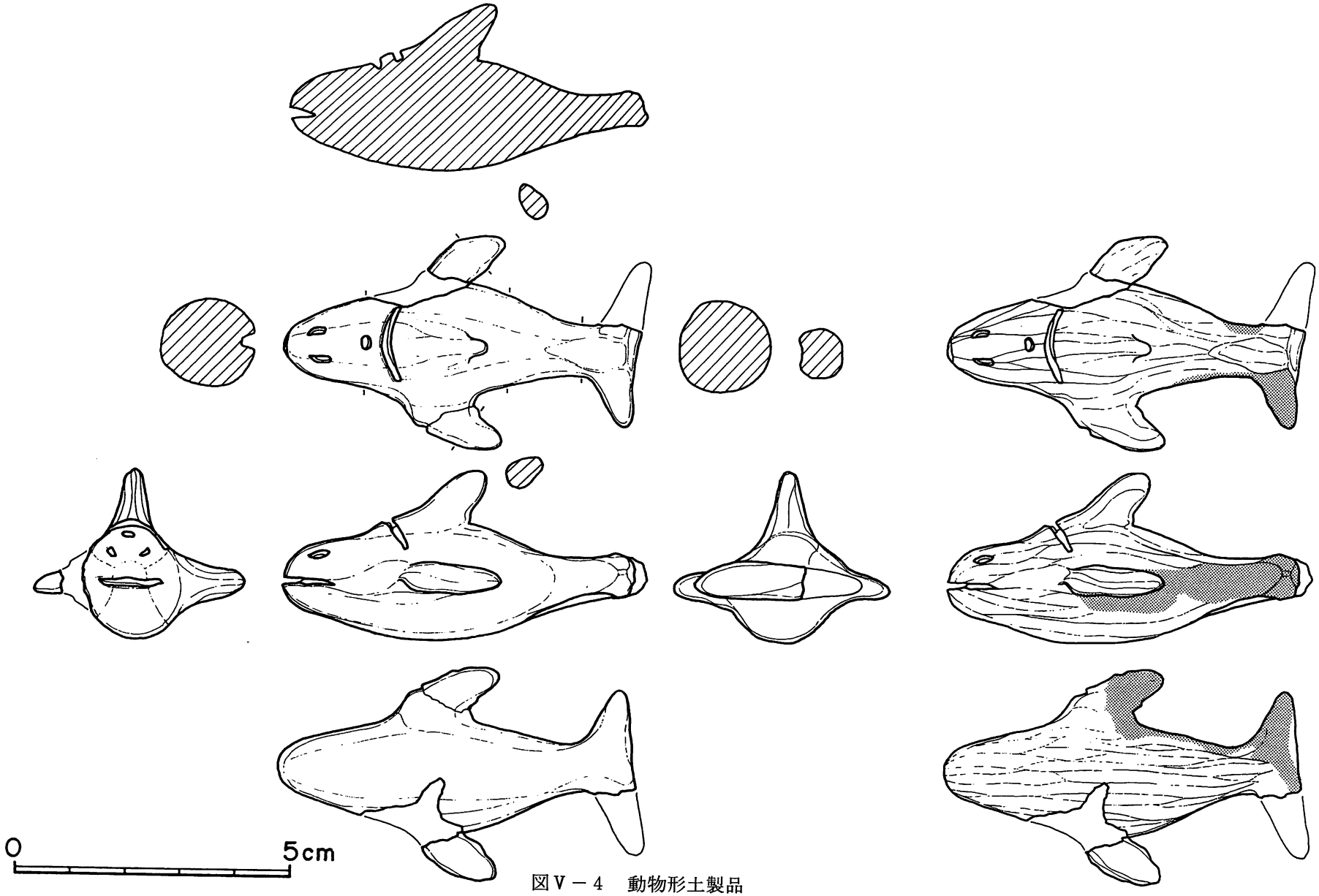
胸びれ

胸びれは胴部のほぼ中央に水平に付いているが，左側に比べ右側がわずかに開き気味である。

尾びれ

尾びれは胸びれ同様水平に付いているが，小さい。

胎土は砂礫を含み，良好とはいえない。また，焼成は比較的良好であるが，胴部中央の破損部分は非常にもろかった。表面は縦方向に丁寧に研磨されているが，部分的に剥落している（図V－4トーン部分）。色調は黒褐色で，左尾びれの部分だけが橙色を呈している。二次的な変色ではなく，焼成時からのものとみられる。また，赤色顔料などの塗布は全く



図Ⅴ－4　動物形土製品

みられない。胎土，焼成，調整などの特徴は，縄文時代中期中葉Ⅲ群 A_3類土器（サイベ沢Ⅶ式相当）と酷似している。出土状況と前述の特徴から，土製品は縄文時代中期中葉の時期と考えられる。 所属時期

想定される動物　全体の形状は魚に近く，鋭角的に立っている背びれはサメを連想させる。しかし，尾びれが胴体に対して水平に付いている点から，魚類ではなく，水生哺乳類の鯨類と考えられる。

鯨類は大きくひげ鯨目と歯鯨目に分かれるが，ひげ鯨目はシロナガスクジラなどに代表されるように大型のものが多く，背びれは非常に小さい。土製品に類似したものは全くみられない。粕谷俊雄氏によれば，歯鯨目には，マッコウクジラ科，アカボウクジラ科，イッカク科，マイルカ科，カワイルカ科の31属65種があるが，日本近海では23属29種が知られる（粕谷 1980a）。それらのうち，土製品と類似点がみられるのは，マイルカ科のもので，以下，粕谷氏による「日本近海のイルカの識別法」（粕谷 1980b）を参考に，土製品の種類を検討したい（図Ⅴ－5）。 鯨類　マイルカ科

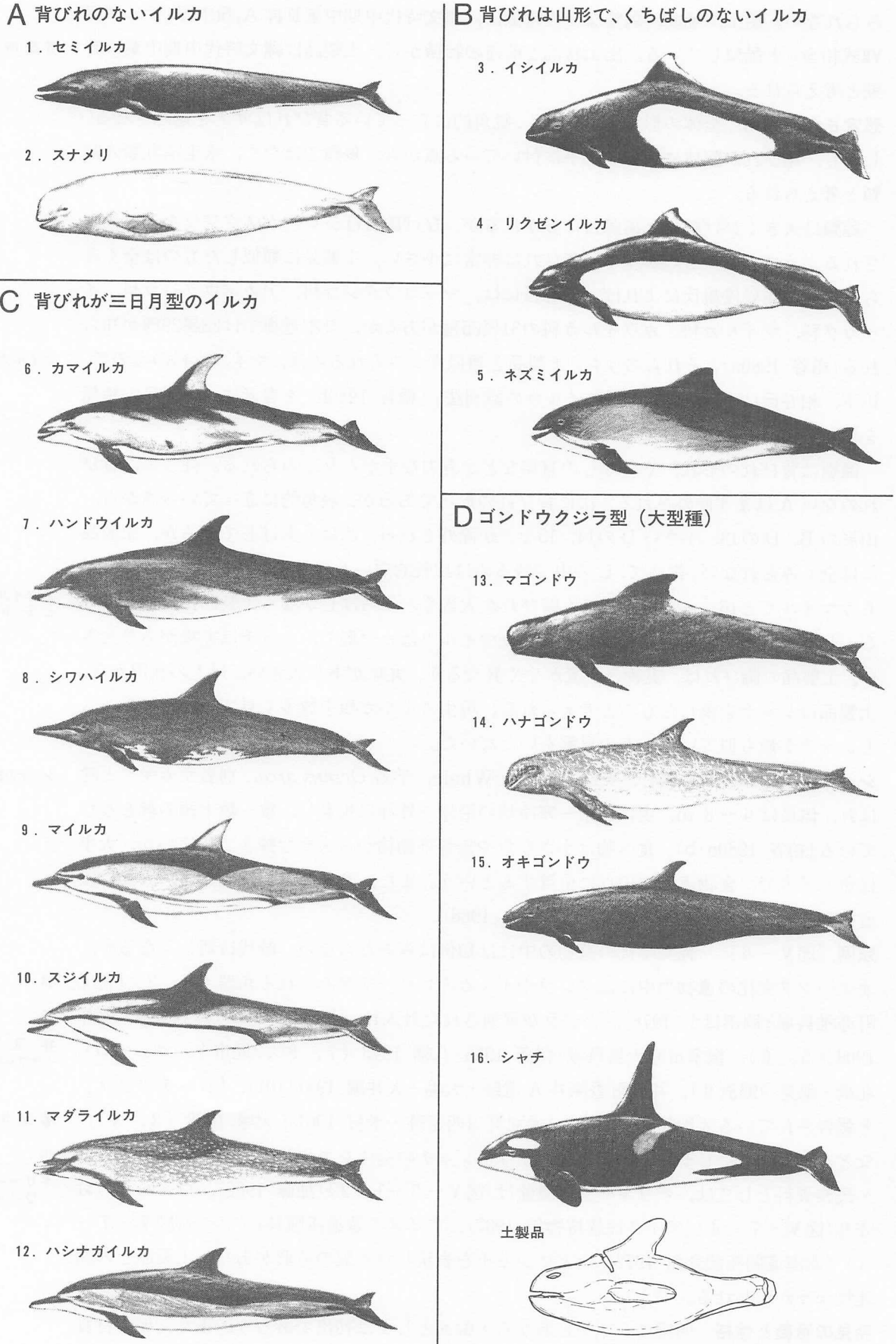
識別は背びれの形状，くちばしの有無などが有力な手がかりとみられる。従って，背びれのないAはまず除外される。次に背びれの形状であるが，鋭角的に立っている点から，山形のB，Dの13，小さいDの14，15などが除外される。次はくちばしであるが，土製品には全くみられない。従って，Cの中で残るのは比較的短い6のカマイルカである。残った6カマイルカと16シャチはいずれも背びれが大きく，くちばしがなく土製品に酷似している。しかし，胸びれの形状を比較するとカマイルカはカマ形で，シャチは丸味があり大きい。土製品の胸びれは，実物と位置がやや異なるが，丸味があり大きい。以上の状況から，土製品はシャチを模したものと考えられる。現生のイルカ類を数多く見ている粕谷氏からもシャチが最も似ている，との見解をいただいた。 カマイルカとシャチ

シャチ　マイルカ科に属し，英語でKiller Whale，学名 *Ovinus orca*，別名サカマタと呼ばれ，体長は6～8 m，主に温帯～寒冷域の沿岸～外洋に生息し，数～数十頭の群をなしている（粕谷 1980a・b）。食べ物は小さな魚や無背椎動物から大きな鯨まで幅広いが，大半は魚とイカで，食物連鎖の頂点に位置するという。また，サメなどとは異なり，人間には直接害をあたえないらしい（K. バルカム 1986）。 シャチの特徴

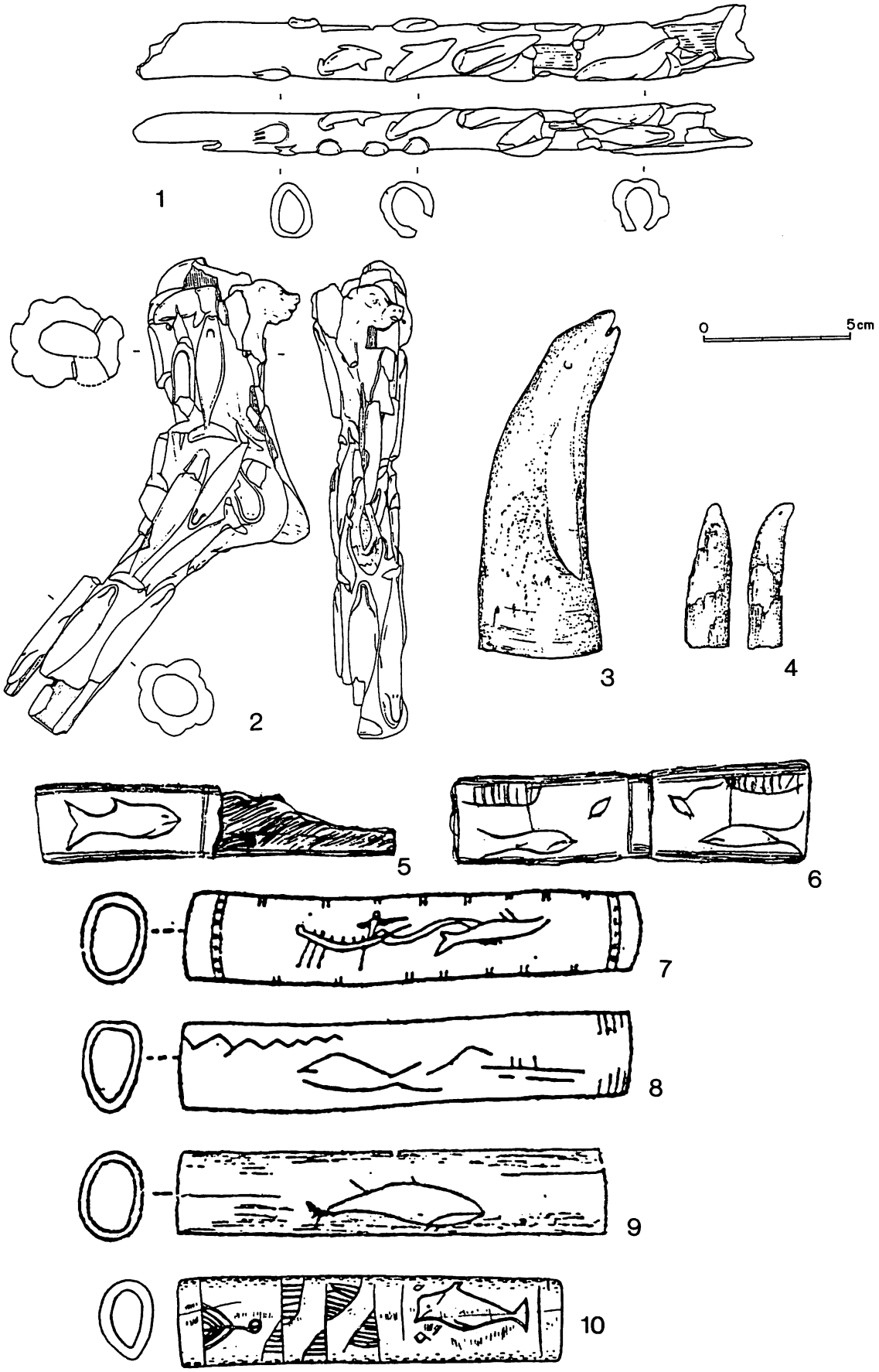
類例（図Ⅴ－6）　縄文時代の遺物の中には類例はみあたらない。時代は新しくなるが，オホーツク文化の遺物の中にはクジラやイルカのレリーフがみられる角器（1，2）（利尻町亦稚貝塚・岡田ほか 1978），クジラが線刻された針入れ（5～10）（樺太鈴谷貝塚・坪井 1908（5，6），根室市弁天島貝塚・伊藤 1935・八幡 1943（7，8），同市トーサムポロ・北構・須見 1953（9），礼文町香深井A遺跡・大場・大井編 1981（10）），「シャチクジラ」と報告されている牙製品（3，4）（湧別町川西遺跡・米村 1961・大塚 1968（3，4））などがみられる。しかし，本土製品のようにシャチの全体を表現した造形はない。 亦稚　鈴谷　弁天島　トーサムポロ　香深井A　川西

民族資料としては，ギリャークの魔除け（図Ⅴ－7－1，2）（加藤 1986），ウィルタのお守り（図Ⅴ－7－4）（アイヌ民族博物館 1987），アイヌの豊漁祈願具（イノカ）（図Ⅴ－7－3）（北海道開拓記念館 1972）などにシャチを表現した木製の造形があり，土製品との関連性がうかがわれる。 ギリャーク・ウィルタ

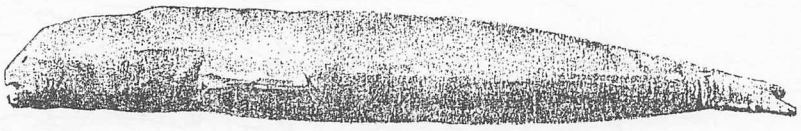
発見の意義と性格　明確にシャチとわかる土製品としては初出であろう。また，他の材質のものを含めても，これほど写実的なシャチの造形はみられない。縄文時代における動物



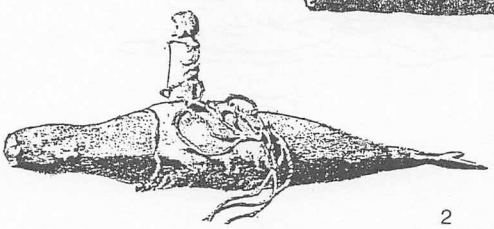
図Ⅴ－5　日本近海のイルカ（粕屋1980ｂ）と動物形土製品



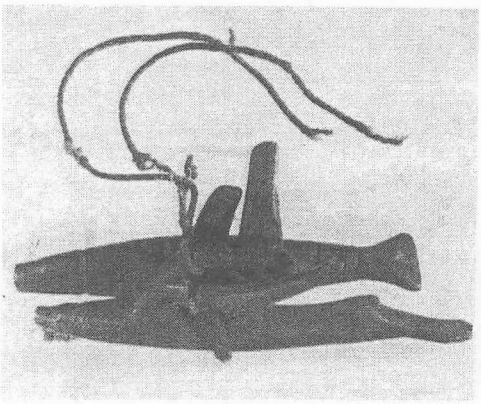
図V－6　オホーツク文化のクジラを表現した遺物（1～4：½　5～10：1/1）



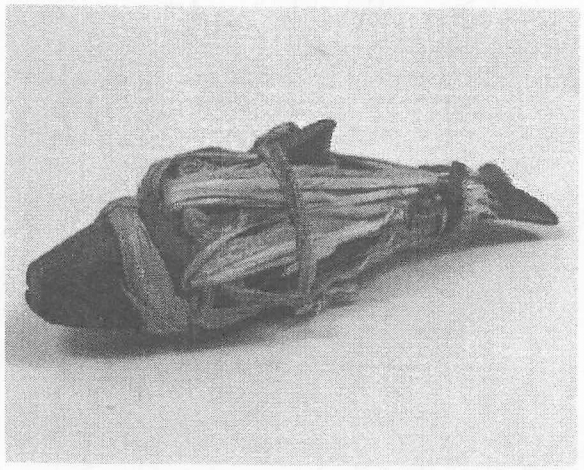
1



2



3



4

図Ⅴ－7　民族資料にみるシャチの造形

形土製品はイノシシ，クマ，イヌ，サルなど陸上動物を表現したものが多く，水生動物ではカメを表現したものがみられるだけである（江坂 1974）。また，土器の把手や絵画などを含めても水生動物を表現したものは少ない。従って，本土製品は縄文人の造形世界の粋を広げたと同時に，シャチに関する精神世界の存在を裏付ける資料といえる。

アイヌ文化のシャチ

シャチを表現した民族資料として，魔除け，お守り，豊漁祈願具などの木製の造形があることはすでに紹介したが，それらの背景にはいずれもシャチを尊ぶ精神世界の存在がある。例えばアイヌ文化において，シャチは鯨を恵んでくれる神様で，「トマリ・コル・カムイ」（入江を支配する神様），「アツイ・コル・カムイ」（海を支配する神様），「レプン・カムイ」あるいは「レポルン・カムイ」（沖の神様），「カムイ・チシ」（神様の舟），「チオハヤク」（我等が恐れ，かしこむ神様），「イソ・ヤンケ・カムイ」（海幸を浜へ上げる神様）などと呼ばれ，海岸の岩や崖や岬の上などにその祭壇を設けて，古くは「鯱祭」などを行ったらしい，という（知里 1954），一般には「レプンカムイ」（沖の神）と呼ばれることが多く，山の神である熊と対峙され，ユーカラではシャチの男性は多感で，やさしい心情の持ち主として描かれることが多いらしい（萩中 1980）。

レプンカムイ

イルカ猟

北海道の縄文時代におけるイルカ猟は，道東部や噴火湾を中心に積極的に行われ（西本 1984），特に噴火湾では縄文時代以降近世に至るまで，オットセイやイルカ，クジラを対象とした海獣狩猟の伝統が維持されていた，という（西本 1985）。しかし，シャチの遺存体の検出はほとんどなく，積極的に狩猟対象とはなっていない。それは，全国的な状況も同

海獣狩猟

様でまれに大型の歯が検出され，垂飾品に利用されている場合がある，という（金子・忍沢 1986)。シャチが積極的に捕獲できないのは，その生態からみても当然のことと思われる。

狩猟儀礼

一方，動物を介した縄文時代の狩猟儀礼は，早・前期の「小地域・集団の域を出ない豊猟願望」，中期の「他の様々の儀礼との重畳化」，後・晩期の「広範な地域で共通化」という展開を示し，さらに後・晩期はイノシシ形土製品祭祀，火を介在させる「送り」の儀礼の普遍化，下顎骨祭祀の出現がみられる，という（土肥 1985)。さらに，イノシシ形土製品は表現の特徴から「狩猟民共通の属性を集約化した土製品」(土肥 1985) で，「シカの中手・中足骨の選択的骨角狩猟具製作」と表裏一帯をなし，縄文時代の狩猟社会構造を特徴づけるものである，という（土肥 1981)。

イノシシ形土製品

おそらく，シャチ形土製品もイノシシ形土製品と同様な性格が考えられるが，シャチ形土製品は海をめぐる狩猟・漁撈活動に伴う儀礼と深く関連するものであろう。シャチはその生態から積極的な狩猟対象とは考えられないので，その土製品は海に生息するものすべてを象徴し，その背景には前述したアイヌ文化などと同様にシャチを重要視する習慣があったことが考えられる。イノシシ形土製品は．秋の狩猟シーズンの直前に製作され，屋外でその一部を欠く行為が行われた，という（土肥 1981)。シャチ形土製品も，欠損および破損した状態で出土し，土器や石器の破損品とともに住居跡の凹みに投棄されていた。従って，土製品の使用は，日常的に行われたものではなく，イノシシ形土製品と同様，単発的なものであった可能性が強い。さらに推定すれば，シャチ形土製品は，単にシャチ＝海の神様のみを表現したものでなく，「海の生きもの」を代表し，さらに「強さ」をも示しているものであろう。従って，シャチ形土製品による祭祀は，土肥氏のいう中期の狩猟儀礼の「重畳化」現象と関連し，単に豊猟祈願だけでなく，様々な他の儀礼（葬送・誕生・祖霊崇拝など）と結びついていた可能性がある。

海をめぐる儀礼

シャチ形土製品

儀礼の重畳化

また，シャチ形土製品がある種の儀礼に使用されたものであるとすれば，アイヌ文化の「イナウキケ」(削り掛けの房)（高倉 1969）や，ウイルタのお守り（図Ⅴ－7－4）などにみられる飾りなどが付けられた可能性があり，土製品の噴気孔の後ろにある横一文字の沈線は，それらを固定する際の凹みではないか，と考えられる。

イナウキケ

土製品は1点のみの出土であるが，「シャチ」と同定できたことによって，アイヌ文化や北東アジアの民族文化のシャチに関する意識や造形と比較することができた。その結果，縄文時代においても「シャチ」を重要視する観念が存在した可能性が考えられ，さらに，縄文人の豊かな造形能力を再確認することができた。また，民族資料は木製品であることから，縄文時代においても木製品の存在は予想されるが，土製品という材質の特徴は，土偶や土製仮面などの造形同様，縄文文化における土との親和性を示すものであろう。

土との親和性

（長沼　孝）

4　旧石器について

旧石器発見の意義と石材の特色　本遺跡での旧石器出土は，函館周辺地域においては，隣接する石川１遺跡に次ぐものである。しかし，それは単に隣接遺跡における共通性として処理されるべきものではなく，周辺地域での旧石器時代遺跡のより多くの存在の可能性を示すものである。

北海道南西部の旧石器時代の遺跡については，かつて分布状況を整理した（㈶北海道埋蔵文化財センター 1984a）が，その後，昭和61年度に石川１遺跡（㈶北海道埋蔵文化財センター 1988a），木古内町新道４遺跡（㈶北海道埋蔵文化財センター 1988b）が，そして，昭和62年度に本遺跡が調査され，新たな展開が生まれつつある。また，これら三遺跡に，すでに調査されている知内町湯の里４遺跡（㈶北海道埋蔵文化財センター 1984b）を加えると，津軽海峡遺跡群とでも呼ぶことができ，北海道と本州の旧石器をつなぐ，キーポイントとなるものと考えられる。四遺跡はいずれも現海岸線より数 km 内陸に入った河川の右岸に位置する，という共通性があり，その状況は，海との「非親和的」な「現海岸線から一定距離内陸部」に入った「孤島状の分布」という全国的な細石刃文化の遺跡の立地傾向（鈴木 1985）と一致する。

石川１　新道４　湯の里４　立地の傾向

石材の特色　一方，石器類に利用されている石材をみると，いずれの遺跡でも，頁岩やめのう質頁岩などの在地産と考えられるものが主体で，原石の色や模様の特徴からある程度の母岩識別が可能で，本遺跡を含め，石川１，新道４遺跡などでも多数の接合資料が得られている。本遺跡の石材の主体はめのう質頁岩であることはすでに述べたが，それらはいずれも原石の状態で遺跡に持ち込まれ，剥片剥離作業が行われている。隣接する石川１遺跡においても，めのう質頁岩は原石の状態で遺跡に持ち込まれ，尖頭器の製作などが行われている。また，両遺跡の縄文時代の住居跡からもめのう質頁岩を利用したやり先またはナイフの破損品やその製作剥片などが出土している。以上の状況から，めのう質頁岩は桔梗２・石川１両遺跡よりそう遠くない場所に原石採取地が考えられる。しかし，遺跡の直面する石川および函館市内や七飯町南部の地域では，類似する原石を発見することはできなかった。

先の四遺跡のうち湯の里４，新道４，石川１の三遺跡では，明らかに持ち込みとみられる黒曜石製の石器が出土しているが，本遺跡では全くみられない。本遺跡は他の三遺跡に比べ，出土点数が少なく，調査も部分的であるため単純に比較することはできない。しかし，他の三遺跡がいずれも細石器を主体とする石器組成であるのに対し，本遺跡では細石器が全くない，という石器群の相違が反映しているとみられ，それらは年代差と関係する可能性がある。

黒曜石　年代差

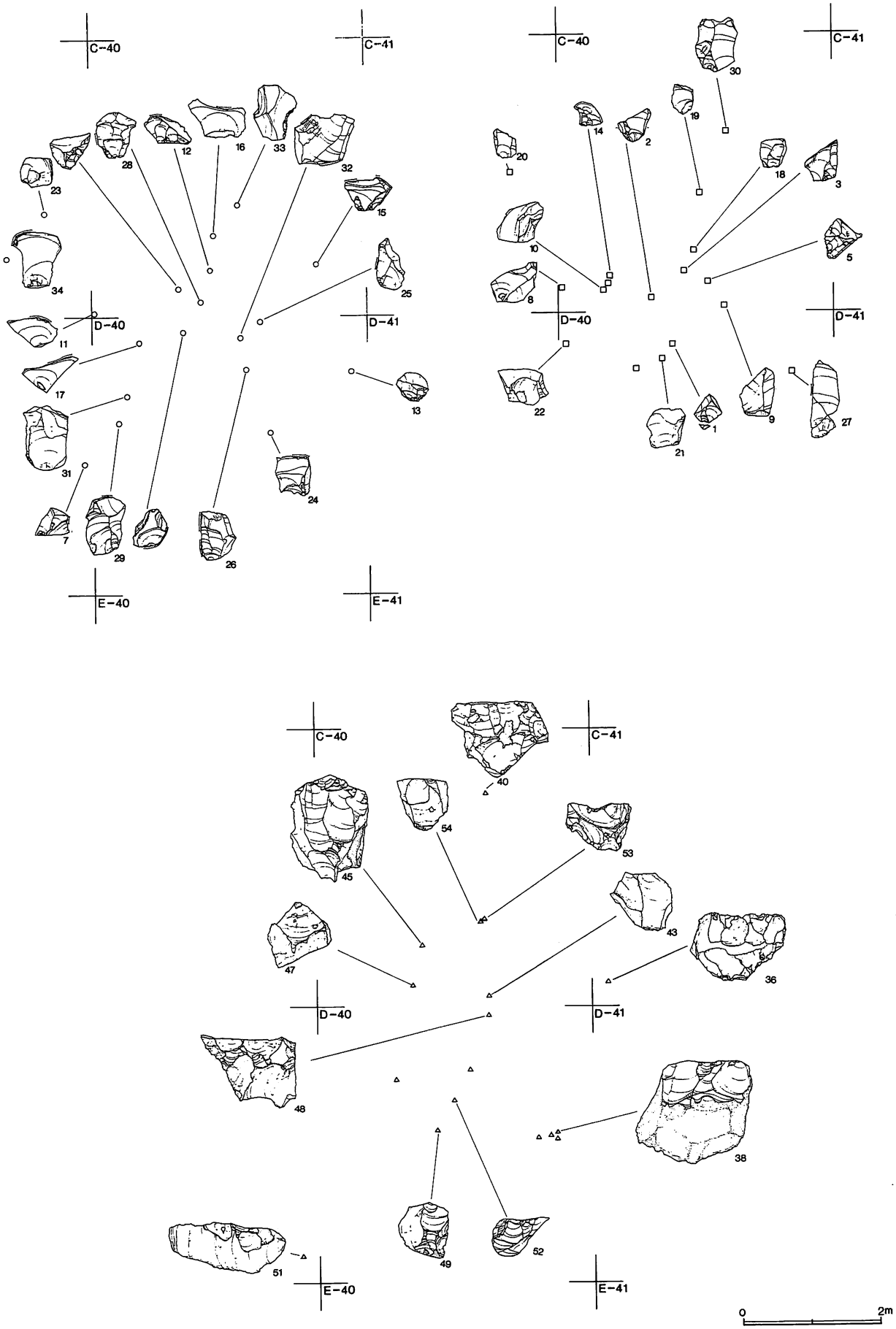
（長沼　孝）

剥片剥離の方法とナイフ様石器　KSb－１からは，ナイフ様石器19点，ナイフ様剥片15点，剥片774点，石核17点が出土した。これらは接合作業の結果，13個の母岩別資料が抽出され，うち８個は原材の大きさ，形状が確認できるまでに復元された良好な資料である。ここではそれら８個の母岩別資料をもとに剥片剥離の方法とナイフ様石器の特徴について述べる。

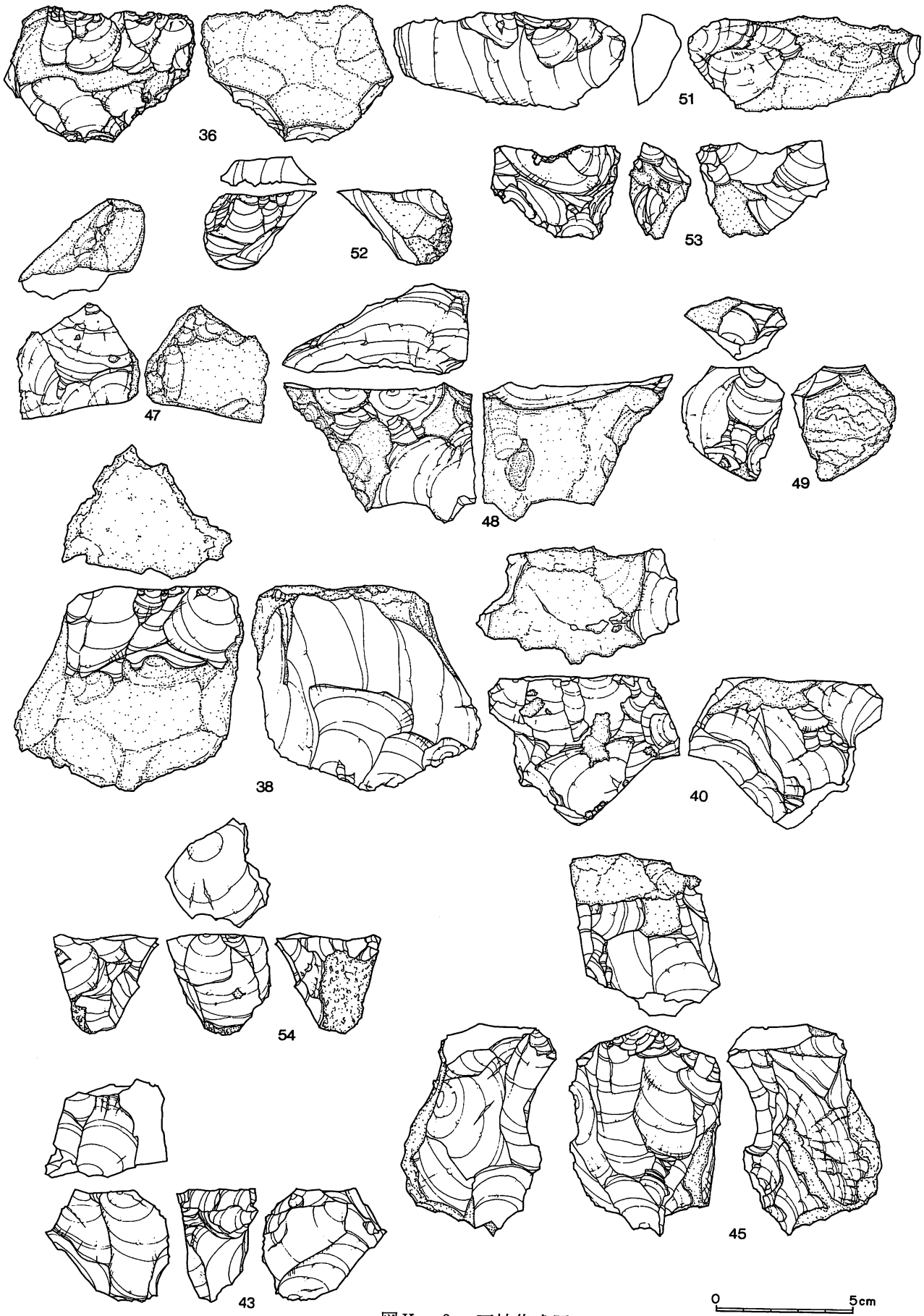
剥片剥離の方法は，以下のように分類される。

Ⅰ類：Ⅰ類：剥片を石核素材とするもので，背面の礫皮面ないし前段階の剥離面を打面とし，打点を横に移動させながら連続してその主剥離面から剥片を剥取している。残核は断面がレンズ状の形態をなすもので母岩別資料10の個体別資料Ａ，Ｂ，Ｃがこれに該当する。母岩別

Ⅰ類



図V－8　ナイフ様石器・ナイフ様剥片・石核の分布



図Ⅴ－9　石核集成図

資料6は礫が素材となっているが，剥片剥離作業はポジティブな面でおこなわれていることから，このグループに含まれるものと考えられる。

Ⅱ類：礫または分割礫を石核素材とするもので不規則な打面転位がおこなわれるもの。礫の形状に応じて打点移動の方向が異なるa，bの2種類がある。 Ⅱ　類

a　広い平坦な礫皮面がある角礫を素材とするものでおもな剥片剥離は礫皮面または分割面を打面とし，打点を横に移動させながら連続して剥片を剥取している。剥片剥離の直前に頭部調整がおこなわれる場合があり，加撃は平坦な面が確保されれば2方向以上からおこなわれている。残核は断面が三角ないし台形状の形態をなすもので，母岩別資料2・8と3の個体別資料A，Bがこれに該当する。母岩別資料2は分割面からも剥片が剥取されており，Ⅰとの折衷的な要素がみられる。 頭数調整

b　断面が三角をなす礫を素材とするもので，打点の位置や移動のありかたから剥片剥離は3段階に分けられた。打点の移動がa類と異なり後退もしくはジグザグ状におこなわれているのが特徴である。母岩別資料7が該当する。

Ⅲ類：礫または分割礫を素材とし，打面と作業面を交互にかえるもの。母岩別資料1・5と3の個体別資料Cがこれに該当する。残核にはすくなくとも3方向以上の剥離面がみられ，サイコロ状，角柱状の形態である。母岩別資料1・5は両接打面によって剥片剥離がおこなわれている。 Ⅲ　類

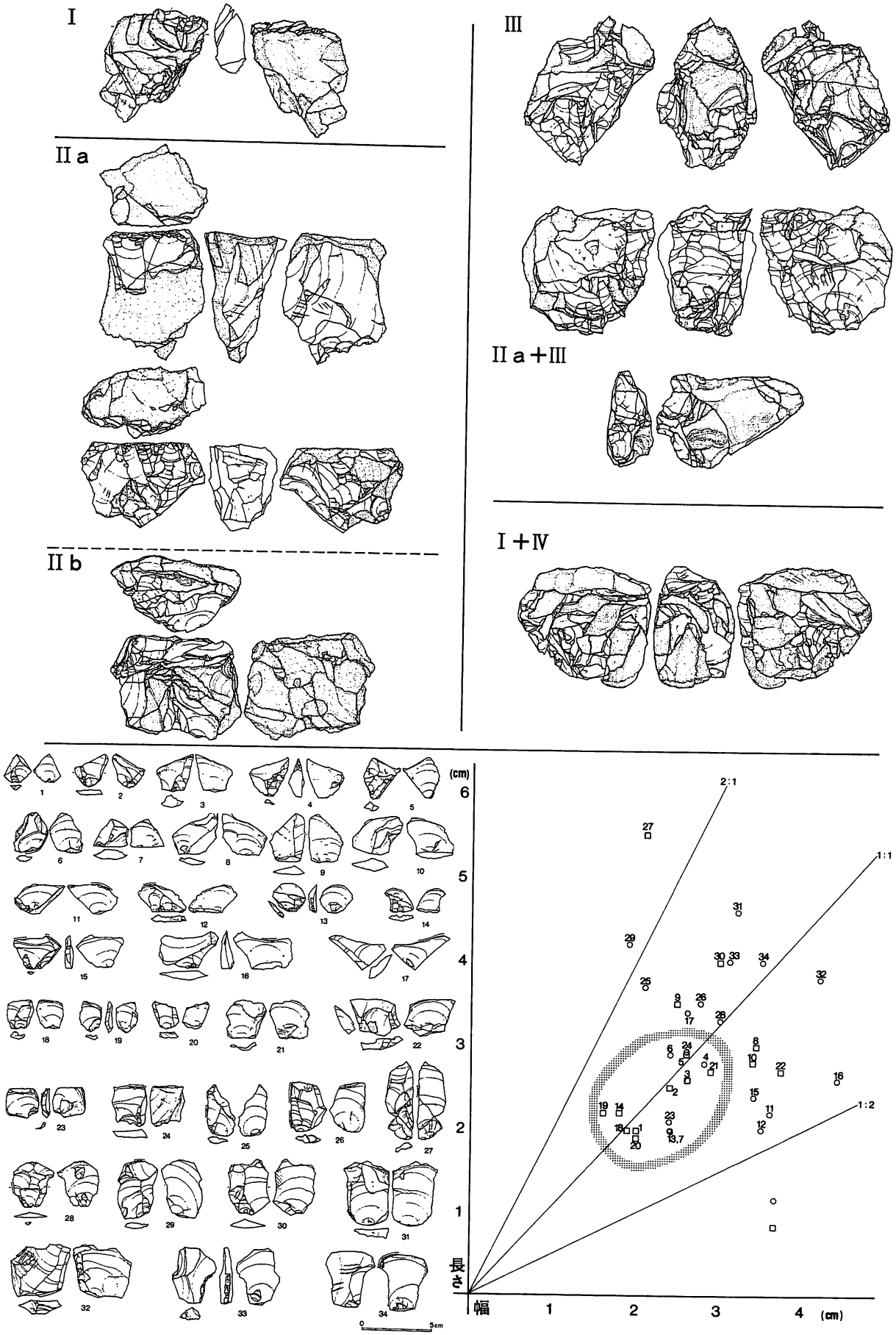
Ⅳ類：分割礫を素材とし，打面を次々に転位するもので母岩別資料10の個体別資料Dが該当する。 Ⅳ　類

これらは母岩別資料10にⅠとⅣが，母岩別資料3にⅢとⅡa類がみられるように分割という過程を介在させて2つ以上の方法が一母岩に並存する場合があり，それぞれが独立したものではなく相互に関連性をもった剥片剥離技術であると言える。また，ごく一部のものに頭部調整がみられる以外には石核調整技術をもたないこと，得られた剥片は規格性が乏しく，石刃技法とは大きく異なる点がⅠ～Ⅳ類に共通することとして指摘される。

ナイフ様石器は微細剥離のあるものと，二次加工のあるものに分けられた。微細剥離のあるものは，大きさ，形状が多種多様であり，微細剥離の位置には一定の傾向はみられない。二次加工のあるものは5点出土しているが，このうち母岩別資料10から連続して取られた4・23と13は大きさ，形態，素材の用い方から台形様石器の一種と考えられる。これらは長さ，幅ともに3cm以下で，長幅比が1に近いものである。図Ⅴ－10には図示したすべてのナイフ様石器，ナイフ様剥片の長さと幅をグラフで表わした。これによると4・13・23の素材と考えられるものとして1・2・3・5・14・18・19・20・21が抽出される（ドッドスクリーントーン内）。このうち1には古い折れ面があり，13に見られる折れ面と同様に先の条件を満たすために折断される可能性が考えられる。数少ない例であるが，これ以外の剥片についても折れの位置，方向について注意する必要がある。

ナイフ様石器　台形様石器　ナイフ様剥片　折断の可能性

礫群について　KSb－1からは総重量1,062.2gをはかる礫534点が出土した。Ⅲ章ですでにふれたようにこれらは石器の集中する部分の中心部，径2mの範囲から，すべて火熱を受けて細かく破砕した状態で出土している。接合の結果，3個は原石の形状がわかるまでに復元された。個々の大きさは8.8×6.7×3.8cm（図Ⅲ－147－55），8.0×5.9×3.4cm（図Ⅲ－147－56），6.9×3.8×3.4cmで，重量はそれぞれ243.7g，199.3g，89.0gで，残りの礫の破砕度からみて，さらに接合したとしても，おおよそ図Ⅲ－147－56程度の大きさのもの



図Ⅴ－10　母岩別資料・ナイフ様石器・ナイフ様剝片集成図

5～6個が復元される程度と考えられる。表面は変色が著しいが，タール状の付着物は認められない。石材には頁岩，砂岩，安山岩があり，大きさからみても現在，遺跡東側を流れる石川の河床礫の中から採取できるもので，石器石材であるめのう質頁岩とは状況が異る。

北海道における旧石器時代の礫群は佐藤によって5遺跡10例が整理されている（佐藤 1987)。それによると千葉の石器編年（千葉 1985b）に呼応させ年代別に「礫群Ⅰ・Ⅱ・ⅡI期」に分けられるとしている。礫群Ⅰ期は勢雄遺跡C・Dブロック，上似平遺跡礫群1・2に代表されるもので，礫群の特徴として，礫が火熱をうけていること，炭化物の集中が認められることをあげ，これを調理活動の発達を示唆するものとして位置づけている。礫群Ⅱ期は情報量が少ないことから，今後の検討課題としている。礫群Ⅲ期には立川遺跡第Ⅰ地点・美利河1遺跡・上似平遺跡Aブロックがあり，礫群の規模や分布に変化がみられることから，「…調理以外にも礫群が多目的に利用されているのかもしれない。」とその特徴をまとめている。 **礫群の分類**

KSb－1の礫群は，被火熱礫が高比率であること，焼け礫の分布範囲が上似平遺跡礫群1の2×2 m，同遺跡礫群2の2.5×2 mと礫群Ⅰ期と状況が近似している。しかし，総重量をみると，上記礫群は27.54kg，6kgで本遺跡の1kgとは大きく異なり，炭化物の集中も認められないなど異なった状況もみられる。何らかの性格の違いが反映しているのかもしれない。こうした問題は母岩別資料のブロック内での動きなどとも関連させて解明する必要があろう。 （石川 朗）

編年的位置 発見された2ヵ所の石器ブロック（KSb－1，2）は，調査区域の北端と南端に分れて確認され，さらに石器組成や石材なども大きく違い，異なった石器群と考えられる。

KSb－2は，1個体のみの出土であるが石刃がみられ，石刃技法と関連した石器群と思われるが，点数が少ないのでその内容は不明である。 **石刃技法**

KSb－1は，他の石器群との層位的関係や隣接する石川1遺跡の細石刃文化の石器群との接合関係などは確認できず，編年的位置付けが可能な状況証拠は得られなかった。さらに，炭化木片や黒曜石製の石器などが全く発見されず，理化学的な年代測定も行うことができなかった。また，旧石器出土部分直下のロームの分析を行い，石川1遺跡の基本層準のロームの分析と比較したところ，石川1遺跡の出土層準がローム層の上部であるのに対し，KSb－1の場合はローム層の下部に位置付けられる可能性が指摘されている（Ⅳ2参照）が，確定できる状況にはいたっていない。 **状況証拠** **年代測定** **ローム分析**

KSb－1の石器群には石刃技法の存在は認められず，主要な石器がナイフ様石器・剥片であるという特徴は，道内では「……祝梅三角山，嶋木，勢雄D，帯広空港南Aなどの石刃技法が存在せず切り出し形を含む祖型ナイフ形石器を特色とする石器群……」（千葉 1985）に類似した内容で，現時点では最古の石器群の一つとして位置付けられる可能性がある。しかし，これらの遺跡では接合資料が乏しく，「祖型ナイフ形石器」や剥片の形状からの剥片剥離技術にはいくつかの共通点を見ることができるが，接合資料にもとずいた剥片剥離技術の直接的な比較は難しい。 **最古の石器群**

一方，東北地方に目を転じれば，秋田県においてナイフ形石器に伴う接合資料が多数報告されている（秋田県教育委員会 1984・1985)。さらに，県内で検出されている「剥片生 **秋田県**

米ヶ森技法

産技術」は「石刃技法・米ヶ森技法・不定形剝片技法」などがみられる（大野　1986）という。

「米ヶ森技法」（協和町教育委員会　1976・1978，藤原　1984）は，米ヶ森型台形石器の素材を連続して得るもので，剝片を素材とする石核であること，剝片剝離が石核素材の主剝離面でおこなわれること，得られる剝片の背面は常に「直前の剝離痕が形成する凹部」と「平坦な石核素材の主剝離面」で構成されるという「法則」（藤原　1984）がある点は，Ⅰ類としたもののうち，母岩別資料６などが関連するものとみられる。

不定形剝片技法

「不定形剝片技法」と呼ばれているものは，「……長幅指数100前後の目的剝片を連続的に剝離しようとする意図が十分看取される剝片生産技術」で，「１つの石核において分割面などの他に新たに打面が用意されること」はなく，特徴からＡ～Ｅの五種類に分けられる（大野　1986）という。Ａ～Ｅの特徴は以下のとおりである。

Ａ：石核の平坦面を打面とし，打面をかえずに剝片剝離作業を行う。

Ｂ：立方体か直方体に近い石核の稜線のうち，直角に近い角度をなす稜線の両側から交互剝離状に剝片剝離を行う。

Ｃ：球か楕円球に近い石核で，打面と作業面を変えながら，石核を転がすように剝片剝離を進める。

Ｄ：盤状あるいは板状の石核の一端から連続的に剝片剝離を行う。

Ｅ：柱状の石核に打面を両設して交互に剝片剝離を行う。

詳細な検討は行っていないが，概ね本遺跡のⅡａ類，Ⅲ・Ⅳ類，Ⅲ類の一部（母岩別資料１・５）はそれぞれＡ，Ｃ，Ｅと同様の剝片剝離技術と考えられる。

以上，KSb－１にみられる剝片剝離技術は，秋田県内において確認されている「米ヶ森技法」と「不定形剝片技法」に関連する可能性が強いことが明らかになった。しかし，秋田県内の遺跡では両者が共存している例はなく，その状況は若干異っている。また，石器組成にも違いがみられ，単純に比較できないことも事実であるが，近縁関係にある石器群であることは間違いなさそうである。

立野ヶ原系石器群

秋田県内の石器群の編年的位置付けや年代については，かならずしも明確になっていないが，それらは「東北地方の後期旧石器時代の中では古い一群」で，北陸地方を中心に確認され，その後汎日本的な広がりがみられる「立野ヶ原系石器群」と類似点があることが指摘されている（麻柄　1986）。

従って，本遺跡のKSb－１の石器群は，秋田県内で確認されている剝片剝離技術を介して汎日本的な「立野ヶ原系石器群」と関連性をもっていることが考えられる。さらに，これらの状況は，前述した現時点での北海道最古の石器群の全国的な位置付けへ発展する問題も含んでいる。そのような意味で，本遺跡のKSb－１の石器群は本州と北海道の細石刃以前の石器群における間隙を埋める重要な鍵を握っているものといえ，今後も詳細な検討を行っていきたいと考えている。

立野ヶ原系石器群

最古の石器群

（石川　朗，長沼　孝）

引用・参考文献

アイヌ民族博物館　1987　『ソビエト連邦極東少数民族展』㈶白老民族文化伝承保存財団
秋田県教育委員会　1984　『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡』発掘調査報告書　秋田県文化財調査報告書　第114集
秋田県教育委員会　1985　『七曲台遺跡群』発掘調査報告書　秋田県文化財調査報告書125集
伊藤初太郎　1935　『考古学上の根室の遺物と遺跡』
宇田川　洋　1979　「北海道縄文時代中期の住居址」『茅沼遺跡群』－釧路川中流域の遺跡－
江坂輝弥　1974　「動物形土製品」『古代史発掘』3　土偶芸術と信仰　講談社
大塚和義　1968　「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」『物質文化』11　物質文化研究会
大沼忠春　1981a　「道央部の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』第17輯
大沼忠春　1981b　「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第66巻第4号
大沼忠春　1984　「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』第20輯
大沼忠春　1986　「道南の縄文前期土器群の編年について（Ⅱ）」『北海道考古学』第22輯
大野憲司　1986　「秋田県の旧石器時代における剝片生産技術について」北陸旧石器シンポジウム　1986『日本海地域における旧石器時代の東西交流』発表要旨　北陸旧石器文化研究会，近畿旧石器交流会
大場利夫・大井晴男編　1981　『香深井遺跡』下　オホーツク文化の研究3　東京大学出版会
岡田淳子・樋田光明・西谷栄治ほか　1978　『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
粕谷俊雄　1980a　「イルカの生活史」『月刊アニマ』No.90　平凡社
粕谷俊雄　1980b　「日本近海のイルカの識別法」『月刊アニマ』No.90　平凡社
加藤九祚　1986　『北東アジア民族学史の研究』恒文社
金子浩昌・忍沢成視　1986　『骨角器の研究』縄文篇Ⅰ　慶友社
北構保男・須貝　洋　1953　「北海道根室半島・トーサムポロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』第24号国学院大学考古学会
協和町教育委員会　1976　『米ヶ森遺跡発掘調査略報』
協和町教育委員会　1978　『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』
児玉作左衛門ほか　1958　『サイベ沢遺跡』－函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書
佐藤訓敏　1987　「結語」『帯広・上似平遺跡2』帯広市埋蔵文化財調査報告第6冊
鈴木忠司　1985　「再論日本細石刃文化の地理的背景」『日本原史』吉川弘文館
鈴木　守・長谷川潔・三谷勝利　1969　5万分の1地質図幅「東海」北海道開発庁
瀬川秀良　1974　日本地形誌北海道地方　303pp.　朝倉書店
瀬川秀良　1975　「西桔梗遺跡と段丘形成について」千代　肇編『西桔梗』（再版）583pp.　函館市文化財保護協会　pp.24－32
高倉新一郎　1969　「イナウ」『アイヌ民族誌』アイヌ文化保存対策協議会
高橋正勝　1974　「日ノ浜型住居跡」『北海道考古学』第10輯
高橋正勝　1981　「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』第4巻　縄文土器Ⅱ　雄山閣
高橋正勝　1972a　「北海道における縄文時代中期の終末(1)」『北海道青年人類科学研究会会誌 No. 9』
高橋正勝　1972b　「北海道における縄文時代中期の終末(2)」『北海道青年人類科学研究会会誌 No.10』
千歳市教育委員会　1974　『祝梅三角山地点』－北海道千歳市祝梅における旧石器時代遺跡の発掘調査
千葉英一　1985a　「日本の旧石器－第1回－北海道(1)」『月刊考古学ジャーナル』No.245　ニューサイエンス社
千葉英一　1985b　「日本の旧石器－第3回－北海道(3)」『月刊考古学ジャーナル』No.249　ニューサイエンス社
知里真志保　1954　「ユーカラの人々とその生活」『歴史家』第3号（『知里真志保著作集』3所収）
坪井正五郎　1908　「カラフト石器代遺跡発見の鳥骨管」『東京人類学会雑誌』第23巻第263号
土肥　孝　1981　「動物の土偶と狩猟祭祀」『月刊アニマ』No.96　平凡社
土肥　孝　1985　「儀礼と動物」『季刊考古学』第11号　雄山閣
名取武光　1936　『北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相』北大博物館報告（『アイヌと考古学』㈠名取武光著作集Ⅰ所収）
日本貨幣商協同組合　1987　『日本貨幣型録』
西本豊弘　1984　「北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈」『国立歴史民俗博物館研究報告』第4集　国立歴

史民族博物館
西本豊弘　1985　「北海道の狩猟・漁撈活動の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集　国立歴史民族博物館
萩中美枝　1980　『アイヌ文学ユーカラへの招待』北海道出版企画センター
函館市教育委員会　1981　『権現台場遺跡発掘調査報告書』
函館市教育委員会　1979　『見晴町B遺跡発掘調査報告書』
函館市教育委員会　1985　『サイベ沢遺跡」
函館市教育委員会　1986　『サイベ沢遺跡Ⅱ』
函館市文化財保護協会　1975　『西桔梗』－函館圏流通センター建設用地内遺跡調査報告書
橋本　正　1976　『竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23巻3号
長谷川潔・鈴木　守　1964　5万分の1地質図幅「五稜郭」北海道立地下資源調査所
K.バルカム　1986　『力を合わせる殺し屋たち－シャチの捕食戦略」『動物大百科』2　海生哺乳類　平凡社
藤原妃敏　1984　「米ヶ森技法」『月刊考古学ジャーナル』No.229　ニュー・サイエンス社
北海道開拓記念館　1972　『北方民族展資料目録』
㈶北海道埋蔵文化財センター　1984a　『今金町美利河1遺跡」㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告　第23集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1984b　『湯の里遺跡群』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告　第18集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1986　『建川1・新道4遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告　第33集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1987　『建川2・新道4遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告　第43集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1988a　『函館市石川1遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告　第45集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1988b　『新道4遺跡』㈶北海道埋蔵文化センター調査報告　第52集
麻柄一志　1986　「立野ヶ原型ナイフ形石器及び立野ヶ原系石器群について」北陸旧石器シンポジウム1986『日本海地域における旧石器時代の東西交流』発表要旨　北陸旧石器文化研究会，近畿旧石器交流会
松下　亘　1968　「北海道とその隣接地域の動物意匠遺物について」『北海道考古学』第4輯　北海道考古学会
三谷勝利・小山内熙・松下勝秀・鈴木　守　1965　5万分の1地質図幅「函館」北海道立地下資源調査所
三谷勝利・鈴木　守・松下勝秀・国府谷盛明　1966　5万分の1地質図幅「大沼公園」北海道立地下資源調査所
村越　潔　1974　『円筒土器文化』考古学選書10　雄山閣
森田知忠・高橋正勝　1967　『サイベ沢B遺跡調査報告』市立函館博物館，亀田町教育委員会
八幡一郎　1943　「骨製針入」『古代文化』第14巻8号（『八幡一郎著作集』第四巻所収）
米村喜男衛　1961　『北海道紋別郡湧別町川西遺跡』網走郷土博物館シリーズ1（『北方郷土・民族誌』3所収）

表1　住居跡一覧

遺構	発掘区	平面形	規模				土器		石器等		備考
			確認面(m)	床面(m)	深さ(m)	床面積(㎡)	床面	覆土	床面	覆土	
KH－1	C・D－41	円形	3.26 × 3.24	3.21 × 3.12	0.11	9.04		中3		フレイク1	
－2	C－40	楕円形	2.20 × 1.84	2.09 × 1.66	0.16	2.69			スクレイパー1、フレイク6	フレイク11、礫6	KP-10に切られる。
－3	E・F－38・39 F－40	隅丸長方形	5.50 × 4.70	5.04 × 4.12	0.78	18.45	中2	早1、前1 中392	石鏃、スクレイパー1、ドリル1、Uフレイク453、礫1	スクレイパー10、すり石1、Uフレイク2、台石・石皿3、フレイク355、石斧2、砥石1、たたき石2、礫58	
－4	F・G－35・36	楕円形	3.66 × 3.20	3.34 × 2.94	0.40	7.77				スクレイパー1 フレイク36	KP-38に切られる。
－5	G－37	隅丸方形	3.23 × 2.94	3.01 × 2.93	0.94	6.98		早1、前3 中650	スクレイパー1 フレイク1	石鏃1、礫100、スクレイパー9、土製品4、フレイク139、たたき石3、すり石2	KH-6を切る。 KP-44に切られる。
－6	F－37 G－36・37	隅丸長方形	4.21 × 3.44	4.02 × 3.30	0.38	12.35	中78	前1	フレイク1	フレイク4、礫1	KH-5、KP-44に切られる。
－7	G－15・16	多角形	3.28 × 2.83	3.04 × 2.64	0.34	5.46		前9 中70	礫19	槍先・ナイフ1、フレイク14、スクレイパー2、台石・石皿1	
－8	F・G-12～14 H－13・14	楕円形	9.70 × 5.66	9.50 × 5.20	0.14	37.82	中149	中24	石鏃1、すり石1、スクレイパー15、礫2、フレイク22	スクレイパー1、石斧1、フレイク3、礫11	
－9	G－23	隅丸方形	2.18 -× 1.97	1.99 × 1.90	0.26	3.09		中8			
－10	E・F－21・22	隅丸長方形	4.19 × 3.45	3.96 × 3.26	0.36	11.11		中155	石鏃1、フレイク2 スクレイパー9	スクレイパー14 礫18、フレイク57	
－11	E－20・21	〃	4.02 × 3.33	3.88 × 3.06	0.38	10.24	中33	中204	石鏃3、たたき石4、槍先・ナイフ2、礫2、スクレイパー6、フレイク286	石鏃4、すり石1、スクレイパー3、礫3、フレイク156、たたき石1	
－12	E－17・18	隅丸方形	2.81 × 2.44	2.68 × 2.21	0.31	5.06		中734		スクレイパー5、たたき石1、フレイク20、礫11、土製品1	KP-73を切る。
－13	G・H－9・10	円形？	4.80 ×(2.34)	4.26 ×(2.21)	0.64	(7.70)		前3、中9	石鏃1、礫5、フレイク3	つまみ付ナイフ1、すり石1、スクレイパー4、礫2、フレイク36	KH-14を切る。
－14	G・H－10・11	隅丸長方形	5.28 ×(3.90)	5.09 × 3.68	0.36	(15.94)	中20	早1、前1 中2,007	フレイク2、礫2	石鏃4、石斧1、槍先・ナイフ23、たたき石11、つまみ付ナイフ3、すり石1、スクレイパー35、砥石1、ドリル2、台石・石皿3、Uフレイク7、土製品2、フレイク10,047、石製品2	KH-13に切られる。
－15	G・H－17	隅丸方形	2.30 × 2.06	2.12 × 1.78	0.38	3.05	中24			スクレイパー3、礫2、フレイク3	
－16	E・F-10～12	隅丸長方形	5.32 × 4.20	4.79 × 3.56	0.50	15.30		前1 中2,332	スクレイパー2 フレイク24	石鏃7、石斧3、槍先・ナイフ2、たたき石2、スクレイパー39、すり石1、Uフレイク3、台石・石皿4、フレイク5,061、礫33	KH-19、KP-92を切る。 KP-91に切られる。
－17	D・E-14～16 F－15・16	楕円形	——	10.50 × 6.44	—	53.46		中24		つまみ付ナイフ1、石斧1、スクレイパー3、たたき石1、Uフレイク1、礫2、フレイク669	KP-69、70、71を切る。 KP-89に切られる。
－18	D・E-8～10 F－9	隅丸長方形	5.66 × 4.33	5.20 × 3.88	0.44	18.09	中59	前2 中549	石鏃2、スクレイパー4、石核2、フレイク72、たたき石1、台石・石皿1、砥石5、礫9、土製品1	石鏃1、たたき石1、槍先・ナイフ2、台石・石皿1、スクレイパー4、フレイク414、礫4	KH-19を切る。
－19	E・F-9～11	五角形	7.60 × 6.74	7.48 × 6.46	0.58	41.74	中61	前2 中3,764	スクレイパー2、石斧1、石核1、礫6、フレイク8	石鏃8、石斧1、ドリル1、槍先・ナイフ1、たたき石9、つまみ付ナイフ2、すり石12、スクレイパー20、フレイク150、礫358、土製品2、石製品3	KH-16、18に切られる。

表2　住居跡付属ピットの深さ一覧

住居跡番号	HP	深さ(cm)	住居跡番号	HP	深さ(cm)	住居跡番号	HP	深さ(cm)	住居跡番号	HP	深さ(cm)	住居跡番号	HP	深さ(cm)
KH－1	1	28	KH－8	2	70	KH－10	9	36	KH－16	1	66	KH－19	2	58
KH－3	1	63	〃	3	80	〃	10	17	〃	2	50	〃	3	83
〃	2	58	〃	4	78	〃	11	46	〃	3	55	〃	4	52
〃	3	72	〃	5	75	KH－11	1	32	〃	4	46	〃	5	30
〃	4	75	〃	6	63	〃	2	34	〃	5	68	〃	6	10
〃	5	26	〃	7	74	〃	3	60	〃	6	100	〃	7	60
〃	6	66	〃	8	67	〃	4	40	KH－17	1	28	〃	8	65
〃	7	50	〃	9	40	〃	5	36	〃	2	44	〃	9	31
〃	8	14	〃	10	58	〃	6	56	〃	3	62	〃	10	40
〃	9	43	〃	11	68	〃	7	30	〃	4	58	〃	11	30
〃	10	20	〃	12	8	〃	8	20	〃	5	34	〃	12	58
〃	11	16	〃	13	40	〃	9	17	〃	6	62	〃	13	8
〃	12	13	〃	14	68	KH－12	1	45	〃	7	56	〃	14	40
〃	13	20	〃	15	6	〃	2	20	〃	8	64	〃	15	21
KH－4	1	72	〃	16	38	〃	3	46	〃	9	60	〃	16	15
〃	2	7	〃	17	43	〃	4	55	〃	10	55	〃	17	20
〃	3	74	〃	18	45	〃	5	58	〃	11	26	〃	18	30
KH－5	1	43	〃	19	65	KH－13	1	40	〃	12	43	〃	19	25
〃	2	40	〃	20	60	〃	2	50	〃	13	70	〃	20	39
〃	3	43	〃	21	88	〃	3	43	〃	14	77	〃	21	46
〃	4	35	〃	22	65	KH－14	1	50	〃	15	63	〃	22	58
〃	5	41	〃	23	62	〃	2	14	〃	16	77	〃	23	18
〃	6	37	〃	24	44	〃	3	18	〃	17	90	〃	24	27
〃	7	8	〃	25	70	〃	4	28	〃	18	34	〃	25	50
〃	8	17	〃	26	53	〃	5	70	〃	19	66	〃	26	20
〃	9	35	〃	27	86	〃	6	32	KH－18	1	14	〃	27	34
〃	10	38	〃	28	50	〃	7	52	〃	2	66	〃	28	57
〃	11	12	〃	29	54	〃	8	44	〃	3	56	〃	29	31
KH－6	1	50	KH－10	1	68	〃	9	42	〃	4	13	〃	30	16
KH－7	1	11	〃	2	15	〃	10	53	〃	5	24	〃	31	27
〃	2	7	〃	3	12	〃	11	42	〃	6	6	〃	32	24
〃	3	15	〃	4	40	〃	12	48	〃	7	52	〃	33	30
〃	4	8	〃	5	36	KH－15	1	55	〃	8	20	〃	34	32
〃	5	10	〃	6	30	〃	2	8	〃	9	22	〃	35	9
〃	6	6	〃	7	36	〃	3	5	〃	10	63	〃	36	24
KH－8	1	65	〃	8	66	〃	4	8	KH－19	1	54	〃	37	28

表3　土壙一覧

遺構	発掘区	平面形	規模(m) 確認面	規模(m) 壙底面	規模(m) 深さ	長軸方向	出土遺物 土器	出土遺物 石器等	出土遺物 自然遺物	重複関係	備考
KP－1	C・D－5	長円形	3.00 × 0.40	3.03 × 0.28	0.88	N－86.5°－E	早3、中9	石鏃1、フレイク2 スクレイパー1			Tピット
－2	C・D－5・6	〃	2.64 × 0.58	2.88 × 0.20	0.70	N－32.5°－W					Tピット
－3	E－8	〃	3.26 × 0.50	3.36 × 0.22	0.52	N－35.5°－W	前6、中20	フレイク3、礫1			Tピット
－4	G・H－7・8	円形	0.56 × 0.54	0.44 × 0.42	0.38	——	前27、中13				
－5	H－8・9	楕円形	1.26 × 1.00	1.02 × 0.84	0.28	N－59.0°－E	中1	礫2			
－6	G－9	長円形	2.96 × 0.68	3.44 × 0.25	0.94	N－37.0°－W	前25、中30	石鏃1、石核1、礫1 スクレイパー1			Tピット
－7	A－44	〃	(1.38)× 0.36	(1.64)× 0.12	1.10	N－69.0°－E					Tピット
－8	B－42	〃	1.48 × 0.36	1.76 × 0.12	0.94	N－70.0°－E	早1	スクレイパー1、フレイク1			Tピット
－9	B・C－40	〃	3.20 × 0.78	3.89 × 0.18	1.30	N－86.0°－E	早7、中1	フレイク8			Tピット
－10	C－40	〃	1.86 × 0.58	1.88 × 0.18	1.30	N－76.5°－E	早9、中1	フレイク3			Tピット
－11	C・D－45	楕円形	1.10 ×(0.90)	0.48 ×(0.46)	1.38	N－37.0°－W		フレイク2			
－12	B－45	〃	1.02 × 0.78	0.84 × 0.71	0.30	N－29.0°－E		フレイク14、たたき石1			
－13	D－45	〃	0.75 × 0.60	0.62 × 0.41	0.21	N－80.0°－W		フレイク3			
－14	D－44・45	円形	0.80 × 0.76	0.66 × 0.60	0.17	——	中3	フレイク5			
－15	B－42	楕円形	0.90 × 0.74	0.70 × 0.60	0.11	N－15.0°－W					
－16	A・B－42	円形	0.76 × 0.74	0.68 × 0.64	0.16	——					
－17	E－41	〃	0.80 × 0.76	0.70 × 0.68	0.16	——		フレイク2、すり石1			
－18	〃	長方形	1.46 × 1.38	0.88 × 0.80	0.12	N－36.0°－W		フレイク3、礫1			
－19	D－40	楕円形	1.70 × 1.24	0.94 × 0.80	0.40	N－21.0°－W	早8、中1	フレイク5			
－20	D－39	円形	0.68 × 0.64	0.48 × 0.40	0.40	——	早1				
－21	E－38・39	楕円形	1.39 × 1.20	1.16 × 0.93	0.40	N－10.0°－W		フレイク2			
－22	C・D-37・38	長円形	2.10 × 0.50	2.16 × 0.20	1.20	N－90.0°－W	早2、前3 中14	フレイク1			Tピット
－23	C－35	〃	1.56 × 0.42	1.76 × 0.16	1.06	N－84.0°－W	中1	フレイク1			Tピット
－24	B・C－35	〃	2.70 × 0.64	3.28 × 0.24	0.60	N－86.0°－W					Tピット
－25	C・D－34	〃	3.69 × 0.59	4.10 × 0.16	0.96	N－75.0°－W	早19、中3	つまみ付ナイフ1、フレイク1			Tピット
－26	C－34	〃	1.67 × 0.33	1.65 × 0.13	0.88	N－87.0°－E		フレイク2			Tピット
－27	C－32	〃	(1.48)× 0.48	1.52 × 0.18	1.02	N－81.0°－E		フレイク1			Tピット
－28	D・E－32	〃	2.22 × 0.34	2.08 × 0.24	0.34	N－59.0°－W	中1	フレイク1			Tピット
－29	D－34・35	円形	0.84 × 0.80	0.56 × 0.44	0.50	——		フレイク4、礫3			
－30	E－34	〃	0.70 × 0.68	0.48 × 0.46	0.33	——		フレイク2			
－31	E・F－34	長円形	2.50 × 1.15	2.94 × 0.40	1.10	N－77.0°－W	早39、中6	フレイク3			Tピット
－32	F－33	〃	3.37 × 0.40	3.60 × 0.20	0.74	N－41.0°－W	早1			KP-33を切る	Tピット
－33	〃	楕円形	1.40 × 0.84	1.14 × 0.66	0.38	N－ 5.0°－E	前1				
－34	G－33・34	〃	0.92 × 0.80	0.84 × 0.77	0.44	N－86.0°－E		礫3			
－35	F・G－34	円形	0.64 × 0.46	0.60 × 0.44	0.09	——	前6			KP-36を切る	
－36	〃	長円形	3.50 × 0.47	4.09 × 0.16	0.80	N－89.0°－E	中2	すり石1			Tピット
－37	G－35	楕円形	1.24 × 0.96	1.00 × 0.74	0.36	N－89.0°－E	中9				
－38	G－35・36	長円形	2.50 × 0.61	1.64 × 0.20	1.18	N－64.0°－W	前2、中3	スクレイパー1、フレイク1		KH－4を切る	Tピット
－39	E・F－37	〃	3.20 × 0.69	3.11 × 0.23	1.04	N－69.0°－E	前2、中14				Tピット
－40	F－38	楕円形	0.90 × 0.82	0.73 × 0.64	0.44	N－50.0°－W					
－41	C－34	円形	0.66 × 0.64	0.44 × 0.34	0.31	——	前1	フレイク5		KP-29に切られる	
－42	G－36	〃	1.04 × 1.03	0.84 × 0.74	0.43	——	中3	フレイク1			
－43	〃	長円形	3.72 × 0.52	3.69 × 0.28	0.80	N－56.0°－W	中9	フレイク2、礫1			Tピット
－44	F・G-37・38	五角形	2.30 × 1.47	2.20 × 1.34	0.12	N－47.0°－E	中8	フレイク15		KH-5、6を切る	
－45	B－41・42	楕円形	1.22 × 0.94	1.08 × 0.80	0.26	N－ 7.0°－W		フレイク2			
－46	F－32	長円形	2.51 × 0.34	2.40 × 0.20	0.48	N－48.0°－W					Tピット
－47	G－33	〃	2.50 × 0.44	2.20 × 0.18	0.36	N－59.0°－W					Tピット
－48	G・H－30	〃	3.53 × 0.28	3.52 × 0.19	0.44	N－67.0°－W					Tピット
－49	H－35	円形	1.10 × 0.92	1.09 × 0.80	0.48	——	中9	つまみ付ナイフ1、フレイク4			
－50	E－29・30	長円形	2.00 × 0.51	1.92 × 0.17	0.74	N－75.0°－W	早3、中1				Tピット
－51	F－27	〃	2.92 × 0.52	3.04 × 0.22	0.92	N－56.0°－W	中1				Tピット
－52	E・F-25・26	〃	3.26 × 0.48	3.20 × 0.24	0.50	N－65.0°－E	中14	スクレイパー1、礫1			Tピット
－53	E・F－24	〃	3.84 × 0.84	3.98 × 0.28	1.09	N－29.0°－W	中81	槍先・ナイフ1、フレイク8、礫1			Tピット
－54	D－24 E－23・24	〃	3.90 × 0.44	3.88 × 0.32	0.42	N－39.0°－W	中11	フレイク2			Tピット
－55	H・I－26	楕円形	0.96 × 0.75	0.78 × 0.68	0.38	N－18.0°－W				KP-56を切る	

遺構	発掘区	平面形	規模(m) 確認面	規模(m) 壙底面	規模(m) 深さ	長軸方向	出土遺物 土器	出土遺物 石器等	出土遺物 自然遺物	重複関係	備考
KP−56	H・I−26	長円形	2.10 × 2.00	0.27 × 0.14	0.80	N−70.0°−E					Tピット
−57	H−25	円形	1.26 × 1.24	0.88 × 0.72	0.68	——					
−58	F−23・24	楕円形	1.57 × 1.20	1.52 × 1.08	0.16	N−30.0°−W	中14			KP-59を切る	
−59	F・G−24	長円形	3.72 × 0.62	3.98 × 0.17	0.83	N−57.0°−W	早1、中24	スクレイパー1		KP-60を切る	Tピット
−60	G−24	楕円形	(1.24 × 0.90)	(1.00 × 0.70)	0.66	(−N−14.0°−E)	前15	フレイク38			
−61	H−26・27	円形	0.64 × 0.62	0.54 × 0.48	0.18	——	中6	フレイク3			
−62	G−22・23	〃	0.94 × 0.90	0.90 × 0.84	0.66	——	中6	台石・石皿1			
63	F−19・20	楕円形	2.38 × 1.80	2.50 × 2.20	1.32	N−56.0−E	中43	フレイク3、石斧1、台石・石皿1、礫3			フラスコ状ピット
−64	G−18	円形	0.92 × 0.90	0.84 × 0.80	0.18	——	中5	礫3			
−65	G−17	長円形	2.90 × 0.50	3.20 × 0.26	0.86	N−27.0°−W	中7	フレイク7、礫2		KP-66を切る	Tピット
−66	〃	円形	1.18 × 1.14	1.60 × 1.58	1.30	——	中1	スクレイパー1、礫6、フレイク37			フラスコ状ピット
−67	G・H−18	楕円形	0.86 × 0.74	0.54 × 0.54	0.43	N− 4.0°−E	中8				
−68	G−18	長円形	2.24 × 0.42	2.07 × 0.17	0.80	N−71.0°−E	中5	フレイク1		KP-80を切る	Tピット
−69	E−16 F−15・16	楕円形	1.98 × 1.62	2.48 × 2.55	1.04	N−48.0°−E	中8	石鏃1、礫3、フレイク3			フラスコ状ピット
−70	E−16	〃	2.12 × 1.70	2.30 × 2.16	1.60	N−15.0°−E					フラスコ状ピット
−71	D−15・16	〃	1.79 × 1.58	2.32 × 1.56	1.94	N−78.0°−E		礫35		壙口を同じくする2コの重複	フラスコ状ピット
−72	E・F-31・32	長円形	3.49 × 0.67	3.34 × 0.26	0.92	N−85.0°−W	中2	礫1			Tピット
−73	E−17・18	楕円形	1.60 × 1.46	2.70 × 2.41	1.15	N− 7.0°−E		スクレイパー1			フラスコ状ピット
−74	G−21	長円形	(2.58)× 0.40	(2.18)× 0.26	0.50	N−81.0°−W	中9	フレイク12			
−75	G・H-14・15	楕円形	1.50 × 1.38	2.32 × 2.22	1.42	N− 5.0°−E	中7	スクレイパー4、たたき石1、すり石、砥石1、台石・石皿3、石核1、フレイク35、礫18			フラスコ状ピット
−76	G・H−15	長円形	2.60 × 0.62	2.98 × 0.18	1.22	N−23.0°−W	前8、中1				Tピット
−77	H−15	〃	2.88 × 0.62	3.14 × 0.22	1.24	N− 4.0°−W	前3、中5				Tピット
−78	H−11・12	〃	(2.88)× 0.60	(2.98)× 0.30	0.94	N−42.0°−W	前1、中48	フレイク3、礫1			Tピット
−79	E−12・13 F−12	〃	3.23 × 0.41	3.58 × 0.17	0.85	N−57.0°−W	中3	フレイク5			Tピット
−80	G−18	楕円形	0.88 × 0.73	0.77 × 0.58	0.25	N−79.0°−E	中4	たたき石1、礫1			
−81	E−30	長円形	1.69 × 0.32	1.64 × 0.12	0.64	N−84.0°−E					Tピット
−82	E・F−18	楕円形	2.30 × 1.85	2.10 × 1.70	0.35	N−24.0°−W					馬が埋葬されている
−83	E−13・14	長円形	1.58 × 0.14	1.64 × 0.11	0.53	N−52.5°−W	中6、後1				Tピット
−84	E−20	円形	0.43 × 0.40	0.30 × 0.28	0.27	——		礫2			
−85	H・I−14	長円形	3.02 ×(0.60)	3.50 × 0.20	1.18	N−89.0°−E				KP-90を切る	Tピット
−86	D・E−17	円形	1.58 × 1.54	1.86 × 1.84	0.79	——	中9	フレイク4、礫3、台石・石皿3			フラスコ状ピット
−87	F−16	長円形	3.78 × 0.26	3.63 × 0.19	0.24	N−56.5°−E					Tピット
−88	G−16	〃	1.54 × 0.19	1.73 × 0.08	0.73	N−25.0°−W					Tピット
−89	D・E−14	楕円形	2.49 × 2.23	3.00 × 2.80	0.67	N−35.0°−E					フラスコ状ピット
−90	H−14	〃	(1.07)× 0.85	0.78 × 0.62	0.44	N− 4.0°−E	中2	フレイク6			
−91	E−11	円形	1.00 × 1.00	1.62 × 1.48	1.72	——	中66	石鏃1、スクレイパー1、石斧1、フレイク79、礫3		KH-16を切る	フラスコ状ピット
−92	〃	楕円形	(0.73)× 1.01	(0.69)× 0.98	0.10	N−21.0°−W		礫1		KH-16に切られる	
−93	D−11	長円形	1.28 × 0.38	1.40 × 0.10	1.20	N−32.0°−W	中5				Tピット

表4　焼土一覧

遺構	発掘区	規模(m)	上面のレベル(m)	出土遺物 土器	出土遺物 石器等	出土遺物 その他	備考
KF−1	D−36	1.25 × 0.67 × 0.09	28.49				
KF−2	D−33	(1.06)× 0.55 × 0.12	28.10		フレイク2、礫1	古銭1	

表5　KH−1　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
III − 2	1		覆土	$IIIA_3$	III − 2	2		覆土	$IIIA_3$

表6　KH−1　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
III−3	1	1	スクレイパー	3.5 × 5.0 × 1.4	28.4	Aga-Sh.	床	III−3	3	7	礫	16.0 × 8.9 × 6.8	1,145	Sa.	床
〃	2	8	礫	16.6 × 7.4 × 8.7	1,310	Sa.	〃								

表7　KH－3　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－6	34－1	1	1	覆土	(31.0)	―	(32.6)	ⅢB	37		

表8　KH－3　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－6	2	1	覆土	$ⅠB_3$	Ⅲ－6	6	15	覆土	$ⅢA_3$	Ⅲ－6	10		覆土	$ⅢA_3$
〃	3	41	〃	ⅡB	〃	7		〃	ⅢB	〃	11		撹乱	〃
〃	4		〃	ⅡB	〃	8		〃	〃	〃	12		HF－1覆土	ⅢB
〃	5		〃	$ⅢA_1$	〃	9		〃	〃					

表9　KH－3　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－6	13	112	石鏃	3.1 × 1.3 × 5.0	1.2	Aga-Sh.	床	Ⅲ－6	18		砥石	11.1 × 8.9 × 3.4	242.3	Sa.	覆土
〃	14	18	スクレイパー	3.8 × 2.8 × 1.0	8.9	〃	10	Ⅲ－7	19	12・22	台石・石皿	46.5 ×12.5 × 9.4	5,400	〃	8
〃	15	114	石斧	(10.9)× 5.4 × 3.0	(287.9)	Gr-Mud.	〃	〃	20	23	〃	(30.7)×22.6 × 8.6	(8,800)	And.	10
〃	16	28	たたき石	15.4 × 7.3 × 6.3	850.2	And.	〃	〃	21	47	円盤状土製品	土・石製品一覧表参照			
〃	17	29	すり石	16.6 × 9.8 × 3.9	81.5	〃	覆土	〃	22	48	〃	〃			

表10　KH－4　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－8	1		スクレイパー	6.6 × 2.8 × 1.0	17.5	Sh.	覆土

表11　KH－5　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－11	34－2	1	54ほか	覆土	14.1	―	(17.7)	ⅢB	23	54、141、234	
〃	34－3	2	6ほか	〃	20.1	(7.3)	(30.4)	〃	38	6、62、64、72～74、117、146、154、169、172、208、219、224、228	

表12　KH－5　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－11	3	157	覆土	$ⅠB_4$	Ⅲ－11	7	83	覆土	ⅢB	Ⅲ－11	11	226	覆土	ⅢB
〃	4	163	〃	ⅡB	〃	8	148	〃	〃	〃	12	173	〃	$ⅢA_3$
〃	5	114	〃	ⅢB	〃	9		〃	〃					
〃	6	206	〃	〃	〃	10	69	〃	$ⅢA_3$					

表13　KH－5　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－11	13	123	石鏃	3.3 × 1.6 × 0.8	3.2	Aga-Sh.	5	Ⅲ－11	18	133	たたき石	14.5 × 9.5 × 8.0	1,140.0	And.	4
〃	14	201	スクレイパー	(5.3)× 3.4 × 1.9	(33.0)	〃	〃	〃	19		すり石	7.8 ×(10.1)× 2.5	(320.1)	〃	〃
〃	15	58	スクレイパー	6.6 × 5.9 × 1.7	70.5	Sh.	〃	〃	20	231	〃	7.8 × 15.8 × 3.5	590.3	〃	8
〃	16	227	〃	5.7 × 3.5 × 1.3	18.3	Aga-Sh.	〃	〃	21	79	円盤状土製品	土・石製品一覧表参照			
〃	17		〃	8.4 × 4.3 × 1.3	4.2	Sh.	3	〃	22	116	〃	〃			

表14　KH－6　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－12	34－4	1	2	床	6.9	3.6	7.6	ⅢB	1		
〃	34－5	2	1	〃	(12.8)	5.2	15.6	ⅢB	62		

表15　KH－6　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－12	3		覆土	ⅢB	Ⅲ－12	4		覆土	ⅢB	Ⅲ－12	5		覆土	ⅡB

表16　KH－7　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－13	1		覆土	ⅡB	Ⅲ－13	5		覆土	$ⅢA_3$	Ⅲ－13	9		覆土	$ⅢA_3$
〃	2		〃	〃	〃	6		〃	〃	〃	10		〃	〃
〃	3		〃	〃	〃	7		〃	〃	〃	11		〃	〃
〃	4		〃	〃	〃	8		〃	〃					

表17　KH－7　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－13	12		槍先・ナイフ	8.4 × 2.9 × 1.3	41.3	Sh.	1	Ⅲ－13	14		スクレイパー	6.4 × 4.7 × 2.1	58.5	Sh.	1
〃	13		スクレイパー	7.1 × 4.5 × 1.1	39.8	〃	〃	Ⅲ－14	15	1	台石・石皿	45.9 ×35.5 × 8.8	25.200	And.	〃

表18　KH－8　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm)			分類	接合破片数	接合状況	備考
					口径	底径	器高				
Ⅲ－17	34－6	1	57	床	(27.1)	(11.2)	(30.8)	$ⅢA_3$	44		

表19　KH－8　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－17	2	26	床	$ⅢA_3$	Ⅲ－17	7	23	床	$ⅢA_3$	Ⅲ－17	12		HP－11覆土	$ⅢA_3$
〃	3		HP－9覆土	〃	〃	8		HP－5覆土	〃	〃	13	30	床	〃
〃	4	19	床	〃	〃	9		床	〃	〃	14	7	〃	〃
〃	5	38	〃	〃	〃	10		〃	〃	〃	15	56	〃	〃
〃	6	57	〃	〃	〃	11		HP－8覆土	〃					

表20　KH－8　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－17	16	69	石鏃	3.3 × 1.3 × 0.5	2.2	Aga-Sh.	6	Ⅲ－17	21	53	スクレイパー	4.9 × 2.6 × 0.7	11,2	Aga-Sh.	床
〃	17	64	スクレイパー	7.8 × 3.3 × 1.3	33.1	Sh.	床	〃	22	4	〃	3.1 × 4.8 × 0.9	14.0	Sh.	〃
〃	18		〃	6.3 × 3.0 × 0.9	17.7	〃	HP-17覆土	〃	23		〃	4.6 × 4.8 × 1.0	27.8	Aga-Sh.	HP-24覆土
〃	19		〃	5.7 × 3.5 × 1.1	21.0	〃	HP-22覆土	〃	24		石斧	(7.0)× 5.5 × 2.8	(136.2)	Gr-Mud.	HP-6覆土
〃	20	55	〃	4.4 × 1.3 × 0.5	2.7	〃	床	〃	25	52	すり石	(3.9)×(4.9)× 1.5	(28.4)	And.	床

表21　KH－10　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－21	1	42	覆土	$ⅢA_3$	Ⅲ－21	2		HP－7覆土	$ⅢA_3$	Ⅲ－21	3		覆土	ⅢB

表22　KH－10　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－21	4	125	石鏃	(3.0)× 1.6 × 0.4	(2.0)	Obs.	床	Ⅲ－21	9	118	スクレイパー	5.4 ×(3.4)× 0.9	(16.2)	Sh.	床
〃	5		〃	4.1 × 1.6 × 0.5	2.6	Sh.	HP-4覆土	〃	10	1	〃	7.3 × 4.0 × 1.2	32.8	〃	6
〃	6		〃	(3.6)× 1.8 × 1.0	(5.1)	Sh.	覆土	〃	11	122	〃	6.8 × 7.3 × 1.6	62.1	〃	床
〃	7	124	スクレイパー	(3.8)× 3.0 × 6.5	(6.4)	Aga-Sh.	床	〃	12	17	すり石	8.9 ×12.6 × 1.8	308.9	And.	7
〃	8	127	〃	6.9 × 3.0 × 1.4	22.9	Sh.	〃	〃	13		たたき石	14.3 × 8.0 × 6.9	940.5	And.	HP-4覆土

表23　KH－11　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－24	1	66,67	床	ⅢB	Ⅲ－24	3		覆土	$ⅢA_3$	Ⅲ－24	5		覆土	$ⅢA_3$
〃	2		覆土	$ⅢA_1$	〃	4	224	〃	〃	〃	6	79	〃	ⅢB

表24　KH－11　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－24	7	200	石鏃	2.7 × 1.1 × 5.5	1.0	Aga-Sh.	床	Ⅲ－24	13	76	たたき石	12.5 × 8.0 × 4.7	480.2	And.	床
〃	8	175	〃	3.7 × 1.5 × 0.9	4.1	〃	〃	〃	14	113	〃	13.8 × 8.8 × 5.2	938.1	Sa.	〃
〃	9	81	〃	3.9 × 1.7 × 0.6	3.3	Sh.	〃	〃	15		〃	16.2 ×(11.2)× 6.5	(1,520.0)	And.	覆土
〃	10	1	〃	5.0 × 1.7 × 0.7	5.3	Aga-Sh.	覆土	〃	16	41	〃	10.0 × 2.6 × 2.8	102.0	Sh.	〃
〃	11	168	〃	4.7 × 1.9 × 0.8	6.7	〃	床	〃	17	17	すり石	14.8 × 8.5 × 3.0	522.6	And.	〃
〃	12	3	スクレイパー	4.1 × 2.6 × 0.9	9.6	〃	覆土	〃	18	137	ミニアチュア土器	土・石製品一覧表参照			

表25　KH－12　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－26	35－1	1	10ほか	覆土	(16.8)	(8.7)	26.4	ⅢA₃	39	10、17、21、30、31、34、39、48、51、58、59、60、61、65、67、69、71、85、88、89、90、96、102、103	
〃	35－2	2	82ほか	〃	(38.0)	(11.6)	50.6	〃	91	82、84～86、101、102	
〃	35－3	3	105	〃	(28.0)	14.0	22.4	〃	25		

表26　KH－12　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－26	4	82、102	覆土	ⅢA₃	Ⅲ－26	10	105	覆土	ⅢA₃	Ⅲ－27	16	45	覆土	ⅢA₃
〃	5	38	〃	〃	〃	11	101	〃	〃	〃	17	104、105	〃	〃
〃	6	78	〃	〃	〃	12	101	〃	〃	〃	18	105	〃	〃
〃	7	26	〃	〃	〃	13	83	〃	〃	〃	19	104	〃	〃
〃	8	75	〃	〃	〃	14	29	〃	〃					
〃	9	7	〃	〃	〃	15	84	〃	〃					

表27　KH－12　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－27	20	1	ドリル	3.9 × 2.2 × 0.4	4.0	Aga-Sh.	3	Ⅲ－27	23	49	スクレイパー	11.0 × 4.8 × 2.0	74.2	Sh.	3
〃	21	84	スクレイパー	6.8 × 5.7 × 0.7	8.7	Sh.	〃	〃	24	18	たたき石	8.1 × 6.8 × 6.4	535.2	And.	〃
〃	22	27	〃	7.0 × 4.5 × 1.5	34.2	〃	〃	〃	25	78	土製品	土・石製品一覧表参照			

表28　KH－13　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－29	1	41	覆土	ⅢA₁	Ⅲ－29	4	46	覆土	ⅢA₃	Ⅲ－29	7	25	覆土	ⅢA₃
〃	2	41	〃	〃	〃	5	40	〃	〃					
〃	3	43	〃	〃	〃	6	36	〃	〃					

表29　KH－13　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－29	8	8	つまみ付ナイフ	7.0 × 3.6 × 0.9	18.0	Sh.	床	Ⅲ－29	12	23	フレイク	5.2 × 7.4 × 1.3	65.9	Sh.	床
〃	9	28	スクレイパー	5.9 × 2.3 × 0.9	11.8	〃	7	〃	13	11	すり石	17.5 × 8.7 × 1.2	342.2	And.	8
〃	10	3	スクレイパー	4.5 × 4.1 × 2.2	36.3	〃	床	〃	14	48	石核	21.3 ×11.1 ×11.2	3,336.0	Sh.	7
〃	11	44	〃	4.5 × 3.9 × 0.6	5.9	〃	7								

表30　KH－14　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ (cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－33	35－4	1	507ほか	覆土、床	12.3	6.0	14.4	ⅢA₃	14	681、688、680、685、507、593、602、537、640、670	
〃	35－5	2	546	覆土	(19.0)	7.0	22.3	〃	24		
〃	35－6	3	177、539	〃	22.1	8.4	25.5	〃	78		
〃	36－1	4	90、178、536	〃	18.5	(8.2)	21.9	〃	34		
〃	36－2	5	624	〃	(24.5)	8.0	31.5	〃	34		
〃	36－3	6	527	〃	(32.2)	10.0	42.1	〃	96		
〃	36－4	7	146ほか	〃	(19.6)	6.8	23.1	〃	38	146、148、549、604、630	
Ⅲ－34	36－5	8	542	〃	23.8	8.5	31.9	〃	71		
〃	36－6	9	541	〃	13.6	5.7	20.8	〃	21		
〃	37－1	10	535	〃	(18.1)	7.0	21.5	〃	61		
〃	37－2	11	170ほか	〃	18.0	(8.5)	21.0	〃	35	170、184、191、543	
〃	37－3	12	228ほか	〃	(21.7)	8.3	27.6	〃	41	228、545、593、615、630	
〃		13	7ほか	〃	(21.5)	7.7	(27.1)	〃	36	7、43、58、154、536	

表31　KH－14　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－34	14	684	覆土	ⅠA	Ⅲ－34	17	384	覆土	ⅢA₃	Ⅲ－34	20	297	覆土	ⅢA₃
〃	15		〃	ⅡB	〃	18	92	〃	〃	〃	21	544、616	〃	〃
〃	16	271	〃	ⅢA₃	〃	19	313	〃	〃	〃	22	532	〃	〃

表32　KH－14　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－35	23	643	石鏃	2.9 × 1.2 × 0.4	0.3	Sh.	覆土	Ⅲ－36	40	531 329	槍先・ナイフ	8.5 × 3.8 × 2.0	51.0	Aga-Sh.	覆土
〃	24	119	〃	3.5 × 1.2 × 0.7	2.0	Aga-Sh.	〃	〃	41	550	〃	12.3 × 3.4 × 2.4	101.0	Sh.	〃
〃	25	28	〃	4.2 × 1.2 × 0.5	2.2	Sh.	〃	〃	42	550	〃	13.6 × 4.1 × 2.2	109.0	Aga-Sh.	〃
〃	26	237	〃	(2.2)× 1.0 × 0.5	(1.8)	Diat.	〃	〃	43	550	〃	13.6 × 5.3 × 2.5	148.0	〃	〃
〃	27	324	〃	(2.2)× 1.4 × 0.5	(2.2)	Sh.	〃	〃	44	583	〃	(9.5)× 5.0 × 2.5	(91.2)	〃	〃
〃	28	362	ドリル	4.6 × 1.3 × 0.8	3.0	Aga-Sh.	〃	〃	45	531	〃	(7.3)× 4.9 × 3.0	(77.0)	〃	〃
〃	29	394	つまみ付ナイフ	5.5 × 2.0 × 0.5	5.0	Sh.	〃	Ⅲ－37	46	531	〃	18.2 ×(5.6)× 3.7	(297.0)	〃	〃
〃	30	644	〃	7.2 × 3.1 × 1.0	16.2	〃	〃	〃	47	531	〃	17.5 × 9.2 × 4.0	485.0	〃	〃
〃	31	268	〃	(7.1)× 2.2 × 1.3	(15.5)	Aga-Sh.	〃	Ⅲ－38	48		石斧	(14.2)× 6.4 × 3.0	(462.0)	Sch.	〃
〃	32	30	〃	4.0 × 6.5 × 0.8	13.4	Sh.	〃	〃	49	683	〃	8.3 × 3.7 × 1.1	51.0	〃	〃
〃	33	376	スクレイパー	7.2 × 2.8 × 6.0	19.8	〃	〃	〃	50	570	すり石	13.1 × 8.7 × 3.5	569.5	And.	〃
〃	34	218	〃	8.3 × 3.7 × 11	31.2	〃	〃	〃	51		〃	15.8 × 8.3 × 5.5	1,120.0	And.	〃
〃	35	672	〃	11.9 × 3.8 × 1.2	68.6	〃	〃	〃	52	212	たたき石	12.2 × 6.5 × 6.1	532.0	〃	〃
〃	36	4、25	〃	6.7 × 5.5 × 1.2	43.9	〃	〃	〃	53	529	砥石	5.3 × 4.6 × 2.8	66.6	〃	〃
〃	37	466	〃	(4.0)× 4.7 × 1.0	16.8	Sh.	〃	〃	54	619	たたき石	8.0 × 6.6 × 3.8	259.2	Qua.	〃
〃	38	635	〃	6.6 × 4.6 × 1.1	27.8	〃	〃	〃	55	703	台石・石皿	32.9 ×25.5 × 9.1	7,600	And.	〃
〃	39	310	〃	6.6 × 5.7 × 0.9	43.2	Aga-Sh.	〃	〃	56～61			土・石製品一覧表参照			

表33　KH－15　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－39	1		覆土	ⅢA₃	Ⅲ－39	3		覆土	ⅢA₃	Ⅲ－39	5		覆土	ⅢA₃
〃	2		〃	〃	〃	4		〃	〃					

表34　KH－16　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－43	37－4	1	29ほか	覆土	(45.1)	(15.0)	64.0	ⅢA₃	108	29、82、83、89、90、91、92、KP-91	
〃	37－5	2	50、52	〃	(16.9)	(15.2)	18.4	〃	8		
〃	37－6	3	86	〃	19.9	8.8	23.3	〃	52		
〃	38－1	4	55	〃	(21.3)	8.2	25.9	〃	30		
〃	38－2	5	56	〃	22.4	9.2	27.1	〃	33		
Ⅲ－44	38－3	6	34、47	〃	(32.6)	8.8	52.0	〃	123		
Ⅲ－45	38－4	7	34、35、47	〃	35.4	—	53.9	〃	81		
Ⅲ－46	38－5	8	27、31	〃	18.8	7.5	27.9	〃	34		
〃	38－6	9	24、25	〃	24.6	8.6	25.5	〃	40		
〃	39－1	10	32	〃	(19.3)	9.8	23.2	〃	22		
〃	39－2	11	48	〃	(19.0)	7.2	22.2	〃	31		
〃	39－3	12	25、26	〃	31.3	9.7	46.3	〃	85		

表35　KH－16　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－47	1		覆土	ⅡB	Ⅲ－47	4		覆土	ⅢA₃	Ⅲ－47	7	25	覆土	ⅢA₃
〃	2		〃	ⅢA₁	〃	5		〃	〃	〃	8		〃	〃
〃	3		〃	ⅢA₃	〃	6		〃	〃					

表36　KH－16　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－47	9		石鏃	2.8 × 1.1 ×0.5	0.8	Sh.	覆土	Ⅲ－47	22		スクレイパー	4.7 × 6.7 ×1.3	33.1	Aga-Sh.	覆土
〃	10	43	〃	3.3 × 1.2 ×0.4	1.0	〃	〃	〃	23		〃	6.1 × 6.7 ×1.9	72.0	Sh.	〃
〃	11	20	〃	2.9 × 1.5 ×0.5	0.2	〃	1	Ⅲ－48	24		〃	2.8 × 5.0 ×1.2	18.4	Aga-Sh.	1
〃	12	33	〃	3.0 × 1.4 ×0.7	0.7	〃	覆土	〃	25		〃	8.3 × 4.8 ×1.1	33.3	Sh.	2
〃	13	30	〃	3.3 × 1.4 ×0.7	1.8	〃	〃	〃	26	51	石斧	(13.0)× 4.1 ×2.4	(231.5)	Gr-Mud.	覆土
〃	14	46	〃	3.4 × 1.5 ×0.6	2.2	〃	〃	〃	27		〃	(7.1)× 4.1 ×2.3	(109.0)	〃	2
〃	15	36	槍先・ナイフ	4.4 × 2.3 ×0.8	6.8	Aga-Sh.	〃	〃	28		たたき石	5.3 × 4.9 ×3.6	103.0	And.	HP-1覆土
〃	16		スクレイパー	4.0 × 3.1 ×0.8	7.9	Sh.	2	〃	28		すり石	(8.4)× 7.5 ×5.5	(541.0)	〃	覆土
〃	17		〃	6.8 × 3.8 ×1.1	21.6	〃	〃	〃	30	39	〃	12.7 × 8.6 ×2.8	560.0	〃	〃
〃	18	22	〃	9.9 × 4.4 ×1.6	51.6	〃	3	〃	31	10	たたき石	13.2 × 6.8 ×5.6	632.0	〃	1
〃	19	37	〃	12.0 × 3.5 ×1.4	59.7	〃	覆土	〃	32	12	台石・石皿	17.2 × 12.4 ×5.5	1,892.3	〃	〃
〃	20	71	〃	11.2 × 6.9 ×2.1	118.7	〃	床	〃	33	18・54	〃	(22.0)×(13.9)×6.5	(2,105)	Sa.	覆土
〃	21	6	〃	8.8 × 5.5 ×1.4	58.3	〃	1								

表37　KH－17　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－50	1		覆土	ⅢA₃	Ⅲ－50	2		覆土	ⅢA₃	Ⅲ－50	3		覆土	ⅢA₃

表38　KH－17　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－50	4		つまみ付ナイフ	6.9 × 2.9 × 1.0	17.3	Aga-Sh.	HP-17覆土	Ⅲ－50	6		たたき石	13.7 × 8.3 × 3.7	462.0	And.	HP-3覆土
〃	5		石斧	(11.2)× 5.2 × 2.9	(245.6)	Mud.	HP-10覆土								

表39　KH－18　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－53	39－4	1		覆土	(13.4)	9.6	15.0	ⅢA₁	11		

表40　KH－18　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－53	2	3	床	ⅢA₃	Ⅲ－53	7		覆土	ⅡB	Ⅲ－53	12		覆土	ⅢA₃
〃	3	111	〃	〃	〃	8		〃	〃	〃	13		〃	〃
〃	4	47	〃	〃	〃	9		〃	ⅢA₃	〃	14		〃	〃
〃	5	95	〃	〃	〃	10		〃	〃	〃	15		〃	〃
〃	6	109	〃	〃	〃	11		〃	〃	〃	16		〃	〃

表41　KH－18　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－53	17	115	スクレイパー	3.6 × 2.5 ×5.5	7.1	Sh.	床	Ⅲ－53	21	2	たたき石	9.9 × 6.1 ×5.2	460.4	And.	5
〃	18	91	〃	3.8 × 2.3 ×1.0	8.8	Aga-Sh.	〃	〃	22	46	台石・石皿	(12.0)×(11.2)×6.0	(1,295.5)	Sa.	〃
〃	19		槍先・ナイフ	(5.2)× 3.7 ×1.6	(20.8)	Sh.	3	〃	23	55	円盤状土製品	土・石製品一覧表参照			
〃	20		スクレイパー	2.8 × 4.6 ×1.4	21.1	Aga-Sh.	〃								

表42　KH－19　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－57	39－6	1	152	床	13.7	—	(13.0)	ⅢA₁	29		
〃	39－5	2	112	19	(22.1)	9.7	24.7	ⅢA₂	6		
〃	40－1	3	71、72	14	(14.7)	6.2	16.6	ⅢA₃	16		
〃	40－2	4	91	11	(16.9)	6.4	22.6	〃	28		
〃	40－3	5	111	4	(10.5)	7.6	24.5	〃	71		
〃	40－4	6	3	13	33.9	13.6	42.1	〃	32		
〃	40－5	7	30	10	(33.1)	(10.3)	47.2	〃	123		
Ⅲ－58	40－6	8	112	8	41.2	12.3	64.9	〃	130		
〃	41－1	9	38	〃	(20.8)	(10.0)	27.1	〃	55		
〃	41－2	10	37	〃	23.6	9.6	37.0	〃	45		
〃	41－3	11	97	4	(17.0)	6.5	20.3	〃	16		
〃	41－4	12	35	8	16.6	7.2	22.0	〃	31		
〃	41－5	13	108	4	12.3	5.9	16.1	〃	21		
Ⅲ－59	41－6	14		11	18.3	7.7	22.9	〃	31		
〃		15	114	8	(26.4)	(13.0)	(25.5)	〃	58		
〃	42－1	16	31	1	(18.6)	6.9	25.3	〃	60		
〃	42－2	17	64、68	2	(21.9)	8.1	25.5	〃	54		
〃	42－3	18	118	〃	23.5	(10.0)	30.6	〃	113		
〃	42－4	19	45	〃	(16.9)	(8.5)	21.1	〃	49		
〃	42－5	20	49、121、131	〃	(21.5)	—	20.5	〃	28		
〃	42－6	21	119	〃	22.3	—	(25.4)	〃	45		

表43　KH－19　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－60	22	97	覆土	ⅢA₁	Ⅲ－60	26		覆土	ⅢA₂	Ⅲ－60	30		覆土	ⅢA₂
〃	23		〃	〃	〃	27		〃	〃	〃	31	59	〃	ⅢA₃
〃	24		〃	〃	〃	28		〃	ⅢA₃	〃	32	107	〃	〃
〃	25		〃	〃	〃	29	97	〃	ⅢA₁					

表44　KH－19　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－60	33		石鏃	4.0 × 1.2 × 0.3	1.8	Aga-Sh.	4	Ⅲ－61	50		スクレイパー	(5.7)× 4.6 × 0.7	(24.2)	Sh.	9
〃	34		〃	3.9 × 1.3 × 0.5	2.5	Sh.	1	〃	51	132	石斧	(11.3)× 5.7 × 3.2	(318.5)	Diat.	床
〃	35	48	〃	4.5 ×(1.9)× 0.9	(6.2)	Aga-Sh.	〃	〃	52	177	〃	9.8 × 3.7 ×(1.0)	(43.3)	Mud.	2
〃	36		ドリル	3.3 × 0.9 × 0.3	1.8	Sh.	8	〃	53		すり石	11.4 × 7.3 × 2.4	295.2	And.	10
〃	37		つまみ付ナイフ	3.8 × 6.2 × 0.6	5.8	Aga-Sh.	9	〃	54		〃	15.1 ×10.2 × 3.0	481.0	〃	〃
〃	38		〃	5.3 × 2.7 × 0.8	6.8	〃	2	〃	55		〃	15.1 × 6.8 × 3.0	422.0	〃	9
〃	39	9	〃	7.0 × 1.2 × 0.5	11.2	Sh.	5	〃	56		〃	17.2 ×10.4 × 4.0	821.1	〃	10
〃	40		スクレイパー	6.2 ×(3.2)× 0.7	(13.6)	〃	9	〃	57		〃	13.7 ×10.4 × 3.7	588.5	〃	9
〃	41		スクレイパー	6.0 × 3.6 × 0.6	12.7	〃	4	〃	58	155	〃	16.3 ×10.4 × 3.0	689.0	〃	8
〃	42		〃	(5.7)× 3.1 × 2.0	(33.8)	〃	5	Ⅲ－62	59		〃	11.7 × 9.4 × 5.6	969.2	〃	HP-8覆土
〃	43	131	〃	(3.1)× 2.4 × 1.3	(9.8)	〃	床	〃	60		たたき石	6.2 × 4.3 × 3.8	121.2	Qua.	2
〃	44		〃	7.7 × 3.1 × 1.0	14.6	〃	4	〃	61		〃	7.8 × 5.2 × 4.0	179.2	〃	HP-8覆土
〃	45		〃	7.9 × 4.4 × 1.1	26.9	〃	HP-4覆土	〃	62		〃	7.8 × 6.9 × 4.3	232.2	And.	1
〃	46		〃	6.7 × 0.9 × 3.5	21.8	Aga-Sh.	2	〃	63		〃	13.0 × 8.7 × 4.1	461.2	Sa.	〃
Ⅲ－66	47	2	〃	5.4 × 1.1 × 8.7	41.1	〃	10	〃	64		石核	23.5 × 7.5 × 5.2	461.0	Sh.	6
〃	48		〃	5.0 × 4.8 × 1.2	26.4	〃	9	〃	65	67	台石・石皿	37.0 ×20.2 ×10.7	15,400	And.	5
〃	49		〃	(3.1)× 4.8 × 1.1	(13.8)	Sh.	2		66～73			土・石製品一覧表参照			

表45　フラスコ状ピットの実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺構	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－71	43－1	1	KP－63		覆土	25.9	11.4	32.5	ⅢA₂	17		

表46　フラスコ状ピット出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－71	2	KP－63		覆土	ⅢA₃	Ⅲ－71	13	KP－75	14	覆土	ⅢA₁	Ⅲ－73	30	KP－91		覆土	ⅢA₃
〃	3	〃		〃	〃	〃	14	〃	31	〃	〃	〃	31	〃		6	〃
〃	4	〃		〃	ⅢA₂	Ⅲ－72	23	KP－86		〃	ⅢA₃	〃	32	〃		1	〃
〃	7	KP－69		〃	ⅢA₃	Ⅲ－73	25	KP－91		8	ⅢA₁	〃	33	〃		覆土	〃
〃	8	〃		〃	〃	〃	26	〃		覆土	ⅢA₃	〃	34	〃		2	〃
〃	10	KP－75		〃	ⅢA₁	〃	27	〃		〃	〃	〃	35	〃		4	〃
〃	11	〃		〃	〃	〃	28	〃		〃	〃	〃	36	〃		5	〃
〃	12	〃	13	〃	〃	〃	29	〃		〃	〃	〃	37	〃		覆土	〃

表47　フラスコ状ピット出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺構	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	挿図	番号	遺構	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質
Ⅲ－71	5	KP－63	石斧	8.7 × 5.9 × 2.8	231.0	And.	Ⅲ－72	20	KP－75	台石・石皿	25.0 × 16.5 × 8.3	4,000.0	And.
〃	6	KP－66	つまみ付ナイフ	18.6 × 5.2 × 1.3	31.3	Sh.	〃	21	〃	砥石	14.3 × 11.8 × 4.0	994.3	〃
〃	9	KP－69	石鏃	3.3 × 1.8 × 0.6	1.5	〃	〃	22	KP－86	台石・石皿	(22.0)×(21.0)×13.6	(5,400.0)	〃
〃	15	KP－75	スクレイパー	5.5 × 4.0 × 0.5	12.0	〃	Ⅲ－73	24	〃	〃	25.5 × 23.1 ×13.2	7,600.0	〃
〃	16	〃	スクレイパー	5.7 × 6.5 × 0.9	3.3	Aga-Sh.	〃	38	KP－91	石鏃	2.8 × 1.4 × 0.6	1.9	Sh.
〃	17	〃	スクレイパー	7.3 × 6.7 × 2.3	80.0	Sh.	〃	39	〃	槍先・ナイフ	4.1 × 2.0 × 0.7	5.7	〃
Ⅲ－72	18	〃	すり石	13.2 × 9.9 × 3.3	536.1	And.	〃	40	〃	石斧	10.5 × 4.2 × 2.1	128.0	Gr-Mud.
〃	19	〃	たたき石	12.6 × 9.1 × 4.2	917.2	〃							

表48　円形・楕円形ピット出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－85	1	KP－4	3	覆土	ⅢA₁	Ⅲ－85	13	KP－35		覆土	ⅡB	Ⅲ－85	25	KP－58		覆土	ⅢA₃
〃	2	〃		〃	〃	〃	14	〃		〃	〃	〃	26	〃		〃	〃
〃	3	〃		〃	ⅢA₂	〃	15	KP－37		〃	ⅢA₃	〃	27	KP－60		〃	ⅡB
〃	4	〃		〃	ⅢA₃	〃	16	〃		〃	〃	〃	28	〃		〃	〃
〃	5	〃	2	〃	〃	〃	17	〃		〃	〃	〃	29	KP－61		〃	ⅢA₃
〃	6	〃	4	〃	〃	〃	18	〃		〃	〃	〃	30	KP－64		〃	〃
〃	7	KP－5		〃	〃	〃	19	KP－41		〃	ⅡA	〃	31	KP－72		〃	〃
〃	8	KP－14		〃	ⅠB₃	〃	20	KP－42		〃	ⅢB	〃	32	〃		〃	〃
〃	9	〃		〃	ⅢA₃	〃	21	KP－44		〃	〃	〃	33	KP－80		〃	〃
〃	11	KP－20		〃	ⅡA	〃	22	KP－49		〃	ⅢA₃	〃	34	〃		〃	〃
〃	12	KP－33		〃	ⅡB	〃	23	〃		〃	〃	〃	36	KP－84		〃	ⅢA₁

表49　円形・楕円形ピット出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺構	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	挿図	番号	遺構	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質
Ⅲ－85	10	KP－17	すり石	9.0 ×14.2 × 1.8	278.0	And.	Ⅲ－85	35	KP－80	たたき石	14.3 × 7.0 × 5.0	575.0	Sa.
〃	49	KP－49	つまみ付ナイフ	6.0 × 2.6 × 0.6	11.2	Sh.							

表50　Tピット　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺構	層位	分類	挿図	番号	遺構	層位	分類	挿図	番号	遺構	層位	分類
Ⅲ－102	1	KP－1	覆土	ⅢA₃	Ⅲ－102	36	KP－31	覆土	ⅢA₃	Ⅲ－103	67	KP－59	覆土	ⅢA₃
〃	2	〃	〃	ⅢA₁	〃	37	〃	〃	ⅠB₄	〃	68	〃	〃	〃
〃	4	KP－3	〃	ⅢA₃	〃	38	〃	〃	〃	〃	69	〃	〃	〃
〃	5	〃	〃	ⅡB	〃	39	〃	〃	〃	〃	70	〃	〃	〃
〃	6	〃	〃	ⅢA₃	〃	40	〃	〃	ⅢA₃	〃	71	KP－65	〃	〃
〃	7	〃	〃	〃	〃	41	KP－32	〃	ⅠB₄	〃	72	〃	〃	ⅠB₄
〃	8	〃	〃	〃	Ⅲ－103	42	KP－36	〃	ⅢA₃	〃	73	KP－67	〃	ⅢA₃
〃	9	KP－6	〃	ⅢA₃	〃	44	KP－38	〃	ⅢB	〃	74	〃	〃	ⅢA₁
〃	10	〃	〃	〃	〃	45	〃	〃	ⅢA₃	〃	75	KP－68	〃	ⅢA₃
〃	11	〃	〃	〃	〃	46	〃	〃	ⅠB₄	〃	76	〃	〃	〃
〃	12	〃	〃	ⅡB	〃	47	KP－39	〃	ⅢA₃	〃	77	KP－74	〃	ⅢA₃
〃	13	〃	〃	〃	〃	48	〃	〃	〃	〃	78	KP－76	〃	〃
〃	14	〃	〃	〃	〃	49	KP－43	〃	ⅢA₃	〃	79	〃	〃	ⅢA₁
〃	15	〃	〃	ⅢA	〃	50	KP－50	〃	ⅠB₃	〃	80	KP－77	〃	ⅢA₃
〃	16	〃	〃	〃	〃	51	KP－51	〃	ⅢA₃	〃	81	KP－78	〃	ⅡB
〃	17	〃	〃	ⅢA₁	〃	52	KP－52	〃	ⅢA₁	〃	82	〃	〃	ⅢA₃
〃	22	KP－9	〃	ⅡA	〃	53	〃	〃	〃	〃	83	〃	〃	〃
〃	24	KP－10	〃	ⅠB₃	〃	55	KP－53	〃	ⅢA₃	〃	84	〃	〃	〃
〃	25	〃	〃	〃	〃	56	〃	〃	〃	Ⅲ－104	85	〃	〃	〃
〃	26	KP－22	〃	〃	〃	57	〃	〃	〃	〃	86	〃	〃	〃
〃	27	〃	〃	ⅡB	〃	58	〃	〃	〃	〃	87	〃	〃	〃
〃	28	〃	〃	ⅢA₃	〃	59	〃	〃	〃	〃	88	〃	〃	〃
〃	29	KP－23	〃	ⅢA₃	〃	60	〃	〃	?	〃	89	〃	〃	〃
〃	30	KP－25	〃	ⅠB₄	〃	62	KP－54	〃	ⅢA₃	〃	90	KP－79	〃	〃
〃	31	〃	〃	ⅢA₃	〃	63	〃	〃	〃	〃	91	〃	〃	〃
〃	33	KP－28	〃	ⅢA₃	〃	64	KP－59	〃	ⅢA₃	〃	92	KP－83	〃	〃
〃	34	KP－31	〃	ⅠB₄	〃	65	〃	〃	〃	〃	93	〃	〃	〃
〃	35	〃	〃	ⅢA₃	〃	66	〃	〃	ⅢA₁					

表51　Tピット出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺構	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	挿図	番号	遺構	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質
Ⅲ-102	3	KP－1	スクレイパー	2.8 × 1.6 × 0.4	1.1	Sh.	Ⅲ-102	23	KP－9	つまみ付ナイフ	7.2 × 2.7 × 0.6	14.5	Che.
〃	18	KP－6	石鏃	2.5 × 1.0 × 0.3	0.4	Che.	〃	32	KP－25	〃	(4.6)× 2.9 × 0.6	(7.3)	Sh.
〃	19	〃	スクレイパー	(3.5)× 3.9 × 1.3	(7.1)	Sh.	Ⅲ-103	43	KP－36	すり石	(8.9)× 5.8 × 3.4	(225.0)	And.
〃	20	〃	石核	8.0 × 5.0 × 5.7	222.2	〃	〃	54	KP－52	スクレイパー	8.3 × 4.1 × 1.6	40.2	Sh.
〃	21	KP－8	スクレイパー	5.4 × 2.0 × 0.6	5.4	〃	〃	61	KP－53	槍先・ナイフ	(2.8)× 3.3 × 1.0	(7.0)	〃

表52　遺物集中区の実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	発掘区	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－107	43－2	1	11	D－8	Ⅱb	(21.4)	—	(22.8)	ⅢA₁	28		
〃	43－3	2	8	D－9	〃	25.4	13.3	36.0	〃	61		
〃	43－4	3	19、71	D・E－8	〃	(16.1)	(7.1)	18.5	〃	22		
〃	43－5	4	107	D・E－8	Ⅰ、Ⅱ、Ⅱb	(16.9)	10.5	17.1	〃	53		
〃	43－6	5	115、62	E－8・9	Ⅱb	32.6	15.5	43.7	〃	95		
〃	44－1	6	9	D－9	〃	11.8	7.0	7.7	〃	14		
〃	44－2	7	10	D－9	〃	19.9	11.9	9.3	〃	17		
〃	44－3	8	54、55	E－8	〃	16.8	9.9	20.0	〃	26		
Ⅲ－108	44－4	9	1	F－8	〃	(22.1)	(12.9)	30.2	〃	63		
〃	44－5	10	4ほか	D－7・8	〃	(27.0)	(14.6)	32.5	〃	67	4、5、7～9	
〃	44－6	11	1、2	F－8	〃	(33.0)	(15.0)	50.7	〃	87		
〃	45－1	12	50ほか	F－8	〃	—	8.0	(18.2)	〃	13	50、57、58、60、62	
〃	45－2	13	36ほか	F－8	〃	—	11.6	(21.0)	〃	47	36、39、40、44～46	
〃	45－3	14	71～73	F－8	〃	—	14.5	(29.0)	〃	42		
Ⅲ－109	45－4	15	26ほか	D－9	〃	(47.2)	(20.0)	48.4	〃	128	26、28、29、31、40	
Ⅲ－111	45－5	38	45	D－9	Ⅱa	(23.6)	(10.0)	26.5	ⅢA₃	61		
〃	45－6	39	44	D－9	〃	(13.2)	8.4	30.0	〃	50		

表53　遺物集中区出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	発掘区	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	発掘区	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	発掘区	層位	分類
Ⅲ－109	16	1	F－8	Ⅱ	ⅢA₁	Ⅲ－109	20	35	F－8		ⅢA₁	Ⅲ－109	24	27	F－8		ⅢA₁
〃	17	2	〃	〃	〃	〃	21	52	D－8		〃	〃	25	38	〃		〃
〃	18		D－8	Ⅰ	〃	〃	22		〃	Ⅱ	〃	〃	26	2	〃	Ⅱ	〃
〃	19		F－8	Ⅱa	〃	〃	23	75	F－8		〃						

表54　遺物集中区出土の掲載石器一覧

挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区	層位	挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区	層位
Ⅲ-110	57-1	27	ドリル	2.9 × 1.1 × 0.7	2.4	Sh.	E-8	Ⅱb	Ⅲ-111	57-1	40	石鏃	(3.0)× 1.3 × 0.4	(1.5)	Sh.	C-6	Ⅱa
〃		28	つまみ付ナイフ	(6.6)× 1.8 × 1.0	(12.1)	〃	E-7	〃	〃	〃	41	〃	3.5 × 1.1 × 0.7	2.2	〃	G-8	〃
〃	58-2	29	スクレイパー	6.5 × 4.4 × 1.1	5.6	〃	E-8	〃	〃	〃	42	ドリル	3.1 × 1.2 × 0.6	2.4	〃	F-8	〃
〃	〃	30	〃	7.8 × 4.2 × 1.4	38.0	〃	C-5	〃	〃	〃	43	槍先・ナイフ	5.5 × 3.4 × 1.4	24.5	〃	G-7	〃
〃	59-1	31	石斧	9.2 × 4.1 × 4.1	220.0	Gr-Mud.	D-6	〃	〃	57-2	44	つまみ付ナイフ	4.8 × 3.2 × 0.8	6.6	〃	F-8	〃
〃	〃	32	〃	9.4 ×(4.4)× 2.1	(145.0)	〃	C-5	〃	〃	58-2	45	スクレイパー	11.4 × 3.8 × 1.1	51.7	〃	D-5	〃
〃	60-1	33	すり石	15.4 × 7.8 × 2.8	437.0	Sa.	D-6	〃	〃	〃	46	〃	10.1 × 5.0 × 1.6	36.9	〃	D-9	〃
〃	59-2	34	〃	(13.5)× 9.5 × 5.8	(1,130.0)	Diab.	E-7	〃	〃	〃	47	〃	5.6 × 5.9 × 1.4	39.7	Aga-Sh.	H-8	〃
〃	〃	35	〃	(13.2)×10.1 × 5.0	(766.0)	And.	D-6	〃	〃	59-1	48	たたき石	10.5 × 7.9 × 3.3	410.0	And.	E-7	〃
〃	〃	36	〃	13.3 ×10.0 × 4.4	831.0	〃	E-7	〃	〃	〃	49	〃	9.2 × 7.1 × 4.2	426.0	〃	F-8	〃
〃	59-1	37	たたき石	6.4 × 6.3 × 3.5	168.5	Qua.	E-8	〃	〃	〃	50	〃	7.6 ×(4.7)× 2.2	(125.0)	Qua.	F-8	〃

表55　包含層出土の実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	発掘区	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－112	46－1	1		F－30	Ⅱ－2	(18.8)	—	(34.2)	ⅡB	49		
〃	46－2	2		F－25	Ⅱ－1、2	14.2	8.7	16.5	ⅢA₁	15		
〃		3		G－21	Ⅱ	18.6	9.8	24.9	ⅢA₃	40		
〃	46－3	4	4ほか	F－23、24	Ⅱ	(43.6)	—	(56.9)	ⅢA₃	84	4、8、11～13	
〃		5		F－23	Ⅱ	—	—	(38.7)	〃	58		
〃	46－4	6		—	盛土	(10.2)	7.0	21.9	ⅢB	43		
〃	46－5	7		Ⅰ・H-15	Ⅰ、Ⅱ	13.2	7.3	7.3	Ⅴ	13		

表56　包含層出土の拓影掲載土器一覧

挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類	挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類	挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類
Ⅲ－113	47－1	1	H－13	Ⅱ	ⅠA	Ⅲ－113	47－1	57	G－34	Ⅱ	$ⅠB_4$	Ⅲ－114	48－1	113	E－8	Ⅱb	ⅡB
〃	〃	2	C－33	〃	〃	〃	〃	58	D－34	〃	〃	〃	〃	114	F－8	Ⅱ	〃
〃	〃	3	B－37	〃	〃	〃	〃	59	G－34	〃	〃	〃	〃	115	F－31	$Ⅱ_1$	〃
〃	〃	4	〃	〃	〃	〃	〃	60	C－34	〃	〃	〃	〃	116	E－8	Ⅱb	〃
〃	〃	5	H－32	$Ⅱ_2$	〃	Ⅲ－114	47－2	61	?－9	〃	ⅡA	〃	〃	117	F－8	〃	〃
〃	〃	6	B－35	Ⅱ	〃	〃	〃	62	E－38	〃	〃	〃	〃	118	〃	〃	〃
〃	〃	7	D－5	〃	〃	〃	〃	63	H－11	〃	〃	〃	〃	119	D－9	〃	〃
〃	〃	8	B－34	〃	〃	〃	〃	64	F－31	$Ⅱ_3$	〃	Ⅲ－115	〃	120	E－31	Ⅱ	〃
〃	〃	9	A－34	〃	〃	〃	〃	65	G－7	Ⅱ	〃	〃	〃	121	G－31	〃	〃
〃	〃	10	B－34	〃	〃	〃	〃	66	B－34	〃	〃	〃	〃	122	E－35	〃	〃
〃	〃	11	D－32	〃	$ⅠB_1$	〃	〃	67	D－36	〃	〃	〃	〃	123	G－7	〃	〃
〃	〃	12	E－35	〃	〃	〃	〃	68	B－34	〃	〃	〃	〃	124	F－6	〃	〃
〃	〃	13	A－38	〃	$ⅠB_3$	〃	〃	69	A－39	〃	〃	〃	〃	125	G－7	Ⅱa	〃
〃	〃	14	B－37	〃	〃	〃	〃	70	B－34	〃	〃	〃	〃	126	D－26	Ⅱ	〃
〃	〃	15	C－36	〃	〃	〃	〃	71	G－34	〃	〃	〃	〃	127	F－8	〃	〃
〃	〃	16	C－5	Ⅱb	〃	〃	〃	72	D－34	〃	〃	〃	〃	128	〃	〃	〃
〃	〃	17	C－5	〃	〃	〃	〃	73	C－34	〃	〃	〃	〃	129	F－30	〃	〃
〃	〃	18	B－40	撹乱	〃	〃	〃	74	〃	〃	〃	〃	〃	130	F－8	Ⅱb	〃
〃	〃	19	C－6	Ⅱb	〃	〃	〃	75	〃	〃	〃	〃	〃	131	G－38	Ⅰ	〃
〃	〃	20	D－39	Ⅱ	〃	〃	〃	76	D－34	〃	〃	〃	〃	132	G－31	$Ⅱ_1$	〃
〃	〃	21	A－39	〃	〃	〃	〃	77	D－35	〃	〃	〃	〃	133	B－38	Ⅱ	〃
〃	〃	22	A－36	〃	〃	〃	〃	78	D－33	〃	〃	〃	〃	134	F－8	〃	〃
〃	〃	23	D－32	〃	〃	〃	〃	79	C－33	〃	〃	〃	〃	135	F－30	〃	〃
〃	〃	24	C－6	Ⅱb	〃	〃	〃	80	F－10	〃	〃	〃	〃	136	D－9	〃	〃
〃	〃	25	E－36	Ⅱ	〃	〃	〃	81	B－34	〃	〃	〃	〃	137	F－8	〃	〃
〃	〃	26	B－36	〃	〃	〃	〃	82	〃	〃	〃	〃	48－2	138	D－9	〃	〃
〃	〃	27	B－38	〃	〃	〃	〃	83	〃	〃	〃	〃	〃	139	G－28	$Ⅱ_1$	〃
〃	〃	28	F－30	$Ⅱ_2$	〃	〃	〃	84	F－30	〃	〃	〃	〃	140	B－38	Ⅱ	〃
〃	〃	29	B－37	Ⅱ	〃	〃	〃	85	E－36	〃	〃	〃	〃	141	D－36	〃	〃
〃	〃	30	D－5	〃	〃	〃	〃	86	G－31	$Ⅱ_2$	〃	〃	〃	142	G－10	〃	〃
〃	〃	31	F－31	$Ⅱ_3$	〃	〃	〃	87	B－34	Ⅱ	〃	〃	〃	143	D－35	〃	〃
〃	〃	32	B－37	Ⅱ	〃	〃	〃	88	〃	〃	〃	〃	〃	144	F－7	〃	〃
〃	〃	33	C－37	〃	〃	〃	〃	89	E－34	〃	〃	〃	〃	145	E－5	Ⅰ	〃
〃	〃	34	C－4	〃	〃	〃	〃	90	B－34	〃	〃	〃	〃	146	G－24	Ⅱ	〃
〃	〃	35	〃	〃	〃	〃	〃	91	C－34	〃	〃	〃	〃	147	C－36	〃	〃
〃	〃	36	B－34	〃	〃	〃	〃	92	〃	〃	〃	〃	〃	148	E－6	Ⅰ	〃
〃	〃	37	E－36	〃	$ⅠB_4$	〃	〃	93	B－3	〃	〃	〃	〃	149	D－6	Ⅱb	〃
〃	〃	38	C－37	〃	〃	〃	〃	94	C－34	〃	〃	〃	〃	150	F－7	Ⅱ	〃
〃	〃	39	C－8	Ⅱa	〃	〃	〃	95	〃	〃	〃	〃	〃	151	H－14	〃	〃
〃	〃	40	B－40	撹乱	〃	〃	〃	96	〃	Ⅰ	〃	〃	〃	152	D－6	Ⅱb	〃
〃	〃	41	C－33	Ⅱ	〃	〃	〃	97	C－33	Ⅱ	〃	〃	〃	153	G－24	Ⅱ	〃
〃	〃	42	C－36	〃	〃	〃	〃	98	D－34	〃	〃	〃	〃	154	F－24	〃	〃
〃	〃	43	A－39	〃	〃	〃	〃	99	C－6	〃	〃	〃	〃	155	C－8	Ⅱa	〃
〃	〃	44	D－37	〃	〃	〃	〃	100	F－12	〃	〃	〃	〃	156	F－24	Ⅱ	〃
〃	〃	45	E－36	〃	〃	〃	〃	101	E－6	〃	〃	〃	〃	157	G－22	〃	〃
〃	〃	46	B－35	〃	〃	〃	48－1	102	F－8	Ⅱb	ⅡB	〃	〃	158	E－7	〃	〃
〃	〃	47	D－33	〃	〃	〃	〃	103	F－23	Ⅱ	〃	〃	〃	159	B－38	〃	〃
〃	〃	48	E－36	〃	〃	〃	〃	104	H－8	Ⅱa	〃	〃	〃	160	E－7	Ⅱb	〃
〃	〃	49	B－34	〃	〃	〃	〃	105	F－7	Ⅰ	〃	〃	〃	161	E－37	Ⅰ	〃
〃	〃	50	B－35	〃	〃	〃	〃	106	F－22	Ⅰ	〃	〃	〃	162	G－21	〃	〃
〃	〃	51	D－33	〃	〃	〃	〃	107	G－7	Ⅱa	〃	Ⅲ－116	49－1	163	G－8	Ⅱ	$ⅢA_1$
〃	〃	52	E－36	〃	〃	〃	〃	108	D－9	Ⅱb	〃	〃	〃	164	H－19	Ⅰ	〃
〃	〃	53	E－36	〃	〃	〃	〃	109	G－28	Ⅱ	〃	〃	〃	165	F－7	Ⅱ	〃
〃	〃	54	G－34	〃	〃	〃	〃	110	D－9	〃	〃	〃	〃	166	H－21	〃	〃
〃	〃	55	D－34	〃	〃	〃	〃	111	H－8	〃	〃	〃	〃	167	F－20	〃	〃
〃	〃	56	A－37	〃	〃	〃	〃	112	G－7	〃	〃	〃	〃	168	E－24	〃	〃

挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類	挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類	挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類
Ⅲ－116	49－1	169	E－23	Ⅰ	ⅢA$_1$	Ⅲ－118	50－1	215	F－24	Ⅱ	ⅢA$_3$	Ⅲ－119	50－2	261	F－22	Ⅱ	ⅢA$_3$
〃	〃	170	G－25	Ⅱ	〃	〃	〃	216	F－22	〃	〃	〃	〃	262	H－32	Ⅱ$_2$	〃
〃	〃	171	F－25	〃	〃	〃	〃	217	H－19	〃	〃	〃	〃	263	G－22	Ⅱ	〃
〃	〃	172	E－26	〃	〃	〃	〃	218	G－19	Ⅰ	〃	〃	〃	264	H－21	Ⅰ	〃
〃	〃	173	H－22	〃	〃	〃	〃	219	D－31	Ⅱ	〃	〃	〃	265	G－23	Ⅱ	〃
〃	〃	174	F－20	Ⅰ	〃	〃	〃	220	H－12	Ⅰ	〃	〃	〃	266	F－23	〃	〃
〃	〃	175	D－6	Ⅱb	〃	〃	〃	221	F－21	Ⅱ	〃	Ⅲ－120	〃	267	G－19	Ⅰ	〃
〃	〃	176	?	?	〃	〃	〃	222	H－13	〃	〃	〃	〃	268	H－11	Ⅱ	〃
〃	〃	177	F－7	Ⅱa	〃	〃	〃	223	G－21	Ⅰ	〃	〃	〃	269	G－23	〃	〃
〃	〃	178	G－6	〃	〃	〃	〃	224	F－10	〃	〃	〃	〃	270	G－34	〃	〃
〃	〃	179	G－24	Ⅱ	〃	〃	〃	225	D－13	攪乱	〃	〃	51－1	271	G－22	Ⅰ	ⅢB
〃	〃	180	H－28	Ⅱ$_1$	〃	〃	〃	226	H－19	Ⅰ	〃	〃	〃	272	H－22	Ⅱ	〃
〃	〃	181	F－29	Ⅱ	〃	〃	〃	227	F－24	Ⅱ	〃	〃	〃	273	G－8	Ⅰ	〃
〃	〃	182	G－21	Ⅰ	〃	〃	〃	228	E－10	〃	〃	〃	〃	274	G－28	Ⅱ$_1$	〃
〃	〃	183	F－26	Ⅱ	〃	〃	〃	229	F－10	Ⅰ	〃	〃	〃	275	〃	〃	〃
〃	〃	184	F－25	Ⅱ$_2$	〃	〃	〃	230	F－24	Ⅱ		〃	〃	276	G－38	Ⅱ	〃
〃	〃	185	E－26	Ⅱ	〃	〃	〃	231	E－25	〃	〃	〃	〃	277	D－8	〃	〃
〃	〃	186	C－7	Ⅱb	〃	〃	〃	232	H－21	〃	〃	〃	〃	278	F－24	Ⅱ$_1$	〃
〃	〃	187	D－26	Ⅱ	〃	〃	〃	233	H－31	〃	〃	〃	〃	279	H－35	Ⅱ	〃
〃	〃	188	F－8	〃	〃	〃	〃	234	G－21	Ⅰ	〃	〃	〃	280	D－36	〃	〃
〃	〃	189	H－25	〃	〃	〃	〃	235	H－21	〃	〃	〃	〃	281	G－35	〃	〃
Ⅲ－117	〃	190	F－25	〃	〃	〃	〃	236	H－19	〃	〃	〃	〃	282	F－20	Ⅰ	〃
〃	〃	191	F－7	〃	〃	〃	〃	237	E－10	Ⅱ	〃	〃	〃	283	H－16	〃	〃
〃	〃	192	G－7	〃	〃	〃	〃	238	F－22	〃	〃	〃	〃	284	G－30	Ⅱ$_1$	〃
〃	〃	193	E－6	〃	〃	〃	〃	239	F－23	〃	〃	〃	〃	285	〃	Ⅱ	〃
〃	〃	194	G－7	〃	〃	〃	〃	240	G－21	Ⅰ	〃	〃	〃	286	〃	〃	〃
〃	49－2	195	H－8	〃	〃	Ⅲ－119	〃	241	F－24	〃	〃	〃	〃	287	〃	Ⅱ$_1$	〃
〃	〃	196	E－24	〃	〃	〃	〃	242	E－24	Ⅱ	〃	〃	〃	288	〃	〃	〃
〃	〃	197	F－23	〃	〃	〃	〃	243	F－25	〃	〃	〃	51－2	289	E－6	Ⅰ	Ⅴ
〃	〃	198	E－27	〃	〃	〃	〃	244	H－20	Ⅰ	〃	〃	〃	290	G－37	Ⅱ	〃
〃	〃	199	E－25	Ⅱa	〃	〃	〃	245	E－24	Ⅱ	〃	〃	〃	291	——	盛土	〃
〃	〃	200	F－29	Ⅱ	〃	〃	50－2	246	G－22	〃	〃	〃	〃	292	D－37	Ⅱ	〃
〃	〃	201	H－21	Ⅰ	〃	〃	〃	247	E－32	〃	〃	〃	〃	293	B－34	〃	〃
〃	〃	202	H－21	〃	〃	〃	〃	248	H－13	〃	〃	〃	〃	294	G－24	〃	Ⅵ
〃	〃	203	E－26	Ⅱ	〃	〃	〃	249	E－34	〃	〃	〃	〃	295	G－24	〃	〃
〃	〃	204	G－25	〃	〃	〃	〃	250	F－24	〃	〃	〃	〃	296	G－18	Ⅰ	〃
〃	〃	205	F－25	〃	〃	〃	〃	251	F－23	〃	〃	〃	〃	297	G－24	Ⅱ	〃
〃	〃	206	C－6	Ⅰ	〃	〃	〃	252	E－31	〃	〃	〃	〃	298	D－34	Ⅰ	〃
〃	〃	207	E－25	Ⅱ	〃	〃	〃	253	E－25	〃	〃	〃	〃	299	H－27	Ⅱ	Ⅵ
〃	〃	208	G－7	Ⅰ	〃	〃	〃	254	G－23	〃	〃	〃	〃	300	〃	〃	〃
〃	〃	209	C－5	Ⅱ	〃	〃	〃	255	H－21	Ⅰ	〃	〃	〃	301	B－34	〃	〃
〃	〃	210	F－24	〃	〃	〃	〃	256	G－23	Ⅱ	〃	〃	〃	302	G－26	〃	〃
〃	〃	211	E－25	〃	〃	〃	〃	257	〃	〃	〃	〃	〃	303	〃	〃	〃
Ⅲ－118	50－1	212	E－31	〃	ⅢA$_3$	〃	〃	258	G－22	〃	〃	〃	〃	304	H－27	〃	〃
〃	〃	213	G－17	〃	〃	〃	〃	259	H－35	〃	〃	〃	〃	305	B－34	〃	〃
〃	〃	214	F－23	Ⅰ	〃	〃	〃	260	G－23	〃	〃	〃	〃	306	——	盛土	〃

表57　包含層出土の掲載石器一覧

挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区	層位	挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区	層位
III-121	57-1	1	石鏃	(1.3)× 0.7 × 0.3	(0.06)	Obs.	F-23	II	III-123	58-2	56	スクレイパー	7.5 × 4.6 × 1.3	53.4	Sh.	F-24	II
〃	〃	2	〃	2.3 × 1.2 × 0.3	0.7	Sh.	B-34	〃	〃	〃	57	〃	6.5 × 4.5 × 0.6	22.0	〃	H-35	〃
〃	〃	3	〃	2.3 × 1.5 × 0.4	0.8	Aga-Sh.	C-34	I	〃	〃	58	〃	6.1 × 3.6 × 1.3	29.8	〃	G-16	I
〃	〃	4	〃	2.5 × 1.6 × 0.3	1.5	Sh.	D-10	〃	〃	〃	59	〃	6.0 × 3.8 × 0.7	9.3	〃	G-28	II
〃	〃	5	〃	2.9 × 1.6 × 0.4	1.5	〃	E-10	II	〃	〃	60	〃	7.3 × 2.3 × 1.0	14.0	〃	D-32	〃
〃	〃	6	〃	3.9 × 1.2 × 0.4	2.1	〃	D-11	I	〃	〃	61	〃	7.0 × 4.0 × 1.5	37.5	Aga-Sh.	E-14	I
〃	〃	7	〃	2.4 × 0.9 × 0.2	0.5	〃	G-18	〃	III-124	〃	62	〃	9.2 × 4.3 × 1.9	62.0	〃	E-11	〃
〃	〃	8	〃	2.8 × 1.1 × 0.3	0.7	〃	E-8	〃	〃	〃	63	〃	9.8 × 4.7 × 1.6	71.5	Sh.	E-24	II
〃	〃	9	〃	3.2 × 1.35× 0.4	1.0	〃	G-22	II	〃	〃	64	〃	10.7 × 4.0 × 1.1	65.3	Aga-Sh.	E-29	〃
〃	〃	10	〃	3.5 × 1.3 × 0.5	2.0	Che.	D-8	I	〃	59-1	65	石斧	7.8 × 3.8 × 1.2	56.0	Sch.	E-24	I
〃	〃	11	〃	3.6 × 1.4 × 0.4	2.0	Sh.	E-10	II	〃	〃	66	〃	8.3 × 3.6 × 1.2	58.7	Gr-Mud.	F-14	〃
〃	〃	12	〃	(3.6)× 2.0 × 0.4	(1.9)	Che.	F-10	I	〃	〃	67	〃	8.5 × 4.1 × 1.3	54.4	〃	F-12	〃
〃	〃	13	〃	3.5 × 1.6 × 0.5	1.9	Sh.	D-8	〃	〃	〃	68	〃	7.1 × 4.8 × 1.5	76.4	Ser.	盛土	〃
〃	〃	14	〃	4.3 × 1.8 × 0.5	2.8	Che.	E-6	〃	〃	〃	69	〃	(7.6)× 5.7 × 2.6	(141.0)	Gr-Mud.	G-21	〃
〃	〃	15	〃	4.3 × 1.5 × 0.8	3.9	Sh.	G-19	II	〃	〃	70	〃	11.1 × 4.2 × 1.6	119.1	〃	E-15	〃
〃	〃	16	〃	4.1 × 1.5 × 0.6	2.5	〃	G-17	I	III-125	59-2	71	すり石	13.5 × 6.9 × 5.5	650.0	Sa.	D-32	II
〃	〃	17	〃	(3.8)× 1.5 × 0.7	(3.4)	Aga-Sh.	表採	〃	〃		72	〃	17.5 × 10.3 × 6.2	1,460.2	Sa.	B-34	〃
〃	〃	18	〃	5.1 × 1.4 × 0.6	3.1	Sh.	E-9	〃	〃		73	〃	15.1 × 7.1 × 4.6	561.0	Sa.	C-37	〃
〃	〃	19	〃	3.7 × 1.4 × 0.4	1.5	〃	E-6	II	〃		74	〃	18.3 × 8.2 × 5.3	811.0	Diab.	B-37	〃
〃	〃	20	ドリル	2.4 × 0.8 × 0.5	0.9	〃	G-21	I	〃	59-2	75	〃	(10.7)× 7.6 × 5.0	(530.0)	And.	D-35	〃
〃	〃	21	〃	5.1 × 1.6 × 0.9	6.1	〃	E-36	II	〃		76	〃	(10.4)× 6.8 × 7.3	(742.1)	〃	F-30	III
〃	〃	22	〃	5.2 × 4.1 × 1.0	16.5	〃	D-32	〃	〃	59-2	77	〃	(12.7)× 8.8 × 6.2	(901.0)	Mud.	F-26	〃
〃	〃	23	槍先・ナイフ	5.0 × 2.1 × 0.7	6.3	〃	G-21	〃	〃		78	〃	(11.8)× 7.3 × 5.3	(595.2)	And.	G-28	I
〃	〃	24	〃	4.7 × 2.4 × 0.7	7.9	〃	B-35	III	〃	59-2	79	〃	15.4 × 7.7 × 5.1	803.0	〃	F-8	〃
〃	〃	25	〃	5.9 × 3.5 × 0.9	16.7	〃	C-36	II	〃	〃	80	〃	13.2 × 8.6 × 6.8	1,120,0	Diab.	G-25	〃
〃	〃	26	〃	8.1 × 2.7 × 0.6	11.7	〃	D-36	〃	III-126	〃	81	〃	(12.4)× 10.1 × 6.8	(1,200,0)	And.	C-18	〃
〃	〃	27	〃	(7.0)× 2.5 × 0.7	(14.4)	〃	C-37	〃	〃	〃	82	〃	(13.6)× 9.2 × 5.4	(625.0)	Sa.	E-7	〃
〃	〃	28	〃	(5.9)× 5.5 × 1.6	(36.4)	〃	G-21	I	〃	60-1	83	〃	14.5 × 6.7 × 2.9	408.0	And.	E-31	II
〃	〃	29	〃	(11.1)× 5.4 × 2.8	(134.0)	〃	F-33	II	〃	〃	84	〃	14.7 × 9.2 × 4.2	455.0	〃	D-36	〃
III-122	57-2	30	つまみ付ナイフ	5.0 × 1.8 × 0.6	4.5	Aga-Sh.	A-36	〃	〃	〃	85	〃	15.4 × 9.2 × 3.8	792.0	〃	H-8	〃
〃	〃	31	〃	4.7 × 2.7 × 0.6	5.4	Sh.	表採	I	〃	〃	86	〃	15.6 × 9.3 × 1.9	409.0	〃	H-15	I
〃	〃	32	〃	5.0 × 4.1 × 0.6	8.1	〃	D-6	II	〃	〃	87	〃	14.0 × 7.8 × 3.6	562.0	〃	表採	〃
〃	〃	33	〃	5.4 × 3.3 × 0.9	10.1	〃	表採	I	〃	〃	88	〃	16.1 × 7.9 × 3.1	520.0	〃	F-26	II
〃	〃	34	〃	6.8 × 2.0 × 0.6	8.7	〃	B-36	II	〃	〃	89	〃	15.6 × 6.8 × 3.3	519.0	〃	表採	I
〃	〃	35	〃	7.5 × 2.8 × 1.0	18.6	〃	F-20	I	〃	〃	90	〃	13.8 × 6.8 × 2.5	310.0	Sa.	G-22	II
〃	〃	36	〃	8.5 × 2.7 × 0.6	17.4	〃	C-34	II	〃	〃	91	〃	15.9 × 7.7 × 2.9	485.0	And.	C-7	I
〃	〃	37	〃	8.0 × 2.5 × 0.8	17.2	〃	A-34	〃	〃	〃	92	〃	15.1 × 8.6 × 4.7	650.0	〃	G-23	II
〃	〃	38	〃	7.8 × 2.5 × 0.6	12.0	〃	B-35	〃	〃	〃	93	〃	15.7 × 9.4 × 3.0	572.0	〃	E-24	I
〃	〃	39	〃	5.6 × 3.3 × 1.1	15.8	Aga-Sh.	F-23	〃	〃		94	〃	15.1 × 10.0 × 3.3	690.0	〃	F-10	〃
〃	〃	40	〃	8.0 × 2.4 × 1.1	18.8	Sh.	G-15	I	III-127	59-1	95	たたき石	4.4 × 2.5 × 1.9	33.6	Qua.	E-10	II
〃	〃	41	〃	6.6 × 2.6 × 0.9	14.5	〃	F-8	〃	〃	〃	96	〃	10.5 × 3.7 × 3.8	201.8	Sa.	H-21	I
〃	58-1	42	スクレイパー	5.3 × 3.4 × 0.8	16.9	〃	A-36	II	〃	〃	97	〃	13.6 × 6.8 × 5.4	682.5	And.	D-8	〃
〃	〃	43	〃	6.0 × 3.4 × 0.7	20.5	〃	C-37	〃	〃	〃	98	〃	13.9 × 6.9 × 6.0	902.0	〃	E-5	II
〃	〃	44	〃	(6.5)× 4.7 × 1.0	(25.2)	〃	C-35	〃	〃	〃	99	〃	12.3 × 8.5 × 6.7	901.0	〃	G-18	I
〃	〃	45	〃	7.0 × 4.3 × 1.2	36.8	〃	D-34	〃	〃	〃	100	〃	10.9 × 8.4 × 7.5	778.6	〃	G-7	〃
〃	〃	46	〃	(5.7)× 4.4 × 0.9	(25.4)	〃	盛土	I	〃	〃	101	〃	9.0 × 8.3 × 5.0	430.2	〃	D-34	II
〃	〃	47	〃	9.6 × 3.7 × 1.2	45.0	〃	〃	〃	〃	〃	102	〃	(9.7)× 5.4 × 4.8	(395.0)	Sa.	D-32	〃
III-123	〃	48	〃	8.9 × 5.3 × 1.1	61.0	〃	B-34	II	〃	60-2	103	石錘	9.2 × 6.4 × 2.2	184.2	And.	H-28	〃
〃		49	〃	9.4 × 5.4 × 1.5	86.5	〃	H-33	〃	〃	〃	104	砥石	(9.4)× (8.0)× 1.9	(138.0)	Sa.	G-19	
〃	58-2	50	〃	6.9 × 2.9 × 0.6	10.4	〃	B-35	〃	〃	〃	105	〃	25.1 × 10.7 × 3.8	1,702.0	〃	D-34	II
〃	〃	51	〃	7.3 × 3.8 × 0.8	20.8	〃	B-36	〃	III-128	〃	106	台石・石皿	(17.3)× 17.2 × 7.5	(4.400.0)	And.	H-32	〃
〃	〃	52	〃	7.3 × 3.6 × 1.6	36.5	〃	G-28	〃	〃		107	〃	(23.5)×(14.5)× 5.0	(1,980.0)	〃	E-38	〃
〃	〃	53	〃	7.1 × 3.3 × 1.0	22.7	〃	G-16	I	〃	60-2	108	〃	(20.4)× 19.4 × 8.2	(5,800.0)	〃	G-21	〃
〃	〃	54	〃	6.4 × 4.2 × 0.9	30.0	〃	F-21	II	〃		109	〃	30.0 × 22.7 × 8.7	6,500.0	〃	E-31	〃
〃	〃	55	〃	7.3 × 3.8 × 0.8	31.5	〃	H-15	I									

表58　土製品・石製品等一覧

挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区又は遺構番号	層位	備考
Ⅲ－129	62－1	1	ミニアチュア土器	(3.6)× 1.8 × 4.0	(8.3)		KH－11	9	No.137　大きさの欄　口径×底径×器高を示す。
〃	〃	2	〃	3.3 × 1.4 × 2.9	7.0		KH－14	覆土	No.34　〃
〃	〃	3	〃	(3.4)× 1.7 ×(2.5)	8.7		F－22	Ⅱ	〃
〃	〃	4	〃	(5.3)× 3.4 × 4.0	(18.1)		KH－14	覆土	No.183　〃
〃	〃	5	土器脚部	2.4 × 1.6 × ―	7.8		KH－14	〃	No.172
〃	〃	6	〃	4.4 × 1.7 × ―	10.1		KH－19	HP-8覆土	HP－8
〃	〃	7	〃	5.1 × 1.7 × ―	13.9		〃	HP-21覆土	HP－21
〃		8	〃	3.5 × 5.6 × ―			〃	2	No.42
〃	62－1	9	漏斗状土製品	(4.6)× 5.4 × ―	(29.5)		〃	8	No.116
〃	〃	10	スプーン状土製品	3.1 × 2.5 × 0.4	3.5		E－10	Ⅱ	
〃	〃	11	土製品	0.9 × 1.7 × 0.3	0.6		KH－12	覆土	No.78
〃	〃	12	円盤状土製品	3.0 × 3.0 × 0.7	6.5		E－9	Ⅱ	
〃	〃	13	〃	4.0 × 3.9 × 0.6	11.3		KH－18	床	No.55
〃	〃	14	〃	4.4 × 4.3 × 0.6	12.9		KH－3	覆土	No.47
〃	〃	15	〃	4.0 × 4.5 × 0.7	16.6		KH－5	〃	No.79
〃	〃	16	〃	4.6 ×(4.2)× 0.8	13.0		KH－5	〃	No.116
〃	〃	17	〃	5.0 × 4.9 × 0.7	17.5		KH－3	覆土	No.48
〃	〃	18	擦切痕のある土器片	5.5 × 4.3 × 0.7	21.3		E－8	Ⅱb	No.76
〃	〃	19	〃	5.5 × 5.8 × 1.0	41.4		F－20	Ⅰ	
Ⅲ－130	61－2	20	土偶	(9.4)× 7.2 × 3.6	(245.0)		KH－19	2	No.123
〃	〃	21	〃	(6.7)× 5.2 × 4.4	(94.0)		E－9	Ⅰ	
Ⅲ－131	61－1	22	動物形土製品	6.3 × 3.9 × 2.9	22.0		KH－14	覆土	No.258
Ⅲ－132	62－2	23	玉	3.2 × 2.6 × 0.9	3.3	Amb.	F－38	Ⅰ	
〃	〃	24	自然有孔石	3.7 × 2.8 × 2.6	32.1	Mud.	F－23	Ⅱ	
〃	〃	25	垂飾	6.4 × 3.9 × 2.5	10.7	Pum.	KH－14	覆土	No.371
〃	〃	26	〃	4.8 × 4.2 × 2.0	8.6	〃	〃	〃	No.275
〃	〃	27	〃	4.6 × 3.4 × 1.8	7.2	〃	F－10	Ⅰ	
〃	〃	28	石製品	5.5 × 3.4 × 1.6	6.5	〃	KH－19	HP-4覆土	HP－4
〃	〃	29	〃	3.4 × 4.2 × 2.4	10.0	〃	〃	HP-8覆土	HP－8
〃	〃	30	〃	9.6 × 6.0 × 3.5	45.3	〃	〃	HP-21覆土	HP－21
〃	〃	31	〃	11.0 × 6.4 × 4.7	372.0	Sch.	G－13・14	Ⅰ	

表59　金属製品（古銭）一覧

挿図	図版	番号	名称	発掘区	層位	備考	挿図	図版	番号	名称	発掘区	層位	備考
Ⅲ-132	62-3	32	祥符元宝	D-33	Ⅱ	KF-2覆土1層より出土	Ⅲ-132	62-3	34	熙寧元宝	D-33	Ⅱ	
〃	〃	33	皇宋通宝	〃	Ⅰ		〃	〃	35	?	〃	Ⅰ	

表60　掲載旧石器一覧

挿図	図版	番号	名称	石器ブロック	発掘区	遺物番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材	母岩No.	層位	備考
Ⅲ－135	63－2	1	ナイフ様剥片	KSb－1	D－40	385	2.0 × 2.0 × 0.5	1.4	aga-sh.	7	Ⅳ	
〃	〃	2	〃	〃	C－40	202	2.4 × 2.5 × 0.5	1.8	〃	10	〃	
〃	〃	3	〃	〃	〃	1	2.6 × 2.6 × 0.8	3.6	〃	7	〃	
〃	〃	4	ナイフ様石器	〃	〃	197	2.8 × 2.8 × 1.1	4.5	〃	10	〃	
〃	〃	5	ナイフ様剥片	〃	〃	20	2.9 × 2.6 × 0.6	2.4	〃		〃	
〃	〃	6	ナイフ様石器	〃	D－39	8	2.8 × 2.4 × 0.7	3.4	〃	6	〃	
〃	〃	7	〃	〃	D－40	37	2.0 × 2.4 × 0.8	2.6	〃	〃	〃	
〃	〃	8	ナイフ様剥片	〃	C－40	41	3.0 × 3.3 × 0.9	5.7	〃		〃	
〃	〃	9	〃	〃	〃	149	3.5 × 2.5 × 0.7	4.6	〃	5	〃	
〃	〃	10	〃	〃	〃	35	2.8 × 3.4 × 0.9	6.8	〃	10	〃	
〃	〃	11	ナイフ様石器	〃	〃	45	2.2 × 3.6 × 0.6	3.3	〃	2	〃	
〃	〃	12	〃	〃	〃	181	2.0 × 3.5 × 0.5	3.1	〃	10	〃	
〃	〃	13	〃	〃	D－40	135	2.0 × 2.4 × 0.6	2.3	〃	〃	〃	
〃	〃	14	ナイフ様剥片	〃	C－40	34	2.2 × 1.8 × 0.5	1.4	〃	〃	〃	
〃	〃	15	ナイフ様石器	〃	D－40	434	2.4 × 3.4 × 0.6	4.0	〃	7	〃	
〃	〃	16	〃	〃	C－40	295	2.6 × 4.3 × 0.9	5.8	〃	〃	〃	

挿図	図版	番号	名称	石器ブロック	発掘区	遺物番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材	母岩No.	層位	備考
III－135	63－2	17	ナイフ様石器	KSb－1	D－40	191	3.4×2.6×0.9	2.9	aga-sh.	5	Ⅳ	
〃	〃	18	ナイフ様剥片	〃	C－40	291	2.0×1.9×0.5	1.6	〃	10	〃	
〃	〃	19	〃	〃	〃	269	2.2×1.6×0.3	1.3	〃	〃	〃	
〃	〃	20	〃	〃	C－39	26	1.9×2.0×0.5	1.4	〃	1	〃	
〃	〃	21	〃	〃	D－40	30	2.7×2.9×0.4	3.5	〃	〃	〃	
〃	〃	22	〃	〃	〃	3	2.7×3.7×1.1	8.6	〃		〃	
〃	〃	23	ナイフ様石器	〃	C－39	28	2.1×2.4×0.4	2.6	〃	10	〃	
〃	〃	24	〃	〃	D－40	113	2.9×2.6×0.8	5.9	〃		〃	
〃	〃	25	〃	〃	〃	410	3.7×2.1×0.6	2.5	〃	1	〃	
〃	〃	26	〃	〃	〃	203	3.5×2.6×0.7	6.0	〃	5	〃	
〃	〃	27	ナイフ様剥片	〃	D－40 C－40	136・429 111	5.5×2.1×0.7	6.7	〃	〃	〃	
〃	〃	28	ナイフ様石器	〃	C－40	29	3.3×3.0×0.7	3.4	〃	8	〃	
〃	〃	29	〃	〃	〃	252	4.2×2.9×1.0	10.8	〃		〃	
〃	〃	30	ナイフ様剥片	〃	〃	1	4.0×3.0×0.7	7.7	〃	1	〃	
〃	〃	31	ナイフ様石器	〃	D－40	432	4.6×3.2×1.1	12.9	〃	〃	〃	
〃	〃	32	〃	〃	〃	76	3.8×4.2×1.0	18.3	〃		〃	
〃	〃	33	〃	〃	C－40	357	4.0×3.1×1.0	10.9	〃		〃	
〃	〃	34	〃	〃	C－39	8	4.0×3.5×0.9	8.7	〃	2	〃	
III－136	64－1	35	石核接合	〃	C－41	1ほか	8.2×7.3×2.5	113.7	〃	6	〃	18点
〃	64－2	36	石核	〃	〃	1	5.0×7.1×2.4	72.5	〃	〃	〃	
III－137	65－1	37	石核接合	〃	D－40	108ほか	9.3×7.6×5.9	304.2	〃	2	〃	8点
〃	65－2	38	石核	〃	〃	108	9.6×8.3×5.0	252.2	〃	〃	〃	
III－138	65－3	39	石核接合	〃	C－40	309ほか	6.1×8.9×5.0	228.9	〃	8	〃	15点
〃	65－4	40	石核	〃	〃	309	5.4×7.2×4.6	123.9	〃	〃	〃	
III－139	67－1	41	剥片接合	〃	〃	252	7.4×9.4×5.4	293.5	〃	7	〃	34点
III－140	68－1	42	石核接合	〃	〃	79ほか	10.7×9.3×7.3	438.5	〃	1	〃	42点
III－141	68－2	43	石核	〃	〃	79	4.0×4.5×3.5	55.8	〃	〃	〃	
III－142	69－1	44	石核接合	〃	〃	26ほか	9.2×7.1×9.5	569.9	〃	5	〃	37点
III－143	69－2	45	石核	〃	〃	26	7.8×5.6×5.8	216.2	〃	〃	〃	
III－144	64－3	46	石核接合	〃	D－40	201ほか	6.7×10.5×3.4	212.5	〃	3	〃	26点
〃	64－4	47	石核	〃	C－40	201	4.3×4.6×3.6	22.4	〃	〃	〃	
〃	〃	48	〃	〃	D－40	201	5.2×7.1×3.4	78.7	〃	〃	〃	
〃	〃	49	〃	〃	〃	77	4.2×3.8×2.3	53.2	〃	〃	〃	
III－145	66－1	50	石核接合	〃	C－40	262ほか	8.6×9.6×5.8	321.8	〃	10	〃	48点
III－146	66－2	51	石核	〃	D－39	26	8.5×3.5×1.8	49.8	〃	〃	〃	
〃	〃	52	〃	〃	D－40	447	2.8×4.1×1.5	19.4	〃	〃	〃	
〃	〃	53	〃	〃	C－40	320	4.7×3.9×2.3	25.2	〃	〃	〃	
〃	〃	54	〃	〃	〃	262	3.7×3.8×3.9	38.1	〃	〃	〃	
III－147	70－2	55	礫接合	〃	〃	322ほか	8.8×6.7×3.8	243.7	Sa.	14	〃	5点
〃	〃	56	〃	〃	〃	232ほか	8.0×5.9×3.4	199.3	sh.	11	〃	30点
III－148	63－1	57	彫器	KSb－2	G－11	1	5.1×1.9×0.9	9.0	〃		〃	
〃	〃	58	石刃	〃	〃	2・3	8.8×3.4×0.5	14.8	〃		〃	
〃	〃	59	石核	〃	〃	4	9.0×8.3×8.0	463.4	〃		〃	

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第46集

函館市

桔梗2遺跡

一般国道5号函館新道道路改良用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和63年3月31日発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒064　札幌市中央区南26条西11丁目
☎011（561）3131

印　　刷　㈱　総　北　海　札幌支社
〒001 札幌市北区北30条西5丁目菊地ビル4F

この報告書は，函館開発建設部のご了解を得て増刷したものです。